

スーパーマリオ イフ ストーリー (完結)

竜音 (ドラオン)

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

最近流行りのものに乗っかってみました。

とりあえず完結まで目指します。

完結しました。

あとは基本的にはUA数に応じた番外話を書いていこうと思います

1話ずつの文章量はそこまで多くはないのでサツと読めるかと思えます。

番外編は一番上にまとめます。

※独自設定などでキャラの性格が違っていると思えます。

その辺りはご了承ください。

アンチやRは念のためです。

本当に必要かは分かりません。

無いとは思いますが、無断での転載は禁止です。

他サイトで同じ作品があればそれは盗作です。

評価や感想、誤字脱字報告をいただけると嬉しいですよ。

低評価をつける場合でも理由を書いてもらえると個人的には助かります。

U A 1 0 0 0 0 突破・番外話 ハロウィン

U A 2 0 0 0 0 突破・番外話 クリスマス

U A 3 0 0 0 0 突破・番外話 バレンタインデー

U A 4 0 0 0 0 突破・未定

目次

前書きの作品まとめ	1
番外話	
番外話 ハロウィン	23
70 番外話 ハロウィン side L	
番外話 クリスマス 前	88
番外話 クリスマス 後	95
107 番外話 バレンタインデー	
番外話 バレンタインデー side	120

番外話 年末	133
番外話 嘘CM	143
番外話 嘘コラボ	151
本編	
第1話	157
第2話	162
第3話	170
第4話	174
第5話	180
第6話	184
第7話	188
第8話	193
第9話	198

第22話 第21話 第20話 第19話 第18話 第17話 第16話 第15話 第14話 第13話 第12話 第11話 第10話

269 264 258 253 247 242 236 232 226 220 211 206 202

第35話 第34話 第33話 第32話 第31話 第30話 第29話 第28話 第27話 第26話 第25話 第24話 第23話

351 345 339 334 327 321 315 309 300 294 288 283 277

第48話 第47話 第46話 第45話 第44話 第43話 第42話 第41話 第40話 第39話 第38話 第37話 第36話

425 419 413 409 405 400 394 388 381 377 370 365 359

第61話 第60話 第59話 第58話 第57話 第56話 第55話 第54話 第53話 第52話 第51話 第50話 第49話

488 483 479 474 469 464 459 452 448 444 439 435 430

第74話 第73話 第72話 第71話 第70話 第69話 第68話 第67話 第66話 第65話 第64話 第63話 第62話

555 550 545 538 533 528 521 515 510 506 502 498 493

第87話 第86話 第85話 第84話 第83話 第82話 第81話 第80話 第79話 第78話 第77話 第76話 第75話

618 613 609 605 601 596 590 584 579 574 569 565 560

第100話
第99話
第98話
第97話
第96話
第95話
第94話
第93話
第92話
第91話
第90話
第89話
第88話

681 677 672 667 663 658 653 648 644 638 633 628 622

第113話
第112話
第111話
第110話
第109話
第108話
第107話
第106話
第105話
第104話
第103話
第102話
第101話

738 734 729 724 719 715 711 706 702 698 694 689 685

第126話 第125話 第124話 第123話 第122話 第121話 第120話 第119話 第118話 第117話 第116話 第115話 第114話

798 794 789 782 777 773 769 765 760 756 752 747 743

第139話 第138話 第137話 第136話 第135話 第134話 第133話 第132話 第131話 第130話 第129話 第128話 第127話

865 859 854 841 836 832 828 824 819 815 811 807 803

第152話 第151話 第150話 第149話 第148話 第147話 第146話 第145話 第144話 第143話 第142話 第141話 第140話

934 929 924 919 914 909 904 899 894 889 885 879 870

第165話 第164話 第163話 第162話 第161話 第160話 第159話 第158話 第157話 第156話 第155話 第154話 第153話

995 991 987 983 978 974 969 965 961 956 951 944 939

第178話 第177話 第176話 第175話 第174話 第173話 第172話 第171話 第170話 第169話 第168話 第167話 第166話

105710521048104310371032102810231018101310081004 999

第191話 第190話 第189話 第188話 第187話 第186話 第185話 第184話 第183話 第182話 第181話 第180話 第179話

1116111111061102109810931089108510811076107110651061

第 2 0 4 話
第 2 0 3 話
第 2 0 2 話
第 2 0 1 話
第 2 0 0 話
第 1 9 9 話
第 1 9 8 話
第 1 9 7 話
第 1 9 6 話
第 1 9 5 話
第 1 9 4 話
第 1 9 3 話
第 1 9 2 話

1171116611621158115411501145114111371133112811241120

第 2 1 7 話
第 2 1 6 話
第 2 1 5 話
第 2 1 4 話
第 2 1 3 話
第 2 1 2 話
第 2 1 1 話
第 2 1 0 話
第 2 0 9 話
第 2 0 8 話
第 2 0 7 話
第 2 0 6 話
第 2 0 5 話

1227122312191215121112071203119811931189118511811177

第 2 3 0 話
第 2 2 9 話
第 2 2 8 話
第 2 2 7 話
第 2 2 6 話
第 2 2 5 話
第 2 2 4 話
第 2 2 3 話
第 2 2 2 話
第 2 2 1 話
第 2 2 0 話
第 2 1 9 話
第 2 1 8 話

1284128012751271126712621256125212481244123912351231

第 2 4 3 話
第 2 4 2 話
第 2 4 1 話
第 2 4 0 話
第 2 3 9 話
第 2 3 8 話
第 2 3 7 話
第 2 3 6 話
第 2 3 5 話
第 2 3 4 話
第 2 3 3 話
第 2 3 2 話
第 2 3 1 話

1336133213281324132013161312130813041300129612921288

第 2 5 6 話
第 2 5 5 話
第 2 5 4 話
第 2 5 3 話
第 2 5 2 話
第 2 5 1 話
第 2 5 0 話
第 2 4 9 話
第 2 4 8 話
第 2 4 7 話
第 2 4 6 話
第 2 4 5 話
第 2 4 4 話

1390138613821378137513711367136213571352134813441340

第 2 6 9 話
第 2 6 8 話
第 2 6 7 話
第 2 6 6 話
第 2 6 5 話
第 2 6 4 話
第 2 6 3 話
第 2 6 2 話
第 2 6 1 話
第 2 6 0 話
第 2 5 9 話
第 2 5 8 話
第 2 5 7 話

1444144014361432142814241419141514111406140213981394

第282話 第281話 第280話 第279話 第278話 第277話 第276話 第275話 第274話 第273話 第272話 第271話 第270話

1494149014861482147814751471146714631459145514521448

第295話 第294話 第293話 第292話 第291話 第290話 第289話 第288話 第288話 第287話 第286話 第285話 第284話 第283話

1545154115371533152915251521151715131509150515011498

第308話 第307話 第306話 第305話 第304話 第303話 第302話 第301話 第300話 第299話 第298話 第297話 第296話

1598159415901586158215781573156915651561155715531549

第321話 第320話 第319話 第318話 第317話 第316話 第315話 第314話 第313話 第312話 第311話 第310話 第309話

1653164816441639163516301626162116181614161016061602

第 3 3 4 話
第 3 3 3 話
第 3 3 2 話
第 3 3 1 話
第 3 3 0 話
第 3 2 9 話
第 3 2 8 話
第 3 2 7 話
第 3 2 6 話
第 3 2 5 話
第 3 2 4 話
第 3 2 3 話
第 3 2 2 話

1709170416991695169116871683167916751670166516611657

第 3 4 7 話
第 3 4 6 話
第 3 4 5 話
第 3 4 4 話
第 3 4 3 話
第 3 4 2 話
第 3 4 1 話
第 3 4 0 話
第 3 3 9 話
第 3 3 8 話
第 3 3 7 話
第 3 3 6 話
第 3 3 5 話

1765176017561752174817441740173617311727172217181713

第 3 5 4 話
第 3 5 3 話
第 3 5 2 話
第 3 5 1 話
第 3 5 0 話
第 3 4 9 話
第 3 4 8 話

1801179517901784177817731769

前書きの作品まとめ

- 第3話・巴マミ（魔法少女まどかマジカ）
- 第4話・フリーザ（ドラゴンボール）
- 第5話・不動遊星（遊戯王5D・s）
- 第6話・高町なのは（魔法少女リリカルなのは）
- 第7話・マーリン（FGO）
- 第8話・涼宮ハルヒ（涼宮ハルヒの憂鬱）
- 第9話・島津豊久（ドリフターズ）
- 第10話・ウォルター・C・ドルネーズ（HELLSING）
- 第11話・エドワード・エルリック（鋼の錬金術師）
- 第12話・ドラえもん（ドラえもん）
- 第13話・エンポリオ・イワンコフ（ONE PIECE）
- 第14話・本間丈太郎（ブラック・ジャック）

- 第15話・玄奘三蔵（最遊記）
- 第16話・藍染惣右介（BLEACH）
- 第17話・麻倉葉（シヤーマンキング）
- 第18話・シモン（天元突破グレンラガン）
- 第19話・殺せんせー（暗殺教室）
- 第20話・金木研（東京喰種）
- 第21話・鴨川源二（はじめの一步）
- 第22話・大槻（カイジ）
- 第23話・くま吉（ギャグマンガ日和）
- 第24話・毛利小五郎（名探偵コナン）
- 第25話・アドバーク・エルドル【キタキタ親父】（魔方陣グルグル）
- 第26話・皆川亮二（ARMS）
- 第27話・ぼのぼの（ぼのぼの）
- 第28話・久住昌之（孤独のグルメ）
- 第29話・小山宙哉（宇宙兄弟）
- 第30話・ミギー（寄生獣）
- 第31話・斧乃木余接（偽物語）

- 第32話・無免ライダー（ワンパンマン）
- 第33話・オールマイト（僕のヒーローアカデミア）
- 第34話・ヨシタケ（男子高校生の日常）
- 第35話・さくらすみれ（ちびまるこちゃん）
- 第36話・冒頭の一文（キノの旅）
- 第37話・高坂穂乃果（ラブライブ）
- 第38話・ウイリアム・T・スピアーズ（黒執事）
- 第39話・蛭間妖一（アイシールド21）
- 第40話・両津勘吉（こちら葛飾区亀有公園前派出所）
- 第41話・銭形幸一（ルパン三世）
- 第42話・ロムスカ・パロ・ウル・ラピユタ（天空の城ラピユタ）
- 第43話・沢田綱吉（家庭教師ヒットマンREBORN!）
- 第44話・高杉晋助（銀魂）
- 第45話・安心院なじみ（めだかボックス）
- 第46話・20番道路・たんぱんこぞう（ポケットモンスター）
- 第47話・野原ひろし（クレヨンしんちゃん）
- 第48話・エレン・イエーガー（進撃の巨人）

- 第49話・ケロロ軍曹(ケロロ軍曹)
- 第50話・渚カヲル(新世紀エヴァンゲリオン)
- 第51話・安西先生(SLAM DUNK)
- 第52話・青峰大輝(黒子のバスケ)
- 第53話・空条承太郎(ジョジョの奇妙な冒険第3部)
- 第54話・茂野吾郎(MAJOR)
- 第55話・近藤 正己(恋は雨上がりのように)
- 第56話・大空翼(キャプテン翼)
- 第57話・ポプ子(ポプテピピック)
- 第58話・ギレン・ザビ(機動戦士ガンダム)
- 第59話・ポルコ・ロッソ(紅の豚)
- 第60話・ケンシロウ(北斗の拳)
- 第61話・洞窟のガイコツ(ドラゴンクエスト)
- 第62話・原田先生(ちはやふる)
- 第63話・有田春雪(アクセル・ワールド)
- 第64話・星井美希(THE IDOLM@STER)
- 第65話・工場現場のおじさん(うしおとら)

- 第66話・なごみ探偵おそ松（おそ松さん）
- 第67話・黒猫（俺の妹がこんなに可愛いわけがない）
- 第68話・木之本さくら（カードキャプターさくら）
- 第69話・宮水三葉（君の名は）
- 第70話・聖徳太子（ギャグマンガ日和）
- 第71話・金田一一（金田一少年の事件簿）
- 第72話・岡崎朋也（CLANNAD）
- 第73話・寿竜次郎（ぐらんぶる）
- 第74話・クレア（クレイモア）
- 第75話・砂かけばばあ（ゲゲゲの鬼太郎）
- 第76話・クラウス（血界戦線）
- 第77話・サーバル（けものフレンズ）
- 第78話・チノ（ご注文はうさぎですか？）
- 第79話・小磯健二（サマーウォーズ）
- 第80話・地獄少女（地獄少女）
- 第81話・七海健人（呪術回戦）
- 第82話・比屋定真帆（Steins;Gate）

- 第83話・女王（白雪姫）
- 第84話・空深カナタ（ソ・ラ・ノ・ヲ・ト）
- 第85話・枝垂ほたる（だがしかし）
- 第86話・モノクマ（ダンガンロンパ）
- 第87話・ラグ・シーイング（テガミバチ）
- 第88話・櫛枝実乃梨（とらドラ！）
- 第89話・校長（でんぢやらすじーさん）
- 第90話・トリコ（トリコ）
- 第91話・橘万里花（ニセコイ）
- 第92話・ナレーター（日常）
- 第93話・一般人（ニンジャスレイヤー）
- 第94話・フンベルト・フォン・ジツキンゲン男爵（猫の恩返し）
- 第95話・ニヤル子（這いよれ！ニヤル子さん）
- 第96話・白血球（はたらく細胞）
- 第97話・真山巧（ハチミツとクロバー）
- 第98話・牧野つくし（花より男子）
- 第99話・セーラームーン（美少女戦士セーラームーン）

- 第100話・園崎魅音（ひぐらしのなく頃に）
- 第101話・セフィロス（FINAL FANTASY VIII）
- 第102話・ブギーポップ（ブギーポップは笑わない）
- 第103話・アスタ（ブラッククローバー）
- 第104話・相良宗介（フルメタル・パニック）
- 第105話・オスカル（ベルサイユのばら）
- 第106話・鬼灯（鬼灯の冷徹）
- 第107話・三日月夜空（僕は友達が少ない）
- 第108話・シエリル・ノーム（マクロスF）
- 第109話・ムルムル（未来日記）
- 第110話・南千秋（みなみけ）
- 第111話・ターニャ・フォン・デグレチャフ（少女戦記）
- 第112話・鈴木英雄（アイアムアヒーロー）
- 第113話・佐藤（亜人）
- 第114話・オラフ（アナと雪の女王）
- 第115話・超平和バスターズ（あの日見た花の名前を僕達はまだ知らない）
- 第116話・七咲逢（アマガミ）

- 第117話・ギーヴ（アルスラーン戦記）
- 第118話・犬夜叉（犬夜叉）
- 第119話・アルベド（オーバーロード）
- 第120話・クラフト・ロレンス（狼と香辛料）
- 第121話・二藤宏嵩（ヲタクに恋は難しい）
- 第122話・冬海愛衣（俺の彼女と幼馴染みが修羅場すぎる）
- 第123話・海の女神グランマンマーレ（崖の上のポニョ）
- 第124話・鏝七花（刀語）
- 第125話・ポッド（借りぐらしのアリエッティ）
- 第126話・ピトフイー（ガンゲイル・オンライン）
- 第127話・金剛（艦隊これくしょん）
- 第128話・六道りんね（境界のRINNE）
- 第129話・リク（KINGDOM HEARTS）
- 第130話・チャイコフスキー（クラシカロイド）
- 第131話・平沢唯（けいおん！）
- 第132話・AB型（血液型くん！）
- 第133話・テルー（ゲド戦記）

- 第134話・ゼロ（コードギアス）
- 第135話・アシリパ（ゴルデンカムイ）
- 第136話・草薙素子（攻殻機動隊）
- 第137話・無名（甲鉄城のカバネリ）
- 第138話・ヴィクトリカ（GOSICK）
- 第139話・雨宮リンドウ（GOD EATER）
- 第140話・ゴブリンスレイヤー（ゴブリンスレイヤー）
- 第141話・二階堂晴信（3月のライオン）
- 第142話・散華礼弥（さんかれあ）
- 第143話・鬼塚英吉（GTO）
- 第144話・銭婆婆（千と千尋の神隠し）
- 第145話・アシタカ（もののけ姫）
- 第146話・幸平創真（食戟のソーマ）
- 第147話・変身ボイス（仮面ライダーオーズ）
- 第148話・ビルドドライバー（仮面ライダービルド）
- 第149話・仮面ライダーディケイド（仮面ライダーディケイド）
- 第150話・星矢（聖闘士星矢）

- 第151話・南光太郎（仮面ライダーBLACK）
- 第152話・ラ・バルバ・デ（仮面ライダークウガ）
- 第153話・キャッチコピー（仮面ライダーアギト）
- 第154話・橘朔也（仮面ライダー剣）
- 第155話・モモタロス（仮面ライダー電王）
- 第156話・紅渡（仮面ライダーキバ）
- 第157話・フィリップ（仮面ライダーW）
- 第158話・仁藤攻介（仮面ライダーウィザード）
- 第159話・レデュエ（仮面ライダー鎧武）
- 第160話・信号アックス（仮面ライダーライブ）
- 第161話・高見沢逸郎（仮面ライダー龍騎）
- 第162話・海堂直也（仮面ライダー555）
- 第163話・如月弦太朗（仮面ライダーフォーゼ）
- 第164話・檀黎斗（仮面ライダーエグゼイド）
- 第165話・骸骨剣士（ゼルダの伝説）
- 第166話・デルフリンガー（ゼロの使い魔）
- 第167話・化野紅緒（双星の陰陽師）

- 第168話・ブラック☆スター（ソウルイーター）
- 第169話・鐮木・T・虎徹（TIGER&BUNNY）
- 第170話・成宮鳴（ダイヤのA）
- 第171話・間桐桜（Fate/stay night「Heaven's Feel」）
- 第172話・岩谷尚文（盾の勇者の成り上がり）
- 第173話・ヘステイア（ダンジョンに出会いを求めるのは間違っているだろうか）
- 第174話・チルチャック（ダンジョン飯）
- 第175話・小鳥遊六花（中二病でも恋がしたい）
- 第176話・皆川由紀（徒然チルドレン）
- 第177話・夜神月（デスノート）
- 第178話・菊丸英二（テニスの王子様）
- 第179話・日下部雪（亜人ちゃんは語りたい）
- 第180話・折原臨也（デュラララ!!）
- 第181話・アシモフ（テラフォーマーズ）
- 第182話・バカボンの父（天才バカボン）
- 第183話・鏡純一郎（電波教師）
- 第184話・ミサカ19090号（とある科学の超電磁砲）

- 第185話・上条当麻（とある魔術の禁書目録）
- 第186話・バズライトイヤー（トイ・ストーリー）
- 第187話・鶴丸国永（刀剣乱舞）
- 第188話・カンタ（となりのトトロ）
- 第189話・ヤミ（Tolive）
- 第190話・的場静司（夏目友人帳）
- 第191話・エスカノール（七つの大罪）
- 第192話・うずまきナルト（NARUTO）
- 第193話・田中龍之介（ハイキュー!!）
- 第194話・ハウル（ハウルの動く城）
- 第195話・ハクメイ（ハクメイとミコチ）
- 第196話・熊徹（バケモノの子）
- 第197話・三千院ナギ（ハヤテのごとく!）
- 第198話・カイト（HUNTER×HUNTER）
- 第199話・岡安湮（ピーチガール）
- 第200話・武偵憲章一条（緋弾のアリア）
- 第201話・衛宮切嗣（fate/zero）

- 第202話・公爵夫人（不思議の国のアリス）
- 第203話・男鹿辰巳（べるぜバブ）
- 第204話・白鐘直斗（ペルソナ4）
- 第205話・黒麒麟（封神演義）
- 第206話・アリババ・サルージャ（マギ）
- 第207話・四宮かぐや（かぐや様は告らせたい）
- 第208話・黒羽快斗（マジック快斗1412）
- 第209話・キキ（魔女の宅急便）
- 第210話・司馬深雪（魔法科高校の劣等生）
- 第211話・長谷川千雨（魔法先生ネギま！）
- 第212話・天沢聖司（耳をすませば）
- 第213話・和泉玲奈（無彩幻のファントム・ワールド）
- 第214話・菌（もやしもん）
- 第215話・ポルターガイスト（モンスターライク）
- 第216話・フランス代表三男（焼きたて!!ジャぱん）
- 第217話・飛影（幽遊白書）
- 第218話・ラム（Re:ゼロから始める異世界生活）

- 第219話・マスク・ザ・斎藤（リトルバスターズ）
- 第220話・志々雄真実（るろうに剣心）
- 第221話・シバ・ローゼス（RAVE）
- 第222話・カトリール・エイル・レイトン（レイトン ミステリー探偵社）
- 第223話・セリカⅡアルフォネア（ロクでなし魔術教師と禁忌教典）
- 第224話・ヘンリエッタ（ログ・ホライズン）
- 第225話・小鳥遊宗太（WORKING!!）
- 第226話・フランツ（若者の黒魔法離れ）
- 第227話・萩原なつき（あねどきっ）
- 第228話・火鳥真斗（あまんちゅ!）
- 第229話・ザーツバルム伯爵（アルドノア・ゼロ）
- 第230話・結城新十郎（UN-GO）
- 第231話・天野めぐみ（天野めぐみはスキだらけ）
- 第232話・東城綾（いちご100%）
- 第233話・長谷祐樹（一週間フレンズ）
- 第234話・犬屋敷壱郎（いぬやしき）
- 第235話・羽島伊月（妹さえいればいい）

- 第236話・月白瞳美（色づく世界の明日から）
- 第237話・丹下順子（Wake Up, Girls!）
- 第238話・河地大吉（うさぎドロップ）
- 第239話・及川なずな（打ち上げ花火、下から見るか？横から見るか？）
- 第240話・古代守（宇宙戦艦ヤマト）
- 第241話・下川崑（海猿）
- 第242話・早田進次郎（ULTRAMAN）
- 第243話・国崎往人（AIR）
- 第244話・逢沢傑（エリアの騎士）
- 第245話・其方美鈴（エルドライブ）
- 第246話・和泉正宗（エロマンガ先生）
- 第247話・深澤遥輔（オーバードライブ）
- 第248話・松本里緒菜（王様ゲーム）
- 第249話・花（おおかみこどもの雨と雪）
- 第250話・田島悠一郎（おおきく振りかぶって）
- 第251話・相川実優羽（オカルティックナイン）
- 第252話・水沢千里（お酒は夫婦になっってから）

- 第253話・ギャル子（教えて！ギャル子ちゃん）
第254話・若林伊織（おじさんとマシユマロ）
第255話・白羽雪（俺は犬ではありません！）
第256話・天海悠紀華（俺物語!!）
第257話・三宮三葉（終わりのセラフ）
第258話・天霧綾斗（学園都市アスタリスク）
第259話・蛇喰夢子（賭ケグルイ）
第260話・一ノ瀬はじめ（GATCHAMAN Crowds）
第261話・忍野メメ（傾物語）
第262話・ミンさん（神様のメモ帳）
第263話・高木さん（からかい上手の高木さん）
第264話・諸葛岳人（監獄学園）
第265話・玄野計（GANTZ）
第266話・山野智也（君が死ぬ夏に）
第267話・真田龍（君に届け）
第268話・僕（君の臍臓をたべたい）
第269話・御剣玲侍（逆転裁判）

- 第270話・加地大輔（ギャル☆クリ！）
- 第271話・嘘界Ⅱヴァルツ・誠（ギルティクラウン）
- 第272話・ラインハルト・フォン・ローエングラム（銀河英雄伝説）
- 第273話・漂（キングダム）
- 第274話・伊丹耀司（GATE 自衛隊 彼の地にて、斯く戦えり）
- 第275話・亜玖璃（ゲーマーズ）
- 第276話・堀政行（月刊少女野崎くん）
- 第277話・シンⅡウォルフオード（賢者の孫）
- 第278話・真田莉々奈（恋と嘘）
- 第279話・レントン（交響詩篇エウレカセブン）
- 第280話・小松ルミ子（コウノドリ）
- 第281話・石田将也（聲の形）
- 第282話・若林初菜（極黒のブリュンヒルデ）
- 第283話・坂上拓実（心が叫びたがっているんだ。）
- 第284話・藤島麻衣子（ココロコネクト）
- 第285話・中野四葉（五分の花嫁）
- 第286話・雪野百香里（言の葉の庭）

- 第287話・来栖妃呂（この音とまれ）
- 第288話・めぐみん（この素晴らしい世界に祝福を！）
- 第289話・伊万莉まりあ（この美術部には問題がある！）
- 第290話・ガツシュ・ベル（金色のガツシュ!!）
- 第291話・常守朱（PSYCHO-PASS）
- 第292話・安芸倫也（冴えない彼女の育てかた）
- 第293話・坂本（坂本ですが？）
- 第294話・小鍛冶健夜（咲-Sakī-）
- 第295話・鶴野鶴介（地獄先生ぬくべ〜）
- 第296話・冴羽？（シティーハンター）
- 第297話・科戸瀬イザナ（シドニアの騎士）
- 第298話・ノフト・ケー・デスペラティオ（終末なにしてますか？忙しいですか？救ってもらっていいですか？）
- 第299話・菱川俊（将来的に死んでくれ）
- 第300話・久乃木愛（SHIROBAKO）
- 第301話・渡辺早季（新世界より）
- 第302話・東城刃更（新妹魔王の契約者）

- 第303話・イカ娘（侵略！イカ娘）
- 第304話・北川めぐみ（好きって言いなよ。）
- 第305話・榎本虎太郎（好きになるその瞬間を。）
- 第306話・綾瀬恋雪（ずっと前から好きでした。）
- 第307話・真賀田四季（すべてがFになる）
- 第308話・五十嵐色葉（3D彼女リアルガール）
- 第309話・十倉栄依子（スロウスタート）
- 第310話・たけし（世紀末リーダー伝たけし）
- 第311話・立花螢（青春×機関銃）
- 第312話・梓川咲太（青春ブタ野郎はバニーガール先輩の夢を見ない）
- 第313話・杉崎鍵（生徒会の一存）
- 第314話・ハムレット（絶園のテンペスト）
- 第315話・マルス（石膏ボーイズ）
- 第316話・新巻鷹弘（7SEEDS）
- 第317話・市川（先生、好きです。）
- 第318話・雪白七々子（川柳少女）
- 第319話・ヴェルフ・クロッゾ（ソード・オラトリア）

- 第320話・拳志郎（蒼天の拳）
- 第321話・ニケ（それでも世界は美しい）
- 第322話・ゼロツ（ダーリン・イン・ザ・フランキス）
- 第323話・草薙ラピス（対魔導学園35試験小隊）
- 第324話・多田光良・テレサ・ワグナー（多田くんは恋をしない）
- 第325話・秋原カエデ（たとえ灰になっても）
- 第326話・アリアバター（タブー・タトウ）
- 第327話・沖田紗羽（TARRI）
- 第328話・ラジエル（ダンタリアンの書架）
- 第329話・大滝（沈黙の艦隊）
- 第330話・伊藤くろす（つうかあ）
- 第331話・安曇小太郎（月がきれい）
- 第332話・桐葉（つぐもも）
- 第333話・五河琴里（デート・ア・ライブ）
- 第334話・生方千加子（DAYS）
- 第335話・ノーナ（Death Parade）
- 第336話・サトウ（デスマーチからはじまる異世界狂想曲）

- 第337話・リムル（転生したらスライムだった件）
- 第338話・小此木優子（電脳コイル）
- 第339話・衛藤可奈美（刀使ノ巫女）
- 第340話・秋津楓（同棲レシピ）
- 第341話・中澤毬江（図書館戦争）
- 第342話・吉田春（となりの怪物くん）
- 第343話・橘陽菜（ドメステイックな彼女）
- 第344話・片切友一（トモダチゲーム）
- 第345話・ナレーション（翔んで埼玉）
- 第346話・長門有希（長門有希ちゃんの消失）
- 第347話・越山識（ナナマルサンバツ）
- 第348話・松永希美（虹色デイズ）
- 第349話・盛岡森子（ネト充のススメ）
- 第350話・『』（ノーゲーム・ノーライフ）
- 第351話・野田恵（のだめカンタービレ）
- 第352話・夜ト（ノラガミ）
- 第353話・鮎川樹（パーフェクトワールド）

第354話・早川（ばくおん!!）

番外話

番外話 ハロウィン

今日はハロウィン。

テレサたちは喜んで飛び回り、道行く人に「トリックオアトリート？」お菓子かイタズラかと問いかける日。

そんな日に、マリオは一枚の招待状を手に持つて迷いの森を歩いていた。

「レサレサからハロウィンパーティーのお誘いか。絶対に来るように書いてあるけど、何をやるんだろ？」

招待状の内容を思い出しながらマリオは呟く。

レサレサとは、過去にマリオと旅をした仲間の一人で、テレサのお嬢様だ。

迷いの森の奥にある屋敷に住んでおり、マリオの冒険を助けてくれた。

「まあ、テ紙で来るとは思わなかったけどね」

クスリと笑いながらマリオは歩きを止めた。

マリオの正面にはレサレサの住む大きな屋敷があつた。

「やっぱり大きな屋敷だなあ。とりあえず中に入ろうかな」

正面の扉を開け、マリオは屋敷の中へ入る。

屋敷の中は掃除がされており、初めて来たときとは違った印象を受ける。

「綺麗になるもんだなあ．．．．．」

「そうでございましょう?」

マリオの眩きに唐突に返事が返ってくる。

しかしマリオも慣れたもので、返事をしたテレサ、セバスチャンの方へと体を向けた。

「やあ、セバスチャン。これ、招待状だよ」

「はい、確認いたしました。それでは、こちらへどうぞ。他の方々も来ておられますよ」

マリオの出した招待状を確認し、セバスチャンはマリオを大部屋へと案内した。扉の向こうからは何人かの話し声も聞こえてくる。

「それでは、私は準備に戻りますので」
「分かったよ」

そう言つてセバスチャンはスウツと姿を消した。

テレサに慣れてない人ならば驚くだろうが、マリオはそれを笑つて見送つた。

「さて、と。誰がいるのかな?」

そしてマリオは大部屋の扉を開けた。

最初に目に入るのはハロウィン仕様に飾り付けられた色とりどりの飾り、大きなテーブルに置かれた数々の料理だった。

そしてテーブルの周りには今までの旅の仲間たちの姿があった。

「あ、マリオ！」

「お久しぶりッス！」

最初にマリオに気づいたのは帽子をかぶったクリボーと、スカーフを巻いたノコノコだった。

帽子をかぶったクリボーはクリオ。

スカーフを巻いたノコノコはカメキ。

クリオの知識と、カメキのコウラアタックにマリオはとても助けられてきた。

「久しぶりね。マリオ」

「お久しぶりです。マリオさん」

次に話しかけてきたのはピンク色のボム兵と、ゴーグルを着けたパタパタ。

ピンク色のボム兵はピンキー。

ゴーグルを着けたパタパタはパレッタ。

ピンキーは爆発で、パレットはジャンプでは届かない場所への移動を助けてくれた。

「マリオちゃん。久しぶりでちゅ！」

「うんうん。元気そうで何よりだよ！」

「久しぶりだな、マリオ！………決まったか？決まったな、うん」

最後に話しかけてきたのはおしやぶりをしたケセランの赤ちゃん、ハツラツと笑うプクプク、そして格好をつけているジユゲム。

おしやぶりをしたケセランの赤ちゃんはアカリン。

ハツラツと笑うプクプクはおプク。

格好をつけているジユゲムはジヨナサン………ではなく、ポコピー。

アカリンは暗闇を照らす光で、おプクは水を渡る際に、ポコピーはトゲや溶岩を渡る際に助けてくれた。

「みんな、久しぶりだね」

どうやらここにいるのはレサレサを除いた星の精を助けたときのメンバーのようだ。

招待状には驚くメンバーと書いてあったが、このメンバーのことだったのだろうか？
ちなみに視界の端で段ボールの巨大な盾がタワーシールドふよふよと浮かんでいるが、恐らくはル
イージを待っているあの子だろう。

マリオが仲間たちと話していると扉が開き、他の招待客が到着した。

「ようやく着いたわね」

「ちよつと時間がかかっちゃいましたね」

「でも、ちゃんと着いたじゃないン」

「ここでゴンザレスに会えるんだな！」

「ワシとしては海の上で会いたかったがな」

「あら？でも、楽しみだったのでしょうか？」

扉を開けて現れたのは見覚えのある6人だった。

兜をかぶったクリボー、クリスチーヌ。

鼻に絆創膏を貼ったノコノコ、ノコタロウ。

ネツクレスを着けた雲の精霊、クラウダ。

黒の体に水玉模様のパンツを履いたちびヨッシー、シュヴァルツ。

白い大きな帽子をかぶり、操舵輪を着けたボム兵、バレル。

白い体に赤いアイマスクを着けたチューさん、チュチュリーナ。

ゴロツキタウンを起点として、スターストーンを集めたときのメンバーがそこにいた。

「みんな、久しぶりだね。．．．あれ？ビビアンは？」

「久しぶりね、マリオ。ビビアンは私も分からないわ」

久しぶりに会えたメンバーにマリオは嬉しくなり、手を上げて話しかける。

と、マリオはメンバーが1人足りないことに気づいた。

影3人組の末っ子、ビビアンの姿がないのだ。

クリスチーナに聞いてみても、首を振り分からないという。

レサレサが全員を呼ばないとは思えないので、不思議に思いながらマリオは首をかした。

「マリオ、この人たちは？」

「ああ、こっちの皆は知らなかったね。ピーチ姫の宝探しで連れていかれたゴロツキタ

ウンで出会った仲間たちだよ。彼らにもとても助けられたんだ」

興味津々といった体のクリオの問いに、マリオはスターストーンを集めた仲間を紹介していく。

以下、スターストーン組と星の精組として分けます。

「へえ、そんなことがあったんだ？」

「ええ。あたしの知識でバツチリとマリオを助けたのよ！」

「む……！！オイラの知識だつて負けてないぞ！」

ゴロツキタウンでの旅の話を聞いて、クリオとクリスチーナが知識で競いあったり。

「オレツチはこんなに活躍したツス！」

「すごいなあ。ボクももつと勇気が持てるかな？」

カメキの自慢話にノコタロウが羨ましがったり。

「なんで、マリオちゃんがゴンザレスなんでちゆか？」

「おう！ゴンザレスって言うのはリングネームなんだ！カッコいいだろ？」

「カッコいい、のかねえ？」

「いいと思うぜ！おれもジョナサンよりもカッコいいやつを考えるべきか？」

シユヴァルツのゴンザレスと言う呼び名に疑問点を持ったアカリンが尋ねたり。

「クラウダさんはお久しぶりですね。なんでも女優に復帰したのだとか」

「あらん、パレッタちゃんじゃないん。アタクシが女優をしていたときはファンレターの配達ありがとうね」

「あら、こちらの方はゴロツキタウンで働いていたことがあったのかしら？」

実はパレッタがゴロツキタウンで働いていたことがあったと分かったり。

「ボム兵が海の上を行くなんて危険じゃない？あたいにはできないわ」

「ワシも若い頃は不安だった。だがな、スカーレットのお陰で頑張ってこれたんだ」

船乗りであるバレルをピンクキーが驚いていたり、と。

おおむね仲の悪そうな雰囲気は感じられなかった。

仲間たちと話していると、大部屋の明かりが消えていく。

どうやらレサレサの準備が終わったようだ。

と同時にマリオの足が何かに捕まれ、闇の中に引きずり込まれた。

「オーホツホツホツ！」

完全に明かりが消えたとき、大きな高笑い大部屋に響き渡った。

そしてそれと同時に一人のテレサがライトアップされる。

そのテレサはリボンを着けており、手には扇子を持っていた。

彼女こそ、星の精を助ける旅の最後のメンバー、レサレサだ。

「ようこそ、いらっしやいましたわ！この日をあたくしたちテレサは心待ちにしていたの！」

手を大きく振り、興奮を抑えきれないといった様子でレサレサは喋る。

「さあ！おいでませ、マリオ！」

「うわわわわわ?!」

レサレサの言葉と同時にマリオが影の中から飛び出してきた。
突然の事態にマリオを含めた全員が驚く。

「この影に潜る感じは………ピビアンか！」

「大正解だよ。マリオ！」

マリオの言葉に、マリオの影から嬉しそうに紫色の体に魔女の帽子をかぶった人物が飛び出してくる。

彼かの……女じよ?はピビアン、スターストーンを集める旅の最後のメンバーだ。

「久しぶり、マリオ！アタイのこと忘れてないか不安だったけど覚えていてくれて嬉しいよ」

「俺が仲間のことを忘れるわけじゃないじゃないか」

嬉しそうに話すビビアンにマリオも笑顔を向けて話す。

その光景に何名かの機嫌が悪くなったが、マリオは気づかない。

「さあ、それではハロウィンパーティーを始めましょう。ああ、そうそう、テ紙に書いてある通り、あたくしはトリックオアトリートとは言いません。ですが、この屋敷にいる他のテレサたちは別ですわ！彼らの要求に答えられねばイタズラされてしまいますわよー！」

「「「えっ?!」」」

レサレサの宣言に星の精組もスターストーン組も驚く。

しかし、そんな中マリオだけは驚いている仲間たちを不思議そうに見ていた。

「あれ？皆はテ紙を知らないのかい？」

「いや、だから普通に手紙でしょ?!」

マリオの言葉にクリスチーナが嘸みつく。

クリスチーナの言葉に同意するように他の仲間たちも頷く。
そんな仲間たちの行動にマリオは全員がテ紙を知らないのだと理解した。

「えっと、テ紙って言うのはね。『テレサの書いた仕掛け手紙』の略語なんだよ」
「はあ?!」

テ紙の言葉の意味を聞き、仲間たちは一様に驚く。

マリオからしても全員が知らないと思わなかつたので少し意外だった。

「さあ、テレサたちが来ますわよ?別に逃げてでも構いませんが、果たして逃げ切れるかしら?イタズラを回避したければあたくしを捕まえてみるからね!」

そう言ってレサレサは消えていった。

レサレサの挑発的な言葉に仲間たちは絶対に捕まえてみせると息巻き、部屋の扉を走り抜けていく。

そんな仲間たちの姿にマリオは苦笑するのだった。

「あはは、たぶんレサレサはあそこに隠れてるんだと思うけど……」

レサレサと初めて出会った屋敷の3階部分を思い出しながらマリオは呟く。
するとマリオの目の前に1人のテレサが現れた。

「トリックオアトリート！お菓子をくれないとイタズラするぞ！」

「うん。はいこれ」

テレサの言葉にマリオは頷いてお菓子を手渡す。

お菓子を渡されたテレサは少しだけ驚いた表情をしてお菓子を受け取った。

「やっぱりマリオならテ紙は読めたかあ。はい、これを持ってたらもう言われぬから
持っててね」

「これは……動かないけどスーパークラウン？」

そう言つてテレサは消えていった。

テレサから渡されたのは、スーパークラウンによく似た冠。

マリオはその冠を不思議そうに眺めてからポケットにしまった。

「うわああああ?!」

「きやああああ?!」

「今のはクリオとクリスチーヌ?!」

不意に聞こえてきた悲鳴にマリオは驚き、悲鳴の聞こえてきた場所へと向かった。
悲鳴の聞こえてきた場所へ着くと、2人の少女の姿があった。

「ううう、なんでオイラは女の子になってるんだ……?」

「な、なんで人の姿に……?」

1人は茶髪にショートカットで野球帽をかぶった少女。

そしてもう1人は金髪でロングヘアに兜をかぶった少女。

どちらの少女もマリオが先ほどテレサから渡された冠を帽子と兜の上に乗せている。
見慣れない2人の姿にマリオは不思議に思い話しかけた。

「君たちはいったい？」

「あ、マリオ！何でか知らないけどオイラ女の子になっちゃったよ?!」
「あたしも人の姿になっちゃったの！」

マリオが話しかけると、ショートカットの少女が慌てたようにマリオにすがりつく。
少女の喋り方にもしや、と思いマリオは尋ねた。

「もしかして………、クリオ、か？」

「そうだよ！」

「じゃあそっちは、クリスチーナ？」

「ええ！」

確認のために名前を出すと、2人の少女は強く頷いた。

「どうやら、信じられないことだがこの2人はクリオとクリスチーナで間違いがないよ
うだ。」

「テレサから変な冠をかぶせられちゃったのよ」

「そしたらこんな姿になっちゃったんだ！」

「なるほど、俺もお菓子を持ってなかったらそうなっていたのか……」

2人の言葉にマリオは危なかったと身を震わせた。

その後、イタズラをされたから仕方がない、とクリオとクリスチーヌの2人は大部屋へと戻っていった。

「これは……、他のみんなもなっているのか？」

思わず口から出た言葉にマリオは否定ができなかった。

おそらく、いや間違はなく他の仲間たちも同じような事態になっているだろう。

少しだけ頭が痛い、と頭を押さえながらマリオは館の中を歩き始めた。

「この部屋は……」

「なんでオレツチが女の人?!」

「わわわわ?!」

「カメキとノコタロウみたいだな……」

部屋の扉を開けて中を覗くと、2人の少女の姿があった。

1人は金髪にショートカットで赤いスカーフを巻いて、背中に甲羅の模様のはいつた服を着た少女。

もう1人は、金髪にショートカットで気弱そうな表情をして鼻に絆創膏を貼った、甲羅の模様のはいつたパーカーを着た少女。

甲羅の模様の服と、赤いスカーフ、そして鼻に絆創膏。

それぞれの特徴からしてカメキとノコタロウで間違いはないだろう。

「2人もテレサにやられたみたいだね」

「あ、マリオさん！ そうなんスよ！」

「はあ………、こんな姿じゃ笑われちゃうよ………」

マリオの言葉にカメキは頷き、ノコタロウは気落ちした様子で呟いた。

マリオからクリオたちがすでに大部屋に戻っていると聞くと2人も大部屋へと戻っていった。

そして、マリオは次の部屋の扉を開ける。

「あたいがこんな姿になるなんて、ビックリだわ！」

「ああ……、こんな情けない姿になってしまった。すまない、スカーレット……」
「今度はピンキーとバレルか」

扉を開けると、やはりというべきか、2人の少女の姿があった。

いや、片方は少女と言うよりも女性言った方が正しいだろう。

1人はピンク色の髪の毛をポニーテールにして、耳にはボム兵の形のピアス。

そしてもう1人は黒髪のポニーテールで白い大きな帽子をかぶっており、操舵輪の形のバッジをつけていた。

どちらもポニーテールが編み込まれており、導火線のようになっている。

「もう！もう！見つけたと思ったら偽者だったのよ！」

「おお、マリオか。情けない姿を見せてすまん……」

プリプリと怒りながらピンキーの周りでクラッカーが破裂するような音が鳴る。

どうやらボム兵の爆発と言う特性がこのように表れたようだ。

そして、ピンクとバレルの2人も大部屋へと戻っていった。部屋から出ると、マリオの目の前を小さな影が走り抜けていった。その影は少し行つた先で止まると、マリオの目の前まで戻ってくる。

「よお、ゴンザレス！なんか知らねえけど。スツゴク速く走れるんだ！」

「マリオちゃん！シユヴァルツちゃんが速くてとても楽しいでちゅー！」

「シユヴァルツとアカリンか。廊下を走ると危ないよ？」

現れたのは緑色の髪にショートカットで卵柄の服を着た少女と、金髪のショートカットでおしやぶりの形をしたネックレスをつけた少女だった。

それぞれの話し方からして、シユヴァルツとアカリンで間違いはないだろう。

どうやら、シユヴァルツがアカリンをおんぶして廊下を走り回っていたようだ。2人ともクリオたちより体格が小さく、少女よりも更に幼い表現になるだろう。

「大部屋で食べ物食べられるはずだから食べてくるといいよ」

「そっか、分かったぜ！」

「了解でちゅー！いきまちゅよー！」

マリオの言葉にシユヴァルツとアカリンは頷き、走って部屋まで戻っていった。注意したのにすぐに走って行ってしまった2人にマリオは苦笑しかできなかった。そのまま移動して玄関ホールにマリオはたどり着いた。

「ちくしょー！テレサだから飛ばれて捕まっちゃった！」

「あらあら、美人さんになったじゃないン？」

「飛んでも捕まっちゃうんじゃない。あたしは捕まってるだけだ。」

玄関ホールでは雲に乗った金髪のショートカットでサングラスをかけた少女が悔しそうに叫んでいた。

そんな少女を青髪のロングヘアーで今までの仲間の中で一番かもしれないスイカを2玉持った女性と、青髪のロングヘアーで髪にプクプクの形をした髪飾りをつけた水着姿の女性が微笑ましそうに見ていた。

「えっと、ポコピーかい？」

「ちげえ！俺はジョナサンだ！」

「あら、マリオちゃんも来たのねン」

「あつはつは、悪いねマリオ！こんなおぼちゃんの体なんて見せちまって！」

喋り方や身に付けている物から、彼女たちはポコピ、クラウダ、オプクで間違いないようだ。

オプクは快活と笑っていたが、言うほど悪くないスタイルで水着姿であることに、マリオは照れて真っ直ぐに見ることができなかつた。

「おやおや、こんなおぼちゃんでも照れてくれるのかい。嬉しいねえ」

「あらン？なら、アタクシもハグしちやおうかしらん？」

じりじりとマリオとの距離を詰めてくる2人に身の危険を感じ、マリオは他の仲間たちが大部屋に戻っていることを伝えると走ってその場を後にした。

走って2階の廊下へと移動すると、不意にマリオの足下の床が音をたてて抜ける。

どうやら古くなっていた床板を踏み抜いてしまったようだ。

咄嗟に床を掴むが、下半身が完全に宙に投げ出されてしまっている。

「大丈夫ですか、マリオさん！」

「これはいけません。パレッタさん、救出を！」

下に落ちるかと思ったそのとき、誰かの声と共に自身の体が柔らかいものに運ばれていることに気づく。

見ると翼を生やした茶髪にロングヘアーの女性に抱えられているのが見えた。

「危なかったですね」

「あ、ああ……」

「まったく、ミスターは驚かせてくれますね？」

抱えられている関係で女性の胸が体に当たっており、マリオはうまく返事ができない。

そんなマリオに白髪にショートカットで、赤いアイマスクを着けた女性が話しかけてくる。

「本当ですよ。わたしもとっても驚きましたから」

胸を撫で下ろしている女性の顔をよく見るとゴーグルを着けていることに気づく。見覚えのあるゴーグル、このゴーグルを着けていたのはこの屋敷には一人しかいなかった。

「もしかして……、パレッタ?」

「な?!分からなかったんですか?!ひどいですよ!」

「ふふふ、あんな状況では仕方がないのかもしれないかもしれませんね?」

「す、すまない。驚いていて分からなかった……」

恐る恐るマリオが尋ねると、女性——パレッタはシヨックを受けた表情をした。

マリオのために弁明をすると、パレッタ自身は丁寧語で話すために、女性となつてしまっている今の姿でも話し方に違和感がなく、ゴーグルが見えなければパレッタだと分かりにくいのだ。

「それと君は、チュチュリーナだね」

「ええ!正解ですわ!」

マリオにあつきりと名前を呼ばれ、チュチュリーナは嬉しそうに宙返りをする。そしてマリオに近づき頬にキスを落とした。

「ちゅ、チュチュリーナ?!」

「ふふふ、ワタクシだと分かったご褒美ですわ」

驚き慌てるマリオの姿を見ながらチュチュリーナはクスクスと笑う。

ちなみにチュチュリーナがキスをした際に、別の場所にいる何名かの女性のこめかみに怒りマークが無意識の内に生まれていたことも記しておく。

「ミスターの面白い姿も見れましたし、ワタクシも最初の部屋に戻るとしましょう」
「わたしは探し物はあまり得意ではないですし、わたしも戻りますね。マリオさん、気をつけてくださいね?」

そう言つてチュチュリーナとパレッタの2人も大部屋へと戻つていった。

「あー……」

マリオの頭の中では先ほどのパレットの姿が強く残ってしまっていた。自身を心配して気にかける姿勢。

大人しそうな外見に合った丁寧な話し方。

そして、優しさを象徴するような白い大きな羽。

ただ一言、マリオの口から言葉が漏れた。

「天使かよ……」

パレットが男性だと分かっていると言わずにはいらなかった。

それほどまでに見事な組み合わせだったのだ。

でも、あれは一時的になっただけなんだよなあ。

少しかだけ残念に思いながらマリオは屋敷の中を歩き始めた。

マリオが呟いたときにも別の場所にいる何名かの女性のこめかみに怒りマークが追加で生まれていたことも記しておく。

「レサレサのいる3階に向かうには……と。この絵だったな。また、通らせても
らいますね」

「ええ、どうぞ。レサレサも楽しんでるようで私も嬉しいですよ」

2階の廊下の奥に掛けられている絵画にマリオが話しかけると、絵画に描かれている
レササが嬉しそうに目を細めて答える。

そしてマリオは絵の中へと飛び込んだ。

空気のような水のような不思議な感覚を抜け、マリオが着地をすると、そこは屋敷の
3階だった。

実はこの屋敷は2階から3階へと行くための階段がなく、空を飛べない者はこの絵を
通り抜けることでしか3階へとたどり着けないのだ。

「さーて、たぶんこの部屋にいると思うんだけど……」

そう言いながらマリオは3階にある唯一の扉を開けた。

扉を抜けると部屋に明かりはついておらず、やや薄暗い光景が広がっている。

そして、ぼんやりとしか見えないが部屋の中心に誰かの影が見えるような気がした。

「そこに誰かいるのかい？」

マリオの言葉に影はわずかに揺れたように見える。

レサレサじゃないにしても誰かがいるのだと分かったマリオは影に近づいていく。

「君は……」

「来てくれたのね。マリオ」

そこにいたのはピンク色の髪の毛をしたロングヘアで、紫色のドレスに白い手袋、そして冠と魔女のような帽子が合わさったような帽子をかぶった女性だった。

女性はマリオを見ると目もとに涙をためてマリオの手をとった。

「レサレサちゃんにマリオならここに来るはずって聞いて。アタイ、ずっと待ってたの」
「ビビアン……」

女性にいきなり手をとられてマリオは一瞬だけ驚いたが、女性の話し方と服装の特徴

から女性がビビアンだと気づいた。

「マリオ……」

ビビアンはマリオの手をとりながら熱っぽくマリオの瞳を見つめる。

しかしそれも長くは続かず、ビビアンはすぐに寂しそうに瞳を伏せた。

「アタイはマリオのこと……。ううん、この姿になつてもきつと迷惑になつちやうよね? ごめんね、マリオ」

そう言つてビビアンはマリオの手を離し、影の中へと潜つていく。

寂しそうに影に潜つていくビビアンをマリオは咄嗟に腕を掴んで、影に潜るのを止めた。

「マリオ?」

影に潜るのを止められ、ビビアンは驚いてマリオの顔を見る。

「……迷惑だとか、困らせるとか、勝手に決めつけてくれよ。俺たちは仲間なんだ、ちゃんと君の言いたいことも言ってくれ」

「でも……」

マリオの言葉にビビアンは困惑して目を伏せる。

そんなビビアンの様子にマリオは息を軽く吐いて、ビビアンの肩を掴んだ。

「ビビアン、君が何に不安がっているのかは分からない。でも、俺は君の力になりたいんだ」

「あ、あわ、あわわわ……」

真っ直ぐに目を見つめられ、真剣な表情で話すマリオに、ビビアンは顔を真っ赤にする。

反応がないビビアンにマリオは不思議に思いながら、さらに顔を覗きこんだ。

「ツツツツツ!!!」

「うおっ?! ビビアン?!」

ボフンツ、という音が聞こえたかと思うと、ビビアンはものすごいスピードでマリオの手から抜け出して影に潜っていった。

後に残されたマリオは、ビビアンがどうして逃げ出したのか分からず、首をかしげるのだった。

「相変わらず、無自覚で恐ろしいことをしますわね……」

「やっぱりここにいたんだね」

「ええ、先ほどルイージが来たので別室に案内するために席を外しましたの」

いつからいたのか、レサレサがマリオの背後から話しかける。

レサレサはやや呆れたような表情でマリオを見ていた。

「それにしても、やはりマリオ以外はみんなイタズラされてしまったようね」

「まあ、テ紙を知らなかったらね」

クスクスと楽しそうにレサレサは笑う。

その様子をマリオは頬を掻きながら見ていた。

「さて、どうしましょう？マリオはあたくしを捕まえるのかしら？」

「んー……」

クルリと一回転をして、レサレサはマリオに尋ねる。

その表情はこのまま簡単に捕まることはない、と言っているかのように挑発的だった。

マリオは少しだけ考え込み、あることを思い出す。

「さあ、どうするのかしら？」

「そうだね……、レサレサ」

楽し気にレサレサはマリオに答えを迫る。

そんなレサレサにマリオは手を差し出した。

「トリックオアトリート！」

「………へ？」

突然のトリックオアトリートにレサレサはポカんと口を開けた。

レサレサのそんな姿に笑みを浮かべながらマリオは手を差し出し続ける。

「ま、マリオ？」

「ほら、レサレサ、トリックオアトリートだよ。お菓子とイタズラ、どっちがいい？」

困惑しながら尋ねてくるレサレサにマリオはイタズラが成功したように笑う。

「ふ、ふん。お菓子でしたら最初の大部屋にありますわ！これで問題ないでしょう？」

「いやいや、直接貰わないとね。さあ、レサレサは今お菓子を持っているかな？」

レサレサの反論にマリオは首を横に振る。

そんなマリオの言葉にレサレサは悔しげにマリオを見つめた。

「じゃあ、お菓子が無いということではイタズラだね。『これ』をかぶってもらおうよ」「んな?!? どうしてその冠を?!? あなたには違うものが渡されるはずでは?!?」

マリオがポケットから取り出した冠を見てレサレサは驚く。

「どうやらこの冠がマリオの手に渡るのは想定外のこと、本来なら別のものが渡る予定だったらしい。」

ちなみに、その本来なら渡るはずだったものは、双子の弟であるルイージのもとへと行っているのだが、レサレサの知らないことである。

「ま、マリオ。落ち着いてくれませんか? ほ、他のことでしたらやりますわ……」
「だから、ね?」

「だーめ。他のみんなもかぶってるんだからレサレサもかぶらないと、ね!」
「ああああ?!?」

ゆつくりと下がっていくレサレサの頭にマリオは冠を素早く乗せる。

冠がレサレサの頭に乗った瞬間、まばゆい光がレサレサを包み込んだ。

光の中、テレサの姿から人の姿へとレサレサの姿が変わっていく。

ふんわりとしたドレス、左右に結ばれたりボン、そして手にはいつも持っている扇子。光によって色までは分からないが、まるで魔法少女のようにレサレサの姿が変わっていった。

「ど、どうなりましたの?」

光がおさまり、レサレサは不安そうに自身の体を見る。

髪の毛は薄い緑色でツインテールになっており、ツインテールはリボンによって結ばれている。

「うん。とても可愛くなってると思うよ」

「ツ~~~~!もうっ、もうっ、もうっ!そういうところですよ!」

マリオの言葉にレサレサは顔を赤くして扇子を振り回す。

ビビアンよりも付き合いが長いだけあって、マリオの言葉にも僅かに耐性があるようだ。

「さ、それじゃあ皆のところに戻るのか」

「……ええ、そうね」

レサレサへと手を差し出し、マリオは笑顔を向ける。

そして2人は最初の大部屋へと戻るために歩き始めた。

「そういえば、その冠はどうしたんだい？」

「ああ、こちらの冠はカメックおぼばに依頼しましたの。前に似たようなものを作ったと知ったので頼みましたのよ」

大部屋へと戻る途中、マリオはレサレサが冠をどこで手に入れたのかが気になり尋ねる。

マリオの問いにレサレサはカメックおぼばに依頼したと答えた。

カメックおぼばがこのようなものを作ったことを不思議には思ったが、実害は無さそうなのでマリオは気にしないことにした。

「あれ？前につてことは、今回よりも前に作ったことがあるんだよね？」

「ええ、あの子がかぶっているやつがそうですわ」

「あの子?.....ああ、彼女か」

レサレサの言葉にマリオは大部屋に浮かんでいた段ボールの巨大な盾を思い浮かべた。

マリオからしてもいつの間にか彼女はあの姿になっていたためずっと疑問だった。なので、その疑問が解けてスッキリとする。

「あ、ようやく戻ってきたね!」

「結局、マリオ以外の全員が姿が変わっちゃったわね」

大部屋に戻ってきたマリオとレサレサの姿を見て、仲間たちは笑いながら話す。

屋敷で最初に会ったときは姿が変わってしまっているが、全員がパーティーを楽しんでいた。

出されている料理も少なくなり、パーティーももうすぐ終わりが近づいてきた頃。ズンツ、と大きな揺れが屋敷を襲った。

「な、なんだい?!」

「分かりませんわ。外に出てみましょう!」

レサレサの言葉に、全員は慌てて外に出る。

ホールを走り、玄関を抜け、屋敷を振り返る。

「あー、やっと出てきたー。トリックオアトリート!」

「きよ、巨人?!」

「あらまあ、なんて大きさい!」

そこにいたのは、屋敷よりも大きな体を持った少女だった。

少女は白髪にロングヘアで頭に冠を乗せており、白いドレスに身を包んでいる。

「れ、レサレサ?!」

「あたくしも分かりませんわよ?!」

驚き尋ねられるがレサレサも混乱しているのか、首を横に振りながら叫ぶ。

マリオたちが反応しなかったことが不満なのか、少女は屋敷をゆさゆさと揺する。

「ねーねー、トリックオアトリート! お菓子ちょうだい!」

「あ、あたくしの屋敷が?!」

少女が屋敷を揺するたびにミシミシと屋敷から音がなる。

少しでも力を加えればアツサリと屋敷は倒壊するだろう。

「ど、どうする?!」

「料理もほとんど全部食べちゃったわよ?!」

少女はお菓子がでないことにイライラとし始め、屋敷をさらに揺する。

「す、すまないけどお菓子がなんだ！とにかく屋敷を揺するのを止めてくれないか?!」
「えー……、お菓子ないのー?」

マリオの言葉に少女は悲しそうに顔を歪め、屋敷から手を離れた。

すると、屋敷はすでに限界を迎えていたのか、音をたてて崩れていった。
その光景にマリオたちは言葉をなくし、少女は面白そうに笑っていた。

「あはは、おもしろーい！お菓子がなくてもいいや。ばいばーい！」

そう言って少女は頭から冠を取ると、マリオへと投げ渡して消えていった。

「あ、アトミックテレサだったのか……」

消えていく少女のものと姿を見てマリオは眩く。

アトミックテレサとは、通常のテレサの何倍もある体を持った巨大なテレサのことだ。

それが冠を被ったことによつて、先ほどの巨大な少女になったのだろう。

「あ、そういえばルイージは?!」

「え、ああ、大丈夫よ。彼女もあたくしと同じことができますから。ほら、あそこ」

崩れた屋敷を啞然と見ていたが、マリオはルイージも屋敷にいたことを思いだし慌てる。

そんなマリオにレサレサは意気消沈しながらも瓦礫の山の一角を指し示した。

するとそこには白いドレスに身を包んでいる女性に抱き締められているルイージの姿があつた。

「あー………、うん。無事ならいいか」

どうしてそのような状態になったのかは気になるが、聞かない方が良いだろう、とマリオはルイージたちから視線を逸らす。

「それで、レサレサはどうする？こんなんじや眠ることもできないだろ？」
「そう……ですわね」

マリオの言葉にレサレサは瓦礫の山を悲し気に見る。

屋敷には自身のお気に入りのリボンやベッド、扇子などがあつた。

それらが全て埋まってしまったことがとても悲しかった。

「そうだわ。マリオ、あなたの家にしばらく住まわせてくれないかしら」

「え、俺の家には？」

妙案を思い付いた、とレサレサは手を叩いてマリオに言う。

レサレサの言葉にマリオは少しだけ驚いたが、クツパを住まわせていたこともあり、問題はないかな、と考える。

そんなレサレサの姿をクリスマスチーヌはじつとりとした目で見ていた。

「レサレサ、あたしの知識は誤魔化せないわよ」

「な、なんのことかしら．．．．．？」

ギクリ、とレサレサは肩を震わせる。

そんなレサレサの動作に他の仲間たちも怪しむようにレサレサを見る。

「テレサはお化けの特性を持った生き物。だから物にも取り憑けるのをあたしは知っているわ。そして、案内をしてくれたセバスチャンを含めてお屋敷にいたテレサたちがこの場にはいない！」

「そ、それがどうかしまして？」

クリスチーナの指摘にレサレサは冷や汗を垂らす。

こんな簡単に見抜かれるとは思っていなかった。

マリオさえ騙せればどうにかなると思っていた。

そんな思いがレサレサの頭を埋め尽くす。

「レサレサ、他のテレサやセバスチャン．．．．．、どこに行ったのかしら？」

「．．．．．、あなたのように頭のいい女性は嫌いですわ」

先ほどまでの悲しそうな雰囲気から一変して、レサレサは悔しげにクリスマスチーヌを睨む。

そしてレサレサはマリオに当て身を食らわせて意識を奪った。

レサレサの急変に他の仲間たちは驚き、固まってしまふ。

「く．．．．．。自然にマリオの家で暮らす計画が．．．．．」

「あたしのことを甘く見たのが間違いだったのよ」

レサレサの言葉に何人かの仲間たちの目が少しだけ鋭くなる。

ようやく彼女が何を計画していたのかを理解したのだろう。

「私たちに招待状が来ないのはなんでかな、と思っていたけど．．．．．」
「そういうことだったのだな」

不意に迷いの森の闇の中から2人の声が聞こえてくる。

その声は招待状を出しておらず、予定があることも把握していた。

ゆえにここにいるはずがない2人。

「やっぱり来てみて正解だったわね? “クツパ”」

「うむ。ワガハイたちの勘も捨てたものではないな。 “ピーチ姫”」

そして、声の主は闇の中から姿を現した。

ピンク色のドレスを身に纏い、金の冠を頭に乘せた女性、ピーチ姫。

黒色のドレスを身に纏い、頭部には2対の角、そして背中に特徴的なトゲ甲羅を着けた女性、クツパ。

2人は笑みを浮かべながらレサレサの前へと向かっていった。

「それで? マリオの家で暮らすって言っていたのは、だ あれ?」

「うむうむ。ワガハイも気ニナルナ?」

「あ、あの……その……」

笑顔、2人は間違いなく笑顔を浮かべているはずなのだ。

しかし発せられるプレッシャーが尋常なものではなく。

レサレサは顔を青くして震えていた。

「あらあら、どうして震えているのかしら？別に私たちはマリオの家で暮らすつて言っていたのが誰か聞いているだけよ？」

「そうだ。ワガハイたちは別に、マリオを好きだということをやめろ、とは言っておらんのだぞ？」

笑顔のまま、不思議そうに2人は他の仲間たちのことをぐるりと見渡す。

2人の言葉に何人かの仲間たちは目に力を戻して、強く2人を見つめ返した。

「わ、私が言いましたわ！わ、悪いのかしら！」

「ちゃんと正直に言えたわね」

「うむ。えらいぞ」

「でもね？／＼だがな？」

目に力を戻した1人、レサレサはどもりながらも2人に言い返す。

レサレサの言葉に2人は嬉しそうに頷く。

そして、レサレサの肩を左右からガツと掴んだ。

「私たちはちゃんと正々堂々とマリオにぶつかっていくと決めているの」「きさまの様に搦め手でいこうなどとは思わないのだ!」

左右からのプレッシャーと力にレサレサは逃げられないことを悟る。仮に透明になって逃げたとしてもどこまででも追ってくるだろう。

「というわけで」

「ワガハイたちと」

「オハナシしようか……」

「(ぎ)……、ごめんなさあああああ!!!」

その日、『迷いの森からハロウィンには女性の悲鳴が聞こえてくる』という噂が流れたが真実かは誰にも分からない。

番外話 ハロウィン side L

薄暗い森の中、1人の男が震えながら歩いていった。

男は緑の帽子をかぶり直し、ふうと息を吐いた。

「ううう、やっぱり迷いの森は怖いなあ……………」

手に持った袋を落とさないように気をつけながら男は歩を進める。

進めている……………

進んでいるはずだ……………

「よう、ルイージ！」

「うわあああああ?!」

とつぜん話しかけられ、男、ルイージは思わず跳び上がる。

話しかけただけでそこまで驚かれるとは思わなかったクリボーは目を白黒させた。

「こんなところで何やってるんだ？」

「く、クリボーか。驚かささないでよお……森の奥の屋敷でハロウィンパーティーをするんだよ」

クリボーの問いにルイージは胸を撫で下ろしながら答える。

ルイージは兄であるマリオと比べて臆病で、お化けが苦手なのだ。

だからこそクリボーにも驚いて跳び上がっていた。

「森の奥って……お前、まだここは入り口じゃないか」

「だって怖いんだよ?!」

ルイージの言葉にクリボーは呆れたように息を吐く。

そう、クリボーの言っている通りここはまだ迷いの森の入り口付近。

薄暗くはあるが、迷いの森に入っていると到底言えない場所だ。

「はあ……。しゃーねえ、ハロウィンパーティーってことはなんか持つてくんだろ？」

「え、う、うん。クッキーを作つて持つてるよ」

やれやれ、といった様子でクリボーはルイージに尋ねる。

クリボーの言葉にルイージは頷き、手に持つた袋を見せた。
袋の中からはいい匂いがただよってくる。

「俺がついていってやるから、屋敷まで着いたらクッキーをくれよ？」

「本当！ありがとう！」

クリボーの言葉にルイージは嬉しくなつて抱きつく。

クリボーたちは普段はルイージをバカにはしているが、嫌いなわけではないので、時々こんな風に手助けをするのだ。

そして、クリボーの後を追つてルイージは迷いの森へと入つていった。

「やっぱり怖い………」

「怖いと思ってるから怖いんだよ」

歩みの遅いルイージにクリボーは急かすように背中へ体当たりをする。それと同時に近くの茂みから鳥が飛んでいった。

「うひゃああああ?!」

「ただの鳥だ！招待されてるってことは待つてる奴がいるんだろ？会えなくても良いのかよ」

「それは………」

クリボーの言葉にルイージは貰った招待状を思い出す。

恥ずかしがり屋な彼女が勇気を出して持つてきてくれた招待状。

その内容は来てほしいって言う気持ちがとても感じられた。

僕は、その思いに答えない………！

「会いたい！ちゃんと会いたいよ！」

「よっしや！それならさっさと奥まで行っちゃまうぞ！」

ルイージの言葉にクリボーは楽しそうにジャンプし走り出す。

その後をルイージも追って走り出した。

彼の体は、もう震えていなかった。

迷いの森の奥、切り開かれたその空間にその屋敷はあった。

壁にはヒビが入っており、3階部分からは何か不思議な光が見える気がした。

「ちゃんと着いたな。ここままで大丈夫だろ？」

「うん、ありがとう。これ、お礼のクッキーだよ」

そうやってルイージはハンカチにクッキーを何枚か包んでクリボーに渡した。

「おうーじやーな！」

クッキーを受け取ると、クリボーは軽くジャンプをして森の中へと消えていった。そしてルイージは改めて屋敷へと体を向ける。

「ふう………。すいませーん！」

「あら、ようやく来ましたのね」

ルイージは正面の扉を開けて呼び掛ける。

するとルイージの目の前にリボンをつけたテレサ、レサレサが現れた。

とつぜん現れたレサレサにルイージは驚き、思わず後ずさる。

「まったく、マリオは早めに来ていたと言うのに。部屋まで案内しますわ。着いてらっしゃい」

「は、は……」

クルリと向きを変えてレサレサは移動する。

レサレサの言葉にルイージは慌てて後を追った。

レサレサは階段を上がり、2階の一室の前で停止する。

「この部屋で待ちなさい。あたくしはあの子を呼んできます」

「わ、分かりました」

そう言ってレサレサはスウツと消えていく。

レサレサが消えたことにビクビクとしながらルイージは部屋の中へと入った。

「わあ！」

部屋の中へと入ったルイージは部屋の内装に目を輝かせる。

屋敷の外観からは想像できないほどにハロウインの飾りつけがされており、とても同じ屋敷だとは思えないのだ。

「こんなに綺麗に飾り付けされてるなんてスゴいや！」

「へっへーん！俺たちにとっちゃ朝飯前だよ！」

ルイージの言葉に誰かが返事をした。

返ってくるとは思っていなかった言葉にルイージは思わず固まってしまう。

「おい、どうしたんだよ？」

「あ、て、テレサかあ」

話しかけてきたのがテレサだと分かり、ルイージはホツと息を吐く。

そんなルイージの姿にテレサは不思議そうに体を傾けた。

「つと、そうだ。ルイージ、トリックオアトリート！」

「ああ、ハロウインのやつだね。はい、僕が焼いたクッキーだよ」

テレサは思い出したようにルイージに言う。

テレサの言葉にルイージは手に持った袋からクッキーを数枚取り出して手渡した。

「ちえー、お菓子を持ってたのか。それなら、はい。これを持ったらもう言われなから」

「箱？まあ、分かったよ」

テレサはルイージに小さな箱を手渡すと、クッキーを齧りながら部屋から出ていった。

そしてテレサと入れ替わりに段ボールでできた巨大な盾が部屋の中へと入ってきた。

「え、えつと………。来てくれてありがとうございます！」

「ああ、君か！うん、こちらこそ招待してくれてありがとう」

盾の反対側にいるのが招待状をくれた彼女だと分かり、ルイージは微笑みながら答える。

そんなルイージの言葉に、盾は嬉しそうに上下に揺れた。

そして、ゆつくりと盾の反対側からその姿を現す。

盾の反対側から現れたのは真っ白な女性。

さらさらとしてきらめいて見える白い髪の毛。

やられたれ目がちなながらも大きくパツチリとした目。

恥ずかしいのか朱に染まった白い肌。

その全てが組み合わせさつた、とても美しい女性だった。

「えっと、またクツキーを作ったので食べてくれますか？」

「あのクツキーだね。うん、いただくよ。僕もクツキーを作ってきたから食べてくれるかな？」

ルイージは手に持った袋からクツキーを数枚取り出して差し出した。

それと同時に女性の手からテレサの形をしたクツキーが飛び上がる。

飛び上がったクツキーの内の一枚をルイージは素早く掴み取り口に運ぶ。

「とても美味しいよ」

「る、ルイージのクツキーも美味しい、です」

お互いに相手のクツキーの感想を言う。

そんな2人の周りをテレサの形をしたクッキーが飛び回っている。

「私のクッキーは他の人が食べても味がしないって言われちゃって……」
「そうなのかい？こんなに美味しいのに……」

しよんぼり、といった声音で女性は肩を落とす。

そんな女性にルイージは不思議そうに首をかしげる。

「本当、ですか？」

「うん。食べる人のことを考えて作られている優しい味だよ。僕は好きだな」

「え、あ、あうう……」

ルイージの言葉に女性は顔を赤くしてしやがみこんでしまった。

女性は手で赤くなった顔を隠してしまっている。

女性はカリスマガードをした。

防御力が3アップした……気がした。

さらには女性の周りでテレサの形をしたクッキーも顔を隠して赤くなっている。

「そういえば僕は君の名前を知らないんだけど……」

「あ、そ、そうでしたね……。えっと私は……。き、キングテレサのマシロです……」

ルイージの言葉に女性、マシロは自身の名前と正体を言う。

マシロはルイージがお化けを苦手としていることを知っている。

それでも自身の正体を隠したくないと思っただのだ。

「そっか、マシロさんって言うんだね。改めてよろしくね」

「え？あ、あの……。私、キングテレサ……。なんですよ？」

自身の正体を知ってもルイージの態度が変わらないことに驚き、マシロは思わず尋ねる。

そんなマシロにルイージはキョトンと見つめ返す。

「その事がどうかしたの？」

「え、だって、ルイージのことたくさん驚かせたりしてきちゃったし……」

なんてことないように聞いてくるルイージにマシロは困惑する。

自分がキングテレサだと知ったら驚いて逃げてしまっくんじやないか。

手紙のやり取りや話すことはできなくなってしまうんじやないか。

そんな風に悩んでいたのがバカらしくなるほどにルイージの態度は変わらなかった。

「私のこと、怖く……ないんですか？」

「ああ、そう言うことか。確かに君がキングテレサだって聞いて驚いたよ。でも、今までに僕たちは手紙やお話をしてきたでしょ？だから、僕にとつて君は怖いキングテレサじゃなくて、恥ずかしがり屋のキングテレサの友達なんだよ」

マシロの言葉にルイージはようやく合点がいったと頷く。

ルイージは確かに臆病な男である。

だが、それでも友達になった相手に怯えるような男ではない。

引つ込み思案でビクビクとしているときもある、それでもしつかりとした思いを持っているのだ。

「あ、ありがとう・・・ございます・・・」

「ううん。こちらこそ僕と友達になってくれてありがとう」

マシロは、再び顔を赤くして顔を隠してしまった。

そんなマシロの姿を、ルイージは微笑ましそうに見ていた。
不意に大きな揺れが屋敷を襲う。

「うわ?!」

「な、なに?!」

揺れは収まることはなく、何度も繰り返される。

あまりにも大きな揺れにルイージは思わず尻餅をつく。

「あいたあ?!」

「だ、大丈夫ですか?」

ふよふよと宙に浮かんでマシロはルイージを起こす。

飛んでいるマシロは影響を受けないが、ルイージはもはや立つことが困難だった。そして、限界を迎えたのか、部屋の天井にヒビが入っていき、崩落してきた。

「いけないー！」

マシロは咄嗟にルイージを抱き寄せて「すきとおり」をおこなった。

「すきとおり」によって崩落してきた天井もぶつかることなくすり抜けていく。そして2人は屋敷の崩落が終わるまでそのままの体勢でいた。

「終わっ……た、かな？」

「たぶん、ね」

崩落が終わり、辺りを見回すと周囲は瓦礫の山になっていた。

ルイージが持ってきたクツキーも、マシロが焼いたクツキーも全て埋まってしまったことが分かった。

「そうだ。助けてくれたお礼になるかは分からないけど、これをあげるよ」

そう言ってルイージは小さな箱をポケットから取り出した。

この箱の中に何が入っているのかは分からない、だがお礼として渡せそうなものがこれしかないのだ。

ルイージから箱を受け取ったマシロは、そっと箱のふたを開けた。

「え、これは……」

箱の中に入っていたのは、シルバーに輝く指輪だった。

指輪を手に取り、マシロは驚きながらルイージを見る。

「えっと、その………。着けてくれませんか？」

「ぼ、僕が？」

ルイージに指輪を手渡し、マシロは左手を差し出す。

指輪を受け取ったルイージは緊張しながらマシロの手を取った。

どの指に着ければ良いのか……。

指輪を持ちながらルイージは悩む。

親指、指輪のサイズからして入らない。

人差し指、こちらもサイズからして入らない。

中指、こちらもサイズからして入らない。

薬指、ピッタリ入りそうな気がする。

小指、簡単に入るだろうけど緩い気がする。

選択肢は完全に薬指か小指の二択となっていた。

「えっと、薬指がピッタリみたいだから。薬指に入れるね？」

「は、はい！」

ルイージの言葉にマシロは嬉しそうに返事をした。

そして、マシロの左手薬指にシルバーに輝く指輪がつけられた。

つけられた指輪を眺めながら、マシロはくるくると回転する。

「大切にしますね！」

花が咲いたような可憐な笑顔でマシロは言った。

大好きなルイージから貰った指輪。

なくしたりしないように大切にしよう。

心にそう誓いながら。

番外話 クリスマス 前

シンシンと白い粉のような雪がふわふわと舞い降りて積もっていく。

キノコタウンやピーチ城、マリオの家などあらゆる場所に雪が積もり、白く染め上げていた。

そんな雪が積もった町をキノコタウンの住人たちは色とりどりの飾りや電飾で彩っていく。

雪の白と色とりどりの飾り、そして電飾によって幻想的な光景が広がっている。

「もうすっかりクリスマス一色だなあ」

サクサクと柔らかい雪を踏みしめながら、マリオはキノコタウンを歩く。

右を見ても左を見ても町の中は様々な飾りや電飾で飾られ、見ているだけでも楽しい気分になってきそうだ。

「えっと……、確かチキンが10羽、豚肉が2キロ、牛肉が1キロだったか」

マリオの向かう先はキノコモール内にある肉屋。

どうやらマリオは大量に肉をかうらしい。

「おう、マリオ！ なにか買いに来たのかい！」

「ああ、お城の手伝いで買い物にね。えっと、チキンが10羽、豚肉が2キロ、牛肉が1キロ頼むよ」

「あいよ！ それにしても城のパーティーで使うものだろう？ 当日に買うのかね？」

マリオの注文に肉屋の店長は威勢良く答えて肉を準備していく。

素早く注文された肉の用意を終えた店長はマリオに肉を手渡す。

どうやらマリオの注文した内容から何に使うのかを理解したらしく、不思議そうに首をかしげながらマリオに尋ねた。

店長の言葉にマリオは少しだけ苦笑しながら頬を掻く。

「どうやら材料は揃えていたけど、肉類の量が予想外に足りなくなったらしくてね。それで俺が買いに来たんだ」

「なるほどねえ。ま、なんにしても城でのパーティーは楽しみなな！」

マリオの言葉に、大量に肉を買った理由がわかった肉屋の店長は豪快に笑う。

今日はクリスマス。

キノコタウンの住人も、ピーチ城に勤めているキノピオたちも、鼻唄を歌いながら仕事をしている。

キノコタウンの様子を楽しげに眺めながら、マリオはピーチ城へと戻るのだった。

ピーチ城、大広間

大広間の中を何人ものキノピオたちが忙しなく走り回っている。

彼らの手には大広間を飾る様々な飾りや電飾、またはご馳走を置くためのテーブルを飾り付けるための道具などが握られている。

「そっち、遅れてるわよ！他のところで手が空いたキノピオは手伝ってちようだい！」
「姫様、あとは私たちにお任せしてお休みくださいませ」

大広間全体を見回しながら、ピーチ姫は指示を飛ばす。

ピーチ姫の指示に従い、キノピオたちは右へ左へ動き回る。

そんなピーチ姫にキノじいは休むように進言した。

実はピーチ姫は朝からクリスマスの準備をするために指示を飛ばしており、なかなか休む機会がなかったのだ。

「なら、お願いするわね？」

「はい、お任せくださいませ」

キノじいに後を任せ、ピーチ姫は自分の部屋へと移動する。
夜にはクリスマスパーティーが始まる。

ピーチ姫はクリスマスパーティーで開始の挨拶をするので、今のうちに体を休めて体調を万全にしておくべきだろう。

ピーチ姫が部屋へと戻ってからしばらくして、キノコタウンに買い出しに行っていたマリオが大広間に戻ってきた。

「おお、マリオどの。買い出しありがとうございます」

「なにもしないわけにはいかないからね。他には何かあるかい？」

マリオは買ってきた肉類を料理人のキノピオに渡し、他にもやることがないか尋ねる。

クリスマスパーティーまでまだ時間があり、その間キノピオたちが動き回っているのに待っているのは心苦しかった。

「そうですな……、ではツリーの飾りつけをお願いしますか？」

「あそこのやつだね。わかったよ」

キノじいは少しだけ考えるような仕草をすると、大広間に置かれている飾りつけが途

中のツリーを指差した。

キノピオたちが飾りつけをしているのだが、いかんせん他の場所に人数を割いているためにツリーの飾りつけがなかなか進まないのだ。

「そっちの飾りつけはどう？」

「まだかかるよ！」

「そこ！脚立が倒れないようにちゃんと押さえて！」

ツリーに近づくと、ツリーの飾りつけをしているキノピオたちの声が聞こえてきた。飾りつけをしている人数は3人。

かなり大きめのツリーなため、飾りつけは全体の3割ほどまでしか終わっていない。

「俺も手伝うよ」

「きた！マリオきた！」

「これで勝つる！」

「僕たちのテンションが有頂天に！」

マリオが手伝ってくれると分かったキノピオたちは、やる気をさらに増していく。クリスマスパーティーは8時から行われる。

現在の時刻は3時。

まだ5時間あると言えば良いのか、はたまたもう5時間しかないと言えば良いのか。残り時間を気にしつつ、マリオはクリスマスパーティーの準備をしていく。

番外話 クリスマス 後

時刻は7時を過ぎた頃。

クリスマスパーティーまで残り1時間を切ったところだ。

ピーチ城の大広間も飾りつけなどがほとんど終わっている。

「マリオどの。ここまでやってももらえれば充分ですぞ」

「そうかい？まだ、ツリーの最後の仕上げの星が飾れてないんだけど」

キノじいの言葉にマリオは手に持つ星を見せる。

クリスマスツリーの頂点の星。

それはクリスマスツリーをクリスマスツリーたらしめる最大のポイント。

これがなくてはクリスマスツリーはクリスマスツリーではなく、ただの飾り付けられたもみの木になってしまうだろう。

「では、その星を取り付けましたら着替えてきてください。さすがにいつもの格好でパーティーに出るわけではないでしょう?」

「まあね。じゃあ、ちやちやつとつけちやうよ。スーパージャンプ!」

そう言つてマリオは足に魔力を溜めると、思い切りジャンプをした。

その高さはクリスマスツリーの高さを余裕で越えるほど。

マリオがあまりにも高くジャンプするものだから大広間にいた全てのキノピオは思はずマリオの方を見てしまう。

そんなキノピオたちのことも気にせず、マリオはクリスマスツリーの頂点の近くまで着くと、手に持っていた星を頂点にちよこんど置いた。

星がクリスマスツリーの頂点にちゃんと置かれたことを見ながらマリオは落ちていく。

そして、マリオはスタッと大広間の床へと着地した。

「この程度のことに使いますか……」

「むしろ、この程度のことには使わないで済むって思いたいかな。それじゃあ、俺は着

替えてくるよ」

マリオがいきなりスーパージャンプを使ったことにキノじいは思わず呆れたような声を出す。

スーパージャンプをこの程度のことを使う。

それは逆に言えばとても平和であることの証拠。

キノじいにそう答え、マリオは大広間を後にした。

ピーチ城に用意された一室。

その部屋でマリオは着替えをする。

置いてあるのは白いスーツ。

ワンポイントとして赤いネクタイを着けており、白のスーツと合わせてとても映えて

いた。

「これでよし。．．．．．ん？」

スーツを着た姿を確認していると不意に扉を叩く音が聞こえてきた。

マリオは扉の近くに行き扉を開ける。

扉を開けると、そこには赤いドレスに身を包んだピーチ姫がいた。

「マリオも着替え終わったのね。とても似合っているわよ」

「ありがとう。ピーチ姫も似合っているよ」

お互いに笑みを浮かべながら相手の姿を誉める。

他愛もない話をしながら2人は大広間へと向かう。

クリスマスパーティーはもうすぐ始まりそうだ。

大広間に着くと、大広間の飾りつけは終わっており、様々な料理も並べられている。

「あ、クツパも来たんだね」

「うむ。ついさっきな」

「いらっしやい、クツパ」

大広間を見渡し、クツパの姿を見つけたマリオとピーチ姫は手を上げながら近づく。クツパの姿は赤いドレスに白いモコモコが着いたどこかサンタクロースをイメージさせる姿だ。

「む？ナハトはどうしたのだ？」

「ナハトなら料理人の方を手伝っているわ」

「ちよつとだけ意外だよな……」

ナハトの姿がないことに気づいたクツパはピーチ姫に尋ねる。

クツパの問いにピーチ姫は、いたずらっ子のような笑みを浮かべて答えた。

ピーチ姫の言葉にマリオは頷きながら言う。

正直に言うとナハトが料理をするという印象はまったくなく。

料理人の方を手伝っていると聞いて、クツパは少しだけ不安になった。

「……大丈夫なのか？」

「意外かもしれないけどかなり戦力になっていたよ」

不安そうにするクツパに、マリオはナハトの手伝いをする姿を思い出しながら答える。

マリオの言葉にクツパは少しだけ不安を薄めるのだった。

「さて、そろそろだから。私は始まりの挨拶にいくわね」

「うん」

「いってらっしゃいなのだ」

そう言ってピーチ姫は大広間の前の方へと移動する。

歩いていくピーチ姫の後ろ姿をマリオとクツパは見送った。

大広間の前に立ち、ピーチ姫はキノじいからマイクを受け取る。

「あ、ああ。……うん、大丈夫ね。今日はピーチ城でのクリスマスパーティーに集まってくれてありがとう。楽しんでいってちょうだい」

マイクに軽く声をかけ、電源が入っていることを確認してピーチ姫はクリスマスパーティーの始まりを告げた。

ピーチ姫の言葉が終わると同時にキノピオたちが持っていたクラッカーが一齐に炸裂する。

パンツという大きな音と共に紙吹雪が大広間にヒラヒラと舞う。

色とりどりの紙吹雪は色はあるのだが、ちらほらと降り積む雪のようにも見えた。

「始まった。マリオ、これ食べて」

「うお?! な、ナハトか。じゃあ、いただきますよ」

「ふむ、ワガハイももらおうかな」

いつのまに近くにいたのか。

手に料理の乗った皿を持ったナハトがマリオの背後に立っていた。

急に話しかけられたことに驚き、思わず身構えたが、ナハトの姿に気づいたマリオは体から力を抜く。

そんなマリオの姿など気にしていないかのようにナハトはマリオに料理を勧める。

ナハトの手に持つ料理から美味しそうな匂いがすることに気づいたクツパはヒョイトナハトの持つ皿から料理をつまんだ。

「うむ、旨いな」

「私が作ったのだから当然」

「俺もいただくよ」

「さっそく食べてるのね。私ももらうわ」

クツパの言葉にナハトはフンスと自慢気に答える。

料理は見た目もよく、料理人のキノピオたちのものと比べてみても遜色ないほどだろう。

料理を食べつつ、4人は会話を楽しむのだった。

「メリイイイイイ……クウウウウリスマアアアアアス!!!」

料理を楽しみ、クリスマスツリーの明るさや流れる音楽に身を委ねていると、不意にそんな声が大広間に飛び込んできた。

誰の声なのか。

声の主を探すためにキノピオやマリオたちは大広間の中をキョロキョロと見渡す。声が聞こえてからしばらくして、大広間の窓の1つが勢いよく開いた。

そして開いた窓から何かが飛び込んでくる。

「ほっほっほっ、メリークリスマスじゃ!」

「さ、サンタ……?」

飛び込んできたのは星形の何か。

よく見れば髭が生えており、頭には赤と白の三角の帽子、そして手には白い袋を持っていた。

この情報だけであればサンタクロースという認識で間違いはないだろう。が、マリオ、クツパ、ピーチ姫の3人はこの人物（？）に見覚えがあった。

「……あやつは何をやっているのだ？」

「ちよつとビックリよね」

「何をしているんだい？ チョール」

そう。

サンタクロースのような格好をして飛び込んできたのは星の精の長の立場にいる髭の生えた星の精、チョコールだった。

マリオの言葉にチョコールはズビシッと腕を振る。

「ワシはチョコールなどと言うダンディな髭の星の精ではない！ ワシの名前はサンタクロースター！ 星のサンタクロースじゃ！」

「サンタクロー……」

「スター……」

「ってなに？」

あまりにも普段と違うテンションのチヨールに、マリオたちは少しだけ引く。チヨールを知らないナハトだけは気にせず、マリオの皿へと料理を運んでいた。

「えつと……それで、サンタクロースター？は何をしに来たのかしら？」
「そうじゃそうじゃ、忘れるところじゃった。マリオ、お主にプレゼントじゃよ」
「俺に？」

引きながらピーチ姫が尋ねると、チヨール……サンタクロースターは思い出したようにマリオに手に持っていた袋を差し出した。

急に自分の名前を呼ばれ、マリオは不思議に思いながら袋を受け取る。

「ワシら……げぶんげぶん——星の精を助けた報酬の1つじゃよ」
「……ありがとう」

完全に口を滑らせているが、マリオは気にしないことにした。
袋の中にはいくつもの星の欠片が入っておりキラキラと光っている。

「ワシ以外のものたちは色々なところに星を配りに行っておるのでな。ワシも手伝いに行くぞ」

「そ、そうか」

「では、クリスマスパーティーを楽しむのじゃぞー！！！！」

そう言つてチ．．．．——サンタクロースターは入ってきた窓から飛び出していった。

まるで嵐のような行動に、マリオたちはポカンとする。

その後は特に何かが起こることもなく、楽しいクリスマスパーティーに戻るのだった。

番外話 バレンタインデー

バレンタインデー。

それはチ（ヨコ）でチ（ヨコ）を洗うような苛烈な戦いの日。

乙女はみずからの心に決めた異性へと思いを込めたチヨコを送る。

受け取った男性は周囲の貰えなかつた男性からの射殺さんばかりの視線を受ける。

バレンタインデーとは、そんな愛とおもいと殺意がおもいが渦巻くまさに現代の合戦日である。

12月、1月も過ぎ、すでに2月も半ば。

それでもまだまだ寒さの残るそんな頃。

どの世界の女の子たちもそれぞれの予定を詰めつつ、今日という記念日に思いを寄せながら過ごすのだろう。

そんな記念日だとしても楽しめない人間は少なからず存在している。

恋人の存在しない人間たち。

通称 “ボッチ” である。

彼らは道端でいちやつくカップルたちに中指を立てながら町を歩くのだろう。

2月の半ばであることに加えて独り身であると言う事実には彼らの体には一層の寒さが突き刺さるだろう。

独り身であることといちやつくカップルによって荒んだ心を癒すものがないかと町中を見渡してみても目に映るのはリア充とリア充とリア充ばかり。

キノコや亀が話ながら町を行き交い、耳に入るのは凡そ同じ生き物だとは思いたくない化け者共の鳴き声とそれに似つかかわぬ明るい曲です。

「ストップ、ストップ!!」

「なんですか、まだナレーション中ですよ」

「悪意しか感じられないんですけど?!」

「ナレーターさん、大丈夫ですか?!」

あんまりなナレーションに思わずカメラを止めてキノピオたちが尋ねる。

カメラが撮影しているのはバレンタインのキノコタウンの様子。

キノコタウンには何人かのキノピオたちが歩いており、そのキノピオたちは揃って男女のカップルたちばかりだった。

そんな光景を見ていたマイクを持ったキノピオ（30才・独身・彼氏いない歴〓年齢）は目から光を失っていた。

「大丈夫ですよ。それよりもまだナレーションが途中です。お静かに」

「あ、はい」

「………大丈夫かな」

キノコタウンの中心には今日限定で大きなハート型のアートが置かれていた。

そこには待ち合わせやら、記念としての撮影やらでカップルがそこにはうじゃうじゃといる。

もはやこのアートには“リア充集め”とでも名付けておけばいいのではないだろうか。

あまりに醜悪なその光景に視聴者はS A N値チエックです。

「だからちよつと待って?!」

「はい、カットしてください!」

「ナレーターには温かい飲み物渡して解散してー!」

「なんで番組中にいきなりS A N値チエックなんだ……」

キノピオたちの困惑の姿が最後に映され、番組は終わった。

「……なんだったのかしらね」

「ナレーターの精神状態が不安定すぎではないか?」

なにも映さなくなったテレビ画面を見ながらピーチ姫はポツリと呟く。

どう考えてもまともな精神状態には思えなかったナレーターの様子。

慣れた対応の他のキノピオたちの様子からいままでにも似たようなことがあったことはうかがえた。

ここはピーチ城のキッチン。

ピーチ姫、クツパ、ナハトの3人はマリオに渡すチョコ作りをしていた。

「まあ、とりあえずはチョコを完成させちゃいましょう」

「そうだな。とりあえず、仕上げとって洗剤を手に持つのはやめろ」

「料理クラッシュャー」

ピーチ姫の腕を掴み、クツパはピーチ姫の動きを止める。

なぜ油断をするとピーチ姫は洗剤に手が伸びるのか。

それは誰にも説明することのできない謎である。

「私は完成したからマリオに渡してくる」

「ちよつ、全員で一緒に渡す約束でしょ?！」

「いや、ワガハイも完成してるのだが……」

「嘘?!」

ナハトの手には白いリボンで飾られた黒い箱。

クツパの手には赤いリボンで飾られた緑色の箱。

ピーチ姫が色々とやっているうちにクツパとナハトの2人はチョコを作り終えていたのだ。

「ナハト、とりあえず余っているチョコをやるから待つとするのだ」
「ん、分かった」

クツパからチョコを作る際の残りを受け取り、ナハトは口に運ぶ。
余っていたチョコだとしても美味しいのだろう。
もらったチョコを嬉しそうに食べている。

「これで………できた！」

「ん、すぐ終わるくらいだったのだな」

「クツパのやつ美味しいよ」

「うむ、それなら良かったのだ」

白いリボンで飾られたピンク色の箱を頭上に掲げながらピーチ姫は嬉しそうに叫ぶ。
待ち始めてからここまで時間を経たずにピーチ姫のチョコ作り、及び包装が終わっ

た。

「待たせちやつてごめんなさいね」

「そこまで待つていないのだ」

「じゃあ、渡しに行こう?」

待たせてしまったことをピーチ姫は謝る。

ピーチ姫の言葉にクツパとナハトは然程気にした様子もない。

そして3人はそれぞれ自分の作ったチョコを手に、キッチンを後にした。

キノコタウン、民家前。

水道管の修理を終えたマリオは民家から出てきていた。

「ふう。とりあえずはこれで今日の予定は終わりかな」

軽く息を吐き、マリオは今日の他の仕事を思い出す。

今日の仕事の内容はどれも地上で終わるようなものばかり。

地下に潜ってやるような仕事がないのは楽で助かるのだが、少しばかり不思議に思える。

いつもであれば最低でも一件くらいは地下に潜るのだが、今日はそれが無い。その事実にはマリオは首をかしげていた。

「マリオどの、今よろしいですか？」

「あれ、キノじい？」

声をかけられ振り向くと、キノじいがそこにいた。

キノじいがピーチ城から出てくることは滅多になく。

出てくるとしてもピーチ姫のお付きとして出てくるのがほとんどだ。

「今日のお仕事は終わりましたかな」

「え、あ、うん。今日の仕事は終わったよ。今から帰って書類をまとめるくらいかな」
「そうですか。そうですか」

マリオの言葉にキノじいは何度も頷く。

「どうやらマリオの今後の予定が知りたかったようだ。」

「であるならば、お早くご帰宅することを勧めさせていただきますぞ。それでは、私はこれです」

「そのつもりだったけど……。なんだったんだ？」

「そうやってキノじいは歩いて行ってしまった。」

「いったいなんだったのだろうか？」

「早く帰ることを勧めると言っていたけど。」

「まあ、書類をまとめるためにそのつもりだったし、キノじいの言葉に従っておこうかな。」

「そう考え、マリオは工具の入った工具箱を片手に帰路についた。」

マリオの家。

キノじいに言った通り、マリオは特に寄り道もせずには帰宅していた。

一応、マリオは今日がバレンタインデーであることは知っている。

だが、毎年チョコをくれたのはルイーダとピーチ姫のみ。

そのことからマリオは特に気にした様子もなく仕事の書類をまとめていた。

不意にインターホンがなった。

玄関の前に何人かいるのかかすかな声も聞こえてくる。

「はい」

「は、はっぴいばれんたい——なぜ言わぬのだ?！」

玄関を開けると、クツパが勢いよく飛び込んできた。

途切れた言葉からおそらくは『はっぴいばれんたいん』と言いたかったのだらうと思える。

そんなクツパの様子をピーチ姫とナハトはニヤニヤと見ていた。

「ほんとに言うとは思わなかった」

「録画しておけばよかったわね」

「ぶつとばすぞ?!」

ニヤニヤと笑うピーチ姫とナハトにクツパは詰め寄る。

それでも反省の色はピーチ姫とナハトには見えない。

暖簾に腕押し、ぬかに釘。

何を言っても2人は態度を変えないことはないだろう。

「あ、あはは………。それで3人はなんの用で来たんだい？」

「つと、いかんいかん。本来の目的を忘れるところだった」

「まったく誰のせいかしらね？」

「ふっきふっき」

マリオの問いにクツパは思い出したように小箱を取り出した。

クツパの動きに合わせるようにピーチ姫とナハトも小箱を取り出す。

その際に白々しいことを言っているが、クツパは軽く睨むだけでなにも言わなかった。

「こほん。マリオ、今日がなんの日かは知っておるな？」

「ああ、バレンタインデーだろ？もしかして……」

「ええ、あなたが想像しているものよ」

「けっこう上手にできた」

軽く咳払いをし、クツパはマリオに今日がなんの日かを改めて尋ねる。

当然ながらマリオは今日がなんの日かを答えることはできる。

クツパがなぜそんなことを尋ねてきたのか。

マリオは一瞬だけ不思議に思ったが、もしやと思い3人の顔を見る。

マリオの様子に3人は満足そうに頷き、手に持つ箱をマリオへと差し出した。

「「ハッピーバレンタイン!!」」

——それはきつととても甘い。

——舌も、そして心まで溶けてしまいそうなほどに甘い。

——甘い、甘い贈り物。

——どうか、どうか男女に関係なく幸福がありますように……

番外話 バレンタインデー side L

マシロの家へと続く森の中。

ルイージとデイジーはチョコ作りに必要な道具や材料を手に持ちながら歩いていた。

なお、ルイージは若干腰が引けており、デイジーによってぐいぐいと手を引かれている。

「ほらほら、早く行くわよ！」

「ま、待つてよ！うひゃ?!」

「もう、ただの風よ」

デイジーに手を引かれながらルイージは近くの草むらがガサガサと揺れたことに悲鳴をあげる。

そんなルイーダの姿にデイジーは少しだけあきれた様子で言う。

「情けないルイーダの姿だが、それでもデイジーはルイーダのことを嫌いにはならない。」

ルイーダがお化けなどを苦手としていることはよく知っているので今さら思いが変わることはないのだ。

「早めにマシロの家に着いちゃえば怖くないでしょ？」

「で、でも、テレサも住んでるんだよね？」

「まあ、けっこういたわね」

マシロの家に行ったときのことを思いだし、デイジーはルイーダの言葉を肯定する。

たしかにルイーダの言うとおりマシロの家にはテレサも大量に住んでいた。

そしてテレサなので当然ながらイタズラが好きだった。

マシロが止めていなかったらデイジー自身もイタズラをされていただろう。

デイジーの言葉にルイーダは腰はさらに引けていった。

「ううう……」

「じゃあ帰るの？マシロには私から言っておけるけど」

まだマシロの家には着いていない。

今ならば帰っても急用が入ったと言つて誤魔化すことができるだろう。

でも、それは……

「それは、とても失礼だよ。マシロが誘つてくれたんだ。僕はそれを受けたんだからちゃんと行かないと」

「そ。なら、こんなところで立ち止まっているわけにはいかないわね？」

「うん」

そう。

マシロは勇気を出してルイージを誘つた。

ここで帰つてしまつてはマシロの勇気を踏みにじることになってしまうだろう。

それが分かっているからこそルイージは足を止めずに歩き続ける。

そんなルイージにデイジーはクスリと笑いかけ、一緒に歩く。

マシロの家はもうすぐだ。

マシロの家。

玄関の前にルイーヂとデイジーは立っていた。

目の前にあるのは淡く光を放っている不思議な家。

「い、いきなりテレサが飛び出したりとかしないよね？」

「いや、お客さんいきなり……でも、テレサだし……」

インターホンを鳴らした瞬間にテレサが飛び出してくるのではないか。

そんな恐怖からルイーヂはインターホンを鳴らせずにいた。

住んでいるのがマシロだけではなく他のテレサも住んでいる。それゆえにデイジーの口にした可能性も否定できないのだ。

「ええい、行動しなきゃなにも変わらないわ！」

「な、鳴らすんだね？」

いい加減に焦れたのか、デイジーは声をあげてインターホンに指を当てた。ピンポン、といたって普通のインターホンの音が鳴る。

インターホンを鳴らしてすぐにテレサが飛び出してくるような気配はなく。拍子抜けと言った表情でデイジーは玄関を見ていた。

「はーいー！」

「あ、マシロが出てくるみたいね」

「テレサが驚かしに出てこなくてよかったー……」

ガチャリと玄関が開き、マシロが現れる。

なにかをしていたのか、髪型が少しだけ乱れているように思える。

玄関から出てきたのがマシロだったことにルイージはホツと胸を撫で下ろした。

「準備はできてるから2人とも入って入って」

「ええ、お邪魔するわね」

「お邪魔します」

マシロに促され、ルイージとデイジーは家の中に入っていた。

家に着くまでに時間はかかってしまったが、ようやくチョコ作りが始まる。

「えっと、とりあえず材料のチョコとトッピングに色々なものを用意したよ」

「昨日、慌てて買ったものね」

「そうだったんだね」

「それは言わない約束だったのにー!」

デイジーの裏切りにマシロはポカポカとデイジーの肩を叩いた。

そんな微笑ましい光景にルイージは優しいな笑みを浮かべていた。

マシロの家のキッチン。

掃除が行き届いており、埃一つ落ちていないきれいなキッチンだ。

「それじゃあ、チョコを作ろつか。まずは手荒いうがいだね」

「忘れちゃいけないわね」

「エプロンもだね」

料理をする際に決して忘れてはいけないこと。

手荒いうがい、そして清潔な格好だ。

これが守れないのであれば食事を作る資格が無いものとルイージは思っている。

また、どこぞの赤いバトラーも同じことを思っているはずだ。

「さて、チョコを作るわけだけど。どんなものを作るかは決めているのかな？」

「私はあまり変わったものは作れないし、シンプルにやるわ」

「うん。私も手堅く作りたいかな。まだ自信はそんなにないし」

「そうなんだ。なら、僕はチョコレートケーキにしておこうかな」

ルイージの問いにデイジーとマシロは顔を見合わせて作るチョコの種類を答えた。

シンプルなおチョコと侮ることなかれ。

シンプルであるからこそ簡単に作れると言うことはたしかにあるだろう。

だが、シンプルだからこそ本人の腕前がハッキリと現れるのだ。

まあ、ルイージは料理の腕が遙かに上なのでケーキを普通に選択しにいられているのだが。

「湯煎の適温ってこれくらいよね？」

「大丈夫だと思うよ。型はどれがいい？」

「色々な型があるんだね。あ、テレサ型と花型を借りてもいいかな」

和気あいあいと話しながら3人はチョコ作りをしていく。

混ぜたりするときに跳ねたのだろうか、デイジーは頬に、ルイージは鼻に、マシロは胸元にチョコを跳ねさせていた。

「ぶつちやけて言つちやうと、チョコ作りって溶かして形を変えるだけだよね」

「まあ、そうよね」

「原材料からなんて無理だもん」

ルイージの言葉にデイジーとマシロはチョコをかき混ぜながら答える。

チョコ作りとは言ってもやっていることは溶かして好きな形にすることだけ。

チョコを材料としてなにかを作っているわけではない。

「だからさ、僕はこう思うんだ。溶かしているのはチョコだけじゃなくて渡す相手への思いも溶かして混ぜているんだって」

「相手への思いを……」

「溶かして混ぜる……」

言っている途中で恥ずかしくなったのか、ルイージはファイとデイジーとマシロから顔を逸らした。

ルイージの言葉をデイジーとマシロはゆっくりと飲み込んでいく。

「は、恥ずかしいことを言っちゃったかな。ちよつと生地を焼いてくるね！」

そう言ってルイージはオープンの方へと移動した。

「……ルイージの言葉、胸に響いたわね」

「うん。あんな風に思っているからルイージは料理が上手なんだよね」

「心だけでも、ルイージに負けなくらい込めたいわね」

「うん！」

ルイージの言葉に触発され、デイジーとマシロは一層のやる気を見せてチョコ作りを続けていった。

40分後。

完成したチョコとチョコケーキがテーブルの上に並んでいる。

「完成したね」

「ルイージのケーキすごいわね」

「上にテレサとお花のチョコまで乗ってる」

マシロのチョコはやはりと言うべきかテレサの形をしている。

まるで今にも動き出してしまい……

『ケケケ……』

マルデイマニモウゴキダシテシマイソウダ。

デイジーのチョコはハートの形のチョコが集まった花形のチョコだ。

花びらを表現しているハートの形のチョコはそれぞれミルクやカカオ、イチゴに抹茶と味が異なっており、どこから食べても楽しめるだろう。

そしておひとり。

ルイージのチョコケーキ。

パツと見はシンプルなチョコケーキなのだが、実は中にはいくつもの味が層のようになっており、それぞれがそれぞれの味の邪魔をしないような配分になっている。

そしてケーキの上にはマシロの言っている通りチョコで作られた精巧なテレサと花が飾られていた。

「今年は兄さんに作らないか張り切っちゃったよ」

「張り切り具合がスゴいわね」

「とつても美味しそうだよ」

それぞれが他の人の作ったチョコを見て楽しそうにしている。

この時点で今日のチョコ作りは成功したと言えるだろう。

「じゃあ、そろそろ食べよっか」

「そうね。でも、その前に1つだけやることがあるわ」

「そうだね」

デイジーの言葉にルイージは首をかしげ、マシロは頷いていた。

どうやらマシロはやることになにかを分かっているようだ。

「バレンタインデーなんだからこれを言っておかないとね」

「大切なことなんだよ」

「ハッピーバレンタイン！」

番外話 年末

今日は12月31日。

1年も終わりを迎え、新たな年への準備のラストスパートや、新たな年へと英気を養うためにのんびりとする日。

ピーチ城の一室、ピーチ姫の部屋でその部屋の主であるピーチ姫は新年の挨拶に向けてスピーチを――

「はふう………」

――練習していなかった。

いつものお茶とは違い、緑茶を一口飲んでピーチ姫は短く息を吐いた。
見るとピーチ姫の足はこたつの中に入っており、下には畳が敷かれている。

「年末だからせめて休んでくださいって言われたけど………。退屈ね」

こたつの上に置いてあるミカンを手に取り、軽く弄もてあそびながらピーチ姫は呟く。

ピーチ城に勤めるキノピオや、キノコタウンに住むキノピオたちからの言葉でピーチ姫は自室でこたつに入っているのだ。

その間も城のキノピオたちは大掃除などのラストスパートをかけている。休むのは良いのだが適度に何かをやらないと退屈で仕方がないのだ。

「やあ、ピーチ姫」

「じゃまをするのだ」

「あら、マリオにクツパ。いらっしやい」

ピーチ姫がこたつに顎を寄せ、退屈そうにしていると、部屋の扉が開いてマリオとクツパが部屋に入ってきた。

マリオとクツパは軽く手をあげ、こたつの中へと足を入れる。

2人のためにピーチ姫は急須にお湯を入れて、お茶を準備する。

「大掃除とかは終わったのかしら？」

「まあね。俺の方は工具の整備も終わって、あとは年越しを待つだけだよ」

「ワガハイは自分の部屋だけ終わったのだ。城の方も手伝おうかと思っただが、配下に追い出されてな」

ピーチ姫の問いにマリオとクツパは答える。

クツパは追い出されたと言っているが、そこに怒りなどはなく、仕方がないやつらだと嬉しそうな雰囲気を放っていた。

「私も休んでってって言われちゃって暇なのよね」

「まあ、クリスマスでも挨拶をしてたからね。キノピオたちに甘えなよ」

「上に立つものの権利みたいなものだな」

お茶をマリオとクツパの前に置き、ピーチ姫はミカンを剥いていく。

退屈そうなピーチ姫の姿にマリオとクツパは苦笑いをうかべて言う。

ピーチ姫の言っていることも分かるが、キノピオたちの気持ちも分かるのでなんとも言えないのだ。

「そうね。このさいだし、お悩み相談でもしちやいましょうか」

「お悩み？」

「相談？」

そう言ってピーチ姫は何枚かの紙と、マイクを3つどこからか取り出した。用意されたマイクにマリオとクツパは不思議そうに顔を見合わせる。

「さあ、始まりました。ピーチ姫のお悩み相談コーナー！」

「なにが始まったのだ?！」

「え、ちよ、ラジオから流れてきてる?！」

若干テンション高めにピーチ姫が宣言をすると、近くに置いてあったラジオからピーチ姫の声が聞こえてきた。

突然の事態にマリオもクツパもついていけない。

「こちらのコーナーはキノコタウンから集められたお悩みを私、ピーチが笑い転げたり、

泣き崩れたり、切り捨てたりするコーナーです！」

「相談にのっていないのだ?!」

「お悩み遭難コーナー！」

「救助しろ?!」

ピーチ姫の言葉にマリオとクッパはそれぞれツッコミを入れる。

出した悩みを笑われ、弄られ、切り捨てられる。

どう考えても悩みを相談する相手を間違えているだろう。

「じゃあ、私は好きな人がいるのですが、どうやって相手を落としたら良いですか？

”

「ふむ。恋の相談か」

「難しい相談だね」

ピーチ姫は用意した紙を読み上げる。

相談は恋愛相談。

共感のできる相談だったためか、ピーチ姫もクッパも真面目に考えているように見え

る。

「そうね。まず、相手をピーチ城の城壁の上に呼び出しましょう」

「ふむ。一対一で話すために他に人がいないところに呼び出すのだな？」

「ええ。そして、城壁の上で空を見ている相手の背中をそつと……押す」

「うん?!」

「落ちます（物理的）」

「そりゃあ、落ちるわ?!」

明らかに的外れな回答にマリオは大きな声でツツコミを入れた。

城壁の上に相手呼び出し、背中を押して城壁から落とす。

どう考えても完全に殺人事件だ。

「これで相手を落とすことができるわね!」

「相手は眼下で地面にめり込んでおるのだが?!」

「そして、最後に相手を見つめながら一言言おうと完璧ね!」

「一言?」

「ええ。『私……本気よ』」

「怖っ!!」

ピーチ姫の付け加えた言葉にマリオとクッパは思わず身を震わせた。

殺意の宣言か、はたまたヤンデレなのか。

どちらにしても恐怖しか感じない。

「やっぱり告白はインパクトが大事よね!」

「物理的に相手に衝撃を与えてどうするのだ……」

「それは告白ではなくってないか?」

「告白じゃなくて告別になったりしてね!」

「何に別れを告げるつもりなのだ……」

「昨日までの私に……さよなら」

「それは完全に恋にさよならしてるだろ?!」

スツとどこか遠くを見つめ、ピーチ姫は言う。

どこか寂しげな雰囲気を出しているが、どう考えても恋が終わっている言い方だろ

う。

「これできつと大丈夫ね！」

「けつきよく解決してないのだ?！」

「まじで遭難した……」

自信満々なピーチ姫にマリオとクッパはやや疲れた様子でお茶を飲む。

お悩み遭な——……相談コーナーは終わりなのか、ピーチ姫はマイクなどを片付けていった。

近くに置いてあったラジオからも普通に音楽が流れてきている。

「お悩み相談をしてたらいつの間にか年越しの時間になりそうね」

「む、いつの間にかこんな時間か」

「意外と時間がたつのは早かったね」

時計を見るとあと数分で時計が12時を指すところだ。

夕食で年越しそばは食べていたので、あとは待つだけだ。

改めてお茶を淹れ直し、ピーチ姫はこたつに座り直す。

「今年もいろいろあったわね」

「ワガハイがこうなったりな」

「まあ、楽しい1年だったよ」

今年も残り数分。

3人は今年あったことを思い出してしみじみとする。

今年1番の出来事と言えばやはり、クツパの姿が変わったことだろう。

変わったことにはとても驚いたが、悪いことばかりではなかった。

「そろそろカウントダウンね」

「だな」

時計の針が残り数秒の位置まで来る。

「4」

「3」

「2」

「1!!」

そして、時計の針は頂点を指し示した。

今年よお疲れ様。

そして新年よ、こんにちは。

「明けましておめでとございますー」「」

願わくば、これからも楽しい日々が続きますように。

番外話 嘘CM

事件の始まりは……ルイージが見つけてきた黒い王冠。
不思議な黒い王冠をルイージは気になって頭に乗せてしまった！

「ふふふ、はははは!!世界は、闇に飲まれる!!」

王冠をかぶったルイージは豹変し、世界に闇を広げていつてしまった。
異変に気づいたマリオは慌ててルイージを止めに向かう。

「なんだ?このからだの兄?ふん、そんなものはどうでもいい。きさまも闇に沈め!」
強力な闇の力に倒れ、止めを刺されそうになった瞬間!

「マリオ！」

「な、なんだ?! きさま、まさか光の姫か！」

マリオが倒れた姿に思わず飛び出してきたピーチ姫にルイージは驚き動きを止める。それと同時にピーチ姫は魔法を放ってマリオを守りだした。

「マリオ！起きて、マリオ！」

「……………どうやら完全に力を覚醒させているわけではないようだな？」

ピーチ姫はマリオに呼びかけるが、マリオは倒れたままで動かない。

そんなピーチ姫の姿を見ながらルイージは小さく呟いた。

「まあ、いい。不穏な芽は摘んでおくにかきる」

「きやああああああ!!」

そう言つてルイージはピーチ姫の体を闇で貫いた。

突き抜けた闇はピーチ姫の体から光の玉を弾き出し、6つの小さな欠片へと変える。

闇が消えると、ピーチ姫の体には傷はなく、
ピーチ姫は力なく倒れ、闇に沈んでいった。

「仮に力を集められても困るからな。肉体は俺が封印しておこう」

そして、マリオの体も闇に沈んでいった。

その日、世界は闇の中へと呑み込まれた。

マリオは闇の王冠によって体に乗っ取られたルイージによって倒され、闇に包まれた世界にたどり着いた。

闇に包まれた世界では今までの仲間たちの助けは得られない。

そんなとき、マリオは不思議な光が闇の中を飛んでいくのを見つける。

あの光がなんなのかは分からないけど、追いかけなきゃいけない気持ちになったマリオは走って光の後を追った。

飛んでいく光を追ってしばらくすると、光は岩場の向こうへと落ちていった。

岩の向こう側から泣き声？

不思議に思ってマリオが岩の向こう側を覗き込むと、1人の女の子が泣いていた。

「うわーん！なんでこんなところにいるんだよー！パパー！」

泣いている女の子を放っておけないマリオは慌てて女の子の前に飛び出した。

すると、女の子は驚いて立ち上がる。

「な、ま、マリオ?!なんでこんなところにいるんだよ！ボクをいじめに来たのか?!」

どうやら女の子はマリオのことを知っている様子。

しかし、マリオは女の子のことを見たことはなく首をかしげる。

「な?!ボクのこと分からないだ?!このクッパJr.様のことを忘れたのか!」

女の子の言葉にマリオは飛び上がって驚く。

どう見てもマリオが知っているクツパJr.の姿からはかけ離れた女の子。

とてもではないが、マリオは信じることができない。

「ぼ、ボクだってなんでこんな姿なのかは分からないよ！さつきは変な光がぶつかってくるし、この辺には変な黒い奴がいるし、散々だよ！」

そう言つてクツパJr.はまた泣き出してしまった。

泣いている姿を放っておけないので、マリオは一緒に行こう、と声をかけた。

「ぼ、ボクと？・・・グス・・・うん。マリオについていくよ・・・」

マリオの言葉にクツパJr.は領いて行動を共にすることを決めた。

目の前に広がるのは謎の闇の世界。

旅を続ける内に分かる闇の王冠と光の姫の真実。

果たしてマリオはピーチ姫を救うことができるのか。

そして、世界の命運は——？

今作のペーパーマリオは界限で人気の姫化を取り入れたRPG。

闇に包まれた世界をマリオと6人のお姫様が冒険をします！

仲間になるのは人気のあのキャラたち！

もちろん、戦闘でも頑張って戦う姿が見られますよ！

お姫様たちがアピールすると応援によってプリンセスパワーが溜まります。

溜まったプリンセスパワーを使って強力なプリンセスコンボを決めていこう！

一部のプリンセスコンボをチラッとご紹介！

・ハリセンたまご

スティックを左に引いて、カーソルの中にたまごがきたらスティックを離してたまご

を相手に打ち出そう！

・いたずらジュニア

相手の足元にカーソルが来たらボタンを押そう！

攻撃が当たれば追加効果でやけどするぞ！

・きょうふのほのお

Aボタンを連打してゲージを溜めよう！

最大まで溜めると特別な演出になるよ！

さらに今作では、マリオとお姫様たちに個別のキズナレベルが存在します。

長くパートナーとして連れ歩いたり、戦闘で守ったり、特別なアイテムをあげたりするとキズナレベルがアップします！

キズナレベルがアップすると特別なセリフが聞けたり？

「ボク・・・・・・・・。マリオのことが・・・・・・・・。」

「アタイは、身も心もマリオに・・・・・・・・。」

「マリオ、あなたはあたくしの・・・・・・・・。」

「マリオさん。疲れちゃいました？それなら・・・・・・・・。」

「ふん、きさまはワガハイのライバルなのだ。だから、ワガハイ以外に……」
「ケケケ、あいつをからかうのと同じくらいに……」

おっと、セリフを最後まで聞きたかつたらちゃんご自分でプレイして聞いてくださ
いね？

それでは。

『スーパーペーパーマリオRPG―闇の王冠と6人のプリンセス―』

××××年キノコ月スター日発売予定！

番外話 嘘コラボ

その異変に気づいたのはまったくの偶然。

緊急を要する特異点もなく。

サーヴァントたちも自由に過ごしている中、エドワード・テイチ、刑部姫、アーチャー・インフェルノはゲーム大会をおこなっていた。

「デュフフフ。拙者のゼロサムスタンが最強なのですぞ！」

「なにおう！姫のピチューの素早さに翻弄されるがいい！」

「ふふふ。では、お2人が争っている間に私のファルコンが漁夫の利を得るとしましよ
う」

3人がプレイしていたのは有名な対戦ゲーム。

3人はキャラクターを互いに吹き飛ばし、吹き飛ばされて楽しんでいた。

「おや？このキャラクターが消えているのですが……」

「え？あ、本当だ」

「ここにいたのはたしか、マリオでしたかな？」

違うキャラクターを選んでいるときに、キャラクターの1人が完全に消えていることに気づく。

3人がゲームの以上に気づいたとき、3人のマスターがちょうど部屋に入ってきた。

「あれ、どうかしたの？」

「あ、マーちゃん」

「じつはバグが起きてしまったようで」

「マリオの姿が消えてしまったのですぞ！」

「そうなの？……うわっ?!」

対戦をせずに画面を見ている3人の様子にマスターは首をかしげながら画面を見る。

マスターが画面を見た瞬間、4人の視界を光が包み込んだ。

「う、ううん……」

『先輩！大丈夫ですか先輩！』

契約しているサーヴァントの1人、マッシュ・キリエライトの通信により、マスターは意識を取り戻す。

目を開けて最初に見えたのは明らかに室内ではない景色。

近くにはティーチ、刑部姫、インフェルノの3人も倒れている。

「ハ、ハハハ……」

『よかった。意識を取り戻しましたね。先輩がいきなりレイシフトされたので驚きまし

たよ』

「ぬうう．．．．．、いまの光はなんだったんですかな．．．．．?」

「目、目がチカチカしたよう．．．．．」

「なんとも面妖な．．．．．」

マスターがマシユと話をしていると倒れていた3人も起き出ししてきた。

「えっと、よく分からないんだけど。姫たちはレイシフトしちゃったってこと?」

「みたいですねあ．．．．．」

「とりあえずは周囲の探索をしてみましよう」

意識を取り戻した3人をつれて周囲の探索を始める。

探索を始めてしばらくして、4人は驚くべきものを見つけた。

「ブロック?」

「あれは．．．．．もしかしてクリボーですか?」

「えっ?!というか、コインも浮かんでない?!」

「もしや、(´・ω・´)は………」

「「「マリオの世界?!」」」

強制的なレイシフトによってつれてこられたのはマリオの消えたマリオの世界。

ティーチの船。

刑部姫の飛行。

インフェルノの弓。

3人の能力を駆使してキノコランドを駆け回れ!

マリオは消えていてもクッパは消えていない。

なぜマリオは消えたのか。

なぜキノコランドに呼ばれたのか。

その真相に迫っていけ!

「頼む、力を貸してくれ……」

「マリオは他の誰にも知られてなくていい……」

FATE／SUPER | MARI | ORDER

異質特異点S

崩滅茸国戦記 キノコ王国

2109年2月29日 レイシフトスタート…

本編

第1話

夜も更け、誰もが眠っているであろう時間。

月には雲が掛かり、目を凝らさなければ周囲の様子を伺うのにも少し苦勞するだろう。

虫の鳴き声の聞こえる森の中、少し開けた場所にその家があった。

赤い屋根のシンブルな家。

そして家の近くには緑色の大きな土管が地面から突き出している。

この赤い屋根の家がマリオの住んでいる家だった。

そのマリオの家の扉を開け、1人の人影が中へと入っていった。

「・・・・・・・・きろ。・・・・・・・・オ」

「起き・・・・・・・・。マリ・・・・・・・・」

ユサユサと身体を揺らす衝撃と、誰かの呼び声にマリオはふと目を覚ます。

時間も遅く、薄暗い部屋の中に誰かの人影が見えた。

その姿は細く、おそらくは女性であると、ボンヤリした頭でも理解できる。

「ううん・・・・・・・・。こんな夜中に誰だい・・・・・・・・？」

「ようやく起きたか。まったく、ワガハイが呼んだのだからさっさと起きぬか」

人影へと向けて話しかけると、人影は自分の腰に手を当ててやれやれといった風に答えた。

人影が発した声から女性であると確信はしたが、こんなしゃべり方をする女性の知り合いはいないなあ、と考えながらマリオは目を凝らす。

薄暗い闇の中で見えたのは、頭上に乗っかっている冠となにやら特徴的な髪型、そして何かトゲトゲとした物を背負っていることだけだった。

「君はいつたい……」

「なんだ、貴様でもワガハイのことが分からぬのか……。ここに来るまでの部下たちも分からなかったからな……」

マリオオの言葉に人影は寂しそうに答える。

不意に、月にかかっていた雲が消え、部屋の中へ月明かりが射し込む。

差し込んだ月明かりの中、人影の姿がはつきりと浮かび上がってきた。

「貴様のライバルであるこのワガハイが分からぬとはな……。ま、この姿では仕方がない、か」

「まさか……。クツパなのか……?!」

特徴的な髪型だと思っていた美しい金色の髪の毛の中に存在する2対の角。

首や腕に着いたトゲ付きの黒いリング。

そして、今までに何度も見てきた忘れようにも忘れられないそのトゲ甲羅。見間違えるはずのない自身のライバルの特徴がそこにはあった。しかし、それでもマリオは驚きを隠せない。
なぜならば……

「なんで……」

「うん？」

「なんで、女性になっているんだ?!?!」

目の前で腰に手を当てながら自身の姿を見つめるその姿はどう見ても女性のすがた
だったのだから・・・

第2話

家の明かりをつけ、マリオは改めてクツパの姿に驚く。

キラキラときらめく美しい金色の髪の毛。

つり目がちなながらも大きくパツチリとした目。

やや太めな眉に、人よりは尖っている歯。

その全てが組み合わさって、とても美しいのだ。

あまりの衝撃に完全に目が覚めたマリオは、クツパを椅子に座るように促した。

「ま、まあ、とりあえずその椅子にでも座ってくれ」

「うむ」

クツパと向き合うようにテーブルの反対側へと座り、改めてマリオは考える。
なぜ、クツパの姿が女性になっているのか。

なぜ、城に帰らずに自分のところに来たのか。

こちらをジッと見てくるクツパに、マリオは慣れない気恥ずかしさを感じていた。クツパが普段の姿であるのならばこんな思いは全くないだろう。

「それで、どうしてそんな姿になってしまったんだい？」

「……そうだな。簡単に言ってしまうえば、ピーチ姫を拐いにキノコ城に侵入して失敗をした。それだけのことよ」

マリオの問いに、クツパは悪びれることなくピーチ姫を拐いに行つたことを話した。

いつものことと言えばいつものことなのだが、どうにもクツパの様子に違和感を感じたマリオは話の続きを促す。

「失敗したって……。それにしたって姿が変わってしまったのは何故なんだい？」

「それについてはワガハイも分からぬのだが、一つ心当たりはある……。壺だ」

「壺？」

マリオの頭の中にカラカラ砂漠に置いてあった茶色の壺が思い浮かんだ。しかし、壺とクツパの姿にどんな関係があるのかはさっぱり分からない。

「今回、ワガハイは地中からキノコ城に侵入しようとして地下を掘っていたのだ。すると途中で不思議な模様の蓋付きの壺が埋まっているのを見つけてな。一先ずはキノコ城に侵入してから中を見てみようと思つて横に置いて掘り進めていったのだ」

「お前は毎回いろいろな手でピーチ姫を拐いに来るもんな」

「まあな。それで、キノコ城の敷地内にまで穴が開通したから壺を開けようとしたのだが、蓋が固くて思わず割つてしまったのだ。すると中から煙が出てきて、気がついたらこの姿に、な」

自身の手を見ながらクツパは寂しげに言う。

よく見ればその手は軽く震えていることが分かった。

「だが、お前なら自力で戻れるんじゃないのか？ それ以外にもカメツクに頼むとか」「戻ろうとは………したさ。だがな、何度やっても戻らぬのだよ。それに、ワガハイのクラウンも元のワガハイの姿でなければ動かないようにセキユリティがあるから

な」

クツパの言うクラウンとは、ピエロの顔のような模様のついたプロペラで飛ぶ乗り物のことだ。

いくつか量産はされているのだが、クツパ専用のクラウンにはクツパの姿を登録してあり、それ以外の者が乗っても起動しないのだ。

「それに、この姿では今までのように動くことすら出来ぬからな……」
「クツパ……」

そこでマリオはようやく気づく。

クツパの姿がどことなくボロボロであることに。

一見すれば綺麗に見えるのだが、よく見れば乾いた土汚れ等が着いているのだ。

さらに言えばクツパは靴も何も履いておらず、その足は痛ましさを感ずるほどに傷が見えた。

「さて、夜遅くにすまなかつたな。ワガハイはもう行く」

「は？行くつてどっにきゃー。」

マリオが傷を見つけたことに気づいたのか、クッパは足を隠すように立ち上がる。

気を付けてクッパの様子を見れば、その体がフラフラと小さく揺れていることも分かった。

「もともと貴様とワガハイは敵同士だったのだ。気にすることはあるまいよ」

そう言つて、クッパは玄関の扉へと手を伸ばす。

その背中はとても小さく見え、今まで戦つてきたライバルの姿とはとても思えなかつた。

気がつけば、マリオはクッパの手を掴み、強く握りしめていた。

「なんだ、まだ何かあつたか。それともこの姿のワガハイと戦うか？それもまた良からう。今のワガハイなら簡単に死ぬであろう。さあ——」

「家に住め」

「——戦お．．．．．なに？」

「家に住め、と言った」

マリオの言葉にクツパは呆けたように口を開ける。

あまりにも突拍子のない言葉。

しかし、マリオの瞳からは冗談を言っているような光は一切なく。

ただただ真っ直ぐとクツパのことを見つめていた。

「は、ははは．．．．．なんだ、よもやワガハイの体が目的か？それならばハツキリと言ったら——」

「俺がそんな目的や、冗談で言ってると思うか？」
「ぐ……」

笑い飛ばそうとしたクツパの目を見つめ、マリオは強く言う。
真剣なマリオの言葉にクツパは何も言えなくなってしまった。

「俺とお前はずいぶんと戦ったさ。だがな、だからこそお互いに相手のことが分かるだろう？ お前は確かにピーチ姫を拐ったりした。だが、俺と一緒に戦ってくれたりもしたじゃないか」

「そ、それはお互いに利害が一致しただけに過ぎん……」

過去の戦いが2人の頭の中で思い出されていく。

時にはピーチ姫を拐い、それを助け出しに戦い。

時には2人で協力して強大な敵を倒し。

「それでもお前は俺を助けてくれたことが何回もあるだろ？ だから、今度は俺がお前を助けるのさ」

「な．．．ぜ．．．。何故、そんなに優しくしてくれるのだ．．．．．」

気づけばクツパの瞳からは大きな涙がポロポロと零れ落ちていた。

そんなクツパの問いに、マリオは笑いかけながら答える。

「何だかんだあつても、お前と戦うのは楽しいからさ。だからな、俺はお前のことは嫌いにはなれないんだよ」

マリオの言葉にクツパの緊張の糸がほどけたのか、カクンとその体からは力が抜け、その意識を落としていった。

クツパの体を咄嗟に抱き止め、マリオは自分のベッドへとクツパを寝かせる。

そしてマリオはソファの上へ横になり寝息をたて始めた。

「ありが．．．とう．．．」

強がりて寂しがり屋な、そんなライバルの言葉を微睡みの中に聞きながら。

第3話

朝、どこか嗅ぎ慣れた、安心のできる香りを嗅ぎながらクツパは目を覚ました。起きたばかりでまだ頭がハッキリとしていないのか、ボーつとした表情で部屋の中を眺める。

「(イイ)は………マリ……オ………?………ツツ………!!!」

ソファに眠る一人の男の姿を確認し、クツパは眠る前にあつたことを思い出す。

元の姿に戻れずに不安になり、ライバルであるマリオのもとへ来てしまったこと。

こんな姿になつてしまったことを疑うことなく信じてくれたこと。

何度も戦つてきた敵同士だったはずなのに優しく受け入れてくれたこと。

その全てがとても恥ずかしく、しかし、どこか嬉しくも感じていた。

クツパは気づいていないが、その表情は赤くなりながらもややニヤけていたのだっ

た。

枕に頭を押し付けながら、バフバフと布団を叩いていると、マリオが小さく声をあげたことに気づく。

「んう………」

「ッ!!」

その声を聞き、クツパは思わず動きを止める。

しかし、マリオに起きる気配はなく、再び寝息をたて始めた。

マリオが起きてこなかったことにクツパはホツと息を吐き、自分がマリオの布団の枕に頭を押し付けていたことに気づく。

今までであれば気にもしていなかったが、昨日のような自身のことを考えてくれている言葉を聞いてしまったはどこか落ち着かない。

クツパは素早く布団から降りると、落ち着かなさを誤魔化すようにマリオの家の中を探索することに決めた。

「ここは、台所か。冷蔵庫の中も少ないではないか」

最初に着いたのは台所。

男の独り暮らしと言うこともあり、冷蔵庫の中にはそれほど多くの食材は入っていない。

「こっちは……、書庫か。意外だな、こんなにも本を持っているとは」

次に着いたのは書庫。

と言っても大きなものではなく、物置部屋サイズの部屋に本棚が2つある程度だ。

棚には配管の整備の仕方や、今までに行った国などの情報。

そしてさまざまな写真の挟まれたアルバムが入っていた。

「それで、ここは洗面所と浴室か。ふむ……」

最後に着いたのは洗面所。

そしてさらに向こうの扉の先には浴室がある。

そこでクツパは、自分が昨日から体を洗っておらず、汚れていることを思い出す。

今までの姿であればそこまで気にも留めていなかったのだが、何故かこの姿になってからとても気になってしまう。

さらに言えば、マリオの家に着くまでに結構な汗をかいてもいた。

自分の汗の臭いがマリオに嗅がれていたのではないかと思うと、どうにもそのままではいられない。

そう思い立つと、クツパは近くにまとめてあったタオルから1枚を掴み、浴室の中へと入っていった。

第4話

クツパが浴室の中へと入ってから数分後、ようやく家主であるマリオは目を覚ました。

昨日のことがあったので、目を覚ますとすぐにベッドへと目を向ける。

しかしそこには寝ていたはずのクツパの姿はない。

「クツパ?!」

慌ててマリオはソファの上から飛び降り、すぐに家の中を探し回る。

台所、書庫（物置部屋も兼用）、トイレ、扉をどんどん開けて中を確認していく。

そして洗面所の扉を開けた時、浴室の方から水の流れる音が聞こえてきた。

「なんだ……ここにいたのか」

浴室から僅かに聞こえてくる声から、中にクツパがいると分かり、マリオはホッと息を吐く。

起きてからクツパの姿がなくて心配だったが、まだ家にいてくれたことにマリオは安心した。

安心したマリオは洗面所にいるついでに顔も洗ってしまおうと水道を捻り水を出す。

冷たい水が顔を冷やし、頭の中をスツキリとさせていく。

不意に、マリオの耳にガチャリ——という音が聞こえた。

それと同時に短く息を吸う音も聞こえる。

「な、きさ——?! マリ——?!」

「待った! 待って! 待ってください?!?!」

浴室の方から聞こえてくる言葉に対して、咄嗟に顔を反対方向に向けながらマリオは叫ぶ。

どう考えても状況は最悪であり、絶対にクツパの方を見てはいけないと自身に言い聞かせる。

そのままマリオは近くにかけていたタオルを手に取ると、顔に当てながら洗面所から出るのだった。

「あゝゝ．．．．．マジでビックリした．．．．．」

洗面所から出たマリオはシットリと濡れる前髪をタオルで拭きながら息を吐く。先程のクツパを探している時とは違った意味でマリオの心臓はバクバクとしていた。

一方でマリオが慌てて洗面所から出たのを見たクツパの頭の中はグルグルと混乱をしていた。

何故、自分が出るタイミングで洗面所にいるのか。

やはり自分の体に興味があったのか。

そんな、マリオに裏切られたかのような感情があった。

しかし、そんな感情とはまた別に、どこか違った感情があるのも事実だった。

どうしてこつちを見向きもしなかったのか。

自分の体は見る気も湧かなかったのか。

と言う、怒りのような、寂しさのような、よく分からない感情が。

「あ……………ふ、服を……………」

ハッキリとしない頭の中、とりあえずは服を着ようと動き始める。
そこでクツパはふと気づく。

「新しい服が……………ない……………?!」

自分が先程まで着ていた服は汚れていて、綺麗になつた体で着るのには抵抗がある。
しかし、自分には他に着れるような服はない。
その事実にくツパは呆然としてしまった。

「お、おーい……………。今、大丈夫か?」

「な、にや、にやんだ!」

洗面所の扉の向こうから不意に声をかけられ、クツパは噛みながら返事をする。
どちらの声にもどこかぎこちなさを感じ取れた。

「いや、シャワーを浴びたりしたんなら着替えが無いんじゃないかと思つてな……。」
俺の服でよければ貸せるんだが……。」

「そ、そうか！な、ならそこに置いておくのだ！ワガハイが自分で取るからな！入つてこなくてよいからな！」

マリオの言葉にクツパは自分が何故こうも慌てているのか分からないまま答えた。

元の姿であれば、共に風呂に入ったりもできただろう。

クツパはまだ気づかない。

その慌てた感情が、特別なものではないことに。

その感情が、男性であれば女性に、女性であれば男性に抱くものであることに。

その感情が、自分がマリオを異性だと認識し始めていることだという事実には。

第5話

洗面所でのドツキリとした邂逅から数分後。

やや気まずかった空気をなんとか入れ換え、2人はそれぞれ行動を始める。

マリオは台所で朝食の準備を、クツパはマリオから借りた服を着て椅子に座っていた。

服を借りたと言つてもマリオの身長はそこまで大きいものではなかったため、借りているのはジャージなのだ。

それでもクツパがマリオの服を着ると、少しキツそうである。

具体的に言うなら、伸縮するジャージのはずなのに腹部が隠れておらず、可愛らしいおへそがチラリと覗いているのだ。

また、最初に着ていた服では気づかなかつたが、お尻の少し上の部分に、元の姿の時の尻尾も生えていたため、お尻の部分ギリギリまでしかズボンの方は履けていない。

さらに追加で言うとお尻が目に分かるほどのサイズなため、フアスナーを一番上まで

上げられておらず、胸元が見えてしまっている。

ついでに1つ、ある情報も出しておこう。

マリオの家には、当然ながら女性物の下着はない。

そして、クツパは朝のシャワーの際に下着などを洗濯に出してしまっている。

これだけ言えば、後は分かるだろう。

「これはどうにかならぬのか……」

クツパ自身もお腹や胸元が見えていることに恥ずかしさを感じているのか、ジャージの前の部分をなるべく押さえ込むようにしている。

と言っても、前を隠したら前を隠したで背中側の方が見えてしまっているのだが。

「はい、おまちどうさま。とりあえずトーストと目玉焼きだ」

「む、すまぬな」

台所から戻ってきたマリオはクツパの前と自分の前に皿を置く。

皿の上にはほどよく焼けた目玉焼きと、焦げ目がついてバターに乗ったトーストが乗せられていた。

「男の料理なんだ。あまり期待はするなよ？」

「ふん。こちらが住まわせてもらう身だ、贅沢など言わぬさ」

「いただきます」

マリオの言葉にクツパは短く鼻を鳴らして、ニヤリと小さく笑みを浮かべる。そして手を合わせ、2人は食事を始める……はずが――

トーストを取るために服から手を離れたクツパの胸が、たゆんつと揺れる。

その光景が目に入ってしまったマリオは思わず、テーブルへ頭を打ちつけてしまった。

マリオは頭の中で、あれはクツパなんだ、と必死に何度も言い聞かせる。

「ど、どうした?!」

「なんでもない………。なんでもないから、気にしないでくれ……。」

耳まで赤くなった顔を見られぬように、マリオは驚くクツパへと答える。

顔を上げずに、打ちつけた部分とは違う場所から流れる赤い液体を隠しながら。

第6話

いろいろとゴタつきながらも朝食を終え、2人は食後のコーヒーを飲んでいた。

「さて、と」

「む?どこかへ出かけるのか?」

飲み終えたコップを台所で水に浸けてから、マリオはトレードマークである赤い帽子をかぶった。

その姿を見たクツパは自分もついていこうかと思つて立ち上がる。

しかし、自分が今マリオから借りたサイズの合わないジャージ姿であることを思いだし、すぐさま椅子へと座りなおした。

流石にこんなジャージ姿では出かけられないと考えたらしい。

「まあな。お前の靴とか替えの服とかも必要だろ。サイズは分からないからちよつと危ないかもしれないけど……」

「ふむ……少し待つのだ……」

クツパは顎に手を当て、少し考えたと立ち上がって浴室の方へと歩いていく。そして数分後、1枚の折り畳まれた紙を持ってクツパは戻ってきた。

「これは？」

「気にするな！この紙を店のやつに見せれば済むのだ！」

マリオの言葉に、クツパは少し顔を赤くしながら答える。語気は少し荒く、どこか恥ずかしそうに感じる。

「よいか?!絶対に貴様はその紙を見るなよ?!」

「わ、分かったよ……」

あまりの剣幕に圧され、マリオは冷や汗を流す。

しかし、それと同時に紙に何が書いてあるのか気になってしまう。

「もしも……」

く。マリオが紙の中身に興味が湧いたことに気づいたのか、クツパはやや低めの声音で眩

「もしも、紙の中身を見たら……。ワガハイはボロボロの服を着て、ピーチ姫の前で「マリオに襲われた！」と大声で叫ぶからな……」

「分かった！絶対に見ない！」

クツパの雰囲気から、その言葉が冗談ではないと理解し、マリオは叫ぶように返事をする。

マリオも一時の興味で社会的に死にたくはないのだから当たり前だが。

「じゃあ、ちよつと出かけてくるな。家の中の物は好きにして構わないから」

「分かったのだ。ああ、冷蔵庫の中があまり入っておらぬからな、食料も頼む」

どこか夫婦のようなやり取りをしているが、2人にそのような意識は全くない。

そして、マリオは軽く手を振りながら買い物に向かった。

笑みを浮かべながらそれを見守るクツパ。

もしも、ここにルイージなりヨッシーなりがいれば、夫婦みたいだと言っていたらう。

「さて、とりあえずは食器でも洗っておくか。住まわせてもらっているのだからこれくらいはせねばな」

そう呟きながらクツパは台所へと移動する。

先程のやり取りに何かを感じたのか、無意識に尻尾を揺らしながら。

第7話

自宅から出てキノコタウンへと向かうマリオ。
その途中、1匹のクリボーが現れた。

「あつ、マリオっ！」

「ん、クリボーか」

クリボーはマリオに気づくと近づいてきた。

その様子はどこか落ち着きがないように見える。

「クツパ様が帰ってきてないんだよ。何か知らないか？」

「……………いや、ちよつと分からないな」

クリボーの問いにマリオは後ろめたさを感じながら答える。

本当は、自分の家にクツパがいる。

しかし、クツパがあのような姿では信じてもらうことも難しいだろう。

だからこそ、マリオはクツパがどこにいるか分からないと答えたのだ。

「そっかー。じゃあ、クツパ様を見かけたら教えてくれよな。皆も心配してるからさ」
「ああ、分かったよ」

そう言つてクリボーは去つていった。

去つていくクリボーを見ながらマリオは思う。

彼らのためにもクツパが元の姿に戻る方法を探すべきではないのか、と。

正直に言つてしまえば、今の姿のクツパと暮らしていけるなら暮らしていきたい。

しかし、クツパの配下の者たちのことを考えると自分の気持ちだけで彼らを不安にさせても良いのか、と。

複雑な思いを胸に抱きながらマリオはキノコタウンへと改めて向かつていった。

一方その頃、クツパはマリオの家で考えていた。

「どうしたものか……」

朝食で使った食器も洗い終わり、クツパは洗面所にいた。

クツパの目の前には洗濯の終わった自分の服があった。

干せば良いのでは？と思うだろうが、今のクツパにはそのような考えが一切湧いてこない。

自分の服だけならば干せるのだが、下着を干して、それをマリオに見られると考えると、とても干す勇気が湧かなかったのだ。

「……仕方がない。浴室に干して、乾くまでマリオを入れぬようにしよう。換気扇も回しておけば大丈夫であろう」

妥協案の結果、家主であるマリオが浴室をしばらく使えなくなつたが、問題なしとクツパは頷く。

続いてクツパは自分が寝ていた布団の前に行く。

と、ここで今朝のことが頭をよぎった。

そういえば、起きるときに安心した香りは何だったのか。

自分が寝ていたのはマリオの布団。

であるならば、起きるときに嗅いだ香りは――

「――ツツ~~~~!!」

ポフンツと言う音がクツパの頭から聞こえた気がした。

思わずクツパは頭を抱えてしやがみこむ。

その際に背中とお尻が出てしまったのだが、その事を気にする余裕はない。

「くつ………。これは………。マリオに知られるわけには……。」

顔の赤みが引かぬまま、クツパはどうにか立ち上がる。

その際に、出てしまった背中とお尻を戻すのを忘れてはいない。

「とりあえずはこの布団は干して、ワガハイの匂いをなんとかなくさねば……。」

そう言つてクツパは布団を抱えて外に運んでいく。

外の物干し竿にはすでにマリオとクツパの服が並んで干してあるが、布団を干すだけの余裕はまだある。

「天気は良さそうだから。ちょうど良かったのだ」

雲も少なく、差し込んでくる日の光りにクツパは気持ち良さそうに目を細める。

完全にクツパがマリオの妻のような行動をしているが、当人は気づいていないし、気にしてはいけない。

第8話

モヤモヤとした感情のまま、マリオはキノコタウンへと到着した。

キノコタウンは活気に溢れており、主婦たちが集まって井戸端会議をしたり、子供たちが遊んだりしていた。

「あ、マリオだ」

「おはよー!」

「ジャンプ見せて、ジャンプー!」

遊んでいた子供たちが集まり口々に話しかけてくる。

子供たちの言葉に、1つ良いところを見せようと思ったマリオは、子供たちに周りから離れるように言う。

「それじゃ行くぞ！セーのっ！イヤッフーッッ！」

「すげー！」

「僕たちの頭よりも高くジャンプしてる！」

掛け声とともに高く跳び上がったマリオの姿に、子供たちはとても楽しそうに拍手をする。

そんな子供たちの姿を見て、マリオは満足そうに頷き、買い物へと向かった。

「えーと、最初はクツパの服とかからかな」

そう呟きながらマリオはキノコタウンの服飾店、「キノクロ」へと入っていった。

「いらっしやいませ〜。あらま、マリオさんじゃないですか。どんなものをお探しですか？洋服、帽子、ベルトに靴、さまざまなものを取り揃えておりますよ。今日のご自分で着るものを？それとも誰かへの贈り物とか？この店はキノコタウンを自称していますのでご要望に答えられると思いますよ！」

「ええと、この紙を見てもらえれば分かるかと……」

入店と同時にグイグイと来る店員に少し圧されながら、マリオはクツパから渡された紙を手渡す。

不思議そうに紙を受け取った店員だが、紙の中身を見た瞬間、とても嬉しそうな雰囲気を持ち始めた。

「あらあらまあまあ。分かりました。分かりましたよ！大丈夫、私にお任せくださいな。すぐにここに書かれた商品をご用意いたしますね！」

「あ、ああ。よろしくお願いします……」

そう言っただけで店員は店の中を走っているかのようなスピードで動き回り始めた。

あくまで、走っているかのような、であり、歩いてそのスピードを出しているのである。

そんな店員にマリオは驚きつつ、紙に何が書いてあったのかが再び気になってしまった。

と言っただけで紙はすでに店員の手の中にあり、確認はできないのだが。

「さて、これで書いてあったものは全部ですよ。いやいや、それにしてもスミにおけませんね。ピーチ姫とくつつかないのかなく。なんて思っていたら、こんなものを買ってあげる相手がいたなんて！しかもスタイルも抜群で、字から見た感じとても可愛らしいかたのようで！」

「え？は？」

店員の言葉にマリオは頭上にハテナマークをいくつも浮かべる。

しかし、買い物が終わっているので、店員に荷物を渡されるとグイグイと店の外へと出されてしまった。

「ほらほら、早く帰ってそれを渡してあげてくださいな。きつと喜んでくれますから。あ、そうそうピーチ姫には私からは言わないでおきますね。こちら辺のプライベートルーム話は私たちのようなものより当人たちで話し合うべきだと思いますので。ではでは！」

「ちよ、ま……………えええ……………」

何がなんなのかさっぱり分からない。

それに結局、紙の中身を知ることはできなかつた。

その2つの事実にマリオはがつくりと頭を落とすのだった。

それでも、へこんでいても何もならないので、マリオは頭を切り替えて食料品を買いに向かうのだった。

第9話

「キノクロ」での買い物を終え、次にマリオが着いたのはさまざまな食料品の店が並ぶ商店街、「キノコモール」。

ここにはいくつもの店があり、キノコタウンの住人が買い物をする主要地だ。

また、ときおり変装をした（つもりの）ピーチ姫が出没することでも有名である。
なぜピーチ姫だと分かるか？

マスクとサングラスだけで服装が変わらないものを果たしてなんと呼べば良いのだろうか？

「いらつしやい、いらつしやい！今日は良い肉があるよ！」

「こつちも美味しい野菜が入ってるよ！」

「ほーら、この魚を見てよ。こんなにピチピチと跳ねてるよ！」

商店街特有の声飛び交い、買い物をしている住人たちもとても満足そうだ。

「おう、マリオじゃないか！良い肉があるよ。買ってくかい？」

「うん。じゃあ、貰おうかな。あ、量はいつもの倍で頼めるかな」

「うん？・・・つか！何だい何だい！そーゆーことか！」

肉屋の店主に食料品の量をいつもより増やすように頼むと、店主は少し不思議そうにマリオを見る。

まあ、普段であれば一人分の量しか買わないのに、いきなり量が倍になれば不思議にも思うだろう。

しかし、マリオの持つ「キノクロ」の袋を見るとすぐに何かを察したようで商店街の真ん中の方へと走っていった。

「おおーい！！マリオが誰かと暮らすそうだ！お祝いの品を出してやろうぜ！盛大になー！」

肉屋の店主の言葉が響き渡り、一瞬商店街の中から音が消える。

直後、商店街の中の店から店主や店員が身を乗り出して叫んだ。

「「何だつてええええええつ?!?!」」

「うわあ?!」

あまりの声の大きさにマリオは思わず耳を塞ぐ。

そして耳から手を離すと、何やら地響きのような音が聞こえてきた。

「マリオー！うちの野菜を持っていきな！ニンジン、ダイコン、ジャガイモ、タマネギ、他にも色々包んでやらあ！」

「おうおう、うちの魚も忘れるなよ！マグロ、タコ、イカ、サーモン、おまけにおまけでウニなんかもつけてやるよ！」

「ほらほら、今まで独り暮らしだったんだからお相手の食器なんかも足りてないんじゃない？うちの店からも箸にスプーンにフォーク、夫婦茶碗も良いかしら！」

「おつといけねえ！うちからも肉だ！もも、ヒレ、バラ、ブロックに鶏肉だ！それにしてもめでたい！」

地響きの正体は商品をもった商店街の店主や店員たちだった。

あまりにも興奮しており、マリオの周りにどんと商品が置かれていく。

「おっと、そう言えば。マリオは独り暮らしだったからベッドも1つしかなかったよな。俺たちで頼んどくか！」

「こらこら、およしよ。もしかしたら1つで足りているかもしれないじゃないか」

「お？はっはっは、それもそうか！」

マリオにお祝いの言葉をかけ終わると、店主や店員たちはそれぞれの店へと帰っていく。

あまりにも広まってしまった勘違いにマリオは頭を抱える。

しかし、それと同時に自分とクッパがそういう風な間柄に思われていることに悪い気はしないのだった。

第10話

買い物を終え、家に帰ろうとしたマリオの耳に主婦たちの話し声が届く。

「聞いた？昨日の夕方からお城の方で変なものが現れるんですって」

「あ、私も聞いたわ。なんでも、それを見かけた人は口や態度が悪くなっちゃうんだっけ」

「へえ、そんなものがあるのねえ」

怖いわねー、なんて言いながら主婦たちは歩いていく。

主婦たちの会話で気になったことのあるマリオは少しだけ考える。

お城の方で現れる変なものとはいったい何なのか。

遭遇すると口や態度が悪くなるとはどういうことなのか。

調べに行ってみようかと考えたが、今のマリオは大量の荷物を持っている状態。

調査をするにしてもあまりにも大荷物過ぎる。

後日ちゃんと調べようと心に決め、マリオは帰路についた。

一方その頃、クツパはマリオの家でできる一通りのことが終わり、シートを地面に敷いて太陽の光を浴びていた。

「暖かい……………。ふわあ……………」

元の姿からは想像のできないほどに可愛らしいあくびをしながら、クツパは暖かな気温に目を細める。

今までこのようなゆっくりとした時間はあまり経験がなく。

仮にゆっくりできるとしてもピーチ姫を拐う計画を考えていた。

だからこそ、今のこんな平穏な時間がクツパにはとても楽しく感じ取れたのだ。

「むにゆ……………」

目を閉じ、体は軽く揺れ、口からは言葉にならない音が漏れる。

もはやクツパの意識は半ば眠ってしまった。
やがて、ゆつくりとシートの上で体を横にしていく。

「すう．．．すう．．．」

小さな寝息をたて、クツパは夢の世界へと旅立っていった。

そのあまりに無防備な姿は、もしも男が見たら襲いたくなるほどに可愛らしく。

サイズの合わないジャージも捲れてしまって、背中やお尻などが少しだけ見えてしまっていた。

「ただい．．．まッ．．．!」

そして、それをちょうど帰宅したマリオは見てしまう。

あまりにも無防備、あまりにも可愛らしい。

そんなクツパの姿をいつまでも見ていたい、そんな欲求がマリオの中で生まれる。

しかし、マリオは全力で理性を総動員してクツパから目を逸らす。

それでもチラチラと目が行ってしまうのはマリオも男だから、と言うことで勘弁をし

てほしい。

「とりあえず、荷物を中に入れよう……」

後ろ髪を引かれながらマリオは荷物を家の中へと運ぶ。

肉や魚と言った生物は冷蔵庫に、野菜は野菜室に、そして食器類は洗うために流しへと置いていく。

クツパの服などはどこへ置いたら良いかが分からなかったので、玄関横に置いておくことにした。

「……落ち着くために顔でも洗うか」

先程のクツパの姿が頭から離れず、どうにも落ち着かない。

ここでうっかりとシャワーを浴びに行こうものなら更なる衝撃でマリオの理性は危なかったに違いない。

ある意味では素晴らしい回避なのだが、マリオからするとなんとも惜しいことをしたとでも言っておくべきなのだろうか……

第11話

顔を洗い、少しばかり落ち着いたマリオは、家の中が綺麗になっていくことに気がつく。

薄く溜まってきていた窓枠の埃や、ベッドの下の埃、更には少し前にテーブルに溢してしまった食べ物汚れまでもが見当たらないのだ。

もしや、と思いつながらマリオはクツパの寝ていた方を見る。

家の中にいるため、クツパの姿は見えないが、マリオはクツパが家の掃除をしてくれたのだろうと思つた。

「……あれ？クツパって掃除とか家事つてできるのか？」

不意にマリオは元の姿の時のクツパを思い出す。

元の姿の時、クツパは自身の軍団のトップとして君臨していた。

故に、おそらくは家事などは部下たちに任せていたのではないか。

「そう言えば、洗濯物や布団も干してあったな……」

今までのクツパとの違いにマリオは首をかしげる。

どうにも元の姿のクツパが家事をできたとは思えないのだ。

もしかしたら、女性の姿へとなったことで何か内面にも変化が起きているのではないか。

少し心配になりながらマリオは思った。

それから少し経ち、クツパは心地よい風に目を覚ます。

「くあ……。つい、眠ってしまったのだ……」

のっそりと体を起こし、クツパは背筋を伸ばす。

少しだけトロンとした目をしながらクツパは辺りを見回す。

太陽は寝る前に見た位置とは違うところにずれており、そこそこに時間が経っている

ことが分かる。

「と、そう言えばマリオが帰ってきたときに浴室に行かないように塞いでおかねばな」

そう呟くと、クツパは寝ていたシートをたたみ、玄関の扉を開ける。

「お、起きた・・・かあつつ?!?!」

「む?」

家の中に入ってきたクツパに、マリオは視線を向け、すぐさま首を正反対の方向に捻る。

そんなマリオの様子にクツパは不思議そうに首をかしげた。

「なんだ、もう帰ってきていたのだな。ああ、浴室はしばらく入るなよ」

「あ、ああ・・・」

マリオが帰ってきていたことに、少しだけ驚きはしたが、クツパはマリオに浴室へ入

らないように伝える。

クツパの言葉にマリオは耳まで赤くしながら答えた。

「どうしたのだ。何か変なものでも付いていたか？」

「違う………。クツパ……。」

「なんだ？」

クツパの問いに、マリオは決してそちらを見ずに首を振る。

マリオは少し言いづらそうに口を開いた。

「その格好を何とかしてくれ……。」

「うん？格好がどうか……。し……、なあつつつ?!?!」

マリオの指摘に、クツパは自分の体を見下ろす。

その結果、目に入ってきたのはめくられて胸のギリギリまで上がってしまった上着と、少しだけずり落ちてしまっているズボンだった。

どちらもズレてはいるが、下着は見えていない。

いや、むしろ見えていないことの方が不味いだろう。

先ほど目が覚めたときに、自身の格好に気づかず家の中に入って来たことよって、起きてしまった事態だった。

「ま……り……オ……ツツ!!」

「お、俺は悪くないだろう?!」

恥ずかしさのあまり、クツパは八つ当たり気味にマリオの名を叫ぶ。

マリオからすれば堪ったものではないのかもしれないが、世界と女性は理不尽に満ち溢れているのだ。

自分は悪くない、などと言った言い分は全く効果はない。

それから、マリオは服装を直したクツパにドタバタと家の中を追い回されるのだった。

第12話

ドタバタと家の中で起きていた追いかけっこも、マリオが捕まってポカポカと叩かれることによって終息した。

それでもクツパの顔は赤く、涙を目元に浮かべながらマリオのことをじっとりと見ている。

さらに言うなら、小さく唸るような声も聞こえてくる。

「だから、悪かったって……」

「ふんっ。それで、買ってきたのか」

マリオの謝罪にクツパは短く鼻を鳴らし、買ってきたものを確認する。

「ああ。お前の服とかはここに。食料品とかは台所にある」

「ならばよい。ワガハイの物を渡すのだ」

マリオがちゃんと買ってきたことを確認し、クツパは満足そうに頷く。

【キノクロ】の袋の中を覗き、中に入っている物を1つ1つ眺めていく。

と、ここでクツパは【キノクロ】の袋に混じって違う袋があることに気づく。

「む？この袋は……」

「え？……あ？」

無地の中の見えない白い袋から出てきたのは、子育てに必要なさまざまな道具たちだった。

おしやぶり、ガラガラ、オムツに子供用の食器類、他にもさまざまな道具。

袋から出てきた物たちにクツパとマリオは互いの顔を見、言葉を失った。

ちなみに、クツパは気づいていなかったが、袋のそこの方には精ななんと書かれた瓶もあった。

「あいつら……」

「マリオよ………。これは……どういふことなのだ………」

マリオは頭が痛い、といった様子で頭を抱え。

クツパはチラチラと子育て道具を見ながら、マリオに説明を求めた。

「買い物してたら、俺に恋人ができたつて騒ぎになつてな。色々持たされたんだ。たぶん、その中の一つだろう………」

「な……なるほどな………」

マリオの説明にクツパは言葉を詰まらせながらも納得した。

そして、何の違和感もなく、自身とマリオとの間に子供ができるイメージをする。

当然ながら「そういった行為」もイメージとして浮かびはするが、その部分はあくまでも一瞬しか浮かばない。

次第に大きくなる自身のお腹。

そのお腹へと優しく触りながら語りかけてくる旦那^{マリオ}。

さらにイメージは進み、子供はどんどんと成長していく。

赤ちゃんから少年、少年から青年、青年から父親と孫。

うしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうして
てどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてど
うしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうし
てどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうして……

あまりの衝撃に、クツパは頭がうまく働かず、気がつけば自分の肩を抱いて体を震わ
せていた。

「クツパ？」

「……なんだ」

驚きながら自分の名を呼ぶマリオに、クツパは力なく答える。

「急に涙を流してどうしたんだ？」

「涙……?」

自分が涙を流している。

その言葉をクツパは不思議そうに聞き返す。

それと同時に、自分の頬を伝って何かがこぼれ落ちていくことに気がついた。

“それは大きな雫だった。

気づいてしまえば止めることはできない。

クツパの瞳は潤み、どんどん大粒の涙をこぼしていく。

「あ……あ、あああ……」

「ちよ、ま……。町の人たちにはちゃんと説明しておくから！大丈夫だから、泣き止んでくれ！」

泣きだしてしまったクツパに戸惑い、マリオは咄嗟にあやすようにクツパを抱き締め、頭を撫でる。

マリオは頭の中で、クツパは自分と恋仲に見られることが泣くほどに嫌だったのか、と考え。

後で必ず町の人たちの誤解を解こうと思った。

涙を流し、ぐちゃぐちゃになった頭の中、クツパは感じ取る。

マリオが、自分のことを必死に考えてくれていることを。

マリオが、自分が嫌だと思ったことをやらないでくれるということ。

頭を撫でられながら、クツパはチラリとマリオの顔を見る。

その顔は焦りと動揺に染まっており、普段ではあまり見ない奇妙な表情になっていた。

そんな表情を自分が浮かべさせている。

その事実にくツパは嬉しさと申し訳なさを感じた。

「落ち着いてきたか？」

「ん……」

泣いた恥ずかしさを誤魔化すように、マリオの胸元に頭を押し付け、グリグリとしながらクツパは答える。

マリオからすれば頭に乗っている冠も引つ掛かって若干痛いのだが、何も言わない。

「町の人たちの勘違いがそんなに嫌だったか。悪かったな」

「……………嫌では、ない」

自身の行動の違和感を自覚し、おかしいと理解した。

しかし、それでもなお、クツパはマリオとの関係を勘違いされていることが、嫌ではなかった。

自分の答えた言葉が、心の中に何の衝撃もなく入り込んでくる。

マリオとの生活が、マリオとの会話が、マリオと恋仲に見られることが。

その全てが嫌ではなかった。

この気持ちの正体にクツパはようやく思い至る。

「ああ、そうか。そうなのだな．．．．．」

自覚してしまえばとても簡単なことだった。

ああ、こんなにもマリオを愛いとおしくおもってしまったているのか．．．．．

その思いがクツパの中にストーンと落ちてきた。

マリオに撫でられるのを心地よく感じながら、クツパは目を閉じる。

この自覚した思いをどのようにして育はぐんでいこうか。

この自覚した思いをどのようにしてマリオに伝えようか。

そんな、期待と不安の入り交じった思いを抱いて。

第13話

クツパが落ち着いたのを確認し、マリオはクツパから体を離す。

それに対してクツパは少しだけ力を込めて抵抗したが、すぐにその抵抗もなくなつた。

「もう、大丈夫かい？」

「あ、ああ。驚かせたな……」

顔を赤くし、チラチラとマリオの顔を見ながらクツパは答える。

その様子にマリオは、泣いたことが恥ずかしくて顔が赤いのだと思つた。

実際には、自身の気持ちをちゃんと理解して、目の前にいるマリオのことが好き過ぎ
て恥ずかしかつているのだが。

「それじゃあ、とりあえずはご飯にしようか。食料品もたくさん貰ってきたからね」
「う、うむ。今度はワガハイも手伝おう」

マリオの言葉にクツパは頷き、台所へと体を向ける。
そして、2人は協力して昼食を作っていく。

「あれ？切った野菜は？」

「む、切り忘れがあるぞ」

「って！お肉は先に炒めないと！」

「確か……、餡色になるまで炒めるのであったか？」

「簡単なサラダも必要かな」

「す、すまぬ！炊飯スイッチが入っていなかった！」

少しだけバタバタとはしたが、2人の顔には笑顔があり、とても楽しそうに料理をしていた。

そして2人で初めて作った料理が完成する。

「カレーライスとサラダの完成だな」

「なかなかうまく出来たのではないか？」

完成したカレーライスとサラダに2人は満足そうに頷く。

クツパからしてみれば、部下たちに作らせていたものの方が良いものを食べてはいただろう。

しかし、マリオと2人で作ったこの料理は今までのどんな料理よりも美味しそうに見えた。

「それじゃ、さっそく盛ろうか。ああ、クツパはこの新しい皿な」

「これも貰ってきたのか」

マリオは、料理のついでに洗っておいたクツパ用の皿とスプーンを差し出した。いきなり自分用の食器が出てくることに、クツパもあきれた表情を浮かべる。

そして、2人は自分たちの皿にカレーライスを盛り付けていった。

「じゃあ、食べようか」

「そうだな」

「いただきます」

手を合わせ、2人は昼食を食べ始める。

なお、朝の時と同じようなことを起こさないために、マリオはクツパからわずかに視線をずらして食べている。

「うん。美味しくできているね」

「そうだな。ゴロゴロとした野菜もなかなか旨いものだ」

自然と笑顔になりながら2人は食事を続けていった。

「ふう………。ごちそうさまでした」

「うむ。ワガハイも満足だ」

テーブルの上に空になった皿を置きながら、2人はお腹をさする。いつも作ってきた料理よりも美味しく、とても満足できた。

今までに部下たちに作らせていた料理よりも美味しく、とても幸せな味だった。多少の違いはあれど、2人はほとんど同じ感想を抱いていた。

「やっぱり、誰かと食べたからかな。いつもより美味しく感じたよ」
「そ、そうか！ワガハイも、同じことを思っていたぞ！」

マリオの言葉にクツパは嬉しそうに尻尾を揺らす。

ふと、マリオはクツパの口元にカレーがくっついていることに気づく。

「ははっ。クツパ、口元にカレーが付いているぞ」

「む?!、ここか?」

マリオの指摘に、クツパは顔を赤くしながらカレーを探す。

しかし、見えていないためうまくカレーを取ることができない。

「ほら、ここだよ」

「なあっ！」

笑いながらマリオはクツパの口元からカレーを拭き取る。

その瞬間、マリオの顔があまりにも近くに来たため、クツパは思わず固まってしまった。

「これで大丈夫。どうかしたかい？」

「い、いや………。ナンデモナイ。皿を洗ってきてしまうな」

顔を赤くしたクツパを不思議そうにマリオは見つめる。

そんなマリオの様子にクツパは恥ずかしくなり、マリオと自分の食器をまとめると、台所へと逃げるように向かっていった。

第14話

食器も洗い終わり、2人はのんびりとお茶を飲んでいた。

「と、そうだ」

「どうかしたのか？」

不意に、マリオは思い出した、と言った様子で呟いた。
そんなマリオにクツパは不思議そうに尋ねる。

「いや、実はキノコタウンで噂を聞いてね」

そう言ってマリオはクツパに、キノコタウンで聞いた噂を話していった。
ピーチ城で何か変なものが現れること。

それを見た人は口や態度が悪くなること。

そして、それらが昨日の夕方から起きるようになったこと。

マリオの話聞き、クツパはポツリと呟く。

「もしや、ワガハイの割った壺……か？」

「可能性がない、とは言い切れないかな」

クツパの言葉に、マリオは悩んだ表情を浮かべながら頷く。

時間帯を聞いた限りでは最も発生した時間が近く。

壺には不思議な模様があつたと聞いていた。

その壺に何かあつたと考えるには十分な要因と言えるのではないだろうか。

「だから、明日は城に行つて調査を試みようと思つてね」

「むう……」

マリオの言葉にクツパは、少しだけモヤつとした気分になる。

自分が割ってしまった壺が原因でマリオに苦勞をさせている。

迷惑をかけてすまない。

などと言った感情からではない。

クツパは、ただ単にマリオがピーチ城の人間、特にピーチ姫のことを気にかけていることが気に入らないのだ。

どこまでいっても恋する乙女の思考。

それに理屈が通じることはなく。

ただただ、自身の気持ちに忠実なだけだった。

「ワガハイも行く」

「え。でも、今のお前は戦えな——」

「行くと行きたら行く」

マリオの手を掴み、どうあっても放すつもりはない、とクッパは力を込める。

クッパの身を案じ、マリオは止めようとするが、クッパの意思は固く。

最終的にマリオが折れることとなった。

「分かった……でも、あまり危険なことはいしないでくれよ」

「分かっている。なんだったらピーチ姫と話でもしているさ」

マリオとピーチ姫の2人が会って話をする。

そう考えただけでもクッパは心の中にモヤモヤが沸き上がってくる。

だからこそ、マリオとピーチ姫が2人で会うような状況を決して作らないようにクッパは思案していく。

ただひたすらに自分の気持ちに正直に。

クツパがそんなことを考えているとは露知らず、マリオは城に現れるという変なものについて考えていく。

変なものと言うからには今までに見たことのないような見た目のだろうか。

そもそもとして見ると口や態度が悪くなると言うのはどういった風に悪くなるのか。

クツパは、壺の中からは煙が出てきたと言っていたが、その煙と変なものにはどんな関係があるのか。

现阶段で気になるのはこの辺りだろう。

「むにゃむにゃ……………」

「んっ？」

不意に、マリオは誰かの声が聞こえた気がする。

それは寝ぼけたようなどこか気の抜ける声だった。

「くあく……………」あまりにも暇だったから、つい寝ちやつてたわ。全く、封印を続けるのも楽じゃないわ……………」

「えっ？」

クツパのいる方からあくび混じりの声がハッキリと聞こえてきた。しかし、聞こえてきたのはどう聞いてもクツパの声ではない。不思議に思いながらマリオとクツパは声のしてきた方を確認した。

「どういうことかしら。どういうことかしら! どういうことかしら?!」

「な、なんなのだ?!」

「冠がしゃべった?!」

突然の事態にマリオとクツパは驚く。

何故なら、クツパの頭の上に外れずにずっと乗っていた冠が興奮したように跳び跳ねており、目のようなものが浮かび上がっていたからである。

第15話

クツパの頭から離れた冠は周囲を確認するかのようには部屋の中を飛び回る。

天井近くギリギリまで飛び上がったかと思っただけなら急降下をして床ギリギリまで降りる。

更には壁のギリギリを沿って飛び回り、窓から外の様子を見る。

そして、一通り確認が済んだのか、マリオとクツパの前に向き合うように停止した。

「き、君はいつたい？」

「どうやっても外れぬから放置していたが………喋るとは」

動きを止めた冠にマリオはおそろおそろ尋ねる。

普通の冠だと思っていたものが突然飛び回れば当然の反応だが。

「あなたたちなの！ 私たちの封印を解いてしまったのは！ どうしてくれるのよ。このままじゃ、また世界が悪に染まっていつちやうじやない！ しかも私だけしかないし！ 一緒に封印してあったアレは!? 私が抑えていないとアレは際限なく周囲を汚染するのよ！ 早く答えなさい！」

冠から発せられる怒濤の言葉にマリオとクツパは圧倒される。

「封印？」

「ええそうよ！ 私が一緒に封印されているお陰で、あの『悪意』を封じていたのよ！ なのになんで封印が解けて、私しかないのよ！ これじゃあ、世界に『悪意』が拡がってちやうじやない！」

マリオの呟きに冠は頷くように縦に揺れ、更に言葉が続ける。

冠の発した『悪意』という単語がマリオとクツパは気になった。

「すまない。封印とやらはよく分からないんだけど。君はいったい何なんだい？」

「……………、どうやら本当に知らないみたいね？」

マリオの様子に、冠はマリオとクツパが本当に封印について知らないと分かったらしい。

そうと分かると冠は、落ち着いたように動きを大人しくしていった。

「そうね。まずは私の説明からかしら。私は『悪意』を封じるためのステキでパーフェクトなクラウン！スーパークラウンよ！」

人であるならドヤ顔をしているであろう調子で冠、スーパークラウンは自身の名前を言った。

「『悪意』を封じる？」

「そもそもとして『悪意』に実体があるのか？」

スーパークラウンの言葉にクツパは疑問を抱き、尋ねる。

確かに普通であれば、悪意とは悪い意識のことで実体などはない。

そこを考えると、スーパークラウンの言葉には悪意に実体があるように聞こえる。

「あるわよ。そうね、まずは私が生まれた時代の話をしましょうか。だいぶん月も過ぎちやつてるみたいだし」

「うん。お願いできるかな」

「まあ、知っておいた方が良さそうだからな」

スーパークラウンは話始めた。

自身の生まれた時代の話を。

自身の生まれた理由を。

そして、なぜ自身が「悪意」と一緒に封印されたかを。

第16話

スーパークラウンは話始めた。

「昔、私の生まれた時代はとても発展をしていたわ。誰もが楽しく、幸せに生きていけるほどに」

「へえ。とても平和だったんだね」

「そうね。そして、その時代には2人の天才と呼ばれる科学者がいたの。彼らは国を更に発展させられないかと研究を続け、ある物を作り上げたの」

「ある物？それはなんなのだ？」

「それはね、感情をエネルギーとして運用する機械よ」

「感情をエネルギーに？」

「そんなことが可能なのか？」

「それを可能にしたから天才と呼ばれているのよ。そして、その機械を手に入れた国は、

犯罪者の感情をエネルギーとして利用することを決めたわ。犯罪者ですからどんな扱いをしても良いと思っただんでしょね」

「どこの国でも犯罪者はいるのか……」

「そしてその機械を使い始めてしばらくすると、国では不思議な事故が起こるようになったわ。人が歩いているのに信号の色が変わる。人が入ろうとした瞬間にドアがすごい勢いで閉じる。他にも幾つもあったわ」

「危険なことが起きていたのだな」

「ええ。それで、あまりにも不可解だったから彼らは独自に調べ始めたの。その結果、事故が起きているのは全て感情をエネルギーとして利用している機械だったのよ」

「新しいエネルギーを使い始めた機械が？」

「そうよ。彼らは国に機械を一時的に止めて調べるように届けを出したわ。それでも国はそれを認めなかった。新しく活用できるエネルギーがあったのだからそれを使ったかったのでしょうね。結果、事故は更に増えていった」

「事故が起きているのに調べぬとは。阿呆だな」

「誰でもわかることよね。事故が頻発するようになり、彼らはエネルギーになっている感情を調べる機械を作った。それを使って調べてみると、エネルギーになっている感情は「悪意」だったのよ。妬ましい、殺したい、奪いたい、そういった暗い感情ばかり

が使われていたの」

「まあ、もともと犯罪者のエネルギーだからおかしくはない、のかな」

「しかも調べていくと、この『悪意』は人に移っていくことが分かったのよ。事実、事故が増えるのと同時に犯罪を犯した人がゆっくりとだけが増えていたの。その事に気づいた彼らは、『悪意』をどうにかしようと研究を進めていった」

「その科学者しか調べなかつたのか……」

「そんなことが起きていると信じたくなかつたのよ。すでに起きていたというのにね。そして研究を続けていった結果、『悪意』を弱める力のある感情を見つけたの」

「『悪意』を弱める感情……」

「そう。私の起動するためのエネルギーでもある感情、『愛』よ。『愛』は『悪意』を弱め、人に移った効果も打ち消すの。と言っても、見つけたときにはもう遅く、どうか『悪意』を封じるくらいしかできなかったのだけどね。『愛』が『悪意』を弱めるように、周りに『悪意』が多くなれば、『愛』は弱くなるのよ」

「互いに弱め合うのだな？」

「あれ？でも、『悪意』はエネルギーのままなんじゃ？」

スーパークラウンの話聞き終え、マリオとクッパは尋ねる。

確かにスーパークラウンの話では「悪意」には実体は無いままのようだった。

「その説明を忘れていたわね。強まっていった「悪意」は、いつしか機械から漏れだして、スライムのような実体を得たのよ。そのあとも何回も姿を変えていったわ」

「エネルギーが強くなりすぎて実体を得たのか……」

追加された情報にマリオは驚く。

実体を持つほどに強力なエネルギーと聞けば驚いても仕方はないのだが。

「それじゃあ、昨日の夕方から起きるようになった事件は「悪意」が原因なのかもしれないな……」

「うむ。口や態度が悪くなるという点で間違いはないと思うのだ」

キノコタウンで聞いた噂と、スーパークラウンから聞いた情報が繋がる。

ピーチ城での異変は「悪意」が原因でほぼほぼ間違いはないのだろう。

「ところで、なぜ急に目が覚めたのだ？昨日からワガハイは貴様を被っていたのだ

が………」

「え？あゝ……。私、一度寝るとなかなか起きられないのよね。起動のエネルギーになる『愛』を感知すれば早く起きるんだけど。あ、そういえば起きるときにそれを――」

「わー！わー！！わー！！」

スーパークラウンが何を言うか理解したのか、クツパは素早くスーパークラウンの口の辺りを押さえて大きな声を出した。

クツパの突然の行動にマリオはキョトンとする。

「何を言おうとした?! いや、いい! 言うな!」

「恥ずかしいことではないと思うけど……。あ、でも少しだけモヤつとしてたかも? つて、きやあああああ?!!」

「――ツツ……!!」

スーパークラウンが起きてくる時に抱いていた感情を言われ、クツパは顔を赤くしながら、スーパークラウンを書庫の方へと放り投げてしまった。

「そういえば、結局クツパの姿が変わった理由が分からないなあ……」

マリオの眩きは、クツパの叫び声にかき消され、誰の耳にも届くことはなかった。

第17話

スーパークラウンから話を聞いた翌日。

前日の時点で、話を終えたスーパークラウンは速く行け、と急かしてきたが、クツパの姿などを理由に今日に変えてもらうことができた。

「それじゃあ、早く行くわよ！ さっさと封印してしまわないと！」

「ま、ワガハイも自分でやった尻拭いくらいはな」

急かすスーパークラウンを頭に乗せ、クツパも家を出発する準備を終える。

クツパの姿はへそ出しのチューブトップに真つ赤なレザージャケットとホットパンツと言った動きやすそうではあるが、露出の高いものとなっている。

マリオの服装が赤いこともあって似たようなカラーリングになっていることに他意はない、はずだ。

「それじゃ、行こうか」

「ええ！」

「うむ」

そして、3人? 2人と1つは家を出てキノコタウンへと向かった。

キノコタウンへ着くと、町の様子が昨日より少しだけ暗いように感じる。外を歩いている人も少なく、店もほとんどが閉まっていた。

「昨日はあんなに人がいたのに」

「『悪意』が拡まつてるのよ。空気も悪いわ」

「ここまで暗いのも見たことがないな」

昨日は集まってきた子供の姿も、噂話をしていた主婦の姿もない。

そんな町の様子を見て、マリオたちは早く城に向かうことを改めて決意した。

「城まで続く道はこつちだな」

「真正面から向かうなど久々なのだ」

「あなた、いったい何をしていたのよ」

クツパの言葉にスーパークラウンは呆れたように言う。

まあ、知らない人からすればどう言うことなのかと聞きたくはなるだろう。

会話をしながらピーチ城へと向かう途中、不意に大きな音が聞こえてくる。

「なんなのだ?!」

「見て！城が！」

音のした方を見ると、ピーチ城が黒い膜の様なものに覆われていた。

遠目から見ても、その黒い膜が良いものではないことが伺える。

「あれは………、”悪意”ね。もうあんなに力をつけてる………」
「………、けっこうまずい感じ?」

「アレくらいならまだ最悪ではないわ。でも、ちよつと急いだ方が良いかしらね」

スーパークラウンの言葉にマリオは汗を垂らす。

事態は想像以上に進行していたようだ。

「急いで行こう!」

「そうね。急ぎましょうか」

「………、そうだな」

少しだけ躊躇うようにクッパは頷く。

自分が壺を割ったためにマリオが慌てて城に向かっている。

これは、自分の城で割れば良かったか?

歩みを早めながら、クッパはそんなことを考えていた。

そもそもとして、クッパの城で割っていた場合、マリオの元へと向かうことがなかったということもクッパは考えていない。

そして、2人と1つはピーチ城へとたどり着くのだった。

第18話

2人と1つはピーチ城の前へと到着した。

近くに寄ると、城を覆う「悪意」の膜からどこか暗いような雰囲気を感じとることができる。

「触るとまずそう、かな。これじゃあ入れないや」

「それが賢明よ。触れば「悪意」を流し込まれるみたい」

「それでは入れぬではないか」

膜の前で話していると、ピーチ城の門が開き、中からは槍を持ったキノピオ兵が2人現れた。

どちらのキノピオも瞳には光がなく。

どこかおぼつかない足取りで槍を構えていた。

「『悪意』に飲まれてるわね。気絶させれば大丈夫だけど、捕まらないように気を付けて。長く接触していると汚染されるわ」

「なるべく、一撃で気絶させろってことね……。分かった。クツパは離れていてくれ」

「分かったのだ」

マリオの言葉にクツパは頷き、距離を取る。

キノピオ達は離れたクツパに興味を失ったようで、マリオへと襲いかかっていった。

「いつもは！味方！だから！やりづらい！な！」

「死ぬ。死ぬ。死ぬ。死ぬ。死ぬ。死ぬ。死ぬ。死ぬ」

「殺す。殺す。殺す。殺す。殺す。殺す。殺す。殺す」

ぶつぶつと同じ言葉を繰り返しながらキノピオ達は槍を振るう。

振り方は単調なのだが、その速度に躊躇いなどはなく。

本気で殺しにかかっていることが分かった。

「ファイアボールで燃やすわけにもいかないか。悪く、思うなよ!!」
「死ね。死ね。死——がふっ！」

繰り返される攻撃のタイミングを読み、槍を避けてキノピオの腹部を思い切り打ち抜く。

腹部を殴られたキノピオは後方へと吹き飛び、その動きを止めた。

しかし、もう片方のキノピオは、動きを止めたキノピオのことが見えていないかのよう
に槍を振るい続ける。

「君も、眠れ！」

「殺す。殺す。殺——ぐふっ！」

先程のキノピオと同じように、攻撃のタイミングを読んで腹部を打ち抜く。

そして、2人目のキノピオも後方へと吹き飛び、動きを止めた。

「終わったみたいだな」

「ああ、少しやりにくかったよ」

「でも、これで彼らもしばらくは大丈夫よ。意識さえなければ『悪意』も関係ないもの」

2人のキノピオ兵が気絶したことを確認し、クツパが話しかける。

そして、2人と1つは改めて城を覆う膜を見る。

「スーパークラウン、この膜をどうにかできるかい？」

「当然よ！だって私はステキでパーフェクトなクラウンだからー！」

マリオが聞くと、スーパークラウンは誇らしげに言いながら光を放ち始めた。

スーパークラウンの放つ光は徐々に増していき、やがて真っ直ぐに膜へとぶつかっていく。

光を受けた膜は波打つように波紋を広げ、人が通れるほどの穴を開けた。

穴から膜の内部を見ると、どうやら膜の内側には普通の空気があるようで、膜の中に入ったなら『悪意』に汚染されるということはないようだ。

「ふう……」。『悪意』が作ったものだったから今の私でも打ち消せるけど、『悪

意〃 本体となるとちよつと厳しいかしらね」

「なに？それではどうやって封印するとうのだ？」

スーパークラウンの眩きに、クツパは問う。

確かにクツパの言うとおり、膜は打ち消せても、本体に効果がないのであれば、封印など夢のまた夢だろう。

「だから、〃愛〃が足りないのよ。〃愛〃が」

「〃愛〃と言われても分からぬわ！」

つん、とした態度で答えるスーパークラウンにクツパは少しだけイラツとしながら叫ぶ。

確かに漠然と〃愛〃が足りないと言われても分からないままである。

しかし、そんなクツパを気にせずに、スーパークラウンはふよふよと城の中へと向かってしまった。

「なんなのだ、アイツは……」

「もしかしたら、何か秘策でもあるのかな？」

首をかしげながら、マリオとクッパもスーパークラウンの後を追って城の中へと向かっていった。

なるべく見つかからないように気をつけながら。

第19話

城の門をくぐり、2人と1つは城のメインホールへと着いた。

「どうやら城の内部に変化などはないらしく、そこにはいつもの城内の景色が広がっていた。」

「どうやら、警備のキノピオは今のところ見当たらないみたいだね」

「ならば見つからぬ内にさっさと進んでしまおうしかないな」

「でも、本体はいつたどこにいいのかしら？」

城内で、メインホールともなると警備のキノピオが何人かいても良さそうなのだが、そこには1人もキノピオの姿がなかった。

キノピオの姿がないことにクツパは、ちようど良いと鼻を鳴らしてずかずかとメインホールの真ん中へと歩いていってしまふ。

クツパの後を追いながらスーパークラウンはポツリと呟く。

「悪意」の本体、確かにそれを見つけて封印をしなければこの事態は終わらない。スーパークラウンの呟きに、マリオは改めて気合いを入れる。

「それで、どこから向かうのだ」

「そうね。『悪意』の本体の位置も分からないし、この城をしらみつぶしに探すしかないんじゃないかしら」

「分かった。じゃあ、向こうの扉からだね」

クツパの問いに、スーパークラウンは少しだけ考え、城を全て調べることを提案する。確かに「悪意」の本体が見つからない今、手がかりもないのだからそうするしかないだろう。

マリオは頷き、2人と1つは右端の扉へと向かった。

扉を少しだけ開け、中の様子を確認する。

「この扉は確か……、食堂だったか」

扉の隙間から見えたのは長いテーブルと、いくつも並んだ椅子。

そして、テーブルの上に置かれた料理や果物だった。

ここにもキノピオ達の姿はなく、料理は冷めているようだ。

「食事をする所なのね。あ、食べ物も食べちゃダメよ。こんな状況なんですもの。食べ物も汚染されているわ」

「む………。それは嫌だな」

スーパークラウンの言葉に、テーブルの上の果物へ手を伸ばそうとしていたクツパは手を引っ込めた。

「奥の調理場も見ておこう」

そう言ってマリオは食堂の奥の扉を少しだけ開けて中を覗く。

調理場の明かりは壊れているのか、明滅を繰り返しており、あまり視界は良くない。

それでもマリオは目を凝らして中を確認した。

「……見える範囲にはキノピオはいないみたいだ。だけど、包丁が見つからなかったから危険だと思う」

「この調理場には他に続く扉はあったか？」

「いや、食堂に繋がるこの扉と城の横の食料を搬入する門にしか繋がる扉はないはずだ」

マリオが確認した限りでキノピオはいないが、包丁もない。

これは、キノピオが包丁を持っている可能性があり、調理場の扉の隙間から見えない位置にキノピオがいる可能性があるということだ。

クツパの問いに、マリオは調理場の構造を思い出しながら答える。

「であるならば、ここには何もないだろう。わざわざ危険に飛び込む理由もない」

「そう、だな。次に行こう」

「ついでに椅子を使って開けられないようにしときましょう」

調理場の扉を閉め、並んでいた椅子を組み合わせて扉の取っ手を固定する。

これによって簡単に扉が開くことはないだろう。

扉の固定を終え、他の部屋へ向かおうと入ってきた扉を開けたとき、何かの音がマリ

オたちの耳に届く。

それは、木に固いものを突き立てるような鈍い音だった。

マリオたちはその音を背に受けながら部屋を出るのだった。

第20話

繰り返される音の響く扉を閉め、マリオたちはメインホールへと戻った。

「やはり行かなくて正解だったな」

「ああ。クツパの判断のお陰だ」

「さ、それじゃあ次に行きましょう」

調理場から聞こえた音に、入らなくて良かった、とマリオは行きを吐く。

そして、マリオたちは反対の扉へと向かった。

「こっちは………。物置部屋みたいだ」

扉を少しだけ開け、中の様子を確認する。

扉の中は様々な物で溢れており、言ってしまうえばゴチャゴチャとしていた。

さらには、誰かが歩いているのか、色々なものを踏みつけるような音も聞こえてくる。

「いるようだな」

「ああ、だけどこの部屋はどこにも続く扉はないから、ここには本体はなさそうだし」

「待つてくれないかしら」

扉を閉め、他の場所へと向かおうとする2人をスーパークラウンは止める。

「どうかしたかい？」

「この部屋の扉を少し開けたとき、何か嫌な感じがしたの。中を調べてくれないかしら」
「嫌な感じだと？」

スーパークラウンの言葉にマリオとクッパは顔を見合わせる。

「悪意」と関わりのあるスーパークラウンが嫌な感じがするというのだ。

中に何かがあるのは間違いがないだろう。

そう考え、マリオはゆっくりと扉を開けていった。

物置部屋の中は先ほど見た通り、様々な物で溢れていた。

式典の際に使うであろう装飾、庭の整備をするためであろうシャベル等の園芸用品、パーティー等で使うためのテーブルがいくつか。

そして、それらの物の間に、3人のキノピオがいた。

彼らの手には、園芸用品の枝切りばさみ、シャベル、鎌が握られている。

格好からしておそらくは庭師だろう。

「それじゃあ、行ってくる。扉の近くで待っていてくれ」

「分かったのだ。気をつけるのだぞ」

クツパの言葉にマリオは頷き、なるべく気づかれないようにキノピオたちのもとへと向かっていった。

「まずは、……君からだ」

「ぐうつ?!」

枝切りばさみを手に持ったキノピオの背後から近寄り、一気に首を絞めて意識を落と

す。

キノピオは短い悲鳴をあげて体から力を失った。

「後の2人は近くにいるのか……」

気絶させたキノピオの手足をキノピオ自身の服で拘束して端に寝かせ、マリオは残りのキノピオを見る。

残りのキノピオたちは並んで立っており、どちらも動く様子はなかった。

「……。これが使えるかな」

そう言って、マリオはテーブルに手を置いた。

そのテーブルはパーティー等で使うための物で、そこそこの長さがある。

「せーのっ！」

声を出し、マリオはテーブルを横にして体の前に構える。

そしてそのままキノピオたちに向かって走り出した。

「このまま、気絶してくれ！」

「殺す。殺す。殺っ?!」

「奪う。奪う。奪っ?!」

いきなり現れたマリオの姿に驚いたのか、キノピオたちは動きを止め、マリオの持つテールによって吹き飛ばされた。

運良く気絶したようで、2人のキノピオに動く様子はなかった。

「彼らも拘束しておこう」

「中々にうまくいったな」

「さ、障害もなくなったからこの部屋を調べましょう」

マリオは先ほどのキノピオと同じように、キノピオ自身の服で拘束していく。

部屋の中のキノピオがいなくなったことを確認し、クツパも扉の近くからマリオのもとへと移動した。

そしてマリオたちは物置部屋の探索を開始するのだった。

第21話

気絶させたキノピオたちを拘束し、部屋の隅へと置いてからマリオたちは物置部屋の探索を始めた。

「探索といっても、気になるようなものは見つからないなあ」

「本当に嫌な感じがしたのか？」

「本当よ！」

探索を続けていくが、これといって気になるようなものは見つからず。クツパはじつとりとスーパークラウンを見つめた。

「そうだ。嫌な感じが強い場所は分かるかい？」

「そうね……。この部屋全体に嫌な感じはするのだけど……。強いて言

うならそこ、かしら」

「そこには園芸用品しかなかったぞ」

マリオの問いに、スーパークラウンは少しだけ考え、園芸用品のある場所を示した。しかし、そこはすでにクツパが調べており、クツパ自身も特に何も見つけることはなかった場所だ。

「でも、そこから一番嫌な感じがするのよ」

「ふむ。じゃあもう一回調べてみようか」

「好きにするがいい。ワガハイは他の場所を調べてみる」

そう言つてクツパは他の場所を調べに移動した。

「ここにるのは……」

園芸用品のある場所をマリオは調べていく。

あるのは、枝切りばさみ、シャベル、鎌、鉢植え、苗木、植物の種、肥料、土、じよ

うろ。

出てくるのはどれも普通の道具たちばかりだ。

「まった！それをを見せて！」

「それ？……この苗木かい？」

不意に、スーパークラウンがマリオを止める。

スーパークラウンの言葉に、マリオは指示された苗木を指差した。

「ええ。よく見ないと気づけなかったけど間違いないわ。これ、外の膜の起点の1つよ」

苗木の周りを観察するように飛び回り、スーパークラウンは答える。

「どうやらこの苗木は『悪意』の膜を生み出している起点の一部のようだ。」

「じゃあ、この苗木を燃やせば……」

「膜を維持する起点が1つ減るわね。いくつあるかは分からないけど、全て壊せば膜も壊せるわ」

マリオの言葉にスーパークラウドは頷く。

「じゃあ、さつさと燃やしちやおう。ファイアボール！」

「ぐぎゅげええええええええええ?!?!」

マリオが、苗木にファイアボールを撃ち込むと、苗木に人の口のようなものが現れ、不気味な悲鳴をあげて燃え始めた。

もしも、先にこの苗木を燃やしていたら、3人のキノピオが一斉に襲いかかってきていただろう。

いきなり悲鳴が聞こえたことに驚き、他の場所を調べていたクツパも何事かと戻ってきた。

「これが探していたものだったのか？」

「ええ、これでこの部屋の嫌な感じは無くなったわ」

クツパの問いに、スーパークラウドは頷く。

その間にも不気味な悲鳴をあげていた苗木は燃え尽き、やがて黒いスライムの様なものを残して完全に消え去った。

「彼らの拘束もしてあるし、ここにはもう何もないかな？」

「そう思うわ」

「では、次の部屋に向かうぞ」

黒い燃えかすをそのままにマリオたちは物置部屋を後にした。

第22話

物置部屋の探索を終え、メインホールから繋がる他の部屋の探索も終えたマリオたちは、階段を上がり、2階へと移動した。

「まだ顔が痛い……………」

「ふんっ……………」

「綺麗な紅葉ね」

2階へと到着したマリオの顔には真つ赤な紅葉が彩られていた。

これは、1階での探索を終えて、階段を上がっていたときにマリオが足を引つ掻けてクツパの胸へと飛び込んだことよってできたものだ。

顔を押さえるマリオの隣では、マリオの紅葉に負けず劣らず顔の赤いクツパの姿があった。

「それにしても広いわね」

「まあ、お城だからね。新人のキノピオ兵はたまに道に迷うらしいよ」

「ワガハイの城でも似たようなことはあるな」

そんなマリオたちのことも気にせずに、スーパークラウンはふよふよと2階のホールを飛ぶ。

2階のホールも1階と同じように広く、いくつかの扉がある。

「ここにもキノピオはいないのか」

「さすがにおかしくはないか？部屋にはいたが、ホールには全くいないなど」

2階のホールを見渡し、マリオとクツパは怪しむ。

なぜならここにもキノピオ兵の姿がなかったからだ。

さすがに2ヶ所あるホールのどちらにもキノピオ兵がいないのは明らかにおかしい。

警戒心を高めながらマリオたちは探索を始めた。

「まずはここから行こう」

そう言ってマリオは一番近くの扉を少しだけ開け、中を覗く。

扉の隙間から見たのは、大量の本が詰められた本棚と、床に置かれた本たちだった。

「ここは図書室だね。嫌な感じはあるかい？」

「そうね……。少し、あるわね」

マリオの問いに、スーパークラウンは頷く。

「どうやら、この図書室からも物置部屋と同じように嫌な感じを受けるようだ。」

「物音は……。聞こえぬな」

「警戒はしていこう」

ギイ、と音をたてながら図書室の扉を開く。

中に入れば本独特の匂いがマリオたちの鼻に届いた。

「見える範囲にはキノピオはいないかな」

「先頭は任せたぞ」

「探索中の警戒もね」

マリオ、クッパ、そしてクッパの頭の上にスーパークラウンの順で並び、図書室の中を調べていく。

一通り部屋の中を調べた結果、図書室にはキノピオはいないのではないか、ということが分かった。

「おい。飛んで本棚の上を見てこぬか」

「分かったわよ」

「気をつけてね」

頭の上に乗ったまま探索をしているスーパークラウンにクッパは、本棚の上を調べるように言う。

クッパの言葉に、スーパークラウンはフワリと飛び上がり、本棚の上を調べ始めた。

「こつちには無いわね。なら、あつちに——きやあああ?!」

「なんだ?!」

「どうしたのだ!」

探索を続けていくと、突然スーパークラウンの悲鳴が上がる。

いきなり聞こえてきたスーパークラウンの悲鳴にマリオたちは慌てて悲鳴のした方へ向かう。

悲鳴の聞こえた場所に着いたマリオたちが見たのは虫取り網を持ったキノピオがスーパークラウンを捕まえている姿だった。

「捕まえた。捕まえた。捕まえた。捕まえた。捕まえた」

「くっ、出さないよ!」

どうやらスーパークラウンを捕まえることが目的だったらしく、目の前に現れたマリオたちのことを見向きもせず、キノピオはぶつぶつと呟いていた。

「大丈夫かい?!」

「こうなったらダメージ覚悟、で?！」

「どりやああああ!!」

マリオが虫取り網に当たることを覚悟して攻撃に転じようと距離をとった瞬間、キノピオの横の本棚が勢いよく倒れていった。

倒れた本棚の反対側を見ると、どうやらクツパが本棚を押し倒したようだ。

本棚を見ると本が抜かれており、少しでも押しやすいように工夫がしてあった。

「助かったよ。ありがとう」

「なに、気にするな」

「う、うくん……。酷い目にあつたわ……」

本棚に押し潰されてキノピオが気絶したのか、ヨロヨロと飛びながらスーパークラウドはマリオたちのもとへと飛んできた。

「大丈夫だったかい？」

「捕まらぬように気をつけぬか」

「ごめんなさい。助かったわ」

マリオとクツパの言葉に、スーパークラウンは謝る。

警戒を怠るつもりはなかったのだが、飛んでいるということだけで油断があったのだらう。

気持ちを入れ換え、マリオたちは図書室の探索を再開した。

第23話

スーパークラウンが捕まるといふトラブルも解決し、マリオたちは図書室の探索を再開する。

「それじゃあ、探索を続けようか」

「そうだな。このキノピオは拘束しておこう」

「私はまた飛んで調べるわ」

クッパは倒れているキノピオの袖の部分から虫取り網を通し、案山子のような状態にして網を少し高い位置に引っ搔けて動けないようにする。

キノピオの体が小さいこともあって、足が浮いていても虫取り網が壊れることはない。

「こつちには……ないか。全部を燃やして、はい終わりって訳にもいかないからなあ」

「……ワガハイの城で似たようなことをやったことはなかったか？」

「いや、それはお前の部下たちだから」

過去に自身の城が破壊されていく様を見たことを思い出し、クツパはジトリとマリオを睨む。

仮にあったとしても、それは大体がクツパの部下たちの暴走によるものが多いので、マリオを睨むのはお門違いなのだが。

「……あつたわ！」

マリオとクツパが話している内に、スーパークラウンが「悪意」の膜の起点の一つを見つけたようだ。

どうやら図書室の奥の部屋隅に落ちていたようで、1冊の本らしい。

「見つかったか。でも、この部屋だと燃やせないなあ」

「持つのは危険なのだったか」

「ええ、持たない方がいいわ」

部屋の隅に落ちている本を囲むようにマリオたちは並ぶ。

「スーパークラウン、貴様が押して部屋の外へ運ぶことはできぬのか」

「私は非力なの！」

「あ、さっきのキノピオの網を使えば良いんじゃないか？」

ふよふよと浮かんでいるスーパークラウンにクツパが尋ねるが、スーパークラウンは強く拒否する。

本当に非力なのかは怪しいところであるが、クツパは仕方なしに納得することにした。

そこでマリオは先ほどのキノピオが持っていたものを思い出した。

網ですくって運べば触る心配もなく、図書室で燃やす危険を犯す必要もない。

そう考え、マリオは先ほどのキノピオのもとへと向かった。

「……まだ、気絶しているな？」

どうやらキノピオはまだ気絶しているようで、案山子のように固定されたまま、ぐったりとしている。

マリオはなるべく音をたてないようにキノピオへと近づいていく。

「一応、足を拘束して………」と

あまり刺激を与えないように静かに、細心の注意を払いながらキノピオの足を拘束していく。

マリオはキノピオの履いていたズボンを使って足の拘束を終えた。

「次は腕、か。虫取り網を抜いたら……上着で縛ればいいかな」

足の拘束が終わり、マリオは袖の部分から通されている虫取り網を掴んだ。なるべくキノピオの肌に触れないようにゆっくりと引き抜いていく。

「う、ううん……」

「やばっ……!」

小さく呻き声をあげたキノピオに、マリオは慌てて虫取り網を引き抜いた。

キノピオが目覚めて、もう一度襲いかかってきても困るので、マリオは急いでキノピオの上着で拘束をしていく。

そして、マリオが拘束を終えてキノピオから離れるのと、キノピオが目覚めるのはほとんど同タイミングだった。

「殺す。殺す。殺す。殺す。殺す。殺す」

「危なかった……」。この網は借りていくよ」

拘束されて転がっているキノピオを後に、マリオはクツパたちのいる部屋の隅へと向かった。

「持ってこれたようだな。では、本を持っていくとしよう」

「ホールで燃やしたらきつとまた叫び声が出るでしょうから危ないわよね」

「仕方ない。さっきの物置部屋に持って行って燃やすことにしよう」

図書室では周りの本が燃える可能性があるために燃やせない。

ホールでは燃やしたときに出るであろう悲鳴でキノピオたちが集まる可能性があるために燃やせない。

よって、マリオたちはもう一度物置部屋へ行つて、本を燃やすことにした。

第24話

1階の物置部屋で膜の起点の1つである本を燃やし、マリオたちは再び2階へと戻ってきた。

そして、他の部屋の探索もサクサクと進めていく。

「図書室以外には嫌な感じを受けないんだね？」

「そうね。強いていうなら、あそこの大きい扉からかしら」

「あれは、ピーチ姫の部屋への扉ではなかったか？」

スーパークラウンの示した部屋の扉は他の部屋の扉よりも豪華で、明らかに作りが違っていた。

その扉はこのピーチ城の主であるピーチ姫の部屋へと続く扉だった。

そこから嫌な感じを受けるといふことは、当然ながらピーチ姫も「悪意」に犯された

ということなのだろう。

「よし、行こうか」

「うむ」

「ええ」

2人と1つは互いに向かい合い頷く。

そしてピーチ姫の部屋へと続く扉を開けた。

扉を開けると少しだけ長い廊下があり、廊下の左右の窓から外の様子が伺える。

城の周りの「悪意」の膜はまだ消えておらず、依然としてそこに残っていた。

しかし、最初に見たときと比べるとどうにも薄くなっているようにも見える。

膜の起点となっているものを壊していった成果は出ているようだ。

マリオたちは廊下を歩いていき、奥の扉へとたどり着く。

扉の前には1人の年老いたキノピオがいた。

「キノじいか．．．．．」

「確か．．．．．大臣であったな」

扉の前にいたのはキノコ王国の大臣、キノじいだった。

キノじいの瞳も他のキノピオと同じように濁っており、理性があるようには見えな
い。

「壊せ。壊せ。壊せ。壊せ。壊せ」

キノじいはぶつぶつと呟きながら虚空を眺めている。

どうやら、ピーチ姫の部屋の前には偶然のようだった。

その証拠に、キノじいの手には書類らしきものが握られている。

おそらくは、ピーチ姫へ何か報告を終えた後で「悪意」に犯されたのだろう。

「さすがにキノじいを殴るのは危ないよね」

「まあ、ポツクリと逝きそうではあるな」

「悪意」に犯されているとはいえ、キノじいのご老体。

とても他のキノピオたちのように気絶させるわけにもいかなかった。

「私が囿になるわよ。2人はその柱に隠れていて」
「任せても大丈夫かい？」

スーパークラウンの言葉に、マリオは心配そうに尋ねる。

飛んでいるとはいえ、先ほど捕まっていたのだ。

それ故にマリオは心配なのだろう。

「大丈夫、油断はしないわ。それにこの廊下から出てすぐに戻って扉を閉めちゃえば良
いしね」

「ふむ。必ず戻ってくるのだぞ？」

油断はしない、言葉だけではなく確固とした意思でスーパークラウンは頷く。
そして、スーパークラウンはキノじいの前へと飛び出した。

「私はここにいますわよー！」

「壊せー！」

スーパークラウンの言葉に、キノじいはグリーンつと顔向け他には目も向けず走り出す。

そして、マリオとクツパの隠れている柱の前をスーパークラウンとキノじいは通り過ぎ、廊下から出ていった。

「大丈夫、かな」

「やつはやると言った。であるならば信じるだけだ」

柱の影から出てきたマリオは、スーパークラウンの出たいった扉を見つめる。それに対してクツパは、腕を組み目を閉じて静かに言い放つのだった。

第25話

ピーチ姫の部屋へと続く廊下から飛び出て、スーパークラウンはホールの中央へと飛んでいく。

その後をキノじいは走って追いかけていた。

「壊せ。壊せ。壊せ。壊せ。壊せ」

「ちゃんと追いかけてきているわね」

自身の後をちゃんと追いかけてきているか確認しながら、スーパークラウンはさらに飛んでいく。

そして、1階へと続く扉の前で止まると天井付近まで一気に飛び上がった。

「壊せ。壊せ。壊せ。壊せ・・・せ？」

素早く天井付近まで飛び上がったことよってキノじいはスーパークラウンを見失ったらしく、キヨロキヨロと辺りを見回し始めた。

その隙にスーパークラウンは天井のシャンデリア等の影に隠れながらピーチ姫の部屋へと続く扉へと向かっていく。

「なるべく静かに。姿は見られないように……」

ゆっくりと音をたてずにスーパークラウンは移動していく。

そしてどうにかピーチ姫の部屋へと続く扉の上に到着した。

「後はどうにかして扉を開けて中に入るだけね」

キノじいは追いかけてくる際にきちんと扉を閉めていたようで、ピーチ姫の部屋へと続く扉は閉まっていた。

スーパークラウンには手も足も無いため、扉を開けるのは簡単ではないだろう。

「とりあえずはノックしてマリオに気づいてもらうしかないわね」

スーパークラウンは、出来る限り影に隠れながら扉の前へと降り立つ。

その間もキノじいはスーパークラウンを探してキョロキョロと辺りを見回しながらホールの中を歩き始めた。

どうやら、スーパークラウンが見つからないのでホール内を調べるつもりのようなだ。

「気づかれないように………」

スーパークラウンは小さく扉へと体当たりをする。

コツンコツン、と小さな音が鳴った。

しかし音が小さかったようでマリオたちが聞こえた様子はない。

「もう少し強めね………」

先ほどよりも少しだけ強く扉へと体当たりをする。

コンコン、と少しだけ大きくなった音が鳴る。

それでもまだ小さかったらしく、マリオたちに動きは感じられなかった

「まだ聞こえないの………!」

あまり大きな音が出せないというのに、マリオたちに気づく様子が感じられないことにスーパークラウンは少し苛立ちながら呟く。

不意に、スーパークラウンの背後から声が聞こえる。

それはつい先ほど逃げた相手と同じ声。

そして、スーパークラウンは自身の体が捕まれたことに気づく。

「壊せ。壊せ。壊せ。壊せ。壊せ」

「しま——っ!!」

「なあ、さすがに遅くないか？」

「焦るでない。信じるのだ」

ピーチ姫の部屋へと続く廊下で、マリオとクツパはスーパークラウンを待っていた。キノじいが扉を閉めてしまったことにより、ホールで何が起きているのかは全く分からぬ。

開ければ良いとは思うかもしれないが、開けたことによりキノじいに自分たちの存在までバレるわけにはいかなかったのである。

「マリオ、貴様のその優しさは確かに美徳だ。だがな、時には信じて待つてやるのも仲間というものだろうさ」

「クツパ……」

クツパは腕を組んでジツと扉を見つめる。

そんなクツパの姿を、マリオは静かに見つめることしかできなかった

マリオの仲間を心配する心は確かに正しいものだ。

それが間違っているとは誰も言えないだろう。

しかし、クツパのように仲間を信じ、必ず戻ってくると思いつけるのも間違いではないのだ。

【どちらか】が正しいのではない。

【どちらも】が正しいのだ。

だからこそ、マリオはこれからも仲間を心配するだろう。

それはマリオの優しさの証拠なのだから。

そして、2人が待っていると扉がゆっくりと開かれた。

第26話

ゆつくりと、静かに目の前の扉が開かれていく。

扉のノブはスーパークラウンではどうやって開けることはできなかっただろう。

だからこそマリオたちは扉の前でスーパークラウンが起こすであろう何かしらのアクシオンを待っていた。

しかし、何もアクシオンを受けとれず勝手に扉が開かれていく。

もしも自力で扉を開けて入ってくるのであれば、それはスーパークラウン以外の誰かだろう。

その事実のマリオとクツパは静かに警戒しながら、いつでも行動を起こせるように構える。

「・・・・・・・・」

扉が開かれ、始めに見えたのは茶色の水玉帽子。

その特徴はどう見ても先ほど「悪意」に犯されていたキノじいのも物だった。そして次に見えたのは手に捕まれた小さな冠。

「スーパークラウン！」

「く、あやつめ……！」

キノじいの手には捕まれているスーパークラウンの姿を確認し、マリオとクツパは悔し気に叫ぶ。

やはりスーパークラウンだけに無茶をさせるべきではなかったのか。

全員で協力してキノじいを取り押さえるべきだったのか。

そんな考えがマリオたちの脳裏をよぎる。

そして、扉を開けたキノじいはゆっくりとマリオたちの方を見た。

「おや、マリオどの。今日は何やら暗いのですが何が起きているのか分かりますかな？」

「……なに？」

「え……？」

あまりにも自然に、先ほどの姿が幻か何かだったかのようにキノじいは話しかけてくる。

それこそいつもの「悪意」に犯されていないときのように。

「き、キノじい？体はなんともないのか？」

「はて？どういう意味かは分かりませぬが、私はいつも通りのつもりですが？」

「これは……、どうということなのだ？」

マリオの問いにキノじいは不思議そうに首を傾げる。

よく見てみれば目に光が戻っており、「悪意」に犯されていないように見える。

「すまぬが、その冠を渡してくれぬか」

「おや、こちらは貴方の物でしたか？気がついたら目の前に落ちていたもので。持ち主がいて良かった」

キノじいが正気に戻ったようだということを確認し、クツパはスーパークラウンを渡

してもらおうように言う。

クツパの言葉に、キノじいは持ち主が見つかって良かったと笑みを浮かべながら手渡してきた。

「スーパークラウン？」

「おい、どうした。喋らぬか」

マリオとクツパの言葉にスーパークラウンは反応を見せない。それこそ、マリオの家で喋り出す前のようなように。

「くそつ、いったい何があったんだ！」

「無事に戻ってこねば意味がないだろう………！」

動かないスーパークラウンを強く掴み、クツパは俯く。

無事に戻ってくると約束をした。

しかし、その約束は守られなかった。

確かに戻ってはきた。

だが、スーパークラウンは無事ではなかった。
これではちゃんと戻ってきたとは言えないだろう。

「マリオどの?」

「ああ……、悪い。キノじい、この城では大変なことが起きているんだ。だから、できたらここの扉が開かないように見張っていてくれないかな」

不思議そうに見てくるキノじいに謝り、マリオは簡単に状況を説明する。
今までにもさまざまな異変などが起こったピーチ城の大臣。

突発的に異変が起きても、慌てはするが対応ができないことはなかった。

「よくは分かりませぬが、分かりました。姫様も心配ですがマリオどのにお任せします」
「ありがとう」

自身の胸を叩くキノじいにマリオは頭を下げる。

完全には状況を理解できていなくても、協力してくれることに感謝を抱きながら。

「行こう。先に進まないでスーパークラウンの犠牲が無駄になってしまう……」
「そう……だな。こやつは自らに出来ることを全うした。そうだな？」

マリオの言葉にクツパは、自身とマリオを助けるために囿となったことを感謝して、
一撫でした。

そして、落とさないようにそつと自身の頭にスーパークラウンを乗せた。

「ゆくぞ。きつとこの先で終わると信じて」

「ああ」

そして、マリオとクツパはピーチ姫の部屋の扉を開けた。

第27話

扉を開け、マリオたちの視界に白い壁にピンク色の家具の置かれたピーチ姫の部屋が映った。

その光景は城が「悪意」の膜に包まれる前と何ら変わった様子はなく、ベランダのある窓の外から見える景色も今までのものとなにも変わっていないかった。

「ピーチ姫は……いないのか？」

「そのよう、だな」

部屋の中をぐるりと見回してみてもピーチ姫の姿はなく。

誰かがいたような形跡もない。

マリオとクッパは警戒して部屋に入ったものの、予想外の事態に少しばかり気が抜けてしまう。

「一応、調べてみようか」

「うむ。……分かっているとは思いますが、ダンスや衣類の場所は調べるでないぞ」

マリオの言葉にクツパは頷き、部屋の探索を開始する——前に、マリオをジロリと睨み付けてクツパは警告した。

非常時とはいえさすがにその辺りを調べるのは、当たり前だがしてはいけない。

「分かっているよ」

「ならば良いがな。ワガハイは向こうの机と本棚を調べてみよう」

クツパの警告にマリオは苦笑しながら頷く。

正直な話、クツパの口からそう言った警告が出るとは思っていなかったもので、少しだけ意外にも感じていた。

そして、マリオもクツパとは反対の場所を調べ始める。

「ふむ………。本棚には気になるような物は見当たらぬか」

机の横に置かれた本棚の中を一段一段クツパは確認していく。

本棚に置かれているのは、花の凶鑑、刺繍のモデル本、マナーや所作の本などなど、姫として必要そうな物が並んでいる。

また、一番下の段だけ分かりにくいように奥行きが作っており、そこを調べてみると隠すように恋愛要素のある少女漫画が置かれていることがわかった。

「ピーチ姫もこのような本を読むのだな」

隠されていた少女漫画を確認し、クツパは少しだけ驚く。

クツパの個人的な考えではあるが、ピーチ姫は漫画などは読んだことはないと思って
いた。

だからこそ少しだけ意外に思ったのだ。

「つと、本棚にはなにもないな。机には……日記か？」

ピーチ姫の読んでいる少女漫画に少しだけ後ろ髪を引かれながら、クツパは隣の机を見る。

すると、机の上に先ほどまで書いていたかのように置かれている日記があることに気がついた。

「何か情報でもあるか？」

少しだけ申し訳なく思いながらクツパは机の上の日記を手に取り、中を開く。日記の中には丸い女性らしい文字で1日の出来事などが書かれていた。

『○月×日』

クツパに拐われた私をマリオが助けてくれた。

とてもかっこよくてもっと好きになってしまった。

お礼でいつもキスしてるけど、たまには勇気を出して口を狙ってもいいかしら？

『◇月△日』

お城の仕事は大変だけど、息抜きでケーキを焼いてマリオを呼べるのは嬉しい。たまにクリームを着けながら食べてる姿は可愛いと思う。キノじいが見ていない内に城から抜け出して会いに行ったら驚く顔が見れるのかも。

「これは……。やはり、そうだったか……。」

ピーチ姫の日記を読み、クッパは薄々とだが気づいていたことが真実だったと気づく。

何度もピーチ姫を拐い、何度もマリオに救出される。

幾度となく行われてきた自身とマリオの戦い。おこな

助けが来ると信じ、マリオを待ち続けるピーチ姫の姿。

そして、女性の姿になったことよって理解した愛という感情。

それら全てから導き出され気づいていた事実。

「やはり、ピーチ姫はマリオのことが好きだったのか……。」

口からこぼれた言葉にクツパは不思議と悲しさを感じなかった。
いや、むしろピーチ姫を恋敵と改めて意識し、負けたくないと思っていた。

「ふ……。こんな気持ちも悪くはない」

自身の気持ちに笑みを浮かべ、クツパは悪くない感情に包まれた。
そして、クツパはさらに日記を読み進めていく。

『▽月×日』

最近はずつぱも拐いに来なくて平和。

平和なのはいいのだけど、マリオのかっこいい姿が見れないのは少しだけ退屈。
明日はキノコモールに行つて自分でお菓子の材料を買おうかしら。

『☆月○日』

なんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんで
なんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんで……
マリオが誰かと暮らす？私以外の誰かと？なんで？どうして？あなたが助ける相手

は私だけでしよう？あなたと共に暮らす相手は私だけでしよう？嘘よ嘘よ嘘よ！

どうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうして……

『☆月□日』

とてもすばらしいちからがてにはいった。

これでまりおは わ た し の も の ……

「なんだ………これは………?!」

ピーチ姫の日記を読み進めていくと、突如として現れたページを埋め尽くす言葉の羅列にクツパは思わず日記を机に落としてしまう。

そのページからは前のページまでの落ち着いた恋する女性といった印象がまったく感じられず、どこか狂気染みた感情すら感じられた。

「こつちには何もなかったよ。クツパ、そつちはどうだい？」

「っ!!——い、いや、こちらにも気になるものはなかったな」

他の場所の探索を終えたマリオが急に話しかけてきて、クツパは思わず日記をマリオから隠す。

そして、マリオの方を向いてクツパは気づく。

先ほどまでは人影のなかったベランダに誰かがいることに。

その人影が光のない瞳でジッとマリオと自分を見つめてきていることに。

その人影が………先ほど読んだ日記の持ち主である——ピーチ姫だというこ

と
に
・
・
・
・
・

第28話

ジツと、光のない瞳が自身を射抜く。

どうやら、クツパが自身を見つけたことに気づいたのだろう。

ベランダに立つピーチ姫はゆっくりと笑みを浮かべ、口を動かした。

『あなたがどろぼうねこさん？』

ゾクリとクツパの背筋を冷たいものが過ぎる。

溶岩に落ちる寸前だとか、爆発に巻き込まれる寸前だとかそんなものとは比べ物にならないほどに体の熱が冷えていく。

ピーチ姫は笑みを浮かべている。

何度も見たことがある、マリオへと向けるピーチ姫の表情。

しかし今の笑顔に見惚れることはできず、なにか恐ろしいものに睨み付けられたよう

な感覚を受けた。

クツパが固まり、青い顔で何かをジッと見ていることに気がついたマリオは、クツパの視線を追いベランダへと目を向ける。

マリオがピーチ姫の姿に気づく直前、ピーチ姫の発していた圧迫感は消え、ピーチ姫はいつものように笑みを浮かべていた。

「いらっしやい。マリオ」

「ああ、ピーチ姫。良かった、無事だったんだ——ね？」

「待つのだ、マリオ！」

笑みを浮かべていつものように話しかけてきたピーチ姫にマリオは安堵し、息を吐いて近くへ行こうとした。

しかし、クツパが素早く手を掴み、マリオを制止する。

「どうしたんだよ？ピーチ姫はちゃんと喋れているんだから “悪意” を受けていないだろっ？」

「だから待て！よく考えろ。ワガハイたちが部屋に入ったときにベランダを含めてちや

んと見ただろう！そのときは誰も居なかった！忘れたのか！」

先ほどのピーチ姫の姿を見ていないマリオは、心底不思議そうにクツパに尋ねた。

クツパは先ほどのピーチ姫の光のない瞳を見てしまっている。

ピーチ姫の書いた狂気染みた日記の内容を見てしまっている。

その2点によってクツパはピーチ姫が限りなく黒だと認識していた。

「それは……もしかしたら見えない位置にい——」

「あり得ないことを言うな。あのベランダは窓枠までしか広がっていない。どこにも隠れることなど出来ぬのだ」

否定しようとするマリオの言葉をクツパは切り捨てる。

ピーチ姫の部屋のベランダはそこまで広くなく。

クツパの言うように窓枠までの幅しかない。

仮に隠れるとすればベランダのふちにぶら下がるくらいしかないのではないだろうか。

と、ここでクツパは気づく。

ピーチ姫が再び光のない瞳でこちらを見てきており、何かを呟くように口を小さく動かし続けていることに。

ピーチ姫のそんな姿を見て、クツパは思わず後ずさった。

「マリオ……、アレは……アレは本当にピーチ姫なのか……？」
「本当にどうしたんだ？」

すぐにでも逃げてピーチ姫から離れたい。

そんな思いを堪えながらクツパはマリオに尋ねる。

ピーチ姫の異常に気づかないマリオはクツパの言葉に首を傾げる。

「さあ、お茶にしましょう？こんなに天気が良いんですもの。それともケーキを焼きましようか？新しいケーキを作ってみようかとも思っていたのよ」
「え……？」

黙って待つことに限界がきたのか、ピーチ姫がマリオへ向けて話しかける。

話しかけてきたピーチ姫の言葉に、マリオは違和感を感じた。

自分は何に違和感を感じた？

お茶を飲むお誘い？……………違う。

ケーキを焼くということ？……………違う。

新しいケーキ？……………違う。

そして、マリオは気づく。

ピーチ姫が『今日は天気が良い』と言っていたことに。

ピーチ城の周囲は「悪意」の膜に包まれていて薄暗く、どう考えても『今日は天気が良い』なんて言える天気ではないのだ

違和感に気づいたマリオは思わず身構えた。

身構え「てしまっ」た。

「どうしたの？どうして私を見て構えているの？どうしてあなたは私の側に来てくれないの？どうしてそんな目で私を見るの？どうして、どうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうして……」

「ピ、ピーチ姫?!」

「距離を取れ、マリオ!」

身構えたマリオの姿を見て、ピーチ姫は頭を抱えて俯いていく。

そして次の瞬間、ピーチ姫の服から黒い触手が生え、マリオへと向かっていった。

突然のピーチ姫の変わりようにマリオは驚き、反応が遅れてしまう。

クツパの言葉に反応する前にマリオの足が黒い触手によって絡め取られ吊り上げられてしまった。

触手は赤く明滅しており、マリオが体を揺すってもびくともしない。

「くっー！」

「私の、私だけのマリオ………。あなたにはワタサナイ……。」

吊るされたマリオの頬を撫で、ピーチ姫はクツパへと向き直る。

その瞳には明確な敵意の色があった。

第29話

足を触手に絡め取られて吊るされたマリオの横でピーチ姫はクツパを睨み付ける。

「どうして私ではなくあなたがマリオの隣にいるの？ずっと一緒にいたのは私よ？私がマリオのことを一番知っているのよ？」

吊るされて動けないマリオの頬を撫で、ピーチ姫はゆつくりとクツパの方へと歩いていく。

光のない瞳で睨み付けながら、ピーチ姫は独り言のように呟く。

不意にピーチ姫の服に変化が起こる。

ピンク色の可愛らしいドレスから、光すら通らないような漆黒のドレスへと変わった。

「今日のこれだって、マリオを私だけのものにするためにつくつたのよ？なのに貴女みたいな泥棒猫も一緒に城に入ってきて……」

窓の外の「悪意」の膜をチラリと見ながらピーチ姫は言葉を紡ぐ。

感情のこもらない言葉に、クツパの中の恐怖は加速していく。

「なんで！」

「つつ?!」

少し離れた距離でピーチ姫は叫びながら腕を振る。

するとマリオを吊るしているのは別の触手が生え、ピーチ姫の腕の動きに連動するようにクツパの肩を強く打ち抜いた。

「なんで！私じゃ！ないの！なんで！私に似た！貴方なの！なんでなのよ！」
「くっ……」

ピーチ姫は叫びながら腕を振るい、クツパの体を触手で叩いていく。

触手によって叩かれ、クツパの体に赤い跡ができていく。

「頼む！俺を置いて逃げてくれ！」

「だが——ぐっ！」

どんどん肌が赤くなっていくクツパの姿に、マリオは思わず声をあげる。

動きやすさを重視して露出の多い服を着てきたことによって、触手はクツパの体に直接あたっていた。

「ワガハイだけが逃げるわけにはいかぬ！この城を出るのは貴様と2人でだ！」

振るわれる触手を防ぎながら、クツパはマリオへと叫ぶ。

そんなクツパの姿に、ピーチ姫は不愉快そうに顔をしかめた。

「気に入らない………。気に入らない。気に入らない。気に入らない！マリオは私
のものなの！誰にも渡さない！」

「がっ?!」

「マリオ?!」

触手を周囲に叩きつけ、ピーチ姫は叫ぶ。

そして、何を考えたのかピーチ姫はマリオの腹部へと触手を突き刺した。
触手が突き刺さった衝撃でマリオの体はくの字に曲がり、固定される。

「何をしている?!マリオを殺す気なのか?!」

「マリオを殺す?バカなことを言わないで。マリオが私のものだという証を贈るだけ

よ」

「が?!つあああああああああ?!?!?!?!?!」

ピーチ姫が指を鳴らすと、マリオへと突き刺さった触手が脈動を始める。
それと同時にマリオは叫び声をあげた。

「マリオ?!」

「やめ?!がつ?!ぐうつ……ぎつ?!」

マリオの異変にクツパは叫ぶ。

しかしマリオにはクツパのことを気にしている余裕はなかった。頭をハンマーで殴られたかのような強い衝撃。

途切れることなく流れ込み続ける不快感。

目に映るもの全てを壊したくなる破壊欲求。

そして、ピーチ姫の声で甘く囁いてくる破壊への誘惑。

それら全てが同時にマリオの中へと流し込まれていた。

「ふふふ。誰も抗えない、これでマリオは私のものよ?!!??」

「ああああアアアああアaアああアaAaああ!!??!?!?」

ガクリ、とマリオから力が抜ける。

そんなマリオの姿をピーチ姫はとても嬉しそうに眺めていた。

「マリオ!どうしたのだ!おい!」

叫び声が止まり、力の抜けたマリオは床へと下ろされる。

尋常ではないマリオの様子にクッパは慌ててマリオへと近寄った。

「あらあら、近くにいくと危ないわよ？」

「な——につ?!」

ピーチ姫の言葉が終わったのと同時、クッパの腕が何かによって打ち抜かれた。あまりの衝撃にクッパはよろめき、自身の腕を打ち抜いた者の姿を見る。

「どうしたというのだ——、マリオ!!」

「アははははハはハハハはハはハはハはハは!!」

クッパの腕を打ち抜いた者、それは先ほど叫び声をあげて倒れたマリオだった。

第30話

クツパの腕を打ち抜いた体勢で止まったマリオは不気味に笑い声を上げる。そして、マリオの瞳から光が消えていた。

「くっ、まさかマリオが……」

「ふふふ、どうかしら？これで完全にマリオは私のもになったわ」

信じたことはないことだが、マリオは「悪意」に犯されてしまったのだろう。

笑っているマリオの姿を見て、ピーチ姫はとても嬉しそうにしている。

笑っているマリオを見ながらクツパは思考する。

現状は最悪であり、状況を打破する手段も、逃走する手段もない。

自身が持っているのは動かなくなってしまったスーパークラウンのみ。

状態としては完全に積み、と言ったところだろう。

「もう貴女にできることは何もないわね。ここまでマリオに助けられてきたんでしょう？だから、最後はマリオに殺してもらいなさい!!」

「ひいやっふうううううー!!!」

ピーチ姫の言葉が引き金になったのか、マリオは弾かれたようにクツパへと襲いかかる。

もとの姿であれば見慣れた光景だが、女性の姿になってからマリオに襲われるのは初めてのことであり、クツパは今までにないショックを受けた。

「くっ、マリオ!ワガハイが分からぬのか!」

「くははははっひやははは!!」

クツパの呼び声も届かないらしく、マリオは不気味な笑い声をあげながらクツパを攻撃し続けた。

『くそっ！止まれ、止まれよ！』

光の差さない闇の中、四肢を拘束されてマリオはいた。

目の前には大きなスクリーンがあり、起きているであろう光景が流れている。

拘束されて動かないはずの右手がクツパの腕を殴る光景。

拘束されて動かないはずの左足がクツパの足を払って倒す光景。

何度もクツパを攻撃し、何度もクツパを吹き飛ばす。

繰り返される光景にマリオは体を止めようと必死にもがく。

『やめろ！クツパを傷つけるんじゃない！やめろおおおおお！』

何度目の攻撃だろうか、ついにクツパは起きあがれなくなってしまった。

意識はあるが床に倒れ伏すクツパにゆっくりと近づいていく光景が流れる。

『ちくしょう！止まれよ！止ま——れ？』

不意にスクリーンの端で、自身の左手の小指がピクリと動いたことに気づく。もしや、と思いマリオは左手を意識して動かすイメージを強めていく。

すると再び、今度は左手の指が全て開閉できた。

しかしすでに自身の体はクツパの目の前におり、その体へと右手を伸ばしていた。

『左だけでもやれるだけやってやる！』

右手がクツパの体へと触れる直前、マリオは左手を操り右手を押さえ込んだ。

マリオが自身の腕を押さえたことにクツパはゆっくりと立ち上がりながら驚く。

「なにが………？」

「どうしてとどめを刺さないの！」

笑い声をあげるのを止め、自身の右手を左手で押さえるマリオにクツパは不思議に思

いながら距離をおく。

一方でマリオが動きを止めたことに、ピーチ姫は不愉快だと言わんばかりに叫ぶ。

『とどめを刺す？冗談じゃない。従う気なんてないよ』

叫ぶピーチ姫の言葉にマリオは左手を操ることに全神経を注ぎながら答える。

そしてクッパが離れたことを確認し、マリオは左手を操り、自身の顔を思いきり殴った。

『ぐうっ！』

顔を殴った衝撃によってマリオの体は後方へと倒れる。

自分の拳が当たって顔が痛い。

だがそれ以上に、クッパを攻撃すると心が痛かった。

『クッパ。悪いけど、後のことを任せるよ』

マリオはスクリーンに映るクツパに微笑む。

自身の体が起き上がる前に左手を体に向け、息を吐く。

そして――

『・・・・・・・・・・スーパーファイア』

自身の体に炎を放った・・・・・・・・

第31話

クツパとピーチ姫の前でマリオが自身の体に向けて炎を放った。

突然の事態に現実味を感じられず、2人はマリオの全身に炎が回る光景がスローモーションに思えた。

そして、炎を放った左手が床に落ちる。

「あ……………?」

「え……………?」

左手が床に落ちた音で、クツパとピーチ姫の意識はマリオにハッキリと向けられた。

燃える——誰が?

燃える——自身の愛するマリオが。

燃える——なぜ？

燃える——自らに火を放つて。

「マリオおおおおお!!」

「いや、いやいやいや、いやああああ!!」

マリオの体が燃えていると認識し、2人は叫ぶ。

炎に包まれるマリオのもとへ、痛む体を無理矢理に動かしクツパは駆け寄る。

炎を消そうと手で叩くが、炎の勢いは一向に収まらない。

「何をしている！貴様も手伝わぬか！」

「無理よ！その炎はファイアボールなんかとは比べ物にならないほど強いよ?!」

頭を抱えてへたりこむピーチ姫にクツパは叫ぶ。

しかしピーチ姫は嫌々と首を振りながら怒鳴り返した。

事実、マリオが自身に向けて放った炎、スーパーファイアはファイアボールを裕ゆうに越える火力を持っており、その炎は収まる気配はなかった。

「それでも……。それでも、ワガハイはマリオを助ける！この手が燃えてこの炎が消せるのなら、いくらでもこの手を燃やして見せるのだ！」

「……私だつて。私だつて消したいわよ！でも、兵士たちは動けないし、私一人が水を持ってきても全然足りないのよ！」

自身の手が焼かれようと、クツパはマリオの全身を燃やす炎を消そうと手で叩き続ける。

その姿を見てピーチ姫は叫ぶ。

事実として、ピーチ城内のキノピオ兵は全てが「悪意」に犯されており、まともに動かすことができないのだ。

確かに命令をすることはできる。

だが、命令の内容は簡単なものしかできず、実行中に何かにぶつかるなどが起きると命令がリセットされてしまうのだ。

分かりやすいもので図書室にいたキノピオだろう。

彼はスーパークラウンを捕まえるように命令を受けていた。

しかし、マリオが叫んだことによつてマリオを認識し、スーパークラウンを捕まえるという命令がりセットされてしまったのだ。

確かに口調は戻つてはいなかったが、それは命令の名残であり、すぐにもとのものへと戻つてしまう。

「水………液体！」

ピーチ姫の叫びにクツパは何か気づいたのか、慌てて部屋の中を見渡す。

そして目的の物を見つけたのか、一目散に日記の置かれていた机へと向かつていった。

「これがあれば………」

クツパが手に取つたのは一本のペーパーナイフだった。

「もしも、うまく炎が消えたら後は任せたぞ」

「何を………する気なのよ………」

燃えるマリオの前に立ち、クツパはペーパーナイフを逆手に構える。

とつぜん走り出してペーパーナイフを手に戻ってきたクツパの行動にピーチ姫は困惑する。

そしてクツパは、奇しくも先ほどのマリオと同じように微笑んだ。

「ここに水がないのなら、代わりに液体を出すまで！」

そう叫んでクツパは、自身の体にペーパーナイフを振り下ろした。

ペーパーナイフとはいえ勢いをつけて振り下ろせば人の肌を容易く貫く。

クツパは自身の血液でマリオの炎を消そうと考えたのだろう。

しかしペーパーナイフはクツパの体に当たる直前、何かに阻まれるようにそれ以上進むのを止めた。

「くっ?!」

それ以上ペーパーナイフが進まないことにクツパは焦り、力を込めていく。それでもペーパーナイフは微動だにせず、クツパの体に傷をつけることはなかった。

「何故だ?!これではマリオが!!」

「まったく、起きて早々にこんなピンチは止めて欲しいわ。やっぱり私がないとダメなのね?」

焦るクツパの耳に声が届いた。

「マリオは燃えてるし、あなたは自殺しようとしてるし……。でも安心しなさい？ 私が起きたからにはもう大丈夫」

それは自身の頭の上から聞こえてくる知っている声。

「このステキでパーフェクトなクラウン！ スーパークラウンが助けてあげるわ！」

先ほど動かなくなってしまった冠。

スーパークラウンがふよふよと浮かんでクツパの目の前に現れたのだった。

第32話

自身の頭の上から降りてきたスーパークラウンの姿にクツパは驚き動きを止める。クツパの動きが止まったことを確認し、スーパークラウンはクツパの手からペーパーナイフを弾き落とした。

「きさま……なぜ……」

「そんな説明は後よ。先にマリオの火を消さない」と

驚くクツパの頭にコツンと軽くぶつかり、スーパークラウンは依然として炎に包まれているマリオの方へと体を向けた。

とつぜんクツパの頭に乗っていた冠が喋り出したことにピーチ姫も思わず固まっている。

「そっちの『悪意』の本体を宿してる人も後でね。——『悪意』対策システム起動。——
 種別・炎。——人命優先度・最大。——行程・消火と同時に治療。——開始^{スタート}」

スーパークラウンの言葉に呼応するようにマリオを不思議な光が包み込んでいく。
 光からは温かな日差しのような感覚を受ける。

「——症状・全身火傷、顔面の打撲、腹部の打撲、左腕の断絶——付近に左腕を確認、回収し治療に回す。——『悪意』の汚染を確認。——追加行程・『悪意』の浄化」
 「マリオ！」

光は徐々に弱くなっていき、マリオの姿がハッキリと見えるようになる。

近くに着ていた左腕もいつの間にかマリオの近くにあり、光の筋のようなものが伸びている。

マリオを包んでいた炎はすでに消えており、痛々しい火傷の痕が全身に残っていた。
 しかし、その火傷も光が集まっていくと徐々に治っていく。

さらに左腕も縫い合わさるように光の筋が編み込まれていき、もとの位置へと戻っていく。

そして光が完全に消えると、どこにも火傷の痕はなく、左腕も元通りになっているマリオの姿がそこにはあった。

傷のなくなったマリオのもとへクツパは慌てて駆け寄る。

「——最終確認・異常無し、^{ラストチェック}“悪意”の残留も確認されず。対象の完治を宣告。……ふう、流石に初めての治療だったから心配だったけど。上手くいって良かったわ」

マリオの治療が終わったらしく、スーパークラウンは短く息を吐く。

やり切ったような雰囲気を出しているが、クツパはスーパークラウンが聞き捨てならないことを言ったことに気づく。

「おい、初めてとはどう言うことだ?!

「仕方がないでしょ! 私が生まれた時には周りに“悪意”ばかりで封印するしかできなかったのよ! 今はあなた達の持つてる“愛”でできるようになったんだから!」

マリオを抱き寄せながらクツパは叫ぶ。

クツパの心配ももつともだが、スーパークラウンの生まれたタイミングを考えると仕

方のないことだろう。

スーパークラウンは「愛」の感情をエネルギーとして動く。

しかし、スーパークラウンが生まれた時にはすでに「悪意」が拡がっており、封印以外の機能はまともに使えなかったのだ。

「とりあえず、まずは『愛』が満ちている内に『悪意』の本体を浄化しちやいましょう。今なら【喰ラウンモード】で一気にやれちやうんだから！」

そう言つてスーパークラウンはピーチ姫の方へと体の向きを変える。

そしてスーパークラウンが【喰ラウンモード】と言つた瞬間、スーパークラウンの姿は小型の箱へと変化した。

「は、は……？」

「私はステキでパーフェクトなクラウンだけど……。素早くパクツと喰ラウンでもあるのよ！」

「え？——きやあああああ?!」

起きている事態に着いていけず、固まっていたピーチ姫の頭上へとスーパークラウンは移動する。

そしてピーチ姫の頭上で回転を始め、凄まじい勢いで吸い込み始めた。

「あ、ああああ?!?!力が．．．．．力が抜けていく．．．．．」

「確かにすごい量ね。でも、まだまだいけるわ!」

スーパークラウンの吸い込みに合わせてピーチ姫の体から黒いもやのようなものがどンドン吹き出し、スーパークラウンへと吸い込まれていく。

やがて黒いもやの吹き出る量が減ってきたとき、*“それ”*はピーチ姫の中から現れた。

「グルウオオオオオオ!!!」

頭からは角が生え、鋭い爪を持ち、背中には大きなトゲ甲羅。

*“それ”*は影のように真つ黒であったが、どう見てももとの姿のクツパだった。

「・・・・・・・・あれ、ワガハイなんだよなあ」

客観的に見て、小さな箱へと吸い込まれていく巨大な怪獣。

しかし、その巨大な怪獣は慌てふためきもがきながら箱から逃げようとしている。正直に言つて、クツパはあまりにも情けない姿に見えられなくなっていた。

「これで、終わり!!」

「グギャアアアアアア・・・・・・・・」

そう言つてスーパークラウンは、黒いクツパを完全に飲み込んだ。

最後の叫び声をあげて黒いクツパの姿はスーパークラウンの中へと消えていった。

「力が・・・・・・・・なくなつ・・・・・・・・」

黒いクツパが飲み込まれたのと同時にピーチ姫はゆっくりと床へと倒れた。見るとピーチ姫のドレスも黒からもとのピンクへと変化している。

「ピーチ姫?!」

「『悪意』が抜けて気を失ったのね。大丈夫、命に別状はないし、後遺症もないわ」

倒れたピーチ姫にクツパは驚き声を上げる。

スーパークラウンの言葉にピーチ姫の様子を確認してみると、意識がないだけで呼吸や脈などは安定していた。

「まったくもう。私が寝てる間に何があったのよ?」

「つと、そうだ! きさま、なぜ動かなくなっていた! 無事に戻ってくる手筈だったであろう!」

マリオの頭を膝に起き、クツパはスーパークラウンに向かって怒鳴る。

この部屋に続く廊下で、スーパークラウンはちゃんと戻ると約束をしていたのに、動かない状態に戻ってきたのだ。

もう二度と動かないのではないかと思っていたクツパにとって、自分でも今どんな感情になっているのか分かっていない。

「し、仕方がないじゃない……扉が閉まっちゃって開けられないから叩いて呼び掛けたんだけど開けてくれないんだもん……」

クツパに怒鳴られ、スーパークラウンは気まずそうに小さく答えた。

先ほどまでの自信満々の姿から一転して、小さくなっているようにも見える。

「そこは……、まあ、ワガハイたちも扉を開ければ良かったがな……。それでも、せめて動いているべきであろう！」

「だってあのおじいさんに捕まっちゃったんだもの。あなた達の近くに行ければ『愛』の感情はあるだろうから再起動できるって信じて、おじいさんの『悪意』を浄化したのよ。知り合ひみたいだったから動けなくなってもあなたに渡してもらえるかと思っただし……」

クツパの言葉にスーパークラウンは顔を逸らすように横を向きながら答えた。

結果としてクツパたちのもとへ戻ってこれたものの、運が悪ければそのままキノじいは1階にまで降りていただろう。

「う、ううん……」

「マリオ、起きた——かつ?!」

マリオが小さく声をあげる。

その声を聞き、クツパは嬉しそうに話しかける、が途中で言葉に詰まってしまった。なぜならマリオの手が動いて、クツパの胸をわし掴んでしまったからだ。

「あれ……、俺は……。何か柔らかいものが……」

ふにふにと何を触っているのかを確かめるために、マリオは手を動かす。それに連動するように、クツパの顔もどんどん赤くなっていく。

「いつまで……」

「ん……?クツパ……?」

目が覚めたばかりでぼんやりとした頭にクツパの声が届く。

声は頭の上から聞こえてくるようで、何やら頭の下からは微妙に震えるような振動も

感じる。

「いつまでワガハイの胸を揉んでいるつもりだあああああ!!!」

「は?!:え?!:ちよ、ま?!:ごめええええええん!!!」

クツパの叫びに完全に意識を取り戻したマリオの目に写ったのは、クツパの胸を揉んでいる自分の手と、顔を真っ赤にして拳を振り下ろしてきているクツパの姿だった。

第34話

頬を押さえ、申し訳なさそうにマリオはクツパを見る。

意識を失っていた自分のことを^{いたわ}労ってくれていたクツパの胸を揉んでしまい、とてもすまなく思っていた。

ただし、心の片隅ではクツパの胸の柔らかさと大きさにドキドキとしている気持ちもあつたが。

「あいたたたたた……」

「せつかく治したのに」

「知らぬ！」

せつかく治療をしたのにまた頬に打撲を作ったマリオにスーパークラウンは呆れて
眩く。

そして、クツパはマリオから完全に体を逸らし、そっぽを向いていた。

ちなみに、マリオの位置からは見えないが、スーパークラウンの位置からはクツパの表情が見えており、クツパが顔を赤くしながらも、少しだけ嬉しそうにしているのが分かった。

「それで、今はどんな状況なんだい？」

「きさまは自分に火を放って気絶していたからな……」

「そうね。ピーチ姫の中にあつた『悪意』の本体は『喰ラウンモード』で食べちゃったから。もう、問題はないわ」

マリオの問いに、スーパークラウンは得意気に答える。

【喰ラウンモード】と言われてもマリオにはさっぱり分からず、首をかしげていた。

「えっと、とりあえずはもう心配事はない感じかな？」

「そうだな」

「ええ！」

よく分からないまま、とりあえずマリオは確認をする。

正直、自信満々なスーパークラウンだけでは不安感があったが、クツパも領いているので本当に大丈夫なのだろう。

と、ここでマリオはピーチ姫が倒れていることに気づく。

「ピーチ姫が倒れてるじゃないか。ちゃんとベッドに寝かさないと」

「む………！」

「あらあらまあまあ」

ピーチ姫の首と足の下に手を入れて、横抱きにしてマリオはピーチ姫をベッドへと運ぶ。

マリオがピーチ姫を横抱き——いわゆるお姫様抱っこをしたことにクツパはムツとし、わずかに頬を膨らませた。

マリオは気づいていなかったが、その様子を見ていたスーパークラウンは楽しそうにその体を揺らしていた。

「それで、これからどうするんだい？ “悪意”を倒し終わったんだらう？」

「そうね。私は『悪意』の本体が誰かから奪っていたこの、でつかい亀みたいな姿を持ち主に帰そうかしら」

「……………ん？」

ピーチ姫をベッドに寝かせ、マリオはスーパークラウンに尋ねる。

『悪意』を倒し終えたということはスーパークラウンのやることもなくなったということだからだ。

スーパークラウンの言葉に、マリオは思わずクツパを見る。

マリオの視線にクツパは思わず目を逸らした。

「え〜つと……………」

「『それ』……………、ワガハイなんだが……………」

「……………はい？」

頬を掻き、困った表情をマリオは浮かべながらクツパとスーパークラウンを見る。

スーパークラウンはクツパが最初から女性だと思っていたため、固まってしまった。

「え？あれ？クツパの本来の姿？」

「ああ」

「今の姿じゃなくて、あの……、たぶん男の姿？」

「……ああ」

スーパークラウンの言葉にクツパは答え辛そうに頷く。

“あの”姿は正しく自分本来の姿、それは紛れもない事実。

それでも叶うことならクツパは否定をしたかった。

もとの姿に戻ってしまえばマリオへ抱いたこの感情が叶うこともなくなる。

それがクツパにはとても辛かった。

クツパが頭の中でぐるぐると考えていると、スーパークラウンが近くへと飛んできて小さな声で話しかけてきた。

「ねえ、あなたはマリオのことが好きなのよね？」

「ああ、好きだ……。ワガハイはマリオのことが好きだ」

流れそうになる涙を堪えながらクツパは認める。

自身がマリオを好きだと自覚はしていた。

そして、口にして誰かに宣言することによってその思いはさらに強くなる。

「ワガハイは……、マリオが……好きなんだ……。どうして……、
「こんな……」

思いが強くなり、ついにはクツパの目から涙がこぼれた。

言葉に詰まりながら、必死にスーパークラウンへ自身の思いをぶつける。

どうして、マリオを好きになってしまったのか。

どうして、自分は女じゃないのか。

どうして、もとの姿へ戻れてしまうのか。

スーパークラウンはクツパのそんな思いを言葉から感じ取った。

第35話

変わってしまった姿からもとの姿に戻れる。

これだけを聞けばとても良いことだろう。

しかし、クツパは涙が止められない。

もとの姿には戻りたくない。

マリオへのこの思いを捨てたくない。

そんな思いから、クツパは涙を流していた。

「ク、クツパ?!」

「待ちなさい」

クツパがとつぜん泣き出したため、マリオは驚き有めるために近くへ行こうとする。しかし、それをスーパークラウンが制止した。

「マリオ、城の中の様子を確認してきてちょうだい。『悪意』から解放された人たちはピーチ姫と同じように気絶しているはずよ。そのまま放置はできないわ」

「あ、ああ。クツパは大丈夫なのか？」

「問題はないから、早く行きなさい！」

スーパークラウンはマリオに城の中にいるキノピオたちの確認をしてくるように言った。

武器を持っていたり、階段などで気絶しては危ないため当然のことだろう。

泣いているクツパのことが気になりながらも、マリオはピーチ姫の部屋から出ていった。

「どうして……どうして……」

涙を流しながらクツパはうわ言のように呟く。

そんなクツパの頭の上にスーパークラウンは乗った。

「追いつめちゃったみたいね。安心して、別にもとの姿に戻らなくても良いのよ。姿を奪われた人が困ってるんじゃないかって思って返そうと考えただけなんだから。だからあなたの心に素直になって」

「ワガハイは……、このままでいいのだ……。このままマリオを好きでいいのだ！」

スーパークラウンの言葉にクツパは自身の肩を抱きながら叫ぶ。

クツパの心からの叫びにスーパークラウンは満足したのか、クツパの頭を撫でるように体を動かした。

「それで良いのよ。今のあなたは女の子、自分の心に素直に生きるのが正解よ」
「スーパークラウン……」

先ほどまでの悲痛な涙とは違う涙がクツパの目からこぼれた。

自分はこのままで良いのだと。

このままマリオを好きでいて良いのだと。

そんな喜びの涙だった。

不意にピーチ姫の部屋の窓が開き、1人のカメツクが現れた。

「クツパしやまあああああ〜っ!!」

「カ、カメツクおばば?!」

窓から飛び込んできたのは箒に乗った年老いたカメツク、カメツクおばばだった。カメツクおばばは部屋の中を飛び回ると、クツパの目の前で停止する。

「クツパしやま! 姿形は変わっていようとまあたくしカメツクにはよく分かりますぞ! ああ、帰ってこないのでも心配しました! 今までどちらにおられたのですか?!」
「お、落ち着いて欲しいのだ!」

クツパが見つかったことによる興奮からか、カメツクおばばは高いテンションでクツパに話しかける。

あまりの剣幕にクツパはわずかに引いていた。

「それで、これからどうするのですか? ピーチ姫も寝ているようですし、拐いますかな

「？」

チラリとベッドに寝かされているピーチ姫を見て、カメックおばばはクツパに尋ねる。

確かにもとのクツパであつたら拐うだろう。

しかし、今ここにいるのは姿が変わり、愛を知ったクツパ。

だからこそ、クツパは首を横に振った。

「カメックおばば、もうピーチ姫はよいのだ」

「クツパしやま？」

「ワガハイの配下たちにも苦勞をかせさせたな……」

自身の欲望に任せてピーチ姫を拐い、そしてマリオの撃退を命じる。

さらには城の警備や食事の用意、ピーチ姫の世話まで、今までに配下たちに命令してきたことをクツパは思い返していく。

「思えば、ワガハイはあまり良い長ではなかったかもしれぬ……」

「そんなことは——」

「だからな、おぼば。最後のワガママなのだ」

クツパの言葉を否定しようとするカメツクおぼばの言葉を遮り、クツパはまっすぐにカメツクおぼばを見る。

「どうか……、どうか、ワガハイにマリオを好きでいさせて欲しいのだ」

「クツパ……しゃま……」

クツパにまっすぐに見つめられ、カメツクおぼばはクツパの目を見る。

クツパの目からは、言った言葉が本気だと言うことが伝わってきた。

「……クツパしゃま。我らがクツパ軍の規律は覚えておりますかな？」

「ああ……。1. マリオを見つけたら倒すべし。2. ピーチ姫には優しくすべし。3. 卑怯な手段で戦うべからず。4. 手段は禁ずるが戦術は組むべし。5. クツパ軍に所属していることに誇りを持つべし。であつたな」

カメックおぼぼの問いに、クツパは自身の軍の規律を答えていく。

先ほどの自身の言葉は明らかに1の規律を破っている発言だとクツパは分かっていた。

だが、それでも言わずにはいられなかったのだ。

「そうですね。ですが、クツパしゃまには言っておられません、わたくしたちにはもう1つだけ、規律があるのですじゃ」

「なに……?」

自身の知らない規律がある。

カメックおぼぼの言葉にクツパは驚き、声を出す。

そしてカメックおぼぼは、クツパへ優しく微笑みながらも1つの規律を言った。

「それはですな。……、6. クツパ様が幸せになることを全員が願うこと。ですじゃ」

「カメックおぼぼ……!」

予想外の規律に、クツパは一瞬だけ固まり、再び涙を流した。

ああ、自分はこんなにも配下たちに恵まれている、と。

こんな自分のことをここまで慕ってくれてありがとう、と。

涙を流すクツパをカメツクおぼは優しく抱き締めて背中をさするのだった。

第36話

泣きじゃくるクツパの背中をカメツクおばは優しくさする。

クツパ軍規律、その6・クツパ様が幸せになることを全員が願うこと。

配下たちからそこまで思われていたことが、クツパはとても嬉しかった。

「グスツ………良かったわね、クツパ」

「うむ！」

「おや？そちらのクラウンは？」

若干涙ぐんだ声が聞こえてきたことにカメツクおばは不思議に思い、スーパークラウンの存在に気づいた。

先ほどからクツパの頭の上に乗っていたのだが、本当にクツパのことしか見えていなかったのだろう。

「こやつはスーパークラウンだ。『悪意』というものを浄化するための存在だな。」

「はあ……『悪意』ですか？」

『悪意』との関わりが一切ないため、カメツクおぼはハテナマークを浮かべて首をかしげた。

まあ、知らない者からしたら当然の反応だろう。

「『悪意』が何かは分かりませぬが。クツパしゃま、一度ご帰宅くださいませ。配下たちもクツパしゃまが帰ってこないことを心配しておりますから」

「そう……だな。心配をかけ続けるのも悪いから、一度帰ることにしよう」

カメツクおぼの言葉にクツパは配下たちの姿を思い浮かべる。

正直に言えば、配下たちに受け入れられるか心配は残っている。

カメツクおぼの言う規律の6もカメツクおぼから聞いただけだからだ。

それでもクツパは勇気を出してクツパ城に帰ることを決めた。

配下たちが自分のことを受け入れてくれると信じて。

「それではクツパしやま。わたくしは先に城に戻って配下たちに報告してきますじや」
「頼んだぞ。ああ、ついでにワガハイのクラウンも持っていつてくれ。セキュリティを
書き換えねば乗れぬのでな」

ふわりと箒に乗ってカメックおばは飛び上がる。

そして、クツパに頭を下げると入ってきたときと同じように窓から飛び去っていつた。

「あなた、結構慕われてるのね？」

「ガハハハ！まあ、ワガハイだからな！」

先ほどまで泣いていたのは誰だったのか。

スーパークラウンの言葉にクツパは、いつもの自信あり気な様子に戻っていた。

クツパが笑っていると、城の中の様子を一通り確認してきたのか、マリオが戻ってきた。

「ふう。どうやら危険なことになっているキノピオはいなかったよ。しいていうなら俺たちが拘束してきたキノピオたちの姿が危険だったかな」

「ああ、パンツ剥き出しで手足を固定されていたからな……」

マリオの言葉にクツパは、拘束したキノピオたちの姿を思い出す。

どのキノピオもそれぞれが履いていたズボンで足を拘束されており、着ていた上着で腕を後ろ手に縛られているのだから、確かに危険な姿だろう。

「なに、ワガハイたちを襲ってきたのだ。気にすることでもあるまい」

「そういうもんかねえ？」

クツパの言葉にマリオは、首をかしげながら部屋の扉を閉める。

疑問には思いつつも、拘束を解きに行く気はないようだ。

「……うん」

「ぬ？どうしたのだ、ワガハイをジロジロと見て」

マリオが自身の顔を見ていることに気づいたクツパは、マリオに尋ねる。

尋ねながらクツパは、目元が赤くなっているのかと確認をした。

確かに先ほどまで泣いていたから目元は赤くなっているが、それほど目立つものではない。

「いや、さつきまで泣いていたからさ。今の自信あり気な調子の方がクツパらしくて好きだ、な……」。ちよ、ま、今のなし！今のなし!!」

「な……ななな……」

クツパの言葉にマリオは、ポロリと本音が漏れてしまったのだろう。

言葉の途中で自身の言った言葉に気づき、顔を赤くしながら慌てて訂正しようとする。

まっすぐにマリオから好きと言われ、クツパは顔を真っ赤にして混乱していた。

マリオは今なんと言った？

ワガハイのことが好きだと言ったか？

嬉しさと恥ずかしさの混ざった感情にクツパは目をぐるぐると回して頭から煙を出して倒れてしまった。

「きゆう……」

「ク、クツパアアアア?!」

顔を赤くして倒れたクツパをマリオは慌てて抱き寄せる。

このときにうっかりとクツパの胸を掴んだりはしないようにマリオは気を付けた。

気絶から起きるときにやらかしている分、マリオは細心の注意を払ってクツパを抱き寄せるのだった。

「ワ………ワガハイも………ワガハイも………」

そして、倒れたクツパはうわ言のように呟き続けるのだった。

第37話

城とピーチ姫のことをキノじいに任せ、マリオたちはピーチ城から出た。道を歩く2人の顔は赤く、少しだけぎこちない空気を感ずる。

「あー．．．．．。その、なんだ。変なことを言つてごめんな？」

「い、いや、気にはしておらん．．．．．」

頬を掻きながらマリオはクツパに話しかける。

お互いに相手の顔が赤いことには気づいていたが、触れることはなかった。

「そういえば、あなたあのことを言わなくていいの？」

「む？．．．．．ああ、あれか」

「あれ？」

スーパークラウンの言葉にクツパは少しだけ考え、あのことは何のことを言っているのか理解した。

何のことか分からずマリオは首をかしげる。

「なに、ワガハイが1度城に帰るということだ。配下たちに心配をかけさせているようだからな」

「なるほどね。少し寂しくなるな」

クツパの言葉にマリオは頷きながら答える。

ちなみにマリオは気づかずに流していたが、クツパは「1度城に帰る」と言っており、戻ってくるつもりなのがうかがえた。

「それなら私は世界を見に行こうかしら。この時代がどんなものになってるか分からないし」

不意にクツパの頭の上からスーパークラウンは飛び上がり、マリオたちの前に移動し

た。

その口調からは隠しきれないほどの現代への興味が溢れていた。

「まあ、今日は疲れたからな。ワガハイは明日帰るさ」

「ふーん？ 私は今からでも行くわよ！ どんなことになつてるか楽しみだもの！」

軽く伸びをするクツパに対して、スーパークラウンは元気に飛び上がる。

そのまま飛んでいくのかと思いきや、クツパの近くへと飛んできて、耳元で止まった。

「今日は2人きりだし、明日には帰るんでしょう？ なら、今日がチャンスじゃない？」
「チャンス？」

スーパークラウンが何を言っているか分からず、クツパは首をかしげる。
そんなクツパの様子など気にも止めず、スーパークラウンは話を続ける。

「ええ！ 子づ——」

「吹っ飛んでいってしまええええええええええ!!」

「——くりやあああああ?!?!」

言葉の途中でスーパークラウンが何を言おうとしたのか理解したクツパは、素早くスーパークラウンを掴むと空の彼方へと放り投げた。

奇妙な叫び声をあげながらスーパークラウンは飛んでいってしまった。

なんとも締まらない別れではあったが、マリオたちは特段気にもしていなかった。世界は広いが必ずまた会える。

そんな予感があつたからだ。

「さあ、俺たちも帰ろうか」

「そうだな。今日は世界の危機を救ったわけだから晩御飯は豪勢にしないか？」

「お、良いね。確か、良い肉がまだあつたはずだからそれを食べよう」

スーパークラウンの飛んでいった空から自宅の方へと顔を向け、マリオとクツパは歩き始めた。

晩御飯の内容についての話。

スーパークラウンがどこへ行くのかを想像した笑い話。

そんな何気ない普通の話をしながらマリオとクッパは帰り道を歩いていく。

第38話

ピーチ城から家に帰りついたマリオとクツパは、晩御飯を何にしようか自宅の台所で悩んでいた。

帰宅途中の話題では肉を使うところまでは決まっていたのだが、そこから先が決まらないのだ。

「やはり豪勢にいくのならステーキではないか？」

「いやいや、薄く切って鍋にするのも良くないか？」

「いつそ、巨大なハンバーグにすると言うのもありだと思っぞ？」

「うーん。カツにするのもありかな？」

と、このようになかなか先に進まないのだ。

そして、それから更に数分後。

「ぬううううう………。めんどくさいからステーキなのだ！」

あまりにも晩御飯が決まらなすぎてついにクツパが爆発した。そんなクツパの様子にマリオは苦笑する。

「よし、ワガハイが肉を焼こう。マリオは付け合わせを頼むぞ」
「ああ、分かったよ」

そう言っつてクツパは肉を焼き始めた。

焼き上がった肉の想像をしているのか、尻尾が嬉しそうに左右に揺れている。

「とりあえずはサラダとスープあたりかな。クツパ、ステーキにかけるソースはどうする？」

「ソースはワガハイが作っておくのだ。玉ねぎを出しておいてくれ」

冷蔵庫から野菜を取り出しながらマリオはクツパに尋ねる。

クツパの言葉にマリオは頷き、追加で玉ねぎを出しておく。

そしてマリオがサラダを作り終える頃にクツパは焼いた肉をフライパンから取ってアルミホイルで包み始めた。

「それは何をやっているんだい？」

「これか？前に料理が趣味だと言うノコノコから聞いてな。両面に焼き色がついたらアルミホイルで包んで余熱で中まで火を通すと美味しくできるらしいのだ」

クツパの行動を不思議に思いマリオが聞くと、クツパは自慢げに聞いた知識を披露した。

ステーキにそんな焼き方があるとは知らなかったマリオは感心したように頷いていた。

「さて、ソースは和風でよいな？」

「任せるよ。サラダも終わったから俺はスープを作ろうかな」

ステーキにかけるソースを作るために、クツパはマリオに出しておいてもらった玉ねぎ

ぎを手取る。

そして玉ねぎを持ちやすい形に切って、下ろし金ですりおろしていく。

「くっ……、目に来るぞ……」

玉ねぎをすりおろしていくことよってクツパは目を潤ませた。

ちなみに玉ねぎで涙が出るのは玉ねぎの成分が目に行くからではなく鼻に行くからなので、鼻を塞げば涙が出ることはない。

「まずはフライパンに酒、みりんを入れて煮たさせる。そしてその後玉ねぎと醤油を入れてひと煮たち、だったな」

料理が趣味のノコノコから聞いたステーキソースのレシピを思い出しながらクツパはソースを作っていく。

本来ならニンニクも少し入れるのだが、臭いが気になったのかクツパは入れていない。

「俺もスープを作ってしまったおう。ええと、ニンジン、玉ねぎ、ワカメを食べやすいサイズに切るか」

ステーキソースを作るクツパの隣で、マリオもスープを作り始める。
材料を見たところ、中華系のスープのようだ。

「鍋に水、鶏がらスープの素、醤油、塩、こしょう、ニンジン、玉ねぎを入れて沸騰させる。クツパ、隣のコンロを使いたいんだけど」

「む、分かった。奥にずれよう」

鍋の中にスープのベースとなる材料を入れていく。

マリオの言葉にクツパは頷き、使っているコンロの位置を変える。

「ワカメは後で入れるとして、水溶き片栗粉を用意しないと」

鍋の中身が沸騰するのを待ちながら、マリオは水に片栗粉を溶かしていく。

ほどよくとろみが出てきたところで片栗粉を加えるのを止め、沸騰するのを待つ。

「沸騰したから水溶き片栗粉を入れてスープにとろみをつける。少し煮て、その間に卵を溶いて……」

沸騰した鍋の中に水溶き片栗粉を加え、とろみをつけていく。

このときに一気に入れるととろみが強くなったりしてしまうのでゆっくり加えていくと良いだろう。

「後は溶き卵を入れて、最後にワカメを加えて完成。クツパ、そつちはどうだい？」

「うむ、こちらもできたのだ」

鍋の中をお玉でかき混ぜながら、隣のクツパに尋ねる。

するとクツパも自信満々にフライパンの中にできているステーキソースを見せてきた。

マリオの鍋からも、クツパのフライパンからも美味しそうな匂いが上がっていた。

「よし、それじゃあテーブルに運んで食べようか」

「そうだな」

マリオとクツパはそれぞれの皿にステーキを乗せ、カップにスープを入れてテーブルへと運んだ。

そして食器の準備を終え、最後にクツパがステーキにソースをかける。

「旨そうにできて良かったのだ」

「とても良い匂いだよ。じゃあ．．．．．」

「いただきます！」

食事の挨拶をし、2人は食事を始めた。

第39話

上手に焼けたステーキを食べ終え、マリオの作ったスープとサラダも全て食べきり、マリオとクツパは満足そうにお腹をさすっていた。

「ふう、食べた食べた」

「焼き加減もソースも良い具合にできて良かったのだ」

マリオがステーキを一口食べて、「旨い！」と言ったことが嬉しかったのか、クツパの尻尾は左右に揺れている。

加えて言うなら、マリオの作ったスープとサラダが美味しかったことも尻尾が揺れている要因の一つだろう。

「それじゃあ、俺が食器を洗っておくからクツパはお風呂に行つてきなよ。疲れてるだ

ろ？」

「む……それは貴様も同じであろう……。はあ、一緒に入るわけにもいかぬし先に入らせてもらおうが……」

食器をまとめて片付け始めたマリオをクツパは不満気に見る。

しかしマリオに譲る気がないことが分かると、溜め息を吐いて入浴の準備を始めた。

「分かっているとは思うが、洗面所にはいるなよう？」

「引つ張るなあ……。分かつてるよ」

浴室から出るタイミングで洗面所にいたことを掘り返され、マリオは苦笑する。

入浴の準備を終えてクツパが洗面所に行くのを見送り、マリオはまとめた食器を持って台所へと移動した。

「クツパもだいぶあの姿に慣れたんだなあ」

カチャカチャと食器を洗いながらマリオはクツパのことを思い返す。

初めの頃は、ピーチ姫を拐う悪いやつとしか印象はなかった。

それから長い付き合いで、何度も戦って、時には協力して。

いつの間にか、パーティーやレースをするときには呼ぶような、悪友のような関係だった。

「もう、戦うことはできないんだよな……」

クツパはこれからもあの姿で生きていくのだろう。

それはつまり今までのように戦うことはできなくなると言うこと。

「いつの間にか、当たり前になっていたからな……」

クツパがピーチ姫を拐って、自分がピーチ姫を助けに行く。

そんな当たり前のいつものことがもうこない。

その事実が少しだけ寂しく感じられた。

「ふう……」

食器を洗い終え、マリオは自分の分とクツパの分のコップを用意する。
洗面所の方から音が聞こえてくるので、クツパももうすぐ出てくるだろう。

「あがつたぞ」

「ああ。とりあえず麦茶を用意しておいたから飲むと良いよ」

マリオが飲み物の用意を終えるのと同時に洗面所の扉が開き、クツパが現れる。

風呂上がりには水分を失っているので、水分補給のためにマリオはクツパに飲み物を勧める。

「じゃあ、俺もお風呂に入ってくるよ」

「うむ。ゆっくりと体の疲れを取ってくるが良い」

そう言ってマリオは、クツパと入れ替わりに洗面所へと入っていった。

第40話

入浴も終わり、マリオとクツパは椅子に座って麦茶を飲んでいた。

マリオの入浴シーン？

今のクツパの姿での入浴シーンならともかくとして男の入浴シーンに需要があるとは思えないのでカットです。

「……………明日には帰るんだよな」

「ああ」

言葉は少なく、しんみりとした空気が流れる。

一緒に暮らした時間は短かったが、互いに寂しいと思っっているのは事実だった。

「マリオ……………」

「なんだい？」

静かに、柔らかな口調でクツパが話しかける。

「ワガハイを助けてくれて、本当にありがとうな」

「いきなりどうしたんだい？」

感謝を込めて、ただただ感謝を込めてクツパは頭を下げた。

とつぜんのことにマリオは少し戸惑い、クツパに尋ねる。

「夜中にいきなり来たこのワガハイを、きさまは信じて住まわせてくれた。本当は不安で仕方がなかったのだ。今までの強い体ではなくなり、部下たちは誰一人としてワガハイに気づかず、このままワガハイは一人ぼっちになってしまおうのかと」

目を閉じ、思い出すようにクツパは語る。

クツパの言葉にマリオは、今の姿のクツパと初めて会ったときのことを思い出した。

「記憶を頼りにきさまの家まで着いたが、足はボロボロで疲れ果てていた。だから、嬉しかったのだ。ワガハイを信じてくれただけでなく、住まわせて助けてくれたことが……」

「俺は……。あの時、あのままお前を見送っていたら、お前がいなくなってしまうような気がしたんだ。確かに俺たちは敵同士だったが、いなくなつて欲しいとは思わなかつたからな」

互いに相手への思いを口に出す。

一瞬、ほんの一瞬だけ、マリオともとの姿のクツパが向き合つて笑い合う姿が見えた気がした。

それはもしかしたら幻なのかもしれない。

しかし、それでも今この時だけは悪友のような関係だった頃の2人だっただろう。

「そうか。ワガハイももとの姿の時はきさまのことは嫌いではなかつたさ」

「ああ、分かつてるよ」

麦茶の入ったコップを片手に2人は笑う。

先ほどまで感じていた寂しきは、いつの間にかどこかへ行っていた。

「つと、そうだ。マリオ、歯を磨き終えたら一つお願いがあるのだが……」

「お願い？」

「内容は歯を磨き終えてから言うのだ」

思い出したようにクツパは手を叩いて言う。

そんなクツパにマリオは不思議そうに首をかしげるが、クツパはイタズラっぽく笑って洗面所へと向かってしまった。

「お願いねえ……。まあ、無茶なものでない限りは叶えてやりますか」

そう呟いてマリオも洗面所へと向かった。

歯を磨き終え、クツパはマリオのベッドに、マリオは椅子へと座る。

「それで？お願いって言うのは？」

「えつと……その……だな」

マリオの問いに、先ほどのイタズラっぽい態度はどこへいったのかモジモジとするクツパの姿があった。

視線はキョロキョロと忙しく、落ち着かないのか尻尾もうねうねと動いている。

「ま……マリオ、こつちへ来てくれぬか？」

「まあ、良いけど」

少しだけ言葉に詰まりながらも、クツパはマリオを手招きする。

それに断る理由もないマリオはクツパの近くへと移動した。

「……すまぬな」

「は？ どういう——どわあつ?!」

小さく謝罪をし、クツパはマリオの手を掴んで一緒にベッドに倒れ込む。いきなり引つ張られたことにより、マリオの口からは驚愕の声が上がった。

「く、くくく、クツパ?!」

「すまぬな、マリオ……」

驚きながらクツパの名前を呼ぶと、クツパはもう一度謝罪をしてきた。

クツパの様子がおかしいことに気づき、マリオも少しだけ落ち着く。

「カメックおぼには受け入れてもらえた。だかな……、まだ怖いのだよ……。本当に今のワガハイが受け入れてもらえるのか。今のワガハイの姿を見て失望されないか。とても怖いのだよ……」

「クツパ……」

クツパの言葉にマリオも冷静さを取り戻し、クツパの体が震えていることに気づい

た。

カメックおぼばに受け入れてもらい、規律の6番目も教えてもらった。それでもやはり、他の配下たちにどう思われるかが分からず不安があったのだろう。クツパはマリオの手を強く握りしめていた。

「頼む………。今日だけはワガハイに勇気をくれ………」

消え入りそうな小さな声でクツパはマリオに懇願する。

先ほどまでの態度や言動は、不安な気持ちを誤魔化すためのものだったのだろう。そんなクツパにマリオは何も答えず、強く抱き締めるのだった。

第41話

穏やかな寝息をたててクツパは眠る。

そんなクツパを抱き締めながらマリオは思った。

．．．．．眠れねえ。

身動きをしようにもいつの間にかクツパの手が服を掴んでおり、離れることはできない。
い。

更に言うなら、クツパを抱き締めているため、クツパの体の柔らかさがダイレクトにマリオの体に伝わってきている。

クツパの体温も合わさり、とても眠ることなどできない状態だった。

「んむ．．．．．マリオお．．．．．むにゅ」

「眠る前の不安そうな顔はなんだったんだか．．．．．」

服を引っ張って、頭をグリグリとマリオの体に押し付けながらクツパは寝言を呟いた。

クツパの体をポンポンと優しく叩きながらマリオは小さく息を吐く。

穏やかに眠るその表情からは、眠る前に不安そうな表情をしていたとは思えないほどだ。

「ま、この寝顔が見ただけだけ良いかな」

眠るクツパの頭を優しく撫で、マリオは目を閉じて眠りにつく。

クツパにちゃんと勇気を与えられるように、その手を握り締めながら。

「やっぱり、眠れねえ……」

……眠りについた、はずだ。

自身を包み込むような優しい感覚にクツパは目を覚ます。

「——なっ?!」

目を開いて最初に目に入るのは至近距離にあるマリオの顔だった。

思わず声が出かかるが、どうにか口を閉じて叫ぶのを堪える。

クツパの頭の中はぐるぐると混乱し、昨日の寝る前の自身の行動を思い出した。

不安だったからと何をやっているんだワガハイはあああああ!!

ま、ままま、マリオの顔がこんなに近くに……!!

頭の中でクツパは咆哮する。

いきなりあんなことをしてマリオに引かれたのではないか。

こんなに密着して自分に変な匂いはしなかったか。

やはり鍛えられていてカッコいい体だ、昨日の自分ナイス!

と言ったことがクツパの頭の中を駆け巡っている。

「あわわわ………」

顔を赤くし、思わずクツパは自身の顔を隠す。

顔を隠す際に気がついたが、どうやら自分はマリオの服を掴んで寝ていたらしい。

それでマリオも一緒にベッドに寝ていたようだ。

指を少しだけ開いて隙間からマリオの顔をチラリと見る。

見たところマリオはまだ寝ているようで、小さく寝息をたてている。

「こうして見ると……、けっこう可愛いかもしれん………」

しばらくマリオの寝顔を見て落ち着いてきたのか、クツパはジツとマリオの姿を観察する。

髪の毛を軽く鋤いたり、鼻を優しくつついてみたり、胸板にそつと手を当ててみたり。クツパは思い付く限りのことをしてみた。

「む、そう言えば……」

ふと、クツパは思い出す。

自身がもとの姿だったときに起きていた男性特有の生理現象。

クツパは自身の見た目が悪くないことを理解している。

そんな自分とマリオは長くはないが一緒に暮らしていた。

マリオは自分をそんな対象に見れるのだろうか？

そんなことを考えながらクツパの視線はゆつくりと下に――

「ううん……。クツパ？」

「によわあああ?!」

——向かう前に、目を覚ましたマリオに話しかけられて驚き、枕へと頭を叩きつけた。

クツパの突然の奇行に、目を覚ましたばかりのマリオは首をかしげるのだった。

第42話

どこか気まずそうなクツパを横目にマリオは歯を磨く。

寝ている間にどこかを触ってしまったのかとも考えたが、それなら気まずそうにして
いる理由が分からない。

「なあ、どうかしたのか？」

「い、いや？何も無い・・・ぞ？」

このように話しかけても呆けるばかりで正直に答えてくれないのだ。
仕方なく、マリオは聞くのを諦めて歯磨きを終えるのだった。

「それで、帰るんだったよね。送っていくかい？」

「いや、一人で帰るさ」

朝食を終えてからのお茶を一服しながらマリオは話しかける。

それに対してクツパは、首を横に振って答えた。

マリオの心情からすれば、クツパが自力で本当に帰れるのが心配であり、可能なら送って行きたい。

しかしクツパからすれば、マリオに世話ばかりかけさせて申し訳ないから一人で帰りたい。

と、このように互いに相手のことを考えたがゆえの答えなのだ。

「なに、ちゃんとした靴もあるのだから歩いて帰れるさ」

「そうかい？ うーん……。。じゃあ、せめて途中までは送らせてくれないかな」

「む……。。まあ、途中までならな」

マリオの言葉にクツパは、態度だけは仕方ないといった風に了承した。

といつてもマリオが気づかない程度には尻尾が揺れており、口の端も僅かに上がっている。

「あ、荷物はどうする？」

「キノコタウンで貰った物たちか……。すまないが置いておいてもらって良いか？」

クツパはマリオが貰ってきた自身の荷物を思いだした。

さすがに今の姿のクツパでは運ぶのは難しい量だったため、クツパはマリオに頼む。

それに自身の乗るクラウンのセキュリティを書き換え終われば、そちらに乗せて運ぶことも可能だ。

まあ、クツパからしてみれば、荷物は置いておいて自分がまた住めるように、という
思惑がないわけでもなかったが。

「ん。まあ、大丈夫かな」

「助かる」

マリオは悩む素振りを見せずには承する。

マリオからしても、クツパの物が置いてあることに慣れ始めていたので、そこまで問題はなかったのだ。

「さて、と」

「そろそろ行くかい？」

「ああ、だらだらとしては帰る気もなくなってしまうそうだからな」

本心を言えば帰らずに暮らし続けたい。

しかし、それを言えばマリオにも配下たちにも迷惑がかかってしまう。それが分かっているからこそ、クツパはその言葉を口にはしなかった。

「忘れ物があつても届けられるから良いかな？」

「そうだな」

森を歩きながらなんでもない話をする。

この会話も1度帰ればしばらくできないと思うと、クツパの中の寂しさは増した。

城に帰れば、配下たちへの説明、自身を捜索していた配下たちへの給与、捜索中にできた怪我などへの補償などなど、やることが多々あり。

恐らくはすぐにマリオのもとへと戻れないからだ。

そして、2人はクツパの城が見えるところまでたどり着いた。

「マリオ、ここまでよい」

「そっか」

足を止め、クツパはマリオに言う。

言葉は少なく、互いに別れのこの時を寂しく感じていた。

「マリオ、変なことを言ってしまうのだが……。いつてきます、と言っても良いか？」

「へ？」

クツパの突然の言葉に、マリオは一瞬呆ける。

クツパは自身の城に帰るのでその言葉はおかしいのだが、マリオは自然とその言葉を受け入れることができた。

「ああ、いつてらっしやい」

「うむ！いつてくるのだ！」

マリオの言葉に、クツパは嬉しそうに手を振り歩き出す。

その歩みは軽く、尻尾はブンブンと揺れており、鼻歌も聞こえてきそうだった。

第43話

クツパが帰ってから数日。

マリオは何かが欠けた、物足りない日々を過ごしていた。

気づけば誰もいないのに誰かに話しかけようとしてしまう。

自分1人のはずなのに2人分の料理を準備してしまう。

誰もいないのにソファで寝ようとしてしまう。

クツパのいた時間は短かったはずなのだが、マリオの心の中ではその存在はとても大きなものだった。

「はあ．．．．．。ちゃんとしないといけないのは分かってるんだけどなあ．．．．．」

何度目になるか分からないが、用意してしまつた2人分の朝食を前にマリオは溜め息を吐いた。

クツパが自身に見せた笑顔が、弱々しい泣き顔が、羞恥で赤くなつた顔が。そのどれもがマリオの記憶から消えずに残っていた。

仕方なしに2人分の朝食を食べていると、玄関を叩く音が聞こえてきた。

「誰だろう？開いているよ」

「おはようございます。マリオどの」

玄関を開けて入ってきたのはキノコ王国大臣のキノじいだった。

キノじいの来訪にマリオは不思議そうに首をかしげる。

「いらつしやい、どうしたんだい？」

「先日の異変の後始末が終わりましたので、城にてパーティーをと思ひまして」

マリオの問いにキノじいは小さな封筒を差し出しながら答えた。

封筒には可愛らしい文字で『マリオへ』と書かれている。

どうやら文字を書いたのはピーチ姫のようだ。

「本日の11時頃から開始の予定ですので、早めにお越しく下さいませ」
「うん。分かった」

そう言つてキノじいは礼をして帰つていった。

食べ終わった食器を片付け、マリオは封筒を手取る。

「後始末が終わつたとは言つてたけど……」

頭に浮かぶのは黒いドレスを身に纏つていたピーチ姫の姿。

「悪意」に犯されていたとはいえ、けっこう暴れていたような気がするのだが。そのときの記憶がどうなっているのかがマリオは気になった。

「スーパークラウンはその辺りを教えてくれなかったからな」

クツパに何かを言つて放り投げられて空に消えたスーパークラウン。

そのまま戻つてこずに世界を見に行つてしまったのだろう。

ちゃんと話を聞いておくべきだったとマリオは少しだけ後悔した。

「と、中を確認しよう」

気の抜けるスーパークラウンとの別れにちよつと気が抜けてしまったが、手元の封筒を思いだして封を開ける。

封筒の中からは1枚のカードと折り畳まれた手紙が入っていた。

『マリオへ。先日はとても迷惑をかけてしまいました。謝罪と感謝をしたいので城まで来てくれますか？その後はパーティーもするので一緒に入れてあるカードを持ってきてください。ピーチより』

手紙を読む限り、どうやら「悪意」に犯されていたときの記憶も残っているようで、気にしていることがうかがえる。

そして同封されていたカードには王冠をかぶったピンクのキノコのイラストが描か
れていた。

「パーティーは11時頃からって言ってたし、もう出発しておこうかな」

そう言ってマリオはカードをポケットにしまい、帽子をかぶって家を出た。

第44話

家を出て森を抜け、マリオはキノコタウンへと到着した。

キノコタウンには明るさが戻っており、大人は話をしし、子供は走り回っている。

「キノコタウンの方はあまり被害はなかったからけっこう早く人も出てきてたんだよなあ」

「悪意」の異変の時も人が外に出てこないくらいで、明確に「悪意」に犯されていた人もいなかったのだ。

もとに戻ったキノコタウンの景色にマリオは笑みを浮かべ、ピーチ城へと向かう。

「ようこそいらっしやいました」

「どうぞ、城の中でお待ち下さい」

城に着くと城門前のキノピオ兵たちがマリオに気づき、城の中へと促した。

城の中はさまざまな飾りで彩られており、「悪意」による異変がなかったかのように思える。

少し早めに着いたこともあり、キノピオたちは城の中を準備に走り回っていた。

「お早いお着きですな。本当であればあのときにマリオどのと一緒におられた女性も呼びたかったのですが……どこにおられるのか皆目検討もつきませぬもので」
「ああ、それは仕方がないね」

城の中で準備をするキノピオたちを眺めていると、マリオに気づいたキノじいが話しかけてきた。

キノじいはマリオしかいないことに気づくと少しだけ残念そうに眉を下げる。

そういえば、とマリオは思い出す。

キノじいと会ったときにクツパの名前を出していなかったかな。

更に言えばピーチ姫のときも名前を出していなかったような……

「とはいえ、招待できなかつたことを引きずっていても仕方ないですな。あの女性にはマリオどのから伝えておいてもらえますかな？」

「分かつたよ」

キノじいの言葉にマリオが頷くと、キノじいは満足そうに頷いてパーティーの準備へと戻っていった。

戻っていったキノじいを見ながらマリオは考える。

あのときの女性がクツパだと言った方が良いのか？

仮に正体を伝えたとしても、異変の解決の功労者の一人なのだから悪いようには思われないだろう。

むしろ、見た目が威圧感のある姿からピーチ姫に似た美しい姿になっていることから簡単に受け入れられるかもしれない。

だが本人の許可無しに正体を言っても良いのだろうか？

腕を組みながらマリオは頭を捻る。

そんなマリオの姿をキノピオたちは作業をしながら不思議そうに眺めていた。

「マリオさん、何を考えてるんだろう？」

「うーん……この間の異変の時に一緒にいたっていう女の人のことかもよ？」

「えー、でもそれだとピーチ姫はどうなっちゃうんだろ？」

「ボクはマリオさんとピーチ姫が付き合うと思ってたんだけどなあ……」

悩むマリオの姿にキノピオたちは口々に話し始めた。

当然ながらそれにもなつて作業の効率も落ちていく。

そして最終的には普通に話し始めてしまつて、キノじいの雷が落ちるのが10分後のことだった。

第45話

キノじいの雷が落ちて、キノピオたちが慌ててパーティーの準備を終えて数分後、ピーチ姫が姿を現した。

ピーチ姫の登場にキノピオたちは拍手をする。

「来てくれてありがとう、マリオ」

「いや、ピーチ姫に呼ばれたら来ないわけにはいかないからね」

優しく微笑みながらピーチ姫はマリオに話しかける。

普通であれば姫に話しかけられて普段通りに返せる人などいないだろう。

しかしそこはマリオ、幾度となくピーチ姫を助けていることによつて普通に答えることができるのだ。

ちなみにピーチ城で、周りにキノピオたちしかいないから普通に返すのであって、他

の国や他の国の人がいる場合は敬語を使うようにはしている。

「先日の異変ではとても迷惑をかけてしまったわね……ごめんなさい」
「大丈夫だよ。ピーチ姫にも後遺症とかがなくて良かった」

申し訳なさそうに謝罪するピーチ姫に、マリオは首を横に振ってピーチ姫が無事だったことを喜ぶ。

迷惑をかけたというのに自身を心配してくれるマリオにピーチ姫は感謝を込めて頭を下げた。

「マリオどの、私からも感謝を。姫様を助けていただきありがとうございます」
「俺が助けたくて助けたくてだけだからさ。そんなに気に病まないでくれ」

ピーチ姫の近くに控えていたキノじいも頭を下げる。

国の姫が頭を下げているということもあり、キノピオたちも揃って頭を下げた。

「あー……。ほら、あれだ。いつもみたいに俺がピーチ姫を助けたと思ってくれ

れば良いからさ」

自分に向かって全員が頭を下げる光景にマリオも戸惑い、言葉に詰まりながら頭を上げさせる。

マリオからしてみればいつものようにピーチ姫を助けただけであり、自身一人ではなくクッパやスーパークラウンの助けがあつてこそその成果なため、ここまでされると心苦しいのだ。

「では、謝罪はここまでで………。マリオ、感謝の気持ちを」

「へ？び、ピーチ姫？」

頭を上げ、ピーチ姫はマリオの近くへ寄つて両手をマリオの頬へ当てた。

いつもであれば頬にするであろうキスのはずが、何故か正面で顔が固定される。

何故か目の前に迫ってくるピーチ姫にマリオは困惑の声を上げた。

「良いの。マリオ、私は本当に感謝してるのよ。だから、受け取つて？」

「え、ちよ、でも………」

ゆっくりと、しかし逸れることなく真っ直ぐにピーチ姫の顔が近づいてくる。目を動かして周りを見てみると、誰も止めることはなく。

むしろ期待しているように見える。

そして、マリオとピーチ姫の距離が0になる——

「ちよおおおおおつつつと、待つのだあああああ!!!」

——直前に、叫び声と共に丸いピエロの顔が描かれた乗り物、クラウンが窓をぶち破って飛び込んできた。

第46話

窓をぶち破って飛び込んできたクラウンはマリオたちの頭上を飛び回る。

頭上を飛んでいるために誰が乗っているのかはマリオたちからは分からない。

クラウンがいきなり飛び込んできたことによつてキノピオたちはパニックを起こして散り散りに走り回っていた。

「クツパしやま！いきなり窓に飛び込んでいくとは何事ですか！」

「す、すまぬ。マリオがキスをしそうだったからつい……」

「それは……、まあ仕方がないのかもしれないかもしれませぬが……」

クラウンの後を追うようにして入ってきたカメックおばばの言葉に、クラウンにはクツパが乗っていることが分かった。

しかし、キノピオたちは首をかしげる。

あれ？クツパってあんな声だっけ？

その場にいたキノピオ全員の思いが一致した瞬間だった。

そして、カメックおぼが魔法で窓を直していると、マリオの近くへクラウンが降りてくる。

「よっ、とー！」

「え?!」

「なんと?!」

クラウンの中から飛び降りてきたクツパの姿にマリオ以外の全員が驚く。

それもそうだろう。

今までの威圧感のある凶暴そうな風体を覚悟していたら、予想外の綺麗な女性が現れたのだから。

その女性、クツパはツカツカとマリオのもとへと近寄り、ピーチ姫からマリオを引き剥がした。

「ピーチ姫、それはズルいと思うのだー！」

「え、ま、待って、あなた、クツパ……なの？」

「まあ、普通はそう思うよね……」

マリオを近くへ引き寄せながらクツパはピーチ姫に言う。

一方のピーチ姫は、目の前の女性がクツパだという事実混乱していた。

そんなピーチ姫の姿に、マリオはうんうんと頷いていた。

マリオ自身もクツパがいきなり現れて混乱したことを思い出したのだろう。

「あー……。信じられないかもしれないけど、間違いなくクツパだよ」

「マリオ、あなたは知っていたの？」

「それは当然だ。なんせ少しの間だがマリオの家で同棲していたのだから！」

驚くピーチ姫にマリオはこの女性が偽りなくクツパであることを告げる。

そこまで驚いていないマリオにピーチ姫は不思議に思い尋ねた。

そんなピーチ姫の姿に、クツパはフンスと胸を張り、勝ち誇ったように言った。

そんなクツパの態度に少しだけカチンとしつつ、ピーチ姫はクツパの言葉をゆつくりと飲み込んでいく。

驚いているのはピーチ姫だけではなく、キノじいやキノピオたちも驚愕の表情をしていた。

「と、いうわけで……、マリオはワガハイがいただいでいく！」

「な?! そんなこと許しません！」

マリオの手を引いてクラウンに乗せようとするクツパに、ピーチ姫はいち早く驚きから復帰してマリオの反対の手を掴んだ。

自分ではなくマリオを連れていこうとするクツパの行動に違和感を感じた。

が、それよりも何よりもマリオを今のクツパに連れていかれるのは不味いと直感で理解する。

「絶対に連れていかせないんだから！」

「むう……、力が落ちているからマリオを引き込めぬ……」

「いたたたた！」

クツパとピーチ姫は互いに左右からマリオの手を掴んで引っ張る。

それはまるで昔話にありそうな光景だった。

ちなみにマリオが痛そうにしているが、クツパとピーチ姫の雰囲気有近寄りかたいことと、美人2人に挟まれていることからの嫉妬によつて誰も助けようとはしなかった。

第47話

ピーチ城のパーティー会場にて、クッパとピーチ姫はマリオの手を掴んで引っ張り合っていた。

クッパの姿が変わっていることもあって、引っ張る力は互角。
会場にいる誰もがその様子を固唾を飲んで見守っていた。

「あなたは今まで私を拐っていたじゃない！マリオを連れていくなんておかしいわ！」

「前は前、今は今なのだ！」

「ちよ、まって、ホントに痛い！」

間にいるマリオの声など聞こえていないかのようにクッパとピーチ姫は言い合う。
それにもなつてマリオを掴む手の力も増していく。

「なんでポツと出のあなたにマリオを取られなくちゃいけないのよ!」

「ふん、自分の気持ちを正直に伝えられない者にはマリオはもつたないのだ!」

「ねえ、聞いて?! って腕が捻れるようにいだだだああああ?!」

騒ぐ3人を他所にキノピオたちはお茶を飲み始める。

その際に窓を直し終えたカメックおぼばにもお茶を渡していた。

そしてキノじいとカメックおぼばは揃って3人を微笑ましそうに眺める。

「だいたいズルいのはどっちよ! マリオの家で同棲していたんでしょ! 言いなさい、どこで寝てたの!」

「ワガハイはマリオにちゃんと許可をもらったのだ! だから、ズルくない! それと寝ていたところはマリオの布団なのだ!」

「あだだだだだ!! 2人も爪をたてないで?!」

言い合いはヒートアップしていき、それにもなつてマリオの腕に爪が刺さつていく。

そしてクツパがマリオの布団で寝ていたと聞いたピーチ姫は目に涙を溜める。

「ズルい、ズルいズルいズルい！私もマリオの布団で寝る！」

「のあ?!な、泣くのは卑怯ではないか?!」

「.....」

泣き出したピーチ姫にクツパは慌て、マリオは痛みでぐったりとしていた。

ぐったりとしつつ、マリオは思った。

これ、一緒に寝たって言ったらどうなるんだ.....

「マリオはいつも私を助けてくれるの！だからあなたのものになんてならないの！」

「ふーんだ！ワガハイだって今までに何度もマリオと戦ってきたのだ！ワガハイとマリオはお互いに相手のことがよくわかるのだ！」

「ぐあああああ?!まだ痛みには上がああああ?!」

め。だんだんとマリオが気の毒に思えてきたのか、何人かのキノピオたちが話し合いを始める。

「さすがに助けた方が……」

「でも、どうやって？」

「手を離すつもりはなさそうだよね……」

クツパとピーチ姫、どちらもマリオの手を強く掴んでおり、そう簡単に離すつもりがないことがうかがえる。

「マリオは肉体がスゴいのよ！横抱きにされたらその逞しさに惚れ惚れしちゃうのよ！」

「それはわかる！だが、何よりも諦めないその心こそが素晴らしいのではないか！」

「それもわかるわ！」

いつの間にかクツパとピーチ姫の言い合いは雰囲気を変え、違う内容へと変化していった。

すでにマリオの体に力はなく、クツパとピーチ姫の2人が手を離せば床に崩れ落ちるだろう。

「・・・・・・・・・・」

やがてクツパとピーチ姫は黙って睨み合う。

先に目を逸らした方が負け、そんな雰囲気すら感じられた。

睨み合って10秒か、はたまた10分か。

マリオをどうにか救出しようと考えていたキノピオたちも、2人の様子に動けずいた。

「クツパ・・・・・・・・・・」

「ピーチ姫・・・・・・・・・・」

2人はゆっくりと力を抜いていき、マリオを解放する。

そしてお互いの顔をジツと睨み合う。

解放されたマリオはキノピオたちによって回収され、カメックおばばによって腕の治療を施されていた。

「絶対にあなた（ピーチ姫）には負けないわ（のだ）！」

バチバチと火花を散らしながら2人は相手に宣言した。

第48話

火花を散らしながら話しているクツパとピーチ姫。

そんな2人を見ながらマリオは疲れた様子で飲み物を飲んでいた。

「腕が千切れるんじゃないかと思ったよ……」

「ふえつふえつふえつ、そうなたらクツパしやまに頼まれてわたくしが治すじやろ」
「いえいえ、城に勤めるドクターキノピオが治療を施してくれますよ」

痛そうに腕を軽く動かすマリオに、カメックおばばとキノじいは笑いながら答える。
不意にカメックおばばとキノじいは笑うのを止めて、真顔でマリオを見る。
いきなりの豹変にマリオは驚き後ずさった。

「もしも、クツパしやまを泣かせたりしたら……」

「もしも、姫様を泣かせたりしたら．．．．．」

「分かっておりますな？」

2人から発せられるプレッシャーにマリオは冷や汗を流しながら頷く。
今のこの2人には絶対に敵わない。

そう思わせるほどの恐ろしさをマリオは感じた。

「まあ、泣かせなければ良いだけじゃ」

「ええ、ええ。簡単なことですぞ」

「は、はい．．．．．」

先ほどまでの真顔はなんだったのかと聞きたくなくなるほどにカメックおばばとキノジの表情が変化する。

2人の変化にマリオは軽く怯えながら返事をした。

「マリオも大変なのね」

「まあね。なんだかんだ言ってもただの配管工だ、か．．．．．ら?!」

背後からかけられた言葉にマリオは軽く頷いて答える。

答えながら振り返り、声をかけてきた人物にマリオは驚く。

なぜならそこにいたのは、数日前にクツパによつて空の彼方へと放り投げられたはずのスーパークラウンだったからだ。

「はあい、マリオ。少しぶりね」

「スーパークラウン！いままでどこに行つてたんだい？」

スーパークラウンは軽く上下に揺れながらマリオに話しかける。

スーパークラウンがいきなり現れたことに驚きはしたが、マリオは再開を喜ぶ。

とはいっても数日ぶり程度なのでそこまで大きく喜んでるわけではないが。

「え〜つと、その、ね？」

「どうかしたのかい？」

どこか歯切れの悪いスーパークラウンに、マリオは不思議に思い尋ねる。

マリオの問いにスーパークラウンは不安そうに小刻みに揺れていた。

「怒るかもなあ、つてことなんだけど……」
「聞いてからじゃないと判断はできないかな」

スーパークラウンはおずおずとマリオに尋ねる。
どうやらなにかしらをやらかして、マリオに何かを伝えたいらしい。

「そうよね……。えっと、実は「喰ラウンモード」で浄化した『悪意』のことなんだけど……」
「なにかあったのか?！」

スーパークラウンの口から『悪意』の言葉が出た瞬間、マリオは思わず身構えた。
解決したと思っていた事柄に何かあったと聞けば当然の反応だろうが。

「いえ、別に何も無いわ。ただ、その……、『悪意』がピーチ姫のもとと持っていた強い『愛』の影響を受けて変異しちゃって……」

「変異だつて……………?」

身構えるマリオに、スーパークラウンは落ち着かせようと言葉を続ける。

「ええ、『愛』の影響を受けて変異した『悪意』。『病愛』になつてしまったの」
「病あ、い?!」

スーパークラウンの言葉をマリオが繰り返していると、不意に背後から腕が伸びてきてマリオの腕に絡みついた。

いきなり腕をとられたことにマリオは驚き、慌てて腕を掴んだ主を見る。

「黒い……………ピーチ姫……………?」

そこにいたのは黒いドレスに身を包んだ短髪の、ピーチ姫によく似た女性だった。

第49話

いきなり現れ、自身の腕をマリオの腕に絡ませたピーチ姫によく似た女性。女性の行動に驚きつつ、マリオはクツパとピーチ姫のいた場所を確認する。すると、そこには驚いた表情でマリオと女性を見る2人の姿があった。

「スーパークラウン、これは……誰だ……誰だ……?」

「さすがに行動が早かったわね。その女性が『病愛』よ」

マリオの問いにスーパークラウンはため息を吐きながら答える。

この女性が『病愛』?

ドレスの色が黒くなって髪型も変わってはいるが、ほとんどピーチ姫なこの女性が? スーパークラウンの言葉にマリオの頭の中は疑問符で埋め尽くされた。

そして、いまだに女性が絡みついている姿に、恋人のいないキノピオたちは隠すこと

なく舌打ちをした。

「と、とりあえず腕を離してくれな——」

「いや」

「——いかな．．．．．」

マリオの言葉が途中で断ち切り、女性はマリオの腕に強く絡みつく。

女性の体に腕が密着したことにより、マリオは腕に2つの柔らかいものを感じとる。

「——はっ?!」

不意にマリオは自身の体が凍りついたようなイメージを受け取った。

それに合わせて冷気のようなものもどこからか流れてきているように感じる。

さらにマリオはある方向から突き刺すような視線があることに気づいた。

「へえ．．．．．」

「ふん．．．．．」

ブリザードのように冷ややかな目で2人はマリオを見つめる。
自分たちが話している間になんで他の女性と密着しているのか。
なんで自分たちがいるのにデレデレとしているのか。
クツパとピーチ姫の冷たい視線にマリオは身を震わせた。

「修羅場キタ」

「これは記録案件」

「マリオ@修羅場ナウ」

「ちゃんとした言葉で喋りなよ……」

彼女のいないキノピオたちは愉悅の表情で、カメックおばばとキノじいは呆れたようにマリオたちを見ていた。

勝ち組恋人のいるのキノピオもいたにはいたのだが……、どうしてあんなことに……

「マリオ？」

「は、はい?!」

視線は変わらずに、優しい声音で2人はマリオに話しかける。
声は優しいのだが雰囲気は全く優しくなくことにマリオは怯えながら返事をした。

「そちらの女性は ド ナ タ ？」

「嘘は ユ ル サ ヌ ゾ ？」

全て話すまでもどこにもいかせない。

そんな心の声が聞こえてくるかのようだった。

2人の雰囲気は怯えながら、マリオはおずおずと口を開く。

「え、えっと……この女性は……どうやら、
『悪意』が変異した存在、
らしくて……」

「なに?!」

「なんですって?!」

女性の正体を聞き、クツパとピーチ姫は驚く。

普通の女性だと思っていたものが、異変の原因だったものだとは知れば当然の反応だろうが。

そんな驚くクツパとピーチ姫に興味などない、とでもいうかのように女性はマリオの顔をジツと見続けるのだった。

第50話

マリオの腕に密着する女性に驚きの視線が集まる。

しかしそんな視線など全く意に介さずに、女性はマリオの顔を見ていた。

「おい！『悪意』とはどういうことだ！」

「危険はないの?!」

女性を警戒しつつ、クッパとピーチ姫はマリオに詰め寄る。

そんな2人の剣幕にマリオはオロオロとするばかりだった。

「ちよつと、落ち着きなさいよ」

「スーパークラウン！逆にきさまはなぜ落ち着いているのだ！」

慌てる2人を見かねたのか、スーパークラウンはマリオの頭の上に降り立って2人に話しかける。

スーパークラウンの落ち着きようにクツパは不満を爆発させ睨み付ける。

少し前に浄化をした『悪意』に対してなぜなんのアクションもとらないのか。

クツパはイライラとしながら叫んだ。

そのイライラの理由の1つにマリオが女性と密着をしているからというのもあるのだが、嫉妬という感情をクツパはいまいちまだ理解できていなかった。

「だから、彼女は『病愛』。『悪意』が変異した、まったく別物の存在なのよ」

「病………愛?」

「まったく別物の存在………?」

噛みついてくるクツパに対してスーパークラウンは、ため息を吐いてもう一度説明をする。

スーパークラウンの言葉にクツパとピーチ姫はキョトンとした顔になって、女性を見た。マリオの腕に絡みついて、ジッと顔を見ているこの女性が病『愛』?

「悪意」ではなく「愛」と名のついた存在？

「まあ、「悪意」だったら浄化できたんだけど。これでも「愛」の分類に変異しちやつてるから浄化できないのよ。影響を与えたピーチ姫の「愛」のせいでマリオにご執心だし」

「~~~~ツツ!!」

影響を与えたのが自身の「愛」だと知り、ピーチ姫の顔は赤く染まる。

この女性がマリオに絡みついているのはマリオのことが好きだから。

そして、この女性に影響を与えたのは自分の「愛」。

つまり「悪意」に影響を与えるほどに自分はマリオのことが好きだという証拠。

その事実気づき、ピーチ姫は思わず顔を隠してしやがみこんでしまった。

「ああ、それと「悪意」の力はほとんど浄化されて失っているから。少し力が強い程度じゃない？」

「だから、振りほどけないのか……」

「……きさまの場合は違う理由ではないのか？」

スーパークラウンの言葉にマリオは女性から腕を引き抜こうとしながら呟く。

そんなマリオを冷ややかに見ながらクツパは言った。

腕を離さないのは胸が当たっているかではないか。

そんなクツパの心の声が聞こえてくるようで、マリオはガツクリと肩を落とすのだった。

第51話

肩を落としながらマリオはチラリと女性を見る。

ピーチ姫と似たデザインで色だけが黒のドレス。

短髪ではあるが、ピーチ姫と同じように外ハネのややくせつ毛がちな綺麗な金髪。

ピーチ姫の青空のような綺麗な蒼色の瞳とは異なる、夜空のような幻想的な瞳。

それら全てが合わさり、ピーチ姫とはまた違った魅力的な女性だった。

「そういえば、この子の名前は？ “病愛” が名前というわけではないだろう？」

「なま……え……？」

マリオの問いにスーパークラウンは、キョトンとして不思議そうに聞き返す。

そんな様子にマリオとクッパ、そして顔を隠してしやがみこんでいたピーチ姫は不思議に思っ顔を見合わせる。

「名前なんてないわよ？だって彼女は『悪意』が変異した存在、だから親なんていないもの」

なんでもないことかのようにスーパークラウンは言う。

そんなスーパークラウンの言葉に反応したのか、女性はその体を小さく震わせた。当然ながら密着しているマリオにもその震えは伝わる。

「それは……、いくらなんでもかわいそうじゃないか？」

「名前がないのは……、不便だな」

「私と似ているのだからかわいらしい名前が良いわね」

女性の震えを止めるために、マリオは頭を優しく撫でながら言う。

撫でていることよってクツパとピーチ姫の額に怒りマークが生まれ、女性の瞳の中にハートマークが生まれているが、おそらく、たぶん、もしかしたら気のせいだろう。

そう思うことにしてマリオはスルーした。

「じゃあ、俺たちで名前を決めるかい？」

「そうだな……。とりあえずきさまはさつさと離れるのだ」

「そうしましょう……。マリオはその子から離れてそこで正座ね？」

マリオの頬を左右からつねりながらクツパとピーチ姫は言う。

そしてピーチ姫の指し示した場所には三角形を並べて作った板と、重石のようなものがあつた。

俗に言う石抱き責めの道具たちだ。

その近くではキノピオたちがいい汗をかいたとでもいうかのように顔を拭いていた。

「というわけできさまはマリオをは——」

「いや」

「——なすのだ……」

クツパの言葉を途中で断ち切り、女性はプイと顔を逸らす。

女性のそんな態度にクツパの額にさらに怒りマークが生まれた。

マリオは今更ながらにそう思う。

ハッキリと言ってしまえば、その認識はかなり遅く。

この場にいるキノピオやキノじい、カメックおぼたちはとつくに気づいていることだった。

まあ、彼らがマリオにとって危険な状況だと思っているのは、クツパやピーチ姫がいるのに他の女性と密着をしていること、なのだが。

第52話

女性は光のない瞳でクツパを睨み付ける。

女性の表情の変化にクツパとピーチ姫は思わず動きを止めてしまった。

「……スーパーパークラウン？こいつは本当に『悪意』から変異しているのか？」
「どう見ても変異はしていないように思うのだけど……」

女性に睨まれながら2人はスーパーパークラウンに尋ねる。

どう取り繕っても先ほどの女性の言葉はまっとうな『愛』から発せられる言葉には
思えなかった。

むしろ『悪意』だと言われた方がまだ納得できるだろう。

「ちゃんと変異してるわよ。その証拠にマリオへの思いしか言っていないし」

「おもいつきり睨まれたがな．．．．．」

スーパークラウンの言葉にクツパはため息を吐いて再び女性を見る。

すでに女性はクツパから興味を失っており、いつの間にかマリオの腕から背中側へと移動していた。

マリオの背後から首に抱きつくようにして密着している。

女性の息が当たってくすぐったいのか、マリオは逃げようともがいていた。

「．．．．．ピーチ姫」

「ええ、分かっているわ」

クツパは短くピーチ姫の名前を呼ぶ。

それに対してピーチ姫も頷き応える。

そして2人は素早く女性の腕を掴み、マリオから女性を引き剥がした。

「た、たすか——」

「キノじい、お願いね」

「カメックおばば、頼んだぞ」

女性が離れたことによつてようやく一息つける。

そう思ったマリオの心を裏切るかのようにピーチ姫とクッパの言葉がマリオの背後にかかる。

「ほっほっほっ、お任せください」

「ええ、ええ。分かりましたとも」

「———つた……?」

マリオは女性が離れたことによつて安心しきっていた。

ゆえに背後にいたキノじいとカメックおばばの存在に気づいていなかった。

キノじいとカメックおばばは素早くマリオを拘束し、先ほどキノピオたちが用意した道具のもとへと移動する。

あまりの手際よさにマリオは何が起きているのか分からなかった。

ただ一つ、マリオは理解したことがある。

自分にはこれからとてつもなく恐ろしいことが降りかかるのだろう、と。

第53話

痛みで叫ぶマリオの声をBGMに、クツパとピーチ姫はなんとか女性を拘束することに成功する。

女性を拘束する際に、ピーチ姫の腕に女性の豊満な胸が当たり、黒いオーラのようなものが生じたような気もするが気のせいだろう。

ピーチ姫の目が虚ろになって女性やクツパの胸を憎らしげに見ているのも気のせいだ。

冷や汗を流しながらクツパはピーチ姫の方を見ないようにしつつ女性を見る。

確かに拘束する際の力は強かったが、自分たちが力を込めれば押さえられなくもない。

睨みはするが「悪意」などのそういった力を使うそぶりもなかった。

「本当に、力が強い程度だったな」

「疑っていたの？」

クツパの言葉にスーパークラウンは少しだけ不満そうに頭の上に乗る。

とはいえクツパが疑うのも無理はないだろう。

スーパークラウンが平気だと言ってもその証拠はどこにもなく。

“悪意”の恐ろしさを目の当たりにしているクツパからすればどんな姿になっても疑ってしまうのだ。

「なんでクツパもこの女性も……」

影を背負いながらピーチ姫はぶつぶつと呟く。

どうやら自分と似たような姿のはずなのに胸のサイズが自分より大きいクツパと女性にシヨックを受けているようだ。

ピーチ姫の発する雰囲気周囲のキノピオたちはなにも言えなかった。

「クツパは知らないけど彼女は私の姿をもとにしてるはずよね？なのになんでこんなに差があるのかしら？しかも胸があっても太っている訳じゃないみたいだし……」

ピーチ姫のために言っておくと。

ピーチ姫も別にスタイルが悪いとか、胸が小さいというわけではない。

むしろ普通にスタイルとしては綺麗な部類に入る方で、胸もつけて小さくはない。

それでもピーチ姫が自分のスタイルに落ち込んでいるのは、クツパや女性の胸が大き
いというのもあるが、他にスタイルなどを比較する対象が近くにいなかったからという
理由もあるのだろう。

「……そういえば、こいつはどこで暮らしているのだ」

「スルーするのね」

ピーチ姫の呟きを聞こえないものとして、クツパは尋ねる。

今まで気にしていなかったが、この女性の暮らしている場所を聞いていない。

そのことをクツパは思い出したのだ。

「暮らしている場所もないわね。だって本当に今日生まれたばかりだもの。だから、マ
リオの家にも置いてもらおうか——」

「却下なのだ」

「——と思っていたのだけど……」

あんな状態になるやつをマリオと一緒に暮らさせたら何が起こるか。確実にマリオが押し倒されるのも時間の問題になるのではないか。

そんな思いからクツパはスーパーパークラウンの言葉を両断する。

そんなクツパにスーパーパークラウンは予想ができていた、とでもいうかのように短く息を吐いた。

「まあ、分かってはいたけどね。ピーチ姫にでも頼んでみるわ」
「そうしろ」

ふん、と鼻息を鳴らしてクツパは短く言う。

絶対にマリオの家に住まさせるつもりはない。

そんな思いがクツパの言葉からは強く伝わってくるようだった。

第54話

痛みで叫ぶマリオ、落ち込みぶつぶつと呟くピーチ姫、拘束されて転がされている女性。

改めて現状を見てみると、かなり混沌とした空間が出来上がっていた。

どうしてこうなったのか……

頭を抱えながらクツパはため息を吐く。

マリオは……まあ、自分たちがそうなるように命じたから仕方がない。

女性に關しても自分たちが拘束をした。

ピーチ姫は……

「……ワガハイにはどうにもできぬな」

「デリケートなことだものね」

はなしかける。

うたう。

▶?そつとしておこう。

ひとまずピーチ姫に関しては落ち着くまでそつとしておくしかないだろう。

むしろ自分が話しかければ悪化する可能性すらある。

そう考えてクツパは3人から離れてテーブルに置かれている料理に手をつけ始めた。

すでにキノじいやカメツクおばば、キノピオたちも食事をしており、3人の状態に關して触れようと思っている者はいなかった。

「………マリオを放置してて良いの?」

「ふん。デレデレとしていた奴など知らぬ」

スーパークラウンの言葉にクツパは料理を口に運びながら答える。

その食べ方は綺麗なもので、とてもクツパが食べているとは思えないものだった。

「でも………、拷問を受けた相手の心に残るのは恐怖や苦手意識だけだと思おうのだけど………」

「……あ？」

スーパークラウンの言葉にクツパは、ビシリツと体の動きを止める。
まてまてまて、よく思い出せ？

配下がたまに読んでいた漫画でこんな展開があつたはずだ。

ヒロインが何人もいて誰か一人と仲良くしていると他のヒロインが襲いかかってくるやつだ。

あれを借りて読んでみて自分はどんな感想を抱いていた？

ハーレムじゃないか、羨ましい——違う。

そもそもとしてあのときの自分はピーチ姫だけを好きだったのだからハーレムに憧れる要素はない。

ピーチ姫に対してこんな展開が起きれば——違……わないけど違う。

そんな風に思つた展開もあつたが、今の思い出そうとすることは関係ない。
配下から借りた漫画を読んだ感想をクツパはほとんど思い出していく。

なにか大切なことを思い出せそうな、そんな気がしていた。

暴力を振るわれては好意もなにもなあ——・・・これだ。

そうだ。

自分は確かにこう感じたはずだ。

ハーレムな展開だとか、ラッキースケベだとかは別になんとも・・・うん、な
んとも思わなかったが。

暴力系ヒロインに関してはかなり否定的に感じていた。

だが、今の自分はどうか？

マリオが女性と密着して、それにイライラして石抱き責めにあわせている。

自分が否定していた暴力系ヒロインとほとんど同じ行動をしていないか？

「く、クツパ？」

涙を流して抱きついてくるクツパにマリオは驚き、一瞬だけ残留していた足の痛みを忘れる。

クツパが泣き出して謝罪をしたことに、カメックおぼは少しだけ不思議そうに見ていたが、理由を察したのか何も言わずにキノじいとの会話に戻った。

「わ、わが、ワガハイ……は……ぎ、ぎざまに……ひど、酷いことをおお……」
「クツパ……」

涙やはなみずでぐちゃぐちゃになった顔でクツパはマリオにしがみつく。

クツパが後悔をしていることに気づいたマリオはクツパを落ち着かせようと優しく頭を撫でた。

「あやまる！あやまる。がら！ぎらいに、ならない。でええええええ！」

まるで幼い子供のようにクツパは泣く。

普段の自信あり気な姿からは想像できないほどに泣く。

そんなクツパの姿に、ピーチ姫も自身の行動を理解したのか辛そうな表情を浮かべていた。

第55話

マリオにしがみつぎ、クツパは大きな声で泣く。

自分たちのマリオへの仕打ちでマリオに嫌われてしまうのではないか。

マリオが話すらしてくれないほどに嫌われてしまったらどうしよう。

そんな思いがクツパの中で駆け巡っていた。

「うあ、あああ………」

もはや言葉にならない泣き声でクツパはマリオにしがみつぐ。

絶対に離れたくない。

絶対に嫌われたくない。

しがみつくクツパからはそんな思いが伝わってくるようだった。

「あの・・・・・・・・・・、私も・・・・・・・・・・ごめんなさい・・・・・・・・・・」
「ピーチ姫・・・・・・・・・・」

クツパの泣く姿にピーチ姫も辛そうに顔を歪めながらマリオに謝罪する。

クツパが泣きながら謝る姿に、ピーチ姫も落ち着いて自身の行動を理解したのだから。

もしも、クツパがしがみついて泣いていなければ、ピーチ姫も堪えきれずに泣き出していたかもしれない。

「・・・・・・・・・・はあ」

謝罪する2人を見て、マリオは小さくため息を吐く。

正直に言つて、いきなり拷問を受けて2人には若干だが恐怖を感じている。

それでもその行為を後悔して謝罪をしたことを信じたい気持ちもある。

自分のこの考えが甘いのだろうかということとは十分に理解はしているが、どうにも変えることはできなかつた。

「2人とも……………」

「あ、あ、い……………」

「はい……………」

マリオの呼びかけにクツパとピーチ姫はビクリと体を震わせて返事をする。マリオから何を言われるのか。

酷いことをしたことに對しての罵倒がくるのか。

もう会わないでくれ、と言われてしまうのか。

クツパとピーチ姫の頭の中では最悪の事態がいくつも浮かんできていた。

そんな2人を見ながらマリオは口を開く。

「正直、いきなり拷問を受けてとても辛かった」

マリオの言葉に、クツパとピーチ姫は大きく体を震わせる。

やはりマリオは自分たちのことを嫌ってしまったのか。

クツパの瞳にさらに涙が溜まり、ピーチ姫の瞳にも涙が溢れてきていた。

「でも、やり過ぎたと思ったから謝ってくれたんだろ？」

「あ……うん！うん！」

「ええ……」

続くマリオの言葉にクツパは思い切り頷き、ピーチ姫もしつかりと頷く。
そんな2人の姿にマリオは、軽く苦笑する。

「だったら、今回は許す」

「ぐず……。ほ、本当、か？」

「いいの……？」

クツパの頭の上に優しく手を置いてマリオは言う。

あんなに酷いことをしたのに許してくれる。

マリオの意外な言葉にクツパとピーチ姫は思わず聞き返してしまった。

「ああ。まあ、今後は無いようにしてくれよ？」

「も、もちろんなのだ！」

「もちろんですよー！」

マリオの言葉にクツパとピーチ姫は強く頷き応える。

これからは理不尽に暴力を振るうことはしない。

そう強く心に誓いながら。

第56話

正座で固定させられていた足を伸ばし、マリオは軽く伸びをする。

三角の先端が当たっていた場所はまだ少し痛むが、歩く分には問題ない程度には回復していた。

そんなマリオの服をクツパはつまむようにして掴んでいる。

どうやらまだ不安らしく、マリオから手を離すつもりはないようだ。

「あゝ．．．．．、彼女は どうしようか？」

「住むところもないからどこかに住まわせてもらえると助かるわね」

拘束されて転がされている女性を見ながらマリオは呟く。

そこそこ長く放置されていたため女性の瞳にも涙が溜まってきていた。

「マリオおお……………」

「……………なあ、俺はなにもしていないのに罪悪感が半端ないんだが……………」

拘束された涙目の女性がこちらを見上げてきて、少し近くへ寄るとパアツと嬉しそうな表情を浮かべるのだ。

どこか子犬のような雰囲気を感じ、マリオはクツパとピーチ姫に言う。

クツパとピーチ姫も女性がそんな状態になっているとは思わず、ソツと目を逸らしてしまった。

「その……………、暴れていた印象が強すぎて……………」

「うむ……………」

目を逸らしながら2人はボソボソと答える。

正直に言うとは、マリオから引き剥がされた女性の暴れようから、このような状態になるとはまったくの予想外で。

最初からこんな風にしよんぼりとした状態なら拘束まではしなかった、というのが2人の思いである。

「とりあえず解放するけど、良いよな？」

「……………まあ」

「……………ええ」

マリオの問いに2人は微妙そうな表情を浮かべながらも了承する。

2人から許可を得たマリオはゆつくりと女性の拘束を解いていく。

解放したらまたしがみつくのではないか。

そんな風に思いながら2人は拘束を解かれていく女性を見ていた。

「はい、これで終わりだ」

「ありがとう。マリオ」

しかし、拘束を解かれた女性は予想に反して大人しく。

マリオの前に立って嬉しそうにしているだけだった。

もしも、尻尾が生えていたのなら思い切り左右に振っているのかもしれない。

「ごめんなさい。あなたに会えて嬉しかったから……」
「暴走しちゃったってことでもいいのかな？」

シユンとしながら女性はマリオに謝罪をする。

どうやら初めてマリオに会えたことで嬉しくなり、暴走してしまったらしい。
女性の言葉にクツパとピーチ姫も一応は納得する。

「君には名前がない、んだよね？」

「うん。だから、マリオがつけて」

スーパークラウンにも聞いたことだが、改めて女性にも確認をとる。
マリオの問いに女性は頷き、手をとって言った。

「……………ねえ、気づいてる？」

「うむ……………、あやつ……………」

「さつきから1度も私（ワガハイ）たちを見ていない」

マリオと女性が話している後ろでクッパとピーチ姫は小声で話す。

2人は女性が、拘束から解放されて1度も自分たちの方を見ていないことが気になっていた。

「まあ、マリオ以外に興味はない、そういうことだろうな」

「分かりやすいくらいの宣戦布告、かしらね」

マリオに抱きついたり、すでに強い意思は感じ取っていたが。

2人は改めて女性の行動から宣戦布告を受け取った。

第57話

マリオは腕を組んで目の前の女性の名前を考える。

見た目や印象から考えると黒のイメージが強いので、そのあたりも考えていきたいとマリオは思っていた。

「黒いピーチ姫なのだからクローチとかでいいではないか」

「・・・・・・・・・・なんか、あの黒い虫みたいで嫌じゃない？」

いかにも適当に考えました、なクツパの名前の案にピーチ姫は嫌そうに首を振る。

ピーチ姫が思い浮かべたのは、黒くてカサカサと素早く動き、気づくくと近くにいる例の頭文字がGの虫だろう。

「ノワール・・・・・・・・だと、少し男性っぽいかしら？」

「たしか……伯爵がノワールと名乗っていなかったか？」

ノワール、つまりは他の国の言葉で黒という意味なのだが。
クツパは過去に戦った相手の名前がノワールだったことを指摘する。

「……………ナハト」

「え？」

「なはと？」

マリオの口からこぼれた小さな言葉にクツパとピーチ姫は首をかしげる。

マリオ自身も不意に出てきた名前だったので驚きつつも頭の中で自分の言った名前を繰り返す。

ナハト——たしか何かの本で読んだ、どこかの国では夜を意味する言葉だったか……………

チラリと女性の顔を見て、瞳の色が目に入る。

女性の瞳は夜空のような綺麗な輝きをしている。

「うん。君の名前はナハトだ」

「ナハト……、私の名前……」

マリオに名前をつけてもらい、女性、ナハトは嬉しそうに跳び跳ねる。
まるで好きなおもちゃを与えられた犬のような状態だ。

「ナハト、ナハト！私、ナハト！」

「お、おう」

跳び跳ねながらナハトは何度も自分の名前を繰り返す。

とても嬉しいのだろう。

その喜びようから、この場にいる全員の目にはナハトの体から生える大きな尻尾がブンブンと揺れて見えていた。

「なんていうか……。マリオ以外のことに関しては無邪気、なのかしら？」

「生まれたばかりという事でそのあたりの知識がまだないのではないか？」

ぴよんぴよんと跳び跳ねるナハトを見ながら完全に毒気を抜かれたピーチ姫は首をかしげながら眩く。

そんなピーチ姫に、クツパは自身の予想を言った。

「まあ、なんでもいいわ。とりあえずは彼女は城の一室に住まわせることにするわね」
「すまぬが頼むのだ」

短く息を吐いてピーチ姫は改めてナハトを見る。

正直なところ、ナハトが城に住むのにあたって心配なことはいくつかある。

ナハトが大人しく城に住むのか？

マリオがいないことよって暴れたりしないか？

私自身とは仲良くできなかつたとしても、城にいるキノピオたちや、キノじいと仲良くできるのか？

食事のマナーなどは大丈夫なのか？

そういつたいくつかの心配事がピーチ姫の頭の中にはあつた。

とはいえ、ナハトがマリオの家で暮らすということになるよりはいいので、ピーチ姫が文句を言うことはないのだが。

「ナハト！ナハト」

そんなクツパとピーチ姫の思いも気にせず、ナハトは嬉しそうに跳び跳ね続けるのだった。

第58話

ピーチ姫がナハトを城に住まわせるために説得をしている間、マリオはクツパのもとへと移動した。

「驚かれてはいたけど、そこまでひどい反応はなかったな？」

「む……まあ、あつて欲しかった訳ではないが拍子抜けではあつたな」

マリオの言葉にクツパはキノピオたちの反応を思い出す。

確かにマリオの言うとおり、キノピオたちは驚くだけでそれ以外の反応はほとんどなかった。

その事実にくツパは少しだけ気が抜けつつも安堵していた。

腕を組んでツンとした態度を取ってはいるが、尻尾の揺れが穏やかなため、そこまで悪い気はしていないのだろう。

「これからは忍び込んだりする必要はなさそうだな」

「ふん、堂々と正面から入ってやるわ」

マリオの軽口にクツパは鼻を鳴らして答える。

そしてチラリとマリオの顔を見てクツパは顔を少しだけ赤く染めた。

「それに——もう忍び込む理由もないからな」

忍び込む理由がない、分かりやすく言えばピーチ姫を拐う理由がなくなっただけということ。
と。

後半の言葉は小声だったため、マリオの耳に届くことはなかった。

「いま、なにか言ったか？」

「ツ！……き、気のせいではないか？」

ボソボソとなにかが聞こえたような気がしてマリオは首をかしげる。

た。マリオに自分の言葉が聞こえたのではないかとクツパは驚き、ビクリと肩を震わせた。

そして目を軽く逸らしつつ誤魔化する。

そんなクツパの姿をマリオは不思議に思いつつも、気のせいだったと納得した。

「……………なあ、マリオ」

「なんだ？」

静かにクツパはマリオに話しかける。

どこか慎重そうな雰囲気にもマリオは何かあったのかと思いつつながら応じる。

「その……………だな？ やっぱり、えっと……………」

「どうしたんだよう？」

聞きたい、だけど聞きにくい。

クツパからはそんな葛藤がうかがえた。

マリオは首をかしげながらクツパの聞きたいことを待つ。

「あー……………、嬉しかったのか？」

「はい？」

顔を赤く染め、目を逸らしながらクツパはマリオに尋ねる。

なんのことか分からず、マリオは頭の上にハテナマークを浮かべる。

「だから……………、えっと、ナハトに抱きつかれて……………嬉しかったのか？」

「え……………」

相当恥ずかしいのだろう。

クツパの顔は真っ赤になっており、目を見るとやや潤んでいるように見える。

クツパの問いにマリオは固まってしまった。

どうすればいいどうすればいい？

正直に言うとか綺麗な女性に抱きつかれて嬉しかったのは事実だ。

しかも胸も大きかったからその柔らかさも感じれたし。

でも、これを正直に言っていないのか？

正直に言ったらまた何か酷いことになったりしないか？

あ、でも涙目のクツパに嘘を吐くのもなんか辛いかもしれない。

けっこう恥ずかしさを我慢して勇気を出して聞いてきたみたいだし……

本当にどうすればいいんだ?!

マリオの中で思考が加速する。

そして、マリオはゆっくりと口を開いた。

「その……、嬉しかった、です……」

マリオの口から出たのは肯定の言葉だった。

その言葉にクツパは少しだけ不満そうな表情を浮かべた。

第59話

じつとりとした不満そうな目でクツパはマリオを見つめる。
クツパの視線にマリオは気まずそうに目を逸らした。

「その……ごめんなさい」

「それは、なんの謝罪だ？」

居たたまれなくなって謝罪をするも、クツパはそれを切り捨てる。

クツパの言葉にマリオは言葉に詰まり、ガツクリと肩を落とした。

聞いておいて正直に答えたらこれかあ……

マリオが理不尽さに嘆いていると、不意に腕に何か柔らかいものを感じる。

不思議に思つて腕を見ると、クツパが顔を赤くしながら自身の腕に抱きついていた。

「クツ——?!?!」

「騒ぐな。カメックおばばの魔法でワガハイたちのことは認識しづらくしてある」

驚き声をあげようとしたマリオの口をクツパは指で押さえる。

周囲をソツと見渡してみると、クツパの言うとおり誰も気にした様子はなかった。

「きゅ、急にどうしたんだよ………?」

「きさまが気にすることではない。………それで、どうなのだ」

とつぜん抱きついてきた理由を聞いてみるが、顔をフイと逸らして答えてはくれない。

クツパは顔を逸らしたままマリオに尋ねる。

マリオはクツパが何のことを聞いているのか分からず、首をかしげた。

「だから………、ワガハイが抱きついて嬉しいか聞いているのだ………」

「ツ——!!」

顔を赤く染め、恥ずかしがりながらクツパはマリオに尋ねた。

さらに言い終わると片方の頬を膨らませている。

クツパの仕草があまりにも可愛らしく、マリオは思わずクツパを抱きしめそうになった。

落ち着け、落ち着け、落ち着け。

いきなり抱きしめたりしたら変態になる。

てゆうか、いきなり可愛すぎない？

しかも、クツパが身動みじろぎするたびに腕に柔らかいものががががが……

「いや……だったか……?」

「嬉しいに決まってるだろ。——はっ?!」

クツパが泣きそうな表情で聞くと、マリオは反射的に答えた。

直後、自分が何を言ったのかを理解してマリオは顔を赤く染める。

「そうか……そうか!」

マリオの言葉にクツパは嬉しそうに抱きつく力を強くする。

その表情はとも幸せそうで、周囲に花が咲いているようにも見えた。嬉しそうなクツパの表情を見ながら、マリオは内心で羞恥に苦悩する。

泣きそうな表情をしていたから思わず言ってしまった。

クツパが引いてないから良かったけど、恥ずかしすぎる。

そんなマリオとクツパのもとにピーチ姫が歩み寄ってきた。

カメックおぼばによつて認識がしばらくなくなっているはずの2人のもとに。

「マリオ、ナハトは城に住むことが決まったわ。それとクツパ、私の魔力の強さでカメックおぼばの魔法が完全に効くと思つたのかしら？」

「おわあ?!」

「………意外と早く気づいたのだな」

グイとクツパが抱きついていない方の腕を組まれ、マリオは驚き声をあげる。

ピーチ姫の言葉にクツパは、少しだけ悔しそうに呟く。

クツパとピーチ姫、2人の間に火花が散っているのをマリオは見た気がした。

第60話

クツパとピーチ姫に両腕を組まれ、そこにナハトが正面から抱きつき全身に感じる柔らかなさからマリオの『マリオ（意味深）が『いやっふうううう！』（下品）しそうになつた。パーティーも終わり、自宅への帰り道。

マリオはブーツと空を見上げながら歩いていった。

「あれは……やっぱりそういうことなのか……?」

思い浮かべるのはパーティーでのクツパ、ピーチ姫、ナハトの行動。
ハッキリと言ってマリオは恋愛についてはよく分かっているわけではない。

それでも、彼女たちの行動が自分への好意からではないか?ということくらいは理解できていた。

そこで断定をしないことからマリオのヘタレ加減もうかがえるが、今は気にしないで

もいいだろう。

「どうすればいいんだろう．．．．．？」

正直に言えば3人からの好意は嬉しいものがある。

しかし、逆に言うとも3人からの好意に悩むものもあつた。

もしも、本当に彼女たちが俺を好きなら．．．．．

俺は．．．．．誰か1人を選べるのか？

優柔不断、そう切つて捨てられても仕方がないのだろう。

短く息を吐いてマリオはくしやりと前髪を掴む。

「．．．．．まだ、俺には分からないな」

もう少しだけ、彼女たちとの変わらない日々を過ごせれば．．．．．

そんな淡い思いを抱きながらマリオは歩く。

その思いが儂いものだと、なんとなく察しながら。

マリオが帰ったあとのピーチ城。

ピーチ姫の部屋にクツパ、ピーチ姫、ナハトの3人はいた。

「それで、ワガハイたちを呼んだ理由はなんだ？」

「明日、マリオに会いに行くからもう寝たい」

「ちよつ、とは、待ちな、さいよ！」

椅子に腰掛けながらクツパはピーチ姫に尋ねる。

部屋を出ようとするナハトを捕まえるピーチ姫は、どうにかナハトを部屋にとどまら

せ、クツパの方を向いた。

「コホン。一応、ハッキリとさせておいた方がいいと思ったの」
「何をだ？」

軽い咳払いをしてピーチ姫はクツパの問いに答える。

ハッキリとさせるとはなんのことか？

ピーチ姫が何のことを話したいのか分からず、クツパは続きを促す。
その近くでナハトは鼻ちようちんを膨らませ始める。

「な、なに?!」

「起きなさい。．．．．んん。それはね、私がマリオを好きだということをや」

ナハトの鼻ちようちんを割り、ピーチ姫は腰に手を当てて宣言した。

鼻ちようちんが割れたことに驚き、ナハトはビクリと目を開く。

そんなナハトを呆れた目で見ながらクツパはピーチ姫の言葉を飲み込む。

「………宣戦布告というわけか？」

「そう取ってもらってかまわないわ」

「私だってマリオが好き」

少しだけ威圧を込めたクツパの言葉に、ピーチ姫は不敵に笑みを浮かべて答える。

その隣でナハトも手を上げて答えていたのだが、すでに分かっていたため、クツパとピーチ姫は何の反応もしなかった。

第61話

視線を強めにしてクツパはピーチ姫を見つめる。

そんなクツパの視線にピーチ姫は受けて立つとでも言うかのように不敵に笑みを浮かべていた。

その隣でナハトは手を上げているのだが、相手にされていないことに少しだけ悲しそうな表情を浮かべている。

マリオにしか興味はないが、無視をされるのは辛いようだ。

「さあ、私は自分の思いを言ったわ。あなたはどうするのかしら？」

「ふん。前までは拐われていただけだったのにワガハイに挑むか」

「ぐすん……」

挑発的なピーチ姫の言葉にクツパは、おもしろいといった様子で鼻を鳴らした。

その隣でナハトは悲しそうに手を下ろした。

「ワガハイも、マリオのことが好きだ。この思いはピーチ姫にも、そこで泣きそうなナハトにも負けるつもりはない！」

「それでこそあなたね」

「!・・・私も負けるつもりない、よ」

クツパの言葉にピーチ姫は嬉しそうに微笑む。

クツパが自分に対して話してくれたことが嬉しかったのか、ナハトは少し嬉しそうに返事をした。

「さて、とりあえず言いたいことも終わったわけだけど・・・」

「まだ何かあるのか？」

「眠くなってきた・・・」

ポンと手を叩いてピーチ姫がごそごそと何かを準備し始める。

その様子にクツパは不思議そうに首をかしげ、ナハトはうつらうつらとし始めてい

た。

そしてピーチ姫の準備が終わり、3人の目の前にお菓子の入った皿と紅茶の入ったティーポットの置かれたテーブルと3つの椅子が置かれていた。

「……………これは？」

「お菓子……………」

「ふふふ、女子会を始めるわよ！」

バアアーンン！という効果音がつきそうな勢いでピーチ姫は女子会の開始を宣言した。

唐突なピーチ姫の変化にクツパは頭上にハテナマークを浮かべる。

うつらうつらとしていたナハトはお菓子の匂いにつられてすでに椅子に座っていた。

「お菓子と紅茶を嗜たしなみながらいろいろなお話をする。やっぱり女子会をしないといけな
いと思うのよ！」

「まで、までまで……………」

ピーチ姫の勢いにたじろぎながらクツパはピーチ姫を止めようと手で制する。
あれ？

さつきまで宣戦布告とかで少しピリピリとした感じになってなかったっけ？

と言うかナハトはヨダレを垂らすな、お菓子にかかる。

いや、違うそうじゃない。

なんでいきなり女子会をしようという流れになったのだ？!

脈絡のない展開にクツパの頭の中は大混乱していた。

「まあ、今のところ共通の話題はマリオについてしかないし。マリオのことを直接は知らないだろうナハトのために、マリオについて話しましょう!」

「いや、だからなぜに?!」

「マリオのこと!」

驚くクツパを余所に、ピーチ姫の言葉にナハトが食いついた。

その瞳はキラキラと光っており、マリオの話を聞きたいということがうかがえた。

「いいじゃない。女子がお互いのことを知るには女子会が一番なのよ。………たぶ

ん

「最後のたぶんがなければ信じたかもしれぬがな……。はあ、仕方がない」

目を逸らして答えるピーチ姫に、クツパはため息を吐いて椅子に座る。

どうやら女子会に参加することを認めたようだ。

クツパが椅子に座るとピーチ姫は嬉しそうに紅茶を差し出した。

男子禁制、女子たちの秘密の語らいが始まるのだった。

第62話

パーティーがあつた次の日、マリオはいつものようにベッドから起き上がり、朝食の準備をしていた。

昨日の女子会の内容？

それは彼女たちだけの秘密なため、誰にも教えることはできません。

マリオが朝食の準備をしていると、不意に玄関の扉をノックする音が家の中に飛び込んできた。

「はい。玄関なら開いているよ」

マリオがそう言うと、ノックの主はゆつくりと玄関の扉を開けた。

扉を開けた先にいたのは、黒のドレスに身を包み、外ハネのややくせつ毛がちな綺麗な金髪、そして夜空のような綺麗な黒い瞳の女性、ナハトだった。

「マリオ、来ちゃった」

「ナハト？おはよう」

語尾にハートマークでも着いているのではないかといった口調でナハトはマリオの家に入る。

こんなに朝早くからナハトが来たことを不思議に思いながらも、マリオはナハトに朝の挨拶をした。

「こんな早くからどうしたんだい？」

「マリオに会いたいから城から抜け出してきた」

朝食の準備を進めながらマリオが尋ねると、ナハトはマリオの手伝いをしながら答えた。

ナハトのまつすぐな言葉にマリオは一瞬だけ固まるが、その事を顔に出さないようにしながら準備を終えた。

その直後、マリオの家の玄関の扉が勢いよく開かれる。

「マリオ！ナハトが来てない?!」

扉を勢いよく開けて入ってきたのはピーチ姫とクツパだった。
そうとう慌てていたのだろう。

髪の毛はかなり乱れており、荒い息を吐いている。

「ピーチ姫？ナハトならここにいるけど」

「……………意外と気づくのが早い」

肩で息をしている2人にマリオは水を差し出しながらナハトが家にいることを教える。

水を飲む2人を見ながらナハトは小さく呟く。

「はあ……………はあ……………起きたら……………はあ……………姿が……………ないんだもの……………」
「はあ……………もしやとは……………はあ……………思ったが……………案の定……………か……………」

息も絶え絶えにピーチ姫とクツパは、ここに来た理由を話す。

「どうやらナハトは2人に何も言わずに勝手にマリオの家に来てしまったようだ。」

ナハトはプイと2人からそっぽを向いてしまっている。

「昨日はクツパも城に泊まっていたのか?」

「ああ、ピーチ姫に誘われてな」

クツパがピーチ姫と一緒に来たことから、クツパが城に泊まったのだと思ったマリオはクツパに尋ねる。

「マリオの問いにクツパは頷いた。」

「まったく、勝手にいなくなったらダメじゃない!」

「知らない。それに私は昨日ちゃんと行ってた」

詰め寄るピーチ姫にナハトはツンとした態度で答える。

確かにナハトは昨日の女子会の前にマリオの家に行くと言っていた。

が、こんなに朝早くに会いに行くとは2人も予想はしていなかったのだ。

「あー……、ナハト？」

「なに？マリオ」

頬を掻きながらマリオはナハトに話しかける。

マリオに話しかけられたことが嬉しいのか、ナハトはマリオのもとへと駆け寄った。

「どこかに行くときは行く前にちゃんとピーチ姫に伝えような？」

「マリオが言うなら分かった」

あっさりと頷くナハトに、ピーチ姫とクツパは脱力して項垂れるうなだのだった。

第63話

しがみつこうとしてくるナハトを押しさえながら、マリオはチラリとクツパとピーチ姫の方を見る。

「それで？3人は家で朝ごはんを食べていくのかい？」

「食べたい！」

マリオの問いにナハトが素早く反応して返事をする。

まあ、ナハトの場合は朝ごはんが食べたいからではなく。

マリオと一緒に食事をしたいから、なのだが。

「ありがとう、マリオ。でも今日は遠慮しておくわね。うちの料理人が朝食の準備をしているのを見てきたから」

「用意してもらった物を食べぬのはあまりにも礼儀に反しているからな」

首を横に振ってピーチ姫はマリオの誘いを断る。

ナハトを探すために城を出る際に料理人が動いているのを見たため、朝食を用意してくれているのを知っていた。

料理人の働きを徒労に終わらせるのは申し訳ないと思ったのだ。

ピーチ姫の言葉にクツパも頷き同意する。

「私は——」

「あな た も帰るわよ」

「ワガハイとピーチ姫の分しか用意していないわけがないだろう。きさまも帰るのだ」

マリオにしがみついで1人だけ残ろうとするナハトを素早く捕まえて、ピーチ姫とクツパはマリオから引き剥がす。

ナハトも抵抗はしていたが2人がかりで捕まえられてはどうしようもなく、観念したのか寂しそうにマリオのことを見ていた。

「じゃあ、私たちは城に戻るわね」

「食事にはまた今度誘ってくれ」

「マリオおおお・・・」

そう言つてピーチ姫とクツパはナハトを引きずりながらマリオの家を後にした。

そんな3人の姿をマリオは苦笑しながら見送る。

寂しそうな表情を浮かべているナハトを見ると罪悪感がわくのであまり見ないように。

ただし、まったく見ないと寂しそうな表情から泣き出しそうな表情に変化してしまうので、ほどほどに気にしながら。

3人の姿が見えなくなるまでマリオは見送っていた。

「・・・難しいなあ」

3人の姿が見えなくなり、ポツリとマリオは呟く。

その呟きが意味するのは、ナハトの扱いについて——ではない。

ナハトは、俺のことを好き・・・なんだろうな。

今朝から家に来たナハトの行動や態度からその事が如実にうかがえた。

昨日の帰り道で悩んでいたことが、改めて突きつけられる。

3人に対してなるべく普通の態度で応えるようにはしていたが、内心ではモヤモヤとした思いが渦巻いていた。

「はあ………。とにかく今日は配管の修理の依頼が来ていたから準備をしないと………」

短く息を吐いてマリオは仕事の準備に取りかかる。

その行動が悩んでいることからの逃避だとは理解している。

それでもマリオはその悩みにうまく向き合うことができなかつた。

最近、多くなってきたため息に対してため息を吐きそうになるのを堪えながら、マリオは仕事に向かうのだった。

第64話

朝方にナハトやクツパがやって来たり、昼頃にナハトやピーチ姫が来たり、夕方にナハトが勝手にやって来てピーチ姫が迎えに来たり。

そんな日々が数日経ったある日。

「キノコランド？」

「ええ、開園記念で券を貰ったのよ。4人で行きましょう？」

ピーチ姫が差し出してきた券を見ながらマリオは券に書いてある文字を読む。
券には『キノコランド開園記念優待券』と書かれていた。

「場所は……キノコタウンを越えて少し行った所なんだね？」

「けっこう前から建設はしていたけど遂に完成したみたいなのよね」

券に書いてある住所を読み、マリオはキノコランドの場所を把握する。

そういえばけっこう前にこの辺りの配管を組み換える依頼が来ていたな。

その時は他にもいくつか依頼が来ていて慌ただしかったから依頼者の名前と報酬額くらいしかまとめてなかったし。

キノコランドの住所の場所が以前に依頼で仕事をした場所だと思いだし、その時の書類を纏めていなかったことをマリオは思い出す。

「仕事の依頼もしばらくはないから大丈夫だと思うけど、いつ行くんだい？」

「そうね……。私の方も他の国からの手紙の返信に、国の予算や状態なんかもないといけないし……」

マリオの問いにピーチ姫はムムムと頭を悩ませる。

けっこう頻繁に出歩いたり、拐われたりしているイメージのあるピーチ姫だが、やるべき仕事はきちんとやっている。

その仕事を終えてからマリオにお茶会のお誘いの手紙を送ったりしているのだ。

「アレとアレを早めに進めて……あつちは後に回しても大丈夫だったわね。あとは……、帰ったら早めに取りかかりましょう……」

スケジュール帳を確認しながらピーチ姫は予定を組み立てていく。

普段ではあまり見ないピーチ姫の姿にマリオは少しだけ違う雰囲気を感じ、知的な印象を受けた。

強いて言うなら、眼鏡が似合いそうである。

「よし、これなら大丈夫そうね。5日後で大丈夫かしら？」

「5日後だね？えっと……。うん、その日なら大丈夫だよ」

予定の組み立てが終わり、ピーチ姫はマリオに確認をとる。

ピーチ姫の言葉にマリオもカレンダーを確認し、依頼がないことを伝えた。

「ナハトは大丈夫なのは確定してるし……。あとはクツパね」

「手紙だどちよつと遅いし、俺が聞きに行こうか？」

「そう、ね。お願いしてもいいかしら」

ナハトは城の中での様々な仕事の手伝いをしているため、その辺りの融通はピーチ姫がなんとかできる。

マリオの提案にピーチ姫は頷き、さらさらと手紙を書き始めた。

「俺が伝えればいいんじゃないか？」

「……あなたという言葉だけだとクツパが勘違いするかもしれないから。ちゃんとこの手紙を渡すのよ？」

首をかしげるマリオにピーチ姫は少しだけ考えて答える。

まあ、本音を言ってしまうえば、マリオにクツパを誘う言葉を言わせたくなかったというのがあるのだが。

いくら自分たちがいると言っても、好きな相手に遊園地に誘われると言う夢のシチュエーションをクツパに経験させたくはなかったのだ。

第65話

ピーチ姫から預かった手紙をポケットに入れて、マリオはクツパの城へと続く道を歩く。

クツパが女性の姿になってからクツパの城に行くのは初めてであり、何か変わったりしたのかな？といった思いもあった。

城に着くと門番をしていたトゲの生えた甲羅と甲冑を着けたノコノコ、トゲノコが話しかけてきた。

ちなみに、クツパの姿が変わる前までは問答無用で戦闘になっていたため、マリオは内心では驚いてる。

「おや、マリオじゃないか。城に何か用かな？」

「やあ、トゲノコ。クツパに用があるんだけど、今は大丈夫？」

トゲノコの問いにマリオはクッパの予定が空いているかを尋ねる。

マリオの言葉にトゲノコは少しだけ考えるようなしぐさを見ると、おもむろに城の門を開けた。

「私が知る限りでは何もなかったとは思いますが、一応おば様を確認を取るといいだろう」
「そっか。わかったよ、ありがとう」

トゲノコにお礼を言い、マリオは城の中へと入っていく。

城の内装はそこまで大きな変化は無いように見えた。

「まあ、さすがに簡単に城の内装は変えられないか。確か、カメックおばの部屋はあっちだったな」

慣れ親しんだ家のようにマリオは城の中を歩いていく。

それもそのはず、マリオはピーチ姫を助けるために過去に何度もこの城に挑んできて
いる。

なので、マリオはクッパ城の構造をトイレの位置まで知っているのだ。

「と、ここだったな。おーい、カメックおばばー」

「おや、マリオが城に来るとは。何か用でも？」

カメックおばばの部屋の扉を軽く叩きながらマリオは呼び掛ける。

すると扉が開き、中からカメックおばばが現れた。

カメックおばばはマリオが城にいることに少しだけ驚きつつ、何をしに来たのか尋ねる。

「ピーチ姫が新しくできた遊園地の優待券を貰ってね。クツパも行けるかどうかを確認に来たんだ」

「なるほどのう。確か……クツパしゃまはしばらくは何も予定はなかったはずじゃな」

マリオの言葉にカメックおばばは納得し、クツパの予定を調べていく。

どうやら普段から乗っている筈に予定が書き込んであるようで、顔を近づけて確認していた。

「その遊園地に行く日程は決まっておるのか？」

「一応、5日後を予定しているよ」

「ふむ、特には予定はないみたいじゃな。今ならクツパしやまは時間が空いているから直接言ってくるの良いじゃろ」

そう言つてカメツクおばはマリオの背中を押してクツパの部屋へと向かうように促した。

クリボーやノコノコ、トゲノコなどに挨拶をしながらマリオはクツパの部屋へと向かう。

「襲われずに城の中を歩くのも少しだけ変な感じだなあ」

今までなら見つかった瞬間に襲いかかってきていたため。

新鮮な気持ちだった。

そして、マリオは黒い大きな扉の前にたどり着く。

この扉こそがクツパのいる玉座の部屋の扉だ。

第66話

目の前の黒い大きな扉を開け、マリオは中に入る。

今までにも幾度となく開いてきたが、こんなにも落ち着いて扉を開けたのは初めてではないだろうか？

「む？マリオではないか！どうしたのだ？遊びに来たのか？」

「やあ、クツパ」

扉を開けて入ってきたマリオの姿を確認し、クツパは嬉しそうに尻尾を揺らしながら玉座から立ち上がってマリオの近くへと寄る。

近寄ってくるクツパに、マリオは軽く手を上げて応えた。

どうやらクツパは先ほども何かしらの報告書を見ていたようで、玉座の近くにある小さなテーブルの上には何枚かの書類が置かれていた。

「むう……。前もって連絡をくれれば何かしらの用意をしておいたのだが……」
「そんなに気を使わなくても大丈夫だぞ？」

腕を組み、ややジトツとした目でマリオを見ながらクツパは呟く。

クツパの呟きにマリオはヒラヒラと手を振りながらポケットから手紙を取り出した。
手渡された手紙を不思議そうに見てから、クツパはマリオの顔を見る。

「これは？」

「ピーチ姫からの遊びに行く誘いの手紙だよ。予定としては5日後だけど……」

マリオからではなくピーチ姫から、そう聞いてクツパは少しだけガツカリとする。

しかしその後のマリオの言葉に、マリオも一緒に遊びに行くのだと理解してすぐに気分は良くなった。

「ふむふむ。集まる時間とかは決まっているのか？」

「んー、キノコランドに行くって話だし……。ピーチ姫のことだから開園時間と

同時に入ると思うんだよね」

宝探しと言つてゴロツキタウンまで行つたピーチ姫の行動力を思い出しながらマリオは苦笑する。

囚われているはずなのに城の中を歩き回つたりする行動力を持つている姿を思い出したのか、クツパもつられて苦笑いをした。

おしとやかではあるのだが、なかなかにお転婆てんぱな一面もあるピーチ姫に2人はどうしたものと頬を掻く。

「……………絶対に園内を走ると思う」

「最初はおそらくジェットコースターみたいな絶叫系のアトラクションであろうな……………」

動きやすいとは思えないドレス姿でマリオの手を掴みながら走る姿を幻視し、少しだけ遠い目をする。

別にピーチ姫に振り回されることが嫌なわけではないのだが、何故かその状態のピーチ姫はいつまでも元気なのだ。

マリオがすでに疲れ果てているのに一人だけ元気に跳び跳ねていたりしたこともあった。

「と、そうだ。マリオ、この後は暇か？」

「うん？んー……、特には予定はないかな」

手を叩いて気持ちを切り替え、クツパはマリオに尋ねる。

クツパの問いにマリオは他に何か用時があったかを考え、何もなかったことを答えた。

マリオの言葉にクツパは嬉しそうに尻尾を揺らした。

「そ、そうか！なら、ワガハイと遊ぶのだ！」

「遊ぶって……。。。。。。お前、今日の分の仕事は？」

クツパはブンブンと尻尾を振ってマリオの手を掴む。

そんなクツパの姿にマリオは呆れたように眩き、玉座の近くのテーブルに置かれている書類を指差した。

「アレは配下たちの今日の予定が纏められている物だ。一通り目は通したから問題は無いのだ」

「それならいいけど……」

マリオが指差した書類をチラリとクツパは見ると、何でもないことかのように答える。

実はクツパは配下たちが何をしているのかを毎日確認しており、それぞれの働きなどがある程度把握しているのだ。

「なに、問題が起きた場合はカメックおばばに報告が行くから大丈夫なのだ。さあ、ワガハイの部屋に行くぞ！」

「わかったわかった。逃げないから引つ張らないでくれよ」

ニコニコと笑みを浮かべながらクツパはマリオを連れて自身の部屋へと向かう。

自分の部屋に好きな人が入るということを深く考えないまま……

第67話

グイグイとマリオの手を引きながらクツパは自身の部屋へと向かう。
クツパの尻尾は嬉しそうに揺れており、ブンブンと音が聞こえてきていた。

「さてさて、何をして遊ぶか」

「そんなに焦らなくても……」

歩きながらクツパは部屋で何をして遊ぶかを考える。

そんなクツパを見てマリオは何を急いでいるのか不思議に思いながら言った。

そして、ようやくクツパの部屋の扉の前へとたどり着き、クツパはピタリと足を止める。

「どうしたんだ？」

「う．．．．．、あゝ．．．．．。そのゝ．．．．．」

ピタリと止まったまま部屋へと入ろうとしないクツパを不思議に思い、マリオはクツパに尋ねる。

マリオの問いにクツパはギ、ギ、ギとオイルの切れた機械のような動きでマリオへと顔を向けた。

その表情は固く。

どこか気まずそうに見えた。

「す、すまぬのだが。少しだけここで待っていてくれぬか？」

「それは構わないけど．．．．．。散らかってるのか？」

部屋の扉に手をかけながらクツパは言う。

クツパの様子からもしや、と当たりをつけたマリオは尋ねる。

「!!．．．．．。そ、そうなのだ！だから、片付けるので少しだけ待っていてほしいのだ！」

「散らかつてるくらい俺は気にしないけどなあ」

「ワガハイが気にするのだ！」

そう言つてクツパは部屋の中へと慌てた入つていく。

後に残されたマリオは部屋の中から聞こえてくる物音とクツパの声に首をかしげるのだった。

「これはそこに、あれはこっちに！……あ、こんなところにあつたのか。つて、それどころじゃないのだ！」

「だ、大丈夫か？」

どつたんばつたん大騒ぎな音が聞こえてきてマリオはおずおずと扉に声をかける。すると一時的に中からの物音が止み、中からクツパの声が聞こえてきた。

「も、もう少しなのだ！だから、絶対に開けるな！」

「わ、分かつたよ」

そう言つて扉の中からは再び物音が聞こえてくる。

本当に大丈夫なのかと心配にもなったが、クツパの言葉に従つてマリオは扉の前で待つことにした。

「これとこれはここにしまえばいいか、……よし。マリオ、入つてきていいぞ」
「ようやく終わったか……。お邪魔します」

どうにか片付けが終わつたらしく、部屋から聞こえてきていた物音が止む。

クツパの許可を得てマリオはクツパの部屋の中へと足を踏み入れた。

部屋に入ったマリオの目に映つたのは、廊下などの壁と同じブロックの壁に、赤いシーツの敷かれた黒いベッド。

そして、大きめのサイズのテレビとその前に置かれたいくつかの種類ของเกม機だった。

壁の方を見ると機械類の本や漫画などが入れられており、その隣には押し入れの扉のようなものがあつた……。が、何故か扉の前にテーブルが置かれており、開かないようになっている。

「おい、あの押し——」

「なにもないのだ」

「——入れ……いや、なにもな——」

「なにもないのだ」

「——いわけが……」

封じられた押し入れを指差しながら尋ねると、クツパは笑顔を浮かべながらマリオの言葉を両断する。

マリオも2回も遮られてはさすがに答えてくれないと理解したのだろう。

マリオは押し入れからクツパへと体を向ける。

「それじゃあ何をやる?」

「そうだな……。ツイスター……。いや、とりあえずはバリオハザード4でもやるか」

マリオの問いにクツパは1つのゲームを取り出した。

クツパの取り出したゲーム、バリオハザード4はキノコタウンでも人気のゲームであ

り、バリヨテロによって起こったりリヨ化した人間や動物、果ては実験体と戦うゲームだ。リヨ化した人間たち、通称リヨンビのデザインの怖さも人気の一つである。

「オツケー。けっこう前にもやったっけ？」

「そうだな……。たしか、2回くらいピーチ姫を拐う前あたりではなかったか？」

ゲームの準備をしながら最後にやったのはいつだったのかを話す。

と言うよりもピーチ姫を拐うことが期間の目安になっているあたりどうなのかと思われるが……。

そして、ゲームの準備を終えて2人はバリヨハザード4をプレイし始めた。

第68話

コントローラーを握り、マリオとクッパは並んでテレビ画面に集中する。

テレビ画面には何体もの敵が現れており、マリオとクッパの操るプレイヤーキャラによつて次々と倒されていった。

『ガクチャク！』

「後ろから来てるぞ！」

『回すのお！ガチャをまわしゆのお！』

「分かっておるが！追いつかぬ！」

敵の声に気づき、マリオは素早く背後に迫つてきていた敵を倒す。

クッパの方にも声をかけるが、クッパは前方の敵に翻弄されて背後の敵に対応が出来ずにいた。

その事に気づいたマリオはクッパのプレイヤーキャラの背後に回り、迫ってきていた敵を倒す。

「助かったのだ。そっちは任せてもよいか？」

「ま、この量じゃキツいわな。背中も預けた」

『宝具スキップのない運営は悪』

『呼符で星5を当てたな』

『素材置いてけ』

『殺したかったけど死んでほしくなかった』

背中合わせに立ちながら2人は敵に向かう。

マリオとクッパにはよく分からない言葉を喋りながら敵は徐々に距離を詰めてくる。

もはや画面にはマリオとクッパのプレイヤーキャラ以外の部分がすべて敵に覆われていた。

「く．．．．．。さすがに物量に押されるのだ．．．．．」

「敵の量がキツすぎる．．．．．」

敵の数が少ない内はなんとか背中合わせで倒していくことができていた。

だが敵の数が増えていくにつれてそれも上手くいかなくなり、マリオとクツパは追い詰められていた。

そんなとき、マリオは画面の端に落ちている武器に気がついた。

「こうなったら一か八かだ！」

そう言ってマリオは落ちている武器を拾って敵の方に向けて構える。

マリオの拾った武器に気がついたのか、クツパは慌ててマリオのプレイヤーキャラの近くへと移動する。

「食らえ！RP^スGー7^テ あああああ！」

掛け声と共にマリオはロケットランチャーを発射する。

発射されたロケットランチャーはすごいスピードで敵の密集する中心部へと突き刺さり、盛大な爆発を巻き起こした。

凄まじい爆発によって敵は一斉に吹き飛び、画面に映っているのはマリオとクツパのプレイヤーキャラだけになった。

「ふう、上手くいつて良かった」

「できれば、合図をしてほしかったがな」

敵がいなくなり、セーブポイントが出現してマリオはホッと息を吐く。

そんなマリオをジト目で見ながらクツパは息を吐いた。

「少し集中して喉が渴いたな。飲み物を持ってくるのだ」

そう言ってクツパは部屋から出て行ってしまった。

部屋に残されたマリオは改めてぐるりと部屋の中を見回してみる。

ざつと見てみたところ、あまり変わったところはないみたいだな。

姿は変わっても根本的などころはクツパのままなんだろうか？

記憶の中にあるクツパの部屋とそこまで変化が見られないことにマリオはどこか安心していた。

そんなとき、ベッドの端からなにかがはみ出していることに気づく。

「ん？」

ちよつとした興味が湧き、マリオはベッドへと近づいてみる。

はみ出しているのはどうやら布のようで、一部分しか出ていないので何が置いてあるのかは分からない。

好奇心に負けてマリオはその布を掴んでベッドから引き抜いてみた。

それと同時にクツパが飲み物の入ったボトルとコップを持って部屋に戻ってくる。

「マリオ、リンゴジュースでよかつ……た……か……か」

「……あ」

部屋に戻ってきたクツパはマリオの姿を確認し、マリオの手にあるものを見て固まった。

クツパがなぜ固まったのか分からず、マリオはクツパの視線の先——自分の手に掴んでいるものを見る。

黒。

一言で簡単に表すならこれに尽きるだろう。

それでもあえて表現するなら、黒い色彩でありながら肌の色をうつすらと透かして見えそうな薄い黒に、大事な部分だけは最低限隠すくらい幅しかない光の通さない黒。

そして可愛らしい花のような刺繍が何カ所かに施されている。

マリオがクツパのベッドから引き抜いたもの、それは――

——
クツパの黒い下着だった。

第69話

飲み物の入ったボトルとコップを持ったクツパと、クツパの黒い下着を掴んでいるマリオ。

どう考えてもマリオが有罪ギルテイな状況である。

マリオの頭の中を、『変態』『有罪』『逮捕』『死刑』『黒ってエロくね?』といった言葉たちが駆け巡っていく。

それでも手からクツパの下着を放さないのは動揺していたからか、はたまたクツパの下着だったからか。

下着を掴んでいるマリオを確認したクツパは俯きながら手に持っていた飲み物の入ったボトルとコップをゲーム機の近くに置く。

「く、クツパ……?!これは……その……?!」

俯きながら近づいてくるクツパに、マリオは動揺してうまく喋ることができなかつた。

そんなマリオのもとにクツパは俯きながらツカツカと近づく。

そして、クツパとマリオの距離が触れあいそうなほどにまで狭まった。

「クツパ………?」

「………か………」

目の前に立つクツパに動きがないことを不思議に思い、マリオは恐る恐る声をかける。

クツパはマリオの言葉に答えずに、ボソボソと何かを呟いた。

「………え?」

「下………か………」

クツパがなんと言っていたのか分からず、マリオは聞き返す。

すると少しだけ声量は大きくなったが、それでもまだ聞き取りづらい声でクツパは呟

く。

「ごめん。聞き取れなか——?!」

マリオがもう一度尋ねると、突然クツパがマリオをベッドへと押し倒した。いきなりのことにマリオは反応できず、ベッドへと倒れこんだ。倒れたマリオの上にクツパがのしかかる。

「ワガハイの……下着が見たかったのか……?!」
「クツ……パ……」

頬を赤く染め、潤んだ瞳でクツパはマリオを見る。

押し倒されたことに混乱していたマリオは、クツパの顔を見てゆつくりと名前を呼んだ。

クツパの表情は泣きそうにも見えるのだが、どこか期待しているようにも見え。

その表情と押し倒されているという状況から、クツパの姿はとても扇情的に感じられた。

「言ってくればば……ワガハイは……」

ゆつくりと、クツパの手が自身のドレスの端へと伸びていく。

マリオは動くクツパの手を見ることしかできない。

喉がカラカラになり、口の中がねばつくような感覚がする。

クツパの手がドレスの端を掴み、ゆつくりと上へと上がつていく。

隠れていたふくらはぎが、太ももが徐々に、徐々に露あらわになる。

ゴクリ、とマリオの喉が鳴った。

「マリオ……」

「クツパ……」

もはや、マリオとクツパはお互いに相手のことしか見えていない。

そして、クツパのドレスが上がり隠されていた秘部が見えそうになったとき、クツパの部屋の扉が叩かれた。

「クツパしやま。少しよろしいですかな？」
「ツ!!」

扉の外からかけられたカメックおばばの声にクツパはビクリと肩を揺らして素早く立ち上がる。

それにつられてマリオもクツパのベッドから降りてゲーム機の近くに移動する。

「ど、どうかしたのか？」

「いえ、明日の予定のことで確認をと思ひまして」

扉越しにクツパはカメックおばばに尋ねる。

どうやらカメックおばばは明日のことで気になることがあつて聞きに来たようだ。

クツパとカメックおばばのやり取りにマリオは内心でドキドキしながら次のゲームの準備をする。

マリオ自身は平静を装よそおっているつもりだが、その手は小刻みに震えており、はたから見ると普通の状態には見えなかった。

第70話

クツパとの話を終え、扉の向こう側からカメックおばばが去っていく音がする。

先ほどまでは情欲に流されてそうだったことを致してしまいそうな2人だったが、カメックおばばが来たことよって一時的に冷静になり情欲を収めることができた。

が、致してしまいそうになっていたのは事実なため、クツパとマリオの間にはやや気まずい空気が流れていた。

「えと・・・・・・・・あ」

「おい・・・・・・・・あ」

おずおずと互いに話しかけようとして言葉がかぶり言いづらそうに2人は沈黙する。

2人の顔はどちらも赤く染まっており、互いに相手を意識していることがうかがえた。

そして再び2人の間に沈黙が流れる。

2人が沈黙してからどれくらいが経つただろう。

10秒か、1分か、はたまた10分か。

「・・・・・・・・なあ、クツパ」

そつと、探るようにマリオが口を開いた。

名前を呼ばれたクツパは少しだけ肩を揺らし、ゆっくりとマリオの方を見る。

気まづくはある。

それでもマリオにはクツパに聞きたいことがあった。

「・・・・・・・・さつきのは、その・・・・・・・・冗談・・・・・・・・じゃ、ないんだよな？」
「・・・・・・・・うむ」

マリオの言うさつきのとは、クツパがマリオを押し倒したことを指していた。

長い付き合いであるクツパだからこそ、先ほどの行為は衝撃的だったし、冗談でやってはいないことがえる。

それでもなお、マリオはクツパに確認をした。

マリオの問いに、クツパは目を軽く逸らしながら頷いた。

「マリオ……」

マリオの名を呼びながら、ギユツと自身のドレスを掴んでクツパはうつむく。辛そうに自身の名を呼ぶクツパにマリオはなにも答えられなかった。

「まだ……、まだ、答えを出さなくていい……」

うつむき、体を震わせながらクツパはさすがのような声でマリオに話しかける。

クツパの言葉にマリオは少しだけ安堵していた。

まだ、マリオ自身にも正解だと言える答えは見つけられていないからだ。

「ただ、1つだけ……。ワガハイを……変だと、思うか……？」
「クツパ……」

ポタリ、ポタリとクツパからなにかがこぼれ落ちて床に小さな染みを作った。うつむいていた顔を上げ、クツパは涙を貯めた瞳でマリオを見つめる。

震えながら涙を流すクツパにマリオは名前を呼ぶことしかできなかった。

「こんなにも、きさまの……マリオのことを思ってしまった……ワガハイの、ことを……気持ち悪いと、思うか……？」

涙を流し、怯えるように震えながらクツパはマリオに尋ねる。

——ソレがどれ程に辛い質問か……

——ソレがどれ程に怖い質問か……

——ソレがどれ程に残酷な質問か……

泣きながら尋ねてくるクツパの姿に、マリオは自身がどれ程に酷いことを考えていたのかと、拳を強く握る。

なぜ、答えを出さなくていいと言われて安堵した。

なぜ、涙を流すほどに思ってくれているクツパにそんな軽い気持ちで答えを後回しにしようと思った。

なぜ、人が人を思う気持ちをもっと大切に感じなかった。

歯が砕けるのではないか、それほどに力を入れてマリオは歯を食い縛る。

そして、マリオは自身の顔を思い切り殴り抜いた。

第71話

自身の顔を思い切り殴り抜き、マリオは体をふらつかせる。
いきなりマリオが自分の顔を殴ったことにクツパは目を白黒とさせていた。

「ま、マリオ………?」

驚いたクツパは目に涙を溜めながらおずおずとマリオの名を呼ぶ。

目の前にいる人物がいきなり自分の顔を殴ればそれも当然の反応だろう。

殴ったことによつて頬を赤く腫らしながら、マリオはまっすぐにクツパを見る。

「すまなかつた」

「マリオ?」

クツパの目をまっすぐに見つめ、マリオは頭を下げる。

突然の謝罪にクツパはなんのことか分からずにキョトンとしてしまう。

クツパがキョトンとしていることに気づいたマリオは頭を上げてクツパへと近づいた。

マリオが距離を詰めてきたことにクツパは驚き、数歩後ずさる。

「っ……………」

「クツパ」

怯えるように後ずさるクツパの肩に優しく手を置き、短く名前を呼ぶ。

クツパはマリオの手から逃れようと体をよじっていたが、名前を呼ばれてピタリと動きを止めた。

「俺は、お前のことを変だとか、気持ち悪いだなんて思っていないよ」

「本当……………か……………?」

目と目を合わせ、マリオはまっすぐにクツパを見る。

マリオの言葉にクツパは瞳を揺らしながら聞き返す。

本当に自分のことを気持ち悪いと思っていないのか。
本当に自分のことを．．．．．

ぼろぼろと涙を溢れさせながらクツパはマリオの手に自分の手を重ねる。

「ああ。俺の方もすまなかった。俺は．．．．．、答えを出さなくていいと言われて安心してしまったんだ．．．．．」

「それは．．．．．」

涙を溢れさせるクツパに、マリオは改めて謝る。

マリオの言葉にクツパは首を横に振った。

それは、ワガハイがまだ答えを聞くのが怖かったから聞けなかっただけ．．．．．
自分のことをマリオがどう思っているか分からなくて言った、逃げ道の言葉．．．．．

クツパはマリオの言葉を否定しようと口を開くが、うまく言葉にならず口を開くことしかできなかった。

「俺は、お前たちが好意を持つてくれているんじゃないかってなんとなく分かっていたんだ。でも、今の関係が壊れてしまうんじゃないかって……」

そつと目を伏せ、マリオは自身の思いを語る。

マリオが自分たちの好意に気づいていたことにクツパは驚き、思わずマリオを凝視した。

「お前たちが……お前が、涙を流すほどに思ってくれているのに。俺は、まだ答えを出さなくていいと軽い気持ちで答えを後回しにしようと思ってしまったんだ……」

マリオの言葉にクツパはマリオの謝罪の理由を理解した。

自分のことが許せなくて自分の頬を殴ったのか……

ソツと、マリオが痛くないように優しく赤く腫らした頬に手を当てる。クツパの行動にマリオは思わず顔を上げてクツパを見た。

「…………ワガハイは、自分のことがどう思われているか分からなくて不安で怖かった。マリオ、きさまは今の関係が壊れてしまうのではないか不安だった。…………ワガハイたちは似ているのかもしれないな」

「クツパ……………」

クツパの言葉にマリオは目をパチパチとさせる。

完全に似ているかと言われれば首をかしげてしまっただろう。

だが、お互いに不安を抱いていたという点では似ていたのかもしれない。

「ワガハイのことを気持ち悪いと思わないでくれるのかな？」

「ああ」

「ワガハイのマリオへの気持ちを知ってもそう思ってくれるのかな？」

「ああ」

確認するように何度もクツパはマリオに尋ねる。

クツパの言葉にマリオは何度も強く頷いた。

マリオが頷くたびにクツパの目に力が戻っていく。

「マリオ、先ほども言ったが答えはまだ出さなくてもよい。ただ、ハッキリとさせてお
くだ」

両手でマリオの顔を挟み、クツパは顔を近づける。

マリオは後ろめたさから顔を逸らそうとするが、クツパの手によって顔を逸らそうと
するが動かすことができなかった。

「ん……………」

「んむ……………?!」

唇に触れる柔らかな感触。

目の前に映るのはこちらを優しく見るクツパの瞳。

いま、マリオとクツパの距離は0になっていた。

「マリオ、ワガハイはお前のことが……大好きなのだ」

唇が離れ、わずかな間だけマリオとクツパの間に透明な橋が作られる。

ポカンとするマリオにクツパは恥ずかしそうに頬を染めながら宣言するのだった。

第72話

クツパに唇を奪われたマリオはポカンとした表情で立ち尽くす。

マリオの年齢は26歳なのだが、これがマリオのファーストキスだった。

一方でマリオのファーストキスを奪ったクツパ。

クツパの年齢は29歳でマリオよりも年上なのだが、こちらもマリオと同じくファーストキスだった。

そして、そのクツパは今……ベッドに頭から潜り込んで顔を真っ赤にして身悶えしていた。

ま、マリオに思いを伝えたのは良いのだが……
嬉しさで……お、思わずキ——

「——キス……してしまった……」

口に出したことによってクツパは改めて自身のした行為を思い返す。

両手から伝わるマリオの体温。

徐々に近づいてくるマリオの顔。

近づいたことよって感じるマリオの呼吸。

そして唇に感じる柔らかな感触。

それらすべてを感じて胸の奥で生まれた幸福感。

自身のした行為を思い返してクツパは顔を赤くしながらも、その口はニマニマと嬉しそうに笑みを作っていた。

「えへ・・・・・・・・えへ・・・・・・・・」

笑みを浮かべながらクツパはくねくねと体をよじらせる。

その動きははたから見るとウナギや蛇がうねっているようにも見えた。

「——はっ?!」

と、ここでポカンと呆けていたマリオの意識が復活する。

マリオはキョロキョロと周囲を見回し、ベッドに頭から潜り込んでいるクツパの姿を見つけた。

そして、自身の唇に恐る恐る手を当て、顔を真っ赤に染める。

「——ツツ~~~~!!」

声にならない叫び声をあげてマリオは顔を隠してしやがみこむ。

人生で初めてのキス。

不意打ちのようなキスだったが、その感覚はハッキリと唇に残っており、ほぼゼロ距離にまで来ていたクツパの顔も目を閉じれば思い出せるほどだった。

「ま、マリオ………?」

マリオが復活して動いたことが分かったのだろう。

クツパはシーツを頭からかぶりながらゆっくりとマリオの方を向く。

クツパがこちらを向こうとしていることに気づいたマリオは顔を隠してしやがんだ

まま体の向きをクツパと反対の方向に向けた。

「あ……その……」

マリオが反対の方向を向いていることに気づいたクツパは少しだけ寂しそうに声を漏らす。

が、すぐにマリオの耳が一目で分かるほどに赤くなっていることに気づき嬉しくなった。

一方でマリオはクツパの漏らした声にピクリと小さく体を揺らす。

クツパの声が聞こえただけでマリオはクツパの告白を思い出していた。

恐る、恐るとマリオはクツパを見る。

指の隙間から見えるのはベッドに座り、頭からシーツをかぶったクツパの姿。

クツパの顔を、クツパの瞳を、クツパの唇を見ただけで自身の顔が熱くなっていくのを感じる。

「マリオ……その……いきなりキスをしてすまぬ……」

「い、いや、大丈夫だ……」

幸福感を感じてはいたが、マリオになにも言わずに勝手にキスしてしまったことをクツパは謝る。

クツパの顔をまともに見れなくなりながらも、マリオはクツパの謝罪を受けとる。

「嫌、ではなかったから……。ええと、気にしないでくれ？」

クツパがあまり気に病まないようにマリオは詰まりながら言葉を繋げる。

マリオの言葉にクツパは抱き締めてキスをしてしまいそうな衝動を抑えるのだった。

第73話

頭にシーツをかぶったクツパはチラチラとマリオを見て、頬に手を当てていやんいやんと体をくねらせる。

その表情はとても幸せそうで、クツパの周囲にハートマークが飛んでいるようにも見えた。

「えつと．．．．．」

「つと、すまぬ．．．．．。その．．．．．、ゲームの続きをする、か．．．．．？」

体をくねらせるクツパにマリオがおずおずと声をかける。

マリオの言葉にクツパは短く謝り、チラリとゲーム機を見て尋ねた。

マリオ自身も次のゲームを用意してはいたので、クツパの提案を断る理由もなかつ

た。

まあ、キスあんなことがあつた後で気まずくはあるのだが。

「じゃあ……………、やろうか……………?」

「う、うむ……………」

ゲーム機の電源を入れ、マリオはコントローラーをクツパに差し出す。

マリオの差し出したコントローラーをクツパはおそろおそろ受け取った。

そして、2人は並んでゲームを始める。

「あ、そ、そこにアイテム……………」

「あ、ああ。忘れるところだった……………」

プレイしているゲームはマイティブラザーズというゲームで、プレイヤーはオレンジと青の2人のキャラクターを選んで操作し、ステージを協力してクリアしていくというものだ。

ちなみに続編で、マイティブラザーズX、マイティブラザーズXXもある。

以前であればお互いに軽く妨害なんかもしながら笑いあつてプレイをしていたのだが、今の2人にはそんな余裕はない。

どちらも普段ではしないようなミスをしたり、重要なアイテムを取り忘れそうになったりしていた。

理由は言わずもがな、先ほどのキスである。

それによつてお互いが相手のことを意識してしまい、緊張から普段のプレイができずにいるのだ。

なお、マリオのミスはクツパとのキスによる動揺と隣にクツパがいるからなのだが、クツパのミスには少しだけ違うものが加えられる。

「ツ!!」

「ん?また、コントローラーを落としたのかい……?」

カシャン、という音が耳に届き、マリオは照れながらクツパの方を見る。

それはゲームを再開してからすでに両手でも数えきれないくらいの回数は聞いたであらう音。

マリオの言葉にクツパは、恥ずかしそうに顔を逸らしてコントローラーを拾った。

と、このようにクツパのミスは大半がコントローラーを落とすことによつて発生している。

なぜ、コントローラーを落としてしまつていいのか？

その理由はとてもシンプルなもので、隣にいるマリオのことを掴もうとする手を反対の手で咄嗟に捕まえているからである。

手を捕まえてからすぐにもとの位置に戻しているため、マリオはクツパがなぜコントローラーを落としていいのかには気づいていない。

それどころか、クツパも同じように緊張しているのかもなあ、なんていう安心感を抱いているのだ。

「あ……………」

「う……………」

そんなにギミックもない簡単なステージに入り、マリオはチラリとクツパを見る。

すると、ちょうどクツパもマリオを見ていたようで、2人の目と目がパツチリと合つた。

目と目が合っていたのは5秒か、10秒か……………

2人は時間が止まったかのような感覚を感じていた。

そして見つめあっているということを理解した瞬間、2人は顔から湯気が出ているのではないかと思えるほどに顔を赤くして下を向いてしまう。

画面からゲームオーバーの音声が聞こえてきてピクツと肩を震わせ、お互いの肩がぶつかって固まってしまうのが10秒後のことである。

第74話

気まづくなりながらプレイしていたゲームも終わり、マリオはクツパの部屋で晩御飯を食べていた。

マリオ自身もどうしてこうなったのかはよく分かっていない。強いて分かっていることを言うならば、晩御飯の肉がけっこう良いものでメチャクチャ旨いということくらいだろう。

「ど、どうだ………?」

「ん、かなり旨いよ。焼き加減とかも良い感じだ」

晩御飯を食べながらクツパはおずおずとマリオに尋ねる。

クツパの問いにマリオは肉を一切れ口に運びながら答えた。

………なんで、晩御飯を食べることになったんだっけ？

嘔むたびに溢れてくる肉汁に舌鼓をうちながら、マリオはどうして晩御飯を食べることになったのかを思い出す。

「あ、いつの間にかこんな時間か……」

気まぜくはあつたが、ゲームに集中することでどうにか平常でいられたマリオはふと窓の外の空が暗くなってきたていることに気づく。

どうやらゲームに集中することで平常を保っていた代償として、時間を忘れてしまっ

ていたようだ。

「帰って…….しまうのだな…….」

「まあ、遅くなると真つ暗になっちゃうから…….」

空が暗くなるということは相応に遅い時間だということ。

クツパ城からマリオの家までの道には街灯なんてものはなく、時間が遅くなると真つ暗になって月や星の明かりで帰ることになるのだ。

帰る準備を始めたマリオにクツパは寂しそうに呟く。

寂しげなクツパの様子にマリオはもう少し残つても良いかもしれないと悩んだ。

不意にクツパの部屋の扉が叩かれ、カメックおぼばの声が部屋に飛び込んでくる。

「クツパしやま、晩御飯の用意がそろそろ済むようですじゃ」

「む、そうか」

「それと、マリオの分も一応は用意しておりますが…….」

「えつと…….じゃあ、いただこうかな?」

どうやらカメックおぼばは晩御飯の用意が済むことを伝えに来たらしく、クツパは扉の近くへと移動して応じた。

続くカメックおぼばの言葉にクツパは期待を込めた眼差しでマリオを見る。キラキラとしたクツパの眼差しにマリオは頬を掻きながら頷いて応えた。

「では用意が済み次第持ってきますじゃ。それまでに部屋は片付けておいてください
ね。前みたいにマリ——」

「わ——わ——分かってるのだ！」

カメックおぼばの言葉を遮るようにクツパは大きな声を出す。

突然クツパが大きな声を出したことにマリオは不思議そうに首をかしげた。

「クツパ………?」

おそろおそろマリオが声をかけるとクツパは慌てて振り返りマリオに詰め寄った。

クツパがいきなり距離を詰めてきたことに驚き、マリオは先ほどのキスを思い出して顔を赤くする。

「な、なんでもないからな！きさまの物とかそういうった物はないのだからな！」
「わ、わかった。わかったから！む、胸が！」

詰め寄ってきたことによつてマリオの体にクツパの胸が押し当てられる。

クツパの胸の柔らかさに驚いてクツパが何を言っていたのかハッキリとは聞き取れなかつたが、マリオは慌ててクツパの肩を押しさえて体から引き剥がした。

マリオに肩を捕まれたことによつてクツパも自身の行動に気づく。

そして、カメックおばが晩御飯を持つてくるまで2人はその体勢で顔を赤くしてうつむいているのだった。

第75話

晩御飯も食べ終わり、改めて家に帰ろうとマリオは立ち上がる。

食事の間に多少はなれてきたのか、言葉に詰まることもほとんどなくなっていた。さすがにもう止める手だてはないのか、クツパは寂しそうな表情を浮かべるだけだ。

「さて、と。俺もそろそろ帰るよ」

「そう、だな……」

マリオの言葉にクツパは、そつと目を伏せる。

本音を言えばマリオに帰って欲しくはない。

でもそれを言ってしまうばマリオに迷惑がかかる。

いや、まあ、キスをしてしまった時点で迷惑をかけてしまったのかもしれないが……

複雑な心境の中、クツパは帰ろうとするマリオになにも言えなかった。

「おや、マリオは帰るのですかな？」

「ああ。さすがに長居をしすぎたしね」

マリオとクツパの食べ終えた食器を片付けていたカメックおばばが不思議そうに首をかしげながら尋ねる。

カメックおばばの言葉にマリオは頷き軽く伸びをした。

「ふむ………。しかし、少し遅かったのう」

「……へ？」

マリオの言葉にカメックおばばは顎に手を当て、チラリと外を見る。

カメックおばばにつられてマリオも窓の外を見る。

窓から見えるのは晩御飯の前に見たのとは少し違った景色。

そして、加えて言うなら星空が横に向かって移動しているのだ。

「なっ・・・?!」

「すでにクツパ城は夜間飛行モードに移行していて、降りる手段はないからのう」

マリオは慌てて窓を開けてベランダに出る。

ベランダから城を含めて周囲を見ると、クツパ城は高く飛び上がっていて、遙か下の方にはマリオの家が見えた。

クツパ城が飛んでいることに呆然としているマリオに、カメックおぼはくつくつと笑いながら呟く。

いかにマリオといえど、この高さから跳び降りて無事で済むはずもなく、立ち尽くすことしかできなかつた。

ちなみにクツパ城が飛んでいるのはいつものことであり、昼間は地上に降りて、夜間は警備のために空を飛んでいるのだ。

「そ、そうだ！クラウ——」

「ちなみにクツパしゃまのクラウン以外は整備をしておるから乗ることはできぬぞ」

「——ンが……………」

マリオはクツパも乗っているピエロの顔の描かれた乗り物——クラウンの量産型があることを思い出し、借りれないかを聞こうとする。

が、カメックおぼの無慈悲な言葉によってマリオの言葉は両断された。ガツクリと肩を落とすマリオにクツパはおずおずと声をかける。

「わ、ワガハイのクラウンに一緒に乗って降りるか……?」

「お前のクラウンに?」

クツパの言葉にマリオは2人でクラウンに乗る光景を思い浮かべる。

2人で乗るにはやや狭く、2人のからだは自然と密着する形になるだろう。

そして、クラウンは体重移動も乗る上では重要なポイントになるので、それによってさらにクツパの体が押し付けられるのではないだろうか。

そこまで想像したマリオは、首を横に振ってクツパの申し出を断った。

「とりあえず、明日の昼間になるまでは降りることはないのう」

「マジか……」

カメツクおぼばの言葉にマリオは力なく項垂れる。
マリオがクツパ城に泊まることが確定した瞬間だった。

第76話

クツパ城、クツパの部屋近くの浴室。

シャワーから勢いよく出てくる水が体を打つ。

体を打った水は豊満な胸をなぞるように滑り、名残惜しそうに雫を作つてタイルへと落ちていく。

スラツとしたお腹に小さく窪んだ可愛らしいおへそ。

ほどよい大ききさでプリンとしたお尻。

それら全てが水に濡れ、とても艶あでやかに見える。

「はあ……」

シャワーを浴びながら、クツパは短く息を吐いた。

そして、悩ましげな表情でスツと自身の腕を撫でる。

その表情と相まってその仕草はとても蠱惑的に見え、もしもこの場に男がいれば即座に襲いかかってもおかしくはないだろう。

が、クツパが何に悩んでいるかを知ればそんな雰囲気も霧散するに違いない。

「やはり………、マリオの背中を流してやるべきであったかな………」

ポツリとクツパの口からこぼれたのは、部下たちの入る大型の風呂へと向かったマリオのこと。

クツパ城にはクツパ専用の浴室と、部下たちの入る大型の風呂が存在し、大型の風呂には男湯と女湯がある。

水着を着れば………

いや、タオルを体に巻けばマリオの背中を流せたのではないだろうか………先ほどから何度も繰り返し返される意味のない思考。

クツパがまだシャワーを浴びておらず、マリオが部屋にいれば悩む意味はあったのかもしれない。

だが、すでにマリオは大型の風呂の方へと向かってしまっているために考える意味は

ない。

それでもクツパは思考してしまう。

「うあー．．．．．」

浴室の壁に頭を当てて、だらんと腕から力を抜く。

背中を流すと言えれば自然にマリオの体を見れたのに．．．．

むしろ背中を流すのだから触ることも．．．．

そこまで考えて、クツパは頭を抱えてブンブンと左右に振った。

それに合わせてクツパの豊満な胸も左右に揺れる。

「わ、ワガハイは何を．．．．?!」

顔を赤くしながらクツパは自身の考えていたことを頭から破棄する。

つい先ほど自身の暴走でマリオを押し倒したばかりなのに、マリオの裸を見てしまえばどうなってしまうのか．．．．

いや、まあ、マリオが襲ってきてくれるなら？

それは別に嬉しいというか？

バツチ来い、というか？

頬に手を当ててクツパはうつとりとした表情になる。

油断すればヨダレすら垂れてきそうな表情は、女性となった今の姿でして良いものはとても思えなかった。

「……よし。とりあえず寝る前にワインでも一緒に飲むことにしよう」

パチンと軽く頬を叩いて気を引き締め、クツパはシャワーを止める。

あわよくば酔っぱらったマリオに……

なんてことも一瞬だけ考えたが、よくよく思い出してみればマリオも自分と同じくらいには酒は飲めたので、その辺りの考えは絵に描いた餅になるだろう。

少しでも残念に思いながらクツパは体を拭いていく。

そして、クツパは浴室から出るのだった。

第77話

ワインの瓶とグラスを2つ手に持ちながら、クツパはマリオの泊まる部屋の扉を叩く。

ドライヤーを使って乾かす暇も惜しかったのか、クツパの髪はしっとり水気を帯びており、何とも言えない色気を醸し出していた。

「マリオ、入るぞ」

「クツパ?!」

声をかけ、マリオの返事を待たずにクツパは扉を開ける。

それに驚いたのは部屋の中でパジャマに着替えていたマリオだった。

マリオは大型の風呂に入ってから着替えがなかったことに気づいてもとの服で部屋まで戻りパジャマを借りたので、服からパジャマに着替えていたのだ。

幸いにして下は着替え終わっており、上もボタンを止めるだけだったのでマリオの裸体が晒さらされることはなかった。

「……………ちっ」

「舌打ちした？」

マリオの姿から、もう少し早く来ていれば体を見れたことに気づいたクツパは小さく舌打ちをする。

クツパが舌打ちをしたことに気づいたマリオはじつとりとした目でクツパを見た。

「んん！……………寝る前にワインでも一緒に飲まぬか？」

「おい、さつき舌打ちしなかったか？」

軽く咳払いをし、クツパは手に持っているワインとグラスをマリオに見せる。

どうやらクツパは自身の舌打ちをなかったことにするつもりのように。

マリオの問いにも目を逸らして答えようとしない。

「なあ………?」

じつとりとした目のままマリオはクツパをジッと見つめる。

そんなマリオからの視線を顔を逸らすことでスルーしながら、クツパはワインの準備をしていく。

よく見るとクツパの頬を汗がタラリと垂れており、クツパ自身も誤魔化すのは無理があるかな、とは思っているようだ。

「………はあ。それは、良いワインなのか?」

「う、うむーワガハイのお気に入りの1つなのだ!」

どれだけ聞いてもクツパが答えてくれないと分かったのか、マリオは短く息を吐いて話題を変える。

マリオの言葉にクツパはワインの瓶に書いてある銘柄を指差して示す。

瓶には銘柄が筆記体で書かれており、マリオにはなんと書いてあるのかいまいち読めなかった。

「少しばかり甘めかもしれないが、ほどよい酸味でな」
「へえ」

グラスに注がれたワインを眺めながらマリオは興味深そうに答える。

今までにも何度かクツパのオススメのワインやお酒を飲ませてもらったが、甘いタイプのものはそこまで多くはなく、どちらかと言えば苦めのものの方が多かった。

そのクツパがお気に入りだという甘めのワイン。
興味が出ないわけがなかった。

「ん……うん、確かに甘いね。でも、飲みやすいや」
「そうだろう?」

ワインを口に含み、味や舌触りを楽しむ。

クツパの言うとおりワインは甘めではあったが、不快になるほど甘いというわけではなく、とても飲みやすい甘さであった。

マリオの言葉にクツパは嬉しそうに頷く。

自身のお気に入りのワインが褒められて嬉しいのだろう。

「今までのものとは違った味だから少し不安だったが、大丈夫そうであつたのだ」
「ははは、お前のオススメはどれも旨かつたから心配はしてなかつたけどね」

ホツと息を吐くクツパに、マリオは笑いかけながら言う。

そして、2人はグラスを軽く当てる。

小さくチン、という音を合図に2人はワインを楽しむのだった。

第78話

夜も半ば^{なか}、マリオの借りたクツパ城の一室でマリオとクツパは2人でワインを楽しんでいた。

すでにワインは半分を切っており、この時間がもうすぐ終わってしまうことを示している。

その事実にくツパは少しだけ寂しさを感じていた。

「クツパ城はとんでいるから景色がいいよな」

「そうだな。雲の上に出ることもできるからな」

窓の外の景色を眺めながらマリオはワインを口に運ぶ。

ほどよい甘さが口に広がり、窓の外の景色と相まってとても素晴らしく感じられた。

マリオの言葉にくツパは自慢気に頷く。

この光景を自分は毎日見ているのだと、少しばかりの優越感がクツパの中にはあった。

「……きさまと毎日この景色を見ても良いのだがな」

「ん？何か言ったかい？」

横目でマリオの横顔を見ながらクツパは小さく呟く。

クツパの呟きが小さかったためにマリオの耳にはハッキリとは届かなかつたが、クツパが何かを呟いたことは分かったのかマリオは尋ねた。

そんなマリオの問いにクツパは軽く首を横に振ることで応える。

「なに、なんでもないことだ」

「そうか？」

クツパの言葉にマリオは首をかしげるも、クツパが言うのならそうなのだろうと納得し窓の外を見る。

窓の外には綺麗な月が輝いており、一枚の絵画のようにも見えた。

「………本当に、月が綺麗だな」

「ツ——!!」

外を見ながら呟いたマリオの言葉にクツパの心臓がドキリと強く鳴る。

マリオは何の気なしに呟いた言葉なのだろうが、クツパは最近読んだ1冊の本から違う意味を想像してしまった。

月が綺麗ですね、それはどこか違う国では結婚の申し込みを意味する言葉らしい。

マリオにその意図はないのだろう。

それでも、クツパはなるべく自然にこの言葉を返す。

「そうだな。………死んでも良いと思えるくらいにな」

「大袈裟だな。でも、そうかもな」

瓶に残った最後のワインを2人で分け、静かに飲む。

マリオの顔はほんのりと赤く、酔っていることがうかがえた。

クツパの顔も赤く染まっているが、それはワインが理由なのか、それとも別の理由な

のか………

「さて、ワガハイもけっこう酔ってしまったし今夜はお開きにしよう」

「あ、ああ………」

空になった瓶を軽く振り、クツパはマリオに微笑む。

ほんのりと赤く染まった顔で微笑まれ、マリオは思わずドキリとしてクツパに見惚れてしまった。

そんなマリオに気づかず、クツパは瓶とグラスを回収していった。

「馴れぬ環境で寝づらいかもしれないが、おやすみなのだ」

「うん、おやすみ」

そう言つてクツパは部屋から出ていった。

クツパに見惚れて心臓が高鳴つていたマリオはクツパが部屋から出ていくのを確認すると、用意されていたベッドに倒れ込む。

「……………綺麗、だったな」

目に焼き付いて忘れることができないのは先ほどのクツパの微笑み。

赤く染まった頬で微笑むその表情はとても綺麗で、マリオの心に強く刻み込まれるのだった。

第79話

マリオの部屋での酒宴も終わり、静かな城の廊下をパジャマ姿のクツパは歩く。どうやら半ば寝惚けているらしく、その足取りはどこかフラフラとしていた。

「くあ………、トイレ………」

くしくしと目を軽く擦りながらクツパは歩く。

眠いのをこらえ、あくびをしながらクツパはトイレの中に入っていった。

クツパ城にはトイレが何カ所もあり、クツパの部屋から出てすぐのところにもトイレがある。

ちなみにクツパの部屋に直接トイレがない理由は、なんとなく不衛生そうだから、という理由かららしい。

「ねむ．．．．．」

キッチンと手を洗い、パジャマの姿に乱れもない状態でクツパはトイレから出てきた。さすがにトイレの描写までするわけにはいかないため、その辺りはトツプシークレットである。

クツパはぼんやりとした頭で廊下をフラフラと歩きながら部屋へと戻っていく。

その歩みはとても不安を感じるもので、目を離せばどこかで転ぶのではないかと思ってしまうほどだ。

「んん．．．．．、着い、た．．．．．」

そう呟いてクツパは自身の部屋の隣の部屋へと入っていく。

そこは普段であれば誰も使わない来客用の部屋。

しかし今日、このクツパ城には1人の来客がいる。

そう。

クツパの入っていった来客用の部屋．．．．．

その部屋には、マリオが泊まっていた。

「ベッド・・・・・・・・」

うつらうつらとしながらクツパはベッドに向かつて歩いていく。

完全に目が覚めていればこの部屋が自身の部屋でないことにすぐに気づくのだが、あいにくとクツパは寝惚けており、部屋の中も薄暗いために隣の部屋だとは気づかなかった。

「ふああ・・・・・・・・」

ベッドの側までたどり着いたクツパはシーツをめくり、自身の体をベッドに沈ませる。

その際にベッドの中心にいたマリオが横に追いやられているのだが、マリオも疲れていたのか、はたまたワインが効いていたのか、起きることはなかった。

ベッドに横になったクツパは寝苦しいのか体をモゾモゾと動かす。

「・・・・・・・・暑い」

そんなクツパの呟きに合わせるかのようにベッドの端からパサリと何か床に落ちた。

見てみるとそれは黒いパジャマの上着のようだ。

さらに続けてクツパがモゾモゾと体を動かすと今度は黒いパジャマのズボンがベッドの端から床に落ちる。

どうやらクツパは眠りながらパジャマを脱ぎ捨てているようだ。

が、それも仕方がないのかもしれない。

何故ならクツパはもとの姿の時は基本的に何も着ずに生活をしており、当然ながら寝るときもパジャマなんてものは着ていなかった。

それによつてクツパには服を着ずに寝る癖がついているのだ。

それならば何故マリオの家で暮らしていた時は脱いでいなかったのか。

それは単にクツパが無意識下でマリオの家で服を着ずに寝ることが恥ずかしいと思っていたからである。

しかし、今クツパが寝ているのは自身の城。

それによつてクツパは無意識に気が抜けてしまい、マリオが隣で寝ているというのにパジャマを脱いでいってしまったのだ。

「すう……すう……すう……すう……」

パジャマを脱いだことで寝苦しさから解放されたのか、クツパは穏やかな寝息をたてる。

目が覚めたときにどんなことが起こるかも知らぬまま、クツパとマリオは静かに眠るのだった。

第80話

爽やかな風が窓から入り込みマリオとクッパの髪を撫でる。

クッパ城が着陸をしたのか、浮上したときとは違いそこそこ大きな震動が2人の寝ている部屋にも届いた。

「んん．．．．．」

「むう．．．．．」

ベッドの上の2人も震動によって目が覚めたのか、短く声をあげながらゆっくりと目を開ける。

ぼんやりとした頭で2人は目をパチパチとする。

そして、だんだんと頭がハッキリとしてきたらしく、目の前に寝ている相手の姿に気づいた。

「マリ——ツツ?!」

「クツ——ツツ?!」

お互いに相手の姿を確認した2人は驚いてベッドから跳ね起きた。

そして、跳ね起きた瞬間に2人の被っていたシーツが落ち、下着姿のクツパの姿が頭となる。

クツパの染み1つない綺麗な肌を強調するかのような黒い下着がマリオの視界に飛び込んでくる。

完全に不意打ちの事態にマリオは固まり、クツパから視線を外すことができなかつた。

「な?!み、見るな!!」

「あ、わ、悪い!!」

クツパはマリオが目の前に寝ていたことに驚いていたが、マリオが自身の体を見ていることに気づいたクツパは慌ててシーツを体に巻きつけて叫ぶ。

クツパの声にマリオはハツとし、急いでクツパから体ごと反対の方向を向いた。反対の方向を向きながらマリオは考える。

あれ？

俺つて来客用の部屋で寝てたはずだよな？

なんでクツパがここに？

と言うか昨日ワインを飲んでいるときは普通に服を着ていたよな？

黒の下着つてクツパの肌の綺麗さが際立きわつてヤバい……

事実としてマリオは無実であり、クツパが寝惚けて侵入してきただけなのだが。

マリオが気づけるはずもなかった。

「な、なんで……、ワガハイは自分の部屋で寝ていたはずでは……」

いそいそと床に落ちているパジャマを拾って着ながらクツパはぶつぶつと呟く。

クツパ自身は自分の部屋に入ったと完全に思っていたため、目の前にマリオがいたことは完全に予想外だった。

そしてパジャマを着終えたクツパは改めて部屋の中を見渡し、ここが来客用の部屋であることを気づく。

なぜワガハイはこの部屋に？

誰かが移動させた？

いや、それはない。

昨日はちやんと部屋で寝て……

そこまで考えてクツパはふと思い出す。

自身が夜中に1度トイレに起きたことを。

そのときは眠さのあまり、かなりぼんやりとした頭でトイレまで向かっていたのだと。

もしかしたら、トイレから出て勘違いして自分の部屋の隣のこの部屋に来たのではないかと。

「……完全にワガハイが自爆しているではないか」

なぜ自分が来客用の部屋のベッドで寝ていたのかをなんとなく理解したクツパはガクリと肩を落とす。

寝惚けてマリオと一緒に寝たうえに、ほぼ裸の下着姿まで見せてしまったのだ。

いつかは見せるような関係になりたいとは思っていたが、こんな展開で見せることに

なるとは微塵も思っていなかった。

恥ずかしさに顔を赤くしながら、クツパはマリオの方をチラリと見る。

マリオはクツパがパジャマを着終えたことに気づいていないのか、反対の方向を向いたままだ。

と、ここでクツパの中にちよつとした悪戯いたずら心が生まれる。

クツパはマリオに気づかれないようにソツと背後まで移動した。

そしてマリオの肩を優しくトントンと叩く。

「お、終わったか——い?！」

「ん……………」

肩を叩かれたマリオはクルリと叩かれた方を向いた。

そしてクツパの方を見ようとした瞬間、頬に柔らかいものが触れる。

驚き固まっていると、クツパの顔がとても近くにあることに気づいた。

クツパの顔は柔らかいものを感じた場所、頬の辺りにあった。

「ふふ、どうやらワガハイが寝惚けて入ってきてしまったようなのだ。これはお詫びみ

「たいなものだな」

「な、ちよ、クツパ?!」

そう言つてクツパは部屋から出て行つてしまふ。

マリオはクツパを止めようとしたが、驚きのあまり体がうまく動かせず、クツパを止めることはできなかつた。

今の柔らかい感触はもしかして……

自身の頬に手を当てながら、マリオはぼんやりとクツパの出ていった扉を見つめるの
だつた。

第81話

クツパに頬にキスをされ、ぼんやりとしていたマリオだが、どうにか頭を働かせてパジャマから着替える。

それでも着替えた際に1回だけ服の前後を間違えてしまった辺り、完全には復帰していないようだ。

着替え終わったマリオは部屋から出て隣のクツパの部屋の前へと移動する。

クツパの部屋の扉をノックするのかと思いきや、マリオはなかなか扉をノックしない。

どうやら、先ほどの頬へのキスから昨日のキスを連想してしまい、恥ずかしくなっているようだ。

「ああ．．．．．うう．．．．．」

扉を叩こうと手を上げては顔を赤くしながら呻いて手を下ろす。

その動作をマリオは何度も繰り返していた。

何度目かの手を上げたとき、不意にクツパの部屋の扉が開く。

そして、部屋の中からパジャマから着替えたクツパが現れた。

「む、着替え終わったから呼びにいかうかと思っていたのだが……」

「あ、ああ……。俺もさつき着替え終わったんだ」

クツパの言葉にマリオは恥ずかしさを隠しつつなるべく普通に答える。

といつてもマリオの顔はほんのりと赤く、恥ずかしがっていることがクツパには手に取るように分かった。

なお、恥ずかしさでクツパの顔を直視できていないマリオは気づいていなかったが、クツパの耳も赤くなっていた。

実はクツパも下着姿を見られたことを恥ずかしく思っており、その恥ずかしさを誤魔化す意味でもマリオの頬にキスをしたのだ。

その目論見は成功し、マリオはクツパの顔を直視できずにいた。

「では、朝食にするとしよう。昨日の晩御飯はワガハイの部屋で食べたが、食堂の方も案内しておくのだ」

「案内、といつても俺はこの城の構造は知り尽くしているんだけどね」
「そういえばそうだったな」

食堂の方へと歩き出しながらクツパは言う。

クツパの言葉にマリオは苦笑しながら答えた。

マリオはクツパ城の構造をトイレの位置まで知り尽くしている。

それは当然ながら食堂の位置も把握しているということ。

そんなマリオの言葉に、クツパは快活と笑った。

不意に慌てた様子でノコノコが走ってくる。

普通ではなさそうな様子にマリオとクツパは少しだけ警戒心を高めた。

「ほ、報告します！侵入者が城に入り込みました！」

「なに？」

「侵入者だって？」

ノコノコの報告に2人は少しだけ不思議そうに聞き返す。

それもそのはず、今までクツパ城に侵入してきたのはピーチ姫を助けに来たマリオただ1人だけ。

そのマリオがここににいるのに侵入者がいるというかなり珍しい事態だからだ。

「侵入者の特徴は？」

「は、はい。ええと……」

クツパの問いにノコノコは返事をし、慌て気味に記憶を辿る。

思い出すのは侵入者の姿。

「ええと、侵入者はクツパ様と似たような黒いドレスで、短髪のピーチ姫にそっくりな女性でした！」

「……マジか」

ノコノコの言葉にマリオは思わず目元を押さえて天を仰ぐ。

その隣ではクツパも小さくため息を吐いていた。

「あー……、そいつに関しては迎撃などをしないで良いのだ……」
「とりあえず君たちに害はないはずだから……」

クツパとマリオの言葉にノコノコは不思議そうに首をかしげるが、頷いて走って戻っていった。

戻っていくノコノコを見送りながら、2人は短くため息を吐く。

「……どうやってきさまがここにいると分かったのだと思う？」

「……匂い、とか？」

2人が思い浮かべているのは1人の女性。

マリオのことを愛し、マリオ以外のものにたいしてはほぼほぼ興味を持たない女性。

「はあ……」

「あまり、暴れないと良いけど……」

小さくため息を吐き、クツパはノコノコの戻っていった廊下を見る。

そんなクツパの姿を横目に、マリオもため息を吐きつつ侵入者の女性のことを考えるのだった。

第82話

廊下の向こう、ノコノコが走っていった先から何か壊れる音や悲鳴のようなものが聞こえてくる。

どうやらクツパの出した指示がまだ伝わっていないらしい。

それに紛れるようにマリオの名前を叫んでいる声も微かに聞こえてきていた。

「……被害がかなり出そうだから呼んでやってくれぬか？」

「そう、だな……」

クツパの言葉にマリオはガツクリと肩を落とす。

自分のことを思っただけで行動しているのは分かるのだが、もう少し落ち着くことはできないのだろうか……

いや、彼女の性格的にそれは無理なんだろうな。

ぼんやりと考えたことをマリオは自分で否定する。

マリオのその考えは正解で、彼女はどうかあっても変わることはないだろう。もしも変わるとすればそれはマリオに言われたことぐらいははずだ。

頭を軽く振り、マリオは廊下の奥へと顔を向ける。

「すう………ナハトー!!」

息を短く吸い、マリオは侵入者の女性——ナハトの名を呼ぶ。

すると先ほどまで聞こえてきていた何かを壊すような音がピタリと止まる。

先ほどまでの喧騒が嘘だったかのように静かな時が過ぎる。

しかし、それも僅かな時間のこと。

静かになったと思った次の瞬間、廊下の向こうからドドドドと何かが連続で床を叩くような音が響いてくる。

音が近づいてくるにつれて、その音が走ってくる足音だということにマリオとクツパは気づく。

「………なんか、ヤバくね?」

「完全に全力疾走のようだな．．．．．」

そこそこ遠くにいるはずなのに聞こえてくる走る足音。

そして時おり聞こえてくる轆ひかれたらしい犠牲者たちの悲鳴。

「．．．．．りー．．．．．」

「近づいてきたな．．．．．」

徐々に近づいてくる足音に合わせて、おそらくマリオの名前を呼んでいるであろう声も聞こえてきた。

ため息を吐きつつ、マリオはいつナハトが来てもいいように構える。

「マーーりーオーー!!」

「うぶうっ?!」

ナハトの姿が見えた。

そう思った次の瞬間、ナハトの姿が消え、マリオの悲鳴のような呻き声が聞こえた。

2本の線はナハトの両足の下にまで繋がっているらしく、どうやらナハトが急ブレーキをかけたことによって生じたものようだ。

「車でもないのにブレーキ跡を残すか……」

ナハトのメチャクチャさにクツパは呆れつつ、ナハトに近づいていった。

第83話

マリオを胸に抱き締め、名前を連呼するナハト。

ナハトを知らない人物が見たら即座に目を逸らして関わらないように離れていくことと必至な状況にクツパは短く息を吐く。

そんな3人を眺めるようにクツパの配下であるノコノコやクリボー、トゲノコ……
エトセトラ
etcが集まってきた。

配下たちは侵入者であるナハトがマリオを抱き締めているためどうしたら良いかが分からないようだ。

そんな配下たちの困惑に気づいたのか、クツパはヒラヒラと手を振って解散を促す。クツパの指示にノコノコたちは顔を見合わせると、それぞれの仕事へと戻っていた。

「マリオマリオマリオマリオマリオマリオ……オ……?」

「ぶはあっ！……はあ……はあ」

不意にナハトはマリオの名前を呼ぶのを止め、不思議そうにマリオを眺める。

ナハトの胸から解放されたマリオは荒い息で周囲を確認し、自身がナハトに抱き締められていたことに気づいた。

「スンスン……」

「な、ナハト……?!」

「いい加減にマリオを離さぬか」

いきなりナハトが自身の首もとに顔を寄せてきたことにマリオは驚き、離れようともがく。

が、頭は解放されているがガツチリと抱き締められていることに変わりはなく、離れることはできなかった。

ナハトからマリオを引き剥がそうと、クッパはナハトに近づく。

「スンスン……。マリオ以外の匂いがする……。クッパ？」

「う……………」

「ぬ……………」

どうやらマリオの匂いを嗅いでいたらしく、ナハトはグリーンとクツパの方を向いた。ナハトの言葉にマリオとクツパは短く呻く。

「どういうこと？ ねえ……………ねえねえねえねえねえねえねえねえねえねえねえねえねえねえねえねえねえねえねえねえ」

光の消えた瞳でナハトはマリオの顔をジツと見つめる。

ナハトからのプレッシャーにマリオはだらだらと汗を流し、その様子にクツパは気づかれないようにソツと距離をとった。

「……………口からも匂いがする気がする、よ?」

「き、気のせいじゃないかな?！」

「で、では、ワガハイは朝御飯を——」

「待て！ 逃げるなないでくださいいいいい!!」

マリオの口元に鼻を寄せ、ナハトはさらに尋ねる。

口から匂いがするということは要因はおそらく昨日のキス。

汗を流し、目線を逸らしながらマリオは答えた。

そして、マリオは逸らした視線の先でクツパがどこかへ逃げようとしていることに気づく。

できるだけ自然にフェードアウトしようとしたクツパをマリオは命令と懇願の入り交じった変な言葉で引き止めるのだった。

第84話

光の消えた瞳で綺麗な女性に抱き締められてジッと見つめられる。

ヤンデレやクール系が好みの人であればもしかしたらご褒美とも取れるかもしれない状況。

そんな状況で、ヤンデレやクール系が特に好みというわけではないマリオは緊張した表情でナハトを見つめ返していた。

「えっと……」

「マリオからクツパの匂い……」

何かを答えなければと思うも、ナハトからのプレッシャーでうまく言葉にならず、マリオは目をキョロキョロと動かす。

そんなマリオを見ながらナハトはポツリと呟き、ハッと何かに気づいたのか、目を少

しだけ見開いた。

「マリオ、クツパのおっぱいを飲んだの?!」

「何がどうしてそうなった?!?!」

「何故にそうなるのだああああ?!?!」

あまりにも検討外れなナハトの推理にマリオとクツパは叫ぶ。

抱き締められているマリオは動けなかったが、特に動きを制限されていないクツパは思いつきり、それこそギャグ漫画のようにならずこけた。

2人のリアクションにナハトは不思議そうに首をかしげる。

「マリオからクツパの匂いにする。だから、クツパの何かを飲んだんじゃないの?」

「そ、そういう連想をしたのか……」

「勝手にワガハイから母乳が出ることにするな……」

コテン、と首をかしげながらナハトはどのように考えたのかを答える。

そんなナハトを見ながら、クツパは自身の胸を隠すように手で押さえながら顔を赤ら

めていた。

「と、とにかくマリオを離さぬか。もう朝御飯もできているはずなのだ」
「むう……。何か怪しい……。けど、仕方ない」

しゅしゅといった体^{てい}でナハトはマリオを抱き締める力を弱め、マリオを解放する。それと同時にナハトのお腹からグギルルルウウ……。という音が聞こえてきた。

ナハトから解放されたマリオは思わずクツパと目を合わせ、ナハトに視線を移す。
パツと見では無表情なのだが、よく見れば頬がほんの少しだけ赤く染まっており、お腹が鳴ったことが恥ずかしかったのだということが分かった。

「……。とりあえず朝御飯に行くか」

「そ、そうだな……。」

ナハトのお腹の音を聞かなかったこととしてクツパは言う。

マリオ自身もナハトのお腹の音を聞いてしまってどうしたら良いか分からなかった

のでクツパの言葉は渡りに船だった。

「ほれ、朝御飯に行くぞ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ん」

クツパの言葉にナハトは短く答える。

大人しくクツパの言葉に従っている辺り、相当に恥ずかしく思っていたということなのだろう。

そして、3人はクツパ城の食堂へと向かうのだった。

第85話

朝御飯を食べ終わり、自身の家に帰ったマリオとついていったナハトを見送ってからクツパは自身の椅子に座る。

頭の中で考えるのは昨日のマリオとのキス。

正直に言ってしまうえば、その感触と幸福感を思い出して浸りたいところなのだが、今は少しだけ我慢をする。

「ピーチ姫に言った方が良いのだろうか……」

クツパはナハト、ピーチ姫と女子会の際に抜け駆け禁止の約束をしていた。

しかしクツパは昨日、嬉しさに任せてマリオに告白をしてしまった。

それに加えてキスマでしてしまっている。

これはどう考えても抜け駆けになってしまおうだろう。

「言いたくないのだ……」

報告すればピーチ姫は確実に怒るだろう。

それもプレッシャーを感じる素晴らしい笑顔でジリジリと迫ってくるに違いない。

別に、笑顔なだけなら問題はないのだ。

だがピーチ姫は笑顔でこちらに正座を指示してくる。

しかも、拒否権など存在しないように。

まあ、正座を指示してくるだけなため、その辺りの考えの変わり方はうかがえるのだが。

もしも、前のパーティーの時にマリオに何も言われていなかったら石抱き責めの板が用意されていた可能性もある。

「どうかしたのですかな?」

「いや、なに……ピーチ姫に怒られそうだな……」

配下たちの今日の予定をまとめ、クッパに渡すために持ってきたカメックおばは

クツパが頭を抱えている様子に首をかしげる。

カメツクおぼばの問いにクツパは小さくため息を吐いて答えた。

「ふむ……」。隠し事というのは遅かれ早かれバレてしまうもの。悩むなら早めに解決することをオススメしますぞ?」

「そう、だなあ……」

カメツクおぼばの言葉にクツパは渋々と頷く。

早めに解決すれば気分は楽になる。

それ自体はクツパ自身も理解してはいるのだが、それでもできることならピーチ姫のプレッシャーはあまり感じたくはないのだ。

できることなら隠し通してしまいたいのだが、ナハトの嗅いだ匂いなどから察してしまいう可能性もなくはない。

「まあ、まずは本日の仕事を終わらせてからお願いしますぞ」

「ぬ、分かっているのだ」

カメックおばばは椅子の近くに置かれた小さなテーブルに持ってきた紙の束を置いていく

紙の束から一枚を抜き取り、クツパは目を通していった。

「それではわたくしは別の仕事がありますので……。悩んだ末の考えで後悔はないようにしてください」

「ああ、分かっているのだ」

そう言ってカメックおばばは自身の部屋へと戻っていった。

クツパはテーブルの上に置かれた紙の束をチラリとみる。

クツパ城の配下の人数はかなり多く、紙の束を全て見ていたらかなりの時間を食ってしまうだろう。

「見ながら、考えることにしよう」

そう呟いてクツパは配下の予定をまとめた紙に目を通していくのだった。

第86話

カメツクおばばに渡された配下たちの今日の予定も確認し終わり、一応の今日の仕事が終わったクツパ。

クツパは紙の束をテーブルの上にまとめて置き、軽く重石おもしを置いた。

「これでよし。．．．．．さて、行くか」

重石によって紙が完璧に押さえられていることを確認し、クツパは椅子から立ち上がる。

そして、クツパは自身のクラウンの置いてある格納庫へと向かった。

どうやらクツパはピーチ姫に報告に行くことを決めたらしく、その雰囲気は戦場にも向かう戦士かのようなようだった。

と言っても、実際にはピーチ姫に怒られそうな報告をすることに緊張しているだけな

のだが。

「あ、お出掛けですか？クラウンの整備は終わってますよ」
「うむ。助かる」

クツパのクラウンを整備するノコノコに礼を言い、クツパはクラウンに乗り込む。

もとの姿でしか乗れなかったこのクラウンも、今の姿を登録して問題なく飛べるようになっていた。

そして、クツパはクラウンを飛ばす。

目的地はピーチ姫のいるピーチ城。

「魔王に挑む勇者はこんな気分なのか？」

クラウンを操縦しながらクツパはポツリと呟く。

格好をつけて言っただけはいるが、先にも書いたようにピーチ姫に怒られそうな報告をしに行くだけである。

むしろ魔王はクツパの方ではないだろうか、と言うツツコミをするものは当然ながら

い
な
か
つ
た。

ピーチ城、中庭。

クラウンをゆつくりと降下させ、クツパはピーチ城に降り立った。

時刻はおおよそ15時を過ぎたあたり。

この時間帯であればピーチ姫も休憩をとるために仕事を区切っているはずだ。

クツパは仕事をだいたい13時ごろに終わらせていたのだが、それに対してピーチ姫の仕事が終わっていないことを不思議に思うかもしれないが、別におかしいことはない。

クツパの仕事は配下たちの1日の予定の把握と緊急時の対応くらい。

それに対してピーチ姫の仕事は国の予算の把握、国内の整備や改良、他の国との交流……などなど、多岐にわたっている。

むしろ、クツパの仕事がピーチ姫と比べると少ないということが分かるだろう。

ちなみに、マリオの仕事は配管工であり、自宅に依頼の電話か手紙が来ない限りは基本的に休みである。

「クツパ、どの。何かご用でも?」

「言い辛いなら無理にどのをつけなくても良いのだ。ピーチ姫に用があつてな。今は大丈夫か?」

いまだにクツパが普通に来ていることに慣れていないのか、キノピオ兵はぎこちなく応対する。

と言つても、慣れていないのはクツパが来ることではなく、美人であるクツパが来ることなのだが。

「いえ、大丈夫です。姫様は……今でしたら自室で休憩中です。ご案内します

か？」

「いや、許可さえもらえれば自分で行くのだ。警備に励むようにな」
「はい」

ヒラヒラと手を振ってクツパは城の中へと入っていく。

その後ろ姿をキノピオ兵は敬礼して見送るのだった。

第87話

ピーチ城の中、クツパはそこそ慣れた様子で廊下を歩く。

時おりすれ違うキノピオ兵や大臣などは軽く会釈をしてそのまま仕事に戻っていった。

「ふむ……いまだに違和感はなくならぬな」

自分の姿を見ても警戒態勢が起きないことにクツパはどこかむず痒いような違和感を感じていた。

別にピーチ城に来て廊下を歩くことは初めてではないのだが、いまだに慣れることはできなかった。

そして、クツパはピーチ姫の部屋の扉の前で立ち止まる。

「うぬぬぬ……」

ピーチ姫の部屋の扉を開けようか、どうしようか。

クツパは扉に手をかける直前で固まり、呻き声をあげる。

第3者から見れば完全に変な人認定待ったなしだろう。

「ええい、男は……ん？いや、今のワガハイは女だから……、で、でも、

一応もとは男だったわけで……??？」

▼クツパはじぶんのことばでこんらんしている。

頭の中をハテナマークで埋めながらクツパはピーチ姫の部屋の扉を開ける。

部屋の中ではピーチ姫が紅茶を飲みながら少女漫画を読んでいた。

どうやら少女漫画の泣ける場面のようで、ピーチ姫の瞳はやや潤んでいる。

クツパが部屋に入ってきたことに気づいたピーチ姫は、少しだけ意外そうな表情を浮かべたが、読んでいた漫画にしおりを挟みテーブルに置く。

「あら、クツパ。何かあったの？」

「え、ええとだな．．．．．」

クツパの分のカップを用意して紅茶を注ぎながらピーチ姫は尋ねる。

ピーチ姫の問いにクツパは目線をキョロキョロと動かしながら落ち着き無さそうに椅子に座る。

そんなクツパの姿にピーチ姫は首をかしげた。

「どうしたの？まるで子供が、親に怒られるようなことをして話そうとして．．．．．
る．．．．．みたい．．．．．」

「う．．．．．」

クツパの様子に対して偶然とはいえあまりにも的確な表現。

ピーチ姫はクツパがギクリと肩を揺らしたことから、何かを感じたらしく。

言葉を途切れさせて考え始めた。

考え始めたピーチ姫の姿をクツパは冷や汗を垂らしながらおそるおそる見つめる。

「．．．．．ねえ、クツパ？」

「は、はい………」

やがて、考えていたことがまとまったのか。

ピーチ姫はとも素晴らしい笑顔でクツパの名前を呼ぶ。

素晴らしい笑顔に優しい声音で名前を呼ばれたクツパは顔を青ざめさせながら返事をした。

優しい声音で呼ばれたはずなのにクツパの体は小刻みに震えており、さながら死刑宣告寸前の犯罪者のようだ。

「今日は、どんな用件でキタノカシラ？」

「ひ、ひいいいいいい!!!」

素晴らしい笑顔、素晴らしい笑顔のはずなのに凄まじいプレッシャーを感じたクツパは、ピーチ姫の前だと言うのに顔を青ざめて情けなく叫びながら椅子から崩れ落ちるのだった。

第88話

クツパがピーチ姫に素晴らしい笑顔に優しい声音で名前を呼ばれていた頃。
マリオは自宅で本を読んでいた。

「……………なあ」

「なあに？」

本から顔を上げ、チラリと自身の背後へ目線を向ける。

位置の関係上でその姿は見えないが、背後にしがみついているナハトが首をかしげていることは感じられた。

「いつまでくつついているんだ？」

「マリオから私の匂いにするようになるまで」

そう言つてナハトはマリオに密着する。

背中に感じる柔らかい感触と、ナハトの甘いような不思議な香りにマリオの心臓はドキドキと早鐘を打っていた。

そんな気持ちに誤魔化すように、マリオは慌てて本へと視線を戻して続きを読んでいた。

一方で椅子から崩れ落ちたクッパとそれをジッと素晴らしい笑顔で見つめるピーチ姫。

クツパの顔色は青く、体も小刻みに震えていた。

「あらあら、どうしたの?」

「あ………う………」

微笑みながら尋ねてくるピーチ姫に、クツパはガクガクと体を震わせながら立ち上がらずに正座をする。

クツパ自身もこうなることは分かっていた。

分かっているのだが、それでもこの笑顔でのプレッシャーを耐えることはできなかった。

「床じゃなくて椅子に座っても良いのよ?」

「い、いいのだ………」

クツパは知っている。

椅子に座っても良いと言うのは建て前であり、実際に椅子に座るとピーチ姫の不機嫌度が上昇するということを。

焼け石に水かもしれないが、今のまま少しでも自身が反省しているということを示しておく方が無難であることを。

「それじゃあ、改めて聞くわね？今日はどんな用件で来たのかしら？」
「その………マリオについてなのだ………」

ピーチ姫の問いにクツパはおそろおそろ答える。
クツパの言葉にピーチ姫の眉がピクリと動いたが、特に口を挟むことはなかった。
無言のまま、ピーチ姫はクツパに続きを促す。

「えっと………ワガハイ、昨日、自分がもとは男であったことを気持ち悪いと思わないかマリオに聞いたのだ………」
「ふん、ふん」

それがクツパの抱えていた悩みだと言うことをピーチ姫は知っている。
女子会以降にも2人はたまに会ってはお茶などをしており、その時にクツパの口から相談を受けていたためだ。

「それで、その……。……マリオに気持ち悪くないといわれてだな……。」
「あら、それは嬉しいことじゃない」

ピーチ姫の顔をうかがいながらクツパは話を続ける。

クツパの言葉にピーチ姫は本心から喜んだ。

マリオに恋するライバルではあるが、クツパのその悩みについてはピーチ姫自身も心配していたため。

クツパが受け入れてもらえたという事実はとても嬉しかった。

「つまりはこれで条件は対等ね？」

「そう、なのだが……。」

クツパの言いたかったことはこれなのか、と。

ピーチ姫はホツとした様子で尋ねる。

そんなピーチ姫にクツパは言い辛そうにモゴモゴと口を動かした。

「ううう……。すまぬ！受け入れてもらえて嬉しくて先に告白してしまったのだ
！」

「……………え？」

「それと……………その……………キス、も……………」
「……………は？」

ポカンと口を開け、ピーチ姫はクツパを見る。

今、クツパはなんと言った？

こくはくしてしまった？

告白?!

しかもキスまで?!

「え、ええええええええええええええ?!?!」

「す、すまないのだああああ!!」

ピーチ姫とクツパ、2人の叫び声がピーチ姫の部屋に響き渡るのだった。

第89話

今にも土下座をしそうな表情でクツパはピーチ姫を見つめる。
そんなクツパをピーチ姫は啞然とした表情で見ていた。

「キス………?」

「うむ………」

混乱している頭でピーチ姫はポツリと呟く。

キスというとアレだろうか。

スズキ目スズキ亜目キス科に属している海にいる生き物の——ってそれは魚の鱧
で。

唇と唇が触れ合うことよね?

それを誰と誰が?

マリオとクツパが？

「……………抜け駆け禁止の約束を言い出したのは誰だったかしら」
「ワガハイです……………」

ふと、思い出した事実にはピーチ姫は淡々と尋ねる。

ピーチ姫の問いにクツパは小さくなりながら答えた。

そう。

抜け駆け禁止の約束を女子会で提案したのはクツパなのだ。

そのはずなのにクツパ自身がその約束を破ってしまったている。

それが分かっていたからクツパはピーチ姫に話しに行くことを渋っていたのだ。

「自分で言い出したことなのに守れなかったの？」

「嬉しくて……………つい」

自然とピーチ姫の視線が強くなる。

ピーチ姫の視線に耐えきれず、クツパは顔をソツと逸らした。

「ピーチ姫のクツパに抱いた感情は怒りと言えば良いのだろうか。はたまた自分で言い出したことを守れなかったことに対する失望だろうか。」

「つい……へえ？ つい、で約束を破っちゃうんだ？」

「うう……」

せつかくピーチ姫と仲良くなれたのにこれでは決別されても仕方がない。

いや、むしろ今すぐに手を出されても文句は言えないだろう。

自分から言い出したことであり、それを自分から破って裏切ってしまった。

嬉しかったから、と言うのは理由にはならず。

ただ、約束を破ったという事実があるだけ。

顔を俯かせ、クツパは静かに体を震わせる。

「いぬめ……ごめんさ……」

「謝って済むの？」

ポタリ、ポタリとクツパの俯いた先の床に滴が落ちる。

泣いて謝るクツパにピーチ姫はハアと息を吐いた。

約束をしたのはクツパ。

約束を破ったのもクツパ。

正直に言えばクツパを思い切りはたきたい気持ちはある。

それでも、クツパが受け入れてもらえたという喜びがピーチ姫の中にはあった。

自分でも嬉しく思うのだから、本人であるクツパの喜びがどれほど大きいのかは想像もつかないほどだったのだろう。

それが分かるからこそ、ピーチ姫はクツパに対して直接怒りをぶつけることができなかった。

「……受け入れてもらえて嬉しかったのね？」

「う、うむ……」

もう一度、確認するようにピーチ姫はクツパに尋ねる。

ピーチ姫の言葉にクツパは顔を俯かせながら答えた。

「……はあ、分かった。分かったわよ」

「ピーチ……姫？」

髪のをぐしゃぐしゃとかき混ぜながらピーチ姫はため息を吐く。

影によってピーチ姫が髪のをぐしゃぐしゃにしていることが分かったクツパはおそろおそろピーチ姫の名前を呼んだ。

「今回だけ。今回だけは許すわ！」

「ほ、本当か……？」

ズビシ、とクツパを指差しながらピーチ姫は叫ぶように言う。

ピーチ姫の言葉にクツパはゆっくりと俯かせていた顔を上げる。

「ただし、遊園地の時には私かナハトの意見を優先させてもらおうからね！」
「わ、分かったのだ！」

今回だけ、今回だけは受け入れてもらえたことに免じて許そう。

そう心に決めて、ピーチ姫はクツパを許すのだった。

第90話

クツパがピーチ姫に許されてから、マリオからナハトの香りがほんのりとするような気がするようになってから数日後。

4人が遊園地へといく前日になった。

なぜ、前日なのかというと、ピーチ姫が『当然、開園時間と同時に入るわよ！だから、一緒に出かけやすいように前日は城に全員泊まりなさい！』と言ったからだ。

ピーチ姫のこの言葉を聞いたとき、マリオとクツパは予想が当たったと顔を見合わせて苦笑していた。

「ふう、今日は別に仕事の手紙とかはないみたいだな。まあ、電話がある可能性も残っているけど……」

自宅のポストの中を確認し、仕事の依頼がないことを確認したマリオは短く息を吐

く。

マリオの仕事は基本的に手紙か電話で依頼されるため。

朝の手紙による依頼の確認と、突発にくる電話での依頼を待つしかないのだ。

一応、マリオが電話にでれない場合はルイージの方へと電話がいくので、お客さんが困ることは滅多にない。

「明日は完全に休みにするためにルイージに頼みに行こうかな。後日、ルイージに1日休んでも良いって言えば頼めるだろうし」

配管の修理などの依頼は大量にあるわけではないのだが、不定期にくるのでどちらかは手を空けておきたい。

そのため、マリオは明日のことを頼むためにルイージの家へと向かうのだった。

マリオの家からだいたい10分ほど歩いた森の中。

マリオの目の前に緑色の屋根のシンブルな家が現れた。

家の作りとしてはマリオの家と似ており、違いがあるとすれば庭に大量に咲いている花壇の花たちだろう。

「おーい、ルイージ」

緑色の屋根の家の玄関を軽く叩きながらマリオはこの家に住んでいる双子の弟の名前を呼ぶ。

すると家の中から緑色の帽子をかぶった男性——ルイージが現れた。

「やあ、兄さん。おはよう、朝御飯は食べた？それともお茶にする？実は最近、良い茶葉が手に入ったんだ」

「おはよう、ルイージ」

ルイージはマリオを家の中へと招くと、マリオを椅子に座らせてテキパキと朝御飯やお茶の準備を始めていった。

実はルイージは家事やガーデニング、料理などが趣味で、それらを人にふるまうのが好きなのだ。

ルイージが色々と準備していく様をマリオはいつものことだと、やや苦笑いをしながら見ていた。

「はい、朝御飯のパンケーキだよ。ベーコンもカリカリに焼いたから美味しいと思うよ」
「あ、ああ。ありがとうな」

ニコニコと笑みを浮かべながらルイージはマリオの前に朝御飯のパンケーキを置く。パンケーキの横にはカリカリに焼かれたベーコンが添えられており、パンケーキの熱で溶けたバターがトロリと広がっていった。

「そうだ、この紅茶も飲んでみてよ。渋味とかが少なくてとても飲みやすいんだ。パンケーキにも合うと思うよ」

「お、おお」

どんどんと色々なものが用意されていく事態にマリオは若干押されていた。ルイージの家に来ると、何故かルイージはマリオの世話を焼こうとするので、毎回このような事態になるのだ。

「そういえば、何か用があつたの？」

「んぐ………ゴクン。ああ、そうなんだよ」

ふと、思い出したようにルイージはマリオが家に来た理由を尋ねる。

ルイージの問いにマリオは口に入っていたパンケーキを飲み込んで頷いた。

第91話

紅茶の入ったカップを置き、ルイージはマリオを見る。

家に来てくれたのは嬉しいけど、どんな用件で来たのかな？

焦ったりしている様子がないことから緊急事態と言うわけではないんだろうけど。

「明日、ピーチ姫に誘われてキノコランドに行くことになったんだ」

「へえ、確かキノコタウンを越えて少し行ったところに新しくできた遊園地だっけ？」

「もぐ……、ああ」

キノコランド、その名前はルイージも知っていた。

仕事で行った先の依頼人との雑談でそこその頻度で話題にあがっていたため、記憶に残っていたのだ。

ルイージの言葉に、マリオは口にパンケーキを運びながら頷いた。

「最近できたばかりなのにスゴいね。ピーチ姫と2人きりで行くの?」
「いや、クツパとナハトも一緒に行くよ」

ルイージの問いにマリオは首を左右に振り、自分とピーチ姫だけではなく、他にも人がいることを伝える。

マリオの言葉に、ルイージは少しだけ驚いた表情を浮かべた。

「ナハトっていうのが誰かは分からないけど、クツパも一緒に行くの?!」
「うん?・・・あゝ、ルイージは知らないんだっけ?」

ルイージの反応から、マリオはルイージが最近のクツパについて知らないのでは?と察する。

事実として、ルイージはクツパの姿が変わっていることを知らず、今でもクツパはもとの姿のままだと思っていた。

その理由としては、クツパの姿が変わったことに対して箝口令がしかれていることもあるのだが、キノコタウンの住人たちがその事に対して信じていなかったと言うことも

あるだろう。

程度としては、信用はできないけど面白い噂レベルである。

「クツパは今、女性なんだよ」

「そうなの?!」

ルイージ自身も配管修理の依頼人との雑談でその噂は聞いていたが、キノコタウンの住人と同様に信じていなかったためかなり驚いていた。

まあ、噂話だったものが本場で、兄のライバルであった者が女性になっていると聞けば当然の反応だろう。

なお、そのライバルが兄に対して恋愛感情を抱いていると聞けばルイージは驚きのあまり倒れてしまうのではないだろうか。

「てつきり誰かの流した嘘の噂だと思ってたんだけどなあ」

「まあ、箆口令がしかれていたからな」

紅茶を一口飲み、ルイージはポツリと呟いた。

そんなルイーダの様子にマリオは苦笑する。

いや、まあ、俺も自分が関係していなかったら信じてはいなかっただろうからなあ。

「そういえば、ナハトのことも教えてなかったのか」

「あ、さつきも言ってたね。誰なの？」

パンケーキを食べ終わり、フオークを皿に置きながらマリオはふと気づく。

マリオの口から出てきたおそらくは女性であろう名前。

ピーチ姫やデイジー姫を除いての女性の名前がマリオの口から出てくるのは珍しいことなため、ルイーダは少しだけ興味を持っていた。

「そうだなあ……一言で言うならピーチ姫にそっくりな女の子ってとこなんだけど……」

「そんなにそっくりなの？」

ナハトに対するざっくりとした説明にルイーダは頭の中でとりあえずピーチ姫を思い浮かべる。

そっくりだと言うのだから違う点があるのは間違いないだろう。

「えっと、髪型がショートカットで」

「ふんふん」

頭の中のピーチ姫の髪型がショートカットに変化する。

これだけでもピーチ姫からかなり印象が変わるだろう。

「瞳の色が夜空みたいな黒って感じかな」

「へえ、ピーチ姫は青空みたいな色だけど、その子は夜空みたいなんだ？」

ルイージの頭の中ではほほほハハトの姿が思い浮かべることができた。

確かにピーチ姫にそっくりかも。

頭の中にハハトを思い浮かべながらルイージはウンウンと頷く。

「とまあ、俺を含めた4人で行く予定なんだよ」

「なるほどね。分かったよ。明日は僕に任せて、兄さんは楽しんできてよ」

マリオが明日キノコランドに行くという話から、なぜマリオが来たのかを理解したルイージは、ドンと強く自分の胸を叩く。

本音を言うならルイージもマリオと遊びに出かけたい気持ちもあったのだが、それはまた今度で良いかなと自分を納得させていた。

第92話

ルイージに明日の仕事を頼み、朝御飯を作ってもらって食べ終えた後。

マリオは変わらずにルイージの家にいた。

別にマリオ自身がルイージの家に留まることを決めたわけではない。

会話をすることが好きなルイージが紅茶のお代わりやお茶菓子などを準備してマリオを引き留めたのだ。

「それでね。うっかり石に躓つまずいて仕事道具を飛び散らせちゃったんだよ」

「あいかわらず抜けてるところがあるなあ」

頭を掻きながらルイージは自身のうっかり話をする。

そんなルイージをマリオは紅茶を飲みながら微笑ましそうに見ていた。

「あ、飲み終わっちゃった？じゃあ、次はこんな紅茶はどうか？それとこの紅茶に合うお茶菓子も」

「ああ、ありがとう」

マリオのカップが空になったことに気づいたルイーゾは手早く次の紅茶を注ぐ。

そして注いだ紅茶に合うと自信のあるらしいお茶菓子も出してきた。

そんな光景を見ながらマリオはボンヤリと思う。

あゝ・・・・・・・・

ルイーゾの世話焼きも変わらないなあ・・・・・・・・

別々の家に住むのを決めた理由もこれだったけど・・・・・・・・

別々で暮らすようになってからは会ったときの世話焼き具合が格段に上がるな。

マリオとルイーゾはもともとは一緒の家に住んでおり、2人で暮らしていた。

それが何故、今は別々の家で暮らしているのか。

その理由はマリオが思っていたように、ルイーゾの世話焼きが理由だった。

ルイーゾの趣味は家事やガーデニング、料理であり、2人で暮らしていたときは家事のほとんどをルイーゾが先にやってしまっていたのだ。

一応、マリオも手伝おうとはしたのだが、気づけばルイーゾが終わらせており、いつ

の間にか2人でお茶をしていることがほとんどだった。

ルイージに言つて家事をやるうともするのだが、そんなときに限つて家事をする必要がない状態だつたりもするのだ。

そんな日々が続いて、マリオもさすがにこのままではダメ人間になると危機感を抱いたのが2人が別々の家に暮らしているキツカケである。

もちろん、マリオの世話を焼くのが好きだったルイージは最初は拒否をした。

それをどうにか説得して、今の2人別々に暮らす形に落ち着いたのだ。

「兄さんはちゃんと家のことかできてる？」

「………毎回聞いてないか？」

新しく淹れた紅茶を飲み、ルイージはマリオに尋ねる。

ルイージのこの質問は毎回のことであり、少しでもできていないことがあればマリオの家に行つて、できていないことをやってしまうのだ。

そのため、マリオは家事に関して手を抜けず、ルイージほどとはいかなくてもある程度のことはできるようになっていた。

「心配しなくてもちやんとやってるさ」

「そう？何かあつたら言つてね？僕も手伝うからさ」

そう言つてルイーヅとマリオは紅茶を口に運ぶ。

ちなみに、キノコタウンでもルイーヅはマリオの世話を焼こうとするので、ルイーヅには本人には知らない通り名がある。

それは――

――
ダメ男製造機だ。

第93話

マリオがダメ男製ぞ——・・・いかず——・・・ルイージの家でお茶を飲んでいる頃。

クツパは自室で鏡に向かって座っていた。

「ぬぬぬ・・・」

「ほらほら、集中してください。少しでもずれると印象が変わってしまいますから」

クツパの手にはアイライナーが握られており、拙い動作でアイラインを描いていた。そんなクツパの姿を見ながらカメックおぼはさまざまメイク道具を用意している。

「どうやらクツパは、カメックおぼからメイクのやり方を教わっているらしい。」

とは言ってもクツパの顔はメイクなど必要のないほどに美しいので、カメックおぼは

も本格的なメイクではなく最低限のメイクで最高の魅力を引き出すナチュラルメイクを教えているようだ。

「ふう………。目の上やふちに何かを描くというのは、少し怖いものがあるな……。」
「ふえっふえっふえっ、最初は誰でもそんなものですよ。クツパしやまの場合は眉が魅力の1つですから整える程度にして、他の場所に軽くメイクをするだけで印象がかなり変わりますからな」

アイラインを描き終わったクツパは、アイライナーを置いて小さく息を吐く。

「どうやらアイラインを描くことでひとまずのメイクが終わったらしく、鏡の前にはいくつかのメイク道具が置かれていた。」

当然ではあるのだが、クツパにとってメイクは初体験であり、とてもではないが上手くできていると言いつらい。

それでもかなり綺麗になっている辺り、もとのメイク前のスペックの高さがうかがえるのだが。

「………慣れていないワガハイでもここまで変えられるのだな」

「ええ、ええ。メイクをすればどんな女性でもプリンセスになれますからな。ですから、クツパしやまからメイクを教わりたいたってくださってわたくしはとても嬉しく思っています」

鏡に写る自分の顔を見て、クツパは驚きを込めた声で呟いた。

クツパの呟きにカメツクおばばは何度も頷き、嬉しそうに微笑む。

クツパが今回おこなったメイクは、

透明感を出すために青系のベースメイク

眉の色に合わせたゴールドのアイシャドウと自然なピンクのアイシャドウをグラ

デーションでアイメイク

黒のアイライナーで気持ち長めにアイライン

オレンジ系のチークをほんのりと頬骨の辺りに

コーラルピンクのリップで透明感のある唇に

の五種類である。

まだ不慣れであるためにところどころ塗りにムラがあったり、アイライナーが綺麗に描けていなかったりもするが、クツパの中には達成感があった。

「これがもつとうまくできるようになれば……」

ほわんほわんとクツパは自分がメイクを完璧に習得できた姿をイメージする。

『どうだ、マリオ?』

『ああ、なんて美しいんだ!こんなに綺麗な姿が見れるなんて幸せだ!』

なんとも幸せな想像をしながらクツパは頬に手を当て、体をくねくねと動かす。

「えへ、えへへへ……」

「楽しそうなどころ悪いのですが、まだ終わっておりませぬぞ?」

「——はっ?!」

幸せそうな笑みを浮かべているクツパに、カメックおばばは軽いため息を吐いて話しかける。

あまりにも幸せな想像にカメックおばばがいることを忘れていたクツパは、話しかけられたことよってカメックおばばの存在を思い出し、顔を赤く染めた。

「とりあえず、いま使ったメイク道具は明日も使うので持つて行きやすいように小物入

れにまとめるとしましょう」

「う、うむ」

クツパの顔が赤く染まっていることに気づいてはいたが、カメツクおばはそこに触れることなくメイク道具をまとめていく。

そしてメイク道具をまとめ終えると、別のメイク道具を取り出していった。

「それでは、今のメイクを落として次のメイクの練習をしましょうか。とにもかくにも数をこなして身に付けませんと」

「そうだな。ワガハイも早くちゃんとメイクをできるようにになりたいからな」

そう言っただけでクツパはメイク落としてメイクを落としていく。

クツパのメイク技術習得への特訓は始まったばかりだった。

第94話

いよいよ明日に迫った遊園地へと行く日。

ピーチ姫は執務を行いなながらもワクワクとした表情を隠そうともしていなかった。

「ふんふん、ふふん」

「姫様、浮かれるのは構いませぬが、ミスだけはしないでくださいね？」

浮かれて鼻歌まで歌い始めたピーチ姫に、キノじいは呆れた表情を浮かべながら言った。

鼻唄混じりにやつてはいるが、どれも大事な報告書や申請書に他国からの手紙などなど。

嬉しいのは分かるが今だけは真面目にやつてほしい。

そう、キノじいは思っていた。

「んもう、分かってるわよ。でもキノじいも分かってるでしょ？私はあるミスなんてしないもの」

「その『あんまり』が心配なのですが？」

頬を膨らませるピーチ姫にキノじいはため息を吐いた。

人の手である以上、完璧などというものは不可能だとは分かっている。それでも可能な限りはミスに繋がるような行動はしないでほしいのだ。

「まったく、心配性なんだから・・・・・・・・・・・・・・・・あ、やば」

「姫様?!?!」

手元の書類に目線に戻し、ピーチ姫は小さく言葉を漏らす。

その声が聞こえたキノじいは驚いていた跳び上がり、慌ててピーチ姫の手元の書類を覗きこんだ。

覗きこんだ書類にはキノピオ兵たちの予算案が書かれており、その予算の数字が・・・・・・・・・・

……特に今までのものと変わってはいなかった。
それを確認したキノじいはゆっくりとピーチ姫の顔を見る。

「なぐんちやつて！冗談よ、冗談」

「ひい めえ さあ まあああああああ!!」

ペロリと可愛らしく舌を出してピーチ姫は笑う。

あら可愛い。

と、一瞬だけ惚けたものの、キノじいはすぐに意識を切り替えて叫ぶ。

真面目なときは真面目にやってくれるのだが、ときおりこうしてキノピオ兵やキノじいをかからかったりするのがピーチ姫の悪い癖だ。

とはいっても、そのからかってくる姿も人気の一つではあるのだが。

「もう、ちよつとした冗談じゃない」

「やっていい冗談と悪い冗談がありますぞ!!」

悪びれないピーチ姫にキノじいは被っている帽子を飛ばしそうな勢いで怒る。

ちなみにキノピオたちの頭のキノコの傘のような部分は帽子で、気分などによつてかぶるものを変えることができるらしい。

「まったく、ミスをして明日に響いた場合に泣くのは姫様なのですぞ?」

「う、・・・・・・・・、はぁ、い・・・・・・・・」

キノじいの言葉が決め手になったのか、ピーチ姫は肩をビクリと震わせると、クタツと体を脱力させて返事をした。

ピーチ姫自身も弛ゆるんでいる自覚はあったのだが、どうにも集中しきれずにいたのだ。
2人きりではないとはいえ、マリオと遊園地に行けるのだから仕方がないのかもしれないが。

「あのナハトなのですらちゃんと仕事をしているのですから頑張ってください」

「分かってるわよ……。って、そういえば客室の掃除は終わっている？ マリオとクッパも今日は泊まる予定だから」

「指示はしておいたので大丈夫でしょう」

キノじいの言葉に頭に浮かぶのはマリオに向かって全力疾走するナハトの姿。

そんなナハトがちゃんと仕事をしている。

そう聞いてはちゃんと仕事をやらざるを得なかった。

第95話

ピーチ城、城門前。

少し大きめの包みを手に持ちながらマリオはそこに立っていた。

包みの中身はどうやらクツキーのようで、包みの隙間から良い匂いが辺りに漂っている。

「ああ、マリオさん。ようこそ、姫様はお部屋でお休み中です。明日の分の仕事も終えてゆつくりとしていますよ」

「そうなのか。じゃあ、まずは会いに行かないとね」

城門の前に立っているマリオに気づいたキノピオ兵は、軽く頭を下げてマリオを城の中へと入れる。

マリオが近くを通り過ぎた際に、キノピオ兵は何か甘い匂いを嗅いだような気がし

た。

匂いの出所はマリオの手に持っている包みから。その匂いにキノピオ兵は思わず唾を飲み込んだ。

「ん？ああ、ルイージに持たされてね。クッキーなんだってさ。たくさんあるから少しあげるよ」

「あ、ありがとうございます」

キノピオ兵の唾を飲み込む音が聞こえたのか、マリオはふとキノピオ兵の方を向いて包みから数枚クッキーを取り出して手渡す。

クッキーを受け取ったキノピオ兵は、クッキーをハンカチに包んでポケットにしまい頭を下げるのだった。

「ひとまずはピーチ姫の部屋に行かないとね」

すれ違うキノピオたちにクッキーを少しずつ手渡しながらマリオはピーチ城の廊下を歩く。

城門からそこその人数のキノピオたちにクツキーを手渡してきているのだが、包みの中のクツキーに減った様子は見られない。

ルイージはいったいどれだけの量を作っていたのか……
マリオは少しだけルイージの作ったクツキーの量に体を震わせた。

「マリオ」

「のわあっ?!」

突然、耳元から自身の名前を呼ばれ、マリオは思わず叫び声をあげる。

慌てて声のした方を見ると、そこには嬉しそうにしているナハトの姿があった。

どうやら廊下の掃除をしている途中だったらしく、その手には箒が握られている。

「な、ナハトか。驚かささないでくれよ」

「驚く姿も可愛い」

「男は可愛いって言われても嬉しくはないかなー……」

少しだけ心臓がバクバクとしているのを誤魔化すようにマリオはナハトに話しかけ

る。

そんなマリオの姿をナハトはわずかに頬を染めながら見ていた。ナハトの言葉にマリオはガツクリと肩を落として項垂れる。

「マリオ、それはなに？」

「ん？これかい？これは俺の弟のルイージが作ってくれたクッキーだよ」

チラリとマリオの手に持っている包みを見てナハトは尋ねる。

包みから漂う甘い匂いにナハトは鼻をヒクヒクとさせていた。

そんなナハトの姿にマリオは微笑ましそうに笑みを浮かべながら答える。

「後でクツパも来るから、皆で食べよう」

「ん、分かった」

マリオの言葉にナハトは頷き、マリオに抱きつく。

分かったと言いつつ仕事に戻る様子はない。

抱きついてくるナハトに、マリオはどうしたものかと頭を悩ませる。

「……………ナハト、仕事に戻るんじゃないのか？」

「もう少し、マリオを補充してから」

結局、ナハトがマリオから離れたのは10分後のことだった。

第96話

ナハトが離れ、名残惜しそうにしながら掃除に戻る。

その姿を見てからマリオはピーチ姫の部屋へと向かって移動を再開した。

「ナハト、頑張ってくれ」

「うん！」

マリオの言葉にナハトは嬉しそうに掃除のスピードを上げた。

そこまで素早く動くとホコリがたつて余計に掃除の時間がかかるのではないかと心配になるが、その心配に反してホコリなどはまったくたつておらず、どんどんとゴミを集めていく。

そんなナハトの姿を見て、マリオはクスリと笑って歩いていくのだった。

「ピーチ姫、今は大丈夫かい？」

「ま、マリオ?!ちよ、ちよつとだけ——きやつ?!待つてちょうだい!」

ピーチ姫の部屋の扉を軽く叩き、マリオは部屋の中に声をかける。

すると部屋の中からドタンつという音とピーチ姫の慌てた声が聞こえてきた。

それからしばらくしてガチャリと部屋の扉が開く。

扉の隙間からピーチ姫が顔をそろつと出し、何故か顔を赤くしながらマリオを見つめた。

「え、えつと……少しだけ待つてくれるかしら?」

「あ、ああ。それは構わないけど、転んだような音がしたけど大丈夫?」

どこかオロオロとした雰囲気ですピーチ姫はぎこちなく笑みを浮かべる。

よく見れば髪の毛も少しだけはね散らかっており、ところどころでピヨンとはねていた。

普段とは違う雰囲気のピーチ姫に、マリオは少しだけ面食らつてぎこちなく返事をする。

「あ、あははは……。ちよつと驚いて椅子が倒れちゃつたのよ。大丈夫だから少し待つててちょうだい？」

「それならいいけど……」

そう言つてピーチ姫は素早く扉の中に引つ込んでいく。

そんなピーチ姫の姿を見ながら、そういえばクツパも似たようなことがあつたなあともリオはボンヤリと考えていた。

それからしばらくして、ピーチ姫の部屋の扉が再び開かれる。

「よし……、待たせちゃつたわね」

「いや、そんなに待つてないから大丈夫だよ」

自身の髪の毛を整えながらピーチ姫はリオを部屋へと招き入れる。

ピーチ姫の部屋は綺麗に掃除されており、「悪意」による異変の際に散らかつていたとは思えないほどだ。

よく見ると机の上にある写真立てが下向きに倒されている。

まるで、写真立てに入れられている写真を隠すかのように。

「あ、ああああ！そ、それよりもお茶でも飲むかしら?!」

「え、あ、ならルイージの作ってくれたクッキーも食べようか」

マリオが写真立てに目を向けていることに気づいたピーチ姫は、慌てた様子でマリオの視線を遮るように移動する。

ピーチ姫の言葉にマリオは手に持っている包みを差し出した。

ルイージが作ったクッキーだと聞いたピーチ姫は少しだけ複雑そうな表情を浮かべる。

マリオは城に来る前にルイージの家でもお茶をしてきていたのだが、まあ良いかとピーチ姫がお茶の準備をするのを見ていた。

第97話

テーブルの上に置かれた皿からクッキーを1枚取り、口に運ぶ。

クッキーはサクツクという音とともに割れて、口の中へと入ってきた。

ほどよい固さと甘さで食べやすく、欠片もそこまで散らばったりしない。

なんで………

なんで、こんなに美味しいのかしら………

手に持っている残り半分のクッキーも口に入れ、クッキーによって少し乾いた口に紅茶を運びながらピーチ姫は思う。

今、食べているのはマリオが持ってきたルイージの作ったクッキー。

本当に、本当に悔しいことなのだが、ルイージの作ったクッキーは自身が作ったものよりも美味しいのだ。

ルイージの料理が美味しいことは知っていた。

それでも女としてこれはけっこう悔しいものがある。

「やっぱり美味しいわね」

「そうなんだよね。双子の弟なのになんでだろう？」

ピーチ姫の言葉にマリオはウンウンと頷く。

双子であるはずなのに何が違うのか。

マリオは不思議そうに言った。

美味しいことは否定できないんだけど……

あっさりと頷くわよね。

やっぱり家族の味だからかしら。

確かにルイーダの料理はとても美味しい。

とはいっても本格的な料理人に勝るとは言えないレベルだ。

それでもマリオにとっては家族の料理であり、特に美味しいと思えるものなのだろう。

まあ、世話を焼かれ過ぎてダメ人間になりそうだから別々に住んでいるのだが。

「む、ワガハイの方が遅かったか」

「あら、いらつしやい」

「やあ、クツパ」

少しだけ強めなノックの後、扉を開けてクツパが部屋の中に入ってきた。クツパはマリオの姿を見ると、ピクリと眉を動かす。

そんなクツパにマリオとピーチ姫は軽く手を上げて応じた。

「うん？クツキーか？」

「ええ、マリオが持ってきてくれたの」

「ルイーダから持っていくようにって持たされてね」

空いている椅子に座り、クツパは皿に乗っているクツキーに気づく。

クツパの分の紅茶を準備しながらピーチ姫はクツパにクツキーを勧める。

ルイーダが作ったものか。

確かにアイツの作ったものはなかなか旨いからな。

・·····もしも、アイツが女だったらヤバかったのではないか？

「クツパ？」

「なにかあつたかい？」

「いや、なんでもない。いただくのだ」

ピーチ姫の淹れてくれた紅茶を口に運び、クツパは突拍子もない思考を破棄する。

ルイージがもしも女だったらなどという考えはしても意味のないもの。

どうあつても、そんな事態にはならないのだから。

「あれ？ワガハイ自身がそのパターンじゃないか？」

自分がまさに男から女になった事例だということを思いだし、クツパはポツリと呟くのだった。

第98話

ピーチ姫に淹れてもらった紅茶を飲みながら3人は話をする。

それは今までのことだったり、仕事に対する愚痴だったりときまぎまだ。

以前まで拐ったり助けたりの関係だったとは思えないほどにのんびりとした時間が流れる。

「仕事、終わったー」

「ごふっ?!」

「けふっ?!」

「ぬうっ?!」

唐突に部屋の扉を勢いよく開けてナハトが部屋に入ってきた。

いきなりのことに紅茶を口に含んでいたマリオとピーチ姫は思わず噎せ、クツパはビ

クリと肩を震わせた。

そんな3人の様子になハトは不思議そうに首をかしげる。

「どうかしたの？」

「けほっ、けほっ……なハト、扉は静かに開けるように、けほっ……言つたでしょ！」

「ごほっ……お、驚いたよ……ごほっ……」

「わ、ワガハイは驚いてなどおらぬがな……？」

不思議そうに見つめてくるなハトにピーチ姫は目のはしに涙を溜めながら、怒る。

同じようにマリオも目のはしに涙を溜め、口元を抑えながらなハトを見た。

クツパはなハトが部屋に入ってきたときにピクリと震えたのを誤魔化すように腕を組んで大袈裟に仰け反って見せている。

三者三様の反応も気にせずになハトは空いている椅子に移動して腰を下ろす。

「これがマリオの弟の作ったクツキー？」

「え、ああ。そうだよ」

テーブルの上に置かれた皿に盛られたクッキーを見ながらナハトはマリオに尋ねる。
ピーチ姫の言葉を完全にスルーしたナハトに驚きつつマリオはナハトの言葉に頷いた。

完全にスルーされたピーチ姫と、強がりは一切触れられることがなかったクツパは悔しそうにナハトを見る。

「ん。美味しい」

「そっか、それなら良かったよ」

クツキーを口に運び、ナハトは嬉しそうに顔を綻ほころばせる。

ナハトが美味しくそうにクツキーを食べたことに嬉しくなり、マリオも笑みを浮かべた。

「私も作れるようになるかな？」

「まあ、練習すればできるんじゃないかしら」

「……練習してもたまたまにアレなお菓子を作る者もいるがな」

手に取ったクツキーを見ながらナハトが興味深そうに尋ねる。

そんなナハトの問いに、自分でもケーキを焼いたりするピーチ姫は紅茶を飲みながら少しだけ投げやり気味に答えた。

ピーチ姫の言葉にクツパはボソリと小さく呟く。

クツパは知っていた。

ピーチ姫がケーキを作ったときに、ごく稀にとても酷い出来の物があると。

配下のグルメヘイホーが酷い味のケーキを食べたと言っていたことを。

まあ、その報告を聞いたときのクツパは酷い味でも良いから食べたかっと思つていたみたいだが。

ちなみにクツパは知らぬことなのだが、その時のケーキの材料は塩、水、イチゴ、そして――

洗剤だ
・
・
・
・
・

第99話

マリオ、ピーチ姫、クツパ、ナハトの4人はクツキーを口に運び、紅茶を飲みながら会話を楽しむ。

といってもそこは3人揃った女性陣（もと男含む）。

3人揃えばやかま——かしま………かしま 姦しいと言うようにマリオが会話に入る隙など無いかのように話し続けている。

そのためマリオは少しだけ気まずい気持ちになりながら紅茶を飲んでいた。

ううん………

この男だけ取り残される特有の孤立感は………

ちなみにマリオは話しについていけずに聞き流していたが、3人の話している話題の大半はマリオについてだったりする。

いや、むしろマリオについてだからこそナハトも話し込んでいると言うべきか。

「まあ、仲良きことは美しきかな．．．．．つてな」

楽しそうに話す3人を見ながらマリオは小さく笑みを浮かべる。

長い付き合いであるピーチ姫とクッパ。

まだそこまで長い付き合いとは言えないが、なかなか濃い付き合いのナハト。

仲良くなった3人が笑って楽しそうにしているのを見るとマリオ自身も嬉しく感じている。

3人のうち2人が自分に好意を向けていることははつきりと分かっている。

根拠はないがピーチ姫もおそらくはそうなのだと思う。

誰かと付き合い合うということは、他の2人を振るということ。

偽善と思われるかもしれないが、3人の誰にも悲しんでほしいとは思わない。

それでも、誠実に真摯に彼女たちの思いにこたえて自身の気持ちを伝えなくてはならぬのだ。

「あら、マリオ。紅茶がなくなってるわね」

「ん、ありがとう」

マリオのカップに紅茶が入っていないことに気づいたピーチ姫は、マリオのカップに紅茶を注ぐ。

紅茶を淹れてもらったことにお礼を言い、マリオはクッキーを1枚取って口に運んだ。

サクツという音を立ててマリオの口の中に甘い味が広がる。

クッキーの甘さを噛み締めながらマリオはボンヤリと考える。

自分は誰と付き合いたいのか、自分が思っているのは誰なのか。

マリオはまだ答えを出せずにいた。

「今度はゲーム機でも持つてくるべきか？」

「いや、その場合テレビも持つてくることになるのか？」

会話に入つてこないマリオを見ながらクツパはポツリと呟く。

そんなクツパの呟きにマリオは思わずツツコミをいれた。

確かにクツパのクラウンであればゲーム機とテレビを一緒に運んでくることも可能だろう。

加えて魔法で障壁なんかをつけておけばちよつとやそつとじや壊れることもない。

とはいってもピーチ姫の部屋にゲーム機やテレビが無いことから察せられるように、ピーチ姫はそれらのものをやったことがない。

仮にゲーム機で遊ぶのであれば、その辺りも考慮したゲームソフトを選んで持つてくるべきだろう。

第100話

紅茶を飲み、話をしているといつの間にもやら時刻は夕方。

窓から差し込む光がオレンジ色になってきてきている事に気づいたマリオはそつと紅茶を飲むペースを落とす。

「なあ、そろそろお茶を飲むのを控えた方が良いんじゃないか？」

「え？やだ、もうこんな時間なの？」

「時間が流れるのは早いものだな」

「なかなか楽しい話が聞けた。満足」

マリオの言葉に3人は三者三様の反応を示す。

ピーチ姫はマリオの言葉に窓を見て、やや焦った様子で片付けられるものを片付けていった。

片付けていくピーチ姫の姿を見ながら、クツパは頷いており、ナハトは満足そうに笑みを浮かべていた。

「姫様、もう少しで夕食ですので何かを食べたりしないでくださいね？」

「わ、分かっているわよ！」

不意に部屋の扉の向こう側からキノじいの声が聞こえてくる。

「どうやら夕食の時間が近づいてきていることを伝えるに来たようだ。」

キノじいの言葉にピーチ姫は片付けをしながら答えた。

ピーチ姫の片付けを手伝うために、マリオもテーブルの上に置かれた皿からクッキーを包みへと移動していく。

4人でそこそこに食べたはずなのにクッキーが残っているのだが、誰も気づいた様子はない。

「クツパ、ナハトはクッキーのこぼれかすとかが落ちてないか確認してといってくれ」

「分かったのだ」

「ん、分かった」

マリオの言葉にクツパとナハトは椅子から立ち上がり軽く辺りを見渡す。

確認するといつても探すのはクツキーのこぼれかす。

よっぽど大きい欠片でない限り見つけることは困難だろう。

少しの間、辺りを見渡していたクツパだったが、途中で何かを思いついたのか部屋の外へと出ていってしまった。

クツパが部屋を出ていってからしばらくして、クツパはどこかから借りてきたのか箒とちり取りを持って部屋に戻ってきた。

そして、それぞれの作業がほとんど終わった頃。

部屋の扉がノックされた。

「姫様、夕食の準備が整いましたので皆様と食堂まで来て下さい」

「分かったわ。それじゃあ行きましようか」

ピーチ姫の言葉に3人は頷き部屋から食堂へと移動する。

ピーチ城、食堂。

この部屋に入るのは異変の時からで、異変時にはこの部屋の椅子を使って調理場へ

の扉を塞いだのだった。

さすがにその時の名残などはなく、とても綺麗に掃除がされている。

4人はピーチ姫が上座、いわゆるお誕生日席に座り、3人もそれぞれ椅子に座っていった。

4人が椅子に座ると、キノピオたちが料理を持って調理場から出てくる。

運ばれてきた料理はとても美味しそうで、先ほどまで紅茶を飲んでいたと言うのにとっても食欲を刺激する。

「それじゃあ、食べましょう」

「いただきます」

ピーチ姫の言葉を合図に、4人は夕食を食べ始めた。

第101話

ピーチ城、食堂。

椅子に座る4人の前にとても美味しそうな料理が並べられている。

料理から漂ってくる匂いはとても食欲を刺激し、嗅いでいるだけでよだれが出てきそううだ。

食器を手に取り、マリオは目の前の料理に手を伸ばす。

最初に手を着けるとしたらとりあえずはスープだろうか。

スープは黄金色こがねいろに煌めいておりきら、その中で具のカット野菜や肉がゆらゆらと泳いでいる。

マリオ自身も似たようなスープを作ることはできるだろうが、ここまでのものを作ることはできないだろう。

「旨い……」

一言。

まだスープしか飲んでいないと言うのにその一言しか言えなかった。

マリオはチラリと他の3人の様子を伺ってみる。

ピーチ姫は普段から食べているものと大差がないのだろうか、普通に美味しそうに食べている。

クッパも同様で、同じように普通に美味しそうに食べている。

そういえばナハトはどうなのだろうか？

やはりナハトも城に住まわせてもらっているのだから食べなれているのだろうか？

そつと気づかれないように横目でナハトを見る。

瞬間、満開の向日葵ひまわりが見えた。

いや、向日葵ではない。

満面の笑みでもとても美味しそうに料理を食べているナハトの姿があった。

どうやら嬉しそうに笑っている顔が向日葵に見えたようだ。

気を取り直してマリオは他の料理に手を伸ばす。

次にマリオが手を伸ばしたのは魚料理だ。

オレンジで作られたソースのかかったソテーらしい。

一口、口に運ぶとオレンジ以外にもレモンの風味も感じられた。

この料理も旨いと一言でしか言えない。

そして、この後もマリオは出されている料理に対してただただ旨いとしか言えなかつた。

「どうだったかしら？」

「うむ。ワガハイの城とは違った味付けだったが、こちらも旨かったのだ」

「いつも通り、美味しい」

「とつても美味しかったよ。家では食べられないようなものばかりだった」

食事も終わり、キノピオたちが食べ終わった食器を片付けていく。

ピーチ姫の問いに3人はそれぞれ満足そうに答える。

お腹がいっぱいになって眠くなったのか、ナハトはあくびまでしていた。

夕食を思い返しながら、マリオはふと考える。

そういえば……

1つだけ食べなれているような味があつた気が……

でも、お城で食べるようなもので食べなれているものなんてないよな？

何回か思い返して考えてみても、どうしてその料理から食べなれているような味がしたのかは分からない。

不思議な事態にマリオは首をかしげるのだった。

マリオは知らない。

マリオが城に泊まると聞いて心配になり、こつそりと様子を見に来たLの文字が書かれた帽子の緑色の男が料理場にいたことをマリオは知らない。

第102話

夕食も食べ終わり、入浴も終えたピーチ姫は城の廊下を歩く。

「普段のドレスとは違うパジャマ姿に、とてもギャップを感じてドキリとすること間違いなしだろう。」

「うん、寝る前にやっぱりマリオと話をしたいし」

そう呟きながらピーチ姫はマリオの泊まる部屋へと足を勧める。

「マリオが来てからお茶をしつつ話したりもしていたけど、後半はほとんどクツパとナハトとしか話していなかったからもつと話したいのよね・・・」

あと、効果があるかは分からないけど、普段は見せないパジャマ姿に反応をしてくれるば嬉しいかな。

「あら？クツパ？」

「む、ピーチ姫か」

マリオの泊まる部屋の前に着くと、ピーチ姫と同じようにパジャマ姿のクツパが部屋の扉に耳を当てている姿が目に入った。

クツパはピーチ姫に気づくと扉から耳を離して口の前で指を立てる。

どうやら静かにしてほしいようだ。

ピーチ姫はなるべく音をたてないようにクツパの近くへと移動する。

「どうしたの？」

「耳をすましてみれば分かるのだ」

ピーチ姫の問いにクツパは扉をクイと指差して答える。

クツパの言葉と動作に首をかしげながら、ピーチ姫は扉に耳を当ててみた。

どうやら中にはマリオの他にナハトもいるようで2人の声が聞こえてくる。

『んうっ……痛い……』

『強かった？』

『ううん、大丈夫』

『そっか。慣れれば痛くなくなるから、もう少しやっていこう』

部屋の中から聞こえてきた声に、ピーチ姫はゆつくりとクツパの顔を見る。

痛みを伴う行為で、慣れれば痛くなくなるもの……

盗み聞いたマリオとナハトの会話からクツパとピーチ姫はある行為を頭に思い浮かべる。

『次は私がやる』

『それならお願いしようかな』

『ん、マリオの……ガチガチで固い』

『あはは、鍛えてるからね』

ガチガチで固いマリオのものとはなんなのか。

とうかナハトが自分から動いている？

頭の中をぐるぐると混乱させながらピーチ姫とクツパは互いに顔を見合わせる。

見つめ合っていた時間は数秒ほど。

それでも互いに思っていることは理解したのだろう。

2人はどちらからともなく頷くと、部屋の扉に手をかけた。

「なにをしている（のよ）（か）!!!」

「うわっ?!」

そう叫びながら2人は扉を思い切り開ける。

いきなり叫びながら扉を勢いよく開けられ、マリオは驚き声をあげた。

「な、どうしたんだい?!」

「勢いよく開けるのは迷惑」

「へ?」

「ぬ、ぬう?」

部屋の中のマリオとナハトの姿を見たピーチ姫とクッパはポカンと呆けた表情を浮かべる。

そんな2人にマリオは驚きつつも何があつたかを尋ね、ナハトは迷惑そうに2人に文句を言う。

だが、ナハト自身もピーチ姫の部屋の扉を勢いよく開けているので、完全にブーメラ
ンだった。

「え、えつと………?」

「これは………」

呆けた2人の視線の先。

その視線の先では、足を開いた状態で座るマリオの背中に手を当てるナハトの姿があつた。

そう、ピーチ姫とクッパが勘違いして突撃した部屋の中から聞こえてきた声。

その正体は、ただのストレッチだったのだ。

第103話

ピーチ城、マリオの泊まる部屋。

部屋の中でマリオ、クツパ、ピーチ姫、ナハトの4人は数枚のカードを手にとって座っていた。

4人はそれぞれ自分の手に持ったカードを確認し、他の3人の顔を見る。そして、おもむろにマリオが行動を始めた。

「俺のターン、カードを1枚出してターンエンド」

マリオは手札から1枚のカードを場に出し、その行動を終えた。

静かなスタートにマリオ以外の3人に緊張が走る。

「ワガハイだな。……ワガハイはカードを2枚出してターンエンドなのだ」

「う……………」

クツパが場に出したカードを見て、次の番であるピーチ姫は短く呻く。
「どうやらあまり良くない手札のようだ。」

「私ね。カードを引くわ……………出せないわね。これで終わりよ」

山札から引いたカードを確認し、ピーチ姫は悔しそうに自身の番を終わらせる。
そして最後のプレイヤー、ナハトの番が回ってきた。

「……………私はこのカードを使い、マリオにカードを2枚引かせる」

「なんの、俺はその効果に便乗してカードを発動し、クツパにカードを4枚引かせる！」
「甘い！ワガハイもその効果に合わせてカードを発動！ピーチ姫にカードを8枚引かせるのだ！」

「なんでそこでコンビネーションを発揮するのよ?!」

ナハトの発動した効果がマリオによって強化され、さらにクツパによって強化されて

ピーチ姫に襲いかかる。

突然の連携攻撃にピーチ姫は思わず叫んでしまった。

ピーチ姫の手札は先ほど引いたものと合わせて最初の手札から9枚も増えてしまっている。

あまりにもあんまりな事態にピーチ姫は頭を抱えなくなった。

そんなピーチ姫に構わずにナハトはゲームを進行する。

カードの効果によって引かされたプレイヤーは出せるカードを持っていてもターンを終了させられるのだ。

「ううう………手札が多すぎるわ………」

「むう………私はこのカードを使って、ターンを反転させる。次はあなた」

「え、本当に？」

ナハトの場に出したカードを見て、ピーチ姫は思わずキョトンと声を出した。

ナハトからしても出す気はなかったカードのようで、あまりよい表情はしていない。

「それなら、私はカードを4枚出すわ」

「そんなにダブっていたのか……」

「さっきの大量ドロで引いたのか？」

ピーチ姫がカードを4枚場に出したことにマリオは少しだけ驚き、クツパはそこまで揃っていた理由を考えていた。

そして、順番が反転しているためクツパの番が回ってきた。

「ふむ。ではこのカードを出して、『UNO』なのだ」

「げ、先に宣言された……」

手札が最後の1枚になり、クツパは宣言をする。

そう、4人がやっていたのはUNOだった。

ちなみにマリオとクツパが明らかに違うゲームのやり方で進めていたのはわざとであり、2人はいつもそうやってプレイしている。

時刻は22時。

そろそろ眠る準備をしないと明日に響きそうなのだが、4人に眠る様子はなかった。

第104話

固い床の感触と、なにかを抱き締めている感覚にピーチ姫は目を覚ました。起きたばかりのボンヤリとした頭でピーチ姫は辺りを見渡す。

あら………

私の部屋じゃない………？

それになにかが腕の中に………

はつきりとしらないブーツとした様子でピーチ姫は自分が抱き締めているものを見た。どうやら抱き締めているものはそこそこに太さのある棒のようなものらしい。

それに肌色の部分もあり、軽く温かくてなにか動いているようにも思える。

「………ん？」

ちよっと待って。

肌色で温かくて動いている？

ピーチ姫はなにかが引つかかり、ゆっくりと抱き締めているものの先へと視線を向ける。

抱き締めているものはどうやら腕の中から上に向かって伸びているようで、大きななにかに繋がっていた。

その繋がっていたなにか、それはどう見ても誰かの体であり、胸がない人物だ。

胸がない人物、その条件が当てはまるのは眠る前の最後の記憶の中での人物たちの中では1人しか当てはまらない。

「——まりっ?!」

小さく声を殺しながらピーチ姫は叫ぶ。

どうやらピーチ姫が抱き締めていたのはマリオの腕だったようで、その事実気づいたピーチ姫は顔を赤くした。

そして、マリオの姿を確認したときに気づいたのだが、反対の腕にはクッパが抱きついており、マリオの足にはナハトがしがみついていた。

ピーチ姫を含めて両手両足を拘束されており、当然ながらマリオは寝苦しそうにして

いる。

眠っている4人の周りにUNOのカードが散らばっていることから、UNOをやっているときに寝落ちしてしまったのだと言うことがうかがえた。

顔を赤くしながらピーチ姫はマリオの腕から離れる。

「今の時間は……まだ大丈夫ね」

パタパタと赤くなった顔に風を送りながらピーチ姫は近くにあった時計を確認する。

時刻は7時。

キノコランドの開園時刻は10時なため、移動時間を含めてもまだ余裕はあるだろう。

「とりあえずは全員起こしちゃおうかしら……」

寝苦しそうに呻き声をあげるマリオ。

マリオの腕に抱きついているクッパ。

マリオの足にしがみついているナハト。

3人を見ながらピーチ姫はポツリと呟く。

時間に余裕はあるのだが何があるかは分からない。

その辺りも考慮するといま起こしてしまっても問題はないだろう。

———というのとは建て前で、ただ単にピーチ姫がキノコランドに行くのが待ち遠しすぎて落ち着かないから他の寝ている3人を起こしたいというだけなのだが。

第105話

眠っているマリオを起こさないようにピーチ姫はそつとクツパのもとに近寄る。

おそらく先ほどまで寝ていた自分と同じような体勢なのだろうが、マリオの腕を抱き締める形でクツパの胸も強調されており、ナニをとほ言わないが控えめに言ってもぎ取りたくなつた。

そんな黒い感情を押し殺してピーチ姫はクツパの肩を揺らす。

「クツパ………起きて、クツパ」

「ん………んんう………?」

ピーチ姫に肩を揺らされ、クツパは短く声をあげる。

寝ほけ眼まなこでクツパはボンヤリとピーチ姫の顔を見る。

まだハッキリとは起きていないのだろう。

クツパは目の前で揺らされているピーチ姫の指をブーツと目で追っていた。

「ほら、ちゃんとして」

「む、むう……? ピーチ、姫……?」

軽く額を小突かれ、クツパはようやく目の前のピーチ姫に意識が向く。

くしくしと目をこすり、クツパは辺りを見渡した。

そして、自身がマリオの腕を抱き締めていることに気づいたのか、顔を赤くして固まる。

「——なっ?! こ、これは……」

クツパは顔を赤くしながら慌ててマリオの腕から離れる。

寝相でそうなってしまったのかは分からないが、またピーチ姫に怒られてしまうのかという怖さからの反応だ。

そんなクツパの様子にピーチ姫はクスクスと笑う。

「お、怒らないのか……?」
「うふふ、怒らないわよ。私も同じ感じで寝ていたみたいだもの。それにマリオの足の方を見て」

恐る恐る尋ねるクツパにピーチ姫は笑いながら自分も同じように寝ていたと教える。
ピーチ姫に促されてクツパはマリオの足を見た。

「ぬ? ナハト?」

「ええ、しかも両足をまとめてしがみついちやつてるのよね」

マリオの足にしがみつくナハトの姿に気づいたクツパは軽く首をかしげる。

ピーチ姫の言っていた通りなら、自分たちはマリオの両手両足にそれぞれ抱きついていたのだろう。

まあ、夜は少しばかり冷えたし人肌が恋しくなったのかもしれない。

「じゃ、次はナハトね」

「む、そういえば今の時間は……」

クツパが完全に目を覚ましたことが分かった。ピーチ姫は、意気揚々とナハトのもとへと近寄る。

そんなピーチ姫の姿に少しだけ呆れながらクツパは時計を確認した。

時間は………7時をちよつと過ぎた辺りか。

開園は10時と言っていたし、待ちきれなかったのか？

いや、まあ、化粧とかはまだ時間がかかるから助かるは助かるのだが………

マリオの足から離れようとしなないナハトを引き剥がそうとする。ピーチ姫を見ながらクツパは思う。

「クツパ、ちよつと手伝って！」

「いやー………」

あくまで小声でピーチ姫はクツパに呼び掛ける。

引き剥がされそうになりながらナハトは嫌々と首を振りながら抵抗するのだった。

第106話

どうにかナハトを引き剥がし、ピーチ姫は一息をつく。

両手両足を解放されたマリオはスヤスヤと穏やかに眠っていた。

むしろ、ナハトを引き剥がす際にナハトが抵抗していたのだが、それでも起きなかつた辺りかなり眠りが深いのだろう。

「……………けつこう騒いだ気がするが、起きないな」

「まあ、そこそこ遅くまで起きてたし仕方がないんじゃないかしら」

「剥がされた……………」

眠るマリオの姿を見ながらクツパはグツと体を伸ばす。

布団ではないところで寝ていたために少しだけ体に違和感を感じ、体を伸ばした際に軽くパキパキと音が鳴った気がした。

「んっ………」

伸びをした際にたゆんとクツパの胸が揺れる。

パジャマ姿であるがゆえに下着は着けておらず、その暴力的なまでの存在感がそこにはあった。

そんな揺れるクツパの胸にピーチ姫は光の消えた目を向ける。

「とりあえずマリオも起こすか？」

「……ええ、そうね」

クツパの問いにピーチ姫は顔を逸らしながら答える。

なんとなく自分がその胸に対して嫉妬していることを知られるのが嫌だった。

そんなピーチ姫の様子に、クツパは首をかしげる。

「それじゃあ、起こすわ——きやつ?!」

「ぬ?」

「あ」

クツパに顔を見られまいと慌てて移動した。ピーチ姫はうつかり自分の足に足を引っかけてしまう。

ぐらりと体制を崩し、倒れていく体。

目の前に迫ってくるのは穏やかに眠っているマリオの姿。

ピーチ姫が倒れていく様子にクツパとナハトはポカンと呆けて見ていることしかできなかつた。

「ふぎゆっ?!」

「むぎゆっ?!」

突然の衝撃にマリオの意識は覚醒する。

なにか柔らかいものが顔の上であり、視界は真つ暗でなにも見えない。

どうやらこの柔らかいものがぶつかった衝撃で目を覚ましたようだ。

目の前の柔らかいものをどかさうと、マリオは手でそれを押す。

ふにふにと柔らかい感触が手のひらに帰ってきた。

「ま、マリオ?!」

「ぷあつ?!」

目の前の柔らかいものが離れ、ようやく視界が明るくなる。

明るくなった視界の中、顔を赤くしたピーチ姫が胸を隠すようにしてこちらを見ている。

もしやとは思うが、先ほどの柔らかかったものは……

「ん、んん!」

「おはよう」

「お、おはよう?!」

クツパの咳払いとナハトの言葉にマリオはビクリと体を震わせながら応える。

もしかしなくても先ほどの状態を見ていたのだろう。

マリオは恐る恐ると3人の姿を見た。

「お．．．．．おはよう．．．．．」

「良い夢は見れたか？」

「セクハラ？」

顔を赤くして胸を隠すようにしているピーチ姫。

笑顔ではあるのだがどこことなく威圧感を発しているクツパ。

キョトンと首をかしげながら的確に指摘するナハト。

そんな3人の姿にマリオはなにも言わずに正座をするのだった。

第107話

マリオは床に正座をしてクツパに怒られる。

マリオのそんな姿をナハトはキョトンとしながら見ており、その後ろでピーチ姫は顔を赤くして胸を隠すようにしていた。

「寝ぼけていたのは分かるのだ。だが、それでもなんと言うかダメなことはあると思うのだ」

「あ、ああ………」

こんこんと静かに腕を組みながらクツパはマリオの前に立って言う。

クツパの言葉にマリオはうつむきながら静かに頷いた。

マリオ自身も悪いと思っっているので特に反論はなく、ただただ聞いている。

「まあ、ピーチ姫が足を引っかけた転んでしまったのも原因の1つだからあまりぐちぐちとは言わぬが。可能な限り気をつけてほしいのだ」

「ああ、分かったよ」

マリオのことを自分が好きなのをちゃんと分かっているほしい。

自分の前で他の女と触れあっている姿はあまり見たくない。

そんな思いがクツパの中では渦巻いていたのだが、それをなんとか感情的にならないように抑え込みながらクツパはマリオを怒るのをやめる。

クツパの言葉に頷きマリオは立ち上がってピーチ姫の前に移動する。

その際に少しだけふらついてはいたのだが、正座をしていたことによつて足が痺れたのだろう。

「その、寝ぼけていたとはいえごめん」

「う、ううん。私も転んじやってごめんなさい」

お互いに先ほどの状態を思いだし、顔を赤くしながら謝罪をする。

正直に言ってしまうえば先ほどの柔らかい感触を忘れたくはないのだが、忘れていない

とクツパにあとあと怒られそうなので、マリオはちゃんと忘れることにした。

そして、マリオ以外の3人は着替えをするために部屋から出ていくのだった。

ピーチ城、クツパの借りている部屋

マリオの泊まっている部屋から戻ったクツパは少しだけモヤモヤとしつつも自身の荷物に手をつけていく。

キノコランドへ遊びに行くために準備した化粧品や、服などを取り出し、化粧品を鏡の前に、服をベッドの上に置いた。

「……ふう、落ち着け。落ち着くのだ、ワガハイ。落ち着いてやらなければちゃんとできぬのだ……」

目を閉じ、自身の胸に手を当ててクツパは気持ちを落ち着かせていく。

クツパのメイクの腕はまだまだ初心者か初心者から1歩ほど足を踏み出している程度。

乱れた心そのままでちゃんとしたメイクができるはずもない。

それが分かっているからこそクツパは深呼吸をして気持ち落ち着かせるのだ。

「……よし。ちゃんとしたメイクをして絶対にマリオの心に強く印象を残すのだ」
ムンと小さく気合いを入れてクツパは化粧品に手を伸ばす。

まあ、強く印象を残すといっても明らかに山姥メイクのような威嚇をするようなものではなく。

ちゃんとカメックおばから習ったナチュラルメイクで、マリオの心にメイクによって綺麗になった姿を焼き付けたいということなのだが。

第108話

ピーチ城、ナハトの部屋

マリオの泊まっている部屋から仕方なく移動したナハトはパジャマから自身の服へと着替える。

その際に脱いだパジャマをちゃんとたたんでベッドの上に置いているのはピーチ姫に作法として教え込まれたからだ。

「……着替え終わったしマリオのところに——」

「あ、良かった。まだ部屋にいましたね」

着替えを終え、もう一度マリオのところに戻ろうとした時、部屋の扉が開いて女性のキノピオ族、キノピコが部屋に入ってきた。

キノピコが部屋に入ってきたことにナハトは不思議そうに首をかしげる。

ちなみにキノピコもピーチ城にて働いており、基本的な仕事はピーチ城の内装のデザインを考えることだ。

考えたデザインの通りに家具や置物などを動かす際にナハトと関わりがあり、そのときにそこそこナハトのことを気にかけるようになったのだ。

「どうしたの?」

「今日は姫様やマリオさんたちと出かけるんですよね?だから、ナハトさんに少しでもおしやれをしてもらおうと思って!」

そう言ってキノピコはいくつかの髪留めナハトに差し出した。

差し出された髪留めを見、ナハトはキノピコの顔を見る。

ニコニコと笑みを浮かべ、本当にナハトのことを考えて持ってきたのだろう。

その事が分かったナハトは小さく頷いて、髪留めを受け取った。

「ありがとう。どの辺りに着けたら良いか教えて」

「はい!」

マリオに似合うと言ってもらうため。

そんな風にナハトは思っている。

しかしマリオ以外の他人と関わることに、それはナハトに少しづつ変化が起こっていることこの証だった。

ピーチ城、ピーチの部屋

クツパやナハトと同じようにマリオの泊まっている部屋から移動したピーチ姫は、前日の内に用意した服へと着替えていく。

その格好はいつものドレス姿とは少し違い、カジュアルなTシャツにデニムのスカート、そして黒のスニーカーと動きやすさを重視したものになっている。

動きやすさを重視したものといってもおしゃれでないわけではなく、活発そうでありながらもおしゃれな雰囲気をもとっていた。

「これでよし、と。後はこの服に合わせた軽いメイクね。この格好だとナチュラルメイクの方が良いわよね」

鏡に自身の姿を映し、ピーチ姫は自身の格好におかしなところがないかを確認する。くるくると何回か回転し、おかしなところがないことを確認したピーチ姫は鏡の前に座って化粧品に手を伸ばしていく。

ナハトは分からないけれど、おそらくはクツパも何かしらの行動は起こすはず。

キノコランドでは自分とナハトの意見が優先されるが、メイクや服装などに制限などはしていない。

まあ、もともとする気もなかったのだが。

とにかくその辺りの準備をクツパがしていないとも思えないので、ちゃんとメイクをしておいて損はないだろう。

メイクをしながらピーチ姫は他の2人の内、クツパのことを考える。

その考えは見事に的中しており、まさに今、クツパも慣れないながらもメイクをしているのだった。

ナハト？

ナハトはキノピコによって髪の毛を整えられて短い髪の毛ながらに髪型をいじられています。

第109話

ピーチ城、マリオの泊まっている部屋

3人がそれぞれ着替えに戻り、1人になった部屋でマリオは軽く体を動かす。

正座をしていたこともあるが、床で寝ていて体が軽く固まってしまっているからだ。

「んっ……ふう。さてと、着替えるか」

最後に軽く伸びをしてマリオは短く息を吐く。

正座によって痺れていた足もとに戻り、問題なく動くことができるようになった。

自身の体の調子を確認し終え、マリオは着替えを出していく。

「ルイージに言われていつもの服から変えたけど、変に思われなかな？」

出した服を見ながらマリオはポツリと呟く。

マリオの目の前にあるのはいつもの赤いシャツとオーバーオールではなく、白いワイシャツとジーパン、そして赤い上着だった。

もともとマリオはいつもの格好で行こうかと考えていたのだが、ルイージのところでお茶をしている際に服装の話になり、ちゃんとした服装で出かけるようにルイージに言われたのだ。

そして、マリオは用意した服に着替えていく。

「これでよし、と。時間は………8時くらいか」

着替えも終わり、マリオは時計を確認する。

時刻は8時を少し過ぎた辺り。

キノコランドへは歩きで行くのか、はたまたなにかに乗って行くのか。

仮に歩きだとしてもだいたい20分ほどで着くだろうから、まだまだ時間に余裕はあった。

脱いだパジャマはキノピオたちが洗濯してくれるらしいので、マリオは軽くまとめて洗濯かごに入れておくことにした。

自宅での場合は1日くらいでは洗濯はしないのだが、洗ってくれるというのならお願いしておいて損はないだろう。

持ち物の最終確認を終え、マリオは部屋を後にするのだった。

ピーチ城、食堂

キノコランドに行く準備がすべて終わったマリオは、ひとまず食堂へと足を運んでいた。

キノコランドの開園時刻は10時。

向こうに着いてから食事をするにしても、それは昼食になってしまうだろう。

「と、やっぱり俺が一番か」

食堂の中に3人の姿はなく、どうやらマリオが一番最初のようだ。

といっても女性の支度には時間がかかるもの。

3人がまだ来ていないことも別におかしいことではない。

「マリオ！」

「ん、ナハトか」

近くにいたキノピオに温かいお茶をもらって飲んでいると、食堂の扉を開けてナハトが入ってきた。

ナハトの服装はいつもと変わっていないが、髪型に軽く変化が見られる。

いつもはピーチ姫と同じように軽くはねているのだが、今日のナハトの髪型ははねているところがほとんどなく、星形の髪飾りによって可愛らしいアクセントがついていた。

「どうかな？」

「うん。いつもの髪型も可愛いと思うけど、今の髪型も可愛いと思うよ」

マリオの近くに座り、ナハトは髪型をアピールする。

見て見て、といった思いが目に見えて分かるナハトの様子に、マリオは笑いかけなが

ら髪型を褒める。

マリオの言葉にナハトは嬉しそうに笑みを浮かべるのだった。

第110話

着替えとメイクを終え、ピーチ姫は食堂へ向けて廊下を歩く。

ふと廊下の先を見ると何人かのキノピオが1つの扉の前に集まっているのが見えた。

「あら？」

今の時間は各部屋の洗濯物を集めたり、部屋の掃除をしたりしているはず。

キノピオたちが部屋に入らずにいるのはそうそう無い事態だ。

なお、鍵を担当するキノピオが鍵を忘れて部屋に入れなくなり、鍵を取りに行っているあいだ他のキノピオは待ちぼうけをしている、なんてこともたまにある。

「あ、姫様。実は部屋の中から泣き声が聞こえてきてまして……」

「泣き声？」

ピーチ姫の姿に気づいたキノピオは扉の前から移動し、扉の前に集まっていた理由を言う。

キノピオの言葉にピーチ姫は首をかしげながら扉に近づいて耳を澄ませた。

「う……ひつく……う……ずず……」

「あら、ホント」

「誰かが泣いているのなら入らない方がいいのかと悩んでまして……」

扉の向こうから、少し聞き取りにくかったが誰かの泣き声が聞こえてきた。

ピーチ姫が泣き声を聞いたことが分かり、キノピオはどうすれば良いかを尋ねる。

もしも、中の人物が泣いている姿を見られたくないのなら。

そう考えてキノピオたちは部屋に入らずにいたのだ。

キノピオの言葉にピーチ姫は考えながら、あることに気づく。

あら？

そういえばこの部屋は……

「……………そうね。悪いのだけど、キノピコを呼んできてもらえるかしら？あと、この部屋の掃除は後に回してちょうだい」

「はい、分かりました」

ピーチ姫の言葉にキノピオたちは頷き、他の場所の掃除へと向かっていった。

キノピオたちの姿がなくなり、ピーチ姫はそつと扉を開けて部屋の中へと入る。

「うううう……………ひつく、ひつく……………」

「やっぱり、あなただったのね。クツパ？」

部屋の中で泣いていた人物。

それは涙と鼻水、そして涙によって落ちてしまったメイクによってグシャグシャになった顔のクツパだった。

クツパはピーチ姫に気づくと、さらに涙を流す。

「び、ピーチびめ。ええ……………」

「あーもう、顔がグシャグシャじゃないの。何があつたのよ？」

ヨロヨロと近づいてきたクツパの顔を優しく拭きながらピーチ姫はクツパに尋ねる。部屋の中を見渡してみると、床にやや汚れたシャツが落ちていることに気づいた。

「ひつく……わ、わが、ワガハイ……な、慣れてないけど……ひつく……メイクを、しようとして……」

ぐしぐしと目もとを擦りながらクツパは話す。

目もとを擦るたびにメイクが広がり、さらに酷いことになってしまっていた。

「もう、落ち着いて。ほら、まずはメイクを落とすわよ」

「う、うむ……」

あまりにも見ていられない状態に、ピーチ姫は化粧落としを用意してクツパの顔を拭いていく。

クツパは特に抵抗もせず顔が拭かれていた。

そして、しばらくしてグシャグシャになったメイクの下から、泣いたことよってや

や目もとが赤くなつたクツパの顔が現れた。

第111話

クツパの顔を綺麗にし、赤くなつた目もとに濡らしたタオルをあてる。
これをするだけでも多少は目もとの赤さを誤魔化せるだろう。

「それで、どうして泣いていたのか教えてもらえるかしら？」
「ひつく……う、うむ……」

顔を綺麗にする間に少しだけ落ち着いたのか、クツパはしゃくり混じりに話し始めた。

「その……ワガハイ、慣れてないけど……ひつく……メイクをしようとして……」
「それは、まあ、分かるわ」

クツパの言葉にピーチ姫は先ほどのグシャグシャの顔を思い出す。

あんなことになってきているのだから、そりゃあ慣れてはいないでしょうね……
まあ、見たときにはグシャグシャだったから、もしかしたら上手くできるのかもしれないけど。

「それで……メイクは、自分なりに上手くできたと思う……ひつく……のだ。
でも、シャツを着ようとしたら……ううううう……」
「ほら、泣かないの。目もとが赤くなっちゃうわ」

どうやらメイク自体は上手くできていたらしい。

再び泣きだしそうになったクツパを優しく撫で、ピーチ姫は落ち着かせようとする。
クツパを落ち着かせつつ、ピーチ姫はクツパが泣いてしまった原因を考えた。

メイク自体は上手くできたのよね？

それでシャツを着ようとしたら、つてところで泣き出した。

そういえば汚れたシャツが落ちていたわね。

そう考えたピーチ姫はキョロキョロと先ほど見かけたシャツを探す。

シャツは鏡の近くに落ちており、鏡の前にはいくつかの化粧品も置かれていた。

「これね。……あちやあ」

クツパの背中を優しくポンポンと叩いてから、ピーチ姫は落ちてしているシャツを拾って確認する。

落ちていたシャツは白地の可愛らしい柄物で、本来であればちらほらと花びらが描かれていたのだろう。

しかし、ピーチ姫の見たシャツにはアイシャドウやチーク、コーラルピンクのリップなどがついてしまっており、とても可愛らしい柄があつたとは思えなかつた。

「なるほど……。メイクをしてからシャツを着ようとしたから、シャツにメイクがついちやつたのね……」

「そ、そうなのだあ……。こんな、こんなはずじゃ……。うあああああ……」

クツパがやってしまったのは言ってしまうととても初歩的なミス。

慣れた人や、落ち着いている人であればやってしまうことはないだろう。

が、クツパはまだメイクの初心者であり、マリオたちと出かけるということでは

落ち着きがなかった。

それゆえに起きてしまった悲劇だった。

ピーチ姫の言葉にクツパは頷き、また泣き出してしまふ。

不意に扉がノックされ、声が部屋に飛び込んでくる。

「姫様、キノピコです。なにかご用ですか？」

「ああ、来たのね。入ってちょうだい」

ピーチ姫の言葉に扉が開き、キノピコが部屋の中に入ってくる。

キノピコは泣いているクツパの姿に驚きつつ、ピーチ姫のそばへと移動した。

「実はクツパのシャツがこんなことになっちゃってて……どうにかできるかしら？」

「うわあ……ふんふん、これなら大丈夫ですね。化粧品の方も衣類についても落とせるものみたいです。ただ、洗濯をしてしまうので今日は着れなくなってしまうんですけど……」

ピーチ姫の差し出したシャツを見てキノピコは思わず声を出す。

シャツについた化粧品を調べ、キノピコはドンと胸を叩く。

「どうやらクツパの使っていた化粧品は洗濯で綺麗に落とせるものだったらしく、キノピコは自信満々に答えた。

「それならお願いするわね。クツパの今日の服の方は私に任せてちょうだい」

「分かりました。こちらのシャツはちゃんと綺麗にしますから、泣かないでください。では、失礼しますね」

泣いているクツパに優しく声をかけ、キノピコはシャツを持って部屋から出ていった。

ひつく、ひつくとしやつくり混じりになりながらクツパはキノピコの出でいった扉を見つめる。

そんなクツパを見ながらピーチ姫はクツパの服について考えるのだった。

第112話

しゃっくり混じりに涙を流しているクツパの姿を改めて見ながらピーチ姫は考える。

ちなみにクツパの姿は、膝丈ほどのジーパンをはいて、上は下着だけの姿だ。

さすがに下着のままでもいいさせるわけにもいかず、ひとまずはパジャマの上をクツパに着せた。

「とりあえず私の持っている服を貸してあげるわ。何着かはシャツとかもあるし」

「い、良いのか……?」

ピーチ姫の言葉にクツパは目もとの涙を拭きながら尋ねる。

服を貸してもらえるならとても助かるので嬉しいのだが、それと同時に申し訳なくも思うのだ。

「良いのよ。それに、今日は4人で遊ぶのよ？あなたも着替えて行かないと意味がないじゃない」

「あ、ありがとうなのだ……」

ポロポロと涙を流しながらクツパはピーチ姫にお礼を言う。

その涙は先ほどまでの悲しみからの涙とは違い、ピーチ姫の優しさへの嬉しさからの涙だった。

「もう泣かないの。それじゃあ私は部屋から服を持ってくるわね。ちゃんと目もとを冷やしておくのよ？」

「分かったのだ……」

そう言ってピーチ姫は部屋から出ていった。

ピーチ姫が部屋から出ていくのを見送った後、クツパはピーチ姫の言った通りにタオルを濡らして絞り、目もとにあてる。

少しでも泣いたことよって赤くなった目もとを目立たなくさせるために。

廊下を早足ぎみに歩きつつ、ピーチ姫は自分の持っている服の中からいくつかをピツクアツプする。

ええと、クツパは膝丈くらいのジーパンだったわよね。

だとしたらワイシャツ系の……

いや、もともとは花びらの描かれたシャツだったわけだからそっち系のものの方が良いのかしら。

とりあえず持っている中で近い種類のをいくつか持っていて選ばせましょう。

……胸がキツイとか言われたらへこむわね。

ピーチ姫は自分の部屋に辿り着くと、クローゼットの中から何着か洋服を取り出した。

ジーパンに合いそうな服、ワイシャツ系の服、花びらの描かれた服。とにかくクツパに似合いそうな服を取り出していく。

おおよそ10着ほど取り出した辺りでピーチ姫は手を止める。

「……出しすぎたかしら？」

クツパに似合いそうだからと取り出してはいたが、10着もあつてはさすがに選ぶのに時間がかかつてしまうだろう。

ピーチ姫は取り出した服の中から3着ほどに候補を絞ると他の出した服をしまつていった。

まあ、これで大丈夫よね。

あまり時間をかけてもあれだし、早く戻らないと。

それにクツパも、もう一度メイクをするだろうから。

そう考え、ピーチ姫は服を抱えてクツパの部屋へと駆け足気味に向かうのだった。

第113話

3着の服を抱えてピーチ姫はクツパの待つ部屋へと向かう。

とりあえずはピーチ姫の持っている服の中からクツパに似合いそうなものを厳選してはみたが、そこから決めるのはクツパ自身。

あまり服を選ぶことだけに時間はかけていられなかった。

「おまたせ！」

「いや、そんなに待っていないのだ」

扉を開けて部屋の中に入ると、濡れタオルで冷やしたことによつて少しだけ目もとの赤みが引いたクツパが出迎えた。

目もとを冷やししながら落ち着いて考えることができたのか、悲しげな雰囲気はどこにもない。

いつものクツパの雰囲気に戻ってきていることが分かり、ピーチ姫はホッと一息入れて持ってきた服を差し出した。

「とりあえず3着ほど持ってきたわ」

「ありがとうなのだ」

クツパはピーチ姫から受け取った服を一枚一枚広げてベッドに並べていく。

一枚はシンプルな白いワイシャツ、アクセントとして袖の部分に桜の花びらのようなピンク色の花びらがちらほらと描かれている。

一枚は薄いピンク色のシャツ、柄などはないのだが、花びらのような形で何か所かがへこんでおり、それが柄のように見える。

一枚は白色のチューブトップ、首の後ろを通すようにリボンが伸びており、薄いピンク色の布の花びらがちらほらとついている。

ピーチ姫が持ってきたのはこの3着だ。

「どうかしら？一応、あなたが持ってきていたものに近いものとかを選んだのだけど……」

「むう……」

目の前に並ぶ3着の服を見ながらクツパは悩む。

服の種類としては真ん中に置いてある薄いピンク色のシャツが持ってきた自分の服と同じもの。

しかしワイシャツの方もジーパンとの組み合わせとしては合っていそうであり、またチューブトップの方も合っていそうだ。

3着の服に手を伸ばし、ゆらゆらと揺れる。

クツパの様子から悩んでいることが分かった。ピーチ姫は、なにも言わずにクツパの判断に任せることにした。

「ぬ、ぬぬぬう……」

いったいどれを選べば良いのか……

いや、自分の着たいと思ったものを選べば良いのは分かる。

分かるのだが、簡単なようでそれがかなり難しいのだ。

これにしようかと決めようとする。他のものが魅力的に見え、そっちに変えようかと

すると最初のものが魅力的に見える。

となりの芝は青く見える、というやつなのだろうか？

もしかしたら意味は違うのかもしれないが、クツパの心境はそんな感じだった。

「ねえ、シャツの上にはなにかを羽織る予定だったの？」

「ああ、この若草色のカーデイガンに羽織ろうかと思っていたのだ」

悩みすぎて頭から煙が出ているように見えたため、ピーチ姫は手助けをするように声をかける。

ピーチ姫の言葉にクツパはカーデイガンを広げて見せた。

カーデイガンに柄などはなく、シンプルではあるがとても柔らかい印象を受ける。

「なら、それと合いそうな服を選んだらどうかしら？」

「なるほど、そうしてみるのだ」

ピーチ姫のアドバイスにクツパは頷き、カーデイガンに3着の服をそれぞれあてて見ていく。

服を選ぶのはもう少しで終わりそうだ。

第114話

ゆらゆらとクツパの頭が揺れる。

視線の先にはピーチ姫の持つてきた3着の服。

一応はそれぞれの服と上に羽織るカーデイガンに合わせて見たのだが、どれが良いのかキツパリとは決められなかった。

「ぐぬぬぬ……」

拳を握り、悔しそうにクツパは唸る。

ひとまずカーデイガンを羽織るということでワイシャツのような少し固そうな印象はやめておくべきなのかと悩むが、ジーパンに一番合いそうなのはワイシャツだ。

しかし、ワイシャツは袖の部分にしか柄がないため、カーデイガンと組み合わせると完全に無地のワイシャツにしか見えない。

その事からクツパはワイシャツを候補から外す。

「となると残るは二択……」

残っているのはピンク色のシャツとチューブトップ。

シャツであればピンク色と若草色で桜のような雰囲気になるだろう。

しかし、チューブトップで肩を出すことでさりげなくアピールもできるのではないだろうか。

手堅くシャツにすれば一番良いのだろうが、それでもマリオに対してアピールも考えてしまうのは恋をしているがゆえなのだろう。

「ぬう………決めた！」

「そつちにするのね？」

クツパが選択肢から外したワイシャツをたたみながら、ピーチ姫はクツパの選んだ服を見る。

悩んだ末に選んだもの。

それは他を諦めることではあるが、自分の手で宝を得たような達成感も生まれるだろう。

「なら、あとはメイクをしないとね」

「う、うむ」

ピーチ姫の言葉にクツパは少しだけ緊張しながら答える。

先ほどは上手くメイクをできたのだが、今度は上手くできるか分からない。そんな不安がクツパにのしかかる。

「落ち着いて。まずはちゃんと選んだ服を着なきゃ」

「そ、そうだな……」

危うく先ほどの二の舞を踏んでしまうところをピーチ姫の言葉でメイクの前に気づくことができた。

服をまだ着ていないことに気づいたクツパは、化粧品から手を離していそいそと服を着ていく。

「これで大丈夫ね。ちなみにメイクはどれくらいの時間でできる？」
「う．．．．．、だいたい30分ほどなのだ．．．．．」

現在の時刻はおおよそ8時になるかならないか辺り。

キノコランドの開園時刻は10時だが、入園の際にスムーズに入るために可能なら30分ほど前にはキノコランドに着いていたい。

その事から逆算して欲しい9時辺りには城を出たいところだ。

「時間としてはギリギリね。分かったわ、今回は私がやってあげる。悪いけどさすがに30分はかけてられないわ。朝食の時間とかもあるし」

「迷惑をかけるのだ．．．．．」

ピーチ姫の言葉にクツパは納得し、頭を下げる。

自分がやったのでは朝食の時間は取れてもおおよそ30分あるかどうか。であるならば自身の未熟を認め、ピーチ姫に委ねる方が良いだろう。

ピーチ姫ならば間違いないメイクをしてくれると信じて。

第115話

クツパの持つてきた化粧品を扱い、クツパから聞いたメイクを施していく。

その出来映えはクツパの技術よりも明らかに上で、クツパ自身もその技術に舌を巻いていた。

「よっし、これでだいたい終わりね。後のリップは自分でやってちょうだい」
「ありがとうなのだ」

鏡の前に置いてあるリップを手に取りつつクツパはピーチ姫に礼を言う。

早さも技術もワガハイよりずっと上。

これがメイクに慣れているピーチ姫の実力か・・・

ワガハイも、頑張ればこれほどの実力をつけることができるのか？

濃すぎず、薄すぎず。

ちょうど良い色合いを意識しつつ、クツパはリップを唇に塗る。

コーラルピンクのリップがクツパの唇を艶めかせ、どこか色っぽさを醸し出していた。

「ええと、時間は………8時15分ね。これなら朝食も食べられるわね」

「うむ。ワガハイでは間に合わなかったかもしれないね。本当にありがとうなのだ」

時計を見ると、ピーチ姫がクツパにメイクを施し初めてから15分ほどしか経っていなかった。

メイクにかかった時間はクツパのほぼ半分。

これだけでもピーチ姫のメイクの手際の良さなどがうかがえる。

「さ、食堂に行きましょう」

「そうだな。ナハトは分からぬが、マリオの方はもう食堂にいそくだ」

使用した化粧品を片付け、2人は部屋を後にする。

向かうのはマリオとナハトの待つ食堂だ。

ピーチ城、食堂

クツパとピーチ姫の2人を待つマリオとナハトはお茶を飲みながら食堂の窓から射し込む陽光にぼやぼやとしていた。

漫画的に表現するならひよろひよろとした棒に丸い玉が着いているものが頭から少し辺り離れたところで浮かんでいるような感じか。

「ふわぁ……」

「マリオ、あくびふぁ……」

マリオがあくびをしたことを言おうとしたナハトはマリオに続くようにあくびをする。

お互いに顔を見合わせ、あくびをしたことを笑う。

「ははは、あくびがうつつたな」

「うん、うつされた」

2人の完全にゆるんだ姿に、食堂にいた他のキノピオたちもどこかゆるゆるとした雰囲気をつけている。

それでも部屋の掃除や整備などに抜けている部分がない辺り、城で働く者としての技量がうかがえた。

そんなゆるんだ空間となっている食堂の扉が開き、クツパとピーチ姫の2人が入ってくる。

「待たせちゃったかしら？」

「すまぬ。少々トラブルがあつて遅れたのだ」

カジュアルなTシャツにデニムのスカートを身に纏い、黒のスニーカーによつてとてもエネルギーッシュに見える。

おしゃやれでありながらもより活発そうな印象を受けるピーチ姫。

ピンク色のシャツに若草色のカーディガンを組み合わせ、どこか春のようなイメージの湧く上と、ジーパンによってかっこよく見える下。

柔らかさとかっこよさを組み合わせたような印象を受けるクツパ。

普段では見られない2人の姿に、マリオは思わず見惚れるのだった。

第116話

普段では見られない2人の姿に見惚れ、マリオは言葉をなくす。

自分たちを見ながら固まるマリオに、クツパとピーチ姫は首をかしげつつ近くの椅子へと座った。

「どうかしたの？」

「なにか変なところでもあったか？」

「い、いや、似合ってるなあって……」

マリオが固まっていることが気になり、クツパとピーチ姫は尋ねる。

クツパとピーチ姫の問いに、マリオはどぎまぎとしながら答える。

不意打ち気味のマリオの言葉に、クツパとピーチ姫の2人は思わず赤面した。

「な、なな……」

「そ、そそそ、そうかしら?!」

「あ、やべ……」

顔を赤くする2人の姿に、マリオは自分が答えた内容に思わず顔を逸らしてしまう。

それでも言った事実は変わらない。

それによつてこの場の3人の顔は赤く染まるのだった。

「えっと、朝御飯の用意ができました。お持ち致しますね?」

「お、お願いするわ……」

「頼むのだ……」

「お願いするよ……」

「あ、いつもみたいに多めでお願い」

顔を赤くして静かに朝御飯の用意を頼む3人とは異なり、ナハトはいつもと変わらぬ様子で頼む。

そんな4人の様子にキノピオたちはどこか苦笑いを浮かべながら朝御飯の用意をす

るのだった。

用意された朝御飯をもりもりと食べながらナハトは笑顔を浮かべる。

そんなナハトの姿に気が抜けたのか、他の3人も徐々にいつも通りに朝御飯を食べ始めた。

朝御飯も終わり、全員がそれぞれ頼んだ飲み物を飲んで一息をつく。
ちなみに飲み物はマリオとクツパがコーヒ―、ピーチ姫が紅茶、ナハトは緑茶だ。

「そろそろ出発する時間ね」

「そういえば、何でキノコランドまで行くんだい？」

「うむ。歩きであれば30分ほどかかるのであろう？」

立ち上がって出発しようとするピーチ姫に待ったをかけ、マリオとクッパは尋ねる。確かにピーチ姫はキノコランドに何で行くかを明言しておらず、それについての話し合いもしていない。

まあ、時間的には歩きで行っても開園の30分前ぐらいには着くのだが。

「そうね。全員でカートで行くって手もあるけど……」

「キノコタウンに迷惑だからやめような」

「ワガハイ、カートは持ってきておらぬ」

「カートって、なに？」

ピーチ姫の言葉をマリオは頭に手をあてながら止める。

マリオとピーチ姫のカートはピーチ城に置いてあるのだが、クッパのカートはクッパ城に、そしてナハトのカートはない。

その辺りもふまえてマリオはその案を却下した。

第117話

カートを準備しようとするピーチ姫を止め、4人は一先ず城門へと向かう。

歩くにしても、何かに乗るにしても城門に行かなければキノコランドには行けないだろう。

「ちよつと久しぶりに乗りたかったのに……」

「それはまたの機会にしような」

「今日はキノコランドに行くのがメインなのだろう……」

「早く行こう」

まだ後ろ髪を引かれているのか、ピーチ姫はチラチラとカートが置いてある場所を見ている。

そんなピーチ姫をクツパが手を引いて城門の方へとつれていく。

「おお、皆さま」

「キノじい？」

城門に4人が迫り着くと、そこにはキノじいがいた。

キノじいは4人に気づくと、少しだけ早足で近づいてくる。

なぜキノじいがかここにいるのか分からず、4人は首をかしげた。

「これからキノコランドに向かおうかと思っっているんだけど……、何かあったのかい？」

「いえいえ、余計なことかと思いましたが、こちらの方で車の方を用意させていただきました。どうぞこちらへ」

キノじいになにか問題でもあったのかと尋ねると、キノじいは首を横に振って答える。

キノじいの言葉に4人は用意してもらったのならば乗せてもらおうと頷き、城門の外へとついていく。

城門の外、ピーチ城の前に出ると、そこには小型車だが高そうな車があった。

「どうやら城に置いてある乗り物の内の一台のようで、ピーチ姫だけはそこまで驚いていない。」

「そういうえば色々と乗り物もあるんだったな……」

「完全にさっきのカート発言で抜けてしまっていたのだ……」

「それではマリオどの。運転は任せてもよろしいですか？」

少しだけポカンとしながら車を見るマリオに、キノじいは車の鍵を渡す。

マリオからしても車の運転をすることに問題はないため、特に断る理由もなく車の鍵を受け取った。

そして、マリオが鍵を受け取ったことを理解した瞬間、クツパ、ピーチ姫、ナハトの3人の目の色が変わる。

「それじゃあ、私が助手席に座るわね」

「いやいやいや、キノコランドでの意見はそちらを優先するのだから、ここはワガハイが助手席に座るべきであろう？」

「私が助手席に座る」

笑顔を浮かべつつ、バチバチと火花が散る。

こうなることを見越していたのか、キノじいはマリオに車の鍵を渡すと同時に城の中へと戻ってしまっていた。

「いやいや、この車はうちの車なのよ？それなら私が助手席に座るのが当然でしょ？」

「いやいやいや、助手席は運転手のサポートもしなければならぬのだ。ピーチ姫がそんなことをしなくても良いだろう？」

「………マリオ、私が助手席にすわ——」

「抜け駆けはさせない！」

クツパとピーチ姫が熱くなり始めている隙に助手席に座ろうとしたナハトを捕まえ、

3人はさらに火花を散らす。

3人のそんな光景にマリオは頬を掻いて、見ていることしかできなかった。

第118話

壮絶な……とても壮絶な戦じゃんけんいがあつた。

その戦いに間違いなどはなく。

また、正解もない。

戦いの末に得たものは勝利^{助手席}。

しかし、敗れたものは悔しさをバネにする。

次こそは負けないと。

次こそは自らが勝者となると。

敗北者はいつまでもその地位にいることはない。

勝者よ、恐れるがいい。

ここにいるのは虎視眈々とその座を狙う脅威なり！

「ほら、決まったなら早く乗ってくれ」

「「はーい」」

マリオの言葉に3人はそろって返事をし、車に乗り込む。

じゃんけんの結果、助手席に乗ることになったのはクツパだ。

クツパは後ろに乗るピーチ姫とナハトに対して優越感でも感じているのだろう。

その表情はぼやぼやととてもゆるんでいた。

「あそこでグーを出してれば……」

「悔しい」

「ちゃんと乗ってるな？シートベルトは後ろの席でも忘れずに着けてくれよ？」

車内を見回し、全員が乗っていることを確認してマリオは車のエンジンをかける。車はそれほど大きな音もたてずにエンジンを動かし、前へと走り始めた。

「へえ、かなり静かな車だな」

「ええ、あまり音が出るものだとは住人にも迷惑だから、静かなものに変えていつているのよ」

今回、4人が乗っている車はエンジンの音も、走っている音もほとんどなく。

とても静かに走っている。

少し前であればもう少し走っている音などがしていたのだが、技術の進歩にマリオは感心していた。

「だが、こうも静かだと歩いているものが気づけないのではないか？」

「気づかれないうちにひく？」

「ひかないけど?!」

あまりにも物騒なナハトの言葉にマリオは思わずツツコミをいれた。

しかし、クツパの懸念も気になるところ。

仮にこの車で歩いている人の後ろをびったりとついていってもその人が気づくことは難しいだろう。

「まあ、その辺りは運転手が気をつけるしかないわね。一応、人がいきなり出てきたりしたときに急ブレーキが勝手にかかる仕組みとかを開発しているらしいから。そのうち取りつけられるんじゃないかしら？」

「その仕組みがついたらかなり安心できるね」

「とりあえずはなるべく人の近くに行かなければ大丈夫であろう」

クツパの懸念にピーチ姫は今現在進行中の仕組みを教える。

人が出てくれば自動で感知して急ブレーキをかける。

そのような仕組みがつけば、完璧にはいかないだろうが、かなりの事故を防ぐことができるだろう。

「歩きで20分くらいだから、車だとやっぱりすぐ着くな」

「む、見えたか！」

「もうすぐ?」

「キノコランドね!」

フロントガラスの先、進む道の奥に見えてきた建物に4人は反応を示す。ところどころにキノコの形の屋根の城が立ち、手前には大きな門。

そして、大きな観覧車や長いレールなどが見える。

キノコランドはもうすぐだ。

第119話

車を駐車場に置き、マリオ、クツパ、ピーチ姫、ナハトの4人はキノコランドの入り口へと向けて歩く。

開園時間の40分ほど前に着いているが、何人かはすでに並んで待つており、それほどまでにキノコランドが期待されているのだということがうかがえる。

「これだけ早く来ても先にいる人がいるんだな」

「まあ、こういうった施設は今までなかったからな。物珍しさもあるのではないか？」

周りの待つている人たちをチラリと見て、マリオは思わず呟く。

正直に言うところだけ早く来たのだから他には誰もいないとマリオは思っていた。

それが予想に反して意外と来ている人がいるのだ。

思ったことが思わず口に出てもしかたがないだろう。

「それで……開園まであと40分だけど」

「待つわよ!」

「待つしかないであろうな」

「待つー」

開園までかなり時間はあるがどうするか。

3人の方を振り向いて尋ねるとピーチ姫はバーンツ!という効果音がつきそうな勢いで答える。

ピーチ姫ほどではないが、クツパとナハトも待つつもりらしく、マリオは少しだけ疲れた表情をするが反対する気はないらしく静かに頷くのだった。

「……そういえばさ、優待券なんだから時間ちようどに来ても先に入れたんじゃないか?」

「……は、早起きは三コインの得っていうじゃない!」

「忘れていたな」

「忘れてたね」

ふと、思い出してマリオが尋ねるとピーチ城は顔を逸らしつつ答えた。

その様子からピーチ姫が優待券だということを忘れていたのだということはハッキリと分かる。

なお、ピーチ姫は三コインの得と言っているが、正確には三文の得であり、うっかり一番身近な通貨名を言ってしまったのだろう。

「そうだ、園内の案内図とかももらえないのかな。ちょっと見てくるよ」
「そうね。お願いするわ」

3人にそう言って、マリオはキノコランドの入り口にある建物へと向かっていく。マリオが離れた瞬間、クッパとピーチ姫は自分たちに視線が集まったことに気づく。どうにも嫌な視線だ。

「……嫌な感じね」

「ふん」

「不快」

どこから視線が来ているのかは分からないが、いい気分はしない。

3人は視線に不快感を示しながら、意識をしないようにする。

不快な視線ではあるが気にしすぎても疲れるだけ。

視線があることを頭の片隅に留めつつ、ハッキリと関わってこない限りは気にしないようにした方がストレスなども少ないだろう。

そんな風に視線を無視して話していると、案内図を貰ってきたマリオが戻ってきた。マリオが戻ってくると視線は外れていき、どこからか舌打ちも聞こえてくる。

聞こえてくる舌打ちに少しだけイラツとしながらマリオは3人に案内図を手渡した。

第120話

キノコランドの案内図を見、どこにどのアトラクションがあるのかを見ていく。

パツと見るだけでいくつものアトラクションがあることは分かるのだが、どのように回れば良いのか悩んでしまう。

「やつぱりジェットコースター系は外せないわよね」

「そう言うだろうとは思っていたのだ」

「まあ、予想通りだよなあ……」

「シアター？」

やや興奮気味にピーチ姫は案内図からジェットコースター系統のアトラクションを探していく。

そんなピーチ姫の様子にマリオとクッパは苦笑する。

そしてナハトは3人とは全く違うところを見ていた。

「えっと、ジェットコースター系は……キノコースター、スーパーキノコースター、ウルトラキノコースター、ビッグサンダーマッシュルームみたいね」

「キノコースターは派生系かな？」

「名前からしてそうであろうな」

「お化け屋敷……」

案内図に描かれているジェットコースター系のアトラクションは4種類。

その内の3つは同じようなタイプのものらしく、似たような名前がつけられていた。

「そういえばけっこう待ってる人も増えてきたな」

「そうね。やっぱり早く来て正解だったわね！」

「いや、優待券があるのだから気にしなくて良いのだろうか？」

「レストラン……」

マリオは周囲を見回し、入り口についたときと比べて格段に人数が増えていることに

気づいた。

どこかで見たことのある緑色の服を着たどがった耳の男性や、ピンクのボールのような生き物、オレンジ色のアーマーに身を包んだ人間……等々。

キノコタウンの近くには住んでいないような人たちの姿も何人か見える。

「それで、どう回るかは決まったのかい？」

「そうね……。一応は決まったかしら」

「とりあえず開幕からジェットコースターは確定だな」

時計を確認すると、もうすぐ開園の時間。

案内図を見ていたピーチ姫にキノコランドをどのように回るのかを尋ねた。

マリオの問いにピーチ姫は案内図を閉じて答える。

回るルートが決まったとは言っているが、クツパの言っている通り開幕でジェットコースターなことは間違いがないだろう。

マリオ自身もなんとなくそれが分かっているため、頬を掻きながら頷いた。

やがて時計が10時を指し示した。

時計が10時を指した瞬間、空には花火が射ち上がり、キノコランドの中からとても

楽しそうな音楽が聞こえてくる。

そして音楽に合わせてキノコランドの門が開き、何人ものスタッフや着ぐるみなどが現れた。

「ここは夢と希望とキノコのテーマパーク！」

「楽しい！楽しい！遊ぶことだけ考えて！」

「遊び尽くした者が一番だ！」

「「ようこそ！キノコランドへ!!」」

キノコランド、開園。

第121話

キノコランドの門が開き、中へと入る。

聞こえてくるのはキノコランドを楽しみにしていた人たちの声。

「ぼよ☆」

「いきなりレストランに行くのか？」

ピンクのボールのような生き物は跳び跳ねながらレストランエリアに向かい。

それを仮面をつけた似たような生き物が追いかけていく。

「村長、穴は掘らないでくださいね？」

スコップを持っていた少年を犬の女性が止める。

どうやらキノコランドの敷地内に穴を掘ろうとしていたらしい。
少年は持っていたスコップをどこかにしまい、アトラクションへと向かっていった。

「……色々な人がいるな」

「なにを黄昏てるのよ！早く行くわよ！」

「マリオ、行くぞ！」

「行くぞ？」

目に見えるだけでも多種多様な人間がいる。

先ほど見かけた人物以外にも段ボールの中に入って移動している人や、超能力で飛んでいる人、果てにはオレンジ色のドラゴンのような生き物に乗っている人までいた。

あまりにも多種多様な人間がいるためにマリオはどこか呆然としていた。

そんなマリオを急かすようにピーチ姫は背中を押す。

ピーチ姫に背中を押され、やや転びそうになりながらもマリオは歩き始めた。

最初に向かうのは当然ながらキノココースターだ。

キノココースター、それはキノコの形をしたコースターのジェットコースターだ。

キノコ、スーパーキノコ、ウルトラキノコの順で速さも坂の角度も強化されていく。

ちなみに子供が乗れるのはスーパークイーンコースターまでであり、ウルトラキノコースターには年齢が18歳を越えなければ乗ることはできない。

むしろ、そのレベルのジェットコースターがあることにマリオとクッパは恐怖を抱いていたが。

「それじゃあまずは、キノ——」

「ウルトラキノコースターに行くわよ！」

「何故に?!」

キノコランドに着いてから最初のアトラクション。

まずはキノコースターで肩慣らしでも思っていたのだが、ピーチ姫はマリオの言葉をぶった切る。

最初から飛ばし気味なピーチ姫の言葉にクッパは驚き、思わず叫んだ。

なぜ、最初から一番ハードなジェットコースターに挑むのか。

ナハトは遊園地が初めてなのだからその辺りも考慮するべきではないのだろうか？ そんなクッパの考えにも気づかず、ナハトはコテンと首をかしげていた。

「び、ピーチ姫？ナハトはジェットコースター自体が初めてな訳だから……」
「そういえばそうだったわね。じゃあ仕方がないからキノコースターから行きましよう」

「どんな乗り物なのか楽しみ」

「まあ、楽しいと思えば良いのだが……」

マリオの言葉にピーチ姫はチラリとナハトを見、向かう先を変える。

それでもジェットコースターに行くのを止めない辺りはなんとも言えないが。

ジェットコースターがどんな乗り物なのか分からないナハトは、周りから聞こえてくる音楽に楽しそうにしながらピーチ姫の後に続くのだった。

第122話

猛烈なスピードで景色が飛んでいく。

顔に、体に叩きつけられる風。

下へと落ちていく際に感じる一瞬の浮遊感。

そして加速して曲がる際に受ける強い横向きの力。

「きゃあああああ!!!」

「うおおおおお!!!」

「ぬうううううう?!!?」

「おおおー」

マリオたちは今、風になっていた。

キノコースター、入り口前

やや疲れた様子でマリオとクッパはキノコースターから出てくる。

その後ろから音符が見えそうなほどに上機嫌なピーチ姫と、そこまで疲れた様子が見えないナハトが続いて出てきた。

「き、キノコでこのレベルか……」

「これでも意外と速かったぞ……」

「いやー、一番下のレベルでも楽しめたわね！」

「ジェットコースター、楽しい」

どうやら一番下のレベルのはずのキノコースターでも充分に速かったらしく、ピーチ姫は満足そうにしていた。

ナハトも速さなどに恐怖などはなかったようで、楽しめたようだ。

「じゃあ、せっかくだから次はスーパーキノコースターで段階を踏んでいきましょうか！」

「もつと速くなる！」

「・・・クツパ」

「ああ、行くか・・・」

キノコースターでも中々にダメージがあるのに次はさらに上のレベル。マリオとクツパはさながら戦場に向かう兵士のように言葉少なく話す。

そんな2人を気にせずにピーチ姫は2人の手を掴んで走ってスーパーキノコースターへと向かうのだった。

「も、むり……………」

「きつ……………つい、のだ……………」

「だらしないわねー?」

「ねー」

ベンチに横になりながらマリオとクツパは息も絶え絶えに言葉を漏らす。

スーパーキノコースター。

それはキノコースターの上位番として確かに凄まじいものだった。

マリオとクツパの体感では速度はおそらく倍。

さらにキノコースターにはなかつたうねるようなコースや、急降下の場所が増えていたりもする。

正直に言つて、今までに無いようなほどにマリオとクツパはグロッキーになつていた。

むしろ、それを平然としているピーチ姫の肝の座りっぷりや、遊園地を初体験のナハ

トの平常っぷりがおかしいようにも思えて仕方がない。

とはいえ、ピーチ姫もナハトも楽しんでるのも事実。

楽しそうに笑みを浮かべている2人にマリオとクツパは何も言えなかった。

「ほらほら、まだウルトラが残ってるのよ?」

「4回転!」

「まって……………マジでまって……………」

「せ、せめて……………飲み物を……………」

横になる2人をグイグイと押し、ピーチ姫はウルトラキノココースターへと連れていこうとする。

見るとナハトの目もキラキラと輝いており、ジェットコースターが気に入ったことは誰の目にも明らかだった。

マリオとクツパ、2人は果たして無事にキノコランドで1日を終えることができるのだろうか?

第123話

悪の大王、クツパがピーチ城のお姫様、ピーチ姫を拐った。

それを救いに行くのは我らがヒーロー、スーパーマリオ！

クツパの待ち受けるクツパ城に行くまでにはいくつもの困難が待ち受ける！
時に跳び、時に炎を放ち。

マリオは迫り来るクツパ軍団に向かっていく！

果たしてマリオはピーチ姫を救い出せるのか?!

マリオの冒険がいま始まる！

「……っは?!」

何か懐かしくて見覚えのあるような光景を見ていた気がする。

マリオは不意に意識を取り戻した。

どうやら意識を失って横になっていたらしく、体を起こして周りを見る。

「うくん……」

「クツパ……?」

周りを見渡すと、隣のベンチにクツパが横になつてうなざれている姿があった。

そこでマリオは思い出す。

意識を失う前に何をしていたのかを。

そうだ……

俺はウルトラキノコースターに乗って……

脳裏に甦るのは過去に類を見ないほどの速度と体にかかる引力。

その全てがスーパーパーキノコースターのレベルを越えており、最後の連続4回転で意識を失ったのだと。

おそらくはクツパも自分と同じように意識を失ったのだろう。

マリオは少しふらつく頭を押さえながら、ベンチに座り直した。

「あはははー!!」

「たのしいー」

「ピーチ姫とナハトはまた乗っているのか……」

ふとピーチ姫とナハトの声が聞こえてきてマリオは声の聞こえてきた方を見る。

そこにあるのは先ほどマリオが意識を失ったアトラクション、ウルトラキノコースター。

よく見ればウルトラキノコースターの先頭車両の一番前にピーチ姫とナハトの姿があった。

「自分で飛んだりしているときは平気なんだけどなあ……」

マリオの言う自分で飛んだりしているときと言うのは、マントやタヌキの姿で飛んでいるときのことであり、その際の急降下などは平気なのだ。

恐らくではあるが、自分の意思である程度コントロールできるマントやタヌキと違い、完全にジェットコースターに身を任せているが故に耐えきれないのではないだろうか。

まあ、クツパに関して言えばあそこまでの速度は未経験であろうから耐えられなくても仕方がない。

うなされているクツパの頭を優しく撫でながらマリオはピーチ姫とナハトを待つ。

「ううん……。まだ少し辛いかな……」

「う……」

ふらつく頭を軽く振り、なんとか平常に戻そうとする。

が、ジェットコースターで意識を失った頭に、さらに振ることはあまり良いこととは言えないので、真似はしないように。

マリオが頭を撫でていると、クツパがゆっくりと意識を取り戻してきた。短く声をあげてうつすらと目を開ける。

「目を覚ましたかい？」

「ぬ・・・・・・・・・・、マリ・・・・・・・・・・オ?!・・・・・・・・・・うう」

意識がハッキリとしてきたクツパは自分がマリオに頭を撫でられていることに気づく。

驚いたクツパは跳ね起き、フラリと体制を崩す。

「どうやらいきなり起き上がったことによつて貧血に近い状態になってしまったらしい。」

——ポフリ。

なにかベンチではない柔らかいものの上に頭が着く。

普通に体制を崩したのであればベンチの上に頭が落ちて勢いよく頭をぶつけてし

まっていたらだろう。

しかしそんなことはなく柔らかい何かによって自分の頭は守られた。

「大丈夫かい？」

「な．．．．．、ななな．．．．．、なっ———?!?!」

倒れた頭上から聞こえてくる声。

声のした方へと目を向ければ心配そうに覗きこんでくるマリオの顔。

クツパは理解した。

この頭の下にある柔らかいものはマリオの膝なのだと。

自分は体制を崩してマリオの膝に倒れたのだと。

今の体制が膝枕と呼ばれるものなのだと。

慌てて起き上がろうとするが、マリオが肩を押さえてしまい、起き上がることができない。

「は、離せ?!」

「いま、ふらついただろ。そんな奴を起こせるか！」

マリオ自身は膝枕自体になにも感じていないのだろう。

クツパの動揺など気にせず、マリオはクツパを固定する。

クツパ自身もまだ万全の状態とは言えないため、なすすべなくマリオの膝枕を受けるしかなかった。

第124話

結局、クッパはピーチ姫とナハトが戻ってくるまでマリオの膝の上から動くことはできなかった。

戻ってきたピーチ姫とナハトに見られ、思わず顔を隠してしまったのは仕方がないことだろう。

「まあ、ダウンしてたから仕方ないわね。それじゃあ次のアトラクションに行くわよ」
「休んでたから回復したし、行こうか」

「う、うむ……」
「れっつごー」

クッパがマリオに膝枕をされていたことを仕方ないことと諦め、ピーチ姫は次のアトラクションへと促す。

ピーチ姫の言葉にマリオとクツパはベンチから立ち上がり軽く伸びをする。クツパはまだ膝枕姿を見られたことが恥ずかしいのか、頬に赤みが残っていた。

「それで？次はどこに行くんだい？」

「そうね、ビッグサンダーマツシユルムは最後の方にしたいし……」

「お化け屋敷？」

「お化け屋敷が気になるのか？」

案内図に描かれている一部分を指差すナハトにクツパは尋ねる。

ナハトが指差しているのはお化け屋敷と書かれたアトラクション。

どうやらナハトはお化け屋敷が気になるらしい。

まあ、先ほどジェットコースターを楽しんでいたのだから他のアトラクションに興味を向けてもおかしくはないだろう。

「じゃあ、お化け屋敷に行きましょう」

「お化け屋敷なら……そこまで疲れない、よな？」

「どうだろうな？」

「行くこう」

ナハトの意見を採用し、4人はお化け屋敷へと足を進める。

ジェットコースターのレベルが高かったためにお化け屋敷のレベルも警戒しながら。

「けっこう、ふいんきがあるな……」

「……クツパ、雰囲気な？」

「い、意外と怖がつてるのかしら？」

「おー、おどろおどろしい」

目の前に建っているのはやや薄暗い雰囲気放了つボロボロの建物。

ときおりヒュウツと風が抜けるような音も聞こえてきており、どこか一後退《あとずさ》つてしまいそうな印象をうける。

想像以上のその光景にナハト以外の3人は及び腰になっていた。

「じゃ、行い」

「お、おお！だが、ピーチ姫が楽しみにしていたよな！だからワガハイは後から着いていくのだ！」

「え、ええ！私も楽しみだったのよ！でも、ナハトはマリオと一緒に行きたいんじゃないかしら?!」

「……おい」

さつそくお化け屋敷の中へと向かおうとするナハトの姿に、クツパとピーチ姫は、残念だなー！本当に残念だなー！とでも言いたそうな雰囲気を出しながらマリオを前へと押し出す。

前へと押し出されたことよってナハトに手を捕まれたマリオは首を後ろに向けてやや低い声を出した。

そんなマリオから目を逸らすように、クツパとピーチ姫はわざとらしくお化け屋敷の

外装について話し合っている。

「いやー、それにしてもかなり雰囲気があるのだなー」

「そうねー、今にも本物が出てきそうねー」

「・・・はあ」

「とつげき」

あまりにもわざとらしい2人の様子に、マリオは小さくため息を吐く。

そんな3人のことなど気にも止めず、ナハトはマリオの手を引いてお化け屋敷の中へと入っていくのだった。

第125話

薄暗い廊下。

明滅する明かりに足下がはつきりと見え、不安感が掻き立てられる。

そんな廊下をマリオたちは、マリオとナハト、クツパとピーチ姫の2人2列で歩いて進んでいた。

「けっこう暗いな……」

「何が出てくるのかな」

はつきりと見えない足下に恐る恐る足を進めながらマリオは呟く。

正直に言うと、マリオ自身はお化け屋敷には何度も入った経験があるため、そこまで怖くはない。

どちらかと言うと足下がはつきりと見えないことへの恐怖の方が強かった。

マリオの腕に自身の腕を絡ませながら、ナハトはワクワクとしながら言う。

「く、クツパ……離さないですよ？」

「う、うむ。ピーチ姫もな……」

腰を引かせながら、ピーチ姫とクツパは互いに手を強く繋ぎながら歩く。

誰がどう見ても怖がっているのは明らかで、2人の表情はとても硬い。

お化け屋敷が苦手なのであれば外で待っているという選択肢もあったのだが、マリオとナハトを2人きりにするというのも抵抗があったのだろう。

だからこそ2人は顔を青くしながら絶対にマリオとナハトから離れないように歩いているのだ。

「うおっ?!」

「ひゃあっ」

目の前にいきなり落ちてきた生首に、マリオとナハトは思わず声をあげる。

落ちてきた生首の作りはとても精巧で、薄暗いお化け屋敷の中でなくてもいきなり見

れば本物と勘違いしてしまうかもしれない。

「うん？」

「ぬ？」

なまぬる
生温い風を受け、クツパとピーチ姫は風のした方を見る。

見た先にはなにもなく、ただただ暗い空間が広がっていた。

クツパとピーチ姫何もなかったことにほっと胸を撫で下ろし、前へと顔を向ける。

そして——目の前に腐りきった死体の顔が現れた。

「——きやあああああ?!?!」

「——にやあああああ?!?!」

一拍の間を置き、ピーチ姫とクツパは悲鳴をあげた。

2人の悲鳴があがると同時に死体の顔は消え、そこに何かがあったような形跡はなくなる。

完全な不意打ちにピーチ姫とクツパは軽く腰を抜かしてしまい、がくがくと互いに互いを支えている状態になっていた。

「2人とも大丈夫か？」

「2人、うるさい」

「だ、だだだ、大丈夫……」

「う、うる、うるさいとはなんだ……」

いきなり大きな悲鳴をあげた2人に驚き、マリオとナハトは振り向いてピーチ姫とクツパに声をかけた。

がくがくと震えながらピーチ姫とクツパは答える。

大きな声があがったことが嫌だったのか、ナハトは少しだけ不機嫌そうに呟く。

どうやらお化け屋敷もかなり楽しめているらしく、ナハトはまったく怖がっている様子はない。

第126話

おぼつかない足取りのクツパとピーチ姫の手を引きながら、マリオはお化け屋敷の出口へと向かう。

お化け屋敷に入ってからそこそこに歩いてるので恐らくではあるが出口はもう少しだろう。

ここに来るまでにいくつものお化けが現れ、その度にクツパとピーチ姫は悲鳴をあげていた。

動く骸骨、火の玉、壁から突き出してくる腕、背後からいきなり現れるゾンビ、涙目になりながら驚かそうと頑張っている白い服のピーチ姫そっくりな女の子。

その全てでクツパとピーチ姫は驚いていたのだ。

ちなみにナハトはその全てをととても楽しんでいた。

「大丈夫かい？」

「もうやだぁ……………」

「で、出口はまだか……………」

マリオの問いにピーチ姫は泣きそうな表情を隠そうともせず、クツパも泣いてはいないがとても精神的に参っていることが分かる。

ピーチ姫もクツパも、どちらもお化け屋敷に關してはほとんど入ったことはなく、入ったとしてもテレサたちのいる屋敷がほとんどだった。

それゆえにこのようにテレサ以外のお化けが出るお化け屋敷は苦手なのだ。

「あ、ほら。光が見えたからもう終わりのはずだよ」

「で、出口なのね?！」

「ようやく終わりか!」

「楽しかった」

薄暗い廊下の先から差し込んでいる光。

それが見えたマリオは宥めるようにピーチ姫とクツパに言う。

マリオの言葉にピーチ姫とクツパは顔に生気を取り戻していく。

—— 夢く散らされるのだった。

あと一步で差し込んでくる光のもとへたどり着ける。

そう思つて油断していたピーチ姫とクツパは、横の壁を突き破つて現れたゾンビによつて不意打ちをくらい、悲鳴をあげながら倒れ込む。

2人は完全に腰を抜かしてしまい、プルプルと震えながらゾンビを見る。

しばらくするとゾンビは現れた壁の中へと戻つていき、どんな仕組みかは分からないが、突き破つた壁ももとに戻つていった。

「いやあ、油断してるところにあれば驚いたな」

「予想外だった」

ゾンビが戻つていった壁の仕組みに感心しながらマリオは頷く。

差し込む光で油断させて不意打ちをするなんてなあ。

壁ももとに戻るなんてすごい仕組みだ。

腰を抜かしてしまったピーチ姫とクツパ。

さすがに2人を運ぶにはなりふりを構つていられないので、マリオは2人を両脇にそ

れぞれ抱える。

「ちよ、ちよちよちよ?!」

「そ、その持ち方はやめてくれぬか?!」

「我慢してくれ。どちらか一人を運ぶともう一人が置き去りになっちゃうんだから」

「ふふふ、荷物みたい」

腰が抜けて動けないが、じたばたと動くことはできるため、ピーチ姫とクツパはマリオの両脇でそれぞれ体を動かす。

そんな2人の姿をナハトは笑うのだった。

第127話

お化け屋敷から出て少し移動したところにあるベンチ。

そこに2人の座り込んでいる姿があった。

先ほどのジェットコースターを乗り終えたときと似たような状況。

しかし違う点が1つだけある。

それは座り込んでいる2人のうち1人がピーチ姫だということだ。

「1年分くらいの悲鳴をあげた気がするわ……」

「今ならウルトラキノコースターでも悲鳴をあげないのではないか……?」

座り込みながらピーチ姫とクツパはポツリと呟く。

はいそこ、ピーチ姫はジェットコースター系のアトラクションに乗ったら、結局また叫ぶだろうとか言わない。

「もしも、それが真実だとしても今現在のピーチ姫は本当にそう思っているので、触れないことが優しきなのだ。」

弱っている2人の姿にマリオはジュースを買ってきた手渡す。

「はい。急いで買ってきたからなにを買ってきたか見てないけど」

「いえ、ありが——ぶふうっ?!」

「助か——ごふあっ?!」

マリオから受け取ったジュースを口に含み、2人はほぼ同時に吹き出した。

突然ジュースを吹き出した2人にマリオは驚き、目を白黒させる。

どうやら2人は飲んだジュースに何かあったらしい。

「げほっ、げほっ、げほっ……」

「えふっ、えふっ、えふっ……」

「マリオ!なにを買ってきたのよ!／＼のだ!」

2人は思い切り咳き込みながら、口の中のジュースを人目も気にせず吐き出す。

口の中に残ったジュースを全て無くすと、2人はマリオに掴みかかりそうな勢いで問い詰めた。

その際にマリオに飲んだジュースの缶を突きつけるのを忘れずに。

「いや、だから買ったものを見ないで持ってきたんだって……」
「だとしてもこの味は酷いわよ!」ストロングヴェリー味・プロテイン配合「ってなんなのよ?!」

「ワガハイの方もなのだ!」青汁さいだあ「とはどういうことなのだ?!」

2人の突きつけるジュースの缶。

その缶を見てマリオは驚きの表情を浮かべる。

片方はイチゴからムキムキの両手両足が生えているイラスト。
もう片方は緑色の缶に小さな白い丸がいくつも描かれていた。

「……なにこれ?」

「こつちが聞きたいのだけど?!」

「あつちは似たようなジュースばかりだったよ」

啞然としてマリオは思わず言葉を漏らす。

自分がこんな変なジュースを買ってきていたとは思ってもみてもみてもなかったのだろう。

そんなマリオを見ながら、ナハトはマリオがジュースを買ってきた一角を指差しながら言うのだった。

第128話

口直しにちゃんとしたジュースを見つけ、ピーチ姫とクツパはようやく一息をつく。

ジュースを買うためにマリオが走り回り、途中で亀のような生き物とつぼみを背中に乗せた生き物、そしてオレンジ色のドラゴンを連れた少年に偶然拾った「大きいきのこ」と「サイコソーダ」、使い道の分からない「きんのたま」と「ミックスオレ」をそれぞれ交換してもらったのだが、気にしなくてもいいだろう。

交換する際に少年が他にもなにかを渡そうとしていたのだが、急いでいたマリオはお礼だけ言つてそのままピーチ姫たちのもとに戻つたのだつた。

「ふう．．．．．。もう、さっきのやつは飲みたくないわ」

「もしも飲ませたら倍の量を飲ませるのだ．．．．．」

「うえつぷ．．．．．。わ、分かつたよ．．．．．」

ピーチ姫とクツパは「サイコソーダ」と「ミックスオレ」をそれぞれ飲み、マリオを軽く睨む。

睨まれているマリオはぐったりと倒れていた。

倒れているマリオの近くには先ほどピーチ姫とクツパが飲んだ「ストロングヴェリー味・プロテイン配合」と「青汁さいだあ」の缶が転がっている。

缶の中身はなく、逆さにしたとしても雫一滴落ちてこないだろう。

「すごい味だった……」

うええ……とでも言いたそうな表情を浮かべながらマリオは立ち上がる。

どうやら2人の飲んだジュースを飲まされたらしい。

なお、ジュースを飲ませる際に間接キスをしているのだが、あまりにもひどい味だったためにそこまで思考が回らなかったのだろう。

「さ、次はどこに行こうかしら？」

「シアターはまだ始まってない」

「案内図をもう一度見てみるのはどうだ？」

ナハトはシアターが気になるようだが、シアターの始まる時間はまだ先のようだ。クツパの提案にピーチ姫は案内図を開く。

遊んだアトラクションはジェットコースター3種類と、お化け屋敷。

キノコランドにはまだ他にもアトラクションはあるので、飽きることはないだろう。

「そうね。一回ゆったりとしたものにしましょう」

「そうだな」

「メリーゴーランドとか？」

「それなら俺は見てるだけにしようかな」

キノコランドのメリーゴーランドには普通の馬以外にもヨツシーやキノコ型の馬車などが置かれている。

3人の言葉にマリオは自分はアトラクションに乗らないことを言った。

マリオの言葉に、3人は驚いた表情を浮かべてマリオを見る。

「いや、マリオは誰と乗るかを決めるのだ」

「ええ、誰か1人と組むのよ」

「マリオが決めて」

「え。・・・」

突然の選択。

期待するような3人の視線を受け、マリオは頭を悩ませるのだった。

第129話

メリーゴーランド。

それは馬に似せて作られた上下する席や、馬車に似せて作られた席が存在する回転する足場のアトラクション。

キノコランドでは馬以外にもヨツシーに似せて作られた席が存在する。

メリーゴーランドを背に3人の美女に選択を迫られる。

当事者になるまでは少しだけ羨ましく思っていたが、実際になつてみるとここまですこまでプレッシャーを受けるものだとは思つてもいなかった。

目の前の3人、ピーチ姫、クツパ、ナハトの3人を見ながらマリオは頭を悩ませる。

3人からの好意は理解している。

だが、その好意こそがマリオが頭を悩ませる理由でもある。

マリオは言つてしまえば優しい男だ。

……いや、はつきりと言いつてしまおうか。

キノコ王国の英雄、マリオ・マリオは“ヘタレ”である。
ちなみにマリオのファミリーネームがマリオであることを知っているものは少ない。

「えつと……」

「マリオ、あなたが一緒に乗りたいと思った相手を選べばいいのよ」

「別に……ワガハイではなくても構わないのだ」

「マリオ、一緒に乗ろう」

マリオが悩んでいることに気づいたピーチ姫は優しく声をかける。

クッパは少しだけ寂しそうにしながら、他の2人を勧めており、ナハトはいつも通りの様子だ。

「お、俺は……」

3人のうち誰を選べばいいのか。

どうしようもないほどにマリオは悩む。

誰か1人を選ばなければならないことは分かっているのだが、誰を選べばいいのか。

そして、1人を選んだ場合に他の2人とはどうなってしまうのか。

それらのことがどうなるか分からないことが怖くてマリオは1人を選ばずにいた。

「う、ううう……」

「……なんて、困らせてごめんなさいね。今回は4人で馬車のやつに乗りましよう」

呻くマリオにピーチ姫は一転して馬車に乗ることを提案する。

ピーチ姫の言葉にマリオとクッパは少しだけ驚いた表情を浮かべた。

「マリオ、あなたを困らせることはしたくはないの。……でもね。私たちは、い

つかあなたに自分を選んでもらいたいと思っっているのよ」

「……ごめん」

そう言ってピーチ姫はクッパとナハトの手を引いてメリーゴーランドの馬車の中へと入っていった。

3人の後ろ姿を見ながらマリオは小さく謝るのだった。

なお、馬車の中に入ったら入ったで座る位置をじゃんけんて争うことになったのだが、気にしなくてもいいだろう。

マリオがピーチ姫、クツパ、ナハトの3人から誰を選ぶのか。

いや、むしろマリオは1人を選ぶのか。

それはまだ誰にも分からない。

第130話

メリーゴーランドを乗り終え、マリオはトイレに行くために1人で行動していた。メリーゴーランドに乗る前にピーチ姫に言われた言葉がマリオの心の中でしこりのように残っている。

“私たちは、いつかあなたに自分を選んでもらいたいと思っているのよ”

これはマリオ自身が自分で心から決めないといけないこと。

それが分かっているがゆえにマリオは誰にも相談できずに今までできてしまったのだ。

「はあ………」

トイレから出て、近くにあった自販機からジュースを買う。

買ったジュースを軽く飲み、マリオはため息を吐く。

マリオ自身も自分がヘタレであることは自覚している。

自覚をしているのだが、どうにも変えることができないのだ。

「あら？ マリオ、クツパはどうしたの？」

「え？」

ジュースを飲んでいると、ピーチ姫がナハトを連れてメリーゴーランドから戻ってきた。

ピーチ姫は不思議そうにマリオに尋ねる。

なぜかクツパの姿はなく、どこかに行っているようだ。

「クツパがどうかしたのかい？」

「えっと、あなたがトイレに行ったあとにクツパも向かったのよ。だから、てつきり合流しているのかと……」

どうやらマリオがトイレに向かったあとにクツパもトイレに向かっていたらしい。

しかし、マリオはトイレから出てしばらくここにいたがクツパの姿を見えない。

仮にトイレに入っているときにクツパが来たのだとしても出てくる姿がないのはお

かしいのではないだろうか。

「……ちよつと探してくるよ」

「そうね、合流できていないのも心配だし。お願いするわね」

ピーチ姫の言葉からクツパが心配になり、マリオはクツパを探しに行くことにした。そこまで長い時間トイレに行っていたわけではないので、合流できていないのはさすがにおかしいだろう。

マリオの言葉に、ピーチ姫も心配になったのか頷いてマリオを見送る。

「クツパはどこに行つたんだ？」

トイレからメリーゴーランドまでの道を歩きながらマリオはクツパを探す。

まっすぐにトイレに向かったのであればこの道の途中にいるはずなのだが、どこにもその姿は見当たらない。

「いつそ、迷子案内をしてもらおうか……ん？」

「いい加減、しつこいのだ！」

遊園地ではぐれた場合の最終手段、迷子案内を使おうかとマリオが悩んでいると聞きなれた声が聞こえてきた。

どこから声が聞こえてきているのか。

マリオはキヨロキヨロと周囲を見渡して声の主、クツパを探す。

そして、マリオはクツパの姿を見つけた。

何人かの男に絡まれている状態で。

第131話

何人かの男たちに囲まれ、クツパが話しかけられている。

クツパの表情はともイライラとしており、とても不機嫌なことがうかがえた。

どうやらクツパはナンパを受けているらしい。

「いい加減にするのだ！ワガハイは貴様らに構っている暇などない！」

「いーじゃん、俺たちと遊ぼうぜー？」

「一緒にいた友達も呼んでさー？」

どうやらキノコ王国の外から来た観光客のようで、キノコ王国では見覚えのない男たちだった。

クツパがナンパをされていることに苛立ちを覚え、マリオは足早にクツパのもとへと向かう。

「クツパ、ここにいたのか」

「マリオか！心配をかけたみたいですまぬな」

男たちとクツパの間に割り込むように体を入れ、マリオはクツパに話しかける。

マリオが現れたことに、クツパは安堵したような表情をして答えた。

自分たちがナンパをしているときにいきなり現れ、ナンパしていた相手を奪われる。

恐らくは今までそんな経験をしたことがなかったのだろう。

男たちは苛立たしげにマリオを睨み付ける。

「おい、おっさん。急に来て割り込んでくんじゃねーよ」

「この子とは俺らが遊ぶんだよ」

「さっさと消えろよ」

マリオのことを睨み付けながら男たちはマリオを威圧するように囲む。

見たところ男たちの年齢は10代後半辺り、髪の色や身に付けているアクセサリー、そして言動などから、不良のようなものだとということがうかがえる。

男たちにおっさんと呼ばれたことに少しだけへこみつ、マリオは男たちを睨み返す。

「お？やる気？」

「そんなにその子に良いとこ見せたいわけ？」

「おっさんが無理すんなよ」

マリオが睨み返してきたことに、男たちは少しだけ意外そうな表情を浮かべるが、すぐに笑いだす。

男たちはマリオのことを笑いながらクツパの体を舐め回すように見る。

男たちの視線に気持ち悪さを感じとり、クツパは思わずマリオの背後に隠れた。

「隠れなくてもいいじゃん！」

「そーそー、どうせすぐに一緒に遊ぶんだからさ」

「そーだ、俺たちがおっさんをどうにかしてる間にお友達を呼んできてよ」

あまりにも身勝手な男たちの言葉にクツパはマリオの背後に隠れながら強く歯噛み

する。

なぜ、自分がこんなにも不愉快な視線を向けられねばならないのか。

なぜ、こんな見ず知らずの男たちにピーチ姫たちを会わせねばならないのか。

なぜ、こんな魅力を感じない有象無象の男たちにマリオを悪く言われなければならないのか。

それでも、ここで自分が何を言っても状況は好転しない。

それが分かっているからこそ、クッパは今にも爆発しそうな激情をマリオの服を掴みながら堪えていた。

男たちは知らない——

——自分たちが誰に対してナンパをしていたのかを。

男たちは知らない――

――自分たちが勝てると思っている目の前の男が誰なのかを。

男たちは知らない――

――自分たちの言葉が誰の逆鱗に触れかけているのかを………

第132話

目の前にいるのは3人の男たち。

自分の背後にはクツパ。まもりたいひと

ゆえに自身に退くことは許されず、クツパを見捨てることはない。

マリオは自分を睨み付けてくる男たちを鋭く睨み返した。

「へっ、おっさんはさっさといなくなってくれ、よー！」

男たちの内の1人がそう言ってマリオに向かって殴りかかってくる。

男の拳はそこそこに早いもので、ある程度の動体視力がないものだと避けるのは難しいだろう。

が、マリオにとっては虫が止まるようなスピードに等しい。
マリオは迫ってくる拳をあつさりと掴み、男の動きを止めた。

「んな?! 離せよ、おっさん!」

「ああツ?!」

「トシリんのパンチが止められたツ?!」

男の拳を止められたことがそれほどまでに驚いたのだろう。

殴りかかってきた男はマリオの手から自分の拳を引き剥がそうと強く引く。

しかし拳はピクリともせず、マリオの手から逃げることはできない。

「誰が、誰と、遊ぶって?」

「は、離せ?!」

「友達も、呼んで、来いって?」

「ぎっ?! がああああ?!?!」

「なぜ、お前たちに、そんなことを決められなければならないんだ!!」

「ぐぎいつ?! はな、離して、離してくれええええ?!?!」

静かに、淡々とマリオは言葉を呟いていく。

その言葉に合わせるように手の力は増していった。

ミシリ、そんな音が聞こえてきそうなほどにマリオは力を入れる。

あまりにも強いマリオの力に男は必死に叫びながら自分の手を引き抜こうともがく。

「なんなんだよ、このおっさん?!」

「くそつ、トシリンを離せ!」

拳を掴まれている男を助けようと他の2人の男たちがマリオに殴りかかる。

しかし、マリオは掴んでいる拳を引っ張り、殴りかかってきた2人の進行方向に掴んでいる男を動かし、壁にした。

目の前に仲間が来たことにより、男たちはとっさに動きを止める。

「うわああああ?!」

「な、なんて馬鹿力だよ?!」

仲間の体があっさり動かされたことに男たちは恐れ、警戒して少しだけ後退あとずさる。その間も掴まれている男は悲鳴をあげているのだが、一度でも恐れてしまえば近づこうという考えは浮かばないだろう。

「二度とこいつに近づくな」

「分かった。分かったから手を離してくれ?!」

マリオの言葉に、拳を掴まれている男は懇願するように叫ぶ。

男の目の端には涙が溜まっており、拳に力を入れることはしばらくはできないだろう。

男が泣きながら頷いたことを確認すると、マリオは男の拳を乱暴に振り捨てる。

拳を解放された男は、仲間たちのもとへと移動すると、拳を押さえながらマリオたちの方を見もせず逃げ出していった。

第133話

逃げ去っていく3人の男たちを見ながらマリオはホツと息を吐く。

あそこまで脅しておけばもう絡んでくることもないだろう。

・・・・・・・・そういえば、なんでこんなに怒ったんだろう。

なんでか分からないけど、クツパがナンパされているのがすごく嫌だった・・・・・・・・

あの気持ちは——

「マリオ、迷惑をかけてしまったな」

「ん、いや、大丈夫だよ。早くピーチ姫たちと合流しよう」

「ま、マリオ・・・・・・・・?!」

なにか、大切なことに気づきそうだったのだが、クツパに話しかけられたことにより

考えを途切れさせる。

クツパが無事だったことに安堵し、マリオはクツパの手を引く。

マリオに手を引かれ、クツパは少しだけ恥ずかしそうに頬を赤く染めた。

「あ、悪い。あまり意識せずに手を握ってた」

「嫌というわけではないのだが……。その、人前で恥ずかしくて、な？」

マリオは気づいていなかったが、意識せずにクツパの手を握っていたという行動。

それはマリオの中のある感情が根底にあった。

その感情にマリオが気づき、向き合うことになるまでもう少し……

クツパと手を繋ぎながら、マリオはピーチ姫たちのもとへと合流する。

マリオとクツパが手を繋いでいることに気づいたピーチ姫とナハトは、合流すると同

時にクツパを両脇から固めてマリオから引き剥がした。

「それで？クツパはどこにいたの？」

「メリーゴーランドから少し離れたところにいたんだよ。3人組にナンパされててね」
「いま思い出しても腹立たしいのだ」

クツパがどこにいたのか。

気になったピーチ姫はクツパを捕まえながら尋ねる。

捕まっているクツパが気になりつつ、マリオはクツパに何があつたのかを答えた。
マリオの言葉にクツパは先ほどの3人組を思い出したのか、目付きを鋭くさせる。
が、ピーチ姫とナハトによって捕まっているためにどこか間の抜けた姿に見えた。

「マリオ、もう少しでシアターが始まる」

「え、ああ、もうそんな時間だっけ」

クツパを捕まえながら、ナハトはあくまでマイペースに言う。

あまりにも自由すぎるナハトの言葉にマリオは一瞬だけポカンとするが、時計を確認

して頷く。

「えつと……じゃあ、クツパとも合流できたし、シアターに行こうか？」

「うん」

「ええ」

「そうだな」

無事に全員が合流し、他に問題となるようなこともない。

それならばナハトの行きたがっているシアターに行っても問題はないだろう。

マリオの言葉に3人は頷きシアターへと向かう。

ピーチ姫とナハトはクツパを捕まえながら……

第134話

キノコランドオリジナル映画館、キノコシアター。

ここではキノコランドの映画制作部が作成した映画が公開されており、日によって異なる映画が公開される……らしい。

まだ今日が初開園日なため、その辺りは案内図に書いてある情報しかないので確証はない。

「着いた」

「へえ、シアターはキノコの形をしているのね」

「今やっているのは……少年と強欲の獣？ふむ、ファンタジー系なのか？」
「始まるのは、あと10分後みたいだな」

キノコシアターの入り口に貼られているポスターを確認し、4人は口々に言う。

どうやら映画が始まるのはもう少ししてかららしい。

4人は始まるまで近くのベンチで休憩をすることにした。

「短いけどちょっとした休憩ね」

「まあ、メリーゴーランドでも休憩にはなっていたかもしれないがな」

「シアター、待ち遠しい」

「どんな内容の映画なんだろうな？」

マリオを中心とし、右側にピーチ姫、左側にナハトが座り、マリオの後ろのベンチの背にクツパは寄りかかる。

そんな4人の光景にキノコランドのスタッフや、男友達と遊びに来ていた独身男性たちは揃って舌打ちをする。

当然ながら舌打ちはマリオ以外にも聞こえており、舌打ちが耳に届いた瞬間に3人は周囲を鋭く睨み付けた。

「……ピーチ姫、処す？ 処す？」

「いやいや、ワガハイの軍団を使った方が楽なのではないか？」

「いえ、給与を8割カットで良いんじゃないかしら?」

「いや、恐ろしいことを言わないでくれないか?!」

あまりにも物騒な3人の言葉にマリオは思わずツツコミを入れる。

まさか自分に舌打ちをしただけでそこまで発展するとは思わなかったため、マリオは慌てて3人を止めた。

ちなみにマリオは知らぬことだが、ピーチ城でのパーティーの際に舌打ちをしたキノピオたちの給与をは2割ほど減らされている。

8割カットにならなかつたのは一重ひとえにキノじいの尽力のお陰とだけ言っておこう。

ピーチ姫たちの言葉が聞こえたのか、近くにいた男性たちは蜘蛛の子を散らすように離れていく。

男性たちのそんな姿を見たマリオは心の中で謝罪をした。

「まあ、良いわ。とりあえずキノコシアターで映画を見ながら食べたりするものを買っちゃわない?」

「む、売店があつたのか。ならワガハイも行こう」

「何が売っているのか気になる」

そうやって3人はキノコシアターの中にある売店へと向かっていった。女性陣が離れたためか、刺々しい雰囲気を出していた男性陣の雰囲気も少しだけ弱まったように感じる。

「ん、そろそろ時間か。なら、俺も何が売ってるか見てこようかな」

キノコシアターの中の売店へと向かった3人を見、時計を確認すると、映画が始まるまであと3分ほど。

それくらいなら売店で何かを買ってから椅子に座ればちょうど良いくらいだろう。そう考えたマリオは、ベンチから立ち上がると3人の後を追うようにキノコシアターの中へと入っていった。

第135話

暗い部屋の中。

投影機から照射された光が目の中のスクリーンにあてられる。

映画を見る際の注意点、禁止事項などをスクリーンに映し出す。

やがて、スクリーンに映像を映し出していた光は徐々に光を弱めていく。

そして、光が完全に消え、ブザーの音が鳴り響いた。

映画の始まるの合図だ。

いつか、どこか遠い世界の片田舎。

そこは様々な生き物や道具を召喚して使役する「召喚術」が発展している世界。そして、1人の青年が「召喚術」を使おうとしていた。

「我が縁えにしに基づきもとここに現れろ！」

青年の言葉と同時に目の前に魔方阵が出現する。

魔方阵は光を放ちながら回転し、何かを形作っていく。

やがて光が収まると、青年の目の前には一匹の美しい獣の姿があった。

「これが……俺の召喚した物？」

【私を呼び出したのはお前か】

まじまじと獣を見てみると、頭の中に誰かの声が響いてきた。

慌てて周囲を見渡してみても誰もおらず、いるのは目の前のこちらを見ている獣だけ。

もしや、と思いながら青年は獣に話しかけた。

「お前が話しかけたのか？」

【ふん、他に誰がいるというのだ。よもやこんなにも間の抜けた男に呼ばれるとはな】

フン、と鼻から息を吐き、獣は頭を振る。

バカにしたような仕草なのだが、どこか様になっており、そこまで不快感は感じなかった。

【それで、私を呼び出した理由はなんだ】

「俺はこの世界を旅したいんだ。だから俺と一緒に旅をしてほしい」

獣の問いに青年ははつきりと答える。

まさか素直に答えるとは思っていなかったために獣は一緒呆け、笑いだした。

【ふはっ、ははははは！まさか、まさか私を呼び出して旅についてきてほしいとは！】

「な、なにかおかしいかよ……」

笑いだした獣に青年は不満そうに尋ねる。

しかし呼び出された獣からすれば拍子抜けしたのも事実。

なぜなら獣は………

【この私を、 “強欲の獣” と呼ばれたこの私をそんな理由で呼ぶとは！】

「お前のことなんて知らねえよ。それに、そんな二つ名みたいなものがあるってことは強いんだろ。なら、一緒に来てもらった方が助かる」

そう。

獣には “強欲の獣” という二つ名があつた。

欲したものは全て手に入れ、己おのが欲求を満たす。

その姿からついた呼び名だ。

【いいだろう。退屈をしていたところだ。貴様の旅に私もついていくとしよう】

「よし、決まりだな」

自身の呼ばれていた「強欲の獣」という名前を聞いても怯えもしない。

そんな青年に興味が湧いたのか、獣は少しだけ気分良さげに青年の旅についていくことを決める。

いま、ここから彼らの旅は始まるのだった。

第136話

召喚した獣をつれ、青年は旅をする。

時に恐ろしい化け物と戦ったり。

時に獣と喧嘩をしたり。

時に盗賊に襲われている町を救ったり。

様々なところを旅していく。

旅を続けていくにつれ、獣と青年の絆は深まっていった。

「今までけっこう色々なところを見てきたな」

【私の助けのお陰だな】

青年と獣は今までの旅路を振り返る。

旅を始めたときはあまり仲も良くはなかったが、今ではすっかり仲も良好だ。

「さて、次はどこに行こうか？」

【そういえば、世界を壊すと言っていた者がいたな。そいつをなんとかしておいた方が
良いだろう】

青年の言葉に獣はふと思い出したように言う。

思い出すのは少し前に世界に向けて宣言していた男の姿。

空にいきなり男の姿が投影されて誰もが驚いたのだ。

獣の言葉に青年は頷き、男のいる塔へと向かうことにした。

世界の破壊を目論む男のいる塔、最上階。

ここに来るまでにくつもの難関があった。

それでもその全てを青年と獣は力を合わせて乗り越えてきた。
そして、青年と獣は男のいる部屋へと足を踏み入れる。

「おや、侵入者というから警戒をしたが……この程度のものか」
「うわっ?!」

【なんだ?!】

青年と獣の姿を確認した男は、つまらなそうに息を吐くと腕を軽く振る。

男が腕を振ると青年と獣の目の前に光の筋が突き刺さった。

突然突き刺さった光に青年と獣は驚き、後ろに跳び退る。

男が操ったのは光。

光の攻撃速度に青年と獣は動くことができない。

「ここで見ているがいい。世界の終わりへの準備は整った」

「くそっ……」

【気に入らぬ……】

動けない青年を放置し、男は世界を破壊する準備は終える。動けば光に貫かれる。

それが分かっているから青年は動くことができなかった。男と青年を見ながら獣はポツリと呟く。

【気に入らぬな！私は強欲の獣！故に欲した物は全て手に入れる！】
「なにを?!」

「馬鹿め、光に飲まれるが良い」

そう言つて獣は男に向かって走り出した。

とつぜん走り出した獣に驚き、青年は叫ぶ。

そして、獣に向けていくつもの光の筋が放たれた。

「ふん。無駄なことをしたな」

光の中に消えた獣を男は鼻で笑う。

その直後、獣の咆哮が部屋の中に響き渡った。

【うおおおおお!!】

「馬鹿な?! あり得な——」

光の中から飛び出してきた獣は、油断していた男に飛びかかると思い切り前足を叩きつける。

凄まじい勢いで殴られた男は驚愕の表情を浮かべたまま壁に殴り飛ばされ、意識を失った。

「おい! 大丈夫か?!」

光に飲まれ、ボロボロとなった獣に青年は駆け寄る。

しかし、獣には青年の言葉に答えることができるほどの力は残っておらず、力なく尾を揺らした。

ああ……

私は死ぬのか……

体から力が抜けていくのを感じながら獣は思う。

ふふ．．．．．

強欲と呼ばれたはずの私が．．．．

不思議だ．．．．．

「しつかりしろ！いま、治療をする！」

【もう、充分だ．．．．．】

いままで、欲しいと思ったものを全て手に入れてきた。

持ち主がいるなら持ち主から奪い、自らの物にした。

それでも、心のどこかで埋まらないなにかがあった。

【私は．．．．．いま、とても満ち足りている．．．．．】

「なにを．．．．．」

ふふ、泣きそうな顔をするな．．．．

私は幸せだった。

いままで埋められなかった心の空虚さが、お前との旅路で埋められたのだ。

だから、もう充分なんだ……
今にも泣き出しそうな青年の顔を見ながら、獣はその意識を闇の中へと沈めていった。

沈んでいく。

闇の中へ。

光の中へ。

沈んでいく……

【これが……死か……】

何も見えない。

何も感じない。

何も触れられない。

【ああ、心残りが1つだけあった……】

叶うならば私の本当の姿をあいつに見せてやりたかった。

獣の姿は強欲に奪い続けた結果、神に呪われた姿。

あいつは獣の姿でも美しいと褒めてくれた。

だからこそ本当の姿も褒められたかった。

意識が……途切れ……る。

眠……い……

『獣は討たれた』

『否、獣はすでに獣にあらず』

『汝ら世界救済を成し得たり』

『なればこそ報奨を与えよう』

気がつけば、草原に立っていた。

なぜここにいるのかはまったく分からない。

さらに言えば自分は間違いなく死んだはずだ。

「なにが……?!」

声を出し、驚く。

自分の喉を使ってしゃべることができない。

自分の手がある。

自分の体がある。

自分のもとの姿になっている。

「どうなっているんだ……」

なぜ自分は獣の姿からもとの姿に戻っているのか。

考えてみてもさっぱり分からない。

不意に何かを感じ取り、ある方向に体を向ける。

向こうから………何かを感じる。

行かなければならない………

そう思ってしまうと止められない。

獣だった女はまっすぐに走り出した。

走り出してしばらくすると、小さな家が見えてきた。

行かなければならないという感覚は家の中から感じる。

家が気になり、獣だった女は扉を叩く。

その際に獣だった頃の癖で扉の角を足で3回叩いてしまった。

扉を叩くと家の中からドタバタと者が崩れるような音が聞こえてきた。

「獣?!」

バンツ！と音をたてて扉が開かれる。

中から現れたのは獣を召喚した青年。

青年の姿を見た獣は嬉しさのあまり青年を抱き締める。

「き、君は……」

「また、お前と2人で旅に行きたいんだ」

獣の話をしよう。

あらゆるものを欲し、本当に欲しいものを見つけられなかった獣の話を。

女の話しよう。

自らの獣に討ち勝ち、自身の本当に欲しいものを見つけられた女の話。

第137話

映画が終わり、部屋の明かりが点いていく。

映画を見ながら食べる予定だったポップコーンは半分近く残っており、飲み物も半分ほど残っている。

物を飲んだり食べたりする暇などないほどに熱中をしてしまったのだろう。

ちらりと周りを見ると似たような状態の人が何人も見られた。

相当に感動したのか、中には涙を流している人もいる。

「ふう………。おもしろかった………」

簡潔に言っただけは大当たりだろう。

ナハトがシアターに行きたいと言ってくれて本当に良かった。

椅子に座りながらマリオは感嘆の息を吐く。

他の人たちもまだ余韻に浸っているのか、立ち上がる人の姿はない。だが、いつまでもここにいるわけにもいかないだろう。

マリオは座っていたい欲求を抑え込み、椅子から立ち上がった。

「3人とも座っていたいのは分かるけど外に行こう」

「え、ええ……ぐすつ」

「おもしろかった」

「引き込まれたのだ……」

マリオに促され、3人は椅子から立ち上がる。

マリオが立ち上がったことが切っ掛けとなったのか、他の椅子に座っている人たちの中からもちらほらと立ち上がる人たちが出てきた。

少しだけ早めに出ないと出口付近で詰まってしまう可能性もある。

そう考えたマリオは少しだけ歩く速度を上げて、部屋から出た。

「そうだな……、お昼時だしレストランに行こうか。映画の感想も話せるし」

「そうね。私は賛成よ」

「お腹も空いてきた」

「ワガハイも賛成なのだ」

キノコシアターを出て、時計を見ると時刻は11時45分あたり。

そろそろ昼食を取らなければ長時間並ぶことになってしまいそうだ。

さすがにそれは他のアトラクションに乗る時間を圧迫してしまうので避けたいところである。

マリオの提案に3人は頷き、レストランへと向かうことにした。

キノコランド、園内レストラン。

ここでは和、洋、中の様々なキノコ料理をメインで扱っており、有名なレストラン //

オレンジーノ”からも数名ほどシェフを呼んでいるらしい。

レストランに着いたマリオたちは案内された席に座り、メニューを見る。

「イロドリアイランドのメニューもあるのね？」

「ふむ、ワガハイは食べていないから分からぬな」

「マンマミーアピザ？」

「あ、それは俺がメニューを考えたやつ」

他のメニューとは違った雰囲気のパizzaにナハトが首をかしげていると、マリオは自分が作ったものだと教える。

他にもハートフルラテや、マグマバーガーなど、見覚えのあるメニューが書かれていた。

「そうね……。私は”ハートマッシュシウパスタ”にするわ」

「むむ……。ならワガハイは”キノコハンバーグ”にするのだ」

「私は”マンマミーアピザ”」

「決めるの早いなあ。なら俺は”彩りキノコラーメン”にしよかな」

食べるものを決めたマリオたちは店員に注文する。

あとは料理が来るのを待つだけだ。

なお、店内の少し奥の方で大量に食べ物食べているピンク色のボールのような生き物は見ないことにしている。

念のために言っておくと、ピンク色のボールのような生き物と一緒に来た方が食材の方を提供してくれたため、食材が足りなくなるといふことはない。

こら、ナハト。

そつちを見ちやいけません！

第138話

それぞれの食べたいものを注文してからしばらくして、マリオたちの前に料理が運ばれてきた。

ハートの形に切つてあるキノコの乗った Pasta。

スーパークイノコの形に作られたキノコの乗ったハンバーグ。

マリオが考案したピザ。

数種類のキノコが乗ったラーメン。

どれも良い香りがして、とてもおいしそうだ。

全員の料理が来たことを確認し、4人は手を合わせて料理を食べ始めた。

「さっきの映画はおもしろかったわね」

「うむ。ハッピーエンドで良かったのだ」

パスタを口に運びながらピーチ姫は先ほど見た映画の感想を言う。青年と獣が徐々に仲良くなっていく姿。

お互いにお互いの危機を助ける絆。

そして青年に惹かれていく獣の心。

それらが組み合わさったとてもおもしろい映画だった。

「そういえば、最後に流れてきた誰かの声はなんだったと思う？」

「あの、どこかぼんやりとした声？」

「そうそれ。俺は『世界』だったんだと思うんだけど」

「そうかしら？ シンプルに『神』だったと思うんだけど……」

「報奨とか言っていたな。ワガハイも『世界』の方だと思うのだ」

映画を見ていて気になった点をマリオは他の3人に尋ねてみる。

獣が意識を闇の中に飲まれていって、意識を失ったシーンで聞こえてきた声。

それは男のようにも女のようにも聞こえる不思議な声だった。

マリオたちはそれぞれ意見を出し合い推測をする。

そんなマリオたちに1人の青い服を着た少年が近づいてきた。

「はん、あの声に意味はない。そんなものよりも見た奴が覚えておけばいいのは誰もが感動するようないきなりな物語だったということだけだ」

「うん？」

「急に來てなんなのだ？」

少年はマリオたちを鼻で笑うとどこか皮肉氣に言う。

喧嘩を売るような少年の物言いにマリオたちは少しだけムツとする。

「ハッピーエンドの何が悪いのよ。良いじゃない、幸せになれたんだからー」

「——は、あんな物語で満足か。それはそれは幸せなことだな？ 誰もが喜ぶようなありふれた物語、誰もが感動するようないきなりな物語、誰もが、誰もが………なんとつまらないことだ！」

ピーチ姫が怒りながら言うと、少年はそんな怒りなど犬にでも食わせておけども言いたげに鼻で笑う。

少年は演説でもするかのように大袈裟に体を動かす。

「誰もが楽しめるようなものになんの価値がある？そんなものよりも旨い料理でも持ってきてくれ。その方が何倍も価値があるに決まっている。．．．ん、電話か」

不意に少年のポケットから着信音がなる。

どうやら電話がかかってきたようだ。

少年はポケットからケータイを取り出し電話に出た。

「なんだ、もう仕事は終わっているだろう。地獄のような締め切りも終わり、今は天国のような自由を謳歌しているのだ。そんな俺に仕事のことを思い出させるのか、鬼め！」

電話に出るや否や、少年は通話相手に向けて嫌み混じりに話し始めた。

この様子からして普段からこのようになしやべり方なのだろう。

話している少年はどこか生き生きとしていた。

「なに？次の映画の脚本だと？———そうか、そうかそうか、つまりこれはあれだな？俺にまた地獄へと落ちろと言っているのだな？良いだろう、ならば誰もが見た瞬間に涙無

くしては見れないような悲劇を書いてやろう！——なんだ？ 悲劇を書くな？ なんと
いうことだ、脚本を書くことを強要され、さらには自由に書く権利すらないとは、まさ
に地獄！」

さらりと少年は言っているが、どうやらこのキノピオは映画の脚本を書いているらし
い。

正直に言つてこんなにも皮肉屋な少年に映画の脚本が書けるとは、マリオたちは到底
思えなかった。

マリオたちは食事がまだ終わっておらず、少年も離れる様子はない。

「——ふん、まあいい。今回の獣の脚本も駄作だ。ならば似たような駄作を書いてや
ろうではないか。そうだな、海草に転生した兄貴が春の木の妹を虫から助ける話しなん
てどうだ？ これなら誰もが笑い転げてしまうだろう！ 細かい話しは後で聞いてやる。俺
は今日の残り少ない自由を噛み締めるのだ！」

そう言つて少年はケータイの通話を切る。

恐らくは先ほどマリオたちが見た映画の脚本もこの少年が書いたのだろう。

意外な事実にはピーチ姫たちは少しだけ驚いた表情を浮かべる。

「なんだ、俺が脚本を書いていることが意外だったか？ま、貴様らの関係性は分からんが話のネタにはなりそうだな。ネタ料だ、ハートフルラテを奢ってやろう。さらばだ、悩み多き色男に色女！せいぜい人に恋し、愛に迷い、生に苦しむが良い！無駄に使える時間はないぞ！」

それだけを言い残して少年は歩き去っていった。

自分勝手に言いたいことだけを言つて、満足そうにいなくなる。

自由すぎる少年にマリオたちは呆然とすることしかできなかつた。

第139話

青い服を着た少年が去り、マリオたちのテーブルにハートフルラテが4つ運ばれてくる。

「どうやらちゃんと注文をしていたらしく、驚きつつマリオたちはハートフルラテを受け取った。」

「………なんだったのかしらね？」

「映画の脚本を書いているらしいけど………」

「しかも、さっきの映画も書いていたみたいだな」

「ハートフルラテ、おいしい」

ポツリとピーチ姫は呟く。

映画を見終わって余韻を楽しみつつ、料理を食べていたら、いきなり話しかけてきた

少年。

それだけでも驚くことだというのに、その少年が映画の脚本を書いた本人で、かなりの皮肉屋だった。

そして言いたいことだけ言っただけ言っただけどこかに去って行ってしまおう。

もはや何が起きているのかよく分からない事態だ。

そんな中、ナハトはハートフルラテを飲んで嬉しそうにしている。

「……まあ、作者にも色々いるってことなのかな？」

「そう、かもしれないな……」

「だとしても、キャラが濃すぎない？」

「なんか、低い声してた」

それぞれ自身の注文した料理を食べ終え、少年が奢ってくれたハートフルラテを一口飲む。

口の中に広がる甘味が午前中の疲れを癒してくれたような気がする。

その疲れの中に先ほどの少年との絡みも含まれているのは当然のことだが。

「えっと、とりあえず食べ終わったし。次はどこに行く？」

「そうね……。ジエットコースター、お化け屋敷、メリーゴーランド、シアターと来たわけでしょ？」

「よくよく考えたら午前中だけで回るにはハードなことをしていたのだな……」

マリオの問いにピーチ姫は今までやってきたアトラクションを振り返る。

体験したアトラクションは全部で6つ。

ピーチ姫とナハトに至ってはジエットコースターを2回乗っているのでマリオたちより多い。

回数だけ見てもかなりのハイペースできているのが分かるだろう。

「んー……。じゃあ、少しゆっくりと『ワインリバー』でも行きましようか」

「ああ、船に乗って色々見るアトラクションなんだね」

「それならゆっくりできて良いかもな」

ピーチ姫は頬に指をあてて少しだけ思索し、次に行くアトラクションを提案する。

ピーチ姫の出したアトラクションの名前にマリオはどんなアトラクションだったか

を調べた。

反対意見の出なかったことから、マリオたちは「ワインリバー」に向かうことにする。

マリオたちのいなくなったあとのレストラン。

「ほよっ！（おかわり！）」

「まだ食べるのか、あの客は?!」

ピンク色の生き物は止まることなく食事をしていた。

その様子に1人の肌が焦げたような白髪 of 男性が立ち上がる。

「私に任せてもらおう」

「な、お前はまだバイトだろう?！」

「大丈夫だ。料理の経験はあるんでね」

驚くシェフに男性は笑みを浮かべながら答える。

「それよりもシェフ」

「なんだ?」

「あのお客を満足させても構わんのだろう?」

今、1人の男性とピンク色の生き物とのフードバトルが始まる。

その結末がどうなるのかは誰にも分からない。

第140話

キノコランドのアトラクションの一つ、*“ワインリバー”*。

船に乗り、ゆったりとした川の流れに任せて下っていき、周囲には様々な人形などが飾られている。

流れる音楽に合わせてライトが点滅しており、とても楽しい雰囲気醸し出していた。

『ご覧ください。ノコノコによる組体操とハンマーブロスによるジャグリングです』

「ジェットコースターも好きだけどこういうのんびりとしたものも良いわね」

「あ、あそこにノコノコ」

「ほう、ハンマーブロスがジャグリングをしているのだ」

「……いや、これサーカスじゃね？」

船に取り付けられたスピーカーから聞こえてくる音声にマリオたちは周囲を見渡し、ノコノコやハンマーブロスを見つける。

マリオたちはスタッフであろうノコノコやハンマーブロスの動きに感心した。

が、その動きはどう見てもサーカスだったのでマリオは思わずツツコミをいれる。

まあ、ツツコミをいれてはいるが凄いとも思っているのでそこまで強いものではないが。

「というかこの面子って……」

『彼らはミドウーリサーカスでスタッフをやっていた方たちで、ご覧のようにとても素晴らしい技を持っています』

どこかで見たことのあるノコノコとハンマーブロスの姿にマリオが首をかしげていると、スピーカーからノコノコたちの説明が聞こえてきた。

どうやら彼らはレストランのシェフと同じようにスカウトされてきたようだ。

「あいたつ?!」

「マリオ?」

「これは……コイン？」

不意に頭になにかがぶつかってきてマリオは思わずぶつかって来たところを押さえる。

マリオがとつぜん声をあげたことにピーチ姫は不思議そうにマリオの方を見る。

どうやらコインが飛んできたようで、クッパは落ちているコインを拾って見ていた。

『「ワインリバー」ではコインが降ってくることはありません。もしも拾えたなら異性に渡してみては？ 最初に触れた人と異なる性別の方がコインに触れたら恋愛が叶うかも！』

「え」

「え」

「え」

クツパがコインを見てみるとスピーカーからコインについての説明が聞こえてきた。聞こえてきた情報にマリオたちは思わずコインを持つているクツパを見る。クツパ自身も持っているコインを見ていた。

「・・・・・・・・えつと、これは俺が最初に触った扱いになるのか？」

「え、えつと、でもぶつかっただけだし・・・・・・・・」

「これは・・・・・・・・どうなるのだ？」

「分からないなら私にちょうだい」

このコインがどのような扱いになるのか。

ぶつかっただけで触れた扱いになるのなら次に触ったのはクツパになるのだが。3人が固まっているとナハトがクツパの手からコインを取ろうと手を伸ばした。

「だ、ダメなのだ！」

「むう・・・・・・・・」

このコインがどのような扱いになるのかは分からないが、もしものために自分が持つていたい。

そう思ったクツパはナハトの手から逃げるように手を動かし、素早くコインをしまうのだった。

第141話

肉が、魚が、野菜が飛び交う。

飛んでいった先で切られ、焼かれ、煮られ、蒸され、様々な姿へと形を変えていく。

ここは戦場^{キッチン}。

覚悟のない者は即刻立ち去らねばならぬ。

もしも、覚悟をした上で来たのなら即座に手を洗い、近くにある調理器具を手に取り、
れ。

それができぬ者にこの場にいる資格はない。

「次の料理が出来上がったぞ！」

「こちら、食べ終わった食器です！」

「まずい、置いてある食材が減ってきた！誰か持ってきてくれ！」

包丁を振るい、炎を操り、男は料理を作っていく。

その手際は目を見張るものがあり、この場にいるどのシェフよりも洗練された技術があるように見える。

——体はレシピで出来ている。

一度、包丁を振るえば肉が切れる。

二度、包丁を振るえば野菜が切れる。

三度、包丁を振るえば魚が切れる。

——血潮は出汁。心は豆腐。

しかし、注目すべきは包丁の扱いだけではない。

食材を切り終えると男は手早く食材を取り分け様々な料理へと変えていくのだ。

——幾たびのキッチンを越えて不敗。

「なんて料理の腕だ?!」

「しかも、気づいているか?! あいつ、1度も同じ料理を出していない!!」

——ただ一度の失敗もなく、ただ一度の残しもなし。

男の料理の腕に驚愕するシェフたちのことすら意識に入っていないのだろうか。
男は流れるようにいくつもの調理器具を操っていく。

——担い手はここに独り。

すでにいくつの料理を作ったのだろうか。
作り始めてからどれ程の時間が経ったか。
男はただひたすらに料理を作る。

——包丁の丘で具材を切る。

ピンク色のボールのような客人と男。

2人の間に面識はない。

それでも男は客を満足させるために腕を振るい、いくつもの料理を作る。

——ならば、我が料理人生に意味はいらす。

「シェフ！もらった食材はこれで全部です！」

「なんだと?!」

「構わん！全てこちらに回せ！決めに行くぞ！」

——この身体は、無限のレシピで出来ていた。

「終わった…….のか?」

おかわりの意思を示すランプが光らない。

恐る恐る、シェフたちはキッチンから客のいる店内を覗く。

そこには満足そうにお腹を擦るピンク色のボールのような客がいた。

客の姿を確認したシェフたちは嬉しそうに手を叩き合う。

「ふう…….……。ここまで慌ただしかったのは久しぶりだ…….」

「助かった。もしも良ければなんだが、これからもシェフとして頼めるか?」

短く息を吐きながら男は調理器具を下ろす。

そんな男の背を軽く叩き、シェフ長のキノピオが話しかける。

男からしてもその話しは助かるので断る理由もない。

「ああ、任された」

料理の腕を認められ、それを振るうことで笑顔を作ることができる。

それはとても素晴らしいことであり、平和な証拠。

ならば、自分はここで料理を作っていこう。

第142話

「ワインリバー」で手に入れたコインを大事そうにポケットにしまいながらクツパは船から降りる。

このコインの扱いがどうなるのかは分からないが、個人的にはマリオが最初に触れていたということにしておきたい。

故にクツパはコインを絶対になくさないようにポケットの奥の方にしまいこんだ。

「さて、と。『ワインリバー』も終わったし、次はどこに行く?」

「それならさつき案内図を見たときに気になったところがあつたのよ」

「『ワインリバー』から出て、マリオは3人に尋ねる。」

この流れはアトラクションを終えたあとに殆ど起こる流れだが、仕方がないことだろう。

クツパとしてもコインについて触れてこないでくれて助かってもいる。マリオの問いにピーチ姫が案内図を取り出してマリオに見せた。

「えつと……バーチャルシューター？」

「ええ、名前から察するにシューティングゲームだと思うのよ」

「ふむ、おもしろそうなのだ」

ピーチ姫の指差すアトラクションの名前を確認し、マリオとクツパは興味深そうに頷く。

そしてナハトはクツパのポケットのコインを狙っている。

が、途中でクツパに気づかれて逃げられてしまった。

「あはは……。じゃあ、バーチャルシューター”に行こうか」

「そうね」

「う、うむ……」

「ちえ……」

クツパとナハトの様子にマリオは苦笑し、移動を促す。

マリオの言葉にクツパはピーチ姫の後ろに隠れながら頷いた。

そんなクツパの様子にナハトは小さく舌打ちをしていた。

「シューティングみたいだし、対戦でもしようかしら？」

「ふむ、それも良さそうだな」

「え、対戦するの？」

「バーチャルシューター」に向かう道中、ピーチ姫がふと思いついたように提案する。

ピーチ姫の言葉にクツパはノリノリで肯定し、ナハトも満更ではなさそうだ。

唐突に決まった対戦にマリオは少しだけ意外そうに尋ねた。

マリオからすれば全員で楽しめれば良いんじゃないかと思っていたので、対戦をしようとするとは思いつかなかったのだ。

マリオの問いにピーチ姫は自信満々に頷く。

「まあ、いいけど……」

「じゃあ、ビリの人がトップにジュースを奢るってことにしましょう！」

「む、ならば負けられぬな」

「私も負けない」

ピーチ姫がさらに賭けまでルールに加えてしまった。

しかもクツパとナハトも拒むつもりはないらしい。

マリオは3人に気づかれぬように短くため息を吐いて「バーチャルシューター」へと向かうのだった。

第143話

青い服を着た少年はキノコランド内を歩く。

しかし、少年には他の人とは異なっているところがあつた。

それは少年の目。

少年の目はアトラクションには向いておらず、歩いていく他の客たちを見ていた。

歩いていく男を見る。

歩いていく女を視る。

歩いていく子供を観る。

カッブルを。

家族を。

友人同士を。

自分の近くを歩いていく全ての客たちを観察みしていく。

「ふん。やはりどいつもこいつも在り来たりだ」

少年が見ているのは客たちの見た目ではない。

それは客たちの関係性。

それは客たちの内面性。

それは客たちの思考性。

その客を個として成り立たせる役割を持つ要素たち。

それらを少年は暗い瞳で観察していた。

「つまらん。これならばやはり奴らを見ている方がまだ有意義だったのではないか？」

少年が頭に思い浮かべるのは1人の男と3人の女。

彼ら4人の関係性は軽く眺めた時におおよそ把握できており、話しかけた際にほぼほぼ知ることができた。

関係性としてはよくある四角関係。

そして男は自身の思いをまだ理解できていない。

なんと青く、なんとも甘ったるいような関係性か。

「ま、そんな恋愛をしているのがあの年齢の男女だということが一番おもしろかったところだな」

見ていた限りでは1人の女が一番年上。

男が二番目。

その次にもう1人の女。

そして最後の1人だけはなぜか年齢が分からなかった。

これは少年にとっては初めてのことで、どう観察しても年齢が一桁にしか思えなかったのだ。

が、そんなことは些細なこと。

なんにしても彼らの関係性がおもしろかったことに変わりはない。

であるならば店を出ずに彼らを観察しながらこっそりついていくという選択肢を選んでも良かったのではないだろうか。

「ん。ちっ……」

振動するケータイに少年は舌打ちをする。

ケータイに表示されるのは先ほどの男女のところでかかってきたのと同じ番号。

つまりはこのキノコランドの映画担当者からの電話だ。

少年からすれば仕事の話をすることになることが分かりきっているので、正直に言えば絶対に出たくない。

しかし、仕事の話をしなければ書いてはいけないものが分からない。

しぶしぶ少年は電話に出た。

「なんだ」

『ようやく出ましたね。先ほどはいきなり切って……』

電話に出ると静かに怒っている女性の声が聞こえてきた。

最近では聞きなれた映画担当者の声に少年はニヤリと笑みを浮かべる。

「は、俺の声がそんなにも恋しかったか。牛女にもそんな可愛いげがあるのだな？」

『……次の映画の期限を3割ほど短くしますね？』

「失敬、言い過ぎだった。だからよせ。本気でやめろ。俺は短い期限で脚本を書かされ

るのは嫌なんだ！分かった、牛女と言ったのは俺のミスだ。なにしろ比喩がストレートすぎた！ メロン峠とでも言うべきだったな！」

皮肉を言ったが故に自らの首を絞める。

完全に自業自得の事態に少年は慌てて謝罪？をする。

まあ、どう聞いても謝罪をしているように聞こえないが、皮肉屋な少年では仕方がないのだろう。

第144話

マリオたち4人は「バーチャルシューター」の前に立つ。

ここに1歩踏み込めばその時から4人は敵同士となる。

妙な緊張感が4人の間には走っていた。

「・・・・・・・・行こうか」

「ええ・・・・・・・・」

「うむ・・・・・・・・」

「うん」

静かなマリオの言葉に3人は頷き、アトラクションの中へと足を踏み入れていった。

「バーチャルシューター」の中は機械のようなデザインの壁で、どこか近未来的な雰囲気がある。

入り口をくぐって少し進むと受付があり、そこでアトラクションで使う銃を受け取るようだ。

「ようこそ、『バーチャルシューター』へ。こちらでは銃をお渡しします。アトラクションの説明は必要ですか？」

「じゃあ、お願いします」

「情報は大切だからな」

「意外と普通の銃の見た目のだな？」

「目がちよつとチカチカする」

受付のスタッフからアトラクションの説明について聞かれる。

これは聞いておいて損はないのでマリオたちは説明を聞くことにした。

「では、こちらのアトラクションはこの銃を使って現れるターゲットを撃っていくというアトラクションです。ターゲットには様々な種類があるのでそちらは遭遇してからお楽しみとおきましようか」

「まあ、その方がスリルもある．．．．かな？」

「教えてもらえないなら各自で対応することにしませう」
「上手く対応できたものが有利だな」

分かりやすいように銃を見せながらスタッフは説明をする。
アトラクションの内容は単純なシューティングゲーム。
敵の情報がないのも初見のゲームならよくあることなのであまり気にしていない。

「ではこちらの銃をどうぞ。お渡しした銃はお帰りの際にこちらにご返却ください」
「あ、はい。分かりました」

「さあ、早速やるわよ！」

「腕がなるのだ」

「どれくらい撃てるかな」

受付のスタッフに礼を言い、マリオたちは奥へと向かう。

進んだ先にあるのは機械的な扉。

この扉をくぐればアトラクションの始まりだ。

【WARNING!! WARNING!! WARNING!! WARNING!!】

4人が扉の向こうに足を踏み入れて扉を閉めた瞬間、赤いライトがチカチカと点滅を始め、英語の音声が流れ始めた。

【施設内部にて事故が発生しました！繰り返します。施設内部にて事故が発生しました！職員はそつこく事態の解決に向かってください！】

聞こえてきた音声にマリオたちは気を引き締めて銃を持ち直す。

ここから先は全員が敵同士。

おあつらえ向きに目の前には4つの通路。

マリオたちはなにも言わずに目を合わせ、それぞれの道へと進みだした。

「ちよ、お前もこつちに行きたいのかよ？」

「ぬ………仕方がない。ワガハイはあつちに行くのだ」

「あ痛あつ?!なんで、床がデコボコなのよ?!」

「ばんばーん」

………進みだした、のだ。

第145話

バーチャルシューター、マリオルト。

自身の足音が廊下に響く。

今のところ敵の姿はなく、不振な点も見当たらない。
警戒を解くつもりはないが、少しだけ拍子抜けだ。

【ザ、ザザ——れ！】

「うん？」

不意にどこからかノイズ混じりに音が聞こえてくる。

音の感じからして入ったときに聞こえてきたものと似ているような気がする
が………

【たす——ザザ………】

徐々にノイズは消えていき、誰かの声が聞こえてくるようになる。
しかしそれでもまだハッキリと聞き取ることとはできない。
音声に気を配りながら進むことにしよう。

【た——ザザ………けて——】

【たす——ザザ………て——れ！】

【助けて——ザザ………れ！】

【助けてくれ！】

廊下を歩き続けていると、いつの間にかノイズは消えて音声はハッキリと聞こえるようになる。

聞こえてきたのは切羽詰まった男の叫び声と何かを叩くような音。恐らくは声の主が何かに襲われているのだろう。

「くそう、今まで何もいいことがなかったのに！ やつと、やつとここで成功できると思ったのに……！どこまで行っても私の人生はどん詰まりなのか、チクシヨウ、チクシヨウ……つつつ！」

どこか偉そうなしやべり方の声の主は悔しげに叫ぶ。

その言葉は誰かに聞かせるために言っているものではないのだろう。

声の主がこの道の先にいるのかは分からないが歩く速度を速めた。

「死にたくない、まだ死にたくない！だつてそうだろう、私はまだ、一度も、一度も——一度も、他人に認められていないんだ！まだ誰にも、誰にも愛されていないんだよ……！」

「……そうかよ」

聞こえてきた悲痛な叫びに思わず口から言葉がこぼれる。

この声の主がどんな人物かは分からない。

もしかしたら、傲慢でわがままな男かもしれない。

もしかしたら、切羽詰まっているから口が悪くなっているだけで、本当は優しい男なのかもしれない。

もしかしたら、尊大だが小心者のやや小太りな男かもしれない。

だが、そんなことはどうでもいい。

この声の主には絶望が迫っているのだろう。

この声の主には深い苦しみが迫っているのだろう。

であるならば俺がとるべき行動はただ一つ。

「待っててくれ。絶対に助けてやるから」

銃を持ち直し、床を強く踏み、駆け出す。

目指す目的地は声の主の待つ場所。

声の主を助ける。

その事だけを考えてただただまっすぐに駆け出した。

この時、マリオの頭の中から、これがアトラクションだという事実は完全に抜け落ちていた。

第146話

バーチャルシューター、クツパルト。

1体、また1体と撃ち抜いていく。

現れるのは職員らしき服装のものたち。

人だと言わないのはそのものたちが明らかに生者の様子ではないから。

その姿は先ほどお化け屋敷で見かけたゾンビのようにも見える。

「ちっ．．．．．キリがないな」

少し進んでは撃ち抜き、音に反応しているのか倒している間に増援が現れて時間を食う。

城に置いてあるゲームの「バリヨハザード」を思い出させる状況に思わず舌打ちをした。

実際に撃てるかどうかは別として、銃を両手に持つて撃ちたいとも思ってしまう。それほどもでにキリがないのだ。

「14・・・15・・・16・・・」

頭を撃ち抜き、倒れていくゾンビを数えていく。

増援として来たゾンビもこれで一応は打ち止めらしく、数が増える様子はない。最終的に撃ち抜いたゾンビの数は30を越え、かなりの疲労感が襲ってきていた。

「ふう、どこか休めるところを・・・。その部屋には入れるのか?」

短く息を吐き、キョロキョロと周囲をうかがう。

少し先の壁を見ると、そこに扉があることが分かった。

呟きながら扉に近づき、開けようとしてみる。

「む、入れるの・・・か?」

「はい、入ってま——つて、うえええええええ!? 誰だ君は!」

扉に近づくと、扉は何の抵抗もなく開く。

どうやら職員の部屋らしく、中には一人の男性がケーキの乗った皿を手に持ちながら驚いていた。

あまりにも能天気なその姿に思わず呆気にとられてしまう。

「ここは空き部屋だぞ、ボクのさぼり場だぞ!? 誰のことわりがあつて入ってくるんだい!?」

「空き部屋なのか……」

中にいたこの男の部屋だと思っていたこの部屋はどうも空き部屋だったらしい。

しかも、男は堂々とサボりを宣言している。

いつそ清々しいまでのダメさ加減に思わず頭に手を当ててしまう。

「つて、あれ? 武装しているのかい?」

「放送が聞こえていなかったのか? 事故が起きたから事態の解決に向かうように言っていたであろう」

銃を持っていることに気づいたのか、男は不思議そうに首をかしげる。

先ほどまで廊下で銃を撃っていた上に、放送もあつたのだから気づいても良いはずなのだが。

男が現状についてほとんど理解していないことが分かり、少しだけ警戒心を上げる。

「えっと、この部屋は誰も使っていないから放送は切ってるんだよ。それに防音も完璧だからね。でも、事故が起きてるのか……」

男の言葉に嘘を言っているような雰囲気は感じられない。

男は持っていた皿を片付け、考え込む。

「……うん。事故について気になるし、ボクもついていっていいかな？」

「まあ、良いのだ」

男の提案に拒否する理由もないため、とりあえず頷く。

職員であろうこの男がついてくることは別にデメリットもそこまでないだろうし、事

故の詳細なども分かるかもしれない。

「だが少しだけ休憩させてほしいのだ。さすがにここに来るまでに疲れた」
「うん、分かったよ」

そう言って近くにあった椅子に座る。

どのような事故があったのかは分からないが、何か大きなことに巻き込まれていつている気がしてならない。

クツパもまた、リアルすぎる展開にマリオ同様これがアトラクションだということを忘れてきていた。

第147話

バーチャルシューター、ピーチルート。

頭部を撃ち抜かれ、力を失った体がドシャリと床に落ちる。

床に落ちた敵から素早く周囲に注意を向け、ピーチ姫は足を進める。

最初の頃は歩いているゾンビばかりだったのだが、いつの間にやら虫のような羽が生えた飛行型のゾンビまで現れ出した。

飛行型のゾンビは通常のものとは動きが異なり、意外と速いスピードで近寄ってくるので、対応が少しだけ大変なのだ。

「よし、案外やれるわね」

周囲にゾンビがないことを確認し、ピーチ姫は軽く休憩を入れる。

休めるときに休み、調子をよくする。

どんなことでも大切なことだ。

「それにしても飛行型ねえ……」

ピーチ姫は先ほど倒したゾンビをちらりと見る。

ゾンビの姿自体は普通のものど何ら変わりはないのだが、その背中にはトンボのような大きな羽が生えている。

正直に言うと、そんな羽でどうやって飛んでいるのかが気になるところだが、答えは恐らく出ないのだろう。

「……あの虫じゃなくて良かったわ」

ピーチ姫の言うあの虫。

それは誰もが知っている嫌悪感を抱かずにはいられない頭文字がG、英名であればCの異常なまでに素早い例の虫だ。

もしも仮にその虫の要素を持つゾンビがいた場合、かなり素早いものになるのではないだろうか？

「うーわ、考えなきやよかった……」

頭の中に思い浮かべてしまったゾンビの姿にピーチ姫は思わず体を震わせる。実際に見たわけではないのだが、想像しただけでもとても気持ち悪い。

「ん、扉ね」

ピーチ姫が気持ち悪さを忘れるために頭を軽く振っていると、少し行つたところに扉があることに気づいた。

見たところ扉にはなにも仕掛けなどがあるようには見えない。これならば開けてみても問題はないだろう。

「とりあえずは——Open the door」

無駄に良い発音をしながらピーチ姫は扉を開ける。

一瞬だけ眩い光が差し込み、思わず目を瞑る。

「警部、これで宿の人間は全てです」

「分かった。皆さん、お集まりいただきありがとうございます。私、警視庁捜査一課の真暮まぐれと申します。先ほど殺人事件が起りました。ここにいる皆さんは重要参考人ということになります」

「な?!俺たちの中に殺人犯がいるってのかよ?!」

「早く犯人を捕まえてくれ!」

「………は?」

扉を開けた先では何故かミステリー小説のようなことが起こっていた。

あまりにも突拍子もない展開にピーチ姫はポカンと呆けてしまう。

「え………え〜？」

扉の中と外を交互に見てピーチ姫は頭の中に大量にハテナマークを浮かべる。

まあ、いきなりこんな展開が起きてしまっは誰でもそうなるだろう。

「………見なかったことにしましょう」

そう言つてピーチ姫は扉をそつと閉じ、続いていく廊下へと歩いていく。

この扉が仕様なのかイレギュラーなのかは誰にも分からない。

第148話

バーチャルシューター、ナハトルート。

銃を片手にナハトは鼻唄混じりに廊下を歩く。

ナハトの通つてきた廊下には何体かのゾンビが倒れており、その全てが頭を撃ち抜かれることによつて倒されていた。

「ふんふんふん」

いったいその射撃技術はどこで手に入れたのか。

壁をぶち抜いて現れたゾンビにナハトは動じることなく銃を構えて引き金を引く。

現れたゾンビは廊下に倒れているゾンビたちと同じように頭部を撃ち抜かれ、体から力を失つて倒れる。

「けっこう余裕、かな」

倒れたゾンビの上を通りながらナハトはポツリと呟く。

ナハトの顔に疲労の色は特にはなく、かなり余裕があることが伺える。

「楽しいけど、マリオがいない……」

少しだけ寂しそうにナハトは言う。

このアトラクションで対決するのは別に構わなかったのだが、出来ることならマリオと一緒に遊びたかった。

別にアトラクションが楽しくないわけではない。

単にマリオと一緒にの方が良かった。

ただそれだけなのだ。

「ん、扉……」

廊下の先の右側に扉があることにナハトは気づく。

ここに来るまでもいくつか扉は見つけており、その全てをナハトは確認してきた。であるならばこの扉を確認しない理由はない。

「物音は……当然ある、か」

扉に近づき、耳を澄ませる。

中からは何かを動かしているような物音と、誰かの声らしきものが聞こえてきた。らしきもの、と言った理由は壁や扉によって上手く聞き取れず、判別がつかなかったためだ。

「すう……よし、行く」

短く呼吸を整え、ナハトは扉を開ける。

扉の先、そこはどうかやら研究室だったらしく、様々な薬品の入ったフラスコや、用途の分からない電子機器などが並んでいた。

その電子機器の並んだ手前に1人の男の姿がある。

「ふはははは！完成した、完成したぞ！^{デイスズイ}DZウイルスが！」

どうやら男は自分に酔っているのか、ナハトが入ってきたことに気づいていないようだ。

男の言うDZウイルスとはなんなのか。

疑問に思いつつナハトは男の背後に回る。

「これで私は不老不死。つまりは神となる！」

「そう。でも、私には関係ない」

そう言ってナハトは男の頭部を背後から撃ち抜いた。

恐らくは黒幕であろう男。

その結末はあつけないもので、頭を撃ち抜かれた男はドシヤリと床に倒れた。

「……よく分からない機械ばかり」

倒れた男に目もくれず、ナハトは部屋の中を調べていく。

部屋の中にあるものは専門的な物ばかりでナハトにはよく分からない物しかない。

一通り部屋の中を調べてみたが特に成果はなかった。

ナハトは小さく息を吐き、部屋を後にする。

つい先ほど頭を撃ち抜いて倒れた男の死体が消えていることに気づかぬまま。

第149話

バーチャルシューター、大部屋。

入り口で別れたマリオ、クツパ、ピーチ姫、ナハトの4人は合流していた。
この場には4人の他に2人の男の姿もある。

「そっちのその男は誰なのだ？」

「いや、お前の方もただけだな」

「2人して誰をつれてきているのよ」

「黒幕撃ってきた」

合流した4人はそれぞれの情報を出しあいながら話し合う。

マリオの連れてきたやや小太りの男性。

クツパの連れてきたサボリをしていた男性。

入り口で別れた際にはいなかったはずの2人。
その2人の存在にピーチ姫はハテナマークを浮かべる。

「ふん。貴様も無事だったのか医療部スタッフ」

「ええ、そちらも無事でよかったですよ。新所長」

やはりお互いに知り合いなのだろう。

小太りの男性とサボリをしていた男性。

2人は……というか、医療部スタッフと呼ばれているサボリをしていた男性
だけはほがらかに話をしていた。

「助けを呼ばれたからな。助けないわけにはいかないだろ」

「ま、貴様のことだから当然だな。ワガハイの方はサボっていたからつれてきただけな
のだ」

「マリオの方は分かるけどクツパの方はどうなの？」

話をしている2人の男を見ながらマリオたちは男たちをつれてきた経緯を話す。

マリオのつれてきた理由はまだ分かる。

だが、クツパのつれてきた理由は分からない。

サボリをしていたということは安全な場所にいたということだろう。

であるならばつれてこなくても大丈夫だったのではないか。

「そういえば新所長がつれてきた人はどこへ？ 確か研究部の新しい部長だと言つてましたけど……」

「分かん。事故が起きたときにはすでに見当たらなかったのだ」

「それ、どんな男」

「うわっ?!」

「うおっ?!」

話し合いをしている医療部スタッフと新所長に割り込むようにナハトが声をかける。
いきなり話しかけられ2人は驚き仰け反る。

「私、ここに来るまでに黒幕の男を撃ってきた」

「え?!」

「なに?!」

先ほどの情報の共有をしている際にも言っていたのだが、まったく触れられなかったためにナハトは自ら確認するために話しかけたのだ。

ナハトの言葉に2人は驚く。

「なんだって?! 黒幕?!」

「でかした!」

「で、さっき言ってた男はどんなやつ」

「え、あ、ああ……」。彼はウイルス研究の第一人者で新しい病気への特效薬を研究するためにここに新所長と一緒に来たんだ」

「そうだな。見た目は……黒髪短髪で気分が高揚すると高笑いをする癖があったな。あとは口癖に神という言葉があったな」

新所長のあげた特徴を聞き、ナハトは確信する。

自分が撃ち抜いたのがその男だと。

「私が撃つたのはそいつ。間違いない」

「なん．．．．．だと．．．．．」

「彼が黒幕だったなんて．．．．．」

「撃つたからもう解決」

「私が．．．．．この神が、あの程度で死んだかと思ったのか？」

第150話

突如として聞こえてきた不敵な声にマリオたちは警戒しつつ周囲を見渡す。

声の感じからして男であることは間違いないだろう。

マリオたちが警戒するなか、ナハトは不愉快そうに眉を歪める。

「さっき撃った男の声……」

聞こえてきた男の声にナハトは聞き覚えがあった。

それは先ほど自分が撃つ前に高笑いをしていた男の声。

それほど時間もたっていないために記憶としては間違いはないだろう。

「ふ、ふはははは！私が死んだとでも思ったのか？私はDデーゼイZウイルスを作り上げた不死身の存在！あの程度でこの！私が！死ぬはずがなあああい！！」

「うわ、うるさ……」

大きく叫ぶ男の声にナハトは思わず眩く。

マリオたちも特にはなにも言わないが、思っていることは同じで少々うるさいと思っ
ている。

そして、男の声が止まると同時に1人の人影が現れた。

黒髪短髪に黒のワイシャツ。

顔は整っているのだが不敵に笑みが浮かべられ、どことなく邪悪さを感じられる。

ナハトが撃ち抜いたはずの男がそこにいた。

「さつきはよくも神である私を撃ってくれたな？」

「なんで生きています。私はちゃんと頭を撃ったはず」

ナハトを見て男は話す。

男に話しかけられナハトは疑問を口にした。

なぜ、頭を撃ち抜いたはずの男がここにいるのか。

なぜ、頭が完全に崩壊していたはずなのにもとに戻っているのか。

普通に考えてあり得ることではない。

「はははは！確かに私は死んでいた。だが、DZウイルスに感染している私は死をも超越する！」

「死を、超越……………？」

「死んでいた……………？」

「もしかして、廊下にいたゾンビがなにか……………」

男の言葉にマリオたちは警戒をしつつ、銃を構える。

死んでいたのに蘇生する。

それは、まるでここに来るまでに倒してきたゾンビたちのような——

「あんな失敗作に価値はない。私は！DZウイルスによって完全に不死身となったのだ！」

「彼らが失敗作だと！」

「君のその欲望のためにこの研究所の職員たちは犠牲になったって言うのかい?！」

あまりにも身勝手な男に医療部スタッフの男と新所長は思わず声をあげる。

自分は自分たちは利用されたのか。

こんな男のためだけに彼らは命を失ったのか。

自分たちを軽視するその言葉に2人は怒りの感情が込み上げてくる。

「許さない……………」

聞こえてきたのは誰の呟きか。

静かな、しかし怒りの込められた言葉がしつかりと響いた。

「お前みたいなやつは……………絶対に許さない！」

真つ直ぐに男を睨み付け、全身から炎を溢れ出させながらマリオはハッキリと宣言した。

自身の欲望のために周囲にあるものを犠牲にするもの。
マリオのもつとも嫌う行為がそこには存在していた。

第151話

炎を溢れさせながらマリオは真っ直ぐに男に向かって走り出す。

絶対にぶっ飛ばす。

真っ直ぐに最速、最短、最大の力でぶっ飛ばす。

「おおおおおっつ!!」

飛び出していったマリオを追いかけるようにクッパも銃を構えて走り出す。

さらに少し遅れてピーチ姫とナハトは銃を構えて男を警戒する。

「この神に挑むか。だが無駄なこと!」

走って向かってくるマリオに男は腕を振るう。

男が腕を振るうと衝撃波のようなものが起こり、マリオとクツパの足はそれ以上進むことができなくなつた。

想像以上の男の力にマリオとクツパは腕を体の前に出し身を守る。

「くっ！」

「ぬうっ！」

「くらいなさい！」

「撃つ」

マリオたちの足が止まったことに気づき、ピーチ姫とナハトはそれぞれマリオたちに誤射をしない位置へと移動して男へと銃を撃つ。

しかし、放たれた弾丸は男の目の前の空間で停止し、そのまま地に落ちる。

どうやらマリオたちの足を止めるために放った衝撃波の他にも何かしらの力が働いているようだ。

「どうした？ 私は、この神は！まだなんの力も使っていないぞー！」

「なめ、るな！！」

溢れさせる炎を銃を握っていない左手に集束させ、マリオは自身の足を止めている正面の空間に向けて拳を突き出す。

普段は意識して行使している魔力の炎。

その炎が今、激情と合わさって加減抜き威力へと昇華する。

ズドンッ、そんな音とともにマリオは再び男へと向かって走り出す。

マリオが衝撃波を破ってくるのが予想外だったのだろう。

男は目を見開き、その顔を驚愕に染めていた。

「バカな?! 私の力を抜いてくるだど?!」

先ほど左手に炎を集束させたときと同じように、マリオは右足に炎を集束させる。

人の足の筋力は腕の筋力よりもはるかに強い。

そして、マリオの脚力は常人のそれをはるかに凌駕する。

さらにマリオの足には炎が集束しており、その威力は先ほど左手に炎を集束させたときに証明されている。

では、この3つの要素が合わさった場合、どのような結果が起こるのか。

「ふっ飛んで……いけっつ!!」

男の前に踏み込み、マリオは自身の体を素早く回転させる。

その動きはスピンジャンプやマントを振るう際によくする行っているため、自然に最適な動作が行われた。

そして、回転の勢いを殺さぬようにマリオはそのまま男の腹部を蹴り抜いた。

ミシミシと男のあばら骨が折れるような音が聞こえてくる。

マリオの手加減のない蹴りに男の体はくの字のように折れ曲がりながら後方へとボールのように吹き飛んでいった。

「ぐっ……があああああ?!?!」

悲鳴をあげながら男の体は土煙の中へと消えていく。

蹴り抜いた姿勢から足を戻し、マリオは土煙を睨む。

死を超越したなどと言っていたのだ。

まさかこの蹴り一発で終わりなどということはないだろう。

「ふ、ふふふ。素晴らしい威力だ。普通の人間であれば間違いなくこの一撃で倒れていただろう。だが！私には無意味だ」

「ノーダメージ、なのか………?」

「ワガハイでも、今のは耐えられるか分からぬぞ………」

「ちよつと無茶なんじゃないかしら………」

「でも、やらないとダメ」

パチパチと手を叩きながら、ダメージを感じさせない様子で男は土煙の中から現れる。

確かに間違いなくマリオの蹴りは男に直撃した。

あり得ない男の姿にマリオたちは男の不気味さに戦慄するのだった。

第152話

土煙の中からダメージを微塵も感じさせずに現れた男。
その姿はまさに男の言っている神のようにも見えた。

「くそつ、ダメージが通っていないのか？」

「だが吹き飛んではいた。衝撃は消せないであろう！」

余裕の姿で自分たちを見る男にマリオは悔しげに悪態をつく。

男の姿に焦りそうなマリオを落ち着かせるためにクツパは男が吹き飛んでいたことを言う。

確かにクツパの言うとおり男は衝撃を消せていない。

しかし、それもダメージにならないのであればあまり意味はないだろう。

「ナハト、援護で撃つわよ！」

「ん。あなたたちはどこかに隠れてて」

「どこかって言われても?!」

「隠れるようなところなどどこにもないぞ?!」

念のために医療部スタッフと新所長のそばにいたピーチ姫とナハトは銃を構えながら男を挟むように移動する。

ナハトの言葉に2人は慌てて、急いでこの部屋に入ってきた入り口に移動した。

遮蔽物となるものはないが部屋の中にいるよりは安全なはずだ。

「さて、どうやって倒せばいいんだ……?」

「マリオ、次は見えるところで攻撃をするのだ。土煙で見えなかったが、ダメージが本当に入っていないのか確認をしたい」

「私たちが撃つからその隙にやってちょうだい！」

「死んで」

ダメージが入らないのであれば倒しようがない。

手詰まりになったのではないか、苦々しく男を睨むマリオにクツパは指示を飛ばす。確かに男の姿に傷はついていない。

しかし、それが防御力によるものなのか、はたまた超回復によるもののかはハッキリとしていなかった。

だからこそクツパはマリオに見えるところで攻撃をするように言ったのだ。

クツパの言葉にピーチ姫とナハトは男を狙って撃ちながら言う。

2人の銃から放たれた弾丸は先ほどと変わらずに男の手前の空間で停止して地に落ちる。

無意味だと分かってはいるがそれでも多少は足止めくらいにはなるはずだ。

「作戦会議は終わったかね？良い機会だ。この神たる私の新たな姿を見せてやろう！」

男にとってピーチ姫とナハトの放つ弾丸は脅威にならないのだろう。

ピーチ姫とナハトに一切視線を向けず、男は大袈裟なまでに腕を広げて言った。

そして、次の瞬間。

男の肉体に変化が起きた。

服の下から恐らくは筋肉であるものがボコボコと脈打ち始める。
痛みでもあるのだろうか、男は大きく声をあげていた。

「ああああああああっつ!!」

男の体はどんどんと変貌していく。

服を突き破り筋肉が変化していく様。

全身を被^{おお}つていく異質さを放つ白い皮膚。

不気味なまでの変化にマリオたちは思わず後退^{あしずき}り、男から距離をとった。

やがて……男の肉体の変化が終わる。

「ふ、ふ、ふ、ふ……、ふはははは！見ろお！これがあ！神たる私のお！新たな姿だあ
!!」

人の形をしてはいるが、完全に人とは異なる姿となった男は誇らしげに叫ぶ。

その姿はあまりにも不気味で、あまりにも恐ろしい。

変化した男の姿を見たマリオたちは自然と手に力が入る。

それは恐怖を誤魔化すためのものか、それとも勝てないのではないかと
言う恐怖から強張りこわばりなのか。

第153話

足の前から頭部まで全身を被^{おわ}い尽くす白く、硬質的に変化した皮膚。

頭部には恐らくは髪の毛が変化したであろう黒い硬質な物体もつけられている。そして、赤と青のオツドアイとなったその瞳。

口のある場所まで被われているのは食事の必要が無くなったからなのか。

「どうだあ、素晴らしいいい、だろおう？」

姿が変化したことにより気分が高揚しているのだろう。

男は——いや、もはや男かすら分からない見た目の化け物はマリオたちを見る。

化け物となった男の鋭い眼光にマリオたちは思わず身を強張らせる。

人とはここまで変貌することができるのか。

身を強張らせつつも、マリオたちは銃を離すことはなかった。

「人の姿すら捨てたのか……」

「なにか起きたというのだ……」

「あの体、銃は効くのかしら……」

「効かなくても撃つ」

人の姿を捨てた化け物。

ウイルスを取り込んでいるからといってこのような変化があり得るのか。硬質的に見えるその体はもはや銃程度では傷一つかなさそうに見える。

「とにかく、俺が前に出る！3人は援護してくれ！」

「分かったのだ！」

「任せて！」

「お願い」

自身の攻撃が効くのかはまったく分からない。

それでもマリオは自身を鼓舞し、走り出した。

「はあっ！」

先ほどと同じように、化け物となった男の体に蹴りを放つ。

しかし先ほどと異なる点が2つある。

1つは男の姿が完全に変わってしまったていること。

そして、もう1つは足に魔力の炎が集束していないこと。

なぜマリオの足に魔力の炎が集束していないのか。

一言で言ってしまうえば魔力切れだ。

マリオは先ほど激情に任せて左手の拳で1発、右足の蹴りで1発の計2発分の魔力を消費している。

平静の状態であれば使う魔力量をコントロールして残しておくこともできただろう。

だが、先ほどのマリオは激情に任せて魔力の炎を使ってしまったていた。

そんな状態でまともに魔力をコントロールできるのか。

当然ながらそれは否。

その結果、マリオはたった2発で魔力を使いきってしまったのだ。

魔力の炎が集束していない普通の蹴りで化け物の体へと変化した男に同じ結果が起こせるはずもなく。

ガツンツ、という音が聞こえただけで化け物となった男の体には少しだけ揺れる程度の衝撃しかいかなかった。

当たり前のことだがダメージも0。

「なんだあ?いま、なにかしたかあ?」

「な——がああっ?!?!」

蹴りを受けた体勢のまま化け物は平然と尋ねる。

自身の今出せる渾身の蹴りを受けてもダメージのない化け物にマリオは驚愕する。

そして、化け物は驚愕しているマリオの足を素早く掴み、床へとマリオを叩きつけた。

「マリオ!!」

「くっ、マリオを離しなさい!」

下手に撃てばマリオに当たる。

それが分かっているがゆえにピーチ姫とナハトは銃を撃つことができなかった。

第154話

目の前の空間でマリオと呼ばれている男性が既視感のある生き物に足を捕まれて床に叩きつけられている。

執拗なまでに何度も何度も。

それは、壊すために。

それは、殺すために。

それは、自身の力を見せつけるために。

ボクと新所長は隠れられないとは分かっているけれども部屋の入り口付近の壁際に立っている。

「くうっ！ やられてしまっているではないか！」

男性が叩きつけられている様子到新所長は辛そうに声をあげる。

口調は偉そうではあるのだが、その本質はかなりの善人。今の言葉も叩きつけられている男性を心配してのことだ。

「なにかっ！なにか私たちにもできることはないのか！」

「そ、そう言われましても?!」

肩を掴み、新所長はガクガクと揺すつてくる。

男性が最初に見せた一撃は少し離れた位置のここから見ても分かるほどの高威力で、それを耐えきる化け物の耐久値は恐ろしいほど高いということとは分かる。

それゆえに武器もなにもない今のボクたちではなにもできない。

ボクは、新所長の手から逃れてそう自分に言い聞かせた。

「いい加減に、マリオを離すのだ！」

「ぐがあっ?!」

ボクをここまでつれてきてくれた女性の声が聞こえると同時に、化け物の呻くような声が聞こえてきた。

それと重なるようにドサリという音も聞こえてくる。

見れば女性が腕を振り下ろした体勢で止まっており、化け物の腕が切断されているのが見えた。

よく見ると女性の腕から光が伸びており、それが刃のようになって化け物の腕を切り落としたのだろう。

掴んでいた腕が落ちたことよって男性も解放され、少し離れた位置に倒れていることが確認できる。

「マリオ、大丈夫か！」

「ててて、あのくらいならまだ大丈夫だよ」

女性の言葉に男性は化け物から距離を取りながら答える。

男性は少しだけ痛そうにはしているが、その動きにおかしいと思える点は見当たらない。

「助かりはしたが………。あのままではじり貧ではないか！」

新所長の言うとおり、このままではいずれあの4人はやられてしまうだろう。それでも彼らは戦うことを止めようとするまい。

何故、そこまで戦える？

何故、他人のために戦える？

何故、勝つたところで得るものがない戦いができる？

何故——

「なにを悩んでいる」

「ッ！」

ぐるぐると思考の渦に囚われていると、いきなり新所長が問いかけてきた。

もしかしたら顔に出ていたのかもしれない。

いや、今は誤魔化すことを優先しておくべきだろう。

「い、いやだなあ。悩んでなんていませんよ」

「ふん。いくら私でもそれが嘘だというくらいは分かる。きさま、なにか手があるな？」

ボクの言葉を両断し、新所長はこちらを真つ直ぐに見てくる。

新所長の言うとおり、ボクにはあの化け物を倒せる手段がある。

でも………

「ボクは………」

彼らはどうして戦えるのだろう………

ボクには、それが分からない………

「ふん。やつらがどうして戦えるのかが不思議か」

「う………、はい」

「やつらはな『強い』んだ。ついさつき出会った私でも分かるほどにな」

彼らが強いのはボクにも分かる。

あんな化け物に戦いを挑んで倒されていないのだからそれは誰の目にも分かることだろう。

「……きさま、勘違いをしているな」

「え？」

「やつらは確かに強いさ。だがな、それ以上に “心が強い” のだ」

心が……強い？

それは……

「本来ならやつらには私たちを助ける理由なんてない。なのにやつらはああして戦っている。相当な甘ちゃんなんだろう。だが、それを貫く思いがある」

「それが、心の強さ……」

「そうだ、誰かを守るために戦うからこそやつらは強いのだ」

誰かを守るために戦う。

言葉だけならいくらでも言えること。

それを彼らは現実に行動している。

なんて勇気のあることだろう。

なんて優しいことだろう。

「分かったか。分かったのならあの化け物を倒す手段を言え！」
「……分かりました」

あのように強く、美しい心があるのだ。

ならば、ボクもこの力を使うことを決めよう。

他でもない彼らを助けるために。

第155話

銃弾が飛び交い、拳が空を切る。

化け物の拳が床にぶつかると、細かいヒビが扇のように広がった。

それだけでも化け物の力が非常に強いことが分かるだろう。

しかも、先ほどクツパが切り落としたはずの腕も再生してしまっている。あまりにも高い再生力はマリオたちの心に多大な負荷をかけてきていた

「ちっ、このままだとこっちがやられるな……」

「それは分かるのだが、どうにもな……」

「私の方も治療と援護で手一杯よ」

「耐久力がありすぎ」

化け物から距離をとり、軽くではあるが息を整える。

マリオは化け物を警戒しつつ舌打ちをした。

自分たちはここまで疲労しているというのに化け物には疲労している様子がほとんど見られない。

さらに言えばダメージもまったく言って良いほど入っているように見えない。それらの事実がマリオを苛立たせ、焦らせる。

「どうしたあ？もはや打つ手もなくなったかあ？」

「ぐっ……」

「攻撃が効かないだけなのだが……」

「体力お化けなだけなくせに……」

「むかつく」

大振りに腕を動かしながら化け物はマリオたちのもとに近づいてくる。

隠そうともしない余裕そうな態度にマリオたちは悔しげに化け物を睨み付ける。

化け物とマリオたち、視線がぶつかり合い静かな空気が流れる。

そこに、コツ、コツと歩く足音が聞こえてきた。

音を出している主に全員の視線が集中する。

見ると化け物とマリオたちのちょうど間の辺りに向かうように、医療部スタッフの男が歩いてきていた。

「な、なんで来たんだ?!」

「巻き込まれてしまうぞ!早く戻るのだ!」

あまりにも無防備に歩いてくる男の姿にマリオたちは焦り、戻るように叫ぶ。それでも男の歩みは止まらず、ついに化け物の目の前にまで到着した。

「くくく、神である私に命乞いでもするために来たのか?」

「……いや、違うよ」

顎に手を当て、笑いながら化け物は言う。

そんな化け物の言葉を男は首を横に振って否定した。

命乞いをするためにここに来たのではない。

ただ、彼らを助けるためにここに来たのだと。

「ふん、ならば死ねえ！」

男に向かつて化け物の腕が振るわれた。

風を切る音と共に凄まじい威圧感を放つ拳が男に迫る。

男とマリオたちの距離はそこそこ離れており、いまから駆け出したとして間に合うことはないだろう。

そして、肉のぶつかる音が周囲に響き渡った。

振るわれた化け物の拳。

恐るべき威力で振るわれたその拳を、男は右手で受け止めていた。

「なぜだ……?!なぜ、神である私の拳を止めることができる?!」
「さあ……。その答えは、自分の目で確かめるといいよ!」

驚愕する化け物の掴みながら男は反対の手のひらを自身の顔にかざす。

その手の甲にはEXAIDの文字が浮かび上がっていた。

第156話

化け物の拳を受け止めながら男は自分の顔の前にかざした手を下に振り下ろした。
直後、男の体に変化が起こる。

「うおおおおおっつ!!」

「なにいつ?!」

男の体に起きる変化に化け物は驚き、思わず後方に跳び下がる。

全身を被うように変化していく男の皮膚。

それは化け物の変化と似ているようでまったく異なるもの。

化け物の変化がどこか禍々しさを放っていたのに対し、男の変化はまるでアーマーを装着していつているかのような変化だった。

やがて、男の体の変化が終わり、その姿がハッキリと露あらわになる。

「その……姿は……?」

「まさか、お前も奴と同じ……?」

「そっくりね……」

「討伐対象?」

変化の終わった男の姿を見てマリオたちも驚きの声をあげる。

なぜなら変化した男の姿は化け物の姿と酷似しており、パツと見ただけでは見間違えてしまうのではないかと思うほどだ。

あまりにも似すぎているためにナハトは撃つべきなのか悩んでしまっている。

「ボクのこの姿は、ボクが感染しているEXAエクスIIDエイドウイルスによるものなんだ。」

「エクス……エイド……。語感からして治療用のウイルスかい?」

「それに近いかな。このウイルスは感染した対象が他のウイルスに感染したとき、その新たに感染したウイルスを完全に死滅させるんだ」

マリオの言葉に男は頷く。

しかし、男の言葉が真実なら気になることが一つある。

「それだけなら、なぜ肉体が変化しているのだ」

「もともとは、言った通りの治療用だったんだ……。でも、このウイルスのある特徴に気づいたトップたちが無理やり別物に作り変えたんだよ」

「ある特徴？それはなんなのかしら？」

「不老不死、そして肉体が強靱になることさ」

「それって……」

男の言うEXAIDウイルスの特徴。

その特徴を聞いて真っ先に浮かぶのは、男を警戒したまま離れた位置から男を睨み付けている化け物の姿だった。

「きさまああ、神たる私の姿を真似するかあ！」

「そんなつもりはなかったんだけどね」

怒りの込められた化け物の言葉に、男は首を軽く振りながら答える。

本当に真似をするつもりはなかった。
むしろ、自分の方が真似をされている。

目の前の化け物となった男は不完全なウイルスを使ったのだろう。

本当に完成をしていたのであればあの様に禍々しい空気など発するはずもない。
いや、あの姿を完成形だと思っっているのなら仕方がないのかもしれないが。

「殺す、貴様は徹底的に殺し尽くしてくれ！」

「いやあ、それは無理なんじゃないかな」

殺すと言うのなら殺して見せてほしい。

このウイルスに完成してから長い時を生きている。

斬られても再生し、焼かれても再生する。

撃たれても穴は塞がるし、毒を飲んでもしばらくすれば毒に馴れてしまう。

けっして死ぬことができない永遠の生。

これが終わると言うのなら願ってもないことだ。

ああ、しかしそれも叶うことはないのだろう。

なぜなら——

「もう、君への楔は打ち終えたから………」

第157話

EXAIDウイルスによって姿を変えた男の言葉に化け物はピクリと体を揺らす。

“楔を打ち終えた”とはどういう意味なのか。

言い様のない悪寒のようなものが全身を襲うけど

理由は分からないが早めにあの男を殺さなければならぬ。

そんな思いが化け物の中に芽生えていた。

「意味のわからんことを！ 光栄に思うがいい、この私に殺されることを！」

原因の分からない悪寒を振り払うために化け物は大きく声をあげる。

それでも悪寒が晴れることはなく。

なにか、得たいの知れない恐怖も感じ始めていた。

「君には、もうなにもできないよ」

「なに——ぐあああああつ?!」

男の言葉に反応しようとした瞬間、化け物は声をあげて倒れ込む。

見れば化け物の右足がボロボロと崩れていつていた。

さらによく見ると化け物の全身に細かいヒビのようなものが広がっていつているのも見える。

突然の事態にマリオたちも驚き、反応ができずにいた。

「あ、足が?! 神たるこの私の足があああああ!!!」

「なにが起きているんだよ………」

「あ、足が崩れたのか………」

「でも、なんでいきなり?」

「………楔?」

なぜ化け物の足が崩れたのか。

原因が分からず、マリオたちも啞然とする。

そんなとき、ナハトがポツリと呟いた。

もしかしたら、この現象は先ほど言っていた「楔」というのが関係しているのではないか。

ナハトの呟きからそう考え、マリオたちは男を見る。

「ごめんね。ボクには君をもとの姿に戻すことはできないんだ」

「きさまが……きさまが原因かああああッ!!!」

顔をうつ向かせながら、男は悲しげに言う。

男の言葉から足が崩れた原因が男にあると分かったのだろう。

化け物は怒りの込められた声で大きく叫ぶ。

その叫びは凄まじいもので、離れていたはずのマリオたちのもとにまで衝撃が届くほどだ。

そして、そんな咆哮とも言える叫びをあげれば当然ながら化け物自身の肉体にも衝撃がいく。

ピシリ、という音と共に化け物の全身に広がっていたヒビがさらに大きなものへとなっていく。

「おのれ、おのれおのれおのれおのれおのれおのれおのれおのれおのれおのれおのれおのれおのれおのれ！」

足が崩れ、動くことの叶わない化け物は呪詛のように言葉を吐き出す。

やがて、化け物の全身のヒビが静かに崩壊を始める。

痛みはないのだろう。

化け物は恨みの込められた瞳で男を睨み続ける。

けして許さぬ、と。

必ず殺してやる、と。

近づけば喉笛に食らいついてくるのではないかと思えるほどの呪い^思。

それを正面から受け止めながら男は化け物が完全に崩れ落ちるのを見届けた。

第158話

さらさらと崩れ落ちた化け物だったものが床に広がる。
もはやそこには化け物がいたという証明はどこにもない。
ただただ灰のような、砂のようなものが小さく山になっているだけだった。

「終わった・・・・・・・・のか？」

「みたい・・・・・・・・だな」

「ちよつと危なかったわね・・・・・・・・」

「で、こいつは撃つの？」

「止めてくれないかな?!」

化け物の姿が完全になくなったことで、マリオたちはゆっくりと戦闘体勢を解いていく。

周囲を軽く見渡し、もうなにも起こりそうな様子もない。

なぜかナハトだけ戦闘体勢を解かず、姿を変えた男に銃を向けている。ナハトの行動に男は驚き、向けられている銃の射線から跳び退く。

あまりにも情けない跳び退き方にマリオたちは呆れた表情で男を見た。

「えっと、そいつは味方？だと思う……たぶん、おそらく、きっと、メイビー……」
「そこは確証を持ってやれ……」

「いや、まあ、ここで会ったわけだから仕方がないのかしらね……」

自信なさげなマリオの言葉に仕方がないと分かりつつもクツパとピーチ姫はツツコミを入れた。

マリオたちの言葉にナハトは渋々と言った様子で銃を下ろした。
向けられた銃を下ろされ、男はホツと息を吐く。

「ふう、助かったよ」

「それはごつちの言葉だよ。俺たちじゃアイツは倒せなかっただろうし」
「確かにな」

「そういえばなんでいきなり崩れていったのかしら」

「楔ってなに？」

男の言葉にマリオは首を振る。

事実としてマリオたちでは化け物を倒すことはできなかつただろう。

マリオの言葉に同意するようにクツパも頷く。

ふと、ピーチ姫とナハトは疑問に思ったことを口にする。

なぜ化け物の全身にヒビがはいつて崩れていったのか。

男の言っていた楔とはなんなのか。

分からないことがいくつか残っている。

「ああ、楔って言うのはEXAIDウイルスのことなんだよ。彼の拳を受け止めたときに打ち込んでおいたんだ」

「EXAIDウイルスと言うと君に感染しているウイルスのことだったよね」

「あの時か！」

男の言う打ち込んだタイミングが分かったのか、クツパは手を叩く。

ピーチ姫たちも理解したのかうんうんと頷いている。

「EXAIDウイルスに感染した彼は先に感染していたウイルスをEXAIDウイルスによつて駆逐されたんだ。肉体が生きていればボクと同じようになっていたのかもしれないけど、すでに死んでいたのだから肉体が崩壊してしまつたんだ」

「そういうことか」

「やはり中々に強力なウイルスなのだな」

「……………ねえ、新所長は？」

「話しに入れなくてそこで見てる」

「分かつてるなら触れないでくれないか?！」

EXAIDウイルスがどのような作用を起こしたのかを聞き、マリオたちは化け物が崩れていった理由に納得した。

少し離れた位置でマリオたちをチラチラと見ている新所長を指差しながらナハトは言う。

ナハトの告げ口に新所長は思わずツツコミを入れた。

第159話

目に見える範囲に驚異となるものが無くなったことが分かり、男はもとの姿に戻る。男の姿がもとに戻る様を見て、新所長はビクツと体を震わせる。

じつは男が姿を変えた際にも入り口の辺りで体を震わせていたのだが、誰も気づいていなかった。

「む、むう、まさか貴様にそんな力があるとはな……」

「あはは……本当は使いたくはなかったんですけどね……」

新所長の言葉に男は申し訳なさそうに頭をかく。

そう。

男はEXAIDウイルスを使うつもりはなかった。

今回はEXAIDウイルスの力でなければ解決できない事態だったために使ったと

いう次第だ。

「使いたくなかったのか。まあ、あんなに強力なウイルスならあまり知られたくはないか」

「ああ、利用されたりしても嫌だろうしな」

「仕方ないわよね」

男の言葉にマリオたちは理解を示す。

確かに男の感染しているE X A I Dウイルスは不老不死になり肉体が強靱になるというもの。

こんなウイルスが公表されればなにが起きるか。

権力者たちがこぞって男の肉体を研究し、不老不死を手に入れようとするのか。

不老不死の化け物として世界中から狙われ、殺され続けるのか。

どちらにしてもろくなことにならないのは確かだろう。

「さて、ボクはそろそろ行くよ。このウイルスの力を使ってしまったからには、ここにいらるわけにはいかないからね」

そうやって男は自身の体についたホコリをパツパツと払い、部屋から出ていこうとする。

力を使ってしまった以上、情報の漏洩が起る可能性は高いのでこの施設に残るわけにはいかない。

それが分かっているからこそ男は部屋から出ようとする。

「待て」

「新所長？」

ハッキリとした声で止められ、男は不思議そうに新所長を見る。
なぜ、自分を止めるのか。

もしや自分の体を研究したいとかそう言うことなのだろうか。

「なんででしょうか……」

「貴様、何を勝手に仕事を辞めようとしている」

男は振り向き、静かに新所長に尋ねる。

振り向いた男に新所長は真つ直ぐに目を見つめて言う。

「貴様は医療部のスタッフだろう。今はこんな状況になってしまっているが、しばらくすれば新しい人員も補充されるだろう。だがな、引き継ぎをするにしても教育をするにしても経験者が必要なのだ！」

「それは……」

「この新所長は何を言っているのだろうか。」

引き継ぎ？

教育？

そんな、自分に対して普通の人間のような扱いを……

「だから、なんだ……。その、とにかく！ 貴様が必要なのだ！」

「新、所長……本気ですか？」

「私に二言はない！」

男は思わず新所長に聞き返す。

新所長の言葉に嘘を言っているような雰囲気はない。

恐らくは本気で言っているのだろう。

「新所長……ありがとうございます」

「ふん！」

感極まり、男は新所長に頭を下げる。

そんな男の姿に新所長は恥ずかしそうに顔を逸らすのだった。

第160話

恥ずかしそうに顔を逸らしている新所長。

感謝の念を込めて頭を下げている医療部スタッフの男。

当事者でないのでハッキリとしたことは分からないが、新所長が医療部スタッフの男を救ったのだらうということのマリオたちはなんとなく理解した。

「さて、と。たぶんコレでアトラクションも終わりよね？」

「かなり楽しめた」

「……………あ?! そういえばアトラクションだったか?!」

2人の姿を見てから軽く伸びをし、ピーチ姫はマリオたちに話しかける。

恐らくはボスだと思わしき存在も倒し終え、追加で敵が現れる様子もない。

アトラクションが終わりだと考えても良いだろう。

ピーチ姫の言葉にマリオとクツパは忘れていた事実を思いだし愕然とする。

ここまでかなり本気で来ていたためにその衝撃は計り知れないものがあつた。

「……もしかして2人とも忘れてたの？」

「全力で挑んでるマリオもかつこよかつた」

ピーチ姫とナハトの言葉にマリオとクツパは恥ずかしそうに顔を逸らす。

別にアトラクションに本気で挑むことは悪いわけではないのだが、とてつもなく恥ずかしい。

マリオとクツパはピーチ姫とナハトに顔を見られないようにしながら顔を赤くしていた。

「ん、んん！お前たちにも世話になつたな。なにか望みはあるか？可能な限り叶えてやりたいが……」

マリオたちがいることを思い出したのか、新所長は顔を少し赤くしながら咳払いをする。

新所長の言葉にピーチ姫は顔を逸らしているマリオとクツパ、そして特に興味の無さそうなナハトを見る。

マリオとクツパはしばらくは何も反応をしないのではないのだろうか。

「えつと、別に構わないわ。私たちは他にも行くところがあるからそろそろ行くわね？」

「ここにやることも終わった」

「そうなのか？しかし、それでは我が家の『恩を受けたのであれば必ず返す』と言う家訓に……」

「いえ、ここは彼らを見送りましょう。彼らに他にも行くところがあると言うのなら無理に引き留めるべきではありませんから」

「む、むう……」

ピーチ姫の言葉に新所長は複雑そうな表情を浮かべる。

家訓を守ろうとすることからも分かるように新所長はかなりの善人。

仮にマテリアルにでもするならば、『秩序・善』と記されているだろう。

医療部スタッフの男の言葉に新所長は渋々と納得し、4人を見送ることを決めた。

「さ、そろそろ良いでしょ。ちやつちやと行くわよ」

「お、おう?!」

「ぬおっ?!」

「れっつごー」

いまだに顔を逸らして赤くしていたマリオとクツパの手を掴み、ピーチ姫は部屋の外に繋がる扉へと向かう。

いきなり手を引かれたことにマリオとクツパは驚き、転びかけるがなんとか体勢をたて直して歩き始める。

そしてナハトは完全にマイペースに3人のあとを追う。

そんなちよつとぐだぐだとした終わりを迎えながらも、新所長と医療部スタッフの男は4人に感謝の気持ちを抱きながら見送るのだった。

第161話

新所長と医療部スタッフの男の2人を背にマリオたちは部屋を出る。

部屋を出てしばらく歩くと、マリオたちの前に扉が現れた。

その扉には歯車のようなものが模様のように取り付けられており、歯車はそれぞれどこかに繋がっているのか回転をしている。

マリオたちが扉に近づくと、扉はガコンと大きな音をたてて開いていった。

「なんていうか、凄いな」

「製作にはかなり資金を使ったんじゃないかしら」

「まあ、あるところにはあるものなのだ」

目の前で自動で開いていく扉を見ながらマリオはポカンと口を開ける。

たかだかアトラクションの1つにここまで仕掛けを作るキノコランドにマリオは

少しだけ呆れていた。

マリオの言葉にピーチ姫は設計としての面で気になったことを呟く。

このような仕掛けの扉を作るのに安い金額でどうにかなると思えないため、その辺りが気になったようだ。

姫としての立場から国のお金の回り方もある程度知っておきたいので、仕方がないことだろう。

開いた扉を通り抜け、マリオたちは一番最初の部屋にたどり着く。

部屋の中にある受け付けにはアトラクションを始める際に説明をしてくれた受付のスタッフもいる。

「お疲れ様です。アトラクションはいかがでしたか？」

「ええ、かなり楽しめたわ」

「けっこう難しいところもあったけどね」

「それでも面白かったのだ」

受付のスタッフはマリオたちから銃を受け取るとアトラクションの感想を尋ねてくる。

疲れたし、難しくもあつたが内容としてはとても楽しめたのでマリオたちは満足そうに頷く。

「それは良かったです。私もテストプレイをやらせてもらつたんですけど道中の人の形をした昆虫とか、急に現れる蜘蛛型のモンスターとか対処が大変ですよね！」

「え」

「え」

「え」

マリオたちが満足そうに頷いたことが嬉しかったのか、受付のスタッフはアトラクションの内容を話し出す。

しかし、その内容はマリオたちが体験したものとは異なっており、どうにも同じものをプレイしたとは思えない。

受付のスタッフに嘘をついている様子はなく。

本当に言っている内容のゲームをやつたのだろうかということはうかがえる。

あまりにも奇妙な出来事にマリオたちはなんとなく背筋が冷たくなったような気がした。

「え、えーつと……」

「つ、次のアトラクションに行くのだ！」

「そ、そうね！」

背筋が冷たくなったように感じたのを誤魔化すようにマリオたちは大きく声を出して「バーチャルシューター」を出す。

自分たちが倒したものがなんなのか。

助けた彼らはもしかしたら本当の人間だったのか。

気にはなるが考えてはいけないような気がする。

「この世界には誰も知らない不思議がまだまだあるのかもしれない……」

慌てたように「バーチャルシューター」をあとにするマリオたちを見ながらナハトはポツリと呟いた。

その呟きは誰の耳にも届くことはなく、空へと消えていく。

ナハトはチラリと「バーチャルシューター」に目を向け、なにも言わずにマリオたち

のあとを追っていった。

第162話

逃げるように「バーチャルシューター」から移動してきたマリオたちは改めて手元にある案内図を開く。

すでに案内図に記されているアトラクションも大半が終わり、残っているのは「ビッグサンダーマツシユルーム」と観覧車くらいのものだ。

「はあ、はあ……。そ、それじゃあ「ビッグサンダーマツシユルーム」に行こうかしら？」

「ふう、ふう……。そ、そうだね」

「い、異議はない……。のだ」
「最後の絶叫」

息を整え、4人……。いや、ナハトは気にしていないようなので3人の間に流

れる空気を入れ換えるためにピーチ姫は次に向かうアトラクションの名前を言う。

まあ、すでに残りが2つな時点で選択肢は二択でしかないのだが。

少しだけ荒かった呼吸も収まり、マリオたちは次のアトラクションに向けて歩き出す。

向かう先はキノコランド最後の絶叫アトラクション、*ビッグサンダーマッシュルーム*だ。

「あ、そういえば勝負はどうなったのだ？」

「そういえばそうね」

「引き分け？」

「まあ、得点とか見てこなかったしね……」

「*ビッグサンダーマッシュルーム*」に向かう途中、クツパは思い出したように尋ねる。

確かにマリオたちは「バーチャルシューター」に入る前に勝負をすると話をしてい

た。

しかし、慌てて「バーチャルシューター」から出てきてしまったために勝負に重要な得点などを見忘れてしまったのだ。

「あー、みんなで協力したってことで俺が何か買ってくるよ」

「じゃあ、私たちは先に「ビッグサンダーマツシユルーム」に行ってるわね」

「変な飲み物を買ってくるでないぞ？」

「私もマリオに——」

マリオは軽く手を上げて飲み物を買ってくると3人に言う。

飲み物を買うに行くマリオについていこうとするナハトの首根っこを掴んでピーチ姫とクツパは先に「ビッグサンダーマツシユルーム」に行くことにした。

離れていくマリオの姿にナハトは手を伸ばしながらもがいている。

が、がっしりとピーチ姫によって首根っこを掴まれているためにマリオのもとに行くことは叶わなかった。

「んー、やっぱりここも変わった飲み物ばかりなんだな」

自販機にたどり着き、マリオは並んでいる飲み物を眺めていく。

そこに売られているのは先ほどの「ストロングヴェリー味・プロテイン配合」や「青汁さいだあ」のように普通の名前の飲み物はほとんどない。

「……この中からどれを買うべきか。」

もしも変なものを買って、渡してしまえばお化け屋敷のときよりも怒られるのは確実。

「……よし、これにしよう。」

マリオは並んでいる飲み物の中から買うものを選び、先に並んでいる3人のもとへと戻っていった。

第163話

買ったジュースを手にマリオは「ビッグサンダーマッシュルーム」の前に着く。

「ビッグサンダーマッシュルーム」はキノコランドでもかなり人気があるので、オーブンした初日だと言うのにたくさんの方が並んでいた。

ピーチ姫、クッパ、ナハトの3人はどこにいるのだろうか。

マリオはジュースを手に持ちながらキョロキョロと周囲を見渡す。

「お兄さん、1人？」

「ちよつと私たちと遊ばない？」

「……え？」

不意にかけられた声にマリオは一瞬だけ呆け、ポカンとした表情を浮かべる。声のした方を見るとそこにはやや派手目な格好の女性が2人いた。

どうやらマリオは逆ナンをされているようだ。

予想外の事態にマリオはどうしたらいいのか分からず、オロオロと狼狽うろたえている。

「えっと、連れがいるから悪いけど……」

「えー、ノリが悪いよー?」

「いーじゃん、私たちと遊ぼうよ」

マリオはやんわりと断ろうとするが、女性たちは気にせずにグイグイと押してくる。逆ナンをされた経験がないためにマリオはうまく断ることができない。

「……なにをしているのだ」

「く、クツパか?!」

背後から名前を呼ばれ、マリオは助かったといった様子でクツパの方を向く。振り向いた先にいたクツパの顔に表情はなく、少しだけマリオは気圧された。

「ちよつとー、私たちが話しかけてただけど?」

「急に割り込んでこないでよー」

話しかけてきたクツパに、女性たちは不満そうに言う。

マリオはなるべく自然なようにクツパの近くに移動した。

クツパは女性たちのことなど見向きもせず、マリオのことを無表情に見ている。

「そんな怖い顔の人より私たちと行こうよ！」

「そーそー、私たちが楽しいって」

「いや、その……」

女性たちもクツパを気にしないことにしたのか、再びマリオに対して話しかける。

マリオは困った表情を浮かべながら後退る。

マリオと女性たちの姿を見ながらクツパは静かに口を開く。

「消エロ」

「ツツツツ?!?!」

ぞくり、と女性たちの背筋に冷たいものが落ちる。

クツパの発した言葉はそこまで大きなものではなく、たった一言。その一言を聞いただけのはずなのにとてつもない寒気が起こった。直接言われていないマリオですらうすら寒いものを感じていた。

「ふ、ふん！別に本気で遊ぼうなんて思ってなかったしー！」

「怖くなんてないんだからー！」

それだけ言い捨てて女性たちは走り去っていった。

走り去っていく際に彼女たちの目もとから光る何かがかぼれていたのは気のせいではないだろう。

第164話

走り去っていった女性たちの姿を見てクツパはフンと鼻を鳴らす。

少し目を離していただけでこれだ。

これではおちおち別行動もできないではないか。

申し訳なさそうにこちらを見てくるマリオを見ながらクツパは思った。

「それで？ジュースは買えたのか？」

「あ、ああ。大丈夫だよ」

クツパの言葉にマリオは買ったジュースを見せる。

マリオが何を買ってきたのかは気になるが、ピーチ姫たちと早めに合流した方がいいだろう。

あまり遅くなって機嫌を悪くされても困る。

「なら、さつさとピーチ姫たちのところに行くぞ。貴様がまたナンパされぬとも言えぬしな」

「あははは………」

チクリとしたクツパの言葉にマリオは乾いた笑いしか出ない。

そしてクツパにつれられてマリオはピーチ姫たちのもとへと向かう。

「ビッグサンダーマツシユルーム」の近くにあるベンチ、そこにピーチ姫とナハトは座っていた。

当然ながら2人は美人であるためを遠巻きに2人を見ている男の姿が何人か見られる。

そこにクツパがマリオをつれて合流した。

「遅かったわね。何かあったの?」

「ええつと………」

「マリオがナンパをされていたのだ」

ピーチ姫の問いにマリオが答えづらそうにしていると、あっさりクツパがばらしてしまった。

クツパの言葉にピーチ姫とナハトは一瞬だけポカンとし、クツパの言葉を飲み込んでいく。

マリオがナンパをされていた？

誰に？

ナンパだから、男の人に話しかけられていた？

マリオ×男の人・・・？

いやいやいや、何を考えているの。

たぶん違うわね。

マリオが男なんだから、女の人に話しかけられたってことかしら？

・・・え？

「どういうこと?!」

「処す? 処す?」

マリオがナンパをされていたという事実を飲み込み、ピーチ姫はクツパに詰め寄る。

その隣でナハトはやや暗くなった目で尋ねてきた。

「ワガハイが追い払ったから安心しろ。それと処すでない」

「そう、それならいいのだけど……」

「処さないの……」

「……処すってなんなんだ？」

詰め寄ってくるピーチ姫の頭を押し退け、クツパは逆ナンをしてきた女性を追い払ったことを伝える。

クツパの説明を受け、ピーチ姫とナハトの勢いは沈静化する。

ナハトの言う『処す』という言葉の内容が分からず、マリオは首をかしげていた。

「それで？ ジュースは買ってきたの？」

「あ、うん。とりあえず飲めそうなやつを選んできたつもりだよ」

そう言つてマリオは買ってきたジュースを並べていった。

当然のように普通ではない名前のジュースたちを。

第165話

マリオの並べた4本のジュース。

それぞれの名前は、

// C・C・Cレモン //

ヴイイ

ヴイイ

ヴイイ

// V・V・V オレンジ //

// B B コーラ //

// P R ミルク //

と、変わった名前ばかりだ。

「……………買ってきてもらっておいてなんだけど、他にはなかったわけ？」
「どれも似たようなものだったんだよ……………」

並んだジュースの名前を見てピーチ姫は思わずマリオに尋ねる。

が、マリオ自身も望んでこれらのジュースを買ったのではなく、仕方なく買ったのだということ忘れてはいけない。

クツパ、ピーチ姫、ナハトの3人は改めてマリオの買ってきたジュースを見る。

「……………じゃあ、私はレモンにしておくわ」

「ワガハイは……………コーラにするのだ」

「私はオレンジかな」

「んで、残りのミルクが俺か」

置いてあるジュースの中でどれが飲めそうか。

4人はそれぞれジュースを選び方、手に取った。

ジュースの蓋を開け、それぞれが手に持つジュースに口をつける。

コクリ、と口の中にジュースが入っていく。

それと同時に口の中に広がるジュースの味。

「ん……………。けっこう美味しいわね」

「ふむ、悪くない味なのだ」

「美味しい」

「これは、当たりかな？」

ジュースを軽く飲み、それぞれが飲んだ感想を言う。

その味は少し前に飲んだ「ストロングヴェリー味・プロテイン配合」や「青汁さいだあ」とは比べ物にならないほど美味しかった。

あまりにも予想外な美味しさだったため、4人の顔には驚きの表情が浮かんでいる。そして4人はジュースを飲み終えた。

「名前は変わっていただけど美味しかったわね」

「うむ。少し予想外だったのだ」

「また飲んでもいいかも」

「意外だったよな」

飲み終えたジュースのゴミを捨て、マリオたちはそれぞれが飲んだジュースについて話しながら「ビッグサンダーマッシュルーム」の中に入っていく。

「ビッグサンダーマッシュルーム」

このアトラクションは巨大なキノコの山をコースターが上り、一気に山の周りを沿うように走りながら下っていくというアトラクションだ。

“キノコースター”系統と似ているように思えるかもしれないが、このアトラクションのコースターはキノコの形をしておらず、普通のコースターの形をしている。

なお、このアトラクションに乗る際に注意しなければならないことが1つだけある。

このアトラクションの一番最後に着水する場所があり、着水した時に乗っている人達に水が思い切りかかるといふことだ。

そのため、このアトラクションに乗る前にスタッフからカッパを受けとるのを忘れてはいけない。

ちなみに本日何人の乗客がカッパを受け取らずに濡れたのかをアトラクション前に書かれていたりもする。

第166話

“ビッグサンダーマツシユルーム”の中に入り、マリオたちはカツパを受け取る。

一応、近くにある売店で服や下着などは売っているのだが、だからと言って濡れて良いというわけでもない。

水飛沫を間近で見るのは構わないが、濡れるとなると話は変わるのだ。

「カツパも着たし、後は待つだけだな」

「ワクワクするわね！」

「もうそろそろ後ろの方も乗り終わるか？」

「“ウルトラキノコースター”よりは遅いのかな？」

コースターに座り、マリオたちは走り始めるのを心待ちにする。

ナハトの眩きの通り、“ビッグサンダーマツシユルーム”は“ウルトラキノコース

ター”よりも……いや、速度だけであれば“キノコースター”よりも劣るだろう。

しかし、“ビッグサンダーマツシユルム”の売りとなつてゐるのは着水した際の衝撃や、周囲にはじける水飛沫など。

そういった点で“ビッグサンダーマツシユルム”は“キノコースター”系統とは差別化がされているのだ。

「ん、動き出したか」

「まずは上つていくのだな」

「目指す先はキノコの山の頂上ね！」

「……タケノコの里」

ようやくコースターに他の客が乗り終えたのか、ブザーの音と共にコースターが動き始めた。

コースターはキノコの形をした山の頂上へと向かつてレールを上つていく。

ピーチ姫のキノコの山という言葉にナハトは別のお菓子を想像して、少しだけよだれを垂らしていた。

そして、コースターがもう少して頂上に着くかといった位置に来たとき、不意に誰かのケータイから音が鳴り響く。

たーんたた、たーんたた、た、たーん！

たらららら、たららつたー！

たー、たーたたたーたー、たーたたたーたー！

たらら、たらら、たららつらーた！

たらら、たらら、たららつらーた、たー！

どこか聞き覚えのある音楽。

具体的に言う宇宙に旅立つ船のような音楽。

聞こえてきた音楽にマリオたちは思わず顔を見合わせる。

「・・・・・・・・イスカランダルに行くのかな」

「ぶふうっ！」

「ふっ・・・・・・・・雰囲気・・・・・・・・ぶ・・・・・・・・ぶち壊し・・・・・・・・ね・・・・・・・・！」

「さらば、ちきゅうよ」

聞こえてきた音楽にマリオは思わず眩いた。

マリオの言葉にクッパはコースターが宇宙にまで飛んでいくのを想像したのか、思わず吹き出してしまった。

ピーチ姫も同じように笑いながら答える。

歌詞を知っていたのかナハトは歌いだしてしまった。

そして、いきなり流れた音楽に気が抜け、油断していたマリオたちの体に衝撃が走る。

「うわあっ?!」

「ぬおっ?!」

「きゃっ?!」

「おー!」

音楽が流れ出したのはもう少しでキノコの山の頂上に着くかといった位置。

そこまで長い音楽ではなかったが、音楽が流れている間にキノコの山の頂上に到達するのは当然のこと。

では、ジェットコースターが山の頂上にたどり着いたときに何が起きるか。

それは誰に聞いても簡単に分かることだろう。

答えは、加速して山を下りていく、だ。

第167話

加速したコースターに乗り、遠心力によって体が振られる。

その速度は「キノコースター」よりは速くはない。

それでもその速度は楽しむには充分だった。

「うおおー！」

「はははっ！これはおもしろいのだっ!!」

「なかなか楽しいわね」

「たーのしー！」

コースターの動きによってマリオたちの体は揺らされていた。

キノコの山を下っていく速度はマリオとクツパにも余裕をもって楽しめる速度で、ピーチ姫とナハトには物足りなさそうではあるが、それでも楽しめてはいた。

「おっ！もうすぐ着くか！」

見えてくるのは日の光を反射してキラキラと煌めいている水面。

コースターに揺られながら見えてきた光景にマリオは嬉しそうに声をあげる。

速度を上げ、ぐんぐんとコースターは水面に迫っていく。

そして、コースターは大きな水飛沫をあげて着水した。

「あはははっっ!!」

「きたーっ!!」

「濡れる濡れるー!!」

「いえーい!!」

大きな着水音とともに音に比例するように大きな水飛沫が発生する。

その水飛沫はとても大きく、近くに人がいれば軽く飲み込まれてしまいそうなほどだ。

着水したコースターは水面をゆっくりと進み、乗り込み口の方へと向かっていく。

「っはー………。おもしろかった………」

「カツパがなかったらビチョビチョだったな」

「水に着水した瞬間は最高だったわね！」

「楽しかったね」

乗り込み口へとゆっくり向かうコースターに乗りながらマリオはしみじみと呟く。

先ほどの水飛沫の大きさを思い出しているのか、カツパは乗る前に渡されたカツパを軽く摘まむ。

カツパがなければ着ている服は間違いなく全滅していただろう。

そして、コースターは乗り込み口に到着した。

「これで残るアトラクションは観覧車だけか………」

「時間もそこそこに遅い時間で、観覧車の上から見れば園内がライトアップされて綺麗であるうな」

「だから最後に残しておいたのよ」

「ロマンチック」

カップパを乗り込み口にいたスタツフに渡し、マリオたちはアトラクションから出た。周囲はすでに赤くなつてきており、ちらほらと帰り始めている人の姿も見られる。観覧車に着いて乗ったときにはちようど良い暗さになるだろう。

「長いようであつという間だつたなあ」

「そうだな。とても楽しい思い出になつたのだ」

「もう、終わったつもりになるのは早いわよ。早く行きましょう?」

「マリオ、並んで座ろう」

観覧車へと歩きながらマリオは今日一日の思い出を思い返していく。

“ウルトラキノココースター”では意識を失い。

お化け屋敷では出た後に買った不味い飲み物を飲まされ。

メリーゴーランドでは選択を迫られ。

“バーチャルシューター”ではほぼ全力での戦いをし。

このアトラクションでは大きな水飛沫を楽しんだ。

忘れようにも忘れられない、楽しい思い出だつた。

第168話

キノコランド、観覧車。

それはキノコランドにある建物の中でもっとも大きなアトラクション。

その大きさは、観覧車に乗って頂上に着いたときにキノコランド全体を裕に見渡せるという事実から察することができはすだ。

ちなみに普通の観覧車でほしい15分ほど、それに対してこの観覧車は一周回転するのに25分ほどかかる。

「で……つかいなあ」

「かなり大きいわね」

「城より大きく見えないか？」

「上を向くとなぜかみんな口を開けちゃう」

ポカーンと観覧車を見上げながらマリオたちは上を見る。

観覧車の近くに来るまでもにも観覧車の大きさは見えていたのだが、近くに着いて見上げるとその大きさがよく分かった。

マリオたちが観覧車を見上げて口を開けていることに気づいたナハトはポツリと呟く。

ナハトの呟きが聞こえたのか、クツパとピーチ姫は観覧車を見上げながら口を隠した。

「とりあえず、乗ろうか？」

「うむ。頂上でなら綺麗な夜景も見れるであろうからな」

「早く行こう」

「そうね……」

マリオの言葉にクツパとナハトは頷き、観覧車の入り口へと向かって歩いていく。

それを見ながらピーチ姫は静かに頷き、歩いて追いかけていった。

その心に何かを秘めながら……

「お！来たのだ！」

「乗れるやつ」

観覧車の回転する乗りカゴが迫ってきて、クツパとナハトは嬉しそうに言う。

マリオと夜景を見ることが楽しみで仕方がないのだろう。

仮に2人に尻尾があれば千切れんばかりに振られているに違いない。

「ほら！早く乗るのだ！」

「マリオ、来て」

「分かってる——よ?!」

クツパとナハトに呼ばれ、マリオが乗りカゴに乗ろうとしたとき、背中を引かれマリオは動きを止めた。

いきなりのことに驚き、マリオが振り返ると、ピーチ姫がマリオの服を掴んで動きを止めていた。

「ピーチ姫？急がないと……」

「ごめんなさいね。クツパ、ナハト」

「な?!」

「あ?!」

マリオの言葉を遮り、ピーチ姫はクツパとナハトに謝る。

すでに乗りカゴに乗っているクツパとナハトは突然の事態に理解が遅れ、そのまま扉が閉まってしまった。

乗りカゴに乗り、上へと上っていくクツパとナハトの姿をマリオはポカンと口を開けながら見送る。

マリオが呆然としている隙に、ピーチ姫はマリオの手を引いて次の乗りカゴの中へと入り込んだ。

「2人とも、本当に、ごめんなさい……」

マリオと乗ることを楽しみにしていたクツパとナハトを、裏切ってしまった行為にピーチ姫は小さく謝る。

呆然としているマリオと、ピーチ姫。

そんな2人を観覧車は頂上へと運んでいくのだった。

ゆつくりと観覧車は回転する。

呆然としていたマリオだったが、徐々に状況を飲み込むことができたのか、おずおずとピーチ姫へと顔を向ける。

「ピーチ．．．．．姫．．．．．？」

「マリオ、いきなりこんなことしてごめんなさい．．．．．」

マリオの言葉にピーチ姫は申し訳なきそうに答える。

ピーチ姫の様子にマリオはなにか理由があるのだと感じとり、強く聞くことはしないと考えた。

マリオはひとまずどうにもならないと思い、乗りカゴの椅子に腰をかけた。

乗りカゴは進む。

ピーチ姫はなにかを躊躇うかのように口を開いたり閉じたりしていた。

マリオはピーチ姫の様子に気づいていたが、特に尋ねるようなことはしなかった。

「あー．．．．．うー．．．．．」

なにかを言いたそうにピーチ姫は言葉を漏らす。

乗りカゴは上りの終盤へと差し掛かっており、あと数分もすれば頂上へと着くだろう。

空はすでに薄暗く、綺麗な夜景も見える。

が、ピーチ姫のことが気がかりなマリオは外の景色をあまり気にすることができていない。

間もなく頂上へと着くかといったところで、ピーチ姫は意を決したようにマリオへと顔を向ける。

「ま、マリオ！」

「な、なんだい………?」

ピーチ姫の発する気迫にマリオは思わず圧される。

ピーチ姫の顔は緊張で強張っており、興奮状態になっているのかやや赤く染まっている。

「わ、私は………」

意を決したとしても言いたいことを伝えるにはまだ勇気が足りないのか、ピーチ姫はモジモジと指を遊ばせている。

そんなピーチ姫の様子に、マリオはただ事ではないのだろうと緊張した表情になる。

「っ……………マリオ！」

「は、はいー！」

強く名前を呼ばれ、マリオは緊張しながら返事をする。

緊張した表情のピーチ姫は口を開いた。

「マリオ……………私は、あなたのことが好きです！」

今まで心に秘めていた思い。

ピーチ姫はマリオへの思いを伝えた。
それは、奇しくも乗りカゴが頂上に着いたときだった。

第170話

観覧車の頂上。

マリオとピーチ姫は向かい合った状態で止まっていた。

マリオの頭の中を駆け巡っているのはピーチ姫に告白されたという事実。

いま自分はピーチ姫に何を言われた？

顔を赤く染めているピーチ姫に好きと言われた？

ピーチ姫が自分のことを好きなのではないかということも察してはいた。

それでも確証はなかったためにあえて触れずにいた。

「そ．．．それは．．．」

「友人としてじゃないわよ．．．．．マリオ、私はあなたのことが異性として好きなの」

マリオの逃げ道を塞ぐようにピーチ姫は言葉が続ける。

友人としてではなく異性として好意を抱いている。

その言葉がとどめとなつてマリオの心に突き刺さった。

メリーゴーランドに乗る前にピーチ姫に言われた言葉がマリオの頭の中に甦つてくる。

『私たちは、いつかあなたに自分を選んでもらいたいと思つているのよ』

今日までのことを思い返してみればピーチ姫は好意をはつきりと行動で示していた。それを自分は言葉にされていないから、という理由で見えて見ぬふりをしてきたのだ。

「マリオ・・・・・・・・・・。答えを聞いても良いかしら・・・・・・・・・・?」

「お・・・・・・・・それは・・・・・・・・・・」

期待と恐怖。

二つの感情が合わさった表情でピーチ姫はマリオに尋ねる。

ピーチ姫の告白。

それはマリオにとつてとても嬉しいものだった。

クツパがピーチ姫を拐っていた頃、なぜマリオはピーチ姫を毎回助けに行っていたのか。

なぜ助けた報酬がキスという割りに合わないものでも文句を言わずに助けに行っていたのか。

その理由はとても簡単なものだった。

たった1つのもとてもシンプルで簡単な理由。

“マリオはピーチ姫のことが好きだった”

だから何度でもピーチ姫を助けることができた。

だから何度でも辛い戦いに身を投じることができた。

だがマリオはピーチ姫の告白を受け、自分の中の嬉しいという感情があまり大きくな
いことに気づく。

どうして……

俺はピーチ姫のことを……

『ありが……とう……』

あんなにも俺は・・・

『ま・・・・・・・・、、マ~~~~リ~~~~オ~~~~ツツ!!』

俺は・・・・・・・・

『こんなにも、きさまの……マリオのことを思ってしまう……ワガハイの、ことを……気持ち悪いと、思うか……?』

脳裏によぎったのは涙を流し怯えるように体を震わせていたクツパの姿。

その姿を思いだし、マリオは自分の中にある一つの思いをはつきりと自覚した。

第171話

自覚したその思い。

その思いを伝えたい相手は目の前にいる彼女——ピーチ姫

——ではない。

マリオの様子から告白の答えを理解したのだろう。

ピーチ姫は一瞬だけ悲しそうな表情を浮かべた。

「ピーチ姫…….ありがとう。こんな俺を好きだと言ってきてくれて…….」
「マリオ…….」

そう言ってマリオはピーチ姫に頭を下げる。

こんな自分を好きだと言ってくれてありがとう。

こんな優柔不断な自分を思ってくれてありがとう。

こんな——

——君の思いに答えられない自分に告白してくれてありがとう。

「……………でも、ごめん。俺は、泣いてほしくない人ができたんだ……………」

「そう……………」

彼女の思いを、振り絞った勇気を、拒否してしまった。

いまならば彼女に殴られたとしても文句は言えないだろう。

どうしてフラれてしまったのか。

どうすればマリオと恋人になることができたのか。

泣いてほしくない人とは誰なのか。

頭を下げるマリオの姿に、ピーチ姫はいまにも泣き出してしまいそうな感情を必死に抑え込む。

本音を言えば今すぐにでもマリオに抱きついて大きく泣き出してしまいたい。

でも、その資格はフラれた自分には存在しない。

それが分かっているからこそピーチ姫は自分の体を抱き締めて顔を俯かせていた。

「ピー……………」

「ごめんさい……………。今は……………今だけは放っておいて……………」

話しかけようとするマリオの言葉を遮り、ピーチ姫は観覧車の乗りカゴから降りる。

観覧車はいつの間にか下に辿り着いていた。

ピーチ姫の言葉にマリオは口をつぐみ、なにも言わずにピーチ姫の後を追って乗りカゴから降りた。

観覧車から降り、少し行つたところにクツパとナハトはいた。

「ピーチ姫！ さっきのはどういう．．．つも．．．りな．．．のだ．．．？」
「．．．．．．ピーチ姫？」

マリオとピーチ姫の姿に気づいたクツパとナハトは怒った表情で歩いてきたが、ピーチ姫の様子がおかしいことに気づき困惑した表情でマリオとピーチ姫を見た。

悲しそうな表情のピーチ姫。

そして、申し訳なささうではあるが、なにかハッキリとした思いを感じるマリオ。

「ごめんさい。今は聞かないで．．．．．あとで必ず説明するから．．．．．」

「う、うむ．．．．．？」

「分かった」

困惑している様子のクツパとナハトに対して、ピーチ姫は首を横に振りながら答える。自分たちを別の乗りカゴに乗せて2人で何があったのか。

隣の乗りカゴにいたクツパとナハトに見えたのはマリオが頭を下げていたことだけ。声は聞こえないので何を話していたのかすら分かっていない。

故にクツパとナハトの頭の中はハテナマークで埋め尽くされていた。

第172話

観覧車の出入り口から少し離れたベンチ。

そこにマリオたちは座っていた。

座っている順番はナハト、マリオ、クツパ、ピーチ姫で、ピーチ姫は意図的にマリオから一番離れた場所に座っていた。

明らかに観覧車に乗る前と違う様子のピーチ姫にクツパとナハトは疑問を感じるが、どこか聞いてほしくなさそうなピーチ姫の様子に聞くことができずにいた。

少し前のナハトであればピーチ姫の様子など気にもせず、マリオと何があつたのかを追求していただろう。

その辺りを考えても、ナハトの内面ははかなり変わってきているということなのだろう。

「ピーチ姫……?」

うつむき、口を閉じたままのピーチ姫の様子にナハトは心配そうに口を開く。
しかしピーチ姫は首を横に振るばかりで答えようとしない。

「……………ナハト、ピーチ姫からはワガハイが話を聞いておくのだ。だからマリオと観覧車にでも乗ってくると良いのだ」

「……………良いの?」

「構わぬ。マリオ、エスコートは任せただのだ」

「あ、ああ……………」

マリオに手を引かれ、ナハトは観覧車に向かっていく。

だがナハトはピーチ姫が気になるのか、チラチラとピーチ姫に視線を向けていた。

マリオと観覧車に乗れるのは嬉しい。

でもピーチ姫の様子も気になる。

だって、ピーチ姫は——

「あ……………れ……………」

私とピーチ姫の関係は．．．．．なに？

不意に浮かんできた思いに思わず口から言葉が漏れる。

いままで一回も考えたことがなかったこと。

いや、ピーチ姫の優しさに甘えて考える気がなかったこと。

「私は．．．．．」

私は、ピーチ姫とどんな関係なの？

私は、クツパとどんな関係なの？

私は、マリオとどんな関係なの？

1つが気になれば他のことも気になっていく。

私はいままで一方的にマリオに自分の感情を押し付けていた。

じゃあマリオは？

マリオは私のことをどんな風に思っていた？

わからない．．．．．

マリオが私のことをどう思っているかだなんて考えたこともなかったから．．．．．

マリオは私のことをどんな風に思っているのだろう。

観覧車の乗りカゴに乗り、向かいに座るマリオを見つめてぼんやりと考える。

「ナハト、綺麗な景色が見えるよ」

「うん……」

マリオの言葉がうまく頭に入ってこない。

どうしたらマリオの思っていることが聞ける？

マリオが私のことをどんな風に思っているのかを知るのはとても怖い。

もしも、いままで嫌なのを我慢していたのだとしたら……

もしも、私のことが嫌いだったとしたら……

もしも、もしも、もしも——

どうしようもないほどに悪い考えばかりが頭の中に浮かんでくる。

ぐるぐると渦巻いていく思考。

ぐちゃぐちゃに混乱していく心。

答えのない頭のまま、乗りカゴは頂上に着きそうになっていた。

第173話

マリオが自分のことをどう思っているのか。

悩む頭のまま、観覧車の乗りカゴは頂上に着いてしまった。

頂上から見える景色は素晴らしく、悩みなどがない状態であればとても素晴らしい思い出になっていただろう。

しかし今のナハトにはそんな余裕もなく。

顔は外を向いているのだが、瞳に外の景色が入ってきてはいなかった。

「ナハト………?」

「ん………な、なに………?」

ぼんやりと外に顔を向けるナハトの様子になり、マリオはナハトに声をかける。

マリオの言葉にナハトは慌てた様子で返事をした。

しかしその言葉にいつもの元気はなく、マリオはそれがどうしようもなく気になった。

「……ピーチ姫が気になるのか？」

「……それも……ある」

悲しそうだったピーチ姫の姿。

それは確かに気になっていたこと。

だけど、なぜ自分がこれほどまでピーチ姫のことが気になっているのかが分からなかった。

「マリオ……、私とピーチ姫ってどんな関係……？」

「え……？」

ナハトの問いにマリオはキョトンとした表情になる。

あまりにも答えが出てこず、思わずマリオに尋ねてしまった。

いきなり突拍子もない質問をしたからマリオを困らせてしまったかもしれない。

質問の答えを聞くためにマリオの顔を見る。

「……?なんで、笑ってるの?」

「いや、ナハトもそういつたことで悩むようになったんだなあ……って思ったら
ついで、ね」

マリオはナハトの顔を見ながら微笑ましいものを見るかのように笑っていた。

行動のほとんどがマリオを基準にしていたナハトがマリオ以外の人物を気にしている。

そしてその人物と自分の関係について悩んでいる。

変わってきているナハトにマリオは嬉しきを感じていた。

「むう……」

「ははは、ごめんごめん。そうだね、ナハトとピーチ姫の関係か」

頬を膨らませ、やや不機嫌そうにするナハトに謝罪をし、マリオはナハトの質問を考
える。

といつても、もうほとんど答えは出ているのだが。

「ナハト、ピーチ姫と話すのは好きかい？」

「ん………。楽しいと思う」

ピーチ姫は私と同じでマリオのことが好きだ。

でもピーチ姫と話すことは嫌いじゃない。

「じゃあ、ピーチ姫と一緒に何かをするのは？」

「別に、イヤじゃないよ」

ピーチ姫と何かをするのも、新しい何かを知ることができるから嫌いじゃない。

「もしもピーチ姫が悲しんでいたら？」

「………。イヤな、気持ちになる……と、思う……」

観覧車に乗る前、悲しそうな表情のピーチ姫を見たときになぜか気になってしかたが

なかった。

「なら、ナハトとピーチ姫の関係は簡単だ」

「そう、なの？」

簡単だというのなら教えてほしい。

私とピーチ姫はどんな関係なのか。

それが分かれば私の中のモヤモヤもなくなるはずだから。

「ああ。ナハトとピーチ姫は『友達』なんだよ」

「友……達……」

ストーン、とその言葉がナハトの心に落ちる。

ああ、そうか、自分とピーチ姫は友達で良いのか。

友達だから悲しそうな姿が気になったのか。

自分とピーチ姫の関係を知り、ナハトの頭の中はスッキリとしていった。

第174話

観覧車に向かつていくマリオとナハトを見送り、クツパは改めてピーチ姫を見る。
ピーチ姫は先ほどと変わらずにうつむいたままだ。

「はあ………いい加減に何があつたのかを教えてはくれぬか？」
「………ええ」

クツパの言葉にピーチ姫はゆつくりと口を開く。

本音を言つてしまえば何があつたのかを言いたくはない。

特にクツパにはなにも教えたくなかつた。

でも、それと同じくらいに自分の中に悲しさがあつて、誰かに対して思い切り吐き出したかつた。

ピーチ姫は自分の中でぐるぐると渦巻く心に短く息を吐く。

「クツパ、私ね……………。マリオにフラれちゃった……………」
「な……………に……………?!」

ピーチ姫の言葉にクツパは驚き、ピーチ姫の顔を見る。

言葉にしたことよってフラれたことを改めて理解してしまったのだろう。

ピーチ姫の瞳からは大粒の涙がポロポロとこぼれ落ちていた。

「……………観覧車で2人きりになったのはそういうことであつたか」

「ごめんなさい……………」

なぜピーチ姫が観覧車でマリオと2人きりになったのか。

ピーチ姫の言葉にクツパは合点がいく。

なぜ急に告白をしたのかは分からないが、そのために2人きりになったのだろう。

「ふふ……………情けないわよね。あなたとナハトを裏切つて2人きりになって告白して、結局フラれちゃうんですもの……………」

自身を嘲笑うようにピーチ姫は言い捨てる。

告白をするためにライバルであり、友達でもある2人を裏切り。

その結果として思い人にフラれる。

なんて滑稽。

友達を裏切った女には相応しい仕打ちだろう。

うつむいたピーチ姫の顔から涙が落ち、地面を濡らす。

「・・・・・・・・言いたいことはそれだけか？」

「・・・・・・・・え？」

罵られるだろう。

怒られるだろう。

蔑まされるだろう。

そう思っていたピーチ姫は予想外の言葉に顔をあげる。

「確かに、ピーチ姫はワガハイたちを出し抜いただろう」

「……ええ」

「だがな、そもそもとしてワガハイたちがここに来たのはピーチ姫が誘ってくれたからであろう」

そう。

キノコランドに来ることになったのはピーチ姫が3人を誘ったから。

もしもピーチ姫が誘わなければ——まあ、いつかは来ていたかもしれないが……今日、ここまで楽しむこともできなかっただろう。

「でも……」

「それと、だ。ピーチ姫、きさまは一度フラれただけで諦めるのか？」

困惑するピーチ姫に、クツパはさらに尋ねる。

たった一度フラれただけで諦められるのか。

ピーチ姫の思いはその程度のものだったのか。

ワガハイが好きであったピーチ姫はそんなにも弱かったのか。

「ワガハイは何度負けてもピーチ姫を拐っていただろう。ならば、今回はピーチ姫も諦めずに立ち上がらぬか！」

「クツパ．．．．．」

ピーチ姫の脳裏によみがえるのはもとの姿の時のクツパ。

彼は何度も自身を拐い。

何度倒されても諦めることはなかった。

今はライバルであるはずの自分に．．．．．

「どうして．．．．．私を元気づけようとしてくれるの？私が諦めればあなたが結ばれやすくなるじゃない．．．．．」

「ふん、ワガハイは強欲でな。全員が幸せになれる未来を一番欲しているのだ」

ピーチ姫の問いにクツパは顔を逸らしながら答える。

ピーチ姫の位置からは見えなかったが、クツパの顔はやや赤く染まっていた。

「それに、さつきみたいに出し抜かれはしたが。ワガハイはピーチ姫のことは嫌いにな

れないのだ」

自身がマリオに言われた言葉を思い出しながらクツパは鼻を搔く。

一瞬、ほんの一瞬だけ。

クツパの姿にもとの姿のクツパが重なって見えた。

第175話

クツパの言葉をピーチ姫は飲み込んでいく。

『一度フラれただけで諦めるのか』

そんな………

そんな、簡単に………

「簡単に………諦められるわけないじゃない!!私だって、私だって諦めたくなんてないわよ!!」

抑えていた、堪えていた感情が爆発する。

諦めたくなんてなかった。

叶うのなら結ばれたかった。

でもマリオには心に決めた人がいる。

そして、それは私ではない！

「あなたに……、フラれていないあなたに何が分かるのよ?!」

ピーチ姫はクツパに詰め寄り、強く胸を叩く。

ピーチ姫の心からの言葉。

自分が選ばれなかったという悲しみ。

そして、マリオの様子から知った彼の思っているであろう人物。

それら全ての入り交じった悲痛な叫び。

その全てをクツパは正面から受け止めていた。

「そうだな、ワガハイには分からぬさ。……フラれてそこで諦めるような考えはな」

涙を流し、自身の胸を叩くピーチ姫を見ながらクツパは言う。

少し前の、クツパであればここまで強い考えはできなかつただろう。

しかしマリオに思いを伝え、クツパ本来の気質も合わさり、かなり強気な考えになっている。

なお、マリオ本人の目の前でも同じようにいられるかと聞かれれば話は別になるが。

「確かに、フラれれば辛いであろう。もしも、ワガハイもフラれればどうなるか分からぬ。だがな、そこで諦めれば何もかもを終わるのだ」

「……だから、あなたは何度も私を拐ったの？」

けっして諦めることなく。

けっして引くこともなく。

何度も、何度でも。

諦めずに何度でも挑み続けること。

それこそがクツパの強さなのだろう。

「……諦めないで、良いの？」

「うむ」

「マリオを……好きでいて、良いの？」

「うむ」

「みんなで……マリオと、あなたと、ナハトと、私の全員で、幸せになれるの？」

「さあな……だが、諦める気はないのだ」

クツパの言っていた、全員が幸せになれる未来を欲していると言う言葉。それが本当に叶うのかは分からない。

クツパ自身も叶うかは分からないが、諦めるつもりはないようだ。

「……ふふつ、なら私も諦めないでいこうかしら」

クツパの言葉にピーチ姫は小さく笑う。

クツパはその言葉通り絶対に諦めることはないだろう。

なら自分もマリオのことを諦めずにいよう。

「まあ、マリオの一番を譲る気はないがな！」

「むっ……」

腕を組み、自信満々にクツパは言う。

そんなクツパの様子にピーチ姫は少しだけムツとした表情を浮かべた。

「……あなたが、私にやる気を出させたんだからね。私だって負けるつもりはないわよ」

「ふふん。さつきまで泣いていたやつにできるかな？」

すでにピーチ姫に悲しそうな雰囲気はない。

クツパとピーチ姫は互いに挑発するような表情で見合う。

そんな2人に向かって、観覧車から降りたマリオとナハトが歩いてきていた。

第176話

観覧車が一周し、降りたマリオとナハトはクツパとピーチ姫のもとに向かって歩く。歩いているナハトに悩んでいる様子はなく、どこか晴れやかな表情に見える。

「………さすがに2回目だと時間も気になっちゃうなあ」

「まあ、一周が長いから」

キノコランドの観覧車の一周にかかる時間は25分。

単純に考えてマリオは合計で50分も観覧車に乗っていたことになる。

ほぼ1時間。

景色が良かったとはいえ、さすがに辛く感じるだろう。

「ただいま」

「おかえりなさい。景色はどうだったかしら？」

「うん。とても綺麗だった」

戻ってきたマリオとナハトにピーチ姫はまだ少しだけぎこちないが、笑顔で話しかける。

ピーチ姫の様子がマリオは少しだけ気になったが、なにも言わなかった。

「さすがに2周目であれば飽きてしまったのではないか？」

「いや、まあ、ね……」

クツパの言葉にマリオは頬を掻きながら答える。

クツパも観覧車を2周するのは大変だと思っていたようだ。

まあ、マリオとナハトを観覧車に行くように勧めたのはクツパなのだが。

「えっと、とりあえずアトラクションも乗り終わったし……帰ろうか？」

「そうね。時間も遅いし」

「とはいってもキノコタウンにはすぐ着くのだがな」

少しだけピーチ姫に話しかけづらそうにマリオは言う。

そんなマリオの心境とは異なり、諦めないことを決めたピーチ姫はあくまで普通に答える。

まあ、気まずそうにしているマリオはピーチ姫をフツた報いとも思っておけばいいだろう。

周囲にちらほらと出てきた帰宅する人たちを見ながらクツパはポツリと言った。

確かにクツパの言うとおりキノコタウンからキノコランドまでは歩いて20分ほど、忘れているかもしれないが、キノコランドにはピーチ城で借りた車で来た。

歩きで20分ほどなのだから車では5、6分ほどでキノコタウンに着くだろう。

とはいえキノコタウンに着いたとしてもキノコタウンからピーチ城に帰る道もあるのだが。

「城に着く時間は遅いでしょうし、泊まっていくでしょ?」

「そうだな。この時間ではワガハイの城も浮上しているであろうしな」

「………浮上?」

「ナハトは見てなかったか?」

「マリオを探すことしか考えてなかった」

すでに時刻は遅く、お土産などを見ていればクツパ城は浮上してしまっているだろう。

「……まあ、クツパ自身はクラウンで帰れるのだが、あえてその事は口にしないかった。」

「じゃあ早めに売店に向かいましょう！」

「え、ちよつ、まつ?!」

「なっ?!」

「待って！」

そう言ってピーチ姫はマリオの手を掴んで走り出す。

いきなりピーチ姫に手を掴まれたことにマリオは困惑し、ピーチ姫に引かれるがままになっていた。

ピーチ姫の行動にクツパとナハトは慌ててピーチ姫とマリオの後を追った。

第177話

ピーチ姫に手を引かれ、マリオは売店に到着する。

なぜ、フツたはずの自分の手を掴むのか。

なぜ、そんなにも楽しそうに自分の手を掴んでいるのか。

マリオの頭の中にはハテナマークが乱立していた。

「び、ピーチ姫………?」

混乱した頭のまま、マリオはピーチ姫に話しかける。

自分の手を掴んで気まづくはないのか。

それとももう割りきっているのか。

混乱しているマリオの表情が面白いのだろうか、ピーチ姫はマリオの顔を見てクスリと笑う。

「マリオ、私ね、決めたの」

「な、何をだい……?」

ピーチ姫は何を決めたと言うのだろうか。

どこかスツキリとした表情のピーチ姫に、マリオはおずおずと尋ねる。

「あなたに好きな人がいるのは分かったわ」

「……ああ」

俺はピーチ姫の告白を断る際にその辺りのことを伝えている。

ピーチ姫の言葉にマリオは短く答える。

ちなみにクツパとナハトはまだ売店に着いていない。

「でも、私は諦めないことにしたの」

「え……?」

「あなたに好きな人がいても、それ以上に私を好きになるように頑張るのよ」

ピーチ姫はマリオの口元に指を当て、イタズラっぽく笑みを浮かべる。

その表情はマリオがいままでに見たことがないほどに晴れやかで、マリオはピーチ姫のその表情に見惚れていた。

「や、やっと着いたのだ……」

「ピーチ姫、意外と足が速い……」

マリオがピーチ姫に見惚れていると、クツパとナハトがようやく売店に着いた。

2人の息はやや荒く、ここに来るまでにかなり走ったことがうかがえる。

「むしろマリオの手を引いた状態ではるかに早く売店に着いているピーチ姫に驚きである。」

「ようやく着いたわね。それじゃあお土産を選びましょうか」

「……勝手に走り出して、よく言うのだ」

クツパとナハトの姿を確認し、ピーチ姫は売店の中に入っていく。

そんなピーチ姫の後ろ姿をクツパは恨みがましそうに見ながら呟いた。クツパの呟きにマリオは苦笑するのだった。

「さて、と。どんなお土産がいいかしら？」

「キーホルダーとかだと数を揃えるのが大変だよな」

「ワガハイの城や、ピーチ姫の城にいる全員に個別で買っていたらきりがないうであらうな」

「お菓子でいいんじゃない？」

クツパ城とピーチ城。

そのどちらにもかなりの人数がおり、その全員に個別にお土産を買うのはかなり大変だろう。

まあ、カメックおぼやキノじいなど、とくに世話になっている何人かに個別で買うくらいは可能だろう。

頭を悩ませている3人のもとにナハトがお菓子の箱を持って提案した。

お菓子であれば1つの箱に複数個入っているので買いやすいだろう。

その辺りのことを考えるとお菓子というのも悪くない選択肢だろう。

ナハトの持つてきたお菓子の箱を見てマリオたちはうなずく。

「これをいくつか買うことにしましょう」

「そうだな。これであれば不公平などもないだろう」

「俺もルイーダにお礼でなにか買わないとな」

城にいる人たちへのお土産を決め、ピーチ姫とクツパはお菓子の箱をいくつか選びに行った。

第178話

クツパ城、ピーチ城、ルイージへのお土産をそれぞれ選び終え、マリオたちは売店から出てきた。

「ふう、とりあえずはこれでオツケーね」

「………キノじいへのお土産は本当にそれでよかったのか？」

ピーチ姫の足元にある物を指差しながらクツパは尋ねる。

ピーチ姫の足元にある物。

それは赤や青に光を発しており、とても目に悪そうだ。

「ええーだってキノじいだったらいっつもあんなに地味な色なのよ？ だったら私が違う色の物を用意するしかないじゃない！」

「えく……」

「でもその色は……なあ？」

「目がチカチカしそう」

クツパの言葉にピーチ姫はフンスと鼻を鳴らし、自身の足元に置いてある物を誇らしげに指差す。

ピーチ姫の言葉にマリオたちは顔を見合わせて言葉を濁す。

ピーチ姫がキノじいへのお土産として選んだ物。

それは、カラフルに光を発するキノコの形をした帽子だった。

忘れている人もいるかもしれないが、キノピオたちの頭の上にある色とりどりのキノコの房のような物は帽子で、着脱が可能だ。

なお、帽子をはずした頭には髪の毛がちやんと生えている。

「いいじゃない。お城の中が明るくなるのよ？」

「いや、明るすぎだろ」

「常時キノじいだけパレードになっておるではないか……」

「タンタカタンタン、タンタカタカタカ、タンタカタンタン、タンタカター」

キノじいとその帽子をかぶっている姿を想像し、クツパは呆れた顔をする。

その隣ではパレードと言う言葉に反応したのか、ナハトがリズムを口ずさんでいた。というか、かなり危ないのでナハトは口ずさむのを止めて欲しい。

「そういうクツパだつてカメックおばばに何を選んだのよ？」

「ふふん。ワガハイはそこまで奇抜ではないのだ。見よ！」

ピーチ姫の言葉にクツパは自慢気を選んだものを見せる。

それは様々な色に変化する布で、服のようにも見える。

「……………それは？」

「おばばはあまり明るい色の服を持っておらぬからな。だからこの色に変化する服にしたのだ」

はつきり言つてどっちもどっちだった。

なぜこうも変なものを選んじまうのか。

ひとえ

単にそれはキノコランドで遊んでいることによる気分の高揚が原因だろう。

自身の服のセンスなどが壊滅的でないこともそれを裏付ける理由になるはずだ。

「マリオは何を買ったの？」

「ん、俺は普通にキーホルダーにしたよ。ルイージだけだしね」

ピーチ姫やクッパと違い、お土産を買う人物が一人しかいないマリオは無難なものを選んでいた。

第179話

選んだお土産を手に、マリオたちはキノコランドを出た。
辺りはすでに暗く、駐車場にももう車はほとんど残っていない。

「やっぱり選ぶのにも時間をかけすぎてしまったか？」

「いや、大丈夫だろ。それにそれだけ真剣に選んでいたってことなんだから」

「そうよ。それに適当なお土産なんて選びたくないわ」

「お菓子にも種類がいっぱいあったからね」

そう。

売店には箱のお菓子が何種類もあったのだ。

その種類は実に20を越え、それぞれがとても美味しそうなお菓子だったのだ。

例えば、キノコランドのアトラクションの形をしたクッキー。

例えば、〃ビッグサンダーマッシュルーム〃をモチーフにしたチョコ菓子。

例えば、観覧車から見える景色をイメージしたキャンディ。

他にも様々なお菓子があつた。

「さあ、車に乗せちゃおう。早くしないと遅くなっちゃうしね」

「そうだな」

「ええ」

「積み込めー、乗り込めー」

マリオの言葉にピーチ姫とクツパは頷き、ナハトはどんどんとお土産を車に乗せていった。

あまりにもどんどんと乗せていっているのでお土産のお菓子が割れたりしないかじやつかん不安である。

「けつこうお土産もあるし乗りきるか不安だったけど……意外と大丈夫だったな」

「意外に収納が広かったのだな」

「小さくてもバッチリ収納。それがこの車のキャッチコピーらしいわ」

「名は体を表す」

乗りきったお土産にマリオは少しだけ意外そうに眩く。

マリオ自身は運転席に乗っているために後ろの席がどうなっているのかはあまり分かかっていなかったのだ。

「えっと、帰るわけだがやり残したことはないか？」

「特には思い浮かばないわね」

「大丈夫だと思うのだ」

「記念写真は？」

「「ああー……」」

ナハトの言葉にマリオたちはポンと手を叩く。

思い返せば記念写真を撮っていない。

これは思い出を残すためには忘れてはいけないことだった。

「んー……じゃあ、入り口のところで撮っておこうか」

「中での写真を撮り忘れたのは痛いけど仕方がないわね」

「次に来たときに撮るしかないな」

マリオの提案に3人は頷き、キノコランドの入り口へと移動した。

入り口にはまだキノコランドのスタッフが立っており、写真を頼むことができそう
だ。

「なるほど。わかりました。では撮らせていただきますね」

「お願いするよ」

「じゃあ、どんな風に写ろうかしら」

「まあ、普通に並ぶのでは味気ないかもしれないな」

「私、マリオのとなり」

「それは譲れない!!」

今、マリオのとなりで写真に写る権利を得るための戦いが始まる。

第180話

争いはなにも生まない。

なんと綺麗な言葉だろう。

なんと優しさに満ちた言葉だろう。

この言葉を言った人物はとても優しい人物なのだろう。

そんなことがこの言葉からうかがえるようだ。

そう、とても感動的だ。

——
だが、無意味だ。

この言葉を言った人物は、なにも分かっていないのだろう。

この言葉を言った人物は、なに不自由なく生きてきたのだろう。

この言葉を言った人物は、成長すると言うことを・・・・進化すると言うことを理解していなかったのだろう。

人は、争うからこそ成長をする。

人は、争うからこそ相手に勝利をするために自身を進化させる。

それは肉体であつたり。

はたまた戦い方であつたり。

個で勝てないのであれば郡となつて戦うことを。

素手で勝てないのであれば武器を使うことを。

人はそうして進化をし、いま現在にまで至るのだ。

故にゆえこそ、その言葉を否定し、この言葉を送ろう。

“争いによつてこそ、進化は生まれる”

「勝利のチョコキ」

「そんな……ワガハイが負ける……？」

「まだよ！まだ、マリオのとなりは反対側が空いているわ！」

高々とVサインを掲げ、ナハトは自身の勝利を宣言する。

そんなナハトの前でクツパは膝をつき、シヨックを受けていた。

しかしマリオのとなりに写る権利はもう1つ存在している。

ナハトのいるマリオのとなりとは反対側の位置。

まだとなりで写る権利は残っていると言うのに、落ち込んでいる暇はなかった。

「そっだ……。まだ、終わっていないのだ！」

「クツパああああああ!!」

「ピーチ姫ええええええ!!」

「!じゃん、けん!ポン!!」

凄まじい気迫と共にピーチ姫とクツパは手を出す。

マリオの目には、2人の背後に巨大な竜と虎が見えたような気さえした。竜と虎を見せるほどの凄まじい闘気。

それほどまでの気合いを込めて2人はじゃんけんをしていた。

「あいこでしょ!しょ!しょ!しょ!しょ!」

繰り出される拳。

拳は凄まじい速度でその形を変えていく。

石、ハサミ、紙。

繰り返すように石、と思わせての紙。

互いに相手の出してくる手を読み合いながらの接戦が繰り広げられていた。

「あいこで………」

「しよっつ!!」

「あっ!!」

何度目かのあいこを越え、遂にピーチ姫とクツパの出した手が異なるものになった。

2人の出した手を見て、マリオは思わず声をあげる。

ピーチ姫の出した手。

それは自身の強い思いを具現化するかのような石を表すもの、グー。

それに対するクツパの出した手。

それは自身の勝利のために障害となるものを切り裂くもの。

そう、クツパの出した手。

それは石を包み込んで見えなくするもの……ではない。

目の前に立ち塞がる紙を切り裂き、未来を開く手——

——
チヨキだ。

第181話

自身の出した手、チョキを見ながらクツパはふるふると体を震わせる。
ピーチ姫が出したのはグー。

誰が見ても分かるようにクツパの出した手が負けである。

「そんな……」

「悪いわね。クツパ」

項垂れるクツパにピーチ姫は勝ち誇ったように拳を……グーを突き出す。
なぜクツパが負けたのか、それは単にクツパがピーチ姫の出す手を読み間違えた。
ただ、それだけのことだった。

「えっと、撮る場所は決まりましたか？」

「……みたいだ。待たせて悪かったね」

クツパとピーチ姫の様子を見ながらスタッフのキノピオはおずおずと尋ねてくる。

まあ、目の前でいきなり白熱したじゃんけんを始められたら困惑しても仕方がないだろう。

じゃんけん勝利したナハトとピーチ姫は意気揚々とマリオの両隣に移動する。

「ふふふ、勝利の感覚はいいわね」

「大勝利〜!」

「ちよっ?!」

そう言つて両腕に抱きついてきたピーチ姫とナハトの感触にマリオは目を白黒とさせる。

両腕に触れるのは下着と服越しとはいえ十分に柔らかさを感じるもの。

柔らかさと左右からしてくるいい匂いにマリオは頬を赤く染めた。

そんなマリオの様子をクツパは悔しそうに見ている。

「……………ぬ？」

マリオの姿を見ながらクツパはあることを思い出す。

そういえばマリオの身長はワガハイよりも低かったな。

マリオが聞けばショックを受けそうなことをクツパは考える。

ちなみにマリオの身長は155センチメートルでかなり小柄なことが分かるだろう。

マリオ本人は背が低いことを気にしているのか、自身の身長を160センチメートルとさばを読んでいるが、どちらにしても男性としては小柄なことに変わりはない。

それに対してクツパの身長は173センチメートル。

もともとのクツパの姿も大きかったためか、女性となった今でもマリオより……いや、平均的な男性の身長よりも大きかったりする。

「あれ、どうしたんだ？」

自身を見ながらなにかを考えている様子のクツパにマリオは声をかける。

写真を撮るはずなのにどうしたのか。

そんなにじゃんけんで負けたことがショックだったのか。

動かないクツパにマリオはそう考えた。

「なに、ちよつと思いい付いてな」

「うん?」

マリオの言葉にクツパはそう答え、写真を撮るために移動をする。

クツパの移動した先。

それはマリオの背後だった。

マリオとの身長差により、クツパの姿が隠れることもなく、問題なく写真に写ることが出来るだろう。

「さあ、写真を撮ろうではないか」

「え、ちよ、クツパ?!」

背後からまわされた腕。

むにゆりと後頭部に触れる柔らかな感触。

そして近くから聞こえてくるやや緊張したような呼吸音。

いわゆる、あすなろ抱きのような体勢でクツパはマリオに抱きついてきたのだ。

そんな光景にキノコランドスタッフのキノピオ（28才・彼女なし）は舌打ちを我慢しながら顔に笑顔の仮面を張り付けながら写真を撮るのだった。

第182話

過程と結果。

それにはどんな意味があるか。

過程があるからこそ結果があるのか。

それとも結果があるから過程に価値があるのか。

過程と結果。

それは切っても切れない関係ではないかと思われている。

—— 一般的には

過程。

それに意味を見いだすのはどんな人間か。

誰かと協力をするような人間？

様々な苦難を乗り越えてきた人間？

正々堂々と物事に当たたる人間？

ともかくにも過程が大切だと言う人間は総じて結果を重視していないように思える。

結果を重視していないからこそ目標のことに到達できなくても満足してしまっていると言える。

そして社会に出た場合に重視されるのは過程ではない。

何をするにしても結果が全てである。

そう、結果に至るまでにどんな怪我をしよう。

結果に至ることによって誰かが犠牲になったとしても。

何があつたとしても結果のみを重視するのだ。

結果さえあれば過程などに意味はない。

それこそが社会。

それこそが現実。

故ゆえにこそ、過程を切り捨て、結果だけを持ってこよう。

「さあ、お城に帰るわよ！」

マリオの運転する車の助手席に座る権利をかけたじゃんけんがあり、ピーチ姫が帰宅の時に助手席に座る権利を得た。

ただそれだけのこと。

じゃんけんをしたという過程は消え去り、ピーチ姫が勝利したという結果だけがここ

にある。

助手席に座り、嬉しそうにしているピーチ姫をクツパとナハトは羨ましそうに見ていた。

「……もしかして今後車に乗ることがあつたらこんなことが繰り返されるのか？」

先ほどのピーチ姫、クツパ、ナハトの3人による壮絶なじゃんけんを思い出しながらマリオは呟く。

キノコランドに来る前にも3人はじゃんけんをしていた。

正直に言えば、3人がじゃんけんをしている間はマリオは完全に蚊帳かやの外なので暇なのだ。

「来るときもそうだったけど、やっぱり静かだな」

「歩行者に気をつけないとね」

「ひいてしまう訳にもいかぬからな」

「安全第一」

キノコランドに来る時にも車の静音性には驚いていたが、改めて驚く。が、この静音性も暗い夜道ではかなり危険なことに変わりはない。

もしも、車のライトを点けずに走っていたとしたら、通行人は全く気づくことなくひかれてしまうだろう。

「まあ、ライトさえ点けておけばまず飛び出してくることはないと思うけど……」
「油断はできぬがな」

「事故は起こしたくないものね」

「………ピーチ姫なら揉み消せそう」

「しないわよ?!」

ライトを点け、ゆっくりとした速度で車は帰路につく。

もし仮に事故が起きてもピーチ姫ならばなんとかできるのではないか。

そう思ったナハトはポツリと呟く。

ナハトの言葉にピーチ姫は思わず目を白黒とさせながら叫んだ。

ちなみに、マリオとクッパも近いことを考えていたため、なにも言わないでいた。

第183話

マリオの安全運転によって4人は無事にピーチ城に到着した。
城に着くとキノピオ兵たちが出て来て出迎えてくれた。

「おかえりなさいませ」

「車は私たちが片付けておきますね」

「お荷物はどうしますか？」

「そうね、私の部屋に運んでおいてもらえるかしら」

「「わかりました」」

ピーチ姫の言葉にキノピオたちは頷き、車に乗り込んで運転し、車庫に運んでいった。
乗せてあるお土産も一緒に運ばれているが、あとでキノピオたちが運んでくれるのだ
ろう。

「さ、お土産の方はキノピオたちに任せて中に行きましようか」

「この時間だとワガハイも城にはカエレヌカラナー（棒）」

「私はもともとお城に住んでる」

「俺は別に帰つ——いや、なんでもない……」

クッパは明らかな棒読みで、マリオはピーチ姫の視線に射ぬかれて言葉を区切る。

クッパは自分のクラウンで帰ることができるとし、マリオ自身もこのくらいの時間であれば歩いて帰っても問題はない。

が、ピーチ姫はまだキノコランドでの思い出を全員で話したいのか無理矢理マリオを視線で黙らせたのだ。

「少しすれば晩御飯もできるはずだから、まずは手荒いうがいをして部屋に行きましよう」

「人がたくさんいるところには菌がいつぱい」

「まあ、どの季節でも予防は大切であるからな」

「はあ……、そうだな」

ピーチ姫の視線に負け、マリオは短く息を吐く。

ルイージに頼んだのは今日一日の仕事を変わってもらうこと。

今日、ピーチ城に泊まるのであれば明日は朝早くに家に帰って仕事の準備をしなければならぬだろう。

別にピーチ城に泊まりたくないとはいわないのだが、翌日の仕事のことを考えると少しだけ頭が痛かった。

「明日の仕事が……」

「む……。だが、貴様の仕事は電話が来なければ平気なのであろう？」

「いや、まあ、そうなんだけども。一応、終わった仕事をまとめた書類とか、修理の仕方をまとめたたりしてるんだけどね」

「むう、そこら辺は知らなかったのだ。……ワガハイと一緒に住んでいるときにやっている姿を見ていないのだが？」

クツパは、ふと思いつく。

そういえば自分が一緒に住んでいるときにそれらのことをやっている姿を見たこと

がなかった。

その辺りはどう言ったことなのだろうか？

「あー………。えっと、2人でいるときに仕事のことを考えたくなかったから………
うん………。」

「あう………。」

クツパの疑問にマリオは顔を逸らしながら答える。

クツパがいるのだから仕事のことよりもクツパと話すことを優先したい。

わざわざクツパのいる目の前で仕事をする理由もない。

マリオの言葉にクツパも顔を赤く染めてうつむかせるのだった。

第184話

ピーチ城内へと入り、マリオたちは一先ず自分達が借りている部屋へと移動した。
ピーチ姫はすぐにでもキノコランドでの思い出を話したが、他の3人はさすがに疲労が残っているために少しだけ休憩を望んだのだ。

部屋に入り、クッパはメイクを落とすために化粧鏡の前に座る。
綺麗に見せるためのものであるとは分かっているのだが、メイクをしつぱなしというのはやはり気持ちが悪かった。

「……………似合ってるって言ってくれたのは嬉しかったな」

思い出すのは今朝のこと。

マリオは思わず口にした風だったのでお世辞などではなく本心だったのでだろうと言うことがうかがえた。

マリオの言葉を思い出しながら、クツパは自身の頬に手を当ててくねくねと体をくねらせる。

「えへ、えへへへ．．．．．」

キノコランドでもナンパから助けてくれたり。

ときおりだがマリオからの視線を感じることもあった。

それはつまりマリオにとって自分が少しは気になる存在であると言うこと。

その事実がクツパはとても嬉しかった。

思わず、にへらとだらしない表情をしてしまうほどに。

「っは?!」

鏡に写るだらしない表情をした自分に気づき、クツパは慌てて表情を引き締める。

よく見れば口の端から軽くヨダレが垂れそうになっていた。

「あ、危ないのだ．．．．．」

いくら部屋に自分しかいないとはいえ、ヨダレを垂らすのは女としてどうなのか。口元を拭きながら、クツパは誰も見ている人がいないかを確認する。

もしもこんな姿を誰かに見られでもしたら……

おそらくクツパは見ていた人間を何度も殴って記憶を飛ばそうとするだろう。

「とりあえずはメイクを落としていつもの気楽な服に着替えるとするか」

そう言つてクツパはメイクを落としていく。

とはいつてもナチュラルメイクなのですぐに終わるのだが。

クツパのいま着ている服はピーチ姫から借りたもの。

朝、メイクをする際に汚してしまった服は綺麗にたたまれてベッドの上に置かれていた。

置かれている服を広げる必要がないほどに綺麗なことが分かる。

「ふう、さっぱりしたのだ」

メイクを落とし、顔を軽く拭く。

落とし残しもなく、とてもスッキリとした表情をしている。

「次は服だな。…………ちよつと胸の辺りが伸びたか？」

鏡に写る自身の姿を見てクツパはポツリと呟いた。

ピーチ姫に借りたときにはこんな風にはなっていないかつたはずなのだが、胸の辺りが少しだけ伸びているように見える。

「……………とりあえず脱ぐか」

一先ず見なかったことにしてクツパは服を脱ぐのだった。

第185話

ピーチ姫から借りた服を脱ぐために、クツパはグイ、と服をまくる。

今さらではあるがクツパの頭には角が生えているのにどうやって服を着替えているのか気になる人もいるだろう。

とはいってもやり方はとても簡単なもの。

単に服を着替えるときに魔法で角を消しているだけなのだ。

ちなみに長時間消しておくことはできず、消している状態ではピーチ姫と本当に瓜二つになっている。

「ん………」

体の一部が引つ掛かるのを感じ、クツパは短く声を出す。

しかし、そのまま固まっても仕方がないので、クツパは服が破れたりしないよう

に気を付けながら少しづつ力を入れて服をさらにまくった。

たゆん・・・・・・・・・・。

そんな音が聞こえてきそうなほどに大きな丸いものがクツパの着ている服の下からこぼれ出てきた。

「ふう・・・・・・・・・・」

黒い下着によってその肌色はそこまで見えていないが、それでもそれを見た人にはとてつもない重厚感を与えるに違いない。

クツパは自身の体に付いている肌色の大きな女性らしさを象徴するもの、胸を見る。

下着越しに軽く胸を押してみる。

むにゅ、と下着越しで手には固い感触しか伝わらないが、自身の胸の形が変化していることは感じられた。

「案外と、馴れたものだな・・・・・・・・・・」

女性となったとき、クツパは自身の胸が嫌で仕方がなかった。

どうしても視界に入ってくる自身が女性となったことを突きつけてくるもの。

歩くときには下着をつけていなければ揺れて重心がぶれてしまう。

クツパよりも少しだけ胸が小さいことを気にしている。ピーチ姫が聞けば怒るかもしれないが、クツパはマリオの家にとどり着くまでは小さい胸の方が良かったと思っていた。

そう。

マ・リ・オの家に・つ・く・ま・で・は、だ。

マリオの家に着いてしばらく一緒に暮らしていたとき、マリオが何回かチラチラと自分の胸を見ていたのだ。

マリオ自身はなるべく見ないように気をつけていたようだが、それでも視線は感じていた。

女性が男性の視線に敏感だというのは本当なのだと思いつつ、マリオに見られて悪い気はしていなかった。

そのときから胸が大きいことも悪くないと思いだしたのだ。

「まあ、肩が凝るのは仕方がないのだな」

ぐりんぐりんと肩を回し、クツパは自身の肩を叩く。

胸が大きいと肩が凝る。

それを実感しながらクツパは着替えを終えた。

「ピーチ姫ならなにかいい肩凝りの解消法を知らぬかな？」

自身と同じくらいの大きさの胸をしているピーチ姫なら肩凝りにもなっているはずだ。

であるならば解消法も知っているに違いない。

そう考えたクツパは脱いだピーチ姫の服を手を持ち、ピーチ姫の部屋に向かって部屋を後にした。

第186話

メイクを落とし、着替えも終えたピーチ姫は紅茶の入ったカップを手に椅子に座って
いた。

カップを口に運び、紅茶を口に含む。

「うん、おいしい」

自分で淹れた紅茶なので自画自賛ではあるのだが、それでもピーチ姫は満足そうだった。

ピーチ姫が紅茶を飲んでみると、クツパが部屋に入ってきた。

「邪魔するのだ」

「邪魔するなら戻って」

「分かったのだ」

ピーチ姫の言葉にクツパは素直に部屋から出ていく。

ふざけて言ったことだったのだが、本当に従うとは思わなかった。

意外にも素直に出ていったクツパに、ピーチ姫は少しだけキョトンとしてしまう。

「つて、なんでそうなるのだ！」

「いや、乗ったのはあなたじゃない……」

バン！、と音をたてながらクツパは勢いよく部屋の中に再度入ってくる。

そんなクツパの様子にピーチ姫は呆れながらカップをソーサーに置いた。

「それで？着ていた服を持ってきたの？」

「それもあるのだが聞きたいことがあってな」

持ってきたピーチ姫の服をクツパは差し出した。

ピーチ姫は受け取った服を広げてみる。

胸の辺りがなんとなく伸びていることにピーチ姫は気づいた。

「……………ちっ」

「……………ピーチ姫？」

なんとなくピーチ姫の目から光が消えたような気がして、クツパはおずおずとピーチ姫の名前を読んだ。

ピーチ姫はクツパの言葉に答えずに、返してもらった服をキノピオに手渡した。

「で、聞きたいことって言うのは？」

「えっとだな……………？ピーチ姫は肩凝りとかに悩んではいけないか？」

「肩凝り……………。ああ……………」

クツパの言葉にピーチ姫は少しだけ首をかしげたが、クツパの胸に目を向けて質問の意味を理解した。

自分のものよりも大きいそれ。

そんなものが付いていればそりゃあ肩は凝るだろう。

まあ、自分も肩凝りには悩んでいるのでその辺りの悩みには理解がある。

「そうね。肩凝りは私も悩んでいるわ。だから時々マリオに肩を揉んでもらっているのよ」

「マリオに?!」

「ええ。マリオは医者免許も持っているでしょ?だから整体とかもできるのよ」
「そういえばそうであったな」

ピーチ姫の言葉にクツパはマリオが医者免許を持っていたことを思い出す。

マリオは医者免許も持っており、キノコタウンで医者が足りないときなどに臨時で医者として活動するのだ。

「……マリオに肩以外も揉まれているのか?」

「それは想像に任せるわ」

ピーチ姫は整体と言っていた。

肩を揉むだけなら整体と言う必要はないはずだ。

もしも肩以外を揉まれているのだとしたら。

もしもそれが整体以外の部分を揉んでいるのだとしたら。

クツパの問いかけにピーチ姫は意味深に笑みを浮かべるのだった。

第187話

ピーチ城の泊まった部屋でマリオは部屋置きの電話の前にいた。

予定では今日のうちに家に帰って仕事の準備や、書類の整理をする予定だったが、ピーチ姫のごり押しによって泊まることになってしまったのだ。

なので明日も少しだけルイージに仕事を回してしまうことを電話で伝えようとマリオは思っている。

「うーん………」

予定外のことをどうやってルイージに伝えようか。

電話の前でマリオは少しだけ悩む。

とりあえずは電話をしないことにはなにも変わらない。

意を決してマリオは電話の受話器を持ち上げた。

『トウルルル……トウルルル……』

「あれ？」

いつも家からかけているときはすぐに出ているのだが、なぜかルイージがなかなか電話に出ない。

電話に出ないルイージにマリオは不思議そうに首をかしげた。

『ガチャ……。もしもし、ルイージです。どちら様ですか？』

電話をかけながらしばらく待っていると、ルイージが電話に出た。

その声はいつも話しているときのものと同じ、どこか事務的なもののように聞こえた。

いつもと違うルイージの話し方にマリオは少しだけ言葉を失う。

「えっと、俺だけど」

『あ、兄さんだったのか。ピーチ城からの電話だったから分からなかったよ』

電話越しではあるがマリオの声を聞いてルイージはどこかホツとしたような声音に変わる。

「どうやらルイージは誰からかかってきたのか分からない電話に緊張していたらしい。」

『それで、どうしたんだい？今日は帰る予定じゃなかったっけ？』

「あー……その、な？」

ルイージの問いにマリオは答えづらそうに言い淀む。

もともとルイージには今日の分の仕事の代理も頼んでいた。

なので追加で仕事を頼むことになりそうなことに申し訳なさも感じているのだ。

「実は……ピーチ姫に今日の思い出を話したいってことで泊まって欲しいって頼まれちゃってさ……」

『なるほどね。だからピーチ城から電話をしてきたんだ。じゃあ、帰るのは明日になりそうなのかな？』

「ああ、とりあえずは明日の午前中には帰るつもりだよ」

ルイージはマリオの言葉に納得したのか、マリオの帰宅が明日になりそうだと察した。

マリオもルイージが怒ったりしなかったことにホッと胸を撫で下ろした。

『うん。なら、明日の兄さんが帰るまでは僕の方で仕事を引き受けるよ』

「悪いな、助かるよ。お土産も後で持っていくから」

『ううん、兄さんの役に立てるなら構わないよ。焦ったりしないでいいからね』
「おう」

そう言つてルイージは電話を切った。

どこまでも兄に甘いルイージ。

マリオはルイージの将来が少し心配になった。

第188話

ルイージへの電話も終え、マリオは気にしていたことが少しだけ軽くなった。ルイージは気にしていないようだったが、迷惑をかけているのは変わらない。マリオは後日、ルイージになにかお礼としてなにかできないかを考え始めた。

「ルイージの喜びそうなこと……」

パツと一番最初に思い浮かぶのは自分に対して料理を作っている姿。

ハッキリと言ってルイージの姿で一番印象に残っているのはこの姿だろう。

しいて他をあげるのならガーデンングをしている姿くらいだ。

「……ルイージは作った料理を食べているとすごい喜ぶんだよな」

そう。

ルイージは自身の作った料理を他の人が食べることを何よりも嬉しく思っている。他にもガーデニングが趣味で植物を好み、掃除や洗濯にもこだわりがあるようだ。

特に自身の帽子は必ず手洗いをするとのこと。

が、感謝を伝える相手に料理を作らせてそれを食べると言うのはどうなのだろうか？
それでルイージは喜ぶのかもしれない。

だが、マリオからすれば感謝を伝えている気がしない。

「ガーデニングの植物もどういったものが良いかはいまいち分からないしな……」

マリオはそこまでガーデニングに関心は示していない。

せいぜいがクツパの持ってきた花の種を埋めて水をあげているくらいだ。

そして、マリオの家の周りの花壇はほとんどクツパが整えてガーデニングをしていたりする。

なのでマリオはルイージに植物関連のものを送るといふこともできないのだ。

「あとは……、掃除道具とか調理器具は自分の目で選びたいって言ってたしな」

自分が掃除や料理をする道具は自分の目で見て、より良いものを選びたい。それがルイージの道具を選ぶ際の口癖だった。なのでそちらの方も選択肢に入れることはできない。

「ならあとは……、手作りで料理か？」

マリオが自ら作った料理をルイージに振る舞う。

適当に口にした案だったが、意外とそれは良い手かもしれない。

と、マリオは思ったが、すぐにその考えを打ち消した。

よくよく思い出したらルイージは自分がキッチンに立つとかなり心配そうにチラチラとキッチンを見てくるのだ。

熱い鍋に一瞬でも触れて熱いと言えば慌てて氷を用意してしまうし、うつかり軽く包丁で切ろうものなら救急車を呼んでしまうかもしれない。

それではさすがにおちおち料理もできないと言うものだ。

「……仕方がない。今度、2人でどこかに出かけよう」

ルイージに何かを送るのは自分には無理。

そう結論付けたマリオは、キノコランドに行った際に着ていた服をたたんで自分のバッグにしまう。

キノピオに渡してしまえば綺麗にはしてくれる。

だが、それでは干して乾くまでに時間がかかり、早めに家に帰ることができなくなってしまうのだ。

第189話

ピーチ城に用意されているナハトの部屋。

ナハトは部屋の中で髪留めを外していた。

「キノピコが貸してくれたものだから失くしたりしないようにしないと」

ナハトが着けていた髪留めはキノコランドに向かう前にキノピコが貸してくれたものだ。

なのでナハトは外した髪留めを失くさないように大切に化粧台の前に置いた。

なお、化粧台は置いてあるのだが、ナハトは基本的に自分ではメイクをしないので、だいたいは寝癖を直すくらいにしか使われていない。

「……よし、マリオのところに行こう」

髪留めを外したナハトは他にやることもなくなり、マリオの部屋へと向かうことを決めて部屋から出た。

マリオの泊まっている部屋に着き、ナハトは扉を開ける。

部屋に入ると、マリオが自身の足を軽くマッサージしていた。

「どうやらキノコランドを歩き回ったことで疲労が少しだけ溜まっているようだ。」

「あれ、ナハト？」

「来ちゃった」

扉を開けて入ってきたナハトを、マリオはボカンと呆けたように見る。呆けた様子のマリオに、ナハトはどこか誇らしげに答えた。いったい何を誇らしげにしているのかは全く分からないが。

「何してたの？」

「今日はけっこう歩いたからね。疲労を残さないためにマッサージをしてたんだ」

話しながらマリオはマッサージを続ける。

そんなマリオの様子をナハトは不思議そうに見ていた。

「……よし、これで終わり」

「終わったの？」

「ああ、一先ず終わったよ」

やがて、マリオは軽く伸びをしてマッサージを終えた。

「マツサージが気になったのかい？」

「うん。それをするとそんなに変わるの？」

「まあ、個人差はあると思うけど、ある程度は変わるはずだよ。やってみる？」

マリオの言葉にナハトは考える。

マツサージは受けたことはなく、自分の体にやった方がいいのかが分からない。が、そんなことよりも一番重要なのはマリオが自分の体に触れると言うこと。

この間わずか数秒。

「やる」

「分かった。じゃあ、この椅子に座ってくれ」

マリオに促され、ナハトはマリオの座っていた椅子に座った。

ナハトの背後に周り、マリオはナハトの肩に触れる。

「ん……」

「じゃあ、始めるよ」

マリオは短く息を吐くナハトに声をかけ、手に力を入れていく。ナハトは平気そうにしていたが、その肩はかなり固く。どう考えてもかなり肩がこつていた。

「けっこっこつてたんだな．．．．．」

「そうなの？」

マリオの言葉にナハトはキョトンと首をかしげる。

どうやらナハトはこつているという自覚がなかったただけだったようだ。

第190話

ナハトのこり固まった肩をマリオは揉みほぐしていく。

ナハトに自覚がなかっただけにここまでこっているのはマリオにとって予想外だった。

「ん……」

「あ、痛かったか？」

「だ、大丈夫……」

ナハトの漏らした声にマリオは揉むのを止めて確認する。

力を入れすぎてしまったのかと思っただが、どうやらそういうわけではないようだ。

ナハトの言葉にマリオはうなずき、マッサージを再開した。

「ふぁ・・・・・・・・・・。だめえ・・・・・・・・。」

「えっ・・・・・・・・・・と。止めた方が良いのかな？」

「だめ、止めないで・・・・・・・・・・。もっとして・・・・・・・・。」

ナハトの口から漏れた言葉にマリオは再度揉むのを止める。

ダメだというのならやらない方が良いのか？

そう考えて止めたのだが、ナハトのトロンとした言葉にマリオはもう一度マツサージを再開した。

「あぁあ・・・・・・・・・・。ひぁあ・・・・・・・・。」

思わずといった様子でナハトは言葉を漏らす。

どこか艶やかな言葉にマリオは少しだけドキドキとしていた。

「ふぁぁぁんっ?!」

グイ、と強めに肩を揉まれ、ナハトは大きく声をあげる。

その際に体が跳ねそうになるのだが、マリオによつて肩を押さえられているので動くことができなかつた。

「あ、ああああああ?!」

肩を揉まれているだけなのに経験したことのない快感がナハトの体を襲う。

マッサージ事態にはそこまで興味もなかつたし、マリオが自分の体に触れるということしか意識はなかつた。

だが、実際にマッサージを受けてみればどうだろうか。

もはや何が起きているのか分からないほどに声が漏れて——いや、叫んでしまっている。

「……………すごいこつてたからな」

「す……………?! ふあああつ……………」

ナハトの乱れようにマリオは意識しないようにしながらマッサージを続けていく。

中途半端なところでマッサージを止めてしまうのはあまり良くないので、マリオはナ

ハトの肩から手を放さずにいた。

「あ………くる………?! なにか、きちやう………?!」

目を白黒とさせながらナハトは体をビクビクとさせる。

「これで、終わりっ!」

「ふあっ、あああああッ!!」

最後のシメとばかりにマリオは適度な力を込める。

シメの一撃を受けたナハトは大きく声をあげると、完全に全身から力が抜け、クツタリと椅子に体を預けていた。

「えっと、大丈夫かい?」

「う、うん………。すごかった………」

マリオの問いにナハトは脱力しながらへにやりと笑う。

一歩間違えばア○顔と呼ばれているものになっていただろう。

第191話

クツタリと椅子に体を預けているナハト。

ビクビクと反応してしまつて体は疲れていたが、それでも確かに肩は軽くなつていた。

「すごい。こんなに軽くなるんだ……」

「ピーチ姫と同じか、それ以上にこつていたみたいだからね。かなり重点的にやつておいたよ」

自分の肩を軽く動かし、マリオにマッサージを受ける前との違いにナハトは驚いていた。

まあ、肩のこりは自覚がなければ分からないままの人も多いらしく、ナハトが気づかなかつたのも仕方がないのかもしれない。

「またこつたらやつてあげるよ」

「うん。これは病み付きになるかもしれない」

ナハトがマツサージの感想を言っていると、部屋の扉が開き、ピーチ姫とクツパが部屋に入ってきた。

2人の顔はやや赤く、どこか照れているようにも見える。

「あれ、今からそつちに向かおうかと思つてたんだけど……」

「えつとね……」

「キノピオが顔を赤くして報告に来たのだ」

「顔を赤くして……?なんで?」

言いづらそうにしているピーチ姫の言葉を引き継いでクツパが言う。

なぜ、キノピオが顔を赤くしながらピーチ姫に報告に行ったのか。

理由の分からないマリオとナハトは首をかしげた。

自分たちがマツサージをしている間に何か起きたのか。

まさかキノピオが顔を赤くしていた原因が自分たちだとは少しも思っていなかった。

「……あなたたちは何をしていたの？」

「え、ナハトがマッサージを受けてみたいって言ったからマッサージをしてたけど」
「すごい気持ちよかった」

念のためにピーチ姫はマリオに何をやっていったのかを尋ねる。

もちろん、前回のストレッチを勘違いした経験から今回も違うのだとはなんとなく察してはいた。

ピーチ姫の問いにマリオは首をかしげながら答える。

マリオの言葉に同意するようにナハトも頷いていた。

「やはり、これが……?」

「間違いないと思うわ」

マリオの言葉からほぼ間違いないと確信し、ピーチ姫とクツパは顔を見合わせて頷いた。

「ねえ、マッサージしてるときにかなり声を出していなかったかしら？」

「うん。堪えられなかった」

「それが部屋の外にまで聞こえてたらしくてな」

「あー………。もしかしてキノピオの顔が赤くなっていた原因って……」

「ここでようやくマリオはキノピオの顔が赤くなっていた原因に思い至った。

あれが聞こえていたのか。

そりゃあ赤くなるよな……」

ちなみに、ピーチ姫に報告に行っていないキノピオの中には前屈みになっているものもいたらしいが、関係のないことだ。

第192話

キノピオの顔が赤くなっていた理由を理解したマリオは軽く頭を押さえる。

原因も理由も判明した。

だが、それはナハトの思わず漏らした声を聞いたことによるもの。

こればかりはどうしようもなかったのではないだろうか。

「まあ、次にやるときはちゃんと声が外に漏れないようにしてちょうだい」

「人によつては気になって仕事も手につかぬようだからな」

「可能な限りは気をつけるよ」

対策としては防音のしつかりとした部屋でおこなう。

もしくはナハトの口にタオルかなにかを噛ませることだろうか。

手軽なのはタオルなのだが、それはそれで背徳的な声になりそうなのであまり推奨は

できない。

「そういえば、ピーチ姫もそろそろ肩がこつてきてるんじゃないかな？前にやってからけっこう経ってるし」

「そうね。．．．．．というか、注意を受けてからすぐに話題にしないの」

「あ、ごめん」

「とりあえず、夕食の準備はできているのだから食べに行かぬか？」

「肩も体もかるーい」

ふと、思い出したようにマリオは言う。

ピーチ姫がマッサージを受けたのはかなり前。

いままでの経験から、ピーチ姫の肩がこり始める頃だろうとマリオは思ったのだ。

とは言ってもつい先ほど注意を受けたばかりでその話題を出すのはどうかと思うが。

ピーチ姫の言葉にマリオは謝った。

そんなマリオの姿に呆れながらクツパは提案する。

顔を赤くしていたキノピオが報告に来たのは夕食の準備ができたことを伝えるためだったのだ。

「とりあえず、マツサージはお風呂に入ってからにするわ」

「む、ならワガハイも受けてみたいのだ」

「私も肩以外の部分を受けてみたい」

「うん。分かったよ」

最終的にマリオは3人のマツサージをすることになった。

マリオ1人への負担が半端ではなく大きいが、3人の美人の体に触れるという点から、必要経費のようなものと考えてもいいだろう。

そして、マリオたちは夕食を食べるために食堂へと向かっていった。

「お土産の方はいつ配るんだい？」

「今日はちよつと遅いし明日でいいと思ってるわ」

「帰っているキノピオもいるかもしれぬしな」

「貰えないのは可哀想かな」

キノコランドで買ったお土産をいつ配るのか。

食堂へと向かいながらマリオは尋ねる。

お土産はおそらくピーチ姫のすでに届けられているだろう。マリオの問いにピーチ姫はお土産をいつ配るのかを答える。

時間的にも帰宅しているキノピオがいるだろう。

なので今日はお土産を配らずに明日にするようだ。

第193話

夕食を食べ終わり、マリオたちはそれぞれ浴場へと移動していた。

ピーチ城の浴場も、クッパ城と同じようにとても広く、泳ごうと思えば余裕をもって泳げそうなほどだ。

ちなみにピーチ姫は3日に一回のペースで泳いでいたりする。

「それで？そんなにマリオのマッサージは良いものなのか？」

ざばり、と体にお湯をかけながらクッパは尋ねる。

気になっているのは夕食の前にも話していたマリオのマッサージ。

この3人の中ではクッパだけがマリオのマッサージの経験がないのだ。

まあ、マリオと口同士でのキスをしたのはこの中ではクッパだけなのだ。

「そりゃあもちろんよ。ナハトの声を聞いたらしきキノピオが顔を赤くしてたでしょ？あれってほとんど喘ぎ声みたいになっちゃってるのよ」

「あれは我慢するのは無理」

「そんなにか……」

頷いて答えるピーチ姫とナハトの言葉にクツパは思わず顔を赤らめた。マツサージを受けるだけで喘ぎ声が漏れてしまう。

それだけでも恥ずかしく思うのにそれがマリオに聞かれてしまうのだ。そんなクツパの様子をピーチ姫とナハトは体を洗いながら見ていた。

「慣れるとあまり気にならなくなるわよ？」

「マリオも気にしてなかった……かも？」

マツサージを何回か受けているピーチ姫は慣れた様子で。

先ほど始めてマツサージを受けたナハトは平然としている。

ナハトはマツサージを受けている間はじゃっかんビクビクとして意識も怪しかったのでマリオが普通にしていたかどうかはさだかではないのだが。

「むう………」

わしやわしやと髪の毛を洗いながらクツパは悩む。

マリオに声を聞かれるのは恥ずかしいが、マリオのマッサージは気になる。

どうしたものかとクツパは声を漏らした。

髪の毛を洗うたびにクツパの胸がたぶたぶと揺れる。

そんなクツパの胸を見ながらピーチ姫はギリギリと歯を鳴らしていた。

「………もぎりたい」

体を洗っている途中なため、ピーチ姫の体には泡が着いている。

泡は胸の頂点や、腰の辺り、他にも色々なところに泡は着いていた。

ぼそりと呟いたピーチ姫の言葉に、近くで体を洗っていたナハトは思わず体を震わせる。

一応、ナハトの胸のサイズもピーチ姫より大きいので、反応してしまったのだろう。

「……………よし、ワガハイも覚悟を決めるのだ」

頭からお湯をかぶって髪の毛の泡を落とし、クツパはムン、と胸の前で拳を作る。

マリオに喘ぎ声を聞かれたとしても我慢しよう。

そう決意してクツパは湯船に一足先に浸かるのだった。

第194話

肩まで湯に浸かり、ふうつと息を吐く。

温度を上げた温かい水に浸かっているだけだというのに、体から疲れが抜け出ていくようだった。

「やっぱり、風呂はいいものだなあ」

「ほっほっほ、そうですね」

湯に浸かってゆるんだ表情を浮かべているマリオはゆるく呟く。

そんなマリオの呟きに、マリオと同じように湯船に浸かっているキノじいは頷く。

お風呂という文化を生み出した過去の人は素晴らしいものを生み出してくれた。

過去の人たちに感謝をしながらマリオとキノじいはのんびりと1日の疲れを取っていくのだった。

まあ、マリオは出た後にもマッサージでまた疲れることになるのだが。

「ふう、さっぱりした」

濡れている体を脱衣所に置いてあるタオルを使って拭いていく。

置いてあるタオルにも手が行き届いているので、そのタオルはマリオが自宅で使っているものと比べたらはるかに柔らかく、柔軟剤の良い匂いがした。

「家ではここまでふかふかにはできないなあ。どうやっているんだろ」
「あ、気になりますか？」

しみじみとタオルを見ていると、補充に来たキノピオがマリオの呟きを聞いて尋ねる。

聞いて自分の家でできるものなのか？

キノピオの言葉にマリオはそう考える。

「それってピーチ城^{ピーチ}でしかできないやり方じゃないよね？」

「んー……」。私はここでしかやってないですね。家ではできなさそうだったので

「あー、なら、いいかな」

キノピオはマリオの問いに少しだけ考えると、自宅ではやっていないと答える。
おそらくだが、それは一般的な家ではできないやり方だということ。

であるならば聞いても仕方がないだろう。

ただし、このキノピオがめんどくさがりでないという前提条件があるのだが。

「そうですか。では、私は他の場所の仕事に向かいますね」
「うん。ありがとう」

そうやってキノピオはマリオに頭を下げて脱衣所から出ていった。
出ていくキノピオにお礼を言い、マリオはパジャマを着ようとパジャマを手取る。

「………マッサージをするなら汗をかくよな？」

ピーチ姫、クッパ、ナハトの3人をこれからマッサージする。

ただのマッサージと簡単に言うが、1人をやるだけでもかなりの体力を使うのだ。
しかもそれを3人。

単純に人数が三倍になるのだ。

疲労がそれ以上になることは間違いないだろう。

「おや、パジャマも着ずにどうかしたのですかな？」

「あ、出てきたんだね」

パジャマを手を持って悩んでいると、浴場から出てきたキノじいに尋ねられた。先に出たはずのマリオがまだパジャマを着ずにいたことが不思議だったのだろう。キノじいは体を拭きながらマリオに尋ねる。

「いや、これからマツサージをするからパジャマが汗で濡れそうだね」
「なるほど。では、なにか着るものを用意させましょう」

そう言つてキノじいはサツと服を着て脱衣所を後にする。

キノじいに任せておけば大丈夫だろう。

そう考へてマリオは脱衣所で待つことに決めた

第195話

脱衣所でキノじいを待つこと数分。

脱衣所の室温は暖かめに維持されており、パジャマを着ずにいても寒くはなかった。

「お待ちせしましたな、マリオどの」

「大丈夫。そこまで待つてないよ」

マリオが軽くストレッチをしていると、キノじいがキノピオをつれて戻ってきた。

キノじいのつれてきたキノピオの手には服があった。

マリオはキノピオから服を受け取り、広げてみる。

それは作務衣のような服で、通気性も良さそうだった。

「こちらの服でどうでしょうかな？」

「うん。これなら大丈夫だと思う。汗で汚しちゃうかもしれないけど、本当に良いのかい?」

「ええ。こちらの服以外にも来客用に何着か用意がありますので」

マリオの言葉にキノじいは笑って答えた。

事実としてピーチ城には突発の来客用として衣類や小物などの用意がある。なのでここでマリオに服を渡したとしても問題はないのだ。

「そっか。じゃあ、ありがたく使わせてもらおうよ」

「そうしてください。使い終わったら洗濯に出していただければ大丈夫です」

キノじいにお礼を言い、マリオは作務衣を着ていく。

サイズも丁度良く、とくに動きにくいなどということもない。

そして肌触りも柔らかく、けっして安物などではないこともうかがえた。

「ああ、皆様たちは先にマッサージ室に行っているそうですね」

「ありや、俺の方が長湯だったか。分かった、パジャマはここに置いておいて良いかな

「？」

「そうですね。片付けないように言っておきましょう」

ピーチ姫たちはすでにお風呂から出て、隣にあるマッサージ室に行っているようだ。ピーチ城のマッサージ室は仕事の終わったキノピオたちも利用している。

まあ、キノピオたちは他のキノピオのマッサージ師が対応しているが。

持ってきておいたパジャマを片付けずに置いておいてもらうようにマリオはキノジに頼む。

その理由としては、3人のマッサージが終わったときにおそらく汗をかいている。

なので、終わってからもう一度お風呂に入るだろうと考えたからだ。

「さて、と。そろそろ向かうかな」

「ほっほっほ、姫様たちもしびれを切らしてしまうでしょうしな」

やり残したことなどが無いことを確認したマリオはマッサージ室へと向かうことにする。

あまり行くのが遅くなってしまうとピーチ姫やナハトがしびれを切らして何をしだ

すか分からない。

それが分かっているの、マリオはあまり遅れないようにしたいのだ。

しびれを切らしたピーチ姫の姿がイメージできたのか、キノじいは笑いながらマリオを見送った。

第196話

マッサージをするために作務衣に着替えたマリオはマッサージ室の前に到着した。扉の向こうからはピーチ姫やクツパ、ナハトの声がかすかに聞こえてくる。

少しだけ遅れたことを申し訳なく思いながらマリオはマッサージ室の扉を開けた。

「あ、やっと来たわね」

「む？その服はどうしたのだ？」

「昨日見たパジャマじゃない」

「うん。マッサージをしたら汗をかくと思って服を借りたんだ」

マッサージ室にマリオが入ると中にいた3人がそろってマリオを見た。

マリオの服装が昨日の夜に見たものと違うことに気づき、3人は首をかしげる。

不思議そうにしている3人にマリオはキノじいから借りたことを伝えた。

「そうなのね。とりあえずマツサージをお願いしても良いかしら」

「分かった。ところで誰からやるか決まっているのかい？」

「ふむ。ワガハイは最後で大丈夫なのだ」

「ピーチ姫からで良いんじゃない」

3人の内、誰からマツサージを受けるのか。

マリオの問いにいち早くクツパが答える。

覚悟を決めたと言ってもやはり恥ずかしさはあるのだろう。

マツサージの順番を一番最後にしていた。

「まあ、それは構わないけど」

「じゃあそのベッドに横になって。クツパとナハトはそっちにある椅子に座って待ってて」

「分かったのだ」

「待ってる」

マリオの指示に従い、ピーチ姫はベッドに横になる。

うつ伏せに横になったことよってピーチ姫の胸がむにゆりと形を変える。

一応、マツサージのたびに見ている光景なのだが。

それでもやはり気恥ずかしいのか、マリオは顔を赤くしてなるべくピーチ姫の胸を見ないようにしている。

「……………見ておるな」

「見てるね」

なるべく見ないようにしていると書いてもチラチラと目が行ってしまうのも事実。

マリオが柔らかそうに潰れているピーチ姫の胸を見ていることに気づいたのだろう。

クッパとナハトは面白くなさそうにマリオを見ていた。

「んんっ……………。それじゃあ始めるよ」

「ええ、お願いね」

クッパとナハトの言葉が聞こえたのだろう。

ピーチ姫は少しだけ恥ずかしそうに。

マリオは誤魔化すように咳払いをした。

そして、マリオはベッドの上に横になっているピーチ姫の横に移動した。

「とりあえずはどの辺りがこっているかの確認からだな」

「ええ、肩以外にもこっているところがあつたらお願——ああんうっ?!」

マリオの言葉にピーチ姫は答えようとしたが、すぐにマリオに触れられたことによつて言葉が途切れてしまった。

ピーチ姫のやや艶のある声にクツパは思わず顔を赤くするのだった。

第197話

ピーチ姫の背中を優しく触っていき、どこがこっているのかを確認していく。

肩がこっているのはいつものことだが、椅子に長時間座っていたり、長時間立って話などをしたりしているので全体的にこっているようだった。

「ひう………んああつ!!」

「やっぱりこってるなあ」

マリオの手が体に触れるたびにピーチ姫は艶かしい声を漏らす。

マリオはピーチ姫の声をなるべく意識しないようにしながらピーチ姫の全身を触診していた。

「あ、ああ………。や、やっぱり、しゅい………!」

「……話で聞くのと、実際に見るのとではやはり違うのだな」
「私もあんな感じだったのかな……?」

ビクビクと体を震わせるピーチ姫を見ながらクツパはポツリと呟く。
マリオのマツサージが気持ちいいということはすでに聞いていた。

それで喘ぎ声のようなものが出てしまうということも。

しかし話で聞いていてもここまでのものだとは想像がついていなかった。

ピーチ姫の姿を見ながらナハトも先ほどの自分がこのような状態だったのだと何となく理解したのだろう。

その顔には珍しく羞恥の色が見えた。

「座り仕事が多いからやつぱり腰はこり気味だよ……」
「ひゃう?!そ、そんないきなり?!」

ピーチ姫の腰の辺りを軽く揉み、やはりこっているのだと改めて確認する。
執務の関係上、椅子に座っている時間がもつとも長いだろう。

ピーチ姫の腰はかなりこっており、マリオは遣り甲斐を感じていた。

「ん、んんんう……！ダメ、ダメダメダメエ……！」

「ふむ、この辺りがとくに腰ではこつていそうかな」

じたばたとピーチ姫は足を動かしているが、そんなことは関係ないとばかりにマリオはピーチ姫の腰を揉んでいく。

腰を押さえられていることによつてピーチ姫はベッドの上から動くことはできないのだらう。

まるでまな板の上に置かれた魚のようにも見えた。

「むう……。なんだろうな、マッサージなのは見ているから分かるのだが……」
「もう少ししたらアへる……？」

まるで、マッサージはマッサージでもアツチの方のマッサージのように見えてしま
う。

ピーチ姫のすさまじい悶えつぷりにクツパは思わずそのようなことを思ってしまった。

もはやピーチ姫の思考の中にクツパとナハトがいることなど完全に抜け落ちてしまっているのだろう。

「腰はこれくらいかな。あとは………足か」

「はあ………はあ………。ひゃ、きやうううん?!」

ひとまずピーチ姫の腰の方は終わったのだろう。

マリオはピーチ姫の腰の横から足元へと移動した。

マリオが移動のためにマツサージを止めたことよってピーチ姫は少しだけ落ち着いたようだが、すぐにマリオが足のマツサージを始めたことよって再び悶え始めてしまった。

第198話

足のマッサージも終わり、ピーチ姫のマッサージが終了した。

余韻がまだ残っているのだろうか、ピーチ姫の体はまだピクピクと痙攣するように動いていた。

「あー……………、しばらくは動けない、か。仕方ない、抱き抱えて動かそう」
「んっ……………！」

そう言つてマリオはピーチ姫を横抱きに抱き抱えて近くにある椅子に座らせた。体が敏感になつているのか、ピーチ姫は抱き抱えられる際にピクン、と体を痙攣させる。

椅子に座らされたあとは背もたれに完全に体を預けており、動けなさそうだった。

「クツパは最後だから、次はナハトだね」
「うん」

マリオの言葉にナハトは頷き、座っていた椅子から立ち上がりマリオのもとへと移動した。

ナハトが移動している間にマリオはピーチ姫が横になっていたベッドを軽く拭いて綺麗にしていく。

ナハトはあまり気にしないのかもしれないが、ベッドはピーチ姫の汗や悶えている際に飛んだ睡などが着いている。

マリオは医師としての免許を持っているのでベッドなどを毎回綺麗にすることを心掛けているのだ。

「さて、それじゃあ横になってくれ」
「分かった」

マリオの指示に従い、ナハトはベッドの上に横になる。

先ほどのピーチ姫の姿がまだ頭に残っているのだろうか。

ナハトの体は緊張で固くなっているように見える。

「緊張してる？」

「……少し」

あまり見ないナハトの珍しい様子にマリオは優しく尋ねた。

マリオに聞かれたことが恥ずかしいのか、ナハトはプイ、と顔を逸らしてしまった。

ナハトのそんな姿が見れたことがおもしろかったのか、マリオは思わず笑みをこぼしていた。

「じゃあ、始めるよ。肩はさっきやったから他の場所を調べていくね」

「んん……。お、お願いひやうんっ！」

そう言つてマリオはナハトの体を触診していく。

ナハトは普段はピーチ城で様々なお手伝いをしている。

お手伝いの内容は多岐にわたるが基本的には動き回るような仕事が多い。

そのため、ナハトのこりは肩を除いて主に下半身に集中していた。

「歩き回ることが多いのかな。ふくらはぎがけっこうむくんでるみたいだ」

「んきゆうっ?!ん、んっっ?!んっっ?!」

マリオにふくらはぎを揉まれ、ナハトは電流が走ったような衝撃を受ける。

痛いような、気持ちいいような感覚がチカチカと頭の中を駆け巡る。

先ほどの肩を揉んでもらったときにも似たような感覚をナハトは感じていた。

経験のしたことのない快感。

そしてマリオに揉まれることによって全身が軽くなっていくような感覚。

今までに感じたことのない感覚にナハトは声を漏らしそうになるが、この場には自分とマリオ以外にもいることを思い出したのか、声を我慢していた。

ふくらはぎを揉んでいることによってマリオにはナハトの顔は見えないが、近くに座っていたクツパにはナハトの顔が恥ずかしそうに赤く染まっていることが確認できた。

「声が出るのが恥ずかしいのか……?」

「んっっ、ぜんぜんっ……、そんなことっ……、ないからっ……」

え。
クツパの言葉に反論しようとするが、どう聞いてもその声は我慢しているように聞こ

え。
声が途切れるたびにナハトの体はピクン、ピクン、と震えていた。

第199話

ふくらはぎを揉まれながらナハトはピクピクと体を動かす。

今日までに蓄積されてきた疲労がほぐされていつていることをナハトは感じていた。

「はあ．．．はあ．．．」

「とりあえず足の方はこれで大丈夫かな」

ナハトのふくらはぎから手を離し、マリオは一息をつく。

ひとまずはナハトのマツサージも終わったということなのだろう。

マツサージを受けていたナハトはマリオの言葉に反応できずに荒い息を吐いていた。

そして、マリオはピーチ姫と同じようにナハトを近くの椅子へと運んでいく。

ピーチ姫、そしてナハトの2人が終わった。この場に残っているマツサージを受けていない人物はクツパを残すのみ。

自分の番が回ってきたことを理解し、クツパは緊張で表情を固くしている。

「さ、クツパの番だ」

「う、うむ……」

マリオは先ほどと同じようにベッドを拭き、クツパに横になるように促す。

マリオに促されて、クツパは緊張しながらベッドに横になった。

ベッドに横になったことによって先ほどのピーチ姫とナハトの姿が改めて頭の中によみがえってくる。

自分も2人のように声をあげてしまうのか。

ピーチ姫どころかナハトまであんな姿になってしまうものに自分が耐えられるのか。そんな不安が胸の内から沸き上がってくる。

いっそのこと跳ね起きて逃げ出してしまおうか。

不安になってきたクツパがそんなことを思い始めたとき。

クツパが緊張していることに気づいたのか、マリオは優しくクツパの頭に手を置いた。

「初めてな訳だしやっぱり止めておくかい？」

「……………で、できるだけ……………優しくして、ほしいのだ……………」

優しく尋ねてくるマリオの言葉に、クツパは緊張と羞恥によつて潤んだ瞳でマリオを上目使いに見ながら言う。

普段の強気そうな印象のクツパの上目使いに、マリオは思わず胸を押さえた。クツパの弱々しい姿や、愛らしい姿は何度も見てはいる。

それでもその表情と言葉の組み合わせはとてつもない衝撃をマリオに与えた。

「マリオ……………?」

「な、なんでもないよ」

いきなり胸を押さえ出したマリオの姿にクツパは首をかしげる。クツパの問いにマリオは首を横に振りながら答えた。

「えつと……………、それじゃあやっていくよ」

「頼むのだ……………」

改めて意識を切り替え、マリオはクツパの体にそつと触れていく。

マリオの手が自身の体に触れ、クツパは思わず体に入った。

まだマツサージが始まったわけではないので、その触り方はそこまで強くはなく、とても優しいものだった。

第200話

初めてだと言うクツパの体を気遣うようにマリオは優しくクツパの体を触っていく。マリオの優しい触り方にクツパはピクピクと体を反応させていた。

「だいたい分かったかな．．．．．？」

「ん．．．．．」

一通りクツパの体を触診し終え、マリオは呟く。

クツパの体もピーチ姫と同じように肩や腰、そして足に疲労の蓄積が見られた。

そしてクツパだけはピーチ姫やナハトとは違い、じやつかながら猫背気味になっていた。

肩や腰、足の疲労はピーチ姫とほとんど変わらない理由だろう。

では、猫背気味になっている原因はなんなのか。

それは普通のクツパの姿を思い浮かべればすぐに分かるだろう。

普通のクツパは黒いドレスに身を包んでおり、背にはクツパのトレードマークとでも言うべき大きなトゲ甲羅が背負われている。

つまりはこのトゲ甲羅を背負っていることによる猫背だ。

「肩の方は後でやるから、全体的にやっていくよ」

「た、頼むのだ……」

ついに本格的にマツサージが始まる。

マリオの言葉にクツパは緊張を隠せない声音で答えた。

そんなクツパの緊張を感じとりながら、マリオはマツサージを始める。

「ん………。ふう……」

自身の体に触れているマリオの手から感じる力が徐々に強くなっていくことにクツパは

少しだけ口から息を漏らす。

気持ちよくはあるのだが、想像していたよりも小さかったのでクツパは拍子抜けしていた。

それによつて緊張がやわらいだのか、クツパの体から力が抜けていく。

当然ながらクツパは気づいていない。

マリオが今マツサージしているのが自身の体の中でも疲労が比較的溜まっていない場所であるということ。

そして、マリオの手が腰へと移動していった。

「ふひゃうっ?!」

ビクリ、とクツパの体が跳ねる。

緊張がやわらぎ、力の抜けた体に不意打ち気味に強い快感が走り抜けた。

ついさっきの軽い気持ちよさがなんだったのかと思えるほどの快感にクツパは目を白黒とさせている。

「ま、まって?!ダメ、ダメなのだあつ?!」

「く、クツパ?!」

思わず体を丸め、クツパはマリオの腕にしがみついてしまう。

いきなり体を丸めたクツパにマリオは驚くが、クツパの様子から痛かったわけではないと言うことを察する。

「えっと……続きができないんだけど……」

「す、少しだけ待ってほしいのだ……」

腕にしがみつくクツパにマリオはおそるおそる言う。

マッサージを途中で止めてしまうのは逆に体に悪いのでマリオはここで止めると言う選択肢を選ぶつもりはなかった。

「ふう……。続きを頼むのだ……」

赤くなった顔をマリオに見られないようにしながらクツパは改めて横になる。

マリオのマッサージは始まったばかりだ。

第201話

マリオの腕にしがみついていたクツパが横になり、マッサージを再開する。

艶のある声を漏らしてしまったことが恥ずかしいのか、クツパの顔は赤く染まっている。

「始めるよ。……声を出したくないならタオルを啜えてるかい？」

「……そうするのだ」

口元に手をあてて声を抑えようとしているクツパにマリオはタオルを手渡す。

マリオの言葉にクツパはマリオの顔を見ないようにしながらタオルを受け取り、口に啜えた。

そして、マリオのマッサージが再開される。

「んんんっー?!んんんーっ!」

口に唾えたタオルによつてクツパの声はいくらか抑えられている。それでも完全には抑えられず。

言葉にならない叫びが発せられていた。

「動かれるとやりにくいから、悪いけど押さえさせてもらうよ」
「んんんっ?!」

そう言つてマリオはクツパのふくらはぎの辺りに乗る。

体重がかかつてクツパが痛くならないように気を付けながらマリオはクツパの足を自身の体重で押さえ込む。

これによつてクツパは下半身を満足に動かすことのできない状態になった。

「んっツッ!んんん~~~~ツッ
!?!?!?!」

足を押さえられ、マッサージの気持ちよさから逃れることができない。

必死に腰の位置をずらして快感から逃れようとするが、マリオが上にいるためにそれが叶うことはない。

ビクビクと体を震わせ、クツパは反射的に体をのけ反らせてしまった。

「んんッ?!ん、んんッ?!んんッ?!んんッ?!んんッ?!んんッ?!」

「これで、腰の方は大丈夫かな」

?!?!?!?!

クツパの足から降りてマリオは軽くクツパの腰の辺りを触る。

マリオにできる限りでクツパの腰をほぐすことはできたはずだ。

「じゃ、足に行くよ」

「ふはっ………はっ………はっ………はっ………」

マリオの言葉に反応できず、クツパは口からタオルを落として荒い息を吐いていた。

腰のマッサージの気持ちよさだけですぐにクツパの思考はぐちゃぐちゃになっている。
る。

そんな状態のクツパにさらにマッサージが行われる。

「はっ……はっ……は、ひゃうらんんツ?!」

呼吸も荒く、まともに考えることのできない状態でのマツサージ^{追撃}。
クツパの意識はさらに深い快感へと落ちていった。

「ひうつ……だめっ……ダメダメっ……」

これ以上マツサージを受ければ戻ってこれなくなるのではないか。

自分の体が自分のものではないような感覚にクツパは嫌々と首を振る。

頭では逃げようと考えているのだが、すでに肉体は陥落しており、首から下が全く動かせなくなっていた。

第202話

マリオによるクツパのマッサージも後半へと移行していく。が、すでにクツパは気持ちよさで思考がまとまっておらず。マリオから与えられる快感に反応をすることしかできていなかった。

「ひうう~~~~ッ?!」

とくにこつているであろう部位の内の2ヶ所目。

足をマッサージされ、クツパはベッドを強く掴む。

始めの方からベッドを掴んでいたため、ベッドのシーツはすでにシワが寄っており、やや伸びてしまっている。

「も.....だめっ.....」

「もう少しで足は終わるから我慢してくれ」

足裏のツボはなかなか奥が深い。

押す場所によって全身のどの部分が悪いのかが分かると言われているほどだ。

マリオはクツパの足の疲労をほぐしていくついでに足ツボをやるうとしていた。

「ツ痛・・・・・・・・」

「この辺りか。少し痛くなるぞ」

「いッ?!」

マリオに足ツボを押され、クツパは痛みで声をあげる。

それでも先程までの気持ちよさよりは耐えられるものだった。

「大丈夫か？」

「だいじょうぶ、なのだ・・・」

痛みを耐えながらクツパは答える。

体の芯にまで響くような痛みではあるが、それでも痛みの中にまた違うものをクツパは感じ始めていた。

「痛いけど……ん、気持ち……いいのだ……」

痛みを越えた先にあったのは気持ちよさ。

先程までの気持ちよすぎるマッサージとは種類の異なる気持ちよさが足ツボにはあった。

「ここはたしか………冷え性気味、かな？」

「そう……んっ……なのか……?」

押している足ツボから何が悪いのかをマリオは推測する。

マリオの言葉にクツパは最近手足が冷たく感じるときがあることを思い出した。

「よし、これで足の方は終わりかな。肩をやるから座つてくれるかい」

「ん、分かったのだ」

足つぼも終わり、マリオはクツパをベッドに座らせる。

足ツボによって快感に沈んでいた意識が浮上し、ハッキリとした意識でクツパは素直にマリオの指示に従った。

「肩のこりに関してはピーチ姫と同じように定期的にマッサージして解消していくしかないから、こってきかと思ったらその度に言ってくれ」

「む、まあ、完全にならないようにはできなさそうだしな」

「そういうことだ。じゃあ、始めるぞ」

体の前面にそんなに重いものを2つも付けていれば肩がこってしまうのも仕方がないこと。

もしも仮に肩のこりを完全に治したいのであれば胸を取るくらいしか手段はないのではないだろうか。

そして、マリオの手がクツパの肩へとそつと触れていく。

第203話

マリオの手が肩に触れ、クツパはピクリと体を動かす。

マリオの触り方はとても優しく、まだマツサージに入っていないにしても心地よいものだった。

「改めて思うけど、かなりこつてるよな」

「んツ・・・そう・・・か・・・?」

1番最初に触診をしたときにも分かっていたことだが、やはりクツパの肩もかなりこつていた。

ガチガチにこつているクツパの肩にマリオはやる気を出していく。

「それじゃあ、やっついていくよ」

「う、うむ……」

クツパに声をかけ、マリオは柔らかく肩を揉んでいく。

いきなり力を入れずに、じよじよに肩の固まりをほぐしていくように。柔らかく優しいマリオの揉み方に、クツパは表情を緩めていく。

「ふひゅう……」

「完全にほぐさないとすぐにこっちやうから、最後までやりきるからね」

脱力したクツパにマリオは肩を揉みながら言う。

〃最後までやりきる〃

マリオの発したその言葉にクツパはなにか嫌な予感を感じとる。

不安に思っただけマリオの方を向こうとしたが、肩を揉まれたままで体を動かすことができない。

「ま、マリ……オ……?」

「……これで、下準備は大丈夫かな」

恐る恐るマリオの名前を呼ぶが、マリオは取り合わずにマッサージを続ける。

そして、マッサージの下準備の終わりを告げた。

下準備の終了。

で、あるならば次に行われるのは、 “本番” だ。

「ひあッ．．．．．?!」

先ほどまでの柔らかい力加減から一変し、強めの力で肩を揉まれる。

しかし、強めと言っても痛みを感じるほどではなく、それどころか気持ちよさを感じられた。

「あ、あうう．．．．．しゅ、しゅ（いッ．．．．．?!）」

足ツボをやる前に感じた快感と同じレベルのもの。

下準備によってほぐされていたクツパの肩は敏感にマリオのマッサージを感じ取っている。

「んあッ?!だ、ダメなのだッ?!」

このまま肩を揉まれ続けたら戻ってこれなくなる。

チカチカとする思考の中、クツパはそんな確信を得ていた。

あまりにも強い快感に、クツパは身を振もつて快感から逃げようとする。

しかし、マリオは逃れようとするクツパの肩を押さえ込み、止まることなく肩を揉み続けていく。

「やあッ?!」

肩から外れないマリオの手。

絶えず自身の体に快感を与えてくるその手にクツパは抵抗ができなくなっていた。

「や、やだッ!止めて、止めて止めて止めてえッ?!」

嫌々と首を振りながらクツパは懇願する。

これ以上の快感は頭がおかしくなる。
しかし、そんなクツパの懇願もむなしく、マリオはマッサージを続けていく。

「そんなッ．．．．?!なんで?!なんでなのだッ?!」

マリオの手は止まらない。

優しく、強く、広く、小刻みに。

揉み方を変えつつマリオはクツパを快感の高みへと押し上げていく。

第204話

気持ちよさに悶えるクツパの言葉に応えることなくマリオはマッサージを続ける。

じつくりと、念入りに。

しばらくはクツパが肩こりに悩まないように。

しかしマリオの考えが分からないクツパは何度もマリオにマッサージを止めるように懇願する。

「やだ、やだあッ?!」

マリオによつてもたらされる強い快感に、クツパは駄々をこねる子供のようによぶ。できるのならば腕を動かしてこの快感から逃れたい。

しかし、肩はマリオによつて押さえ込まれて動かすことができず。

また、手は最初の強い快感に驚いてベッドを強く掴んでしまい、離れたくても力を抜

いて離すことができない。

逃れたくても逃れることの叶わない快感。

クツパはそれをただただ受け止めることしかできなかった。

「ひうつ・・・・・・・・?!つか・・・・・・・・は・・・・・・・・」

グツと強く肩を揉まれ、クツパは思わず体をのけ反らせる。

そして、ガクリと意識を落とした。

どうやらあまりの快感に限界を迎えたようだ。

クツパからしてもここで意識を落とせるのならば救いだとも言えるだろう。

落とせるのであれば、だが。

「あつ・・・・・・・・?!きやううつ?!?!」

完全にクツパの肩をほぐすように、意識を失うことなど許さぬとも言おうかのよう
にマリオの手は動く。

もたらされる快感にクツパの意識は無理やり覚醒させられる。意識を失っていた状態からの強制的な覚醒。

その衝撃は凄まじいもので、クツパは悲鳴のような声をあげた。

「も、もうほぐれた！ほぐれたのだあッ?!?!」

これ以上マツサージこんなことを繰り返されたら本当に気が狂ってしまう。

それを理解した——いや、理解させられてしまったクツパは必死に声をあげてマリオにマツサージを止めてもらうように頼み込む。

しかし、マリオの手は決して止まらない。

それもそうだろう。

肩がほぐれて肩こりが治ったと言うのはクツパが言っているだけ。

マツサージをしているマリオはまだ治しきっていないと思っただけ。

「や……だあッ?!やだ、やだやだやだ?!溶けちやう?!ワガハイの肩が溶けちやうッ?!」

もはやクツパの顔は涙や鼻水などでグシャグシャになってしまっている。

クツパ自身、すでに自分がどんな状態なのかを考える余裕もないのだろう。

そんなクツパの言葉がマリオに届いたのか、マリオはクツパの肩から手を離して移動する。

マリオの手が離れたことよって、クツパはクツタリと全身から力を抜く。

ようやく終わった……

廃人になってしまおうかと思った……

ベッドの上に座ったまま、クツパはホッと安堵していた。

そんなクツパの耳にガチャガチャと物音が届く。

どうやらマリオがなにかをしているらしい。

片付けの準備をしているのだろうか？

そう思いながらクツパは音のした方を見る。

音のした方を見た瞬間、クツパはそちらを見たことを後悔した。

マリオが持っているのはどう見ても片付けをするための道具ではない。

それは、明らかにマツサージをするためのもの。

マツサージは終わったのではないのか。

その手に持った道具でなにをするのか。

クツパは慌てて逃げようとするが、マツサージによつてほぐされまともに動くことの叶わない体ではそれも不可能。

やがて、マリオは必要な道具を見つけたのかクツパの背後まで戻ってきた。そんなマリオの姿をクツパは目に涙を溜めながら震えて見る。

「いや……いや、嫌なのだああッ！」

そして、クツパの肩にマリオの持ってきた道具が当てる。

マリオの持ってきた道具はヴウウウンツ、と小刻みに震えながらクツパの肩に振動を与えていく。

その道具から強制的にもたらされる振動にクツパは嬌声をあげ続ける。

終わらない快感

終わらない責め苦マツサージ

それは、マリオがクツパの肩のこりがほぐれたと認識するまで終わらない。

マリオが認識するのが先か。

クッパが落ちるのが先か。

それが分かるまで、クッパの嬌声は響き続けるのだろう。

ただし、1つだけ確かなことはある。

それは、クッパがこの先マリオのマツサージを忘れることはできないと言うこと。

クッパの体にはマリオのマツサージが刻み込まれた。

もしも、他のマツサージを受けたとしても満足することは決して、決してないだろう。

第205話

ビクンツ、ビクンツ、と体を震わせながらクツパがベッドに横になっっている。

その顔はとも人に見せられるようなものではなく、口は半開きになり、焦点の合っていない目は虚空を見つめていた。

「はあ．．．はあ．．．」

荒い息を吐くクツパの姿はどこか扇情的で、片付けをしているマリオはなるべくその姿を見ないようにしている。

すぐに肩こりが再発しないように徹底的にやったけど．．．．．
やりすぎたかもしれない．．．．．

ピーチ姫がぐったりとしているのはいつものことだし、ナハトに關してもそこまで全力でマツサージをしたわけではない。

ナハトに対して全力でマツサージをしていないのはなぜか。

それはナハトの疲労が肩よりも他の場所に集中していたからだ。

なのでマリオはナハトの肩を全力でマツサージするよりも全身をバランスよくマツサージしたのだ。

「……………部屋の中は温かいからこのままで大丈夫かな？」

くったりと脱力してはいるが穏やかな呼吸をしているピーチ姫とナハト、そして荒い呼吸をしてベッドに横になっているクツパ。

3人の姿を見てマリオは呟く。

一応、抱き抱えて運ぶこともできるのだが、3人とも汗をかいているので3人が嫌がるのではないかと思ったのでそれはやめておいた。

ちなみにクツパの横になっているベッドには汗以外のもので濡れたような跡もある。

「……………とりあえず、触れないことにしておこう」

そう言ってマリオは部屋を後にした。

部屋から出て、マリオは自分の格好を改めて見る。

マッサージが終わってから予備のタオルで体を拭きはしたが、着ている作務衣が汗を吸っているために気持ち悪く感じる。

「部屋の扉の前に立ち入り禁止の札を立てておけば良いかな」

今の自分たちの姿がキノピオたちに見られるのは3人とも望むものではないだろう。

そう考えてマリオは立て札を扉の前に置く。

そしてマリオは浴場へと移動した。

借りた作務衣を脱ぎ、マリオは浴室へと移動した。

3人のマツサージをする前にも入浴はしていたのだが、3人もマツサージをすればかなりの汗をかくだろう。

軽く体の汗を流してマリオは体を洗っていく。

「ふう………。かいた汗が流れてきつぱりするなあ」

体に着いている泡を流し、マリオはお湯に浸かる。

マツサージで疲れた疲労が湯に溶けていくように感じる。

お湯の中で体をゆらゆらと揺らし、マリオは体の疲れを癒していく。

3人の体の疲労が取れた代わりに自分の体に疲労が溜まったが、悪い気分ではなかった。

第206話

湯船にゆらゆらと揺れ、マリオは体の疲れを癒す。

ピーチ姫、クッパ、ナハトの3人のマツサージをする前にも入ったのだが、やはり湯船に浸かると言うものはとても良いものなのだ。

「はふう………」

溜まった疲労も一緒に吐き出すかのようにマリオは息を吐く。

その息を聞くだけでもマリオが心地よく湯船に浸かっていることが分かるだろう。

目を閉じ、ボーツと湯船に浸かっていると浴室の扉が開く音が聞こえてきた。

遅番のキノピオが退勤前に入りに来たのだろうか。

「誰か入ってきたのかーい？」

湯船に浸かる気持ちよさに気分をよくしながらマリオはのんびりとした声で尋ねる。しかし入ってきた人はマリオの問いに答えずに体を洗い始めた。

なにも答えないことにマリオは少しだけムツとしたが、湯船の気持ちよさにすぐにごうでもよくなった。

体を洗う音が複数聞こえてくることから入ってきたのは1人ではないのだろう。

しばらくすると再び浴室の扉が開く音が聞こえてくる。

まさか体を洗うだけで出たのかと思つたが、体を洗う音が減るところが増えているのでさらに誰かが入ってきたのだろう。

「この時間でも入ってくる人がいるんだな……」

3人のマッサージをしている時点でもなかなか遅い時間ではあつたので、マッサージの終わつた今の時間ではさらに遅い時間なのは間違いない。

ゆらゆらと自分の体の動きに合わせて動くお湯の動きを楽しみながらマリオは呟く。と、いくつかの体を洗う音が止まる。

どうやら体を洗い終えたらしい。

チャプン、お湯になにかが浸かる音と湯船が揺れるのを感じる。
マリオのすぐそばに誰かが入ってきたようだ。

「こんな時間まで仕事だったのか。大変だ——なツ?!」

のんびりと湯船に揺られているのを止めてマリオは自分の近くに入ってきた人の方を見る。

近くに入ってきた人を見てマリオは思わずバシヤリと音をたてて飛び退く。
なぜならマリオの近くに入ってきた人、それは「ピーチ姫」だったのだから。

「び、びびび、ピーチ姫?!?!」

タオルを体に巻いて湯船に浸かるピーチ姫の姿にマリオは慌てて目もとを隠す。
タオルで胸などは見えないが、湯船に浸かることでほんのりとピンク色に染まっている肩にマリオはドキドキとしていた。

マリオが目もとを隠していると、そんなマリオの背後の湯船にさらに誰かが入ってきた。

「ピーチ姫だけじゃないよ」

「なあっ?!」

ピトリ、とマリオの背中にくつつきながら2番目に入ってきた人、
“ナハト” はマリオの耳元でささやく。

予想だにできない事態にマリオの頭の中はグルグルと混乱していた。

第207話

自身の前後をピーチ姫とナハトによつて封鎖されたマリオは目もとを隠しながら混乱する頭で思考する

なぜピーチ姫とナハトがいるのか。

部屋を出るときはまだ起きていなかったのではないのか。

どうして2人が男湯の方に入ってきているのか。

2人の体を見ないようにして出るにはどうすればいいのか。

混乱する頭を無理矢理回転させ、マリオは現状の打開策を探す。

「ふ、2人とも、ここは男湯なんだが?!」

「知ってるよ」

「大丈夫よ。ちゃんと入り口には立て札を出しておいたわ」

2人が間違えて入ってきたという淡い期待を込めてマリオは言うが、2人に動揺した様子は全くない。

また、ナハトが背中にくつついているのだが、なぜかタオルの感触を感じない。

それどころかマリオは柔らかい感触となにかピヨコンと小さな塊のようなものを背中に感じている。

「……………ナハト、タオルを巻いているよな?」

まさかと思いつつマリオは目もとを隠しながら尋ねる。

まさか体を隠しませずに入ってくるはずがないだろう。

きつと背中に当たっているのはできものとかその辺りのはずだ。

「マリオはどつちだと思う?」

「私もあえて教えないわね」

マリオの問いには答えずにナハトはさらにマリオの背中に密着してくる。

マリオの背中に密着するナハトの姿にピーチ姫は、笑いをこらえたようにイタズラっ

ぼく言う。

嘘である。

ピーチ姫は、目から血が吹き出しそうなほど悔しがつている。

ここがマリオの目の前でなければ地団駄を踏んで転がり回るところであつたが、唇を強く噛んでそれを抑え込んでいた。

「なんだつたら見て確認すればいいんじゃないかしら？」

「私は恥ずかしくないよ」

「いやいやいやいや?!」

嘘である。

ナハトは、顔から火が吹き出しそうなほど………とえば完全に誇張表現になるが、全く恥ずかしくないと言うわけではない。

お湯に浸かっているから頬がほんのりと赤いんですよ、と言った表情をしているが、その頬の染まっている理由はお湯に浸かっているからではない。

と、ここでマリオはあることに気づく。

ピーチ姫は「入り口にはちやんと立て札を出しておいた」と言った。

では、2人のあとに入ってきた1人遅れてきたのは誰だったのか。

ピーチ姫とナハトが入ってきていることを知りながら男湯に入ってこれる人物。

そして、入ってきててもピーチ姫とナハトがなにも言わない人物。

いつの間にか、聞こえていたはずの体を洗う音が止んでいることにマリオは今更ながら気づくのだった。

第208話

体を洗う音が聞こえなくなり、お湯の音だけが浴室に響く。

ピーチ姫とナハト以外に浴室に入ってくる可能性のある人物。

その人物にマリオは思い至り、ひとまず目を閉じながら背中に張り付いているナハトを引き剥がそうとする。

「とりあえず離れてくれないか?!」

「いや」

「逃げられないわよ」

マリオの叫びにピーチ姫とナハトは拒否の意思を示す。

そしてペタペタと最後の1人の足音が近づいてくる。

「あ、やっと来たわね」

「遅かったね」

「ぬ・・・・・・・・、仕方ないであろう。漏ら——なんでもないのだ・・・・・・・・」

ピーチ姫とナハトの問いに最後の一人、クツパは言いかけた言葉を断ち切る。

クツパの声を聞き、マリオはやはりと言う思いと、意外だと言う思いを抱く。

ピーチ姫とナハトが一緒に入っても良いと思う人物として最優先で挙げられる人物としてクツパが挙げられることはマリオも予想はしていた。

しかしクツパは先ほどのマリオのマツサージでぐったりとして普通の状態ではなかった。

なので入ってくるとは思えなかったのだ。

「く、クツパまで・・・・・・・・」

「ふふふ、起こすのはちよつと大変だったわ」

「いや、思いきり顔に水をかけてきたであろう・・・・・・・・」

「水をクツパの顔面にシューッ!!」

声の聞こえてきた方から顔を逸らしつつマリオは呟く。

このような状況をどうすればいいのか。

楽しそうに会話をする3人をよそにマリオは頭を悩ませる。

「マリオ……………」

「な、なんだい……………」

チャプリ、と音をたててクツパはマリオの近くに入る。

クツパの言葉にマリオは目を閉じながら答える。

「……………やめてって言ったのにやめてくれなかったのだ」

「う……………」

「本当に、壊れちゃうかと思って……………でも、気持ちよくなって……………」

クツパは先ほどのマリオから受けたマッサージを思い出しながら言う。

責めるようなクツパの言葉にマリオは言葉に詰まった。

なお、マリオは目を閉じているので見えていないが、クツパは両手を自分の頬にあて

て恥ずかしそうに顔を赤らめている。

「えつとだな．．．．．、途中でやめたらすぐに肩こりが再発しちゃうから——」

「いや、それはピーチ姫に聞いたから分かっているのだ」

「え．．．．．？」

「その、だな．．．．．？えつと．．．．．、うー．．．．．」

クツパはなにかを言いたそうにしているが、恥ずかしがっているのか言葉が出てこない。
い。

クツパが何を言いたいのかが分からずに、マリオは首をかしげている。

第209話

目を閉じているマリオの前でクツパはモジモジとしている。

マリオ自身は目を閉じているのでクツパの様子は分かっていない。

「えっと、だな……………?」

「お、おう」

なかなか言葉を言い出さないクツパにマリオは首をかしげる。

マリオがクツパに気を取られているうちにピーチ姫はマリオの隣に移動する。

移動の際にお湯が動くのだが、マリオは気づくことはなかった。

「その……………うー……………」

「クツパ……………?」

顔を赤くしながらクツパは唸る。

マリオは目を閉じているので分からないが、クツパは恥ずかしそうにマリオを睨むように見ている。

「ぬぬぬ………。ええいッ！マリオッ！」

「は、はいっ?!」

いきなり大きな声で名前を呼ばれ、マリオは姿勢をただす。

「ワガハイは……、ワガハイは……、キサマのせいで、キサマ以外では満足できなくなってしまったのだ!!」

「ブフオウツ?!」

クツパの叫びにマリオは思わず吹き出す。

マリオ以外では満足できない体になってしまった。

その言葉だけを聞けば明らかに違う意味にとれてしまうだろう。

ナハトはキョトンとしていたが、ピーチ姫はそちらの意味で考えてしまったのだらう。

ピーチ姫は少しだけ顔を逸らして頬を赤く染めている。

「げほっ、げほっ……………。誤解を招きそうな言い方をするなよ……………」
「ぬ……………?!」

むせながらマリオはクツパに言う。

マリオの言葉にクツパは少しだけ考える。

どうやら深く考えずに言ったようだ。

自分の言った言葉を思い返し、クツパは顔を赤くする。

「す、すまないのだ……………」

「いや、別にいいんだけど……………」

「動揺していた?」

「まあ、あのマツサージを受けた後なら仕方がないんですけど……………」

自分が勘違いさせるような発言をしたと理解したクツパはマリオに謝罪する。といつてもマリオはいまだに目を閉じているのでどんな様子なのかは分からないのだが。

自分たちの姿を確認してからいつこうに目を開けようとしないうマリオ。

そんなマリオの姿にピーチ姫はいい加減に少しイラツとしていた。

自分の体は見る気も起きないのか。

ムツとした表情を浮かべながらピーチ姫はマリオの腕に抱きつく。

ピーチ姫の体の感触にマリオは思わず体を固くする。

「ちよつ、ピーチ姫ツ?!」

「マリオ、私たちの体に興味はないの?」

「ぜんぜん見ない」

「それは、まあワガハイも気になっていた……」

腕と背中に感じる人肌の柔らかさ。

目を開けていないことによってその感触を強く意識してしまい、マリオはビシリと動

きを止めるのだった。

第210話

背後からナハト。

腕にはピーチ姫。

そんな状態のマリオを見てクツパもピーチ姫とは反対の腕に抱きついた。

「う、動けないんだが……」

両腕と背中、3ヶ所を固められたマリオはなるべく体に触れる柔らかい感触を意識しないようにしながら言う。

ハッキリと意識をしてしまえば生理現象が起こることは間違いないだろう。

「目を開けたら考えてあげるわ」

「マリオの背中、小さいけど大きい」

「観念するのだな」

マリオの言葉を3人は拒否する。

離れてほしければちゃんと目を開けて言え。

3人が言いたいのはつまりはそういうことだった。

覗きや不慮の事故であれば確かにちゃんと体は隠す。

が、今回は自分たちがマリオの入浴中に入ってきたのだ。

ハッキリと言ってしまえば、マリオを自分たちの体をもつて悩殺するために入ってきたと言ふこと。

とはいえ、ピーチ姫たちにとって一番の誤算はマリオが紳士……というよりはヘタレであったことだろう。

マリオ自身も別にそういった欲求がないと言ふわけではない。

健全な男性なのだむしろあって当然だろう。

なのだが。

告白をされているとはいえ付き合っているわけではない異性の体だ。

見たくないと言えはそれは嘘になってしまう。

むしろ正直に言つてしまえば見たいと断言できるほどだ。

が！

それを正直に前面に出して行動してしまえばどんなことが起こるのか。

行動した結果による未来のイメージが悪すぎるのでマリオは3人の裸体をけつして見ないようにしているのだ。

しかし、ピーチ姫たちにとってそんなことなど関係ない。

自分たちは見せるために入ったのだから見るべき。

むしろ見て襲いかかってくれば既成事実が作れると言うもの。

まあ、そこまで考えているかは不明だが。

見られてもよいと思つているのは事実だ。

「強情ね．．．．．」

「まあ、いきなり過ぎたとは思うがな……」

「でも、見ようとしなくてもムツとする……」

いっこうに目を開けようとしないうちに3人はじれてきたのか、赤くなってきたマリオの顔をじつと見つめる。

そんな3人の視線を感じ取ったのか、マリオは身じろぎをしようとしたが、3人の体に触れてしまい動きを止める。

強情と言われようとも絶対に目を開けない。

それがマリオの決めたことだった。

といっても、それはピーチ姫たちには関係ないことなので、心に決めたことだとしても状況が好転するわけではないのだが。

「マリオ、赤くなってる?」

「そう言えばそうね」

「照れている……のとは違いそうなのだ」

ふと、ナハトはマリオの体が赤くなってきたことに気づく。

浴室に入った直後と比べてマリオの体は目に分かるように赤くなっている。

ナハトの言葉にピーチ姫とクッパもマリオの体の変化に気づいた。

見たところ羞恥によつて染まったものではないように思える。

完全に照れはないというわけではないだろうが、それでも主な要因ではないだろう。

怒りによるものかと考えるがそれも違いそうだ。

マリオの様子に3人は首をかしげるのだった。

第211話

赤くなり、反応の薄くなったマリオに3人は首をかしげる。

照れて口数が減ってしまったのかとも考えたが、それにしても反応が薄すぎる。

どうしたのかと思ってマリオを見ていると、マリオの頭がクラクラと揺れ始めた。

「えっ………?」

「マリオ………?」

「どうしたの——だッ?!」

クラクラと揺れるマリオの様子に不思議に思っで見ていると、マリオの体がぐらりと大きく揺れた。

倒れていくマリオの姿にあっけにとられてしまい、ピーチ姫とナハトの反応は遅れてしまう。

そして、マリオの体はフニヨンとクツパの胸へと倒れこんだ。
突然マリオが自身の胸に倒れこんできたことにクツパは驚き、思わず体を硬直させる。

「ちよ、ちよつとマリオ?!」

「クツパ、ずるい」

「ま、ままままま、マリオ?!」

マリオがクツパの胸に倒れこんだのを見てピーチ姫とナハトは慌てて近寄る。

クツパもマリオが倒れこんできたことに慌ててはいるが、しつかりとマリオを抱き止めている。

どうやら動揺はしていても離すつもりはないらしい。

「い、いやいやいや、目を開けるようには言ったが触れることを許可はしていなかったのだがな? いや、別に触れられたくないと言うわけではないのだぞ? だがこういったことはキツチリと段階を踏んでと思ってだな? そう、まずは手を繋いで出掛けるところから始めてだな。それを何回か繰り返してから、その、こう、あれだ。キスをしてだな? プ

ラトニツク？誠実に？……とにかく徐々に徐々に關係を築いていつてある程度の時間を共にした上で互いの肌に触れるというか、セツ……んんツ、そういう行為にいききたいというか……いや、別にキサマが望むのであればもつと早い段階でそういう行為をしても構わぬのだが。だが、ワガハイにも心の準備と云うものがあつてだな。まあ、キサマに求められるのならば応えることもやぶさかではないというか、むしろ全力で応えるというか——」

顔を真っ赤にしながらクツパは早口に話し出す。

あまりにも早口なため、ピーチ姫とナハトはほとんどを聞き取ることはできなかつた。

というかもはや軽めの怪文レベルである。

正直に言つてクツパの早口にピーチ姫とナハトは軽く引いていた。

「マリオ、マリオ？」

「もしかして、意識がない？」

「——でもやつぱりできるなら子供は多い方がいいというか、2人の愛の結晶は多い方がいいというか。つまりそれだけワガハイのことを愛してほしいと言ふこと

で………ぬ？」

どこかトリップしたような様子のクツパを無視してピーチ姫はマリオの肩を揺する。しかしマリオに反応はなく。

ピーチ姫の加えた力に押されるように体が動いていた。

マリオの様子がおかしいことに気づき、クツパも話すことを止めてマリオの顔を見る。

「……………のぼせているのか？」

「……………みたいね」

「お風呂から出して水分補給」

赤くなったマリオの体から、ようやくマリオがのぼせていることに気づき、3人はマリオを脱衣所へと運ぶことにした。

なお、運ぶ際にマリオの下半身にはキツチリとタオルを巻いて、うつかり見ないようにすることを忘れてはいない。

第212話

のぼせて意識を失ってしまったマリオを脱衣所に運び、クツパ、ピーチ姫、ナハトの3人はマリオを団扇で扇いだり、頭を冷まそうと濡れタオルを頭に置く。

お風呂でのぼせたりするのはあまり良いことではないので、3人は不安そうにマリオを見ていた。

なお、3人はさすがにタオルを体に巻いた状態ではいられないのですでにパジャマに着替えている。

「マリオの体のことを考えるのが抜けていたわね……………」

「焦りすぎてしまったな……………」

「マリオが倒れちゃった……………」

自分たちが焦って浴場に入らなければマリオはのぼせて倒れてしまうこともなかつ

たはずだ。

3人はしょんぼりと肩を落とす。

普通に考えて男性の入浴中に女性が入ってくるのは普通に考えて痴女的な行為と言えるだろう。

ピーチ姫たちがマリオに好意を持っていて、マリオに好意を伝えているからこそこれくらいで済んでいるとも言える。

仮になんの関係もない人に同じことをしていたら男性に襲われてしまうことは間違いないはずだ。

まあ、3人も入っているのがマリオだけだからこそできたのだが。

「マリオが起きたら謝らないと……」

「そう……だ。マリオへのアピールは他の方法で考えることにしよう……」

3人は自分たちの迫り方が悪かったと反省する。

とはいってもこうなった要因の1つにマリオが優柔不断なことも含まれているので、一概に3人が悪いとも言えないのだが。

3人はその事に思い至らずにマリオが早く起きるようにマリオの体温を冷ましてい

くのだった。

「う、ううん……」

小さく呻き声をあげてマリオの体が軽く動く。

どうやら体温が下がったことよって体調も良くなってきたらしい。

マリオが呻き声をあげたことに気づき、3人はビクリと体を震わせる。

自分たちが浴場に入ったことよってマリオは意識を失ったのだ。

責められても仕方がないだろう。

責められるだけならばまだ……いや、それだけでも辛いのだが、もっと辛い

のはマリオに嫌われてしまうこと。

マリオに嫌われてしまうのではないかと言う恐怖が今更ながらに3人に襲いかかってきていた。

「……は……脱衣所……?」

ゆつくりと目を開け、マリオは首を動かして周囲を見渡す。

目に入ったのは脱いだ服を入れる籠や、髪の毛を乾かすためのドライヤーなどが置かれた鏡。

それらの光景からマリオは自分が脱衣所の椅子の上に寝かされているのだと気づいた。

第213話

意識を取り戻したマリオは目を開けて脱衣所の中を見渡した。

「……あー、のぼせたのか」

マリオは自分がどうして倒れていたのかを思い返し、浴場で意識を失ったことを思い出した。

意識を失う前に体が熱くなっていたことも覚えているので、のぼせて意識を失ったことは間違いないだろう。

と、ここでマリオは自分がまだ裸なことに気づいた。

「そっか、さすがに着替えさせることはできないもんな」

横になっていた体を起こし、マリオは椅子に座る。

無事に起きることができたとはいえ先ほどまで意識を失っていたのだ。慌てて起き上がるのは危ないと分かっているのだろう。

「ツ．．．．．ん、3人もいたのか．．．．．」

寝ていた状態から座ったことによつて軽い立ちくらみを起こしたのか、マリオは軽く頭を押さえる。

そして、マリオはようやくやくピーチ姫たち3人がいることに気づいた。

「ええと、その．．．．．のぼせさせちゃつてごめんなさい」

「ワガハイたちも焦りすぎたのだ．．．．．」

「マリオが倒れてビックリした．．．．．」

マリオに声をかけられ、3人は申し訳なさそうに言う。

マリオは3人に見えないように腰にかかっているタオルを押さえる。

3人の謝罪はマリオが入浴中に入ってきたことに対するものだろう。

それを理解したマリオはゆっくりと3人を見た。

「その、だな。正直に言つて3人の体には興味はあるんだよ」

「そうなの?」

「本当か?」

「でも」

3人の姿を見て浴場に3人が入ってきたことを思い出したのか、マリオは顔を赤くしながら言う。

マリオの言葉に3人は疑い混じりの視線を向ける。

興味があると言うのならどうして見なかったのか。

正直に言つて3人はマリオの言葉が本当なのかいまいち信じられなかった。

「ぜんぜん見ようとしなかった」

「そうよね」

「いや、恋人じゃないのを見るのはどうなのかと思つて」

ナハトの言葉にピーチ姫は同意するように頷く。

頷いてはいないがクツパも同じ気持ちなのだろう。

そんな3人の様子にマリオは首を振って否定する。

恋人でもない女性の肌を見るわけにはいかない。

ヘタレでもあるのだが、そういうった思いがあるからマリオは3人の体を見ないようにしていた。

「それで絶対に目を開けなかったのだな？」

「ああ。だから、今後はこういったことはしないでくれると助かるかな……我慢ができなくなるかもしれんし」

クツパの言葉にマリオは頷き、3人に同じようなことはしないように伝える。

そのあとのマリオの眩きは3人の耳に届くことはなかった。

第214話

マリオがパジャマに着替えるためにマリオはピーチ姫たちを脱衣所の外に出した。念のため、扉に隙間ができないようにキツチリと閉まっていることをマリオは確認する。

ピーチ姫たちが脱衣所から出るまでマリオは腰にタオルを巻いており。いつ落ちるのかとヒヤヒヤしていた。

「さて、と。ぱっぱと着替えちゃおう」

腰に巻いていたタオルを取り、マリオはピーチ姫たちをマッサージする前に用意しておいたパジャマの前に移動する。

マリオの用意していたパジャマは普段使いのものではなく、外出先で使うような普段使いのものよりも綺麗なものだ。

ちなみに、マリオは持つてくるパジャマでいま目の前にあるものと、ネコマリオのときの服とで悩んでいたりもした。

「まあ、ネコパジャマだと浮いてたかな」

もしも、悩んでいた末にネコパジャマを持つてきていた場合を思い浮かべ、マリオは苦笑した。

クツパ、ピーチ姫、ナハトが普通のパジャマを着ている中でマリオだけがネコのパジャマを着ている。

女性がいる中で唯一の男性が可愛らしいパジャマ。どう考えてもマリオだけが浮いているだろう。

「……いや、うけ狙いではありだったか？」

もしかしたらその格好でいけば面白さで笑いが起きたかもしれないが、持つてきていないので考える意味もないだろう。

パジャマに着替え終わり、マリオは脱衣所から出た。

脱衣所の外ではピーチ姫たちが待つており、マリオが着替え終わって出てくるのを待つていた。

「あ、終わったわね」

「着替えるだけだから早い」

「マリオ、のぼせてしまったわけだから水分補給はしたか？」

脱衣所から出てきたマリオに気づき、3人は話しかけてくる。

のぼせて倒れてしまったこともあるが、入浴した際には水分を体内から失ってしまうことになる。

普通に入浴するだけでも水分を失うのだから、のぼせてしまったことも考えるとマリオの体からはかなりの水分を失っていることになる。

それが気になったクツパはマリオの体調を気づかう。

「ああ、ちゃんと水を飲んだよ」

「それならよかったのだ」

クツパの言葉にマリオは頷き、水分をちゃんと補給したことを伝えた。

マリオ自身もその辺りの知識をちゃんと持っているのでキッチンと水分補給をしている。

「じゃあ、マリオの着替えも終わったしお話をするために部屋に行きましょうか」

「うん」

「そうだな」

「あまり遅くまで話せないけどね」

遅くなってしまうと明日の仕事の準備などに支障が出るので、その辺りは先に釘をさしておく。

そして、4人はピーチ姫の部屋へと移動を始めた。

第215話

マリオたち4人はピーチ姫の部屋へと移動した。

時間的にもそこそこ遅くなってきているので、あまり話す時間はないかもしれない。

「一応、部屋には着いたけど、けっこう遅い時間じゃないか？」

「う．．．．．ま、まあ、マッサージでも時間を使っちゃったしね．．．．．」

「のぼせちゃったのもある」

「帰ってくいる時間も遅かったしな」

なぜ遅い時間になったのかの要因をピーチ姫たちはあげていく。

どれが悪かったなどではなく、単にどれもやっていたから遅い時間になってしまったというだけなので、誰かが悪いと言うわけではない。

．．．．．いや、まあ、マリオがのぼせてしまったことに関してはピーチ姫たちが

悪いと、言えなくもなくもないのではないかと思わなくもない。

「で、でも、話せなくはないんだし話しましょう！」

「そうだな」

「お茶の準備？」

「であるな」

話さないと言う選択肢はないのだろう。

ピーチ姫は慌てた様子で話をすることを提案する。

慌てた様子の子のピーチ姫に笑みをこぼしながら3人は話をする準備をしていく。

マリオは椅子とテーブルの準備を、ナハトはお茶の準備を、そしてクツパはお茶請けのお菓子を準備した。

「それで、どんなことを話そうか」

「そうね．．．．．じゃあ、それぞれが一番面白いと思ったアトラクションを発表しましょう。もちろん理由も含めてよ」

「面白かったもの．．．．．」

「少なくともピーチ姫は想像が容易たやすいのだ」

マリオの問いにピーチ姫は少しだけ考え込み、パチンと手を叩いて提案した。

ピーチ姫の言葉にナハトはどのアトラクションが面白かったかを思い返していく。

マリオ、ピーチ姫、ナハトの3人が思い返している中、クツパはポツリと呟いた。

クツパが思い出すのはキノコースターに乗って大きな声を出しながら楽しんでいたピーチ姫の姿。

そのついでにピーチ姫と一緒にになってキノコースターに乗って楽しんでいるナハトの姿も思い浮かんだが、そちらはすぐに頭の中からかき消した。

「そうだな、俺は……バーチャルシューターかな。最後のボス戦に苦労はしたけど、それも楽しかったからね」

マリオはキノコランドで一番面白かったアトラクションに、迫り来るゾンビを入り口で借りた銃を使って倒していく、バーチャル・シューターを選んだ。

アトラクションの一番最後に出てきたボスには苦戦したが、それが逆に楽しかったらしい。

マリオの言葉にクツパも同意しているのか、うんうんとしきりに頷いていた。

第216話

マリオの言葉にバーチャル・シミュターを遊んだときのことを3人は思い出す。

全員がバラバラのルートで進んでいたのがボス以前の道中がそれぞれどうなっていたのかは詳しくは分かっていない。

強いて言うならピーチ姫のルートは変なバグのようなものがあつたので面白かったのかと言われたら首をかしげてしまうところだ。

「ボスまでの雑魚はそこまで強くなかつたけどね」

「そうだな。あとは途中で仲間になったやつらがけっこう個性的だったような気もしたな」

「とかいうかいなかつたら勝てなかつたわよね？」

「出会えてなかつたらガメオベラ」

「……もしかして、GAME OVERか？」

ナハトの言葉にマリオは首をかしげ、思い浮かんだ言葉を言う。

マリオの推測は当たっており、ナハトの言ったガメオベラとはGAME OVERをローマ字読みで読んだものだ。

なお、途中で仲間と出会えていなかった場合は異なるボスになるので、必ずしもGAME OVERになると言うわけではない。

「それじゃあ次は誰が言う?」

「私、面白かったのはビッグサンダーマツシユルーム。着水した瞬間に大きく水がはね上げられたのがすごかった」

「ああ、確かにあれはすごかったな」

「カツパを借りれなかったら大変なことになっていたわよね」

ナハトの言葉に3人はビッグサンダーマツシユルームに乗って着水した瞬間を思い出す。

水に突っ込んでいった瞬間の衝撃と、突っ込んでいったことよって起こった大きな水しぶき。

あのときの水しぶきはもはやしぶきではなく波と言っても過言ではないレベルだったように思える。

「あ、そういえば案内図に夏場は水着で乗ることができると書いてあったな」

「ふむ、水も綺麗なものだったからそれもありかもしれないな」

「もしかしてキノコランドの中を水着で歩けるってことかしら？」

「あまり他人に見せたくはない」

水しぶきを思い出していると、マリオはふと案内図に書いてあった一文を思い出して3人に教える。

マリオの言った情報は案内図の後ろの方に書いてあったもので、きっちり最後まで読んでいないと気づけないような位置に書いてあったので3人は気づいていなかった。

「んー。ビッグサンダーマッシュルームに乗るときだけ水着になればいいんじゃないかしら？」

「それならまだいいのか？」

「荷物がかさばりそうなのだ」

「水着のままキノコランドを歩くよりはいいかも」

荷物が増えてしまいが、水着を持ち歩けばキノコランドを水着姿で歩く必要もない。
ピーチ姫のあげた案に賛成らしく、ナハトは頷いていた。

第217話

ピーチ姫の提案した、それぞれがキノコランドで面白いと思ったアトラクションを理由も含めて言う。

マリオとナハトが終わり、半分が終わったことになる。

といってもピーチ姫が恐らく言うであろうアトラクションには3人ともあたりはつけているので、実質的に残りはクツパだけのようにも思えた。

「ワガハイか。そうだな……、キノコシアターかな。やはり映画がおもしろかったのだ」

「うんうん、あの映画は名作だったと思うわ」

「脚本家は予想外だったけどね」

「ジューズをくれたからいい人」

キノコシアターで見た『少年と強欲の獣』の内容を思い出してクツパは嬉しそうに話し始めた。

クツパの嬉しそうな様子にピーチ姫は頷き、同意する。

脚本家の少年は予想外ではあったが、それでも映画の内容を素晴らしかったことには変わりはないので、クツパは脚本家については考えないことにしている。

「少年と獣が助け合ったり、ときには喧嘩したり、そうやって絆を深めていく姿が素晴らしいと思うてな。……ワガハイとマリオの関係に似ているようにも思えたしな」

「ん？最後のほうが聞き取れなかったけど……」

「最後にちゃんと獣が救われたのも嬉しかったわね」

「正統派な終わり方」

映画の感想を言い、クツパはポツリと呟く。

クツパの呟きはとても小さいもので、マリオたちの耳に届くことはなかった。

「まあ、ワインリバーと悩んだがな」

「そういえば、コインも手にいれてたもんね」

ワインリバーに乗っている際にマリオに直撃してクツパのもとに飛んできたコインを手に持ちながらクツパは言う。

クツパの手に持っているコインはワインリバーに乗っているときに手にいれることができ、拾った人間が異性に渡すことによつて結ばれると言われているものだ。

そのため、ピーチ姫とナハトの視線がやや鋭い。

「さて、じゃあ最後のトリは私ね！私が面白かったと思うアトラクションはウル——

」

「「ウルトラキノコースター」」

「——ト……ラ……」

意気揚々と自分の楽しく思ったアトラクションを言おうとしたが、ピーチ姫の言葉で断ち切つて3人が言つてしまう。

3人に言われてしまったことによつてピーチ姫の勢いは削がれ、言葉が止まつてしまった。

ピーチ姫が言おうとしていたアトラクションは3人が言つたウルトラキノコース

ターで間違っていないのだろう。

自分の言葉を断ち切られてしまったことが不満らしく、ピーチ姫は頬を膨らませて3人を睨み付けるのだった。

第218話

頬を膨らませ、不満げな表情でピーチ姫は3人を睨み付ける。

自分の言おうとした言葉を他の人に掠め取られれば誰でも不満を抱いてしまうのは当然のことだ。

「むう………」

「まあ、当然であつたな」

「あははは………」

「キノコランドで1番叫んでた」

ピーチ姫に睨まれながら、マリオは苦笑し、クッパは腕を組んで頷く。

ナハトもウルトラキノコスターに乗っていたので、ピーチ姫の楽しんでいる声を間近で聞いていたために推測は容易かつたのだろう。

「合ってるけど……合ってるんだけど……!!」

「あ、やっぱり」

「であろうなー」

「想像通り」

悔しそうにピーチ姫は言う。

マリオは即答をしてはいたが少しだけ自信はなかったのだろう。

ピーチ姫の様子を見ながらマリオは頷き、クッパはどこか棒読み気味に言った。

そしてナハトはどこぞのノートに人の名前を書いて色々とやる学生のようなトーンでニヤリと笑っている。

「もう！私が自分で発表したかったのよ！」

「でもピーチ姫って絶叫系のものしか乗らないし」

「基本的に印象に残っているのは絶叫系しかないのでしょうか？」

「ピーチ姫＝絶叫系の方程式」

ぶんすことピーチ姫の怒りはおさまらない。

それだけ自分の言おうとした言葉を掠め取られたことが腹に据えかねているのだから。

しかしピーチ姫が不機嫌になるのを見るのも何回かあるので、3人に慌てた様子にはない。

「それに理由って、1番速かったからじゃないかい？」

「たしかキノコタウンでは1番速かったはずだからな」

「あれが1番速くて高低差があったから」

「うぐう……」

理由まで当てられ、ピーチ姫はぐうの音も出なくなってしまった。

言えることがなくなり、ピーチ姫はべしやりとテーブルに潰れてしまった。

3人の言った通り、ピーチ姫がウルトラキノコスターを選んだ理由は1番速かったからである。

1番速くてインパクトがあつたために、1番印象に残つたのだろう。

「だってあれが1番楽しかったんだもん……」

「俺とクツパは気絶したけどね……」

「ワガハイたちは耐えられなかったのだ……」

「楽しかったから分かる」

マリオとクツパはウルトラキノコースターに乗って気絶したのであまり良い印象はないのだ。

まあ、そもそもとしてマリオとクツパが気絶するレベルのジェットコースターというものもどんなレベルなのかと思わなくもないだろう。

普段から運動や、カート、空を飛んだりしているはずの2人が気絶するのだ。

むしろ耐えられるピーチ姫とナハトが不思議なのだ。

第219話

ピーチ姫の提案したそれぞれのキノコランドで一番面白いと思ったアトラクションを発表するのも終わり、4人はキノコランドでの思い出を話し出す。

それはジェットコースターのことであつたり、お化け屋敷の事であつたり。

さらにはキノコランド内に置かれている微妙な種類のジュースの事であつたり。

様々なことを4人は話していた。

不意に部屋に置かれた時計の音がなる。

どうやら話し込みすぎてしまつていたらしい。

時計を見れば深夜になる時間を指している。

いまの時間を知つたマリオは、自分の前に置いてあるお茶を飲んで立ち上がった。

「もうこんな時間か……明日の事もあるし、俺は先に寝るよ。3人とも、おやすみ」

「ええ、おやすみなさい」

「おやすみなのだ」

「私も一緒に——」

「却下（なのだ）」

「あう……」

マリオの言葉にナハトも立ち上がろうとするが、クツパとピーチ姫に左右の肩を押しえられてしまい、立ち上がることはできなかった。

そんな3人の様子にマリオは苦笑を浮かべつつ部屋を後にした。

「……………行つたな」

「……………そうね」

「行つちやつた」

扉が閉められ、マリオの足音が遠ざかっていくのを確認し、クツパとピーチ姫はポツリと眩く。

遠ざかっていくマリオの足音にナハトは寂しそうにしている。

「さて、と。マリオにはどうやってアピールをするかな……」
「色仕掛けは止めてほしいって言ってたものね」

マリオへのアピールをどうするかをクツパは腕を組みながら考える。

ピーチ姫の言うとおり、色仕掛けは止めてほしいとマリオに言われたのでそれ以外の方法を考えなければならぬ。

どうしたものかとクツパとピーチ姫は頭を悩ませる。

「さりげないボディータッチをするとか？」

「ふむ。出掛ける回数を増やすとかはどうなのだ？」

「デート？」

思い付いたアピール方法をクツパとピーチ姫は紙にメモしていく。

2人のあげた方法を聞き、ナハトはそれらの事を合わせて行える方法を呟いた。

とにもかくにもマリオへのアピールは、デートを繰り返したり、自然に会話をして仲を深めていくしかないのではないだろうか。

「まあ……、それしかないわよね」

「焦ることなく、堅実に。一緒に出掛けるしかないのであろうな」

「じゃ、私はマリオをデートに誘ってくる」

「だめ（なのだ）！」

出した結論をクツパとピーチ姫がまとめていると、ナハトはマリオをデートに誘おうとする。

が、つい先ほどマリオが眠りに行ったので、邪魔させるわけにはいかないとナハトを捕縛した。

マリオが部屋から出るときと同じような光景が繰り返されるのだった。

第220話

マリオへのアピール方法の話し合いも終わり、のんびりとした空気が流れ始める。

最終的に出た案は、デートに行くという一般的な絆を深めていく方法で劇的にアピールができるものではないが、それでも案が出たことにクツパとピーチ姫は安堵していた。

「それじゃあ、あとはどうやって出掛けるかよね」

「それは、各自の時間があるときに良いのではないか？まあ、可能であるならば全員で行きたいがな」

「私は作ろうと思えばいつでも行ける」

「そういえばそうね」

「ふむ、だがマリオの都合もあるからな。必ず行けるとも限らぬだろう」

誰が、いつ、どのようにして出掛けるか。

クツパの言うように可能であるならばマリオを含めた4人で出掛けたいが、全員の予定が合うことはそこまで多くはないだろう。

まあ、ナハトに関してはある程度の予定の融通がきくので、自由にできるのだろうが、マリオ自身の予定は不定期に決まるので、あまり予定があうことはないだろう。

「とりあえず色々と話もできたし、そろそろ寝ましょうか？」

「そうだな。くあ……、マリオも寝たし、時間も遅いしな」

「ねくんねくん、ころりりよ」

話していたこと以外にも思い付いたことなどをメモしていた紙を片付けながらピーチ姫は言う。

マリオが眠りに部屋に行ったときにも分かっていたが、時間は深夜とも言えるような時間。

時計を確認しながらクツパは小さくあくびをする。

クツパが眠そうにしている姿に反応したのか、ナハトは子守唄を歌い出した。

「じゃあ、ワガハイは部屋に戻るのだ」

嘘である。

クツパは、部屋に戻るつもりなど全くない。

心の中では、マリオの部屋に行つて一緒に寝ようと考えている。

先ほどマリオには注意を受けたが、これに関しては自分が一緒に寝たいからだと理由をつけて正当化している。

「私も寝るわ。おやすみなさい」

嘘である。

ピーチ姫はこのまま眠るつもりなど全くない。

頭の中にあるのは、隠し通路を使ってマリオの眠っている部屋へと向かうことばかりである。

「マリオに対して寝起きドツキリのようなものを仕掛けるのだという理由をつけて隣に眠る気満々だ。」

「私はマリオのところで寝るー」

マジ
本当である。

ナハトは本当にマリオの部屋に行つて一緒に布団で眠るつもりである。

やや眠くなってきているのでクッパとピーチ姫はナハトの言った言葉はハツキリと

は聞こえておらず、とくには気にした様子もない。

ナハト自身も2人が気づいていないことは分かっていたが、気づいていないことに問題はなかったので気にせずにいる。

そんな三者三様の思いが渦巻きながら、夜は過ぎていくのだった。

第221話

柔らかな日の光が部屋に差し込んでくる。

暖かな光と自然な明るさを感じ、マリオの意識は浮上していく。

「ん……………」

昨日の眠る時間は遅くなったが、ぐっすりと眠れたお陰なのかマリオの体に疲労が残っているようには感じない。

短く声を出しながらマリオはゆっくりと目を開けた。

「朝……………かあっ?!」

目を開け、最初に目に入ってきた光景にマリオは思わず声をあげる。

マリオの目の前には無防備に眠るピーチ姫の姿だった。

自分は確かに1人で寝ていたはずなのに、目の前にはピーチ姫の寝顔がある。どう言うことなのかとマリオの頭の中はハテナマークで埋め尽くされていた。

「……………あれ、柔らか……………かい……………?」

ピーチ姫の寝顔に驚いていたが、マリオはふと自分の頭が枕の柔らかさとは違う柔らかいものに触れていることに気づく。

加えて言うならその柔らかいものはなにやら良い匂いがしているような気がする。

どこかで嗅いだような匂いに、マリオはまさかと思いつつ頭を起こしてその柔らかいものの全貌を見る。

「……………マジで?」

柔らかいものの全貌を見、マリオは思わず言葉を漏らす。

マリオが寝ていたもの。

それはマリオの見覚えのある人物であり、どうやらマリオの頭はその人物のお腹の上

に乗っていたようだ。

「ええ．．．．．いや．．．．．なんで．．．．．？」

マリオの頭がお腹に乗っていた人物。

それは、熟睡しているクツパだった。

なぜ自分の頭がお腹に乗っていたのに熟睡できているのか不思議に思うが、それよりも自分の頭の下にクツパが寝ていたことの衝撃の方が大きかった。

自分の目の前で寝ていたピーチ姫と、自分の頭の下で寝ていたクツパ。

ここでマリオは残りの1人であるナハトの姿がないことに気づいた。

もしかしたらこの部屋にいないのかもしれないが、この2人がいるのだからいる可能性が高いと思える。

「．．．．．後ろにいたのか」

キヨロキヨロと部屋の中を見回し、マリオは自分の後ろに寝ているナハトの姿を確認した。

マリオはナハトの姿があったことに逆に安心してしまった。

結局のところ、ピーチ姫、クツパ、ナハトの3人が部屋に入ってきていたらしい。

「とりあえず、顔を洗うか……」

3人を起こさないようにベッドから起き、マリオは顔を洗うために洗面所へと向かっていった。

なぜ3人がマリオの部屋で寝ているのか。

なぜマリオの声に反応せずに眠っているのか。

なぜマリオの頭がお腹に乗っているのに起きないのか。

その理由は前日の夜にまで巻き戻る。

第222話

時刻は戻ってナハトがピーチ姫の部屋を出たころ。

その時はまだクッパもピーチ姫もまだ話しており、寝ているマリオの部屋に向かっているのはナハト一人だけだった。

「マリオと眠る〜」

鼻唄を歌いながらナハトはマリオの寝ている部屋に向かう。

．．．．念のために言っておくが、ナハトの言う眠ると言うのは言葉通りの意味であり、あちらの意味での眠ると言う言葉ではない。

そして、ナハトはマリオの寝ている部屋の前に到着した。

「おじやましませ〜す．．．．．」

そつとマリオを起こさないように気をつけながらナハトは扉を開ける。

当然ながらマリオは寝ているので部屋の中は月明かりが差し込む程度の明るさしかなく、やや薄ぐらい。

足音を可能な限り殺して、ナハトはマリオのベッドに近寄っていく。

「えへへへ………。寝てるよね？」

「んう………」

マリオが寝ていることを確認し、ナハトはそつとマリオの寝ているベッドに潜り込んだ。

ナハトが潜り込んだことにマリオは少しだけ声を漏らすが、起きることはなかった。そして、ナハトは眠気に誘われ、そつと意識を落としていくのだった。

ナハトがマリオのベッドに潜り込んで眠りについてから数分後。

マリオの寝ている部屋に備え付けられている暖炉が静かに回転していった。

静かとは言っても完全に音がしないと断言するわけではないので、わずかにゴゴゴという音が聞こえてくる。

「マリオは寝てるわよねー？」

回転した暖炉の前に立って部屋の中にいるマリオの様子をうかがうのは、この隠し通路を活用して部屋に侵入してきたピーチ姫だ。

その手にはいくつかの道具があり、寝起きドッキリの用意は万全らしい。

道具を手を持ちながら、ピーチ姫は静かにマリオのベッドに近づいていく。

その足取りはクッパに囚われたときにこっそりと出歩いていることよって鍛えられたので、隠密のように静かだ。

「んなっ?!ゲフンゲフン、なんでナハトがいるのよ……」

マリオの隣に寝ているナハトの姿に気づき、ピーチ姫は思わず声をあげそうになるが、とつさに口を押さえてマリオが起きないようにした。

ナハト自身はちやんと saying していたのだが、ピーチ姫とクツパは聞いていなかったのでも驚いている。

「くう………。出遅れたわ……。」

すでにナハトは眠りにしているので、どかすこともしのびない。スヤスヤと眠っているナハトの姿にピーチ姫は悔しそうに言った。

「……。とりあえず、マリオが起きないようにしておきましょう」

そう言ってピーチ姫はマリオの顔の上に見たこともない青色のキノコをかざすのだった。

第223話

眠っているマリオの顔の上。

マリオとその隣で静かに寝息をたてているナハトを起こしてしまわないように細心の注意を払いながら、ピーチ姫は手に持った青い色のキノコをかざす。

そしてピーチ姫は青い色のキノコの傘の部分をポフポフと軽くはたいた。

傘の部分をはたかれたことよって青い色のキノコの胞子が飛び、マリオの顔へフワフワと降り注いでいく。

「これで、オツケー……なのよね？」

マリオの顔に胞子が落ちたことを確認し、ピーチ姫はこそそとした動きをやめる。

静かに動くことをやめたため、そこそ大きな音が出始めるがマリオに起きるような気配はない。

念のために軽くマリオの近くで手を軽く叩いてみるが、特には反応もなかった。

「すごい、本当に起きないわ……」

いつものマリオであれば物音がすれば跳ね起きるとまでは言わないが、目を覚ますはずなのだ。

しかし、眠っているマリオに起きるような様子は見られない。

ピーチ姫は手に持っている青色のキノコをしげしげと眺めながら呟く。

ピーチ姫の持っている青いキノコ。

このキノコの名前は「ネマツシユルム」と言い、このキノコを食べたり、胞子を吸い込んだりするとその人を眠らせてしまうというキノコなのだ。

ちなみに直接食べた場合、起こさなければ最短でも10時間は眠りっぱなしというほどに強力なものでもある。

なお、今回は胞子を吸わせただけなので眠りが深くなる程度で済んでいる。それでも簡単に起きるようなものではないのだが。

「さーて……ふふふ、どんなドッキリを仕掛けようかしら」

マリオのことは好きだが、それはそれとして、これはこれ。

マリオの驚く顔が見たいがためにピーチ姫は大量のドツキリのための道具を用意していた。

ワクワクとした表情でピーチ姫は寝起きドツキリのための道具をあさっていく。

大きな音がする通常よりも大きなサイズのクラッカー、起き抜けの顔にぶつけるためのパイ、銀色の部分を触るとやや弱めの電流が流れるおもちゃ、他にも様々な道具が用意されている。

ピーチ姫が道具をあさっていると、静かに部屋の扉が開いた。

「おじやまする……ぬうつ?!」

「く、クツパ?!」

扉を開けて入ってきた人物、クツパは部屋の中にいるピーチ姫の姿に気づき驚きの声をあげる。

クツパ自身はうまく出し抜いてマリオの部屋に着いたと思っただけに、その衝撃は大きかった。

しかし驚いたのは部屋の中にいたピーチ姫も同様で、扉を開けたクツパの姿に目を白黒とさせている。

第224話

マリオの寝ている部屋で、クツパとピーチ姫は驚きながら固まる。

2人が固まっているなか、マリオの寝息が部屋の中でしている。

ちなみにナハトは寝息がとても静かなのでほとんど音は聞こえない。

「ピーチ姫！なぜここにいるのだ?!」

「あ、あなただつて部屋で寝るつて言つてたじゃない?!」

お互いに自分たちの言つていたことを棚にあげて言い合う。

ネマツシユルームによつて深い眠りについているとはいえ、大きな声を出してしまえば起きてしまうかもしれないのでそこまで大きな声を出してはいない。

「ね、寝起きドツキリを仕掛けようと思つたのよ！悪いかしら?!」

「わ、ワガハイは隣で寝ようと思ってきたのだ！」

互いにぶちまけるのはそれぞれのやろうとしていたこと。

どちらもやろうとしていることがやろうとしていたことなため、お互いに相手を責めることができない。

短く息を吐き、クツパは寝ているマリオを見る。

そこでようやくクツパはマリオの横でナハトが寝ていることに気づいた。

「ワガハイが最後だったのか……」

「私が来たときにはもう寝てたわ」

静かな寝息をたてているナハトの姿にクツパは少しだけ落ち込む。

いつたいナハトはいつから部屋にいたのか。

自分が来たときにはすでに寝ていたナハトの姿を思い出しながらピーチ姫は呟く。

「んー……、じゃあ、順番的に私にもマリオの隣で寝る権利があるわよね？」

「ぐぬぬぬ……」

ナハトが最初に来てマリオの隣で寝ている。

で、あるならばナハトの寝ている反対側で寝る権利は自分にある。

ピーチ姫の言葉にクツパは悔しそうに歯軋りをする。

そんなクツパを尻目にピーチ姫はマリオの隣へと移動した。

「だ．．．．．だめなのだあつー！」

「きやつ?!」

マリオの隣に横になろうとするピーチ姫の姿を見て、クツパは思わずピーチ姫の事を強く押してしまう。

クツパに押されたことにより、ピーチ姫は近くに置いてあつた道具に体を軽くぶつけてしまう。

ピーチ姫がぶつかったことによつて道具たちは跳ね上げられてしまった。

「いたたた．．．．．。もうつ、なにをするの．．．．．よ?」

「す、すまぬの．．．．．だ?」

ピーチ姫は押されたことを不機嫌そうにクツパの方を見、ポカンとした様子でクツパの頭上を見た。

ピーチ姫の声にクツパはすまなさそうに謝るが、自身の頭の上にポフンとなにかが落ちてきたことによつて、言葉が途切れる。

そしてクツパは自分の目の前になにか粉のようなものが降ってきていることに気づいた。

「ちよつ、クツパ?!息を止め——」

「ふえ……?!……すう」

クツパの頭の上に落ちたものを確認したピーチ姫はとつさにクツパに息を止めるように言うが、時すでに遅く、クツパは頭の上に落ちてきたキノコ、ネマツシユルームの胞子を吸い込んでしまった。

胞子を吸い込んでしまったクツパは気の抜けた声をあげると、眠っているマリオの上の辺りに倒れこんで眠ってしまった。

倒れこんで眠ってしまったクツパの姿にピーチ姫は思わず頭を抱える。

「もう、めちやくちやじゃない……………」

散らかってしまった道具を片付けながらピーチ姫はぼやく。

あわよくば程度にマリオの隣で寝ようかとは思ったが、クツパに押されるとは思いもしなかったのだ。

床に散らばってしまった道具を片付け、ベッドの近くにある小さなテーブルの上に置く。

「さてさて、改めて寝起きドツキリの準備を……………」

不意にピーチ姫の頭がくらりと揺れる。

先ほどまではなんともなかったはずなのに急な眠気がピーチ姫を襲う。
抗いがたい眠気にピーチ姫は思わずマリオの隣に倒れこむ。

「も、もしかして……………、知らないうちに私も胞子を吸っちゃっていた……………
？」

そして、ピーチ姫の意識は夢の中へと旅立っていった。
これが、マリオの部屋でクツパ、ピーチ姫、ナハトの3人が寝ていた理由である。

第225話

バシャバシャと蛇口から出てくる冷たい水でマリオは顔を洗う。

冷たい水が頭を冷やし寝起きの頭をスツキリと覚醒させてくれる。

まあ、寝起きで目の前にピーチ姫の顔があった時点で目は覚めてはいたのだが、それはまた違った目の覚め方であり、あまり心臓にはよろしくない目覚め方だったと言える。

「ふう………、さっぱりした」

顔を洗ったことによつて濡れた顔をタオルで乱雑にぐしぐしと拭きながらマリオは息を吐く。

思い出すのはなぜか自分の泊まっている部屋に入ってきて寝ていた3人のこと。といっても複雑な理由はないだろうことはマリオにも分かっている。

であるのならば考えるべきは3人に対するマリオ自身の思い。

マリオ自身も3人に対してかなり好意的な感情を抱いている。

そして自分が3人のうちの1人に対して特別な感情を抱いていることも昨日のキノコランドの観覧車で自覚した。

「どうしたら……いいんだろうな……」

自覚した思いにマリオは軽く頭を抱える。

分かってきていることであり、何度も言っていることだが、マリオはヘタレであり優柔不断である。

そんなマリオが自身の思いを自覚したのだ。

それだけでもかなりの進歩だと言える。

「……ひとまずは着替えて一回家で考えよう」

が、進歩があつたといつても人としての性質はそう簡単には変わらないもの。

自身の思いを自覚したマリオではあつたが、選んだのは結局のところ問題の先送り

だった。

と、ここでマリオは自分の着替えを持ってきていないことに気づいた。

いくら3人が寝てるといっても目の前で着替えるわけにもいかないのです、服を取りに洗面所から出た。

洗面所から出て3人の様子を見るが起きてくるような様子はない。

3人を起こしてしまわないように気をつけながらマリオは自分の荷物の近くにまで移動する。

「えっと、着替えは………ん？」

自分の荷物から着替えを取り出していると、荷物の近くに青色のキノコが落ちていることに気づいた。

マリオは様々なキノコについての知識も豊富であり、この青い色のキノコについても当然ながら知っている。

「なんでこんなところにネマツシユルームが………？」

マリオの知識が正しければこのキノコ、ネマツシユルームはキノコタウンの近辺には生えていない。

なのでこのキノコは取り寄せることでしか見れないはずなのだ。

最初に見たときは良くできた作り物かとも思ったが、観察してみれば本物であることが分かった。

「……もしかして3人に起きる様子がないのはこれが原因か？」

胞子が飛ばないように気をつけながらマリオはネマツシユルームをビニール袋に入れる。

このネマツシユルームはかなり成長しているもので、普通のものよりも効果が強くなっていることにもマリオは気づいていた。

ベッドの近くに色々な道具が置いてあることから用意したのはおそらくピーチ姫だということは何となく察する。

「またなにかドッキリをするつもりだったのか……」

ピーチ城に泊まるたびに何かしら^のいたずらを仕掛けてくるので、もはや慣れたものだった。

そして、マリオは着替えを持って洗面所へと移動した。

第226話

洗面所で着替えを終え、いつもの服装になったマリオは洗面所から出た。

洗面所から出たマリオは改めて寝ている3人の姿を見る。

「パッと見だけだとネマツシユルームが原因なのかは分からないんだよな……」

何度も言うが、ネマツシユルームの効果は胞子を吸ったり直接食べた場合にその人を眠らせてしまうというもの。

逆に言えば効果はそれだけなので診察などではネマツシユルームが原因だとは分かりにくいのだ。

「……よし、ピーチ姫の用意した道具を使わせてもらおうか」

ベッドの横にあるテーブルの上に置かれている様々な道具を見ながらマリオは呟く。けして、けつして今までにピーチ姫に驚かされた分の仕返しができるなどは考えていない……はずだ、たぶん、きつと、めいびい。

置いてある道具をガサゴソとさぐりながら、マリオはどれを使おうか考える。

さすがに朝から汚してしまうようなものを使うのはダメだろうからパイなどは除外する。

というかピーチ姫がこんなものまで用意していたことに少しだけ驚いていた。

「パイに、水風船、マジック……って落書きするつもりだったのか」

続けて見つけたのは普通より大きめのクラッカー。

さすがに鼓膜が破れたりほしくないだろうが、跳ね起きることは間違いないだろう。

「……フライパンにおたま？」

さらに道具をあさっていくと明らかに調理道具が出てきた。

フライパンとおたま。

この2つから導き出される答えは昔ながらのやかましい叩き起こしだろうか。

「まあ。クラッカーとかよりは音を抑えられる……のか？」

とは言っても五月蠅いことに変わりはないのでこれも使うわけにはいかないだろう。ピーチ姫の用意したであろう道具を一通り見てマリオは道具を片付ける。

一応は置いてある道具をすべて見たのだが、そのどれもがやり過ぎな気がするものばかりだったのだ。

仕方なくマリオは道具を使うことを諦めた。

「とりあえず1人ずつ起こすことにしよう」

そう呟いてマリオは最初にクツパの肩を揺する。

寝ていることよってクツパの体からは余計な力が抜けており、マリオの揺する動きに合わせてクツパの体も揺れた。

さらにそれに合わせてクツパの胸も揺れる。

クツパは眠る際にはブラジャーを着けないので、クツパの胸はフニヨンフニヨンと

ても柔らかかそうに揺れている。

その光景にマリオは思わずクツパの肩を揺すりながら見入ってしまった。

「んん．．．．．」

「——ツ?!」

体が揺れたことよってめがさめたのか、クツパが短く声を漏らす。クツパの声にマリオは慌ててクツパの胸から視線を逸らすのだった。

第227話

マリオに肩を揺すられたクツパはゆっくりと目を開ける。

ぼんやりとしながら目だけを動かし、周囲を軽く見渡した。

ううん……

昨日、ワガハイは——ッ?!

体を起こしながらクツパは眠る前のことを思い出そうとする。

が、体を起こしている途中でマリオの存在に気づき、思わず固まってしまった。

「えっと、おはよう」

「お、おはようなのだ……」

揺れていたクツパの胸を見ていたことに対する気まずさを隠しながらマリオは言う。

マリオの言葉に固まりながら答え、クツパは思考する。

自分がどうしてマリオの泊まっている部屋で寝ていたのか。

マリオが寝てから侵入したのでマリオは自分がいつ入ってきたのか、そしてなぜ侵入したのかを知らないのだ。

視線をマリオから逸らしながらクツパはベッドから降りる。

「つと、先に2人も起こしちゃおう。クツパは先に顔を洗つてくると良いよ」

「う、うむ………。分かったのだ」

マリオに促されて、クツパは洗面所へと向かっていった。

クツパが洗面所に向かったことを確認し、マリオは眠っている2人に視線を向ける。

次はどつちを起こすべきか……。

眠っているピーチ姫とナハトを見ながらマリオは考える。

おそらくではあるが、2人とも普通に起きてはくれるだろう。

だが、起きたあとにピーチ姫は寝ている最後の1人にドツキリを仕掛けそうだし、ナ

ハトは何をするか予想がつかない。

どちらを先に起こすべきかに悩み。

マリオは頭を抱える。

「・・・・・・・・ナハトにしておこう」

何をするか予想がつかないが、ほぼ確実にドッキリをしようとするピーチ姫よりは大人しくしてくれると思いたい。

そう考えてマリオはナハトを先に起こすことに決めた。

「ナハト、ナハト・・・・・・・・朝だよ」

「んう・・・・・・・・マリオ・・・・・・・・」

先ほどのクツパと同じようにナハトの肩を揺する。

肩を揺すられたナハトは短く声をあげ、肩を揺する手を捕まえた。

ナハトの突然の行動にマリオは反応が遅れてしまう。

「ちよつ、こらつ、起きるんだよ?!」

「マリオの手・・・・・・・・」

捕まえられた手から感じるふにふにとした柔らかな感触から逃れようと手を引くが、ナハトはガツチリと掴んでいるようで引き抜くことができない。

どうやらナハトは寝ぼけているらしく、マリオの手を巻き込むようにして丸くなってしまう。

「ナハトーッ?!?!」

「ん………、うるさい………」

ナハトが丸くなったことよってマリオの手がさらに柔らかいものに包まれ、マリオは思わず叫んだ。

近くで大きな声が聞こえたことよってナハトはパチリと目を開ける。

まだ朝なので大きな声を出すつもりはなかったのだが、ナハトが目を覚ましたのであれば結果オーライと言えるのではないだろうか。

第228話

マリオの腕にしがみつきながらナハトは目をぱちぱちとする。

どうやらナハト自身も予想外の状態だったようで、動揺している様子がうかがえた。

「……………マリオ？」

「ああ……………。とりあえず離してくれないか……………？」

ややぎこちなくマリオの名前をナハトは呼ぶ。

ナハトの言葉にマリオはなるべく腕に感じている感触を意識しないようにしながら腕を話すように頼んだ。

自分がマリオの腕にしがみついていることに気づいたナハトはマリオの言葉に従って腕から離れた。

「ふう・・・・・・・・・・。クツパは先に顔を洗いに行っているからナハトも行っておいで」
「分かった・・・・・・・・・・」

ナハトが腕から離れたことで精神的な余裕をある程度は取り戻せた。マリオはクツパが先に洗面所に行っていることをナハトに伝える。

マリオに促され、ナハトはベッドから下りて洗面所へと向かって歩きだした。
これで寝ているのはピーチ姫だけとなった。

「・・・・・・・・・・まあ、別に身構える必要はないよな？」

眠っているピーチ姫を見ながらマリオは呟く。

クツパとナハト、どちらも起こす際にちよつとしたことが起きたためにマリオは少しだけ警戒していた。

そしてマリオはピーチ姫の肩を揺する。

「ピーチ姫、朝だよ。起きてくれ」

「ん、もう・・・・・・・・・・あさ？」

マリオに揺すられ、ピーチ姫はゆっくりと目を開ける。

前日のキノコランドでの告白を受けたこともあり、ピーチ姫に対してマリオは少しだけ気まぐれ感じていた。

目を開けたピーチ姫はしばらくの間、目をぱちぱちとさせていたが、じよじよに頭がハッキリとしてきたのか、目を見開いて驚愕の表情を浮かべていく。

「朝?!」

「え、あ、ああ……」

ガバリ、と身を起こし、ピーチ姫は大きく声をあげた。

いきなり体を跳ね起こしたピーチ姫に驚き、マリオは体を仰け反らせながら答える。

「嘘……」。しかも私が最後?! 私の計画があ……」

「やっぱりか……」

頭を抱えて悔しそうにするピーチ姫の姿にマリオは頭が痛いとはかりに頭に手を当

てて眩いた。

ピーチ姫の言葉からマリオはピーチ姫が何かしらのドッキリをするつもりだったことを確信し、呆れている。

「はあ………。クツパとナハトは洗面所にいるから、ピーチ姫も早く顔を洗ってきなよ？」

「ううう………。はあい………」

呆れた様子のマリオにピーチ姫はじゃっかん凹みながら洗面所へと向かって歩いていった。

と、不意にマリオはあることに気づいた。

「……あれ、3人とも着替えとか持ってきてないよな？」

そう。

ピーチ姫たちはマリオの部屋に来る際に着替えなどを持ってきてはいない。

とは言ってもここはピーチ城なので問題はないのだが。

マリオもそのこと思ひだし、問題がなかつたことに気がつくのだった。

第229話

自分の泊まっていた部屋でなぜか寝ていた3人を起こし終え、朝食も食べ終えたマリオは荷物の最終確認をする。

飯に忘れ物があったとしても回収することは難しくないのです。そこまできっちり確認する必要はないのだが、それでもマリオは性分なのか確認をしていた。

「……特には忘れてるものはないかな」

着替えなどをしまい、一番最後にルイージへのお土産を入れてマリオは荷物の入ったバッグを閉じる。

バッグを閉じたマリオはぐるりと部屋を見回した。

泊まった日数は少ないが、とても過ごしやすい部屋だったので少しだけ名残惜しくも感じる。

「む、マリオも準備は終わったのだな」

「ああ、忘れ物もなさそうだ」

部屋を見回してぼんやりしていると、自身の荷物をまとめて持っているクツパが部屋に入ってきた。

クツパの方もクツパ城へと帰る準備が終わったようだ。

マリオが部屋を見回していることに気づいたクツパは、マリオと同じように部屋を見回して見る。

「……我輩の城とピーチ城とではどちらが過ごしやすかった？」

「ん、そうだな……」

クツパはふと思ったことをマリオに尋ねる。

マリオはクツパ城とピーチ城のどちらにも泊まっているのでどちらの感想も言えるだろう。

「………難しいな。どっちも過ごしやすかったけど」
「そうか」

まあ、マリオの性格上、はつきりとどちらが過ごしやすかったかを言うとは限らないのだが。

玉虫色なマリオの答えにクツパは微妙な表情を浮かべる。

嘘でもいいから自分の城の方が過ごしやすかったと言つて欲しかった。

こちらを見ずに部屋を見回しているマリオに対してクツパはモヤツとした感情を抱く。

クツパ自身もマリオがはつきりとした答えを言うとは思つてはいなかったが……

——いや、それは嘘だ。

本当はちよつとだけ自分の城の方が良いと言つてくれないかと期待していた。
クツパは小さく溜め息を吐き、自身の荷物を改めて持ち上げる。

「ワガハイは先に行くからな」

「おう。．．．．．あー、その、だな．．．．．えつと」

荷物を手に持ち、クツパが部屋から出ようとする、マリオは何やらモゴモゴとなにかを言おうとする。

ドアノブに手をかけながらクツパはマリオの方を振り向いた。

マリオはクツパの方を向いてはいないが、先ほどまでの部屋の中を見回していたときとは様子が違うことはわかる。

「マリオ．．．．．？」

鼻を掻き、頭を掻き、マリオは落ち着かなそうにしている。

そんなマリオの様子にクツパは首をかしげながら名前を呼んだ。

第230話

扉の方を向かずにモゴモゴとしているマリオをクツパは見る。

マリオが呼び止めたのだが、なかなかマリオは明確な言葉を発しない。

聞こえてくるのは「あー……や「うー……」といった言葉とは言えないものばかりだ。

「どうしたのだ？」

「う、うう……。うああああッ!!」

呼び止めておいてなにも言わないマリオにクツパはやや焦れてきた。

クツパも言葉にマリオは自身の頭をガシガシと掻き回しながら声をあげる。

マリオがいきなり大きな声をあげたことにクツパは体をびくりと震わせた。

「クツパ。俺はピーチ城でみんなでお茶をしながら話すのも楽しいと思っただけ、お前と一緒にゲームをするのも楽しいと思ってるから」

「ふふ……そうか」

ヘタレであるマリオの精一杯の言葉を受け、クツパは嬉しそうに微笑む。

ピーチ城でのお茶会は全員でやっていることだが、クツパ城でのゲームはクツパとマリオだけでやっていること。

自分とマリオの2人だけでのことを楽しいと思ってくれていることを嬉しく感じながらクツパは部屋を出るのだった。

クツパのいなくなった部屋の中。

マリオは顔を赤く染めながら頭を抱えてしゃがみこむ。

マリオの頭の中は恥ずかしさで埋め尽くされている。

しかし、クツパに自分の思っていることを伝えたことに後悔はない。

顔を赤くしながらマリオは立ち上がり、自分の荷物を手に取って部屋を後にする。

荷物を持ったマリオはピーチ城の入り口へと到着した。

どうやらクツパは一足先に帰ったようで、窓から見えた少し遠くの空にクラウンが飛んでいるが見える。

「あ、マリオさんもお帰りですか？」

「うん。短かったけど世話になったよ」

マリオの姿に気づいた門番のキノピオが声をかけてくる。

キノピオの言葉にマリオは頷いて答える。

「快適に過ごしていただけたならよかったです。それでは」

「こちらこそ。過ごしやすく助かったよ。それじゃ」

キノピオに軽く手をあげてマリオは自宅へと向かって歩きだす。

歩いて帰っていくマリオの後ろ姿にキノピオは手を振り続けるのだった。

「帰ったら……まずは換気かな。そのあとに書類とかの整理か」

自宅へと続く道を歩きながらマリオは帰ってからやるべきことを考えていく。

数日とはいえ閉めつきりにしていた家だ。

多くはないだろうが、ほこりが貯まってしまっているだろう。

それに同じ空気が停滞し続けてしまっていることも考えるとあまりよい環境とは言えない。

そう考えたマリオは、家に着いたら最初に換気をすることを決めるのだった。

第231話

自宅に続く森の中の道をマリオは歩く。

いつも歩いている道なのだが、着替えやルイージへのお土産によって少しだけ足取りに遅れが見られるように思える。

「・・・・・・・・なまったかな」

疲労を感じるというには小さすぎる感覚なのだが、それでも自身の体の微妙な感覚の違いにマリオは思わず眩く。

マリオの言うとおり、マリオの体は少しだけ衰えていた。

その原因は言わなくても分かるだろうが、クツパがピーチ姫を拐わなくなったことである。

いままでであればピーチ姫を助けに行くときの道中などで強制的に鍛えられていた

のだが、いまではクツパがピーチ姫を拐うこともなくなり、ハードな山道や水中、洞窟などを走り抜けることもなくなってしまったのだ。

とは言っても配管工としての仕事で危険な場所や重労働などをしているので、完全に衰えていると言うわけではないのだが。

「一回、鍛え直した方がいいかもなあ……」

ハッキリと衰えたという確信を持っているわけではないが、マリオは最近の自分が運動量が減っているように感じて、改めて体を鍛えることを決めた。

マリオが体を鍛えることを決めながら歩いていると、いつの間にか自宅に到着していた。

「数日だけだったのに懐かしい気がするな……」

ピーチ城に泊まったのは数日なのだが、マリオは数週間ぶりに帰ってきたような気がしていた。

具体的に言うなら合計136話ぶりと言ったところか。

家の鍵を開け、マリオは家の中に入る。

「けほっ………。予想よりもほこりがたまっているな」

家の中に入り、マリオはほこりの舞う空気に思わず咳き込んでしまう。

想像以上のほこりにマリオは口もとを押しえながら窓へと向かう。

窓枠にもうつすらとほこりがついており、それだけ空気の循環がなかったことを表していた。

「よっ………」

部屋の窓を開け、外の空気が部屋の中に入ってくる。

外から入ってきた森の爽やかな空気が停滞していた室内の空気を押しやり、部屋の中が少しだけ明るくなったように感じる。

さらに空気と一緒に部屋の中を舞っていたほこりも一緒になって外へと運ばれていった。

しばらくすれば積もっているほこり以外はなくなるだろう。

「……こりや、掃除が最優先だな」

家に帰る道中では窓を開ければ十分だと考えていたが、この状況ではそれだけでは足りないことは明白。

こんなほこりだらけの部屋で書類整理などをするのはどう考えてもからだに悪い。そう考えてマリオは掃除をするためにマスクを着けた。

第232話

部屋の窓を開けたマリオは部屋の中に待っているほこりをなるべく外に出すようにあおぐ。

そしてある程度の空気の入れ換えができたなら、ベッドの布団を外の物干しへと運んでいった。

布団にもうつすらとほこりが積もっていたので今の時間から干して軽く表面を叩けば夕方ごろには十分に綺麗になるだろう。

「あとは床とかを軽く掃けば大丈夫かな」

テーブルの上は軽く布巾で拭き、ソファや本棚などは軽くはたきをかけてほこりを床に落としていく。

掃除などの方法はルイージから耳にタコができそうなほどに聞かされていたので覚

えていた。

まあ、ルイーダのこれも別にお小言として言っていたわけではなく、1つの話題として言っていただけなのでマリオも自然と覚えていたのだろう。

そして、床に落ちたほこりやチリなどを集め、玄関から外へと掃き出していった。

「……………ふう」

綺麗になった家の中を見てマリオは短く息を吐く。

人が生活をしていないと家は劣化していく。

たった数日家を開けただけなのに積もっていたほこりはそれが間違っていないことを証明していた。

「つと、これと……………これと、こっちもだったな」

掃除を終えたマリオはテーブルの上に仕事をまとめた書類を並べていく。

これからマリオが行うのは書類を日付、仕事の場所、仕事の内容などを見返して整理していく作業だ。

これらの作業は本来であれば仕事をしたその日の内にやっておくのだが、今回はピーチ城に泊まるための準備や、休みをとるために仕事をまとめて終わらせたことによつてやらずに残っていたのだ。

「えつと．．．これは、フラワーランドでやった仕事だったな。花壇に水を撒くための土管が詰まっていたから中を掃除したんだっけ」

1つ目の書類はフラワーランドでの仕事をまとめたもの。

フラワーランドでは様々な花や植物が植えられており、それらに水を供給するための土管が無数に配置されているのだ。

「こつちは、キノコタウンで地下に繋がる土管が破損したのを修理したやつ．．．」

2つ目の書類はキノコタウンの地下へと行くために必要な土管が壊れて危険だということで修理を依頼されたときのもの。

キノコタウンの地下には広大な下水道が広がっており、ゲッソーなどが住んでいたりする。

なお、ゲッソーなどが住んでいる以外にも、他の地域に移動できる青い色の土管もあるのだが、下水道だということと、地下で暗くて迷いやすいという理由から利用者はあまり多くはない。

それからマリオは様々な書類を見てはまとめていくのだった。

第233話

たまっていた書類をまとめ、コーヒーを一口飲む。

書類をまとめるために頭を使ったので、コーヒーに入れてある砂糖はいつもよりもやや多めになっている。

「・・・・・・・・甘っ」

疲れた脳に糖分はとても重要だとマリオは考えているので、甘すぎるとは分かっても書類作業をしているときはつい飲み込んでしまうのだ。

そしてまとめ終わった書類は書庫にある書類専用の場所にしまっていく。

「これで一段落だな・・・・・・・・」

たまっていた書類の整理も終わり、マリオは一息ついていた。

書類の整理はいつもやっていることなのだが、量が多かったのでいつも以上に頭を働かせたのだ。

「んー．．．．．つと、あとはポストも見ておかないと」

帰ってきてからまだポストの確認をしていなかったことを思い出したマリオはポストを確認する。

ポストには仕事の依頼の手紙や、他の国にいる知り合いからの手紙なんかが届いていた。

「依頼の手紙は．．．．．1、2．．．．．4つか」

手紙が届く依頼は基本的には電話線が引かれていない地域であったり、キノコタウンの近辺でないことが多い。

マリオは依頼の手紙とそれ以外の手紙を分け、さらに依頼の手紙の住所を確認していく。

依頼の手紙はなるべく遠い地域から仕事を行っていき、一番近い地域を最後にするようになっている。

とは言っても基本的にはキノコタウンの地下にある青い色の土管を使って移動するのであまり距離による問題はないのだが。

「ジャンボル島からも来ているのか」

ジャンボル島はヨツシーやキューちゃん、チヨロボンなどが住んでおり、年中温暖な気候の南国の島だ。

また、ジャンボル島にはマリオの仲間の1人であるおプクも住んでいる。

おプクはプクプクで、ちびヨツシーたちの面倒を見ている勝ち気な女性だ。

ヨツシーたちにとってはお母さんのような存在だとも言えると思える。

「他には……、カラカラタウンからもか。それにマメーリア王国にハザマタウンからも?」

カラカラタウンは何度かマリオも行っているが、マメーリア王国とハザマタウンから

も依頼の手紙が来るのは少々予想外だった。

マメーリア王国もハザマタウンもどちらもがキノコ王国からはかなり離れたところにある。

なのでこの2ヶ所は基本的には自分たちの国で物事を解決していくのだ。

そんなところがマリオのもとへと依頼の手紙を出している。

それはつまりはマリオほどの技術がないと解決できないほどの事態だということだ。

そのことを理解したマリオは依頼の手紙を読み進めていくのだった。

第234話

依頼の手紙とそれ以外の手紙を読み終え、マリオは手紙を一旦テーブルの上に置く。時刻はまだ午前。

マリオはグツと腕を上には伸ばして背筋を伸ばした。

「とりあえず、手紙の依頼は緊急性はあまり高くないみたいだし。他に急いだ方がいい依頼がないときに行くことにしよう」

マメーリア王国とハザマタウンの依頼はどちらも緊急性は低いらしく、そこまで急ぐ必要のないものだったらしい。

依頼の電話もなく、マリオはピーチ城に持っていった荷物を取り出していった。

荷物の内で衣服はピーチ城で洗濯してもらってあるのでそのままタンスにしまっても問題はない。

「ルイーダにお土産を持って行ってこようかな」

今のところやるべきこともなくなったマリオは、ルイーダへのお土産を手に取ると、ルイーダの家へと向かって歩きだした。

ルイーダの家へと向かう道中。

頭の花を抜かれて怒り状態になっているハナちゃんに追われているクリボーや、チョロポンに甲羅を奪われて泣きながら追いかけているノコノコの姿もあり、マリオはそれら全てを助けていった。

いろいろと人助けをしながらマリオはルイーダの家へと着いた。

ルイーダの家からは甘い匂いがしてくるので家にいるのは間違いないだろう。マリオはルイーダの家のインターホンを鳴らした。

「はい。あ、兄さん。帰ってきたんだね」

「ああ。留守の間は助かったよ」

玄関を開け、マリオの姿に気づいたルイーダは嬉しそうに言う。

嬉しそうなルイーダにマリオは手をあげて応えた。

「帰ったことを伝えるのとお土産を渡しにね」

「そうなんだ。あ、キノコランドのキーホルダーなんだね」

マリオからお土産のキーホルダーを受けとり、ルイーダはマジマジと見る。

キノコランドでマリオが買ったキーホルダーは金属製のものであり、壊れにくいものを選んでいた。

「ありがとう。僕も今度行ってみようかな」

「うん。とても面白かったから行ってみるといいよ」

「時間はある？あるならお茶にしない？」

「そう……だな。話したいこともあるからお邪魔するよ」

ルイーダの言葉にマリオは少しだけ考えるような仕草をし、頷いた。

そして2人はルイーダの家の中へと入っていく。

マリオの言う話したいことがなんなのか気になりながらルイーダはお茶の準備を始

めた。

「お茶はいつものやつ？それとも僕の方で選んでもいいかな」

「ん。ルイージに任せるよ」

「分かったよ。兄さんは座って待っててね」

そう言つてルイージは戸棚から普段飲んでいるものとは違う茶葉を取り出した。

どうやら新しい茶葉を手に入れたことから飲んでもらいたかつたようだ。

そんなルイージの姿を眺めながら、マリオはルイージに話そうと考えていることを頭の中でまとめていくのだった。

第235話

ルイージの淹れてくれたお茶を飲み、マリオとルイージはホツと一息をつく。

ルイージが新しく手に入れたお茶は今までに飲んでいたものとは風味が違っており、今までとは違った美味しさがあつた。

「そういえば話したいことがあるって言つてたよね。なにを話したかつたの？」
「ああ………、えつとだな………」

お茶を飲んで落ち着いた空気になり、ルイージは先ほどマリオが言つていた話について尋ねる。

ルイージの言葉にマリオはモゴモゴと口を動かし、お茶を口に運んだ。

お茶を口に運んで喋るのを遅らせようとするマリオにルイージは首をかしげる。

「兄さん……?」

「その……なんだ……人生相談……的な?」

ジツと不思議そうに自分を見てくるルイージの言葉にマリオは顔を逸らしながら答える。

人生相談とはどう言うことなのか。

ルイージは顔を逸らしているマリオの言葉の続きを待つ。

「えつとな……し、知り合いの話なんだが……?」

「うん」

その話の切り出し方で本当に知り合いの話だとはルイージも思っていないが、特に話を遮ることはしない。

そんなルイージの様子に気づかぬままにマリオは話を続ける。

「その知り合いはな、自分が好きな女性のことを自覚したんだが、どんな風にして自分の思いを伝えたらいいか分からないんだ」

「そうなんだ」

マリオはお茶で舌を濡らしながら話す。

ルイージはそんなマリオの様子からマリオが緊張していることを察した。

ルイージ自身も理解はしているが、マリオとルイージは土壇場になると気後れするところが多々ある。

まあ、土壇場に気後れすると言っても恋愛関連のみのことであり、こと戦闘に関しては抜群の決断力を見せるのだが。

「でも、思いを伝えるって言っても、普通に告白するしかないんじゃないかな？」

「そりゃあ……、それは分かっているんだが……」

ルイージの言葉にマリオは顔を逸らしてカップに口をつける。

マリオ自身もそれは頭では理解しているのだが、それを実際に行えるかと聞かれたらためらってしまうのだ。

とはいえ、提案しているルイージ自身もそのときが来たらちゃんと告白をできるかと聞かれたらソツと顔を逸らすのだろうか。

「あとは……、なにか贈り物をするとか……、デートに誘うとか？」
「ん……、デートはできるか分からないけど、贈り物とかならできるかな……」
「？」

ルイージはさらに思い付いたことをマリオに教えていく。

マリオの好きな人が誰なのかは分かっているないので、具体的な案は出せないが、それでもマリオにとっては十分だろう。

第236話

ルイージの案を聞きながらマリオはカップに入ったお茶を口に運ぶ。

ルイージの言っていることも理解はできるのだが、どうにも行動に移せる自信はなかった。

「えっと、僕から出せる案はこれくらいかな。兄さ——じゃなくて、知り合いの人の助けになつたかな？」

「え、あ、ああ！俺の方から伝えておくよ！」

ルイージの出してくれた案をどうやって活用するかを考えていたマリオはルイージの言葉に慌てて頷く。

あくまでマリオは知り合いの話として話していたので、ルイージはうっかりマリオの話として言ってしまうようになったのを素早く誤魔化した。

誤魔化すようにニツコリと笑みを浮かべながらルイージはマリオと自分のカップにお茶を注いでいく。

「はい、お茶のおかわり。このお茶には心を落ち着かせる効果もあるらしいから、兄さんの方でもなにかいい案が浮かぶかもよ？」

「へえ、そんな効果があったのか。道理で落ち着くような感じがしたわけだ」

ルイージが新しく淹れてくれたお茶を改めて見ながらマリオはしみじみと呟く。

マリオ自身もルイージに話をしている間に何回か口に運んでいたが、その度に話しやすくなっているように感じていたのだ。

ルイージがこのお茶を選んだのは偶然だったが、それでも最適解であったと言えるだろう。

「ううん………。1度、その女性には告白を受けているんだよね……。」
「……。兄さん。その情報は先に出してくれない？」

腕を組みながらマリオはポツリと呟く。

マリオの言葉にルイージはポカンと口を開け、頭を押さえながらマリオに言った。好きな女性から先に1度告白を受けている。

それは互いに両思いであることをハッキリと表していることであるならば、告白云々を考えるよりも真つ先にすべきことがあるはずだろう。

「あのさ、告白を受けていたんだよね？」

「お、おう……」

「そのときの返事はなんて言ったの？」

「いや、答えはまだ言わなくていいって言われて……」

「に　い　さ　ん　？　」

ルイージから感じる圧力にマリオは思わず姿勢を正しながら答える。

告白をされて返事はすぐにしなくていいって言われたから答えていない？

あまりにも相手の言葉を素直に受け止めていたマリオの言葉にルイージは思わず言葉に力がこもる。

圧力が増したルイージの言葉にマリオの体はビクリと震えた。

「あのね、その女性は別にすぐに答えを出してほしいって訳じゃなかったんだらうけどさ。それでも今ここで兄さんが悩んでいるのはおかしくない？」

「いや、これは俺じゃなくて知り合いのはな——」

「だまらっしゃい！」

「うひゃいッ?!」

マリオの言葉をルイーダは一喝する。

珍しいルイーダの様子にマリオはタジタジになっていた。

第237話

マリオは、自分に対して威圧感を放ってくるルイージに困惑していた。

マリオからすればすぐに答えを出さなくていいと言われたから今の今まで答えずにしたのだが。

それがルイージの琴線に触れたらしい。

「る、ルイージ………?」

「僕自身もさ、そういったことには疎い方だけどね。それはダメだよ………」

おずおずとマリオはルイージに話しかける。

そんなマリオの様子にルイージは首を振りながら答えた。

一度、告白を受けているのであればその人のことをしっかりと考えて最優先で考えるべき。

加えて言うなら、その人のことを好きなのだと自覚したのならばどうやって告白をするかで悩むのではなく、さっさとその人から受けた告白の返事をするべきである。

そう考えたからこそルイーダはマリオに対して怒っていた。

「兄さん、どうやって思いを伝えたらいいか分からないって言ってたよね……」

「あ、ああ……。って、いや、だから俺のことじゃな——」

「ちよつと黙ってて」

「ア、ハイ……」

諦めずにあくまでも自分ではなく知り合いのことだと言うことにしたいのか、マリオは反論をする。

しかしルイーダによって話の途中でバツサリと切り捨てられてしまい、消沈してしまった。

ここまでルイーダが怒ることは今まででも片手の指で数えられるくらいしか知らなかったため、マリオは大人しく従っていた。

「はあ……。兄さん。兄さんがいま悩んでいることをその告白した人は乗り越え

て兄さんに思いを伝えただよ？」

「それは……」

ルイージの言葉にマリオはクツパとピーチ姫の姿を思い出す。

『ワガハイはお前のことが……大好きなのだ』

マリオのことを好きになった自分のことが気持ち悪くないか不安になり、泣いてしまったクツパ。

『マリオ……私は、あなたのことが好きです！』

観覧車の一番上でマリオに告白をしたピーチ姫。

そのどちらもが自分のいま悩んでいる気持ちを乗り越えて告白をしてきてくれたのだ。

その事にマリオは気づき、うつ向いてしまう。

「分かった？だからさ、兄さんがするべきことはここで悩むことじゃなくて、遅れてしまったことをちゃんと謝ってその人の告白に答えることだと思うんだ」

「そう……だよな……」

ジツと自分の手のひらを見つめ、マリオはルイーージの言葉を受け止める。

そしてマリオは強く手を握りしめて顔を上げた。

その顔は少しだけ晴れており、悩んでいたことに対する答えを得たと言うことがうかがえた。

第238話

少しだけ表情の変わったマリオにルイージは満足そうに頷いてお茶を口に運ぶ。これで兄に恋人ができるのならばこんなにも嬉しいことはない。

「もう、大丈夫かな？」

マリオの様子をうかがいながらルイージは尋ねる。

そんなルイージの言葉にマリオは答えず、再び自分の手のひらを見つめている。

マリオは思い返していた。

マリオはクツパが告白をしてくれたとき、答えをすぐに出さなくていいと言われて安堵した自分を許せなくて自分の顔を殴った。

しかし、それがどうだ。

いつのまにか3人と遊ぶことが普通になっていた。

結局、クツパ、ピーチ姫、ナハトの3人と遊ぶことの楽しさにかまけてそのときの思いが薄れていたのではないか？

結局、あのとき自分のことを殴ったのだからってその場かぎりの感情だったのではないか？

自然とマリオの手に力が込められ拳が作られる。

自分の顔を殴りたい衝動に襲われるが、マリオはそれを必死に押し止める。

ここで自分の顔を殴ったとしてもそれは結局のところ自己満足でしかないことを理解したからだ。

「兄さん………?」

「あ………、な、なんだ?」

自分の問いに答えずに拳に力を入れているマリオの姿にルイージは声をかける。

ルイージの声がようやく届いたのか、マリオは一瞬だけハツとした表情を浮かべて拳から力を抜いて答えた。

「なにか、気になることでもあるの?手に力を入れていたみたいだったけど………」

「まあ、な」

ルイーダの言葉にマリオはゆっくりと頷く。

マリオの手に力が入っていたところも見えていたのなら誤魔化すこともできないだろう。

「俺さ、すぐに答えを出さなくていいって言われて安堵した自分が許せなくて自分のことを殴ったんだよ……。なのに、結局こんなことになってな……。」「それは……………」

そう言つてマリオは再び自分の手を見つめる。

マリオの言葉にルイーダは驚いた。

先ほど自分が怒つたことを兄はすでに自覚して戒めようとしていたのだ。しかし、それはうまくいかなかった。

そこでルイーダはマリオが拳に力を込めている理由を理解した。

「ホント、こんな俺があいつに思いを伝えても良いのかね……………」

「兄さん……」

拳に力を込めたまま、マリオは消沈した様子で呟く。

その呟きはルイージに聞かせるために発した呟きではないのだろう。

しかし、マリオの様子が気になって身を乗り出していたルイージの耳にはしつかりとマリオの呟きは届いていた。

第239話

消沈した様子のマリオになんと声をかければ良いのか。

マリオを見ながらルイージは考える。

「でも………、兄さんはちゃんと気づけたんだから………」

「それでも、繰り返してたらな………」

ルイージの言葉にマリオは首を横に振って否定する。

もはやなにを言ってもマリオは否定をしてしまうのだろう。

マリオはカップに残っていたお茶を飲み干すと、うつむきながらルイージの家を後にした。

「兄さん………」

家から出ていくマリオの姿を見送りながらルイージは小さく呟く。

今の兄さんの心には自分がなにを言っても届くことはないのだろう。

このままでは誰も幸せにはなれない。

そう考えたルイージはすっかり冷めてしまったお茶を飲み干して、出掛ける準備を始める。

「僕の言葉じゃ届かないんだ。それなら届く人に兄さんを元気づけてもらおう」

自分の言葉がマリオの心に届かないことを寂しく思いながら、ルイージは家を出る。でも、誰の言葉なら届くんだろう……

ピーチ姫？

いや、女性の視点だと兄さんの気持ち詳しくは分からないかも……

キノじい？

年の功つてものはあるかもしれないけど、お説教みたいになっちゃうかなあ……
デアール？

最近は占いに來る人が多いって言っていたから時間は取れないかも……

「うーん……ん？」

誰にマリオを元氣づけてもらえばいいのか悩みながらルイージは歩く。

不意にルイージはグニツとなにか柔らかいものを踏みつけたことに気づいた。

不思議に思いながら視線を足元に向けると、茶色いものが足元でジタバタしているのが見える。

「なにをすするんだー!!」

「う、うわ?!ごめん!」

慌ててルイージが足をどかすと踏まれていた茶色いもの、クリボーは怒り心頭といった様子でルイージに怒鳴った。

クリボーの劍幕に圧され、ルイージは思わず膝をついて謝る。

「本当にごめん。考え事をしていて気づかなかつたよ……」

「つたく、次から気を付けろよ！」

普段から持ち歩いている自作のお菓子を渡しながらルイージは謝り続ける。

ルイージから渡されたお菓子を食べながらクリボーはプリプリと怒っていた。

「んで？なにを悩んでいたんだよ。お前がドジをするのはいつものことだけど、今日はなんだかいつもよりおかしくないか？」

「う、分かっちゃおう？」

「お前のドジはしょっちゅう見てるからな」

渡されたお菓子を食べきり、クリボーはルイージに尋ねる。

実はこのクリボーはルイージのドジに一番遭遇しているクリボーであり、ルイージの様子がいつもとは違うことに気づいたのだ。

クリボーの言葉にルイージは恐る恐る悩んでいることを話し始めた。

第240話

「マリオのことで悩んでいたルイージは、クリボーにマリオのことを相談する。ルイージの悩みを聞き、クリボーは目を閉じて短く唸る。

「ううん………。そりゃあ、難しい悩みだな」

「だよね。誰の言葉だったら兄さんに届くかな……。」

クリボーの言葉にルイージも腕を組んで悩む。

ルイージとクリボーが悩み始めて少しして、クリボーはパチリと目を開いた。

「そうだ！クツパ様に相談してみようぜ！」

「え、クツパに？」

「おうよ！クツパ様はマリオのライバルでもあったんだ。そんな相手の言葉ならきつと

心に届くはずさー！」

「確かに……」

クリボアの言葉にルイージは頷く。

クツパの姿が女性になっていることはマリオから聞いていたが、それでも元々はマリオと同じ男性だった。

その事からもマリオの悩みを解消できるかもしれない。

そう考えたルイージはクリボアと一緒にクツパ城に向かうことを決めた。

「そういえば、クツパが女性になってるって聞いたけど。なにか変わったこととかってあるの?」

「変わったこと?」

「うん。僕は兄さんから聞いただけで実際に女性になったクツパを見たことはなかったからさ」

「そうだな……。特に変わったことはないと思うぞ?クツパ様はもともと俺たちのことを気にかけてくれてたし。しいて言うならピーチ姫を拐うことがなくなっただけじゃないか?」

クツパ城へと向かう道中。

ルイージは気になったことをクリボーに尋ねる。

クツパが女性になったことよってなにか変わったことがあるのか。

昨日もピーチ姫や兄さん、それとナハトと言う女性と一緒にキノコランドに行っていた。

正直に言つて今までのクツパからは想像ができ……なくはなかったが、マリオと一緒に楽しく遊んでいる姿がルイージにはうまくイメージできていなかった。

ルイージの問いにクリボーは少しだけ考えるが、すぐに答える。

事実としてクツパの配下への態度や扱いなどはほとんど変化していないので、カメックおぼば以外ではクツパのマリオに対して抱いている思いに気づいているものはほんではない。

「お、クツパ城に着いたぞ。 んじゃ、俺が報告に行つてくるからちよつと待つてくれ」「うん。 お願いするね」

そう言つてクリボーはクツパ城の門をくぐつていった。

クツパ城の中に消えていったクリボーを見送りながらルイージはクツパにどうやってマリオのことを話そうか考える。

クツパ自身とは何度もマリオと一緒に話したりはしたのだが、一人で話すことはほとんどなかったので、少しだけルイージは緊張していた。

第241話

クツパ城の中に消えていったクリボーをルイージは待つ。

クリボーは自信満々に言っていたが、本当にクツパは協力をしてくれるのだろうか。クツパがマリオたちとキノコランドに行ったのは知っているのだが、それでもルイージには不安があった。

「でも、クツパを頼るしかないんだよね……」

届かなかった自分の言葉を悔しく思いながらルイージは呟く。

それからしばらくして、クリボーが嬉しそうな様子で戻ってきた。

「喜べ！クツパ様が会ってくれるってよ！」

「本当かい?！」

「おうよ。案内するからついてこいよ」
「うん」

クリボーの言葉にルイージは喜び半分、驚き半分に答える。

そしてクリボーの案内のもと、ルイージはクツパのいる所へと向かった。

クリボーに案内され、ルイージはクツパのいる玉座の間に到着した。

今までにも何度かマリオと一緒に来たことのあるこの部屋。

石造りのどこか重苦しさを感ずる大部屋。

左右に石柱が立ち並ぶ部屋の奥。

今までであれば部屋の最奥にある豪華な作りの椅子にふんぞり返るようにクツパが座っていた。

しかし、いまルイージの目の前で椅子に座っているのは今までの記憶をすべて塗り替えてしまうような衝撃的な姿のクツパ。

「む、来たか」

「え……?」

自分に対して話しかけてきたクツパの言葉にルイージはポカンとした表情で、間の抜けた返事を返した。

それほどまでに初めて見たクツパの姿に衝撃を受けていたのだ。

「なんだ、呆けて」

「あ、ご、ごめん。女性になったのは聞いていたけど初めて見たからビックリしてたんだ。本当にピーチ姫に似てるんだね……」

呆けた表情のルイージにクツパは鼻を鳴らして尋ねる。

クツパの言葉にルイージは頭を下げ、初めてクツパのその姿を見たことを白状した。

ルイージの言葉にクツパは、そういえばこの姿になってからルイージには会っていなかったことを思い出した。

もしかしたら将来的には弟になるかもしれない相手に挨拶をしていなかったことに思い至り、クツパはしまったと言う表情を浮かべる。

「くう……。それで？なんの用で来たのだ？マリオに関する悩みだとはクリボーから聞いたが」

「あ、うん。実は兄さんのことについてお願いしたいことがあるんだ」

ルイージへの挨拶を忘れていたことに対して悔しそうに小さく声を漏らしてから、クツパはルイージにクツパ城に来た理由を尋ねる。

大雑把な用件はクリボーから聞いてはいたのだが、それでも詳細な理由は分かっていない。

クツパの問いにルイージはクツパ城に来た理由を話し始めた。

第242話

ルイージから聞いたマリオの状態にクツパは腕を組んで唸る。

聞いた限りではルイージはマリオに告白したのが自分とピーチ姫だと言うことは知らないらしい。

と、いうよりもマリオの言っている状況に覚えのあるクツパは、もしかしたらと言う思いで思考が上手くまとまっていなかった。

脳裏をよぎるのは自分が告白をしたときにしたマリオとの会話。

ルイージから聞いたマリオの言葉はどう聞いてもその時にした会話だった。

「むむむ．．．．．。マリオの心に届く言葉か．．．．．」

「やっぱリクツパでも難しいのかな．．．．．」

腕を組んで唸るクツパの姿にルイージは少しだけ残念そうに呟く。

そんなルイージの眩きが聞こえたクツパはガバリと顔をあげて椅子から立ち上がった。

急に立ち上がったクツパの姿にルイージは思わず尻餅をつく。

「難しいなどそんなわけがあるわけない！ワガハイに任せておけば問題はないのだ！」

「そ、そうなのかい？」

「クツパしゃま?!お待ちください！まだ、見るべきものが残っておりますぞー！」

クツパの勢いに圧され、ルイージは思わず体が引ける。

そんなルイージを気にも止めずにクツパはクツパクラウンの置いてある発着場へと走っていくのだった。

走っていくクツパの姿に近くにいたカメックおばは一瞬だけ呆けるものの、慌ててクツパの後を追っていく。

「………とりあえず、クツパを信じてみようかな」

部屋に置いてけぼりにされたルイージは、自分の横を走り抜けていったときにチラリ

と見えたクツパの表情を思い出しながら呟く。

クツパは全力疾走かと思うほどのスピードで走っていったのでハッキリと見えたわけではないのだが、それでもクツパからは悪い感情といったものは感じなかったので、ルイージはクツパを信じることにしたのだ。

「僕にできるのはこれくらいだし。あとは兄さんが元気になるのを願おう」

「むーなぜルイージがここにいるのだ？」

そう呟きながらルイージは家に帰るためにクツパ城の中を歩いていく。

できることがなくなつたためにボンヤリとしながら歩いていると、クツパ城を巡回しているノコノコに遭遇した。

「え、あ、クツパに頼みたいことがあつて来たんだけど……」

「なにを言っているんだ！クツパ様はつい先ほどでかけて城にはいないではないか！」

「え、ちよ……」

「であえ、であえー！侵入者だ！」

「え、ええええええー?!?!」

ノコノコに尋ねられて答えたが、ノコノコは聞く耳を持たずに他のノコノコや、ガボ
ンなどを呼んでしまう。

マリオを心配してここまで来たルイージはノコノコたちに追われながらクツパ城か
ら逃げ出すのだった。

第243話

クツパは自身専用のクラウンに乗ってマリオの家へと向かつて飛ぶ。

とは言ってもクラウンの速度はそれほど速いわけでもなく。

クツパの後を追って飛んできたカメックおぼばがすぐに追いついていた。

「クツパしゃま！まだやるべきことが残っておりますぞ！」

「ぬうつ?!」

追いついてきたカメックおぼばの怒った声音にクツパは思わず怯んでしまう。

普段はカメックおぼばに対して強気ではあるが、それでもやはり幼い頃から育ててくれた親代わりのような存在。

なのでクツパはカメックおぼばに怒られるのを苦手としていた。

「し、しかし、マリオが……」

「しかしもカカシもありませぬ！きちんとやるべきことを終わらせてからマリオに会いに行ってください！」

モゴモゴと反論をしようとするクツパを一喝し、カメックおばばは杖を振る。

カメックおばばが杖を降った瞬間。

クツパの乗っているクラウンにまとめられている書類がドサドサと降り注いでいった。

「とりあえず、読みやすくはまとめましたので。マリオの家に行く前にここで読んでまってください。これさえ読んでしまえば終わりですから」

「ん。分かったのだ……」

カメックおばばの言葉にクツパはシユンとしながら頷く。

とは言ってもカメックおばばの出した書類の量は残っていた量からかなり少なく減らされている。

なんだかんだ言ってカメックおばばもクツパの思いに関して邪魔をするつもりはな

く。

最低限の仕事だけで済むように手助けをしている。

それが分かっているからこそクツパも大人しく出された書類を読んでいくのだ。

「……よし、読み終わったのだ！」

「ちゃんと重要なことは覚えましたが？」

「うむ。内壁の補修工事や配下たちの部屋の清掃問題であろう？」

「ええ。ちゃんと覚えておられるようですね。では行つても良いですよ」

書類を読み終わったクツパは出された書類をカメックおばばに渡していく。

カメックおばばに止められていなかったらそのまますぐに飛んでいってしまいそうな様子だ。

そんなクツパを落ち着かせるようにカメックおばばはクツパの前に移動して制止した。

そしてクツパがちゃんと書類の中の重要な部分をちゃんと覚えているかの確認をする。

もしもクツパが流し読みで読んだだけでちゃんと覚えていなかった場合、カメックお

ばぼの雷（物理）が落ちていた。

クツパがちゃんと書類を読んだ上で特に重要なことを覚えていることが分かったカメツクおばぼはウンウンと満足そうに頷き、クツパの前から移動してマリオのもとに行くことを許可する。

カメツクおばぼから許可が出た瞬間、クツパは素早くクラウンを操作してマリオの家へと出せる最高速で飛んでいくのだった。

第244話

クラウンに乗ったクツパはマリオの家の近くへと到着した。

クラウンに乗りながらクツパはマリオの家の様子をうかがう。

時間的に電気を点けるほどの暗さでもないので、電気ではマリオがいるかどうかの判断はつかない。

「マリオ、いるか……?」

クツパはクラウンから降り、マリオの家の玄関を叩く。

玄関を叩いてからすぐには反応はなかったが、少し待っていると家の中から音が聞こえてきた。

マリオが家の中にいることが分かったクツパは返事を待たずに玄関を開ける。

「入るぞ」

「クツパ?!」

自分が開ける前に玄関を開けて入ってきたクツパにマリオは驚く。

が、よくよく考えてみれば勝手に玄関を開けて入ってくるのは珍しいことではないので、マリオはすぐに落ち着きを取り戻した。

家の中にいるマリオの姿を確認したクツパはずんずんとマリオのもとへと歩いていく。

「きゅ、急にどうしたんだ?」

「なに、ルイージにちよつと話を聞いてな」

朝、ピーチ城で別れたばかりなのにやって来たクツパにマリオは先ほどまでの沈んだ気持ちを誤魔化すように尋ねる。

それでも自分の気持ちを理解したマリオは、クツパが来たことに対して隠しきれない喜びのようなものを発していた。

マリオの問いにクツパはルイージから話を聞いて会いに来たことを伝える。

クツパが来たことは嬉しいのだが、それがルイージと話したことによると聞き、マリオは少しだけモヤツとした感情を抱いた。

「ルイージに？」

「うむ。マリオ、キサマが悩んでいると聞いてな」

「ツ……！！」

クツパはルイージになにを聞いたのか。

首をかしげながらマリオはクツパを見る。

マリオが不思議そうにしているのを見ながらクツパは頷き、ルイージから聞いたことを答えた。

クツパに自分が悩んでいることが知られていると理解したマリオは思わず表情が固くなる。

「は、ははは。それはきつとルイージの気のせいで——」

「あるわけがないな？」

「——うぐ……」

無駄な足掻きだとは分かっているが、マリオは笑って誤魔化そうとする。

しかし、クツパに両断されてしまい、マリオは呻き声をあげた。

マリオのことが好きだと自覚してからマリオのことをずっと見てきた。

だからこそマリオの言葉が誤魔化そうとしている言葉だと言うことがすぐに分かったのだ。

目線をキョロキョロと忙しくなくマリオは動かしている。

どうやらまだ誤魔化すことを諦めてはいないらしい。

で、あるならばこちらから切り込んでいって逃げ道をなくすしかないだろう。

第245話

いまだに誤魔化そうと視線をキョロキョロとさせているマリオをクツパはまっすぐに見る。

マリオは知られたくはなかったのだろうが、マリオの悩みはクツパ自身にも関係していること。

なのでクツパは視線を逸らさずにマリオに話しかけた。

「マリオ、キサマがどんなことで悩んでいるのかをワガハイはルイージに聞いて知っている」

「そう、か……」

クツパの言葉にマリオはついに観念したのかがつくりと項垂れる。

ルイージから聞いたと言っていている時点で悩みの内容も知られているのではないかと

思っていたが、それがドンピシャだったのでもはや言い逃れができないと理解したのだらう。

「なら、俺がダメなやつだって分かっただろ……?」

自嘲するように笑いながらマリオは言う。

自分のダメさ加減が分かったのだからついに愛想が尽かされたか。

もはや自暴自棄とでもいうかのような思考にマリオはなっていた。

項垂れるマリオにクツパは近づいていく。

「マリオ、言いたいことはそれだけか?」

「え……?」

マリオへと近づき、クツパは静かに言う。

クツパの言葉にマリオは思わず呆けた返事をした。

「なら、歯を食いしばるのだ!」

「な．．．．．、ぐツ——?!」

グイ、とマリオの胸ぐらを掴み、クツパは思いきりマリオの頬を殴り抜いた。クツパに殴られ、マリオの体は後方へと倒れこむ。

倒れながらマリオは殴られた頬を押さえる。

殴られて当然。

自分はやんと向き合おうと言っていたのにこんなことになってしまったのだ。であるならばクツパが怒るのも当然のことだろう。

「マリオ、なぜ殴られたか分かっているか？」

倒れたままのマリオの顔の近くにしやがみこみ、クツパは尋ねる。

なぜ自分がマリオのことを殴ったのか。

その意味が分かっているのかを聞くために。

「そりゃあ、俺がちゃんと向き合えていなかったから．．．．．」

「違うのだ」

「ちが………う？」

予想通り間違った答えのマリオの言葉をクツパは切り捨てる。
クツパの言葉が予想外で、マリオは呆けた表情を浮かべた。

「ワガハイが怒っているのはそこではないのだ」

「じゃあ………なにを………」

マリオは心底分らないと言った表情を浮かべてクツパを見る。

自分がクツパの告白に対してなかなか答えを出せずにいたことを怒っているのではないのか。

「はあ………、本当にわからないのだな」

「………ああ」

マリオの表情から本当に分かっていないことを理解し、クツパは短くため息を吐く。
ここまでくれば誤魔化す意味もないため、マリオは素直に頷いた。

第246話

クツパが何に対して怒っているのかが分からず、倒れたままのマリオはクツパの顔を見上げる。

マリオの顔の近くにしゃがみこんでいるクツパはマリオの顔をジッと見つめながら口を開いた。

「マリオ、お前はルイージと話をしていたときに自分がなにを言っていたか覚えているか？」

「それは、まあ、それほど時間も経ってないからな……」

クツパの言葉にマリオは頷く。

ルイージと話をしたのはだいたい一時間ほど前のこと。

その程度の時間しか経っていないので、マリオはルイージに話した相談内容をハッキリ

リと覚えていた。

「なら、キサマが一番最後に言った言葉も覚えているな？」

「最後つて言うよ……、お前にすぐに答えを出さなくていいって言われて安堵した自分を許せなくて自分を殴ったのに、だったか——」

「それは違うな。その次なのだ」

自分が最後に言ったであろう言葉を思い出しながらマリオは言う。

しかし、クツパは自分の尋ねた言葉と違うとマリオの言葉を途中で断ち切った。

クツパに言葉を断ち切られ、マリオはさらに考える。

自分がルイーダに話したことはこれで最後のはずだ。

では、クツパの言っているこの次に自分がルイーダに言ったこととはなんだったか。

頭に手を当て、マリオは自身の記憶を辿っていく。

マリオが思い出そうと考えている姿をクツパはジッと見つめていた。

「もしかして……」

「なにを言ったか思い出したか？」

ハツとした表情を浮かべ、マリオは小さく呟く。

マリオの呟きは小さなものだったが、近くにいたクツパの耳にも当然届いており、クツパはマリオに自身が言ったことを思い出したのかを尋ねる。

そんなクツパの問いに答えず、マリオは考え込む。

確かに自分はさっきの言葉のあとに少しだけ呟いた。

でもそれは小声で呟いた程度のものであって、ルイージに聞かせるつもりで言った言葉ではなかった。

しかし他に該当しそうなものも思い出せない。

「えっと……こんな俺が思いを伝えても良いのか、とは……」

「うむ。ワガハイが怒っているのはそれなのだ」

やや自信なさげに言うマリオに、クツパはビシリと指を突きつけた。

クツパの行動と言葉にマリオは圧され、思わず目をパチパチとさせながらクツパを見る。

「……ワガハイが何に対して怒っているかは分かったが、怒っている理由が分かっていないと言う表情だな」

「まあ、な」

ジツトリとしたクツパの視線を受け、マリオは視線を逸らしながら頷く。

マリオからしてみれば自分の情けなさを自覚したからこそ出てきた言葉だったので、その事に対して怒られる理由がないと思っっている。

なのでマリオは、なぜクツパがこの言葉に対して怒っているのか。

その理由がまったく分からなかった。

第247話

視線を逸らして納得していなさそうなマリオの顔をクツパはジッと見つめる。

クツパ自身、もともとの姿のときに似たような考え方をしたことがあるのでマリオがいまどう考えているのかが手に取るように分かっていった。

「ふう．．．．．、怒られる理由が分からない、か。まあ、こればかりはされないと分からぬものだから仕方がないか．．．．．」

「教えて．．．．．くれるか？」

「うむ」

マリオの様子から考えていることを読み、クツパは口に出す。

考えていたことがクツパに言われ、マリオは心臓がドキリと跳ねる。

驚いているマリオの姿を見ながらクツパは少しだけ寂しげに言った。

叶うのであればマリオに自分で気づいてほしかったのだが、このままでは気づけなさそうなので仕方がない。

「マリオ。キサマが『こんな俺が思いを伝えても良いのか』と言ったのは自分が情けないと思つたからであらう?」

「そうだよ……」

クツパの言葉にマリオは上体を起こして返事をした。

そう。

自分がその言葉を言ったのはあまりにも自分が情けなく思つたから。

行き場のない自分へのぐちゃぐちゃとした様々な思いの入り雑じつた言葉だった。

「……だがな。ワガハイは……、ワガハイたちは『そんなキサマ』を好きになつたのだぞ?」

「あ……」

マリオは自分の頭をハンマーで殴られたような衝撃を受ける。

自分の不甲斐なきにばかり目が行き、マリオはクツパたちのことが考えられていなかった。

クツパたちはハッキリとマリオに告白をしていた。

しかし、マリオが自分のことを『こんな俺』と言ってしまえばクツパたちのことを間接的に貶めることになる。

その事実にはマリオはようやく気づくことができた。

が、まあクツパにとってそのあたりは重要ではない。

貶められるのは確かにいい気分ではないのだが、それよりも自分たちの好きになった男が誰かにバカにされるのが我慢ならなかった。

たとえそれが、好きになったマリオ本人が言った言葉だったとしても。

「それにな……………。思いを伝えることに……………誰かの許可が必要なのか？」
「それは……………」

マリオの目をまつすぐに見つめながらクツパは問う。

自分の思いは誰かに伝えることを許可されて伝えたわけではないと。

自分がマリオに抱いた思いを伝えたのはマリオのことが好きだったからだ。

——マリオは答えられない。

自分でも、思いを伝えるのに誰にも許可を取る必要がないことは分かっている。それでも情けない自分が相手に思いを伝えて迷惑になるのではと怖くなってしまうのだ。

——マリオは答えられない。

目の前にいるのは——自分が抱いた怖さを乗り越えた人。

目の前にいるのは——自分が抱いた思いを相手に伝えることができた人。

目の前にいるのは——

第248話

クツパの目がまっすぐにマリオの目を見つめる。

自分の好きになったマリオは『こんな』などとバカにされていい存在ではない、と。自分が思いを伝えたのはマリオのことが好きで、結ばれたいと思ったからだ、と。言葉に出してはいなかったが、クツパの目はハッキリとそう語っていた。

「俺は……」

マリオはなにかを言わなければと思うのだが、なにを言ったら良いのか分からず、途中で言葉は途切れてしまう。

うまく言葉にできない悔しさにマリオはうつむいた。

自分の自覚した思いを伝えたいのに——

目の前にいる相手と今とは違う関係になりたいのに――

自分の中でどうしたいのかのイメージはついている。

だが、そこからなにをどうすれば良いのかがまったく分からなかった。

「まだ、『自分なんか』などと思ってしまうのか……?」

言葉が途中で途切れてしまい、うつむくマリオにクツパは悲しそうに尋ねる。

自分の好きなマリオがバカにされ、貶められるのは確かに我慢がならない。

しかし、それをよりにもよってマリオ自身が自分のことを貶めていることが悲しくもあつた。

クツパの言葉にマリオはゆっくりとうつむかせていた顔をあげる。

マリオの目に入るのは今にも泣き出してしまいそうな表情のクツパ。

クツパの泣き出してしまいそうな表情を見て、マリオの頭の中は真っ白になってしまった。

そんな表情をさせたくはなかったはずなのに——

誰のせいでクツパがこんな表情をしてしまっているのか。

そんなことは考える必要もないこと。

真つ白になった頭のまま、マリオは立ち上がった。

「マリオ………ッ——?!」

なにも言わずに立ち上がったマリオの姿にクツパは困惑しながらマリオの名前を呼ぶ。

先ほどまでの泣き出してしまいそうだった表情と困惑の入り雑じった表情。

あまり見たことのない表情をしているクツパの顔をマリオはジッと見つめる。

クツパは先ほど倒れていたマリオの頭の近くにしゃがみこんでから動いていないため、少しだけマリオのことを見上げる形になっていた。

クツパが名前を呼ぶも、マリオは答えず。

なにも言わずにクツパをグイと抱き締める。

突然の事態にクツパも反応できず、体を硬直させていた。

「ま、まりお……?!?!」

「俺は——」

クツパの泣き出してしまいそうな表情を見て、マリオは頭の中でごちゃごちゃと考えていたすべてが真つ白になっている。

それが今回は良い方向へと働いていた。

頭の中が真つ白になったことよって頭ではなく、心で思っていることを正直に行動できているのだ。

——情けない自分が告白をしても迷惑になるのではないか。

自分は、クツパのことが好きだ——。

——こんな自分に思いを伝える権利があるのか。

自分は、クツパと結ばれたい——。

——だからこそ……
だからこそ——。

——自分の思いは伝えられない。
自分の思いを伝える——。

「俺は……、お前のことが好きだ」

第249話

抱き締められたまま告白を受け、クツパはグルグルと目を回す。

クツパの頭の中では先ほどのマリオの言葉が何度も繰り返されていた。

『俺は……、お前のことが好きだ』

マリオから伝えられたのは一番欲しかった言葉。

しかし、喜びに心が震えている中でどこか冷静な心がこの言葉は違うのではないかと
ささやく。

マリオの本心ではあるのだろうが、どこか違うような違和感を感じてしまうのだ。

小さかったその心のささやきはじよじよに大きくなっていく。

それに合わせて混乱していたクツパの思考は落ち着きを取り戻していく。

「マリオ、まずは離してほしいのだ」

「あ、ああ………」

クツパの言葉にマリオはぎこちなくクツパから体を離す。

どうやらマリオ自身も真っ白になった思考から回復したらしく、その顔は赤く染まっている。

マリオから離されたクツパはゆっくりと立ち上がった。

「………さっきの言葉は本当か？」

「ああ………」

確認をするように尋ねると、マリオは顔を赤くしながら頷いた。

頷くマリオの姿にクツパは先ほど感じた違和感を感じず、先ほどのマリオの言葉は本当だったのだとひとまずは納得する。

では、先ほど感じた違和感はなんだったのか。

マリオの言葉は本当だった。

であるならば自分は何に違和感を感じたのか。

顔を赤くしているマリオのことを見つめながらクツパは思考する。

「その……………、急に抱き締めてすまなかった……………」

黙ってしまったクツパが怒ったのかと思ひ、マリオは頭を下げる。
とはいえその考えは見当違いなのだが。

「いや、嫌ではなかったのだ。まあ、いきなりで驚きはしたがな」

「えっと……………、お前が泣き出しそうな顔をしていたのを見たら頭が真っ白になっ
ちまって……………」

「……………頭が真っ白に？」

頭を下げるマリオにクツパは別に嫌ではなかったことを伝える。

事実として抱き締められたのは驚きはしたが嬉しかった。

なのだが、先ほどのマリオの告白の違和感が気になってしまう。

マリオはなぜ抱き締めたのかを言いつらそうに答える。

頭が真っ白になって行動してしまったことをマリオは恥ずかしく思っていた。

マリオの言葉にクツパは引つ掛かりを覚え、思わず口に出す。

マリオは自分の泣き出してしまいそうな顔を見て頭の中が真つ白になったと言った。では、抱き締めたのも、先ほどの言葉も頭の中が真つ白になっていたときの言葉だったのだろうか。

それは、思考が真つ白になっているときの言葉であるのだから本心だったのだろう。では、先ほどの言葉が『マリオの言葉』であったのかと問われればクツパは否と答える。

なぜなら先ほどの言葉は間違いなくマリオの本心ではあるのだろうが、そこにマリオの意思がないからだ。

意思のない言葉を受けるのはなにかが違う。

「マリオ、さっきの言葉にお前の意思はあったのか？」

「それは……………」

クツパの言葉にマリオは答えられずにいた。

当然だ。

先ほどのマリオの言葉は真つ白になった状態での言葉。

そこにマリオの本心はあっても意思はない。

第250話

嬉しかったはずの言葉に感じた違和感の正体を理解したクツパはマリオを見つめる。マリオ自身もクツパの言葉に思うところがあるのか、気まずそうに肩を落としていく。

「……マリオ、別にお前の言葉が嫌だったわけではない。ただ、ワガハイはちゃんとしたキサマの言葉で聞きたいのだ」

クツパは別に先ほどのマリオの言葉が嘘であったなどとは思っていない。でも……、それでもマリオ自身の意思の込められた言葉を聞きたかったのだ。

「クツパ……」

クツパの言葉にマリオは短く答える。

マリオは頭が真つ白になっていたときに告白をしていたので、先ほどは夢を見ているかのような感覚だった。

そんな状態で告白をしたのでマリオ自身にもあまり実感はなく、それがクツパに申し訳なく思っていた。

『自分自身の言葉で聞きたい』

クツパの言うそれは、先ほどのような頭が真つ白になっている状態での言葉や、無意識に口に出してしまっている言葉ではなく、自分の意思でハッキリと決意をして口にした言葉で思いを伝えてほしいと言うことだろう。

クツパの言葉からクツパの思いを受け、マリオはゆっくりと手に力を込める。

「・・・・・・・・ふう。クツパ、もう一度、チャンスをくれるか・・・・・・・・？」
「・・・・・・・・うむ・・・・・・・・！」

落ち着くために息を吐き、マリオは手から力を抜く。

マリオは気づいていた。

いくら不甲斐なさを感じていようとそれで力を込めて固くなっているは上手く自分

の思いを伝えることもできない。

息を吐いて体の力を抜いたマリオはクツパにもう一度チャンスをもらえないか尋ねる。

マリオの雰囲気が変わったことに気づいたクツパはジッとマリオの目を見つめ、頷く。

クツパにジッと見つめられるが、マリオはその視線から逃れようとすることなく見つめ返した。

「クツパ．．．．．俺は、お前が思うほど強くもないし、これからもこんな風にうじうじと悩むこともあるかもしれない．．．．．」

クツパの目をまっすぐに見つめながらマリオは言う。

それは告白ではないのだが、それでもマリオにとっては大切なこと。

マリオの真剣な表情からクツパもその事を理解しており、マリオの言葉に口を挟もうとしない。

「それでも．．．．．、それでも俺は、お前と．．．．．、クツパと、一緒に生きて

いきたいと思っただ……」
「うん……」

続くマリオの言葉を聞き、クツパの目に光るものが溜まっていく。

しかしその光は先ほどの悲しげなものではなく、それとは違った輝きを放っていた。

一瞬だけ。

一瞬だけマリオは言葉を詰まらせる。

だが、すぐにマリオはその目に決意の炎を燃やし、最後の言葉を紡ぎ出した。

「クツパ、俺はお前のことが好きだ！」

まっすぐに、そしてハッキリとしたマリオ自身の意思で紡がれた言葉はクツパの胸に確かに届くのだった。

第251話

マリオの告白を受け、クツパは嬉しさからポロポロと涙を流す。

告白自体は先ほども受けてはいた。

しかしそれはクツパにとって、マリオ自身の意思が込められていない『マリオの言葉』
とは言えないと思えるもの。

そして、いま改めてマリオから伝えられた言葉にはハッキリとマリオの意思が込められていた。

まっすぐにこちらを見つめ、その瞳には強い意思を感じさせる。

「ワガハイも……。ワガハイもマリオのことが好きなのだ！」

マリオから伝えられた言葉に答えるように、クツパは自身の思いを言いながらマリオを抱き締める。

衝撃と共に感じた柔らかさと、クツパの香りにマリオは動揺しかけるが、すぐにクツパのことを抱き締め返した。

お互いに相手の体温と感触を感じ、幸せな気持ちに包まれる。

マリオとクツパ、2人が抱き合ってどれくらいがたつただろうか。

10秒か、はたまた10分か。

2人はずつと抱き合っていたのではないかとすら感じていた。

やがて2人はお互いに相手の顔を見る。

文字通り目と鼻の先にあるお互いの顔。

相手の吐く息すら感じ取れるほどの距離だ。

「クツパ・・・・・・・・」

「マリオ・・・・・・・・」

熱に浮かされたような表情を浮かべ、2人はお互いに相手の名前を呼ぶ。

お互いに相手に思いが伝わったことよって抑圧されていた熱が解放されていた。

頬を赤く染め、クツパの顔をジッと見つめるマリオ。

瞳を潤ませ、熱っぽい視線をマリオに向けるクツパ。そして、2人はゆっくりと顔をさらに近づけていく。すずにお互いの顔は目と鼻の先。

2人の距離がゼロになるのは数秒後のことだった。

「んっ………」

湿り気のあるものが触れる音が静かに響く。

別にクツパとマリオはこのキスが初めてというわけではない。

初めてクツパがマリオに自分の思いを伝えたとき。

そのときにクツパは嬉しさのあまりマリオのファーストキスを奪っているのだ。

そのときのキスもクツパにとって嬉しいことだったのだが、いましているキスはそれ以上の幸福感をクツパとマリオに与えていた。

「クツパ………」

「マリオ………」

一度、唇を離し、2人は再びお互いの名前を呼ぶ。お互いに相手の名前を呼ぶ声に熱はこもったままであり、落ち着いていないことがうかがえる。

「大好きだ……」

お互いに自分の思いを口にし、再び2人の距離はゼロになる。

相手に自分の思いが伝わったことを喜びながら。

自分たちの想い人と結ばれたことを喜びながら。

お互いに相手の熱と感触をしつかりときざみながら。

第252話

落ち着きを取り戻したのか、マリオとクツパは抱き合うのをやめていた。

2人とも顔が赤くなっているのは、先ほどまでの行為を思い出しているからだろう。

「その……………、これからよろしくな……………」

「う、うむ……………」

顔を赤くしながらマリオはクツパに言う。

マリオの言葉にクツパも顔を赤くし、マリオからやや目を逸らしながら答えた。

改めてマリオと結ばれたことを表す言葉にクツパはもう一度マリオに抱きついてしまおうになるが、ここで抱きついてしまえば先ほどとまったく同じことの繰り返しになってしまうと考え、抱きつくのこらえた。

「えっと、だな？付き合うつて．．．．．彼氏彼女つてなにをすればいいんだ？」
「ぬ．．．．．」

マリオの質問にクツパは思わず言葉に詰まる。

この年になるまでファーストキスも経験してこなかったマリオだ。

当然ながら付き合っている男女がどういったことをするか知識もない。

では、クツパにそれらの知識があるかと問われれば、これも否と言える。

なぜならクツパもファーストキスはマリオだからだ。

一応、クツパは恋愛系の漫画などを読んではいる。

だがそれも所詮は読んでいただけであり、経験などは一切ないのだ。

加えて言うなら、恋愛系の漫画はだいたいが主人公が想い人と結ばれるまでしか描かれておらず、付き合えてからを描いているものはあまり多くはない。

ただし、これはクツパの持っている漫画がそうだと言うだけで、本当にそうだったものが多いのかは不明である。

「えっと．．．．．だな．．．．．？」

マリオの質問に答えるためにクツパは頭をフル回転させる。

恋人となった男女はどう言ったことをするのか。

記憶に残っているのはだいたいが付き合ってから一気に時間が進んで結婚となるものばかり。

そういった種類のものしか読んでいないといってもさすがにすぐに結婚というのがおかしいことは理解している。

いや、まあ将来的にはそうなることを望んではいるのだが。

そしてできるのならば2人の間に子どもなんかもできたり・・・と、ここでクツパは思考が逸れていることに気づいて思考を断ち切る。

改めてクツパは恋人となった男女がどう言ったことをするのかを考える。

そして、ひとまずとして無難なものを思い付いた。

「その・・・、で、デート・・・とか?」

「なるほど」

クツパの言葉にマリオは腕を組んで頷く。

根本的に情報を持っていなさすぎるため、マリオはクツパの言葉を信じ込んでいた。

第253話

腕を組み、首をかしげて頭を悩ませる。

クツパとマリオは2人してほとんど同じ動作をしていた。

「デート・・・・・・・・デート・・・・・・・・」

「恋人ですること・・・・・・・・」

悩んでいる内容はそれぞれ違うのだが、互いに共通しているのはどちらもこれから先の生活で相手とどんなことをしようかと考えていることだろう。

ところで。

マリオとクツパは付き合えたことへの嬉しきですつかりと頭から抜け落ちているよ
うだが・・・・・・・・

この2人。

すでに同棲の経験をしている。

さらに加えて言うなら同じ布団で眠ったこともあり、むしろまだ付き合っていないなかったのかと言われそうな状態だった。

そしてマリオはクツパ城の内部構造を熟知しており、トイレの位置すら分かるほど。それに対してクツパもマリオの家の作りを知っており、冷蔵庫の中身すら分かるほど。

恋人だなんだと言うよりもはや夫婦と言っても差し支えないほどにお互いのことを知っていた。

とは言ってもその事に対して2人はまったく自覚もなく。

互いに相手のことを知っているのは普通のことだと思っただけ。

「デートって……、なにをするんだ……」

「恋人って……、なにをするのだ……」

まったく同じタイミングで2人はガツクリと肩を落とす。

ちなみに、マリオはクツパと2人でキノコタウンを散歩したり、食事をしたりしたこ

ともある。

当人たちはまったく意識をしていなかったが、キノコタウンの住人たちからはすでに公認のカップルのような状態で認識されていたりもした。

まあ、その噂が出た直後にピーチ姫によって完全口外厳禁のお触れが出されたので、マリオとクッパの耳に入ることもなかったのだ。

そして、クッパはクッパで難しく考えてしまっているが、恋人と言うのは単純に考えてしまえば一生一緒にいたい異性の友人ということである。

綺麗なものや面白いと思ったものを教えたい。

自分がすごいと思ったものを相手にも共感してほしい。

一緒に美味しいものを食べたり、失敗した話をして一緒に笑いたい。

そんな何気ないことを全部共有したいと思える相手のことを恋人と言うのではないだろうか。

というよりもクッパはマリオとクッパ城でゲームをしたり、クッパ城の周囲を散歩しながら雑談をしたりしているのだから深く考える必要もないはずなのだ。

「……どこか行きたいところとかあるか？」

「ぬ、ぬう……。マリオと一緒にならどこでも……」

デートでどこに行けば良いのか分からなくなってしまったマリオはクツパに尋ねるが、クツパの答えに顔をさらに赤くする。

クツパもつい本音で答えてしまい、お互いに湯気が出そうなほどに顔を赤くするのだった。

第254話

顔の赤みも落ち着き、クツパとマリオは改めて向き合う。

つい先ほども落ち着いて向き合っていたような気がするが、そんなことは些細なことだろう。

マリオと向き合い、クツパは先ほどまでよりも真剣さを増した表情でマリオを見ている。

「クツパ．．．．．？」

クツパの表情が変わったことに気づき、マリオは首をかしげる。

マリオに名前を呼ばれ、クツパは何やら言いづらそうに口を閉じ、しかし意を決したように口を開いた。

「マリオ……、その、困らせてしまうかもしれないのだが……、話を聞いてくれるか？」

「話……?」

おずおずとクツパはマリオに言う。

困らせてしまうかもしれない話とはなんなのか。

疑問に思いながらマリオはクツパの言葉の続きを待った。

「えっと、だな……。その……。ピーチ姫とナハトのことも受け入れてくれぬか……?」

「……はい?」

困らせてしまうかもというクツパの言葉にある程度は覚悟をしていたが、その覚悟をあつさりとは破壊するようなクツパの言葉にマリオはポカンと呆けてしまう。

例えるならば鳩が88mm高射砲アハトを食らったかのような。

例えるならば獅子がウサギを狩るのにミサイルを使ったかのような。

それほどまでの衝撃をマリオは受けていた。

クツパは今なんと言った………？

………ピーチ姫とナハトのことも受け入れてほしい？

それは………つまり………、2人とも付き合ってほしいと言うことなのか？

衝撃を受けつつも、マリオはクツパの言った言葉について思考する。

クツパがどういったことを考えてそんなことを言ってきたのかは分からないが、マリオはなるべく平静を装いながらクツパを見た。

「えっと………、つまりは、どう言うことなんでございますでしょうか？」

心の中では平静を装うとしていたが、それでも誤魔化しきれない動揺が言葉に現れてしまっていた。

まあ、それも仕方がないことではある。

告白をして付き合うことのできた相手から唐突に他の女性とも付き合ってほしいと言われるのだ。

これに動揺するなと言う方が無茶と言うものだろう。

動揺しているマリオの姿にクツパは内心で謝りながらマリオの言葉に答える。

「その、つまり、……………。ピーチ姫とナハトの2人とも付き合ってほしいと言うことなのだ……………」

改めて告げられたクツパのお願いにマリオは言葉を失ってしまうのだった。

第255話

『ピーチ姫とナハトの2人とも付き合っただけでほしいと言うことなのだ……』

クツパの言葉にマリオは言葉を失い、ポカンと呆けた表情を浮かべる。

あまりにも唐突な言葉。

それもほんの少し前に付き合い始めた相手からの言葉だ。

そんなマリオの姿をクツパはジツと見つめていた。

「えっと……、冗談とかではない……のか……?」

「困らせてしまっていることは分かっている……。ただ、ふざけて言っているわけではないのだ……」

もしかしたら冗談なのかもしれない。

そんな淡い期待を込めてクツパに尋ねるが、クツパは冗談ではないと首を横に振る。

クツパ自身も自分がおかしいことを言っている自覚はある。

それでも自分やマリオ、そしてピーチ姫とナハトの全員が幸せになることを願っているのだ。

「本気・・・・・・・・なんだな？」

「うむ・・・・・・・・」

マリオの確認にクツパは頷く。

本気で自分はマリオがピーチ姫とナハトとも付き合うことを望んでいる。

まあ、本音を言えば自分のことを一番愛してほしいのだが。

「・・・・・・・・・・はあ。クツパの言いたいことは分かった・・・・・・・・」

「なら！」

「ただな・・・・・・・・？」

短く息を吐き、マリオはカクリと肩を落とす。

マリオの様子にクツパは嬉しそうな声をあげる。

しかし、そんなクツパの声をマリオはちよつと待ったと手をかざして止めた。

「そんなことをしてキノコ王国の住人やキノじいたちが納得するのかな？」

マリオはクツパの話を聞いてから一番の問題となる点を尋ねた。

そう。

クツパの言っていることは簡単に言えば一夫多妻になつてほしいと言うこと。

キノコ王国では一般的に一夫一妻であり、一夫多妻はあまり良い目では見られないであらうことが容易に想像できた。

ましてやその相手がピーチ姫と最近話題になつているクツパ。

何度もキノコ王国の危機を救ったり、ピーチ姫を助けたりしている自分だとしてもそれは許されるものではないのかとマリオは考えている。

「普通にキノピオたちですらあまりいい目で見られないんだから、綺麗で可愛いお前やピーチ姫、それにナハトとまで付き合ったらどう思われるか分からないんだぞ？」

「き、きれツ?!——かわツ?!?!」

唐突なマリオの自分を褒める言葉にクツパは思わず動揺し、顔を赤くする。

どうやらマリオ自身は特に意識して言ったわけではないようで、クツパが顔を赤くしたことを不思議そうに見ていた。

第256話

顔を赤くしてうつむいてしまったクツパのことを見ながらマリオは腕を組む。

考えるのは当然ながらクツパの言っていたピーチ姫とナハトとも付き合うということ。

正直な心境としては3人とも綺麗な女性であり、全員と付き合えたら生涯において最大の喜びとなることは間違いはないだろう。

しかもそんな3人が自分に対して好意を抱いてくれているのだ。

これで喜ばないのは同性愛者か幼児性愛者と考えてしまっても過言ではないだろう。

マリオ自身も3人と付き合えた場合の未来を考えて思わず頬が緩みそうにはなる。

.....が！

それはあくまでも考えるだけで終わりなのだ。

一般的に一夫多妻、いわゆるハーレムは創作だけのものであり、漫画や小説などではか存在はしていない。

なお、この一般的にというのはキノコ王国内においてのみの一般論であり、キノコ王国外での一般論とは異なる点もあるかもしれないことは留意しておいてもらいたい。

「やっぱり、常識的に考えるとなあ……………」

「ふむ……………」

マリオの呟きにクッパは赤くなつた顔を冷ますためにパタパタとあおぎながら声を漏らす。

クッパ自身もマリオの考えていることは想定していたので、どうするべきかを考える。

「……………マリオ、キノコ王国の住人やキノじいたちに認められたらピーチ姫とナハトの2人とも付き合えるか？」

「そりや、何も言われないなら嬉しいけど……………、でもなあ……………」
「ダメなのか……………?」

クッパの問いにマリオはゆっくりとうなずく。

それでもやはりひっかかることがあるのか、クツパのことをジツと見つめている。

「その………、やっぱりお前のことを大切にしたいし………」

「ツ———
!?!?!」

モゴモゴと口を動かし、マリオは顔を赤くしながら言う。

別にこれはピーチ姫やナハトのことを蔑ろにしているというわけではない。

一応、2人のことも大切には思っているのだが、それでもやはり自覚した想いを伝えたいことによって恋人になれたクツパのことが最優先になるのだ。

2度目の不意打ちにクツパの赤みの収まってきていた顔は再び赤く染まる。

「と、とにかく！他のものたちになにも言われなければ問題は無いのだな！」

「お、おう………」

赤くなった顔を誤魔化そうとクツパは勢いをつけて叫ぶ。

仮に漫画的に表現するならクツパの頭上には間違いないガオー！という文字が浮かんでいようだろう。

なお、そんな程度で顔の赤さは誤魔化せていないのでマリオにバツチリと赤い顔を見られているのだが。

第257話

両手を突き上げてガオー！とでも言うかのようにクツパはマリオに詰め寄る。

その行為は赤くなつた顔を誤魔化すためのもののだが、マリオに詰め寄つてしまつている時点でマリオにハッキリと顔を見られており、まったく誤魔化せていない。

「なにも言われなければ問題は無いと言うけどどうするつもりなんだ？」

「ふっふっふ……」。ワガハイがなにも考えずに2人のことも受け入れてほしいと言つたと思つたのか？」

「……………まあ、わりと」

マリオの言葉にクツパは不適に笑みを浮かべながら言う。

自信あり気なクツパの様子にマリオはじゃっかん申し訳なさそうにしながら顔を逸らす。

いったいクツパのその自信はどこから来るのか。

正直なところ、クツパは何だかんだで思い付きで行動することもあるので、マリオはクツパの言葉は思い付きで言ったのではないかと思つているところもあった。

比率としては・・・7：3ぐらいだっただろうか。

なお、どちらがどちらの数値なのかは明言しないでおく。

「ぬう・・・・・・・・。まあ、いい。これを見るのだ！」

「これは・・・・・・・・」

マリオの答えにクツパは少しだけ不満そうに頬を膨らませる。

そこは嘘だったとしても否定をしてほしかった。

クツパはジツトリとマリオのことを見るが、すぐに小さく息を吐いて封筒をマリオに手渡した。

クツパから封筒を受けとり、マリオはジツと封筒を見てみる。

見たところ、封筒は特に特別なものではなく。

一般的にキノコ王国で使われているものようだ。

しいて気になる点があるとすれば、この封筒にはなにも書かれていないことだろう

か。

外側に宛名や切手のない封筒。

それは簡単に言えば封筒を書いた人物からクツパが直接受けとつたと言うこと。

クツパがこの封筒を誰から受け取つたのかは気になるところだが、一先ずマリオは封筒を開けてみることにした。

封筒の中には折り畳まれた紙が入っており。

他には何も入っていないかった。

「さて、いったいなにが．．．．．はあッ?!」

封筒の中に入っていた紙を読み、マリオは思わず声をあげる。

驚いているマリオの姿を見ながらクツパはニヤニヤと笑っている。

「ちよ、クツパ?!ここに書いてあることは本当なのか?!」

「ふふん。キサマならその紙を誰が書いたのかは分かるであろう?であるならば、それが真実なのだ」

「いや、まあ、分かるけど．．．．．分かるけども．．．．．」

チラリとマリオは手元の紙に目を向ける。

その紙に書かれているのは見慣れた文字。

その文字を書いたであろう人物を頭に思い浮かべながらマリオはガツクリと肩を落とすのだった。

第258話

マリオの持つている封筒に入れられていた紙。
その紙にはこのようなことが書いてあった。

『 マリオ様

あなた様はこれまでに幾度となくこの国の危機や、ピーチ姫の救出といった偉大な功績を残してきました。

我々は常々、あなた様の功績に報いるには何をしたらいいのかを考えており、それがようやく決まりました。

我々キノコ王国の住人たちにも意見をとっており、住人たちも納得をしております。

長々と前置きばかりですみません。

我々が偉大な功績を残してきたあなた様への報奨としてお渡しするもの。

それは《3人までの女性と婚約することができる》という権利です。

どうか、これからもキノコ王国、ひいてはピーチ姫のことを助けていただけると嬉しいです。

追伸・本文に書き忘れてしまったのでこんなところで申し訳ないですが、ルイージ殿にも、『3人までの女性と婚約することができる』権利をお渡しします。

キノコ王国大臣・キノじい

』

紙の一番最後に書いてあった名前からもわかるように、この封筒はキノじいが用意したもののようだ。

なのだが、ここで1つ疑問が残る。

なぜクツパはこんなにもタイミングよくこの封筒を持っていたのか。

筆跡などはマリオもよく知っている字のため、偽造などではないことは分かっている。

だが、それが本当ならクツパはキノじいにこの紙を用意してもらったことになる。

ではいつのまにこの紙を用意してもらっていたのか。

こればかりはクツパの行動を完全に把握しているわけではないので想像でしかないが。

クツパは恐らくキノコランドに行くよりもっと前にキノじいにこの紙を用意してもらえるように頼んだのではないだろうか。

それならばキノコ王国の住人に意見を可能だろう。

紙から顔をあげ、マリオは自分の髪をグシャグシャとかき回す。

髪型がグチャグチャになってしまったが、マリオは気にせずにクツパに改めて顔を向けた。

「分かった………、分かったよ！」

「ならば！」

「ここまでお膳立てされて尻込みできないってえの！」

なかばヤケになりながらマリオは叫ぶ。

マリオの叫びにクツパは嬉しそうに反応した。

自身の一番好きな女性がここまでお膳立てをしてくれたのだ。

いくらへタレなマリオだとしてもこれに応えなければ男が廃るといふもの。

「クツパ！」

「うむ！」

「お前もひつくるめてピーチ姫とナハトの3人まとめて面倒見てやる!!」

なお、経済的にはクツパとピーチ姫の2人がマリオよりもはるかに上なことは気にしてはいけない。

また、マリオもクツパも追伸に書かれているルイージのことに触れてはいないが、別に忘れてるわけではない。

第259話

クツパ、ピーチ姫、ナハトの3人の面倒を見ると宣言してみたものの、どうすれば良いのかいまいちわからず、マリオは唸っていた。

加えて言うのなら、ピーチ姫には告白を受けており、それを断ってしまったているのだ。これは気まずいなんてものではないだろう。

「どうすればいいんだ……?」

ピーチ姫からの告白を思いだし、マリオは思わず頭に手を当てる。

告白を受けたのはキノコランドで遊んだ日なので、日にち的には昨日のこと。

流石に昨日告白を断ったのに、翌日にいきなり付き合ってくれというのはどう考えても身勝手すぎるのではないだろうか。

「む・・・・・・・・・・？・・・・・・・・・・ああ、そういえば」

マリオが頭に手を当てて悩んでいる姿を見てクツパは不思議に思ったが、すぐに昨日ピーチ姫が告白をしていたことを思い出して納得していた。

告白をしたのにフラれてしまったピーチ姫。

ピーチ姫は恋愛戦争の敗者じゃけえ・・・・・・・・

・・・・・・・・などと別にクツパは思っていない。

思っていないと言ったら思っていないのだ。

「まあ、とりあえずはその権利をもらったことだけ覚えておけば良いのではないか？」

「いや、でもなあ・・・・・・・・」

クツパの言葉にマリオは言葉を濁す。

明らかに自分の身勝手ではあるのだが、それでも気まずいというかそういう理由で後回しにするのも気が引けるのだ。

「はあ・・・・・・・・・・。とりあえず、キノじいに詳しい話を聞いてこようかな」

「と言つても、書いてある通りなのだがな」

「だとしても聞いておくべきだろ。それに……まあ、ピーチ姫にも一応言っておくべきだろうからな……」

「そうか」

小さくため息を吐き、マリオは一先ずキノじいに話を聞くためにピーチ城に向かうことを決めた。

ピーチ城から帰ったはずなのにもう一度ピーチ城に向かう。

なんとも二度手間のような感覚にマリオは少しだけゲンナリとしていた。

紙に書いてある情報だけでは不十分なので詳しい話をキノじいに直接聞いておく必要がある。

それと合わせてピーチ姫に諸々の話をしておこうとマリオは決めた。

「クツパはどうする？ピーチ城に一緒に行くか？」

「ふむ……、ワガハイが行く理由もないしな。ワガハイはいいのだ」

「そつか。なら、家で好きにしてくれていいぞ。合鍵を渡しておくから帰るときにでも鍵をかけておいてくれ」

「分かったのだ！」

マリオから合鍵を受けとり、クツパは嬉しそうに合鍵を握りしめた。

合鍵、ふふふ、愛鍵なのだ！

なぜマリオが合鍵を持っているのかというと、家の鍵をなくしてしまった時用の予備鍵である。

色々なところを歩き回るマリオは常日頃からそういったことに対して備えているのだ。

第260話

クツパを家に置いていき、マリオはピーチ城に着いた。

ピーチ城の門番のキノピオは朝見送ったはずのマリオが戻ってきたことに不思議そうに首をかしげている。

「あれ、マリオさん。帰ったはずでは………。忘れ物ですか？」
「いや、キノジいとピーチ姫に用があつてね」

不思議そうに尋ねてくるキノピオにマリオは首を横に振りながら答える。

まあ、キノピオはマリオの事情などを知らないのでそう考えてしまうのも仕方がないのだろう。

マリオの言葉にキノピオは納得をし、マリオをピーチ城の中へと通すのだった。

「まずは、キノじいに詳しい話を聞くか」

ピーチ城の中に入り、マリオは先にキノじいの所に向かうことを決めた。

ピーチ姫に説明をするにしてもまずはキノじいに詳しい話を聞いてからするべきだろう。

そしてマリオはキノじいのいる大臣の部屋へと向かうのだった。

ピーチ城・大臣の部屋

キノじいのいる大臣の部屋の前に着き、マリオは扉を叩く。

「キノじい、いるかい？」

「おや、マリオどの？どうぞお入りください」

扉が叩かれ、マリオの声が聞こえたことにキノじいは不思議に思うが、一先ずは中に迎え入れることにした。

キノじいの許可をもらい、マリオはなるべく大きな音がでないように気を付けながら部屋の中へと入る。

「マリオどの、どうかしたのですかな？」

「ああ、クツパからもらったこの紙について詳しいことを聞きたくてね」

キノじいに尋ねられ、マリオはクツパから渡された封筒と封筒の中に入っていた紙をキノじいに見せる。

キノじいはマリオの持っている紙をジッと見つめ、マリオがなにについて聞きたがっているのかを理解する。

「おお、そちらの紙を渡されたのですな？」

「うん。一応、キツチリ全部読んだんだけど、詳しい話を聞きたくてね」

「詳しい話ですか。一応、そちらに書いてあることで全てなのですが」

「まあ、クツパもそう言つてたけど、念のためにね」

マリオが持つている紙がクツパに依頼されて書いた紙だと気づいたキノじいは顎に手をあてながら答える。

キノじいの言葉にマリオはクツパも同じことを言つていたことを思い出す。

まあ、それでも紙を読んだだけでは分からないこともあるかもしれないので、マリオは確認をするのだが。

「ふむ、して聞きたいことは？」

「いや、紙には3人までの女性と婚約できるつて書いてあつたけど、それつて身分とかは気にしないでもいいのか？」

「そうですね。基本的には『婚約』という形ですので、お互いの合意さえあれば問題はありませぬよ」

「そうなのか」

紙を読んで気になつていたところを聞くと、キノじいは頷いて肯定した。

身分は関係なく、お互いに合意さえすれば婚約をすることができる。

マリオは紙を読んで一番聞きたかったことを確認でき、ホツとしていた。

第261話

マリオがピーチ城でキノじいに話を聞いている頃。

クツパはマリオの家の掃除をしていた。

まあ、マリオが帰ってから掃除をしているのでそこまで汚くはないのだが。

「ふむ………。そんなにやることはないな」

軽く掃除を終え、クツパは部屋の中を見渡す。

マリオが掃除を終えていたのでクツパの掃除もすぐに終わり、やることなくなくなってしまった。

「……やはり、ピーチ姫とナハトの2人とも付き合っただけとほしいうのは早かったかな」

思い出すのはマリオの困惑した表情。

流石にマリオに2人とも付き合ってほしいと言ったのは早かったと思っただのか、クツパは小さく呟く。

自分だけではなくピーチ姫とナハトも一緒に幸せになれるように言いはしたが………

流石に付き合ってすぐに他の女性とも付き合ってほしいと言うのは………
むむう………

もう少し時期を置いてから封筒を渡すべきであったか？

「はあ………。ま、渡してしまったものは仕方がないからな。それにマリオも受け入れると言ったのだし大丈夫だろう」

息を吐き、もはや後悔しても意味はないとクツパは開き直る。

この辺りの切り替えの早さもクツパの美点の1つだろう。

「そうだな。マリオの持っている本でも読むか」

そう言つてクツパは物置兼書庫へと入つていった。
物置と書庫を兼用しているだけあつて荷物も多く、
少しだけホコリの被つているものもあるようだ。

「この部屋もそろそろ換気をして空気の入れ換えや整理をするべきではないのか………」

家主であるマリオがいないので勝手に入れ換えると流石に問題なため、クツパは特に物を触らずに本棚を物色していく。

一応、仕事関連の本だなど普通の本棚は分けられているため、クツパが間違つて仕事関連の書類を触つてしまうことはない。

本棚を物色していると、クツパはある本を見つけた。

「む………」

クツパが手に取つたのは本棚の一番下の段の端の方に入れられていた本。

一言で言ううと肌色の多いやや薄い本だ。

まあ、マリオも健全な男性なのでそういった本を持っているのも仕方がないことだということにしておいてほしい。

なので、ベッドの下だとか、机の一番下の引き出しに置いてある絶対に読まないだろう辞典だとかは気づいていても調べてはいけない。

とはいえ、クツパ自身もそれは理解しているのだが、納得できるかと言われるとそれは別の話になる。

クツパは見つけたモザイク必須な本をムツとした表情で睨み付けていた。

第262話

目の前にある扉。

その扉を前にしてマリオは動き出せずにいた。

今までであればそこまで気負うこともなく開けることのできていた扉が開けられない。

普段通りの色のその扉の色がなにやら生き物の口のように見える。

普段通りの作りのドアノブが今にも自分の手に食らいついてきそうに見える。

普段通りのこの廊下の赤い絨毯までもが部屋へと誘う舌のように見える。

そのすべてはマリオが感じている緊張がもたらしている幻覚なのだが。

そうだと分かっても動けなかった。

「くっ……」

キノじいから話を聞き終えたマリオは、ピーチ姫の部屋の前にいた。動くことのできない自分にマリオは思わず悔しそうな声が漏れる。

「あれ、マリオ？」

「ツ——?!な、ナハトか……」

目の前の扉に集中していたマリオは背後からかかった声に驚き、ビクリと肩を震わせる。

驚きながら振り返ると、そこにはメイド服姿のナハトがいた。

今までに見たことのないナハトの姿にマリオは思わず言葉を失ってしまった。

「帰ったんじゃないか？なにか忘れ物？……マリオ？」

「ハツ——！え、あ、ああ！ちよつと用があつてな！」

どうやらナハトは廊下の掃除をするために来たらしく、掃除道具を持っていた。

掃除道具を置きながらマリオに声をかけるが、反応がないことを不思議に思いナハトはマリオの顔を覗きこむ。

ナハトの顔が近くに来たことによつてマリオは意識を取り戻し、慌てて顔を離した。

「用？」

「ああ……。そうだな、ナハトにも関係があるし、一緒にピーチ姫の部屋に入つてくれるか？」

「よく分からないけど分かった」

ナハトと話したことによつて緊張がほぐれたのか、マリオはピーチ姫の部屋の扉に手をかける。

先ほどまでの幻覚は見えていないが、ドアノブは重く感じる。

そして、マリオはピーチ姫の部屋の扉を開けて、中へと入つていった。

「あら、マリオ？ なにか忘れ物でもあつたのかしら？」

「いや、そういう訳じゃないんだ」

部屋の中にいたピーチ姫はマリオが入ってきたことに気づくと不思議そうに首をかしげる。

朝帰っていったはずのマリオがなぜここにいるのか。

まだなんの説明も受けていないナハトとピーチ姫の頭の中は疑問符で埋め尽くされていた。

ちなみに、なんの関係もないのだが。

クッパはマリオの家で見つけたモザイク必須な肌色過多の本を見ながら悩殺ポーズの研究をしていたりする。

マリオの持っていた本なのだからマリオの好みで間違いないだろうと考えた結果での行動だった。

第263話

朝帰ったはずのマリオがなぜ部屋に来たのか。

今日の仕事も終わって本を読んでいたピーチ姫は読んでいた本に葉を挟んでマリオを見る。

「それで、用があるって言ってたけど……」

「用？私とナハトにかしら？」

マリオが続いてピーチ姫の部屋に入ってきたナハトはマリオの後ろから移動してマリオを見ながら尋ねる。

ナハトの言葉にピーチ姫は首をかしげながら呟いた。

「えっと、その……」

ピーチ姫とナハトの目が向けられ、マリオはしどろもどろになりながら喋ろうとする。

しかし緊張してうまく言葉にならず。

視線をキョロキョロと動かすのだった。

「………？マリオ、お茶でも飲んで落ち着く？」

「緊張してるみたいだし、その方が良くもいれないわね」

「え、あ………すまん」

マリオが緊張していることを察したナハトは軽く首をかしげると、どこから取り出したのか、カップに紅茶を淹れていた。

ピーチ姫が普通に流している辺り、どうやらいつのまにか身につけていた技術のようだ。

緊張していたマリオは余裕がないのかそんな事態にも反応はせず、普通にナハトから紅茶の入ったカップを受けとる。

「……ふう。ありがとう、ナハト」

「というか、あなた順調にキノピオたちの技術を吸収していつてるわよね……」
「できることが増えていくのは楽しいよ」

ナハトの淹れた紅茶を飲み、落ち着きを取り戻したマリオはナハトにカップを返してお礼を言う。

マリオからカップを受けとると、ナハトはそれをどこかへと収納した。

これもキノピオたちから学んだ技術なのだろうか？

「えっと、ピーチ姫は俺がもらった権利って知っているかな？」

「権利？なにかあったかしら……？」

マリオの言葉にピーチ姫は今日までにやってきた仕事の内容を思い出していく。

マリオの言っている権利とやらは分からないが、キノじいが何かの書類を焦らせるように渡してきたことを思い出す。

記憶に残っている限りではマリオに関する書類などはなかったもので、可能性があるとするればその書類だろうか。

「ここにその権利の内容が書かれた紙があるんだが……」

「どれどれ……え……?」

「ふうん……」

マリオの差し出してきた紙の内容を読み、ピーチ姫は思わず姫としてあるまじき声をあげてしまう。

ピーチ姫の後ろからナハトも紙の内容を読み、興味深そうに頷く。

「ぞ、そそそ、それでマリオはどうして私のところに来たのかしししららら……?!」

「ピーチ姫、動揺しすぎ。私としてはそれよりもマリオからクツパの匂いがすることが気になる」

ピーチ姫はあくまでも平静をよそおうとしているが、言葉と体が動揺で震えてしまっていてまったく平静に見えない。

そんなピーチ姫の様子にナハトは一言言うと、マリオの方を向いて鋭い視線を向ける

の
だ
っ
た。
。

第264話

マリオの出した紙を見て動揺しているピーチ姫と、マリオからクツパの匂いがするの
とに気づいて鋭い視線を向けるナハト。

2人の様子にマリオは気まずさを感じていた。

一応、マリオ自身も2人の気持ちは分かっているわけで、特にピーチ姫からは昨日の
時点で告白を受けている。

そのため、ついさつき自分がクツパに告白したことが余計に気まずさを増しているの
だ。

「その、まず最初に言っておかないといけないことがあるんだけど……」

「言っておかないといけないこと？」

「それはクツパの匂いがすることと関係がある？」

「まあ、な……」

それでも、気まずさを感じていようとも説明をしなければ2人に対してあまりにも不誠実だとマリオは考える。

息を整え、マリオは話を切り出した。

これからマリオがする話はどう考えてもマリオ自身の勝手な都合の話。

これを聞けばもしかしたらピーチ姫にもナハトにも愛想を尽かされるかもしれない。だが、話さずにいるのも後々の悔恨になる可能性がある。

そう考えたからこそヘタレであるマリオは勇気をもって話をしようとピーチ姫の部屋まで来たのだ。

「……………俺、クツパに告白したんだ」

「ッ——！！……………そう」

「……………やっぱり」

マリオの様子からなんとなく分かつてはいたのだろう。

マリオが告白をしたと聞き、ピーチ姫はわずかに悔しそうに歯噛みをして短く呟いた。

「それで……. やつぱりクッパと付き合うのかしら」

「ああ、そのつもりだよ…….」

自分が一番好きなのはクッパであり、それはどうあつても覆せないこと。

ピーチ姫の問いを誤魔化す理由もないので、マリオは静かに頷いた。

「それを伝えるために来た……. っていうわけじゃないよね？」

「ああ…….、勝手なことを言っているのは分かるし、殴られても仕方がないかも
しれないけど……. 2人とも俺と付き合ってくれないか？」

「え…….？」

マリオの顔を見ながらナハトが尋ねると、マリオはナハトの言葉を肯定して頷く。
息を吸い、マリオはピーチ城に来た理由を答えた。

マリオの言葉にピーチ姫とナハトは目をパチクリとさせている。

一方その頃、クッパはマリオのモザイク必須な本を読み進めていって、そこそこに悩

殺ポーズの研究を終えていた。

新たに知識に加わっているのは「童貞を殺す服」と「π／＼」だ。
魔法で服を変えて裸セーターなども試してみたりしている。

「……ちよつと、胸がこすれるのだ」

どうやら裸セーターはあまり好みではないらしい。

第265話

2人に頭を下げ、マリオは2人の返事を待つ。

2人がどんな表情を浮かべているのかは分からないが、それでも困惑をしてるであろうことは簡単に想像できる。

頭を下げてから10秒ほどが経っただろうか、ほんの少しの時間がマリオには数分、いや数時間のようにも感じられていた。

「マリオ、それは……交際としての言葉よね？どこかに買い物に付き合っしてほしいとかではなく……」

「ああ……」

念のためにピーチ姫はマリオに確認をする。

マリオのことだから買い物に付き合っしてほしいというオチがつく可能性があった。

ピーチ姫は過去にそういった経験があったので警戒してしまうのも仕方がないことなのだ。

ピーチ姫の問いにマリオは頭を下げたまま答える。

マリオの耳に届いたピーチ姫の声には、困惑の色が強く表れており。

怒りなどは含まれていなかったように感じる。

「付き合う……、マリオと結ばれる?」

「えっと、まあ、そういうことよ」

どうやらナハトは突然の事態に脳内がストップしていたようでピーチ姫に確認をとっていた。

そんなナハトの様子にピーチ姫は苦笑しながら答える。

「そう……。なら、私はマリオと付き合う」

「私もよ」

「……良いのか?」

ピーチ姫の言葉にナハトはようやくマリオの言葉の意味を処理できたのだろう。

ナハトは何度か頷くと、アツサリとマリオの言葉に答えを出した。

ナハトの言葉に続くようにピーチ姫も答える。

2人の出した答えにマリオは顔を上げ、不安混じりの声で聞いてしまう。

こんな、自分勝手に付き合ってしまった言葉をマリオはグッとこらえる。

思わず言ってしまうそうになった言葉をマリオはグッとこらえる。

ここで思ったことを言ってしまったえばクツパに怒られたことを繰り返してしまふことが分かったからだ。

「もちろん。マリオなら平等に愛してくれるよね？」

「あ、ああ……」

光の消えた瞳でナハトはマリオをジッと見つめる。

すっかり忘れていたが、ナハトはもともと「悪意」。

その事を思い出させるような表情にマリオはぎこちなく返事をした。

「クツパに先を越されてるけど……」。ナハトの言っている通り、平等に扱ってちよ

うだいね？」

「うん、分かったよ」

ナハトの光の消えた瞳にピーチ姫は少しだけ圧されていたが、すぐに気を取り直してマリオに言う。

自分たち3人のことを受け止めるのだからキツチリ全員を愛してほしい。
ピーチ姫の言いたいことを理解し、マリオはしっかりと頷くのだった。

第266話

ピーチ城での告白を終えたマリオは帰路についていた。

家に向かうマリオの表情は明るく、胸のつかえが取れたことによる解放感でスツキリとしていた。

「……つと、いけないいけない。3人のことを受け入れるんだからもちやんと先のことを考えないと」

ブンブンと頭を左右に振り、マリオは表情を引き締める。

今までであれば自分のことだけを考えていれば基本的にはよかった。

しかし、これからは自分のこと以外にクツパ、ピーチ姫、ナハトの3人のことも考えていかなければならないのだ。

とはいってもマリオにとっては初めての経験。

どのようなことを考えれば良いのかいまいち分からなかった。

「………とりあえず、家に帰ってからじっくり考えよう」

帰り道の途中では良いアイデアも浮かばないと考え、マリオは自宅への道を足早に進んでいくのだった。

ところ変わってマリオの自宅。

いまだにクツパは家におり、マリオの極秘本を読んで勉強をしていた。

ちなみに、マリオが干していた布団はこんであり、ふんわりとした状態でベッドに敷かれている。

「むむむ……」

クツパが持っているのは最初に物置兼書庫で見つけたモザイク必須な本とは別に、布団を敷く際にベッドの下から見つけた別の本である。

本の内容を見ながらクツパは唸る。

クツパの視線の先には最初に見ていた本と同じく肌色の多めな女性の姿が写っていた。

が、クツパが唸っている理由は別にある。

それは、本に写っている女性の姿がピーチ姫に似ている女性であることに気づいたからだ。

本はなかなか新しいものようで、最近買ったのではないかということがうかがえる。

もしかしたら自分が告白をする前に買ったものなのかもしれない。

だが、仮にそうなのだと持ってもずつと持っていられるのは気分がよくはない。

口の端から炎を漏らしながらクツパは本をパラパラとめくっていく。

本の内容としては最初に読んでいたものと近い内容なので、そこまで深くは読まない。

「む・・・・・・・・・・？」

と、ここである一文がクツパの目に止まった。

“焦らすことで男性の興奮は跳ね上がる”

女性が目の前で服を脱いでいるとき、下着を脱ぐときに見えないように体で隠してくと焦らされえいるようでとてもドキドキとする。

どうやら男性の好きなシチュエーションのアンケートの結果が書かれているらしい。

この結果がマリオにも当てはまるのかは分からないが、参考程度にはなるだろう。

そう考えてクツパはアンケート結果の部分を読み進めていくのだった。

第267話

自宅への道を歩いていたマリオの前に、ようやく自宅が見えてきた。

帰ったら布団をこもうと考えていたのだが、干してあつたはずの布団が見当たらない。

どうやらクツパがこんでくれたらしい。

布団をこんでくれたことを感謝しながらマリオは自宅の玄関に手をかけた。

マリオがピーチ城に向かってからそこその時間が経っている。

そのことからクツパはすでに帰っているだろうとマリオは考えていた。

「・・・・・・・・え」

「・・・・・・・・え？」

ガチャリ、と。

なんの抵抗もなく扉は開いた。

マリオ自身も自宅の鍵はクツパに渡しているのだから閉まっているかの確認をするだけのつもりだった。

しかし、その予想に反して扉はアツサリと開いてしまい、家の中にいたクツパの姿がマリオの目に飛び込んできた。

マリオは家の中にいたクツパの姿に驚き、クツパは突然開いた扉の向こうにマリオがいたことに驚き声を上げる。

「ちよつ、なんっ?!」

「な、まりツ?!み、見るなあツ!!」

マリオが帰ってきたのだと理解したクツパは顔を赤くし、自分の体を抱き抱えるようにして隠す。

なるべく隠す範囲を増やすためにその状態でさらにしゃがみこんでしまった。

それによって動くことが難しくなり、大きく叫ぶ。

マリオの見たクツパの姿、それはビキニ姿でマリオのモザイク必須の本に載っていた女性の悩殺ポーズを真似している姿だった。

ちなみに、ビキニ姿と言っているが、ビキニはビキニでもマイクロと名のつく部類のものである。

そんなクツパの過激な姿を見てしまったマリオは瞬く間に顔を真っ赤に染め、慌てて頭を下げてクツパから目を逸らす。

「そ、その……悪い……」

「いや、ワガハイも油断していたのだ……」

クツパの方を見ないようにしながらマリオは謝る。

マリオの言葉にクツパはモゾモゾと動いてマリオの布団に潜り込む。潜り込んだ布団からピヨコンと頭を出し、クツパは答えた。

「えっと、大丈夫かい……?」

「う、うむ……」

クツパの言葉にマリオはソロソロと顔をあげる。

そして、クツパが自分の布団に潜っているのを見てホッと息を吐いた。

が、すぐにクツパが先ほどの姿で自分の布団に潜っていることに気づき、再び顔を赤く染める。

「そ、それにしても、なんでそんな格好を？」

「その……、それを見つけてだな……」

「そ……れッ?!」

どうしてクツパがそんな格好をしているのか。

理由が分からず、マリオはクツパに尋ねる。

マリオの問いにクツパはテーブルの上を指差しながら答えた。

クツパの指したものがなんなのか気になり、マリオは目を向けて固まってしまったのだった。

第268話

クツパの示した本を見て固まるマリオ。

確かにその本は物置兼書庫の部屋に置いてあったもの。

独り暮らしだということでも本棚にそのまま置いていたことが仇になったのだろう。

マリオが本を見て固まっている間にクツパは自分の服装をビキニから普段の服へと戻す。

「こほんツ………。その、なんだ、そういつた本を読むのは分からなくもないのだがな………」

普段の服に着替えたクツパは咳払いをしてマリオの布団から出てくる。

それでも突然のトラブルによって顔はまだ赤いままだ。

クツパが自分の布団から出てきたことに慌てて顔を逸らそうとするが、クツパの姿

戻っていることに気づきホッと息を吐く。

なお、息を吐いたのと同時に残念にも思っていたのはクツパには内緒である。

「独り暮らしだからと油断するのではないぞ……?」

「……おう」

クツパの言葉にやや反応が遅れながらマリオは頷く。

マリオの反応が遅れた理由については説明する必要がないほどにハッキリとしているので特に説明をするつもりはない。

「ところで、こっちの本について聞きたいのだが?」

「あ……」

クツパの持っている本を見てマリオは再び固まる。

クツパの見せてきた本は誰にも見られたくなくてベッドの下に隠していたはずの本。しかも一番見られなくなかった相手に見つかってしまった。

「そっちの本は普通に本棚に入っていたのに、な・ぜ・か、こっちの本はベッドの下に隠されていたのだから？」

「えっと、その……」

ジツトリとした視線でクツパはマリオを見つめる。

クツパに見つめられ、マリオはだらだらと汗を流す。

「なかなか新しい本のようだが？」

「うぐツ……」

言えるはずがなかった。

その本はクツパに告白をされてから買ってしまったものなのだ。

「しかもピーチ姫に似た女性もいるようだが……」

「いや、それは違……」

本をヒラヒラと振りながらクツパは言葉を続ける。

クツパの言葉にマリオはなにかを言おうとするのだが、後半はモゴモゴとなつてしま
い、言葉になることはなかった。

「……ワガハイには魅力がないか？」

「そういう訳じゃないんだよ……」

しょんぼりとしながらクツパはマリオに問う。

悲しそうなクツパの様子にマリオは答えづらそうにしながら言う。

マリオがなぜその本を買ったのかを言えるはずがなかった。

その本に出てくる女性の姿がクツパに似ているから買ってしまったのだと。

つい、その女性のページばかり読んでしまっているのだと。

第269話

悲しげな表情のクツパを前に、マリオは気まずそうに本を丸める。

とはいえ、マリオ本人からすれば隠していた本を勝手に見つけられた上でショックを受けられているのだからたまったものではないのではないだろうか。

まあ、マリオはクツパのビキニ姿を見てしまったことで違ったなにかが溜まってしまっているかもしれないが。

「えっと、とりあえずこの本とかはちゃんと捨てるから……」

「……本当だな？」

クツパの読んでいた本たちをまとめながらマリオは言う。

これからはクツパに加えてピーチ姫、ナハトとも付き合うのだ。

そのことを考えるといま捨ててしまうのも良いタイミングなのかもしれない。

マリオの言葉にクツパは念を押すように確認する。

まあ、それも仕方がないのかもしれない。

クツパ本人からすれば自分ではなくピーチ姫にそっくりな女性の載っている本という認識なのだから。

しかしマリオはクツパに似ている女性がいるから買ったので。

その事実をクツパが知ればはたしてどんな反応をするのか。

「そういえば、聞きたいこととかはちゃんと聞いてくれたのか？」

「ん、ああ、大丈夫だよ。あと、ピーチ姫とナハトにもちゃんとやってきたよ」

「そうか。それは良かったのだ」

マリオの所持していたモザイク必須の本についての話はもう終わりだというようにクツパは話題を変える。

クツパが話題を変えたことに当然ながらマリオは気づいたが、余計なことは言わずに答えた。

マリオが聞きたいことと、ピーチ姫とナハトにマリオの得た権利についての話。そのどちらをも達成できたのだと聞き、クツパはホッとしたように息を吐いた。

「説明してきたというのなら、2人とも付き合えたのか？」

「あ、ああ。お前が言っていたこととはいえ驚いていないんだな……」

「まあ、な。ワガハイはピーチ姫たちにも全員で付き合える未来を望むと言っておったからな」

「そうだったのか?!」

続けて尋ねてきたクツパの言葉にマリオは驚きながら答える。

確かにクツパ自身がピーチ姫とナハトの2人のことも受け入れてほしいと言っていたのだが。

それでも多少は驚くのではないかと考えていたマリオは少しだけ驚いていた。

まあ、クツパはすでにピーチ姫とナハトの2人に自分は全員が幸せになる未来を望んでいることを伝えていたので当然なのだが。

「ふむ。ならば、あとは挙式か？」

「えっ……、き、気が早くないか？」

クツパの言葉にマリオは思わず尋ねる。

今日、付き合うことになった3人。

特にクツパとピーチ姫に関しては長い付き合いではあるのだが、それでも挙式について考えるのは気が早いのではないかとマリオは思った。

第270話

フンスと鼻を鳴らしながらクツパはマリオを見る。

マリオは気が早いと言っていたが、すでにマリオの年も26。

さらに言えばクツパの年も29。

年齢的にもそろそろ結婚を考えてもおかしくはないだろう。

「気が早いと言うがな？ワガハイたちの年を考えてみる」

「ああ、まあ……」

ちなみにピーチ姫はまだ付き合えれば嬉しいと考えている年齢であり、ナハトはマリオと結婚ができればいいと考えていたりする。

ナハトの年齢は見た目的にはピーチ姫と同年なのだが、実年齢としては1才。

その辺りを深く考えるとマリオが国家権力に御用となってしまうので掘り下げること

とはしない方がいいだろう。

「分かったな。だから気が早いということはないのだ」

「なるほどな」

クツパの言葉にマリオは納得し、頷いた。

であるならば、まずはどういったことを考えれば良いのだろうか。

結婚をするというのであれば、とりあえず思い浮かぶものとしては結婚式だろうか。結婚式をあげるとすれば、まず選択肢にあがるのはピーチ城だろう。

いままで、キノコ王国のキノピオたちが結婚式をするときもピーチ城でおこなっていた。

そして牧師の代わりにピーチ姫が結婚式を進行するのだ。

ちなみにクツパ軍団の配下たちはクツパ城で結婚式をおこなっているようで、カメツクおぼろが牧師の代わりに進行をして、最後にクツパが祝福の言葉を与えるらしい。

「場所は……やっぱりクツパ城の方がいいのか？」

「いや、ピーチ城にしておいた方がいいと思うのだ。ピーチ姫の都合もあるだろうから

な。まあ、可能であればワガハイの城でやりたいがな」

「確かにピーチ姫はピーチ城でやった方が良いのかもなあ……」

いままでのクツパのおこないのことを考えると、クツパ城で結婚式をおこなうとキノコ王国のキノピオたちは参列がしづらいという問題があるのだ。

まあ、その代わりにクリボーたちクツパ軍団の配下たちが参加しやすいというメリットもある。

「そうだな。ピーチ城でやったあとにクツパ城でやるのか？」

「……いいの？」

マリオの提案にクツパはおそろおそろ尋ねる。

もしもそれが叶うのであれば自分の配下たちにも自分の晴れ姿を見せることができる。

まあ、カメックおばばは保護者枠として参列をするだろうから、写真などは撮られるだろう。

「ああ、クリボーやノコノコたちもお前のウエディング姿を見たいだろうしね」
「マリオ……」。ありがとうなのだ」

マリオの言葉にクッパは感きわまったように瞳を潤ませてマリオの手を握るのだった。

第271話

クツパの様子を見ながらマリオは自分の結婚への考えを改める。

この辺りは男と女の考え方の違いというものもあるのではないだろうか。

クツパのもともとの性別がマリオと同じなはずだということは考えてはいけな
いとだ。

「場所はピーチ城とクツパ城だから……」。牧師を誰に頼むか」

「確か、ピーチ城での結婚式ではいつもであればピーチ姫が牧師の役割をしているのであつたな」

「そうだな。でも、いま考えている結婚式だとピーチ姫は牧師をできないから……キノじいあたりが無難かな」

結婚式を進行するために必要な牧師の存在。

普段のピーチ城での結婚式ではピーチ姫が牧師の役割をしているが、マリオの結婚式ではピーチ姫も新婦なので牧師をすることができない。

そのため、マリオは誰にピーチ姫の代わりを頼むかを考える。

一番無難なのはキノじいに頼むことなのだろうが、ここであえてのルイーダに頼むという選択肢もあつたりする。

まあ、ルイーダには新郎の身内として出席してもらうので、牧師を頼むつもりはマリオにはないのだが。

「む、だがキノじいもピーチ姫の身内として参列したいのではないか？」

「それもそうか………。だとしたら、デアールとか？」

「そのほうがよさそうだな」

よくよく考えてみればキノじいも身内として出席をしたいのかもしれない。

そう考えてマリオは他に誰が牧師をできるのかを考える。

次に思い浮かんだのはキノコタウンで占い師をやっているデアール。

デアールならばおそらくは問題なく牧師をやってくれるのではないだろうか。

「あとは……、衣装の準備と日付か？」

「衣装の方はピーチ城で全員集まってやればよからう。そのときに日付も決めれば良いのだ」

結婚式をおこなう上で重要なポイントの一つ、ウエディングドレス。

新婦の好みや似合う色によってそれは様々な選択肢を迫られるだろう。

だが、逆に考えればそれは普段では見られないような妻となる人物の美しい姿を見られるということ。

確かに結婚式でも女性の美しい姿は見られるだろう。

それでも様々なウエディングドレスを合わせている女性の姿を見られるだけでも楽しいはずだ。

それに結婚式ではお色直しがあるといっても見れる姿は数種類のみ。

なので結婚式では見れないウエディングドレスもいくつかあるのだ。

というわけで、世の夫となる男性諸君は妻となる女性のウエディングドレス選びにうんざりしたりせず、きれいな姿を見れると楽しむようにするよう心がけてほしい。

第272話

ひとまずマリオとクツパは結婚式へ向けての話し合いを一時的に休止する。

ある程度のことは話し合っているが、それでもピーチ姫やナハトの意見を聞くことも大事だからだ。

「とりあえずワガハイの要望はこんなところであるな」

「あとはピーチ姫とナハトの要望を聞かないとな」

話し合いをしている間に用意しておいたお茶を口に運びながらマリオとクツパは一息をつく。

マリオとクツパの話し合いによって決まった結婚式の要望は、

- ・ ピーチ城で結婚式をおこなった後にクツパ城でも結婚式をおこなう。
- ・ デアールに牧師を頼む。

たった2つしか決まっていなと考えるべきか。それとも2つも決まっていると考えるべきか。

まあ、どちらにしてもピーチ姫とナハトの要望を聞かなければ結婚式の内容を完全に決めることなどできないので、話し合いをすることがないのだが。

「そういうえば、キサマはなにか要望はないのか？ワガハイの要望しかいまのところ言っていないのだが……」

「俺の要望か……。俺としては3人のウエディングドレス姿が見ればそれで満足だからなあ……」

「そ、そうか？」

結婚式の内容でマリオの要望を聞いていなかったことを思い出してクツパはマリオに尋ねる。

マリオにもなにか結婚式でやりたいことなどがあるのではないかと思つて聞いたが、マリオは少しだけ考えるとクツパの問いに答えた。

確かにマリオの言うことももつともであり、男性であれば全員とは言わないが大半が同意を示してくれることだろう。

普通に考えて美人のクツパ、ピーチ姫、ナハト。

1人とても結婚できるなら幸せだと言えるのにそれが3人全員との結婚。

その時点でも幸せの絶頂と言っても過言ではないだろう。

そしてそんな3人と結婚式をあげるのだ。

つまり通常でも美人の3人のさらに綺麗なウエディングドレス姿を見ることができるということ。

これは世の男性諸君に殺されたとしても文句を言えないほどの幸福に違いない。

マリオの言葉にクツパはほんのりと頬を染めた。

「それに写真とかは撮ってくれるだろうから自分たちでは気にしなくても良さそうだしな」

「カメックおぼばやキノじい、ルイージに頼んでおけば問題はなさそうだな」

ウエディングドレスを着た3人の綺麗な姿を残しておきたい。

そして、マリオはとくには言っていないがもう1つだけ大切なものが残っている。

だがこれは男性にとって一番大切で必要なもの。

こればかりはマリオ自身の手で用意したいのだ。

マリオが用意したいもの。
それは、結婚指輪だ。

第273話

クツパ、ピーチ姫、ナハトと付き合い始めてから数日。

休んでいた間の分の仕事をこなしていくマリオにゆったりと3人と過ごす時間はなかった。

まあ、仕事があるのはクツパたちにも言えることなのだが。

それでも外を歩き回って修理をしていくマリオの仕事はもつとも大変なものとなっていた。

「これで………」

今日1日分の仕事のまとめを終え、マリオは軽く伸びをする。

ここ数日は忙しくて結婚指輪について考える時間がとれなかったが、これでようやくじっくりと考える時間がとれるというものだ。

結婚指輪を決める上で考えなければならないことは主に3つ。

・デザイン

・作成依頼をするところ

・完成までの期限

以上だ。

他にも考えなければならないことはあるかもしれないが、マリオが考えることはこの3つで十分である。

「依頼するところは．．．．．キノコタウンだと3人にばれそうだし、サムイサムイ村の貴金属店『クリスタラー』に頼もうかな」

キノコタウンにももちろん貴金属店『ジュエル・キノコ』があるのだが、あまりにも近場だと3人、特にピーチ姫にばれてしまう可能性が高まる。

そう考えてマリオはキノコランドから遠く離れたサムイサムイ村にある貴金属店に頼むことを決めたのだ。

また、サムイサムイ村の東にあるサムイサムイ雪原をさらに東に行ったところにある星の生まれる谷には様々なクリスタルがあるので、それを結婚指輪に使うために貰えな

いかとも考えていた。

「デザインと期限は『クリスタラー』についてから話し合えば大丈夫かな。突発の依頼が来る可能性もあるから、念のために携帯電話も持って行こう」

マリオは普段はあまり携帯電話を持ち歩かない。

携帯電話としての意味が全くないとルイーダに注意をされてはいるのだが、いきなり着信が来ることに毎回驚いてしまうので、マリオは携帯電話が苦手なのだ。

が、今回は流石にキノコタウンの地下の土管を使うとはいえ遠出になる。

依頼だなんだと理由をつけてはいるが、ようはクツパやピーチ姫、ナハトの声をいつでも聞けるようにしておきたいだけなのだ。

「マフラー、手袋、冬用の下着、それとコートも必要か……」

必要になりそうなものを言い上げながらマリオは準備をしていく。

過剰ではないかと思うかもしれないが、サムイサムイ村は名前の通り気温がかなり低く、外に数時間置いておいたバナナで釘が打てるかもしれないレベルなのだ。

なのでマリオの準備にやりすぎという言葉は必要ない。

まあ、強いて言うならキノコタウンでその格好をしていては灼熱の地獄になるので今から着ていくのは気が早いという点くらいだろうか。

第274話

キノコタウン。

その町の地下には様々な地方に移動できる土管が存在している。

しかし地下には黒いクリボーや黒いノコノコ、メットにトゲゾー、そしてゲツソーたちが住んでいる。

一般人たちも利用をしはするのだが、時たま黒いクリボーたちに襲われて怪我をして帰ってくる人もいるのだ。

「お父さん、あそこにモコモコが動いてるよ？」

「うん？ 本当だね。もぞもぞ動いてるよ。誰かが入っているのかな？」

キノコタウンの町並みに不似合いなモコモコとした異様なものがもぞもぞと動いている。

どうやらモコモコの中には人がいるようで、歩いているかのように揺れていた。その異様な光景を指差しながら親子は不思議そうに首をかしげている。

他にもキノコタウンの住人たちの不思議なものを見るような視線を受けながらモコモコとした謎の物体Mは地下へと続く土管の中へと潜っていくのだった。

「・・・・・・・・あつつつつい」

モコモコとした謎の物体M、の中からどこか聞き覚えのある声が聞こえてくる。それと同時にモコモコとした謎の物体Mの中から人影が現れた。

「はあ・・・・・・・・、着込みすぎた・・・・・・・・」

モコモコとした謎の物体Mの中からため息混じりに姿を表したのは、じやつかんこもった熱で顔が赤くなったマリオだった。

どうやらこのモコモコの装備はサムイサムイ村に行くためにマリオが用意した防寒装備らしい。

が、どう考えてもやりすぎと言うほかない。

なぜ最初に言っていた装備だけで終わらせずにこんなにモコモコとしたものまで持ってきたのか。

まあ、おそらくサムイサムイ村の寒さに強い印象があつたために過剰なまでに準備をしてしまったのだろう。

「……暑すぎるし、これは置いていこう」

結局、あまりにも暑いので土管の入り口近くに置いていくことを決めたようだ。

本当になんのために持ってきたのか。

マフラーなどの準備もちゃんと持ってきていたので、そちらを身にまとうてマリオはサムイサムイ村に繋がる土管へと向かう。

道中には当然黒いクリボーや黒いノコノコたちが現れるが、何度もこの地下を歩いているマリオにとっては慣れたもので、余裕を持って対処していた。

具体的に言うとう、クリボーは遠くに軽く蹴っ飛ばし、ノコノコとメット、トゲゾーは

ひっくり返して放置。

ゲッソーはあまり襲いかかってこないのが普通で横を通り抜けることができる。

そして地下をしばらく進み、目的の青い土管。

サムイサムイ村へと繋がる土管に到着した。

まだ土管に入っていないというのにすでに冷気をマリオは感じている。

それも当然のこと。

サムイサムイ村に繋がる土管は向こうから流れ込んでくる冷気によって常に凍結しているのだから。

第275話

サムイサムイ村。

そこは常に雪と氷に包まれている極寒の世界にある村。

サクサクと雪を踏みしめ、マリオはサムイサムイ村を歩く。

モコモコとした装備を置いてきたことよって寒さが刺さってくるが、それでも耐えられないほどではない。

「やつぱりここは冷えるなあ……」

分かっていたことではあったのだが、やはり寒さが突き刺さることにマリオは思わず
眩く。

防寒装備はちゃんと着けて（モコモコを除く）いるのだが、それでもやはり寒いものは寒いのだ。

寒さに身を震わせながらマリオはサムイサムイ村の貴金属店「クリスタラー」に向かう。

「あらあん、お客さあん？」

「え、あ、はい……」

「クリスタラー」のドアを開けると同時に聞こえてきた声にマリオは思わず敬語で答える。

しゃべり方は女性のようなのだが、その声がどう聞いても女性には思えない。

言い知れぬ寒気を感じながらマリオは「クリスタラー」の中へと入っていった。

「あらあらあ！もしかしてマリオちゃんじゃなあい?!」

「そ、そうです……」

マリオが「クリスタラー」の中に入るとカウンターの向こう側に座っていた店員が興奮した様子でマリオの前へと駆け寄ってきた。

店員が駆け寄ってくる速度が以外と早かったことにマリオは驚きつつ店員を見る。

張りのある肌。

楽しそうに笑顔を見せる愛嬌を感じさせそうな顔。

店内の光を反射して輝きを放っている頭部。

一般的な女性の胸ほどもありそうなほどに鍛えこまれたその腕。

“クリスタラー”の店員。

それは凄まじいほどに鍛えられた肉体を持つ女性言葉を話す男性。

いわゆるところの『おねえ』であった。

「マリオちゃんが私のお店に来るなんてビックリよおん。いったいどんな用件で来たのかしらあん？」

「え、えつと……、指輪を作ってほしくて……」

店員に圧されながらマリオはなぜ“クリスタラー”に来たのかを答える。

実はマリオは“クリスタラー”に入ったのは初めてで、店の内装や店員についてはまったく知らなかった。

そして店員に圧されながらも店内に置かれている作品などを見ていく。

あまり貴金属などには詳しいわけではないのだが、それでも店内に置かれている作品などはどれも丁寧に作り込まれており、細かい部分にも手が込められていることが分かる。

「指輪……？あ、もしかして贈り物かしらあん？」

「えっと……、はい」

マリオの言葉に店員は首をかしげて少しだけ考え込み、その理由に当たりをつける。店員の言葉にマリオはゆっくりと頷くのだった。

第276話

ゆつくりと頷くマリオの姿に店員は面白いものを見たとても言うかのように笑みを浮かべる。

おおむね想像していた通りの理由だったため、店員はとても楽しそうにしていた。

「まあまあまあ！マリオちゃんが指輪を依頼してくれるなんて嬉しいわあ！」
「そ、そうですか……」

テンションが一気に跳ね上がった店員にマリオは敬語で答える。

まあ、店員の気持ちも分からないわけでもない。

有名人であるマリオが店にただでなく、贈り物として指輪を作ってもらいに自分の店に来ているのだ。

これでテンションが上がらないと言う方がおかしいだろう。

「ところで！指輪のデザインとかは私に任せてもらえるのかしら?!」

「えっと、とても大切なものなので……、可能であれば自分もデザインは考えた
いです」

「そうなの！それは受けとる人も幸せねえ！」

店員に圧されながらもマリオは指輪のデザインについては完全に任せるつもりはな
いことを伝える。

“クリスタラー”に來たのは確かに指輪を作ってもらうためなのだが。

それでも全部“クリスタラー”に頼んで、はい終わりとは考えてはいなかった。

もしもそれをしてしまえばすでにできている品を買ってしまうのと変わらず、特別製
がまったくなくなってしまいうように感じたからだ。

なのでマリオは結婚指輪に関してはある程度口出しをしようと考えていた。

まあ、基本的にはなにも分かっていない状態なので、店員と話し合いながら突き詰め
ていく形になるだろう。

「なら、まずは考えている案だけでも聞いちゃいませよ。どんなイメージを持っている

のかしら?」

「そうですね。一応、それぞれのイメージする色を使いたいと思っ
ているので。金と緑、ピンクと白、黒と金の指輪です」

「……あら、3つも作るのかしら?ふむ……、まあ、あなたなら大丈夫
よねえん?それに、英雄色を好むって言う言葉もあることですしい……?」

マリオが3つの指輪の案を出してきたことに店員は驚くが、それでもマリオなら大丈夫
だろうと言う認識なのだろうか。

とくに疑問にも思っていないようだ。

マリオとしても深く追求されなかったことにホッとしていた。

「まあ、私としてはマリオちゃんが何人と結婚しようとも関係はないわけなのよね。所
詮は貴金属店の人間だし?でも、そうねえん……、1つだけ言っておこうか
しら」

「なにをですか……?」

「結婚をするのならあん……、ぜってえに、女を泣かせるんじゃないやねえ
ぞ?。これは、男としての最低限のけじめだ。もしもあんたが相手の女を泣かせたつて

話が私の耳に入ってみろ。そんなときは全力を持ってあんたをぶん殴る」
「は、はい………」

今までの女性のような口調はなんだったのか。

店員は凄みのある声を出しながらマリオに拳を突きつける。

がらりと雰囲気の変わった店員の言葉にマリオは思わず震えながら答えるのだった。

第277話

店員の庄に震えながらも答えたマリオに満足したのか、店員はすぐに急変した雰囲気
を最初の愛嬌を感じさせる笑みを浮かべる。

店員の雰囲気に戻ったことよってマリオもホツと安堵の息を吐く。

「それで、金と緑、ピンクと白、黒と金の指輪だったわねえん？」

「はい。それで、それぞれに違う模様を入れてほしいんです」

確認をする店員にマリオはひとまず簡単に描いた入れたい模様を見せる。

マリオの見せた紙に描かれていた模様はそれぞれ、ダイヤ、ハート、ムーンだ。

言われた色合いの色紙を並べ、店員はマリオの見せた紙と交互に見る。

「これはこの順番でいいのかしらあん？」

「そうです。ひとまずは入れてもらいたい模様です」

自分のデザインも大切だが、それでも客の意見も大切なもの。

もしも自分のデザインと相容れない意見が出たとしても、この店員はきつちりとやりきるだろう。

その証拠に、愛嬌を感じさせる笑みを浮かべていた顔はいつのまにかキリツとした表情になっており、マリオの見た紙をじっと見つめているのだから。

「ふむふむ……送りたい相手については聞かせてもらえるかしら。可能なら写真も見せてちょうだい」

「……まだ他言無用でお願いできますか？」

「もちろん。お客さんの情報は絶対に秘密。それが私のモットーよ」

指輪を作るのならばそれを着ける相手のことも知らなければならぬ。

職人としての意識へと切り替え、店員はマリオに尋ねる。

その表情は真剣そのもので、口調もいつのまに伸びるような口調ではなくなっていた。

店員の言葉にマリオは念のために確認をする。

会話をしていた時間は短いですが、それでもこの店員が自分の仕事に誇りを持って真剣に取り組んでいることは理解していた。

それでも念には念をと考えて確認をしたのだ。

マリオの言葉に店員はしつかりと頷く。

自分がお客から渡す相手のことを聞くのはその相手に合わせた自分なりに最高だと思える一品を作るため。

なので聞いた情報を漏洩させたり、悪用したりなどというつもりは一切ない。

頷く店員の姿にマリオは携帯電話を操作してクツパ、ピーチ姫、ナハトの写真を店員に見せた。

「なるほどね。確かにこれなら他言無用を念押ししたのも分かるわ」

ピーチ姫の写真が出てきたことに店員は少しだけ驚いた表情を浮かべると、すぐに納得したように頷く。

そしてすぐに店の外に出て玄関にCLOSEと書かれた看板を書ける。

これは秘匿すべき情報だと改めて認識したための行動だった。

第278話

店の玄関にCLOSEの看板をかけた店員がマリオのもとに戻ってくる。

そして店員は改めてマリオの携帯電話に保存されているクツパ、ピーチ姫、ナハトの写っている写真を見る。

「まあ、想像はしていたけど、やっぱりって感じはあったわね」
「そう……ですかね？」

驚いてはいたが、それでも予想の範囲内ではあったのだろう。

店員はスケッチブックを用意しながら呟く。

このスケッチブックは店員がデザインを考える際に使うもので、前のページにはいまままでに作ってきた作品のデザインなどが描かれている。

「それにしてもこの2人はピーチ姫にそっくりね。姉妹……なんてことはないわよね?」

「えっと、いちおう似ているだけです」

クツパ、ピーチ姫、ナハト。

3人の姿は知らない人が見れば姉妹と勘違いしてもおかしくないほどに似ている。そのため、店員がマリオに確認をしてしまうのも仕方がないことだった。

「そうね……、まずは金と緑の指輪のデザインから決めていこうかしら。入れた模様はダイヤだったわね」

「はい、それで合ってます」

ひとまずとして全てのデザインを平行して考えるのではなく、1つづつ確実に完成させていく。

それがこの店員のやり方だ。

人によつては平行して作成できる職人もいるかもしれないが、ここ「クリスタラー」の店員は一つ一つに力を入れて作っていく。

そのため作品の一つ一つのできがとても評判なのだ。

まあ、マリオはそう言った情報には頓着していなかったのでまったく知らなかったのだが。

「金と緑なのだから。リングを金色にしてエメラルドグリーンに水晶をダイヤモンドの形にして花みたいに広げようかしら」

「なるほど。花の形みたいに広げるのなら金色の部分に蔓をイメージした飾り彫りはできますか？」

「へえ、それも良いわね。それなら蔓は水晶よりもやや濃いめの緑色にしておきましょう」

色と入れたい模様から店員は指輪のデザインを考案する。

店員はデザインを軽く紙にさらさらと書き上げてマリオに見せた。

店員の見せてくれたデザインに、マリオは指輪のリング部分に飾り彫りはできるかの確認をする。

マリオの提案に店員は面白そうに笑みを浮かべて紙に書き加えていく。

それからマリオと店員は話し合いを進め、金と緑色の指輪のデザインを決めてい

く。

この指輪がいったい3人のうちの誰に渡すためのものなのか。

それはまだ秘密なのである。

色合いやデザインから誰に渡すためのものか分かっているかもしれないが、それでも秘密だと言ったら秘密なのだ。

第279話

金と緑色の指輪のデザインの話し合いがひとまず終わり、ある程度完成したデザインが紙に描かれている。

マリオと店員は、話し合いをしている途中で店員の用意したお茶を飲んで口の中を潤わせていた。

「1つ目でもかなり話し込んだ気がするわね」

「でも時間はそんなに経ってないですよ？」

「それはあれよ。集中しすぎて時間が短縮されたのよ」

「なるほど分かん」

やりきった感を出してはいるがまだ指輪のデザインは1つ目が終わっただけ。

まだ、ピンクと白でハートの模様の指輪と、黒と金でムーンの模様の指輪が残っている。

る。

店員の合っているのか間違っているのかよく分からない理論にマリオは思わず首を振ってしまった。

「とりあえず1つ目のデザインはこれで仮決めかしら。次はピンクと白の指輪ね。これの模様は……」

「ハートの模様です」

最初に軽く描いたのとは段違いに描き込まれた紙を汚れない場所に置き、店員は新しい紙を用意する。

次に決めるのはピンクと白でハートの模様を入れる指輪だ。

「そうね、リングの部分をピンクにして白銀水晶を小さめのハート型にして斜めに2つ並べようかしら」

「普通ならピンクをハートにするイメージですけど、あえて逆にするんですね」

「ええ、意外性も含めて言い考えだと思ふのよ」

店員が考えた最初のデザインにマリオは感心したように呟く。

一般的（統計などはまったく取っていない）にピンクと白の二色を並べられてどちらがハートの色かと聞かれたら大多数の人がピンクを選ぶだろう。

マリオ自身もピンクの色の方をハートにしようと考えていたので、店員のデザインには目から鱗だった。

「それからさっきの指輪と同じようにリングの部分に飾り彫りもしちゃいましょう。こっちはピンクと白だから……」

「ハートの模様をリングにも彫ったら流石にくだいですしねえ……」

「そうね、さっきと同じデザインにはできないわけだし……。翼をイメージしたデザインにしましょうか」

「ピンクのリングに飾り彫りするなら白色で着ければちょうど良いのかな」

リングの部分に施す飾り彫りの模様も決まり、店員は紙に決まった内容を書き込んでいく。

ピンクと白の指輪は、リングの部分をピンク、そして白銀水晶を使って小さめのハートを斜めに2つ並べる。

最後にリングの部分に翼をイメージした飾り彫りをして、白色で浮かび上がらせる。なかなか可愛らしいデザインになったのではないかとマリオは考えた。これで、残りの指輪は黒と金の指輪だけになった。

第280話

無事に2つ目の指輪のデザインの話も終わり、店員は仮決めとして書き終えた紙を最初の一枚と同じ場所にまとめる。

残るは黒と金の指輪のデザインだ。

「最後は黒と金の指輪だったわね」

「はい。それでムーンの模様です」

新しい紙を用意し、最後の指輪の大まかな情報をまとめる。

黒と金の色でムーン、ようは月の模様を使った指輪。

単純に考えるのであればやはり黒いリングに金の月の装飾だろうか。

「そうね、金色なのだから光金水晶こうこんすいししょうでいきましよう」

「光金水晶?」

聞きなれぬ水晶の名前にマリオは思わず聞き返す。

星の生まれる谷には様々なクリスタルがあることは知っているが、それでもマリオの聞いたことのない名前だった。

そんなマリオの様子に店員は机の引き出しを開けると小さなクリスタルを取り出した。

クリスタルは自立するように装飾が施されており、店内の光によってキラキラと光を放っている。

「これが光金水晶よ。その名の通り光を受けると金色に光るの。最近見つかった新種らしいわ」

「へえ、こんなものまであるのか……」

キラキラと光を放つクリスタルを見ながらマリオは興味深そうに頷く。

店内の光は固定されているので、光の指す方向は一定。

しかしクリスタルはキラキラと回転するように光の反射の向きを変えていく。

クリスタルに施されている装飾には別に回転する仕組みなどは施されていないので、この光が動いているのは他にになにか要因があるのだろうか。

——クルクルと反射した光は回る。

——くるくると光は回り、クリスタルさえも回転しているように見える。

——くるくる狂狂と、くるくる狂狂と……

怪しげな光の回転。

やがて、回転する速度は上がっていく。

光が形作るのはなんの形なのか。

反射した光が徐々に、徐々に何かの形を作っていく。

何が起きているのかマリオにはさっぱり分からない。

だが、なぜかは分からないが視線がクリスタルからまったく離れなかった。

まるでクリスタルの光が作っていく形に吸い寄せられるかのように。

「い……………あ……………い……………あ……………」

「あら、いけない。見るのは終わりよ」

やや虚ろな目になって呟き始めたマリオの様子に店員は馴れた様子でクリスタルを机の引き出しに片付ける。

クリスタルが目の前からなくなったことによつてマリオは暫しの間放心したような呆けた表情を浮かべていた。

なお、店員もクリスタルを見ていたが特に精神的にダメージを受けたような様子はない。

ついでに、クリスタルを片付ける際、机に反射しているクリスタルの光からなにか細長い紐のようなものが蠢いていたが店員は気にした様子もなく叩き潰していた。

第281話

店員の出したクリスタルに目を奪われていたマリオは店員がクリスタルを片付けたことよって放心したようにしばらくの間放心したような表情を浮かべていた。

そんなマリオの様子を見ながら店員は仕方がないといった表情を浮かべながら先に仮決めの終わっている2つの指輪のデザインが書かれておる紙を見直していく。

マリオが放心をしているので3つ目の指輪の話が途中で止まってしまったからだ。

「まずは、金と緑の指輪からね」

最初に見直すのは一番最初の指輪のデザイン。

リングの色を金色にしてエメラルドグリーンの水晶をダイヤモンド型に加工して花のように並べて広げるといふこと。

そして金色のリングには蔓をイメージした飾り彫りも施す。

これは単純にこの言葉通りに加工すれば言いと言うものではない。

指輪ではあるのだが、それでも花と蔓をイメージしているのだ。

であるならば、ただ作るだけでは職人としてのプライドが許せるものではない。

加えて言うのなら、この指輪はマリオの結婚する相手に贈られるもの。

ならば生半可なものを作るわけにはいかないのだ。

「あくまでも花びらはダイヤ型。それでも花らしさをだせる形状に……」

確かに普通に並べるだけでも花の形には見えるかもしれない。

だが、その程度の加工でマリオの依頼してきた指輪を終わらせてもいいとは思わない。

色の組み合わせからどの指輪が誰のものかは推測はできている。

ならば、その相手に合わせて最高のものを作るのが最高の職人というものだ。店員は考えている。

「リングの部分はあまり太すぎず、でも細すぎてもダメね。あとは飾り彫りの色は花の部分よりも濃い色のもの……これでおおよそオツケーかしら」

先ほどの仮決めのデザインからさらに洗練されたデザインへと店員は書き換えていく。

仮決めの時点でもある程度形にはなっていたが、それよりも完成されたデザインに店員は満足そうに頷いていた。

「次はピンクと白の指輪ね」

1つ目の指輪のデザインの見直しを終え、店員は2つ目のデザインに手をかける。

2つ目の指輪のデザインはリングの色をピンク色にして白銀水晶を小さめのハートの形にして斜めに2つ並べる。

そしてピンク色のリングに翼をイメージした飾り彫りを施す。

「そのままピンク色を使うとちよつと子供っぽいわね。ここはピンクゴールドにしておくべきね」

まず最初に手を加えるのはリングの色。

マリオからの要望ではピンクと白だったが、さすがにピンク色をそのまま使つては子供っぽさが出てしまう。

なのでまずはリングの色をピンクからピンクゴールドに変えていく。

「翼をイメージした飾り彫りはピンクゴールドに飲まれないようにこのまま白で良さそうね」

こちらの指輪のリングの部分も太さに気を付けつつ翼をイメージした飾り彫りにちよように太さを模索していく。

デザインの見直し、サイズの調整、金属、水晶の加工。

指輪の作成はとて大変なもののだが、それでも店員は楽しそうだった。

第282話

マリオが放心している間に2つの指輪のデザインの見直しも終え、店員はのんびりとお茶を飲んでいた。

実のところ、店員は自分が見せたクリスタルを見たことによつて、人によつてはこのような反応があることを知っていた。

なので特には慌てた様子もなく普通にしていられるのだ。

「でも、そろそろ戻つてきてもらわないと話の続きができないわねえ……」

流石にマリオがこんなにも長い時間放心するとは思わなかつたので、店員はポツリと呟く。

なんの対策もなしにクリスタルを見てしまった人は、発狂して叫び声をあげたり、恐ろしいものを見るかのように店員を見たり、完全に精神が死んでしまつて無反応になつ

てしまったり、マリオのように放心してしまったりする。

マリオならば大丈夫だろうとは考えていたのだが、それでもここまで放心するとは予想外だった。

「とりあえずは意識を戻してもらうしかないわね。すう……はあ……」

そう言つて店員はマリオの前に移動する。

腰を落とし、目を閉じて息を整える。

精神を落ち着け、ただ一つのことを考えて手を合わせる。

意識を切り替え、ただひたすらに自身の手のひらへと集中する。

これからおこなうのはただの動作であると。

怒りも、悲しみも、楽しさも、なにも込めぬ無我の動きであると。

小指から順に曲げていき、ゆっくりと拳を形成していく。

余計な力は込めず、自然に拳を形成し、自身の腰の位置へと持っていく。

腰の位置へと持っていた腕とは反対の腕を自身の前へと持っていく、手のひらをマ

リオへと向ける。

イメージするのは射出台。

そして、狙うべき焦点。

まっすぐに、ぶれることなく一直線にその場所へと自身の拳が向かうことを当然のことだとイメージする。

「無念流撃むねんりゅうげき………、閃迅必倒せんじんひつとう………」

——この一撃に思いは込めず。

——止まることなく流れるように撃ち込む。

——その一撃は閃光のごとく。

——外れることなく確実に相手を撃ち倒す。

眩くのは無意識下で拳を放つ際に癖となっている言葉。

しかし、この眩きをすることによって即座に最高のコンディションへと移行することができる。

つまるところのルーティーンというやつなのだ。

「………ッ、せいやあああッッ!!」

目を開き、烈迫の気合いを込めて声をあげる。

それに合わせて前に出していた手を引き、腰の位置に持つていった腕を同時に突き出す。

ゴウツ、という風を切る音と共にマリオオへとその拳が放たれるのだった。

第283話

風を切り、マリオの腹部へと店員の拳が突き刺さる。

マリオの意識をもとに戻すためとはいえ、ここまでの威力が必要なのか疑問になるかもしれないが、半端な威力では効果がないので仕方がないのだ。

これは店員の経験則なのでほぼ間違いないだろう。

なお、拳を撃ち込まれたマリオは腹部を押しえながら崩れ落ちている。

どうやら何が起きたのかをまだ理解できていないようだ。

「うぐうおおおお・・・」

「戻ってこれたみたいで良かったわあ」

腹部を押しさえて呻き声をあげているマリオを見ながら店員は優雅にお茶を口に運ぶ。

少しだけやり過ぎたかもしれないと思わなくもなくなかったが、それでもマリオの

意識が戻ってきたのだから結果オーライというやつだろう。

しばらくしてから、腹部の痛みが治まったのか、マリオがゆっくりと立ち上がってきた。

それでもまだ腹部に痛みは残っているのか表情は辛そうだが。

「うううう………。なんで腹に痛みが………」

「ごめんなさいね。あなたならあのクリスタルを見ても問題はないと思っていたのだけ
れど」

「………。ああ、そういえばクリスタルを見ていたんだっけ」

店員の謝罪にマリオは自分が店員の出したクリスタルを見ていたことを思い出す。

というか記憶が若干でも曖昧になるクリスタルはかなりヤバイものだと思われる。

なお、それを指輪に使おうとしているのだが、その辺りのことも店員は考えているの
だろう。

「えっと、どこまで話していたんだっけ………」

「黒と金の指輪で、光金水晶を使うって話までよ」

「ああ、そうだった。．．．．．というか、あんな水晶を使って大丈夫なのか？」

マリオの呟きに店員はどこまで話が進んでいたのかを答える。

店員の言葉にマリオは指輪のデザインの話がどこまで進んでいたのかを思い出した。

そして思わず不安になって店員に尋ねた。

まあ、自分が見ているので放心をしてみてください。使っていた水晶を使うのだから不安になってしま
うのも仕方がないことだろう。

「大丈夫よ。さっきのは少しサイズが大きかったから光を取り込みすぎてなっちゃった
だけだから。少量で光が通りすぎないように気を付ければ問題ないわ」

「通りすぎた光の方にもなにかあったのか．．．．．」

マリオ自身は光金水晶の光に吸い寄せられて放心をしてしまったので、クリスタルを
通りすぎた光から細長く蠢くなにかには気づいていなかった。

それでも店員の言葉から見なくて良かったと心の底から思うのだった。

第284話

ひとまず光金水晶についての話は置いておいて、マリオと店員は指輪のデザインについての話に戻る。

光金水晶を見たことよって話が逸れていたが、最後の指輪についての話し合いだ。

「さ、最後の指輪について話をしましょう」

「……まあ、そちらが大丈夫だって言うなら信じますよ」

光金水晶についてはまだ気になるところもあるが、店員の言うとおりの指輪についての話し合いも進めなければならぬ。

いつまでも気にしては話が進められないとマリオは意識を切り替えた。

「金色の方は光金水晶を使って、黒の方は……黒銀くろがねにしましょう。真つ黒だと少

しイメージが悪そうなものね」

「鉄くろがね……って鉄なんじゃ？」

「ああ、同じ読み方もできるわよね。鉄とは違うもので、黒っぽい銀なのよ」

「そんなものであるのか……」

聞きなれない金属の名前にマリオが尋ねると、店員は手をひらひらと振りながら答えた。

黒銀とは、店員も言っている通り鉄とは違うもので、分類とするならば銀の一種。

黒くはあるのだが銀のようにキラキラと輝いているのだ。

なお、光金水晶と黒銀、そのどちらもがどのようなようにして自然界で形成されているのかは誰にもまだ説明されていない。

「とりあえず光金水晶でムーンの形を作って、リングの部分は黒銀で作っちゃいましょう。この指輪の飾り彫りは……何が良いと思うかしら？」

「そうですね。メインの模様はムーンなので、スターを意識した飾り彫りとかでしようか」

「ふむふむ。そうね、だいたいこんなイメージかしら？」

マリオの意見を聞き、店員はさらさらと紙に簡単なイメージ図を書いていく。それはスターの一部ずつが繋がって一列に並んだ図だった。多すぎず、少なすぎず、綺麗に並ぶスターにマリオは感心したように頷く。

「すごいなあ。それで大丈夫です」

「そう？ならこのデザインで進めていっちゃうわね」

「はい、お願いします」

マリオの言葉に店員は了承し、デザインの紙を他の2枚と同じ場所にまとめる。これでマリオの依頼した3つの指輪のデザインの話し合いが終わった。

「さて、と。これで依頼された指輪のデザインが全部終わったわね。このデザイン内容だから……最低でも1ヶ月は欲しいわね」

「……逆にそんな短い期間でできるんですか？」

店員の言う指輪の製作期限にマリオは思わず聞き返す。

マリオ自身も詳しいことは知らないのだが、それでも1ヶ月で作れるとは思わない。そんなマリオの言葉に店員は自信満々に微笑むのだった。

第285話

店員の自信満々な表情に圧され、マリオはポカンと呆けてしまう。

マリオ自身の心配ももつともなのだが、それでもここにいるのは自分の技術に誇りを
持っている店員。

マリオの心配など無用だと言わんばかりに店員は笑みを浮かべていた。

「ふふふ、心配は無用よ。それにマリオの大切な人に渡すための指輪を作るんだもの。
他の依頼を蔑ろにするつもりはないけど、全力であたらせてもらおうわ」

「それなら、お願いします」

店員の言葉にマリオは深く頭を下げる。

もう自分にはできることはない。

この店員とは今日会ったばかりだが、それでも話していて信頼ができると思ってい

る。

ならば本当に言った期限内で指輪を作ることができるのだろう。

マリオの言葉に店員はドンと胸を叩き、応える。

そして、マリオは貴金属店「クリスタラー」を後にするのだった。

「ふう……、店に入った時は大丈夫か不安になったけど、全然そんなことはなかったな」

キノコタウンへと繋がる土管へと向かいながらマリオは呟く。

店に入った最初は店員が『おねえ』であることに驚いて、やや不安ではあったが。

それでも話していくにつれて店員が自分の仕事に対して誇りを持っていることが分かり、とても話しやすくなっていった。

これは、マリオ自身も自分の仕事に対して誇りを持って取り組んでいることが共感できたということもあるのではないだろうか。

そんなことを考えながらマリオはキノコタウンに繋がる土管へとたどり着いた。

「……おいおい」

目の前の光景にマリオは少しだけ驚きの声を出す。

とは言っても驚いて大きな声を出しているのではなく、思わず漏れてしまった言い方なのだが。

「誰だよ。土管に水をぶっかけたやつ……」

マリオの目の前にあるのは水をかけられたことによつて凍結してしまった土管だった。

別にマリオにとっては問題はないのだが、それでも困惑してしまうのは仕方がないだろう。

ちなみに、土管に水をかけた下手人はすでに捕まっており、スタールによつて雷が落とされている。

「とりあえず溶かすか　フアイアボール！」

どちらにしてもキノコタウンに帰るためには土管の凍結を溶かすしかないので、マリ

才は土管に向けて「ファイアボール」を放つ。

「ファイアボール」が直撃し、土管から水の蒸発する音と共に水蒸気が発生する。そして、水蒸気がすぐに凍りつき、氷の塊となる。

「あ、やべ」

冷静に考えれば分かったことなのだが。

一気に氷を溶かしてしまえば発生した水蒸気によって結局また凍結してしまうのだ。自身のうっかりに気づいたマリオは失敗した、と頭を掻くのだった。

第286話

目の前で溶かしたのにもう一度凍りついてしまった土管を見ながらマリオはポリポリと頬を掻く。

マリオ自身も、極端に寒いところで水を溶かしても発生する水蒸気で瞬時に凍結してしまうことは知っていた。

しかし、誰かに見られているわけでもないが、それでも恥ずかしいものがあつた。

「とりあえず、ゆつくりと溶かすか」

そう呟いてマリオは再び凍結してしまった土管に手を当てて魔力を流していく。

マリオの流した魔力が熱を発生し、マリオの手をつたって土管に達する。

マリオの魔力によって発生した熱によって土管を凍結させていた氷がじわじわと溶けていく。

「……やっぱり冷たい」

手袋越しとはいえマリオが触れているのは氷。

それは冷たくて当然だろう。

しかも手の触れている氷が溶けて水になっているのだ。

そんなことになっていれば溶けた水が手袋に染み込んでさらに冷たくなるのも当然のことだった。

まあ、マリオ自身の魔力によって発生する熱のおかげですぐに乾いているのだが。

「これくらいで大丈夫かな」

ひとまず土管を凍りつかせていた氷も溶かし終わり、マリオは魔力を流すのを止める。

その際に手袋を完全に乾かすのを忘れてはいけない。

もしも、乾かすのを忘れてしまえば即座にマリオの手袋も凍りついてしまうだろう。

きつちりと自分の手袋が濡れていないことを確認し、マリオは土管のふちに足をかけ

る。

ここでうっかり土管のふちが濡れてもう一度凍っていてしまえばギャグのように足を滑らせて土管の中に落ちていくのだろうが、その辺りはちゃんと乾かしているのですねんな展開はなかった。

「さて、指輪ができるのは一ヶ月後くらいって言うてたし。完成したら電話も来るだろうから。あとは自分でできることをやって待つとするかな」

そう呟いてマリオは土管の中へと潜っていった。

サムイサムイ村に向かっていたときと地下の様子に変わった様子はなく。行きと同じように黒いクリボーやキノコたちが襲いかかってきた。

まあ、それも結局は同じようにマリオに撃退されているのだが。

「ああ……、そういえばここにこれを置いて行つたんだつたか」

マリオの目の前にあるのはサムイサムイ村に向かうために用意して結局ここに置いていつてしまったモコモコの装備。

「クリスタラー」の店員や、光金水晶など衝撃を受けるものが多かったために、マリオはすっかりこの装備のことを忘れていた。

「ここに置いておいたら下水の臭いがついちやうかもしれないし、やっぱり持ち帰るしかないよな」

本音を言うならこのモコモコの装備を持っていきたくない。

なぜならキノコタウンを通つて自宅に戻るまで、かなりの暑さになるからだ。

とはいえ、ここにこのモコモコの装備があるのはマリオが自分で持ってきたから。

仕方がない、とマリオは小さく息を吐いてモコモコの装備を手取るのだった。

第287話

マリオが指輪の依頼を終えて何日かが経過した。

その間にマリオ、クツパ、ピーチ姫、ナハトの4人は休みの日に集まって話をしたり、買い物に出掛けるなどをしていた。

その光景はキノコタウンの住人たちの目にも留まっており、4人の関係は静かに噂されていた。

「今日は………確か、全員が休みで衣装合わせとかをするんだったな」

カレンダーを確認しながらマリオは呟く。

マリオの言う全員とは当然ながら自分を含む、クツパ、ピーチ姫、ナハトの4人のことであり、4人全員の休みが被ることは珍しいことで、ほとんどは誰か1人の休みが合わずに1人だけ抜けていることがほとんどだった。

なのでマリオたちはいまだにどのような衣装にするかなどの話し合いをしていなかった。

まあ、あとは何だかんだで衣装を用意する仕立て屋がドレスの見本を用意するために日数を必要としていたから、と言うものもあるのだが。

「マリオ、起きているか？」

「ん、クツパか。今からピーチ城に向かおうと思つていたところだよ」

「そうであつたか。ならば一緒に行くのだ」

軽いノックと共にクツパが玄関を開けてマリオの家に入ってくる。

返事を待たずに入ってきたクツパにマリオは特に驚いた表情も浮かべずに答えた。

マリオがなぜ驚いていないのかと言うと、それはマリオがクツパ、ピーチ姫、ナハトの3人に自由に家に入って良いと言つたからだ。

……今までも何人かは勝手に入つてきていたりしたのだが、気にしてはいない。

マリオの言葉にクツパは嬉しそうに頷くと、マリオの腕に自分の腕を絡み付かせた。

ふにゆり、とマリオは腕に柔らかいものを感じ、少しだけ顔を赤くする。

今までにも何回か似たようなことはされているのだが、それでもいまだに馴れることはできていなかった。

「昨日はな、ノコノコのカップルがそれぞれ相談に来てだな」

「へえ。やっぱりお前は配下に慕われているよな」

マリオの腕に自分の腕を絡み付かせながらクツパはピーチ城へと繋がる道を歩く。

話しているのは他愛もない日常の話。

それでもそんななんでもない会話をできることがとても楽しかった。

ちなみに、ノコノコのカップルがクツパに相談をした理由は、お互いにサプライズでプレゼントを贈りたいと思い、男と女の気持ちをそれぞれ理解できるだろうと考えたからである。

「それにしても、いよいよ衣装選びか……」

「長い時間を使うから退屈にさせてすまぬな」

「いや、衣装合わせで色々なドレス姿とかが見れるから構わないよ」

今日やることに思いを馳せながらマリオは呟いた。

マリオの言葉にクツパは長時間拘束してしまふことを謝る。

謝るクツパの姿にマリオは笑いかけると、優しくクツパの頭を撫でるのだった。

第288話

マリオの腕に自分の腕を絡み付かせながらクツパはキノコタウンを歩く。

キノコタウンの住人たちの姿もちらほらとあり、その誰もがマリオとクツパのことを見ていた。

当然ながらキノコタウンの住人たちに見られていることにマリオとクツパは気づいており、2人とも顔をうつすらと恥ずかしさで赤く染めている。

とはいえ、それでも絡み付かせている腕を話す様子はないのだが。

「……………ここまで見られると照れるな」

「そうだな……………」

自分たちが注目されていることに気づいているので、クツパは小さくマリオに話しかける。

別に普通の声量で話してもいいのだが、まだマリオたちの結婚は公表していないのでどこからどのようなようにして情報が漏れるか分からないためなるべく声を潜めているのだ。

マリオとクツパはそのままピーチ城の方へと向かっていった。

「おはようございます。仕立て屋の店員はすでに来ておりますので、先に姫様のもとに向かつてください」

「おはよう。分かったよ」

「ご苦労なのだ」

ピーチ城の門番のキノピオ兵の言葉にマリオとクツパは答え、城の中へと入っていった。

ピーチ城で働いているキノピオたちにはすでにマリオがクツパ、ピーチ姫、ナハトの3人と結婚することを発表してあった。

そして、キノコタウンで公表をしていないので当然のことであるのだが、キノピオたちにも箝口令がしかれており、情報を漏らした場合には給金が削られる。

そのため、クツパはキノコタウンを歩いていたときよりも幾分か気楽に城の中を歩く

ことができていた。

「……」ここで、『それなら、キノコタウンでは腕を絡ませたりしなければいいのではないか?』と疑問に思うかもしれないが。

そこはそれ、やはり女性の気持ちと言うもの。

自分がこの男性のことを好きなのだと言われたい気持ちもあつたのだ。

まあ、これに関してはピーチ姫やナハトも同じようなことをしているので本当に隠す気があるのかと尋ねてみたくもある。

そして、ピーチ姫の部屋の前にマリオとクッパは到着した。

マリオが扉をノックすると部屋の中からピーチ姫が返事をし、部屋の中に入ってくるように促した。

「いらつしやい、2人とも。とりあえずお茶でも飲む?」

「おはよう、ピーチ姫。そうだね、ただこうかな」

「おはようなのだ。飲むのは構わないのだが、仕立て屋はすでに来ているのであろう。良いのか?」

「その辺は大丈夫。持ってきた衣装を並べたりでまだ少し時間がかかるって言ってた」

部屋の中にマリオとクツパが入ると、部屋の中でお茶をしていたピーチ姫とナハトが出迎えてくれた。

ピーチ姫の言葉にマリオとクツパは空いている椅子に座りながら答える。
すでに仕立て屋が来ているのだからそこに向かうべきではないのか。

そうクツパは思っていたが、ナハトの言葉に頷き、そつとナハトの用意したお茶を飲むのだった。

第289話

ナハトの用意したお茶を飲みながらマリオ、クツパ、ピーチ姫、ナハトの4人は会話を楽しむ。

仕事で大変だったこと、キノピオたちに聞いたなんてことのない噂話、城の改築でどこに手を加えたのか、キノじいの花壇の手の込みようがさらに上がったこと……等々、会えなかった間のことなどで話題が尽きることはなかった。

マリオたちが会話を楽しんでいると、不意に部屋の扉がノックされて声が聞こえてきた。

「お待ちせしました。姫様、衣装の準備が終わったそうです」

「そう、分かったわ。部屋に向かえばいいのかしら？」

「はい」

扉の向こうから聞こえてくるキノピオの声にピーチ姫は立ち上がりながら答える。キノピオの声が聞こえ、マリオとクツパも立ち上がり、部屋に向かう準備をする。と言つても特には準備するものもないのだが。

3人が立ち上がるのを見ながらナハトは然り気無くカップなどを片付けていった。

「さ、それじゃあ移動しましょつか！」

「うむ。少しばかりドキドキするのだ」

「マリオを魅了してあげる」

「あはは、楽しみにしておくよ」

楽しそうな表情を浮かべながらピーチ姫はマリオたちの方へと振り返る。

そんなピーチ姫の言葉にクツパは自身の胸へと手を当てながら答えた。

衣装合わせは楽しみだったのだが、それでも『自分に似合う衣装があるのか』『マリオは似合うと言つてくれるのか』と、やや不安混じりの思いもあったのだ。

カップなどの片付けをいつの間にか終わらせていたナハトはマリオに向かつて得意気な笑みを浮かべながら言う。

マリオはそんなナハトに微笑ましさを感じているのか、ふんわりと笑っていた。

そして、4人はピーチ姫を先頭に仕立て屋のいる部屋へと向かうのだった。

「そういうえば、仕立て屋ってキノコタウンの仕立て屋で良いのかい？」

「ええ、サムイサムイ村とか他のところの仕立て屋とかも考えたけど、やっぱりここに来るまでが大変でしょ？だから、キノコタウンの“サンドリヨン”に頼んだのよ」

「なるほど。確かに土管を通るにしても、他の手段で来るにしても大変であろうからな」
「クリボーとかもいるし、なにより地下はあまり清潔じゃないから」

仕立て屋のいる部屋に向かいながらマリオは改めてピーチ姫に尋ねる。

仕立て屋はキノコタウン以外にもそれぞれの町にいる。

そしてその町特有の特徴を持った衣装があるのだ。

例えばジャンボル島ならば南国をイメージした衣装、サムイサムイ村ならばモコモコとしつつも可愛らしさのある衣装と多岐にわたる。

が、当然ではあるが衣装を合わせるためにはなん着もの衣装を城に持つてくる必要がある。

そうなれば城に来るまでがかなりの重労働になり、衣装にも何かしらのトラブルが起こる可能性が出てきてしまう。

その辺りのことを考えてピーチ姫はキノコタウンの仕立て屋“サンドリヨン”を選んだのだ。

ちなみに、マリオはサムイサムイ村の仕立て屋が選ばれなくて内心でホッと息を吐いていた。

第290話

仕立て屋「サンドリヨン」の店員の待つ部屋の前に着き、マリオ、クツパ、ピーチ姫、ナハトの4人は少しばかり緊張した表情を浮かべる。

部屋の中にいるのが「サンドリヨン」の店員だと言うことは分かっているのだが、自分たちの結婚式の衣装が部屋の中にあると考えると緊張してしまうのだ。

「……………止まっけていても仕方がないわよね？」

「覚悟を決めるしかない」

「というわけで……………。行くのだ、マリオ！」

「おう！……………って、俺か?!」

ピーチ姫の言葉にナハトがコクリと頷き、クツパが扉を指差して言う。

クツパの言葉にマリオは返事をして扉を開けようとするが、すぐになにかがおかしい

ことに気づき、ツツコミをいれた。

そんなやりとりで緊張がほぐれたのか、4人の表情は柔らかいものになっていた。

「さて、改めて部屋に入ろうか」

「ふふふ、ええ、そうね」

「どんな衣装があるのか楽しみ」

「ワガハイに似合う衣装があれば良いがな」

扉を開けようとした体勢のままマリオは3人の方を振り向き言う。

先ほどまでのやりとりと、振り返っているマリオの姿がおもしろいのかピーチ姫は思わず笑ってしまった。

そして、マリオが扉を開けて全員が部屋の中へと入る。

「こんにちは！今回は私ども“サンドリヨン”にご依頼いただきありがとうございます」

「今日は頑張らせていただきますね！」

部屋の中に入ると、2人のキノピオたちが並べられた衣装の前に立っていた。

この2人のキノピオは「サンドリヨン」の店長と店員で、それぞれ『キノデレラ』と『キノリヨン』と言うニックネームで呼ばれている。

2人の言葉にマリオたちは領きながら近くへと移動した。

「それではワタクシ、キノデレラが姫様がたの衣装を選ぶお手伝いをさせていただきますね」

「ではワタクシ、キノリヨンはマリオさまの衣装選びをお手伝いさせていただきますね。当然ですが、着替えている姿はお互いに見せませんからね」

「まあ、それは当然よね」

「ちえつ、マリオの生着替えー……」

「あまりそう言ったことを言うでないわ」

「……まあ、ナハトの気持ちは分からなくもない」

キノデレラとキノリヨンに促され、4人は男女に別れて衣装の近くへと移動した。

キノデレラの言葉にナハトは残念そうに呟く。

ナハトの言葉にクツパは軽く頭を小突きながら衣装の近くへと移動していった。

そんな3人の姿を見ながらマリオはポツリと呟く。

ピーチ城の浴場で3人の裸に近い姿は見たことがある。

しかし、生着替えと言うものにはそれとはまた違った魅力があるのだ。

1枚1枚、徐々に脱がれていく衣服。

1枚脱げていく毎に見えてくる肌色。

生着替えであるために他人の視線を意識してやや赤く染まっている素肌と顔。

そして着替えるために脱いでから異なる服を着ていく。

その素肌をラッピングしていくかのように肌色が1つ、また1つと減っていくのだ。

その光景を想像するだけでマリオはドキドキとしていた。

まあ、今回はそのようなことはできないのだが。

ところで、まったく関係のない。

本当に関係のないことなのだが。

ラッピングされているものを開けていくときが一番ドキドキするのではないだろうか。

ええ、まったく、なんの意味もない関係のない話なのだが。

第291話

キノリヨンにつれられ、マリオは並べられている衣装の近くに行く。

と言つても男性の衣装と言うとスーツか和服くらいしかないので、色違いや多少のデザインの違いくらいしかないのだが。

ひとまずマリオは無難な選択として黒いスーツに着替えてみる。

着替えると言つてもキノリヨンの目の前で着替えているわけではなく、試着室のようになっている場所があるので、その中でマリオは着替えていた。

まあ、キノリヨンは慣れてるので、たとえマリオが目の前で着替えたとしても特に動揺せずに仕事をまっとうするだろう。

それはクツパたちの方に行つたキノデレラでも同じことだった。

普段の格好とは異なる姿にどこかシュツとした印象を受ける。

「ん、似たような格好を前にもしたからまだ着やすいか」

「お似合いですよ」

マリオが思い出すのは帽子の友人キャツピーと冒険をしていたときのこと。

あのときもクツパがピーチ姫を拐って救出に向かっていたのだ。

そしてその旅路の途中でマリオは白いスーツを着ていた。

ちなみにその旅の途中でマリオはドレスを着れるようなタイミングがあったのだが、マリオは着ていない。

着ていないのだ。

そう、あのときはキャツピーの口車に乗せられそうになっていただけで、着ていないと言ったら着ていないのだ。

「・・・・・・・・黒歴史」

思い出したくないことを思い出してしまい、マリオはやや暗い空気を出す。

暗い雰囲気のマリオにキノリオンは不思議そうに首をかしげながら次の衣装を準備していた。

「どうかしましたか？」

「いや、なんでもない……」

「そうですか？……では、次はこちらの衣装でどうでしょうか？」

マリオの様子に首をかしげつつも、キノリオンは次の衣装をマリオに差し出した。

キノリオンの差し出した服は和服でいわゆる袴と呼ばれる服だった。

キノコ王国ではあまり見ない種類の服ではあるが、それでもマリオは着た経験があったので問題なく袴を着ていく。

「ううん……着ることはできるんだけど、なんか落ち着かない……」

「ここら辺ではあまり見ない衣装でしたが、問題はなさそうですね」

袴に着替え終わったマリオはどこかソワソワと落ち着かない様子でしきりに自分の格好を見回していた。

キノリオンはマリオがきちんと袴を着ていることに少しだけ驚いていたが、ちゃんと着れることは別に悪いことではないので、そのまま流していた。

「そうですね……、一度、姫様たちに見てもらいますか？」
「まあ……、似合っているかも聞きたいかな」

キノリヨンの言葉にマリオはゆつくりと頷く。

自分では分からないことや、気づけないことを聞けるかもしれない。

そう考えてマリオはクツパたちに自分の格好を見せることを決めた。

あと、3人がどんなウエディングドレス姿をしているかを見ると言う目的も心の中にあった。

第292話

マリオが衣装を試着をする少し前に時間は巻き戻る。

キノデレラに促され、クツパ、ピーチ姫、ナハトの3人は並べられている衣装の前に移動した。

並べられているのは様々な種類のドレスに白無垢。

その種類は男性のものに比べて明らかに多い。

まあ、それに関しては普段着でも女性ものの方が量が多いので当然のことなだろう。

「すごい量ね……………」

「ほう……………」

「ドレスがいっぱい」

「ふふふ、驚かれましたか？姫様たちの衣装ということで張り切らせていただきました」

並べられている衣装を見ながら驚いている3人にキノデレラは嬉しそうに答える。

目の前に並べられているのは女性がもつとも夢見ているであろう瞬間に自身を飾ってくれるもの。

それらが並べられていることに3人は感心したように頷いていた。

「では、皆さま自分たちが気になるドレスを着てみてください」

「ええ、そうさせてもらおうわ」

「では、ワガハイは向こうのやつを見てみようかな」

「なら、私はあっち」

キノデレラの言葉に3人はそれぞれ自分たちの気になるドレスのもとへと移動した。

ピーチ姫は薄いピンク色や純白といったウェディングドレスとして一番に思い浮かべられるもの。

クツパは黒や緑といったあまりウエディングドレスとしては使われなさそうなもの。

そしてナハトは白無垢などの和服のものが置いてあるところに行っていた。

3人の好みというか、個性が出ていると思われる。

「んー、やっぱり純白のほうが良いのかしら」

「黒だと普段の服と被るか……?」

「白無垢……、和装はそこまで多くない?」

3人は自分たちが気になったドレスなどを手に取りながら感想を言っていく。

ピーチ姫の持っているウエディングドレスは純白のもので、定番のものでありながら、いまだ衰えぬ根強い結婚式としての印象を持っているもの。

定番中の定番ではあるのだが、それでも確立された美しさのあるドレスだと言えるのではないだろうか。

クツパの持っているウエディングドレスは黒色のもので、どこか怪しい雰囲気を感じさせる作りとなっている。

黒い色のドレスということで暗い印象になってしまいかと思われるドレスだが、クツパの煌めく金髪と組み合わせクツパ自身の魅力を引き上げるものとなるだろう。

ナハトの持っているのはウエディングドレスとは異なり、和装の白無垢。

どうやらキノコタウンなどであまり見かけないタイプの服だったために気になったらしい。

3人はそれぞれドレスを手にとると、近くにある試着室のようになってい場所へと入っていった。

第293話

3人が試着室のようになっていている場所へと入って行ってしばらくしたとき、キノリヨンがキノデレラのもとへとやって来た。

さすがにマリオはついてきておらず、衣装のところで着替えずに他の衣装を見ていた。

「マリオさまの着替えた姿を姫様方に見せたいのですが、試着中ですか？」

「ええ、先ほど試着に。もう少ししたら出てきてもらえるとと思うのでもう少し待っていてくれるかしら」

クツパたちの姿がないことに気づいたキノリヨンはキョロキョロと視線を動かしながらキノデレラに尋ねる。

キノリヨンの言葉にキノデレラは頷き、クツパたちが入っていった場所を指差した。

3人が試着中なのだど理解したキノリオンは納得したように頷いた。

「念のために言っておくけど、姫様たちが出てくるまではこつちに来てはダメですからね？」

「それはもちろんです。では、向こうでマリオさまと待っていますね」

そんなことをするとは思っていないが、キノデレラは念のために注意を言葉にした。

そう、キノコタウンの英雄であるマリオがそんなことをするはずがないので、本当に念のための言葉だ。

それが分かっているので、キノリオンも軽く笑みを浮かべながらマリオのもとへと戻っていった。

なお、マリオが待っている間に微妙に女性陣のエリアのほうへと近づいていたことに他意はない。

そちら側に気になる衣装があっただけで他意はないのだ。

「やっぱり和装は合わない気がするんだよなあ……」

「それを姫様たちにも見ってもらって意見を聞くのでしょうか？もう少して姫様たちの試着

も終わるのもうしばらくお待ちください」

キノリヨンが戻つてくると、マリオは何やらぎこちない動作で並んでいる衣装を見ていた。

ぼやくように呟いているマリオの姿にキノリヨンは苦笑を浮かべながら答える。

マリオのぎこちない動作には特にはなにも感じていないようだ。

「そういえば……」

チラリ、とスーツを見ながらマリオは考える。

目の前にあるのは黒いシンプルなスーツ。

そして次に頭に浮かんできたのはクツパの姿。

クツパはスタイルもよく、マリオよりも身長が高い。

そんなクツパがもしもスーツを着たとしたら……

そこまで考えてマリオは頭を振って思考をかき消した。

そのまま考えていたら、何やら自分のコンプレックスになっっている部分に直撃しそうだ。勘が働いたのだ。

「どうかしましたか？」

「いや、なんでもない．．．．．」

いきなり頭を振ったマリオに驚き、キノリオンは思わず声をかける。

キノリオンの言葉にマリオは軽く手を上げて答えた。

それから、キノデレラが呼びに来たのは数分後のことだった。

第294話

キノデレラに呼ばれ、マリオとキノリヨンは女性陣のいる場所へと向かう。

マリオとキノリヨンが女性陣の衣装の置かれている場所に着くと、そこにはドレスな
どに身を包んだクツパたちがそこにいた。

「これは……」

「3人ともとてもお似合いですね。そう思いませんか？」

「あ、ああ……」

黒いウエディングドレスに身を包んでいるクツパ。

純白のウエディングドレスに身を包んでいるピーチ姫。

そして和装に身を包んでいるナハト。

三者三様の美しさがそこにはあった。

3人の姿を見て、マリオは思わず言葉を失ってしまふ。

マリオが言葉を失ったのは別に3人の格好が似合わなかったからだとかそういう理由ではない。

むしろその逆で、3人があまりにも綺麗でうまく言葉にすることができなかったのだ。

キノリヨンに同意を求められ、マリオは短く返事をするこゝろできなかった。

「さ、3人ともとても似合っているよ」

「そうかしら。ありがとう」

「む、なんというか嬉しいものだな」

「嬉しい」

どうにかこうにか思っていることを3人に伝えると、3人は嬉しそうに頬をほんのりと染める。

3人が嬉しそうにしているのを見てマリオも少し恥ずかしさが出てきたのか、同じように頬を染めていた。

「つと、マリオも試着していたのね」

「ふむ、和風なのだな？」

「お揃いで嬉しい」

「ああ、スーツの方は何回か着たことがあったから気になってね」

しばらくの間、頬を染めていた3人は落ち着いてくるとマリオの格好に気がつく。

マリオの格好は白無垢の対となる袴であり、普段ではあまり見ないものとなっている。

なので3人とも興味津々といった様子でマリオのことを見ていた。

「どうだろ、自分ではなんだか合わないような気がしてるんだけど……」

「そうかしら。似合っていると思うわよ？」

「普段の格好と違うからな。それで違和感があるのではないのか？」

「カッコいいと思うよ」

自分の格好をキョロキョロと見回しながらマリオは3人に尋ねる。

どうにも袴に違和感を感じてしまい、それがどうしても気になってしまうのだ。

「それなら、まあ、嬉しいけど」

「まだ他にも衣装はあるんだし、他のものも試してみたらどうかしら？」

「時間にも余裕はあるわけだから、結論を出すのもまだ先で良いだろう」

「その格好なら嬉しいけど、マリオが着たいものを選んでくれると嬉しい」

3人の言葉にマリオは鼻の頭を掻きながら顔を逸らす。

その仕草が照れ隠しであると見抜いた3人は微笑ましそうに笑うのだった。

第295話

様々な種類の綺麗なドレスを着替え、見ている他の3人に意見を聞きながら楽しそうにマリオ、クッパ、ピーチ姫、ナハトたちは衣装合わせを進めていく。

最近は特に仕事が集中していたことも含まれているのだろうが、4人の表情はとても明るい。

「ん………つと、とりあえず私はこのドレスかしら」

「ふむ、ワガハイはこれかな」

「私はこれにする」

「3人も決まったみたいだね」

3人がそれぞれドレスを手にとったのをマリオは少しだけ疲れた表情で見ている。

別に、衣装合わせが辛いというわけではないのだが、それでもやはり何着も衣装を見

て意見を言うのは気づかないうちに疲労が溜まっていくのだ。

それに3人の普段では見れないような美しい姿が見れるのだから、これくらいは必要経費だと割りきってしまうしかないだろう。

ちなみに3人が手にとったドレスは、ピーチ姫が純白のもの、クツパが薄い黄色のもの、ナハトが黒色のものだ。

なお、マリオに関しては衣装の種類も量も女性陣とは比べ物にならないほど少なかった。比較的すぐに黒のタキシードに決まっていた。

「おや？お色直しはしないのですか？」

「せっかく、たくさん用意したのですからどうですか？」

「ううむ……。ワガハイの城でも式をあげたいんだがなあ……」

「お色直しをしていたら移動も遅くなっちゃうから……」

「まあ、こっちだけで式をあげるのもかわいそうなものね」

「でも、同じドレスで式をあげるの？」

2着目のドレスやタキシードを選び始めないマリオたちにキノデレラとキノリヨンは不思議そうに尋ねる。

結婚式といえは途中で新郎新婦が着替えるお色直しもなかなかに見ごたえのあるものだろう。

2人の言葉にクツパは唸るように声を漏らす。

可能ならお色直しもしたいのだが、お色直しをしていては自分の城で式をあげるのが遅くなってしまう。

その事が気になって選び始めることができていなかった。

クツパの言葉にマリオたちも顔を見合わせて呟く。

クツパ城にはクツパの配下たちがおり、彼らにもクツパの晴れ姿を見せてあげるべきだろう。

その事を考えてピーチ姫も腕組みをして頭を悩ませる。

と、そこでナハトの呟きに全員の視線がナハトに集まった。

「この城から移動するのにドレスのまままで移動はしないでしょ？」

「まあ、汚れちゃうからしないわね」

「できなくはないが、やる必要はないな」

「クツパの城を近くに飛ばせなくはないだろうけど、それだとキノコタウンのみんなが落ち着かないか……」

「だから、その時に着替えるんだろうから次の服を持っていくか、クツパの城に置いておけば？」

「「それだ!!」」

まさに目から鱗といった様子でマリオ、クツパ、ピーチ姫はナハトを見て叫ぶ。

そして、そうと決まれば話が早いとばかりにもう一着の衣装を選び始めるのだった。

第296話

2着目の衣装も選び終わり、4人、特に女性陣は満足そうな表情を浮かべている。その近くではマリオが若干ぐったりとしながらもホツとした表情をしていた。

「では、姫様たちの衣装も決まりましたので片付けてしまいますね」

「皆さまが満足のいくドレスを選んでよかったです」

「今日は本当にありがとう。こんなにたくさんの衣装も用意してくれて楽しかったわ」

「うむ、こんなに衣装があるとは思わなかったのだ」

「……………どうやってここまで運んできたの？」

満足そうにしている3人の表情を見ながらキノデレラとキノリオンは嬉しそうに言う。

自分たちがこの仕事をしているのはこんな風にお客が笑顔になっているのを見るた

め。

そのためならばこの衣装を運ぶことなど苦ではない。

そんなキノデレラとキノリヨンの言葉に3人はお礼を言う。

「そういえば、今さらだが何故仕立て屋の名前が『サンドリヨン』なのだ？」

「確か………シンデレラの別の呼び名じゃなかったかしら？」

「カボチャの馬車とガラスの靴の？」

衣装合わせも終わり、時間的にも余裕の出してきたクツパはふと気になったことを尋ねる。

どちらかといえばサンドリヨンよりもシンデレラという名前の方が有名なのだから、憶えやすさを考えるのならシンデレラの方を仕立て屋の名前に使うべきではないのか。

クツパの言葉に同じようなことを思っていたのか、ピーチ姫もサンドリヨンの名前がシンデレラの別名なことを口にする。

「私たちの店の名前ですか？」

「そこまで深い意味はないですよ？」

「そうなのか？」

「どんな意味を込めてその名前にしたのか教えてくれるかしら？」

「シンデレラの話って詳しくは知らない」

クツパの言葉にキノデレラとキノリヨンは不思議そうに首をかしげる。

「どうやら店の名前を聞かれるとは思っていなかったらしい。」

「えっと、うちに依頼してくれたお客様がシンデレラのように変身をして美しくなっていただければと」

「私たちはもともと同じ服飾の学校に通っていて、そのときにすでにお互いにも今呼び名で呼ばれていたっていうのもありますね」

「なるほどな。だが、それならばなおさらシンデレラの方があっていたのではないか？」

「シンデレラは簡単に話すと、女の子が虐められて、魔女が現れて、服を着替えて、王子さまと踊って、靴を落として、義理の姉2人の足が切り落とされて、女の子が王子さまと結ばれる話だよ」

「………本当は怖い童話？」

「そういえば本によつてはそんな内容だったわね………」

クツパの尋ねている隣でマリオがナハトに簡単にシンデレラの内容を教える。

途中までは案外普通の内容だったのだが、いきなり足が切り落とされると言われ、ナハトですら表情がピシリと固まってしまっていた。

「あ、あー……、最初はシンデレラにしようかって話してたんですけど……」
「私の呼び名に近いのが入ってるって考えたら恥ずかしくなりましたよ」

「そういうことか。あとマリオ、修正されている部分をわざわざ説明するでない……」
「あ、すまん」

マリオの簡単なシンデレラ説明にキノリヨンとキノデレラは苦笑いを浮かべながらシンデレラにしなかった理由を話していく。

2人の言葉にクツパは頷きつつ、マリオの説明に苦言をするのだった。

第297話

「サンドリヨン」の名前の理由の話も終わり、キノデレラとキノリヨンは並べている衣装の片付けを始める。

2人が片付けを始めてやることもなくなり、マリオたちは部屋に戻ることを決めた。

「それじゃあ、2人とも本当にありがとうね」

「いろいろと着れて楽しかったのだ」

「次はガラスの靴も見てみたい」

「ガラスの靴は実際にはくと危なさそうだけど……」

片付けをする2人に声をかけながらマリオたちは部屋をあとにする。

マリオたちに声をかけられ、2人は片付けをしながら手を振っていた。

「それにしても、マリオは修正される前の話を知っていたのだな？」

「まあ、怖い内容ばかりだけどなかなか面白くてね」

「と言うか、修正前の話はどれも怖いよね」

「他にはなにか知ってる？」

ピーチ姫の部屋に向かいながらマリオたちは雑談をする。

話の内容はマリオが知っていた本当は怖い童話だ。

マリオが先ほど話していたシンデレラと同じように、他の童話にも修正されている怖い部分がある。

どうやらピーチ姫もある程度は知っているようだ。

「そうだなあ。白雪姫の王子さまが死体愛好家だったり……、赤ずきんでおばあちゃんは喉を食い破られて死んでいたとか……、ヘンゼルとグレーテルの魔女は2人の母親だったとか……」

「ストップ、ストップ！」

「怖い怖い怖い怖い怖い怖い?!?!」

「……私は修正版で十分かな」

やや暗い表情でマリオは知っている童話の怖い部分を言いあげていく。

マリオの表情があまり見たことのないものになっていることと、話している内容が怖いことにピーチ姫とクツパは慌てて話を遮る。

そんなマリオたちの姿を見ながらナハトは思わずといった様子で原本を読むのは止めておこうと心に決めていた。

「マリオ? その、童話を読んでなにかあったのか?」

「どう見ても普通の様子じゃなかったわよね ?」

「いや、童話の内容は面白かったんだけど おもつくそダークで正気度がけっこうガリガリと削られてな」

「そんなに?」

あまりにもマリオの様子がおかしいので、ピーチ姫とクツパは本当にマリオは童話を読んでいたのか気になった。

実はマリオの読んだ本はネクロノなんちやらだとか、ほにやらの異本だとかではないのか。

2人の言葉にマリオはアハハと乾いた笑いを浮かべながら答える。

「ああ、仮にゲームにしたら登場人物が全部ボスクラスで実装されそうなほどに……」
「聞いている限り、えげつない難易度になりそうではあるな……」

マリオの言葉に一緒によくゲームをするクッパはげんなりとした表情を浮かべながら答えるのだった。

第298話

マリオの知っている本当は怖い童話を聞いたことによつて精神的に少々のだめージを負いながら4人はピーチ姫の部屋まで戻ってきた。

部屋の前に着いたピーチ姫はクルリと3人の方へと向き直る。

「さ、衣装も決まったのだし、あとはいつやるかを話し合うとしましょうか」

「そうだな。全員の仕事を休めるように仕事の調整とかも必要であろうし……」

「私は普通に休めるからいつでも問題なし」

「それを言うなら俺も結婚式になるわけだから臨時休業つてできるかな。まあ、何日か前から告知は必要だけど……」

部屋の中に入りながら結婚式をする日付を話し始める。

4人の中で、ナハトとマリオはある程度までなら自由に休みを作ることはできるの

で、そこまで困っている様子はない。

が、クツパとピーチ姫は違う。

クツパとピーチ姫の2人は自分の城や国の運営について考えたり、クツパならば配下であるクリボーやノコノコ、ピーチ姫ならばキノピオたちの仕事の割り振りなど、やらなければならないことが大量にあるのだ。

それならばなぜ今日は休みなのかと思うかもしれないが、その辺りはカメックおばやキノじい調整をしているので問題はないのである。

「そうねえ……、結婚式の日だけ休みっていうのも、ねえ？」

「うむ、寂しいものがあるのだ」

「その辺りはキノじいたちに相談するしかないかな？」

「個人で決められないのは大変」

カレンダーをチラリと見ながらピーチ姫は呟く。

結婚式をおこなうにしても当日だけやって翌日にすぐにまた仕事ではなんとも味気がない。

可能ならば最低でも翌日くらいは全員で一緒にすごしたい。

ピーチ姫の言いたいことを理解したのか、クツパも同様に頷いた。

まあ、その辺りの話になると詳しいことはキノじいやカメツクおばばに相談するしかないで、今ここでは決められないことだった。

「そういえば城の装飾の方はキノピオたちに任せて良いんだっけ？」

「キノじいがそう言っていたから大丈夫だと思う」

「ならばその辺りは気にしなくても良さそうだな。ならば、やはり後は日付か……」
「んー……、最低でも2日は休みが欲しいわけだし、半月後辺りにできるかしら？」

結婚式での城の装飾について確認をすると、その辺りはキノピオたちがやってくれるのだとナハトが答えた。

加えて言うなら料理のことなどもキノピオたちがやってくれることになっている。と、ここでピーチ姫の言った半月後という言葉にマリオが反応をする。

「そ、そんなに簡単にいくかな？ ほら、余裕をもつて一ヶ月後辺りがいいんじゃないかな？」

「そうかしら？ 頑張れば行ける気がするのだけど」

「ワガハイの方もそうだな」

「いやいやいや、何があるか分からないんだから。万全を期すべきだろう？」

マリオはどうか日付を半月後から延ばそうと提案する。

なぜならマリオの依頼している指輪が半月ではまだ完成していないからだ。

そんなマリオの思いも知らず、クツパとピーチ姫は日付の話し合いを続けるのだった。

第299話

結婚式の日付の話し合いは続く。

無理のない程度に近い日付で結婚式をあげたいクツパとピーチ姫。

指輪の完成の期日を考えたと可能ならば一ヶ月は先にしたいマリオ。

そして、特にはなにも考えずにお菓子を食べているナハト。

「1日の仕事の量を少し増やせば半月と少しくらいでいけそうな気はするのよねえ」

「であるな。まあ、当日の仕事の量にはばらつきもあるにはあるが、それも誤差の内であろう」

クツパとピーチ姫の1日の仕事の内、当日に入ってくるものは6割ほど。

それ以外の仕事は前日には分かっているもの。

その4割の仕事を少しづつでも進めていけば休みを作ることこそそこまで難しいこと

ではないだろう。

加えて言うなら当日に入ってくる仕事も大半が配下たちの休暇の申請や、城などの不備の報告なので、すぐに終わらせなければならぬと言うものはそこまで多くはない。

そんな2人の話している内容にマリオは内心で汗をだらだらと流す。

このままでは指輪が完成する前に結婚式をあげることになってしまう。

マリオにとってそれだけは回避したいこと。

確かに、指輪のことを伝えてしまえば特に反対もなく日付を遅くすることはできるだろう。

しかしマリオとしてはできる限り指輪のことは秘密にして、3人のことを驚かせたいと考えている。

指輪のことを言わずに日付を遅くしてもらうにはどうすればいいのかマリオは思考していく。

「い、いや、不確定要素とかもあるわけだし……」

「むう、さつきからどうしたのだ？」

「なんだか日付を延ばしたいみたいなのに聞こえるわよね？」

「そ、そんなつもりはない……ぞ？」

どうにか日付をずらそうとすることが不審に思われたのか、クツパとピーチ姫は揃ってマリオの顔をじつと見つめる。

やましいことがあるわけではないのだが、それでも秘密にしていることがあるので、どこか気まずさを感じながらもマリオはなるべく平静をよそおいながら答えた。

そんなマリオの言葉にクツパとピーチ姫は小さく首をかしげる。

どうやら何かしらの違和感を感じているようだが、確信には至っていないようで、マリオの誤魔化しはうまくいったようだった。

「まあ、マリオの言っていることも理解はできるのよね……」

「まあな。不足の事態を想定することも大切だとは思わがな……」

ふう、と小さく息を吐いてクツパとピーチ姫は先ほどまでの自分たちの意見とは別のことを口にする。

2人としても別にマリオの意見を否定するつもりはないのだ。

マリオの言うように突発的に仕事が入ってくることもあるし、もしかしたら急な天災が起こる可能瀬ももちろんある。

まあ、天災に関しては本当に低確率だが、それでも想定をしているだけでかなり変わることは確かなのだ。

とは言え、それで結婚式の日付を遅くすることを許容できると聞かれて簡単に頷けるわけではないのだが。

その辺りは好きな男性と、結婚という明確な繋がりを得たいという乙女心のようなものだろう。

第300話

お茶を飲みながらマリオ、クツパ、ピーチ姫の3人は一息をつく。

ナハトに関しては最初の方からマイペースにお茶を飲んでお菓子をかじっていたので、だらけていたと言ってしまうても過言ではない。

「ふう・・・・・・・・・・。さて、結局どうしましょうか？」

「むむむ・・・・・・・・・・。そうだなあ・・・・・・・・」

「結局、どの日付にしても突発的な仕事が入る可能性は0じゃないもんな」

お茶を飲んだことによつて落ち着いたのか、のんびりとした様子でピーチ姫は話を切り出す。

マリオの言っているように突発的な仕事が入ってくる可能性は0ではないのだが、それを言い出してしまつては日付を決められなくなつてしまう。

そんな風に話し合いを続けているマリオたちを見ながら、おもむろにナハトはカップから口を離して呟いた。

「日付も大切かもしれないけど、一番重要なことがある」

「重要なこと？」

「今までお茶を飲んだのに急に話し出したわね……」

「本当にマイペースであるな……」

お茶を飲んで会話に参加してこなかったナハトが急に話し始めたことにマリオたちは少しだけ驚いた表情を浮かべながらナハトの方を見る。

今まで会話に参加をしていなかったのだからその反応も仕方がないことだろう。

そんなマリオたちのことなど気にした様子もなくナハトは言葉を続ける。

「誰が最初にキスをする？」

「えっ？」

「あっ！」

「ぬっ！」

ナハトの言葉にマリオはポカんとした表情を浮かべ、クツパとピーチ姫はハツと気づいた表情を浮かべた。

ナハトの言うキスとは結婚式でおこなう誓いのキスのことであり、マリオたちの結婚式では新郎は1人だが、新婦は3人もいる。

そのために誓いのキスは順番にすることになってしまうのだ。

「そうね・・・・・・・・。確かに一番重要なことだったわ・・・・・・・・」

「そうであるな・・・・・・・・」

「え、ちよ・・・・・・・・」

ゆらり、とクツパとピーチ姫は椅子から立ち上がる。

それに合わせてナハトも無言で立ち上がった。

3人の不穏な気配を感じ、マリオは思わず椅子に座りながらも後ずさってしまふ。

「ふふ、なんで今の今まで気づかなかったのかしらね・・・・・・・・」

「うむ。よくよく考えればすぐに思い至っても良かったはずなのだがな・・・・・・・・」

「別にまた忘れててもいいよ。私が最初にキスをするから」

向かい合いながら3人は火花を散らす。

別にマリオは3人に優劣をつけるつもりはないのだが、それでもそう考えてしまうのは仕方がなことなのだろう。

火花を散らす3人の姿にマリオは今すぐに逃げ出したい気持ちになるのだった。

なお、本当に逃げ出した場合は3人の怒りを買うことになるのでおすすりはできない。

第301話

“KISS” “キス”

それは人間など何種類もの動物がおこなう親愛表現であり、一般的に男女、または動物の雄と雌が唇を重ねることを指すことが多い。

そして、キスはする場所によっても微妙に異なる意味をもってくる。

もつともポピュラーなのが唇と唇のキスで、恋愛感情の表現としての意味合いが強い。

漫画などでは特定の登場人物同士が恋人となる瞬間、主に結ばれるゴール地点として描かれていることが多いのではないだろうか。

もしくは人目につかない場所でキスをしようとして第三者が乱入してきて未遂になるというのも定番と言えるだろう。

では、漫画などではなく現実ではどのように考えられているかと言えば、実はそこまですぐ違っているものではない。

どちらにしてもキスと言うのは恋愛感情の表現をもっともしやすいい行為だと言えるだろう。

閑話休題

それはさておき

結婚式において誓いのキスと言うのは普通のキスとはまた異なったものと考えられる人が多いと思われる。

であるならば、クツパ、ピーチ姫、ナハトの3人が誰が最初に誓いのキスをするのかで争ってしまうのも仕方がないことなのだと言えるだろう。

「はあ……………はあ……………」

「く……………ツ……………」

「む……………」

膝をつき、向かい合った3人は乱れた息を吐きながら互いに睨み合う。

すでに何度の手を出したのだろうか。

どちらか1人に勝てる手を出せば、もう1人に負けてしまう。

どちらか1人と同じ手を出したかと思えば、もう1人も同じ手を出している。

時間だけを見るならばそれほど経過はしていないのだが、3人は一戦一戦に凄まじい集中をして手を出しているのです、その時間が何倍にも感じられていた。

「いい加減に……はあ……諦めぬか……」

「いや、よ……はあ……それにあなたは……マリオとキスをすでにしているじゃない……」

「2人とも……しつこい……」

誰1人として脱落しないことにクツパは焦れつたくなり、思わず悪態をついてしま
う。

そんなクツパの言葉にピーチ姫はクツパのことをジトツと睨み付けながら答える。

そう、ピーチ姫の言うとおり、この3人の中でクツパだけが唯一マリオとすでにキス
をしているのだ。

それゆえにピーチ姫とナハトは決して負けたくないと思っている。

ピーチ姫の言葉にナハトの視線も鋭さを増してく。

もしも下手な言い訳をすればひどい目に遭うことは確実だろう……他の誰で

もなく、
マリオが。

第302話

止まらぬ手。

衰えることを知らないとでも言うかのようなその氣迫。

クツパ

ピーチ姫

ナハト

その3人の肉体は何度も繰り返した動作によって等しく疲労が溜まっている。

しかしその目に宿す光に陰りは一切見えない。

けっして自分は目の前にいる2人には負けない、と。

必ず、自分は勝利し一番になるのだ、と。

そんな思いが3人の目からはうかがえた。

「あい……………」

「こで……………」

「しょ……………!」

疲労も溜まっており、その言葉にはすでに力を感じられない。

しかし、それでも誰一人として引くことはなく手を出す。

それほどまでに疲れてでも諦めることをしない3人の姿に、マリオは少しだけ怖く思いつつも、自分のことをそれほどまでに思ってくれているのだと嬉しくもなっていた。

「ぬ……………ぬおおおお!!」

「く……………負けない!!」

「か、勝つのは……………私!!」

「……………ッあ?!」

大きく声をあげながら3人はもはや何度目になるか分からないほどに繰り返された動作で手を出す。

出された3人の手を見て、マリオは思わず声をあげてしまう。何度も繰り返されてきた行為。

しかし、その繰り返されてきた行為についに変化が訪れたのだ。

マリオの目の前に出されている3人の手は、グー、チョキ、そして……キ。

つまり1人が勝ち抜けることが決まったのだ。

手を出している3人もいまだに理解が追いついていないのだろう。

3人は自分たちの手が出してどんなことになったのかをゆっくりと飲み込んでいた。

「これは……」

「まさか……」

先に理解したのは意外なことにチョキを出していた2人だった。

2人は手を震わせながら自分の手を見つめている。

なぜ自分はこの手を出してしまったのか。

2人の口から漏れた言葉からはそんな思いが感じられるようだった。

そして、ここでようやくグーを出した最後の1人。

つまりは勝ち抜けた1人がようやく自分が勝利したことを理解したのだろう。

彼女は自分の手を震えながら見るとポロポロと涙をこぼし始めた。

よほど嬉しかったのだろう。

彼女は自分のグーを出した手を大事そうに抱え込んで体を震わせていた。

「やった……. . . . やったのだ!!」

負けたことは悔しいが、それでも真剣勝負で挑んで負けた結果。

喜びに震えている彼女、クツパを見ながらピーチ姫とナハトは悔しそうにするも文句を言うことはなかった。

ところで、なぜマリオに誰から誓いのキスをするのかを決めてもらわないのか気になっっている人もいるだろう。

もしかしたら忘れている人もいるかもしれないが、マリオはヘタレである。

そんなマリオが3人に誰から誓いのキスをするのかを決めてほしいと言われればどうなってしまうのか。

そんなことは考えるまでもなく単純明快。

答えは、優柔不断に誰も選ぶことができずにモゴモゴと口を動かすことしかできなくなる、ということだ。

クツパ、ピーチ姫、ナハトの3人がマリオに迫ることなくじゃんけんをすぐに始めたのもそういうことをなんとなく察していたからではないだろうか。

第303話

涙を流し、体を震わせているクツパ。

そんなクツパのことをチラリと見てから、ピーチ姫とナハトは静かにじゃんけんをおこなっていた。

すでに誓いのキスの一番はクツパに決まっているのだが、それでもせめて二番目くらいにはなりたいのだろう。

しかし、すでに一番が取られていると言うこともあって、ピーチ姫とナハトのじゃんけんにはそこまで気迫を感じられなかった。

「じゃん、けん……」

「ぽい……」

やや沈んだ声ではあるものの、2人はきちんと手を出す。

その手を出す速度も先ほどまでと比べれば明らかに遅く。それほどまでに落ち込んでいるのだろうと言うことがわかる。

「あいで……」

「しょ……」

あいこになり、もう一度2人は手を出す。

ピーチ姫の出した手はチョコキ。

それに対してナハトの出した手は……パーだった。

今度は先ほどのクツパを入れた3人でのじゃんけんとは異なり、すぐに決着が着いた。

あまりにもアツサリとした決着だったために、それほどまでシヨックは大きくないのかナハトは静かにピーチ姫のことを見ていた。

「……悔しい」

どうやら、シヨックが大きくないというのは勘違いだったらしい。

よくよくナハトの顔を見てみれば、目尻は下がっており、体も触れたりしなければ分からないレベルで震えていた。

ナハトは表情の変化が少ないために分かりにくいですが、それでもじゃんけんで負けてしまったことはショックだったようだ。

そんなナハトの顔を見ながらもクツパはなにも言わない、なにも言えない。

じゃんけんに勝利して喜びつつもクツパは理解していた。

勝負を言うことは勝者と敗者がいるということ。

そして、自分が勝ったのだから必然的に相手は敗者であるということ。

ならば勝者である自分が敗者であるナハトになにか言葉をかけるのはなんの慰めにもならず、ただただ傷を抉るだけになるのだとクツパは分かっていた。

「・・・・・・・・次は・・・・・・・・負けはない・・・・・・・・」

自分から話題に出したことでもあつただけに、文句だけは言わないらしい。

そう言い残してナハトは部屋から出て行ってしまった。

全員が納得のいくような方法はなかったのだろうか。

ナハトの出ていった扉を見ながらクツパはボンヤリと考えるが、すぐに頭を振ってそ

の考えを打ち消した。

もしもそんな方法があるのだとしたら、それはマリオが3人に増えるといった非現実的な方法くらいしかないからだ。

第304話

部屋から出て行ってしまったナハトのことが気になり、マリオはどこか落ち着かなそうに体を揺らしていた。

とても落ち込んでいる様子だったから、慰めに行った方がいいのだろうか。腕を組み、マリオは頭を悩ませる。

果たして自分が行って良いものなのだろうか。

一応、3人の間での真剣勝負だったのだから自分が話しかけるのはおかしいのではないか。

そんなマリオの様子をクツパとピーチ姫はジッと見ていた。

「うむむむ……」

「マリオ、悪いのだけどナハトのことをお願いしても良いかしら？」

「ワガハイたちではダメそうなのだな」

「……分かった。行ってくるよ」

マリオが悩んでいると、クツパとピーチ姫が静かにナハトの消えた扉の方を指差しながら言う。

2人も自分たちが負けるつもりはなかったのだが、それでもナハトの落ち込む様子を見て少しだけかわいそうに思ったようだった。

2人の言葉に、マリオはナハトのもとへと向かう決心が着いたのか、座っていた椅子から立ち上がって扉の向こうへと向かった。

「……勝負とはいえ、かわいそうであつたな」

「まあ、仕方がないことだったのよ」

お茶を口に運びながらクツパはポツリと呟く。

思い浮かぶのは当然ながらナハトのこと。

言い出しつぺの法則が働いたのではないか、とすら思えてきていた。

マリオにはどうにかナハトのことを慰めてほしい。

そう信じてクツパとピーチ姫はお茶を飲んで待つのだった。

所変わって部屋から出ていったナハト。

ナハトは気落ちした様子で自分の部屋に戻っていた。

「はあ………」

自分のベッドにうつ伏せに横になりながらナハトはため息をつく。

自分が言い出したことであつたし、じゃんけんなのだからほとんど運もあつた。

それは理解できているのだが、それでも心では納得ができていなかった。

なぜ自分は負けてしまったのか。

そんな思いがナハトの中でぐるぐると渦巻いていた。

「ナハト、大丈夫かい………?」

「マリオ………。うん、大丈夫」

不意に部屋の扉が叩かれ、マリオの声が聞こえてきた。

マリオの声にナハトはゆっくりとベッドから起き上がる。

ナハトの言葉にマリオが部屋の中に入ってきた。

「その、なんだ……。あまり落ち込むなよ？」
「でも……、私が最後……」

マリオがそれくらいで序列のようなものを作るような人間ではないことは分かっている。

だが、それでも気になってしまうのだ。

そんなナハトの様子が分かったのか、マリオは不馴れながらもナハトを慰めるのだった。

第305話

マリオに慰められたからか、ナハトもどうかいつもの調子に戻っていた。

……というか、戻りすぎていた。

「マリオ……」

「あ……、離してくれないかなあ……」

背後からがつしりとマリオに抱きつきながらナハトはマリオの顔にすりすりと自分の顔を擦らせていた。

その様子はさながらマーキングをする動物のようにも見える。

そんなナハトの行動にもマリオはもはや慣れたもので、そこまで動揺した様子もなく対応していた。

「結婚式での誓いのキスは最後になった。だからこれくらいの埋め合わせは必要」
「……………もう、好きにしてくれ」

漫画ならばキリッ、とでも聞こえてきそうなほどにいい表情でナハトは言う。
なにを言っても離れることはなさそうだと察したマリオは短く息を吐きながら諦めるのだった。

所変わってピーチ姫の部屋。

ナハトのことをマリオに任せた2人は結婚式の日付についての話し合いを振り返っていた。

「それにしても、どうしてマリオは1ヶ月前にしたいのかしらね？」

「まあ、あそこまで言われたら少し気にはなるな」

話し合いを振り返って気になるのはやはりマリオが結婚式の日付を遅らせようとしていたこと。

ピーチ姫やクツパからすればできるなら早く結婚式をあげたいと考えているのに、な

ぜかマリオは結婚式を遅らせようとしていた。

マリオがなにを考えているのかは分からないが、悪いことをしているわけではないことだけはなんとなく分かっている。

マリオの言葉を思い返しながら2人は首をかしげる。

「うーん……ダメね。私の方はマリオが遅らせようとする理由に見当がつかないわ」

「むう……、ワガハイの方も思いつかないのだ」

「少しだけ考えてはみたが、それでもやはりマリオがなにを考えているのか思いつかない。」

「まあ、マリオ自身もなるべく誰にも気づかれないようにしているので、なにをしようとしているか分かられても困るのだが。」

「ま、考えても分からないんだし、良いんじゃない？」

「……それもそうだな。マリオのことだから悪いことなどしておらぬだろうし」

考えても分からないのだから、考えるだけ仕方ない。

お茶を口に運びながらピーチ姫はそう結論づける。

少しだけ悩むそぶりを見せたが、最終的にはクツパもその考えには同意を示した。

「あとはキノじいにスケジュールの確認をしないといけないわねえ……」

「ワガハイの方もおぼばにスケジュールを聞かねばならぬな」

最終的にスケジュールを決める権利はあるものの、スケジュールを決めるのはそれぞれキノじいとカメツクおぼば。

どちらにしてもそれぞれがスケジュールを確認しなければ最終的な結婚式の日付を決めることはできないだろう。

自分たちで話し合えることは終わったので、2人はのんびりとお茶を続けるのだった。

第306話

ナハトが匂いつ——・・・・・・マーキングをして10数分後、ようやく満足したのかナハトはマリオからはがれた。

といつてもピッタリとすぐ近くにいるのだが。

「・・・・・・気は済んだのかい？」

「うん。まんぞく」

結婚式でのキスの順番で落ち込んでいたのが嘘だったかのようにナハトの機嫌は良くなっていた。

部屋に入ったときの落ち込んだ様子とは全く真逆のナハトの様子に、マリオはホッと息を吐く。

そんなマリオの様子など気にした様子もなく、ナハトは機嫌良さそうにマリオの隣で

軽く揺れていた。

「そういえば……。ナハトは結婚式の話し合いにほとんど参加してなかったけど、意見とかはなかったのかい？」

「……意見？」

先ほどのピーチ姫の部屋での話し合いのときにナハトがほとんど話し合いに参加せずにお茶とお菓子ばかり食べていたことを思い出した。マリオはナハトに尋ねる。

クツパとピーチ姫は自分たちの意見を言っていたが、ナハトには意見はなかったのだろうか。

そんなことを考えながらマリオはナハトの顔を見た。

マリオの言葉にナハトはコテン、と首をかしげながらマリオの顔を見返す。

「……マリオと結婚できるなら私はそれで構わないよ？」

「いや、まあ、嬉しいけど……。そうじゃなくて、どの日に結婚式をあげたい、とか。どんな結婚式にしたい、とか。そういうことはなかったのかい？」

首をかしたままナハトはマリオの言葉に答える。

まあ、ナハトからすれば日付などよりもマリオと結婚できることの方が優先度が高いためにそう考えてしまうのも仕方がないのかもしれない。

と、ここで勘違いをしてもらっては困るが、別にクツパとピーチ姫の2人がマリオとの結婚の優先度を低く考えているというわけではない。

むしろ優先度が高いからこそ、思い出に色濃く残る結婚式にしようと熱を入れて取り組んでいるのだ。

「むう……………、美味しいご飯……………」

「あく……………。新郎新婦は基本的にはほとんど食べる時間はないって聞いたことがあるけど……………」

「え……………、そうなの？」

しばらく唸っていたかと思うと、ナハトは意見を言った。

かなり考え込んでいたようだったが、それで出てきた意見が食べ物についてだったことにマリオは思わず笑いそうになってしまう。

マリオが笑いをこらえていると不意に思い出したことがあった。

結婚式をしたキノピオたちが、結婚式をしている間は新郎新婦はほとんどなにも食べられないとぼやいていたのだ。

マリオは思い出したことをナハトに伝えると、ナハトはシヨックを受けた表情でマリオの方を見るのだった。

第307話

マリオから聞いた『新郎新婦が基本的に料理を食べる時間がない』と言うことを聞いてナハトはシヨックを隠しきれずにいた。

ナハトからすれば食事と言うものはマリオの次くらいに好きなものであり、作るのも食べるのも好きだからだ。

そのため、ピーチ姫からは結婚式では豪華な食事になると言うことを聞いて楽しみにしていた。

そして、あわよくば自分でも作れるようにレシピを食べて盗もうとまで考えていたのだ。

まあ、盗んだレシピは最終的にマリオに振る舞われるのだが。

「あはは・・・・・・・・・・。まあ、普通は食べられると思うよな・・・・・・・・・・」
「うん・・・・・・・・・・」

先ほどまでのマーケティングで戻っていたナハトの機嫌がふたたび落ち込んでしまう。まさかそれほどまで落ち込んでしまうとは思っていなかったマリオはポリポリと頬を軽く搔く。

なお、結婚式では本当に新郎新婦に食事をする時間はほとんどなく。

結婚式でのほとんどは招待した客や親族などに手を振ったり、写真撮影のために笑顔でいたりすることである。

また、途中でお色直しとして着替えなども挟むので、食べられても小さいものをいくつかか、もしくは飲み物くらいしか飲めないのだ。

そして、クツパやピーチ姫などは気にしないだろうが、結婚式で使うドレスなどは基本的に貸衣装なので汚すことができない。

なのでその辺りのことも気にしていかなければならないので、さらに食事をするのが難しくなるのだ。

「まあ、あとでコックたちに作ってもらえないか頼んでみようか

「うん．．．．．、そうする．．．．．。あ」

さすがに連続で落ち込んでいる姿を見てしまい、かわいそうになってしまったマリオは折衷案をあげる。

結婚式当日の料理を作るのはピーチ城の調理場で働いているコックキノピオたちがおこなう筈なので、調理場のコックキノピオに頼めば作ってくれるだろうとマリオは考えたのだ。

とは言っても必ず作ってくれるというわけではないので、その辺りは確約できないのだが。

と、不意にナハトはなにかに気づいたかのようにマリオのことを見た。

ナハトの声が聞こえたマリオは不思議そうにナハトのを見る。

いったい何が気になったのだろうか。

不思議に思いながらナハトの顔を見、マリオは思わず固まってしまった。

言い様のない感覚がマリオの体を襲う。

背筋がぞわつとするような。

これが背筋が泡立つ感覚なのかと理解できるような。

そんな言い様のない恐怖のような感覚。

マリオの脳内に、一言。

たった一言の言葉が浮かび上がってきた。

逃げろ、
と

第308話

目の前のナハトから言い様のない感覚を感じとり、マリオは自身の頭に浮かんだ言葉に従って慌ててナハトから離れようとする。

ナハトの方を見てからマリオが体を硬直させたのはほんの一瞬のこと。

しかし、その一瞬が致命的な隙となっていた。

ナハトから距離をとるためにマリオは座っている状態から素早く立ち上がろうとしていた。

だが、マリオが立ち上がろうと体に力を入れた瞬間、すでにマリオの体にナハトの腕が強く絡みついていた。

あまりにも早いナハトの動きにマリオはうまく反応することができず、絡みついてきたその勢いのままベッドに押し倒されるのだった。

「くっ?! 強いつ?!」

「マリオ……」

絡みつかれていることによって拘束されているマリオはすぐに力を入れてナハトの腕を振り払おうとするが、ナハトの力があまりにも強いために振り払うことはできなかった。

マリオが振り払おうとしたためか、ナハトの拘束はさらに力を増していく。

マリオの体を拘束したナハトは押し倒したマリオの上に移動すると、艶っぽくマリオの名前を呼ぶ。

もしも普段の状態のナハトにそのように呼ばればドキリとしていたかもしれないが、いまのナハトの様子は明らかに普段のナハトのものとは違う。

ナハトの目は赤く光を放ち、マリオのことをまつすぐに逸れることなく見つめている。

まるで、肉食動物が獲物である草食動物を見ているかのような。

まるで、マリオのことを獲物だと見ているかのような。

そんなナハトの視線にマリオは恐怖を感じていた。

呼吸も荒く、顔もどこか赤く上気しているかのように見える。

ナハトはマリオの腰の辺りに跨がると、マリオの両肩を押さえ込んだ。

「マリオ……、マリオマリオマリオマリオマリオマリオマリオ！」
「くっ、ナハト、落ち着いてくれ！」

狂気を感じさせるような様子でナハトはマリオの名を呼ぶ。

どうやら、精神が落ち着いてきたことによつてマリオと二人きりだったことを理解し、理性が蒸発してしまつたらしい。

安心してもらいたいのは、ナハトがマリオに危害を加えることはないだろうということ。

それだけはほぼ確信をも持つて言える。

では、マリオはいつたいナハトの何に恐怖を感じ取つたのか？

ナハトがマリオに危害を加えないことはほぼないと言える。

で、あるならばマリオが恐怖を感じる理由もないはずだろう。

ところで、全く関係のないようでも少しばかり関係のある話をしよう。

マリオは『童貞』である。

いままでそういつたことを経験する機会もなく。

また、そうなるような相手もいなかったために、そういったことは本などでしか知っていなかった。

なのでマリオは叶うならば好きな相手といちやいちやしながら童貞を卒業したいと無意識のうちに願っていた。

ここまで言ってしまうば分かるだろう。

マリオの感じた恐怖というのは『自分が襲われることによつて童貞を失ってしまうこと』への恐怖だったのだ。

まあ、なんと言つていいか。

つまりは、理性の蒸発してしまったナハトはマリオのことを（性的に）獲物として見ており、マリオはそれに対して恐怖を感じたのだ。

第309話

ナハトに肩を押さえ込まれ、マリオは身動きが取れぬままベッドに押し倒されてい
る。

ナハトの視線はまるで肉食獣を思わせるようなもので、まっすぐにマリオのことを見
ていた。

息も荒く、ナハトはゆっくりとマリオに覆い被さるように顔を近づけていく。

近づいてくるナハトの顔に、マリオはどうか腕を動かしてナハトの肩を押さえる。

「マリオ………」

「ちよ、ま、だれかあああああ?!?!」

どうにかマリオにキスをしようと顔を近づけようとするナハト。

それに抵抗するようにナハトの肩を押さええて近づけないようにするマリオ。

どう考えても男女の配役が逆であろう光景が広げられていた。

マリオの叫びなど気にした様子もなく、ナハトは艶つぼさを感じさせるような言葉でマリオの名前を呼ぶ。

もうすべてを諦めてナハトの餌食になってしまえば楽になれるだろうに。

それでもマリオは諦めずに抵抗を続けていた。

不意に部屋の扉を叩く音が聞こえてきた。

「マリオ？ ナハト？」

「戻ってこぬから来てみたのだが。入っても良いか？」

部屋の外から聞こえてきたのはピーチ姫とクツパの声。

どうやらマリオとナハトがなかなか戻ってこないことが気になって見に来たらしい。

「ふ、2人とも！ 入ってきてくれ！」

ピーチ姫とクツパの声が聞こえてきたことに、マリオは助かったとばかりに声をあげて助けを求める。

マリオの慌てる声が聞こえ、ピーチ姫とクッパは慌てた様子で部屋の中に入ってきた。

そして、ナハトがマリオのことを押し倒している光景にポカンと驚いた表情を浮かべ、急いでナハトのことを引き剥がそうと動いた。

「くっ、やっぱり力が強いわね！」

「なんでまた………こんな事態になったのだ?！」

「俺にも………わからん!!」

ピーチ姫とクッパの協力のもと、マリオはどうかナハトの下から這い出すことができた。

しかし、ピーチ姫とクッパの2人がかりで押さえているにも関わらず、ナハトはマリオに近づこうとしている。

初めてナハトと出会ったときと似たような状況にマリオ、ピーチ姫、クッパの3人はどこか懐かしいような気分になりかけるが、そんなことはお構いなしにナハトが暴れているので、その気分はあつさりと打ち切られた。

「とりあえず……、落ち着かせるために！なにか貰ってくるのだ！」

「ええ！似たような暴走は何回かあったから、冷たい水でも貰ってきてちょうだい！」
「わ、分かった！」

ナハトのことを押さえ込みながらクツパとピーチ姫は言う。

実際、ピーチ姫の言うとおりナハトはピーチ城でもときどき暴走することがあった。

そのため、ピーチ城で働いているキノピオたちなどはナハトの取り扱いに慣れてきているのだ。

2人の言葉に頷いて、マリオは部屋を出るのだった。

第310話

ナハトの部屋から出てきたマリオはひとまずクツパとピーチ姫に言われたようにナハトを落ち着かせるためのものを探しに向かう。

ピーチ姫が言うには冷たい水で良いらしいので、まずは食堂の方へとマリオは走っていった。

「おや………。マリオさん、どうかしたんですか？まだ夕食の時間ではないのですが………」

「夕食は城で食べていくのですか？」

「そうなると料理を少し追加しないとなあ」

マリオが食堂に着くとコックのキノピオたちが夕食の準備をし始めていた。

キノピオたちは、マリオが食堂に来たのは夕食を城で食べることを伝えに来たのだと

思ったらしく、追加で料理の準備をしようとし始めた。

そんなキノピオたちのことをマリオは慌てて止める。

まだ、夕食を城で食べるかも決まっていないので、ひとまずは食堂に来た目的を伝えた。

「い、いや、いまここに来たのはそういう訳じゃないんだ」

「違うんですか？」

「姫様とナハトさんは喜びそうですけどね」

「では、どんなご用で？」

「えっと……、ナハトが……」

「「あー……」」

マリオの言葉にキノピオたちは顔を不思議そうに尋ねる。

食堂に来たのだから食事に関係のあることではないのか。

そう考えていただけにマリオがなぜ食堂に来たのかが分からなかったのだろう。

が、そのあとのマリオの言葉に納得したのか、全員が揃って頷いていた。

「じゃあ、必要なのは冷たい水ですかね？」

「水でも大丈夫だったような……」

「頭を冷やせれば良いんじゃないかなあ？」

「あはは……。とりあえず、水をもらえるかな？」

さすがにナハトの扱いに慣れてきているだけあって、キノピオたちはすぐに対応手段をあげていく。

あまりにも手慣れているキノピオたちの姿にマリオは乾いた笑いしかでなかった。

その後、マリオは無事にキノピオたちから水の入ったボトルを受け取って部屋まで戻る。

部屋に戻ると、マリオがいなくなったことによって少しだけ落ち着きを取り戻したのか、やや大人しくなったナハトの姿があった。

それでも念のためにクツパとピーチ姫に両腕を押さえ込まれているのだが。

「ただいま。水をもらってきたよ」

「おかえりなさい。とりあえず私たちが押さええているからマリオはナハトに水を飲ませてくださいかしら？」

「押さえているとはいえ油断はするでないぞ？」

もはや本当に付き合っているのかすら怪しく思えてしまう光景なのだが、正直なところナハトに関してには暴走することも珍しいわけではないのでそこまで酷い扱いと言うわけではない。

まあ、マリオは突然の事態で混乱していたせいもあつたが、予兆さえ気づければ問題なく対応できるのだ。

それから、ナハトに水を飲ませるのにちよつとした苦労もあつたが、問題なくナハトの暴走は収まるのだった。

第311話

ひとまずナハトの暴走も収まり、一息吐くことができたマリオたち。

今までにも何回か似たようなことは起きていたが、それでも今回は一段と暴走が酷かったように感じていた。

「なんか……、今までよりも酷くなかったか……？」

「ええ、どういうことなのかしら……」

「ナハト、自分で理由は思いつかぬのか？」

「……たぶん」

やや疲れた表情でマリオたちはナハトの部屋に置いてある椅子に座る。

なぜ今までよりもナハトの暴走が酷かったのか。

そのことが気になったマリオたちは揃ってナハトの方を見る。

落ち着いたことで先ほどまでの自分の行動を反省しているのか、ナハトは大人しくベットの縁に座っていた。

クツパの言葉にナハトは少しだけ考えるような表情を浮かべると気づいたことがあったのか、表情を少しだけ変えた。

「たぶん？」

「たぶん……、落ち込んだりしてその分の反動が来たんだと思う」

「ああ、さっきのじゃんけんで」

「それは……、まあ、仕方がないのかもしれないな」

ナハトの言葉に納得がいったのか、3人は一様に頷く。

落ち込んだりと言うことは、ようはストレスによって暴走のレベルが上がると言うこと。

なので先ほどまでのナハトは結婚式での誓いのキスの順番や、結婚式では新郎新婦があまり料理を食べられないということを知ってストレスが蓄積されていたので、それが原因で暴走のレベルが上がっていたということなのだろう。

落ち込んだりしたことが原因だと聞き、ピーチ姫とクツパは先ほどのじゃんけんが原

因なのだ気づく。

まあ、それ以外にも新郎新婦が結婚式ではあまり料理を食べられないということも原因の一部なのだが、その事を知らないピーチ姫とクツパが気づくことはない。

「まあ、これからはあまり落ち込んだりしないように気をつけていくしかない……かな？」

「それしかないであろうな」

「ナハトもあまりそうならないように気をつけてちょうだいね？」
「なるべく気をつける」

ストレスを溜めないようにする明確な方法が思いつかなかったマリオたちはひとまずとして簡単な対策を言うのだった。

まあ、マリオたちは思いついていないのか、それとも思いついてあえて言わないでいるのかは分からないが、もつとも簡単と言えるような方法が1つある。

もつとも簡単な方法。

それは、ナハトのことをマリオがハグすればいいということ。

なお、ハグをした結果、逆に暴走する可能性もあるので、最適解であるとは簡単には

言えないのだが。

第312話

ナハトの暴走をなるべく起こさないようにする話も終わり、マリオたちはナハトの淹れてくれたお茶を飲んで一息をつく。

反省したからなのか、はたまたクツパとピーチ姫がいるからなのか、どちらの理由かは分からないが今のところナハトにはふたたび暴走するような様子は見られない。

「そういえば、もうすぐ夕食よね。マリオとクツパは城で夕食を食べていくのかしら？」
「ん、いてくれたら楽しい」

先ほどまでの空気を入れ換えるためにピーチ姫はマリオとクツパに尋ねる。

ピーチ姫の言葉にナハトもコクコクと頷いていた。

もともと、今日のマリオたちの予定は衣装合わせと日付の話し合い程度だったので、夕食を食べるような予定ではなかった。

だが、話し合いが予想以上に長引いたのと、誓いのキスをめぐるじゃんけん、そしてナハトの暴走で最初に予定していた時間よりも遅くなってしまったのだ。

加えて言うならマリオ自身も3人には内緒で用事のある人物がいるので、まだ帰るわけにはいかないのだ。

「そう、だな………。迷惑じゃなかったら良かったかな」

マリオは少しだけ考える。

まだ目的の人物とは会っていない。

そのことを考えると今ここで帰るというのはあまり良い選択とは思えない。

そう考えたマリオは頷いてピーチ姫の提案を受けた。

「ふむ………。まあ、ワガハイも連絡をすれば……、いや、この時間だともう作り始めているな……。仕方がないからワガハイは帰るのだ」

マリオの言葉にクッパもピーチ城で夕食を食べようかと考えたが、今の時間であればすでに自分の城でも夕食の準備を始めてしまっているだろうと思い、諦めて帰ることを

決めた。

もう少し早い時間に気づけたのなら電話をして連絡をすることもできたのだろうが、普段の時間的にもすでに準備を始めている時間。

料理を作ってくれているコックの仲間や、食材などをクツパは無駄にしたいくないのだ。

「そう。じゃあ、また今度一緒に食べよう」

「うむ。時間も時間だからな、ワガハイは先に帰るのだ」

「日付の話し合いはお互いにキノじいたちに確認してから詰めていきましようね」

「空を飛んでいくわけだから危険はほとんどないだろうけど、気をつけてくれ」

時間も遅いのでクツパはそのまま帰ることを選ぶ。

マリオたちはクツパを見送るために揃って中庭へと向かっていった。

クツパはマリオと一緒に歩いてきているはずなのにどうして中庭に向かうのか不思議に思われるかもしれないが、クツパ専用のクラウンは遠隔でクツパ城から呼ぶことができるのだ。

ただし、クツパ城から限定なのでどこかに置いてきてしまっている場合はそこまで回

取に行かなければならないのだが。

第313話

クラウンに乗ってクツパ城に向かって飛んでいくクツパをマリオたちは見送る。

周囲もやや暗くなってきたており、普通に歩いて帰っていた場合はとても心細い道になりなっていたに違いない。

まあ、それでもクラウンに乗っているクツパは寂しそうにチラチラと何度もマリオの方を振り返りながら飛んでいっているのだが。

その姿は、どこことなく「散歩をしているときに自由に走り出したは良いけど飼い主のことが気になる飼い犬」のようにも見える。

チラチラと何度もこちらを見てくるクツパの姿にマリオは心の中で悶えていた。

「なんとというか、やっぱりクツパって寂しがりよね」

「昔からあんな感じ？」

「もともと、構ってもらえないと泣いたりしてたからな」

飛んでいくクツパの姿を見送りながらピーチ姫は苦笑混じりに呟く。

同じようにクツパのことを見送っていたナハトはピーチ姫の呟きに尋ねる。

ナハトがマリオたちと出会ったのはクツパが今の姿になってから。

そのため、前の姿のときのクツパについては話で聞いた程度にしか知らないのだ。

そんなナハトの言葉にマリオはクツパの性格を思い返しながら答えた。

もともと、クツパの性格は自己中心的で調子に乗りやすく、それでいて他人に構ってもらえないと落ち込むといった、正直に言っただけめんどくさいものだった。

それでも持ち前のカリスマ性と、自身の配下として引き入れたものに対する懐の広さと優しさによってクツパ軍団をまとめあげていたので。

そんなクツパだったのだが、今となってはマリオに思いを伝え、率先して料理の練習や、裁縫の練習、室内の掃除などをやっている。

まあ、ときどきあるグッズが室内に溢れかえってしまうのは、愛嬌と言うやつだろう。

「さて、クツパも見えなくなっただし中に戻りましょうか」

「飯」

「あ、俺はちよつとお手洗いに行つてくるよ」

クツパの姿が見えなくなり、ピーチ姫はくると振り返つて言う。

クツパが何度も振り返りながら飛んでいたの、周囲もだいぶ暗くなつており、夕食の準備も終わつていのではないかと思える。

ピーチ姫の言葉にナハトも目をキラキラと光らせて反応する。

そんなナハトの姿にマリオは苦笑をこぼしながらお手洗いに向かうことを伝えた。

マリオの言葉にピーチ姫は頷き、ナハトをつれて先に食堂へと向かつていった。

「ふう、今のうちに話をしに行かないと……」

ピーチ姫とナハトの姿が中庭から見えなくなると、マリオは小さく息を吐いて呟く。
く。

そして、そのままお手洗いとは違う方向へと歩いていくのだった。

第314話

食堂に向かうピーチ姫とナハトを見送ったマリオは2人に伝えた場所とは違う場所へと向かっていく。

もともと、今日の衣装合わせが終わったあとにクツパを含む3人に気づかれなかったところにある人物と接触しようと考えていたのだが、その機会が今の今までなかったのだ。

そして、マリオは接触したかった人物のいるであろう部屋の前に到着した。

「いるはず……だよな？」

扉の前に立ち、マリオは少しだけ不安そうに呟く。

マリオは、接触をしたかった人物とはとくに約束などをしていただけではないので、部屋にいるのかは分からないのだ。

意を決し、マリオは部屋の扉を叩く。

コンコン、と部屋の中に音が響いていき、しばらくすると返事が聞こえてきた。

「はい、どちら様ですか？」

「いきなり来て悪い。ちょっと話したいことがあつてな」

「おや、マリオどのでしたか。申し訳ないのですが、まだしばらく手が離せないので入ってきてもらえますか？」

部屋の中から聞こえてきた声は、外にるのがマリオだと気づくと扉を自分で開けるように言う。

どうやら中にいる人物は手が離せないほどに忙しいらしい。

そんな状態で会いに行っても良いのかマリオは悩んだが、ピーチ姫の予定についての話でもあるため、部屋の中へと入っていった。

部屋の中に入ると、マリオの接触したかった人物、キノじいさんが忙しそうに書類をまとめていた。

どうやらピーチ姫がやる必要のない仕事などをまろまろ引き受けているようだ。

「すみませぬな、このような状態で」

「いや、俺の方もいきなり来て悪かった」

キノじいは手に持っていた書類を隣に置くと、一段落がついたのかマリオの方を見る。

あまりにも忙しそうなキノじいの姿にマリオは頭を下げた。

「いえいえ、大丈夫ですよ。して、いったいなんのようですか？」

「ああ、確認んだけどキノじいはピーチ姫の仕事の予定を調整してるんだったよな？」

「ええ、無理な執務をしては後々に響いてしまいますからな」

なんのようでここに来たのか。

マリオが来た理由が気になったキノじいは尋ねる。

キノじいの言葉にマリオは頼みたいことのために確認をした。

「それでさ、結婚式のために最低でも2日連続で休みがほしいって話が出ただけ
ど・・・・・・・・・・」

「ふむ、2日ですか・・・・・・・・・・」

マリオの言葉にキノじいは近くに置いてあったカレンダーをパラパラと確認する。おそらくカレンダーを確認していつなら休みにできるかを確認しているのだろう。

「そうですな……。その日その日によつて差がありますので確定はできませんが、だいたい半月後辺りでしようかな」

「ピーチ姫の予想通りか……。なら、悪いんだけど休みを取れるのを1か月後つてピーチ姫には言つてくれないかな？」

「ふむ、理由をうかがつても？」

キノじいの言葉にマリオは少しだけ苦々しそうな表情を浮かべる。

この情報がピーチ姫に伝われば間違いなく半月後に結婚式は予定されてしまうだろう。

そうなつては結婚指輪は間に合わない。

そう考えたマリオはキノじいに予定を少しずらしてもらおうように頼んだ。

マリオの言葉にキノじいは不思議そうに首をかしげながら尋ねるのだった。

第315話

本来であれば半月後に休みをとることができるのに、なぜ1か月後に延ばそうとするのか。

マリオの顔を見ながらキノじいは不思議そうに首をかしげている。

「あく……えつと……」

キノじいにどう説明したものかとマリオは考える。

マリオがキノじいに話すことを悩むのには理由がある。

その理由を聞けば誰もが納得してキノじいに話すことを躊躇してしまうこと間違いないだろう。

「……ばらさないか？」

「それは内容によるとしか言えませぬな」

不安そうなマリオの問いにキノじいは毅然とした調子で答えた。

そんなキノじいの様子にマリオは不安しか感じなかった。

いい加減、マリオがキノじいに話すのを躊躇っている理由を答えよう。

実は、以前にもマリオはサプライズをおこなおうとキノじいに協力を要請したことがあつたのだ。

その時にはサプライズの内容をキノじいに伝えていたのだが……

あろうことか、キノじいはサプライズにウキウキとしてしまっており、それによって周囲の人間になにかあるとアツサリと勘づかれてしまったのだ。

まあ、簡単に言ってしまうえば「キノじいは隠し事に向かない」と言うことなのだ。

「……前にサプライズが失敗したことを覚えているかい？」

「ええ、しかし私も同じ失敗はしませんとも！」

正直に言つて、キノじいに理由を話したくはない。

そう思いながらマリオはキノじいに尋ねる。

マリオの言葉にキノじいはドンと自信満々に胸を叩いた。
マリオはそんなキノじいの行動にどうしようもなく不安を抱いてしまう。

「あー．．．．．、その、あれだ。どこから情報が漏れるか分からないし、まだ内緒でことに．．．．．」

「ふむ、確かにそれも一理ありますな。では、せめて一つ。予定をずらすのは誰のためですかな？」

自信満々なキノじいになんか真実を伝えずにマリオは理由をごまかす。

キノじいはマリオの言葉に納得をしたのか、しきりに頷いた。

そして、キノじいはせめてもの確認としてマリオに尋ねる。

ピーチ姫の休みの予定を帰るのは誰のためなのか。

それは本当に必要なことなのか。

嘘偽りは許さないといつた雰囲気を出しながらキノじいは言った。

「それは．．．．．」

キノじいの言葉にマリオは考える。

自分がピーチ姫の休みの予定をずらしてほしいのは、依頼している指輪の完成時期に合わせるため。

クツパ、ピーチ姫、ナハトの3人に渡すための指輪なのだから、3人のためだと言っても間違いではないだろう。

しかし、ここでマリオは悩む。

3人に渡すための指輪とは言うが、これはもともと自分がなにも言わずに勝手に用意しているもの。

であるならば、3人のためと言うのはおかしいのではないか。

3人の喜ぶ顔と、驚く顔を自分が見たくてやっていることなのだから自分のためではないのか。

誰のために休みの予定をずらそうとしているのか。

マリオは、その答えをキノじいに答えるために口を開いた。

第316話

キノじいの問いに答えるためにマリオは口を開く。

自分が誰のためにキノじいに頼んでいるのか。

思った答えがキノじいの満足のいくものとは限らないが、それでもマリオはキノじいに答える。

「俺が予定をずらしてほしいのは……、自分のためだよ」

「ほう……?」

少しだけ躊躇ったが、マリオは自分が誰のために予定をずらしてほしいのかを答えた。

マリオの答えにキノじいは眉を動かす。

その動きが怒りからなのか、はたまた意外さからなのか。

マリオに判断はできなかった。

「自分のため………ですか？」

「ああ………。最初は、その、3人の喜ぶ顔が見たいから。3人のためって思ったんだけどな。でも、3人を喜ばせたいのも、3人の驚いた顔を見たいっていうのも自分の思いだって気づいたんだ」

キノじいの言葉にマリオは頷き、自分の思ったことを答える。

3人に喜んでもらうために指輪を用意するのも。

3人に自分の用意した指輪を渡したいというのも。

そのどちらもが根幹には自分の気持ちがあった。

3人が指輪を欲しいと言ったか？

否。

誰もそんなことは言っていない。

これはマリオが自分で勝手に用意しているもの。

であるならば、指輪の完成が間に合うように予定をずらしてほしいのはマリオ自身のためであると言えないのだ。

「ふむ。ふむふむふむ……」

「ダメ、か……?」

マリオの答えを聞いたキノじいはしきりに何度も頷く。

マリオの答えをしつかりと繰り返して、自身の頭の中で考える。頷いているキノじいの様子にマリオは不安そうに声をかけた。

「そうですね……。正直に言えば、姫様のためであれば協力は惜しまないつもりでした」

キノじいの答えにマリオはうつむいてしまう。

この様子ではキノじいの満足のいく答えではなかったということなのだろう。おそらく間に合わないであろう指輪にマリオは暗い気持ちになっていく。

「悪い、無茶を言ったな……」

見込みはなくなってしまったのだと考え、マリオはキノじいに背を向ける。次にできることは何があったか。

暗い気持ちになりながらマリオは次の手段を考えていく。

「・・・・・・・・・・ですが」

「え・・・・・・・・・・?」

静かに、しかしハッキリとしたキノじいの声がマリオの耳に届く。

「もしも、マリオどのが『姫様のため』や、他のお二方のためだと言っていた場合、私は協力をする気はありませんでした。しかし、マリオどのは自分のためだと言いました。ならばこそ、その願いは姫様たちのためになると私は思うのです」

「キノじい・・・・・・・・・・」

マリオに向かって微笑みながらキノじいは言う。

キノじいから確かな信頼を感じ、マリオは嬉しそうに笑みを浮かべるのだった。

第317話

キノじいに協力をしてもらえらることになったマリオは嬉しそうに部屋をあとにした。マリオの消えた扉を見ながらキノじいは感慨深そうに自身の髭を撫でる。

「ほっほっほ………。悩んではいましたが、それでもちゃんと答えられましたなあ」

先ほどのマリオの答えを思い返しながらキノじいは嬉しそうな声音で呟く。

キノじいはピーチ姫や、マリオ、はてにはクツパが生まれる前からピーチ城で大臣をしていた。

それゆえにマリオの成長を感じさせる行動を嬉しく思ったのだ。

なお、ピーチ姫が生まれていないはずなのに城の名前がピーチ城であることや。

ピーチ姫が生まれていないのにキノじいが誰にかえているのか等々。

気になることはあるかもしれないが、それはマリオたちにはそこまで関係のあること

ではないので詳細の説明はすべて省かせてもらう。

「でも、あれならば大丈夫でございましょう。自分のためとは言っておりましたが、マリオどのは優しいお方。姫様たちの喜ぶことをしてくださるに違いない」

今までマリオたちのことを見てきたキノじいだからこそ信頼を込めてキノじいは眩く。

今までもマリオはキノじいやキノピオたちの信頼に応えてきてくれた。
だからこそ、今回もマリオのことを信じることができるのだ。

「……まあ、ときどき怖じ気づいたりするのはまだまだ心配ですがな」

苦笑をしながらキノじいはそう眩くと、仕事に戻るのだった。
ピーチ姫の休みの予定を1か月後に伸ばすために。

キノじいの部屋から出たマリオは足早に食堂に向かう。

トイレに向かうと言って別れたはずなのにそこそこに時間が経ってしまった。

あまり待たせてしまつてはピーチ姫とナハトに怪しまれてしまうからだ。

遅いと思われない程度に急ぎつつ、走つてきたと悟られないように息を整えながらマリオは食堂にたどり着いた。

「あ、ようやく来たわね」

「お腹痛かったの？」

「いや、そういう訳じゃなかったけど……」

食堂に入つての最初のナハトの言葉にマリオは頬を掻きながら答える。

ナハトの問いにマリオはどう答えるか考える。

あまり不用意なことを言えばマリオがトイレに行つていないことがバレてしまう可能性がある。

そしてそこからマリオがキノじいの所に行つていたことがバレてしまうかもしれない

い。

そのため、マリオはナハトの問いに、怪しまれないような自然な答えを要求されるのだ。

まあ、そんなものを即座に用意できる人がどれだけいるのかは分からないが。

「えっと、ちよつと気になるものがあつたから見ていたんだよ。まあ、たいしたものじゃなかつたから気にしないでくれ」

「そう?」

「まあ、なんにしても揃つたんだから夕食にしましょう」

ピーチ姫の言葉と同時に夕食がテーブルの上に並べられていく。

どうやら夕食はすでに完成していてマリオがそろうだけだったようだ。

マリオの答えにナハトは少しだけ不思議そうにしていたが、すぐに意識を用意されていく夕食に移す。

そして、夕食が始まるのだった。

第318話

ピーチ城での夕食も終わり、マリオは家へと向かって歩いていった。衣装合わせも無事に終わり、キノじいへの協力も取り付けられた。これで結婚式までに指輪も間に合うだろう。

「あとは懸念事項はなかったかな．．．．．」

歩きながらマリオは考える。

指輪のこと。

結婚式の日付のこと。

キノじいの協力のこと。

今日だけで不安だったことは全部片付いたと言っても問題はなさそうだが、それでも油断はできない。

もしかしたら気づいていない問題があるかもしれない、とマリオは思考を続ける。

「・・・・・・・・・・ない、よな？」

思考を続けていくうちに不安になってきてしまったのか、マリオは弱々しい声で呟いた。

そんな風にな不安になりながらもマリオは自宅に到着した。

自宅に着くと同時にマリオは郵便ポストを確認する。

どうやら今日は手紙は届いていないようだ。

「・・・・・・・・・・あ。そうだ、結婚式の日仕事は休むことをまだ告知してな
ら」

届いている郵便物を確認し、仕事について考えたことによつて忘れていたことを思い出した。

とは言つてもまだ結婚式の日付を確定していないので告知はできないのだが。

それでも思い出せたのならどこかにメモをしておけるだろう。

「まあ、あとはなるようになるしかないか」

手紙もなく、仕事の書類もまとめ終わっているので、とくにやることもない。
お茶を淹れたカップをテーブルに置き、マリオは本を開いた。

「……この本、前に読んだな」

本を閉じ、マリオは違う本を取りに立ち上がる。

どうやら表紙では読んだかどうか気づかなかつたらしい。
不思議に思いながらマリオは本の表紙と中身を見比べる。

「あ、カバーと中身が違う?！」

何度も見比べているうちに、マリオは本の中身と表紙のカバーが違っていることに気づいた。

誰がやったのかは何となく想像はつくのだが、今まで気づかなかつたことにマリオは

頭を抱える。

「ちよつと電話をするか．．．．．」

どこの本がどの表紙と入れ換えられているのか分からないので、マリオは一旦本を置いて電話の受話器をあげた。

マリオの表情にはどこか黒いものを感じられる。

——プルルル．．．．．プルルル．．．．．ガチャリ

『はい、こちらクツパ城です』

「あ、マリオなんだけど．．．．．」

『む、マリオか。クツパ様は入浴中なのでな。また少ししてからかけてきてくれ』

受話器をあげる音が聞こえ、ノコノコ兵の声が聞こえてくる。

ノコノコ兵の言葉にマリオが名前を名乗ると、ノコノコ兵はクツパへの用事だと気づいたのかしばらくしたらかけ直すように言って電話を切ってしまった。

「……………入浴中とか言って良いものなのか？」

ノコノコ兵の言葉にマリオは入浴中のクツパの姿を妄想しながら悶々とした気持ちになってしまったのだった。

第319話

クツパの入浴姿を妄想して悶々としながらマリオは本棚に入っている本の確認をしていく。

どうやら表紙カバーと中身が入れ替わっているのは数冊だけだったようで、そこまで疲れるようなことはなかった。

「……………そろそろ、か？」

入れ替わっている本をもとに戻し、マリオはしばらくお茶を飲んで時間を潰していた。

しばらくしてから時計を確認するとだいたい30分ほど経っていたので、もう一度電話の近くに向かう。

——プルルル……プルルル……ガチャリ

『はい、こちらクツパ城ですじゃ』

「あ、さつきもかけたけど……」

『む、マリオか。クツパしやまなら——』

『ま、マリオか?!』

受話器が上がる音が聞こえてくると、聞こえてきたのはカメックおぼばの声だった。どうやら電話の近くにいたようだ。

マリオの言葉にカメックおぼばが答えようとしていると、不意に声が途切れて違う声が聞こえてきた。

『クツパしやま!ちゃんと体を拭いてくだしやいませ!』

『ええい、ちよつと待つのだ!マリオか?!な、なにか用か?』

「えつと、まあ、なんだ……。とりあえず、ちゃんと体を拭いてこい?」

『む、仕方ない……。おぼば、切ってはダメだからな!』

そう言つて割り込んできた声の主、クツパの声は聞こえなくなつてしまつた。走つていくような足音が聞こえたことから体を拭きに戻つたのだろう。

とりあえず、この電話がどこに設置されているのか気になるころなのだが、そのあたりはまあ、うまい具合に繋がつたと言ふことにして置いて良いのではないだろうか。というかこれに關しては触れてはいけない禁止事項となつています。

情報の閲覧には作者^{エクストラ}クラスの権限を提示してください。

そして、マリオは聞こえてきたカメックおぼばの言葉にクツパの姿を再び妄想してしまふ。

『マリオ、一応言つておきますが……余計なことは考えぬようにな?』
「う……わ、分かつたよ……」

マリオがクツパの妄想をしていることが分かつているのか。
カメックおぼばは低い声でマリオに忠告をする。

カメックおぼばの声にマリオは思わずひるみ、うなだれるのだった。
そして、それからクツパが戻つてきたのは数分後になる。

『待たせたのだ!』

『クツパしやま!ちゃんと髪の毛も乾かしてくださいやれ!』

どうやら髪の毛は乾かさずに来たらしい。

それだけマリオと電話をするのを楽しみにしているとも言えるのだが。

『そ、それで、どうしたのだ?』

「いや、ちよつと聞きたいんだが……、本棚の本の表紙カバーと中身を入れ換えなかつたか?」

『……ワガハイハナニモシラヌノダ』

もはや自分が犯人だと言っているような棒読みに、マリオは溜め息を吐くのだった。

第320話

本当に隠すつもりがあるかと聞きたくなるほどに棒読みなクツパの言葉を聞きながらマリオは溜め息を吐く。

そうだろうなどは思っていたのだが、それでも問い詰めたりする必要なく分かるとは思っていなかった。

「それで？」

『ぬ・・・・・・・・？』

マリオの問いにクツパは不思議そうに聞き返す。

マリオからすればクツパがどうしてこのようなことをしたのか聞きたかったのだが。

「どうして本の表紙カバーと中身を入れ換えたんだ？」

『う、その……』

マリオの言葉にクツパは答え辛そうに言い淀む。

別に責めるつもりはなかったのだが、どうもクツパにはそう受け取られてしまったらしい。

「別に責めるつもりはないよ。それに入れ替わっていた本もそんなに多くなかったし」

『……すまなかったのだ』

マリオが怒っていないことが分かったのだろう。

クツパは少しためらいながらも謝罪の言葉を口にした。

「理由を言ってくれるかい？」

『うむ……。えつとだな、その……。寂しかったからなのだ……』

「……ええ？」

クツパの言葉にマリオは一瞬だけポカンとした表情になる。

寂しかったからとはどう言うことなのか。

マリオはクツパの言葉の続きを待った。

『表紙カバーと中身を入れ換えたのはマリオが仕事でいなかったときだったのだ……』

「ちようどいないときに家に来てたのか」

『それで……待っていてもなかなか帰ってこなくて……』

「だから本の表紙カバーと中身を入れ換えた、と……」

家主がいなのに勝手に家に入っていることや、それでイタズラをしていることなど。

気になる点はあるが。

それでもクツパの気持ちがあつたマリオは怒る気にはならなかつた。

「まあ、これからはこんなことはしないでくれよ？」

『うむ……。もう、迷惑をかけるようなことはしないのだ……』

「よし、これでこの話は終わり！」

シヨンボリとした声音のクツパの意識を切り替えるためにマリオはなるべく明るい口調で言う。

クツパもけっこう傷つきやすい方と言うか、繊細な性格をしているので、マリオもあまり責めたりしたくはないのだ。

まあ、2人きりで会話をしているときにSっ気がむくむくとわき出て責めるようなことを言つて、クツパの顔を赤面させて軽く怒られたりすることはあるのだが。

「そういえばカメツクおばばに仕事の予定とかは聞いたのかい？」

『うむ。一応確認してもらったのだ。確か……20日後辺りだったか?』
『ええ、その辺りですじゃ』

話題を変えるためにマリオはクツパに仕事の予定について尋ねる。

マリオの言葉にクツパは思い出すように言葉を区切り、カメツクおばばに確認をしなから答えた。

20日後辺り……

ということはクツパの方に合わせるようにしてもギリギリの期日だったのか……

クツパの言葉にマリオはキノじいに協力を取り付けられて良かったと、内心でホッと息を吐くのだった。

第321話

クツパから電話越しに聞いた仕事の予定にマリオはホツとしながら近くに置いてあるカップを手取る。

カップの中に入っているお茶は少しだけ冷めてしまっていたが、それでもまだ十分に温かった。

「ん・・・・・・・・・・、ふう、まあ、俺が聞いたかったのはこれくらいかな」
『そうか・・・・・・・・・・』

マリオの言葉にクツパは寂しそうな声を出す。

マリオの聞いたかったことがなくなつたということとは電話が終わってしまうと言うこと。

そのことがクツパにはとても寂しく感じられたのだ。

そんなクツパの気持ちを察したのか、マリオは苦笑しながら話しかける。

「よかつたらなんだが……、もう少し話すか？」
『も、もちろんなのだ!!』

グワツという効果音がつきそうな勢いでクツパはマリオの言葉に答える。

あまりにも大きな声でクツパが反応したので、マリオは少しだけ耳がキーンとなっていた。

それでもクツパの声から嬉しそうな様子がうかがえたので、マリオも嬉しそうだったが。

「そうだな……。あ、そうだ。フラワーランドに新しい花が咲いてるって聞いたか？」

『そうなのか？それは知らなかったのだ』

なにを話そうか少しだけ考え、マリオはフラワーランドに仕事に行った際に聞いた情報を書き出した。

マリオが思い出したのはフラワーランドに新しい花が咲いているということ。
クツパは動物も植物も好きなので、マリオの言葉に興味深そうにしていた。

「なんでも花びらがハートの形をしているんだってき。名前は確か……ハート
フラワー」だったかな」

『……けっこうそのまんま名前なのだな?』

「まあ、変に凝った名前がついているよりは良いんじゃないか?」

新しく咲いた花の名前を聞き、そこまで変わった名前でないことにクツパは呟く。

最近の花の名前の特徴なのか、複雑な名前のもがそこそこに多くなっていたので、
クツパはそこが意外だった。

クツパの言葉にマリオも同意見だったのか、花の名前がシンプルなることを認めてい
る。

「色はバリエーションが多いらしくてな。なかなか楽しめるらしい。そのうち行くか
?」

『当然なのだ!ならば弁当も持っていくか?』

「それも良いかもな」

かなり自然な流れでマリオはクツパをデートに誘う。

まあ、とくに意識して誘ったわけではないのでその辺りも自然に誘えた理由の1つだろう。

マリオの言葉にクツパもウキウキとした声色で答えた。

「フラワーランドはたくさんの方に自然に囲まれているし、普段の仕事の疲れとかも癒せるだろうしな」

『自然を見るのは精神的にも良いことだと聞いたな。では、近い休みにでも行こうではないか』

「まあ、その前に結婚式の日付をきつちりとピーチ姫と話し合わないとだけだな」
『確かに、まだ決まっておらぬからな……』

マリオの言葉にクツパはションボリと答えるのだった。

第322話

しばらくクツパと話していたマリオは時間を確認して少しだけ驚く。

いつの間にか1時間ほど話し込んでいたらしい。

明日の仕事の準備や、入浴なども済ませておかないといけないため、名残惜しいがクツパとの電話をやめなければならぬ。

「クツパ、そろそろ時間が……」

『ぬ……。そうか、もうこんなに時間が経っていたか……』

マリオの言葉にクツパも時計を確認したのか、残念そうな声をあげる。

お互いに相手との会話を楽しんでいたために、電話を切るのが辛いのだ。

時間が遅いことは分かっているのだが、それでも互いに電話を切ることができなかつた。

「いつの間にか、こんな時間になっていたんだな……」

『時間が経つのは早いのだな……』

互いに、いつの間にか時間が経過していたことをしみじみと呟く。

どちらも電話を切りたくないと思っっているために、直接的に電話を切るような言葉を言おうとしない。

先ほどの時間経過についての呟きですら、電話を切らないようにするための尺稼ぎに過ぎないのだ。

マリオはクツパに、クツパはマリオに明日も仕事があることをどうぜん理解している。

それでも叶うならばまだまだ話してきたいのだ。

「あ、そういうえばカメックおぼばはどうしたんだ？途中から声が聞こえなくなっていたけど……」

『ああ、おぼばならワガハイの髪を乾かしたあとはプライベートな時間として自室に帰ったのだ』

話し始めた最初の方ではカメックおぼばの声が聞こえていたのに、今はぜんぜん聞こえてこないことが気になりマリオは尋ねる。

マリオの問いにクッパはカメックおぼばがどこにいるのかを答えた。

さすがにクッパでも、カメックおぼばのプライベートな時間なので、なにをやっているのかは分からないらしい。

と言うか、先ほどまで電話を切ろうとしていたのに新しい話題を出してしまっている。

もはや本当に電話を切る気があるのかすら怪しく思ってしまうのも仕方がないことだろう。

「おぼばとかキノじいってプライベートではなにをしてるんだらうな？」

『そうだな……。やはり、年寄りらしくお茶ではないか？』

「それなら野菜とかも作ってそうだな」

『確か、キノじいはガーデニングをしているのではなかったか？』

先ほどまでの電話を切ろうとしていたやり取りはなんだったのか。

マリオとクツパは再び話し始めてしまった。

ちなみに、カメツクおばは、プライベートでは読書や簡単な魔法の実験などを、キノじいはガーデニングをやっていたりする。

そして、結局マリオとクツパが電話を切ることができたのはさらに2時間後のことだった。

第323話

ピーチ姫とクツパの仕事の休みの予定のすり合わせや、結婚式の日付の確定など、まだまだ落ち着くことはできないが、それでも一段落がついてマリオはのんびりと1日を過ごしていた。

これは、そんなマリオのある1日の話。
朝。

マリオはモゾモゾとベッドから起き上がり、伸びをする。

前日のうちにも把握していたことだが、今日はとくに緊急の依頼もなく、のんびりとすることができると。

ベッドから起きたマリオは洗面所で顔を洗うと朝食の準備に取りかかる。

マリオが朝食を抜くことは滅多になく。

最低でもパンぐらいはかじって仕事に向かうのだ。

そのときの姿はまるで学校に遅刻しそうで慌てて走る学生かのように。

朝食を食べ終えたマリオは家の中をグルリと見回す。

「どうやらこれから家の掃除をするようだ。」

マリオは家事に関してでは普通にできるレベルなので、とくに手間取ったりすることなく掃除をしていく。

そして掃除をしていくのと同時に洗濯物を洗濯機に突っ込んで回し、ベッドの上の布団を外に運んでいった。

洗濯機が回っているあいだに家の掃除や布団を干してしまえば、終わった頃にちょうど洗濯も終わっているはずなので、これは正しい順番だと言えるだろう。

マリオが外にある物干し竿に向かうと、何やら黒いものがすでに干されていた。

なにか先に干したのかと思ってマリオが近づくと、その黒いものはモゾモゾと動きだし、マリオに顔を向けた。

「え……………。なにやってんの、ナハト」

「お腹すいた……………」

「……………悪いんだけど、焼きそばパンとか腐りかけの野菜とかはないんだ」

物干し竿に干されていた人物、ナハトはマリオに気がつくのと、待ってましたといわん

ばかりに言った。

ナハトの言葉にマリオは少しだけ考えたが、ナハトの言葉が小説の台詞だということに気づき、ヒラヒラと手を振りながら答えた。

マリオの答えに満足したのか、ナハトはヒラリと物干し竿から降りる。

どうやら最近読んだ小説で面白いと思った部分を再現したかったらしい。

ナハトが物干し竿から降りると、マリオは物干し竿の布団を干すスペースに持つてきた布団を干す。

その際に布団の中身が片寄らないように気を付ける。

どうやらナハトはやることなくなったから自由時間になってマリオのところ遊びに来たらしい。

マリオのあとに続いて家の中に入ると、掃除途中だということがわかったのだろう。

ナハトはマリオの手伝いをするように家の中の掃除を始めた。

それからしばらくして、掃除も終わるちよūdのタイミグで洗濯機が止まるのだった。

「朝からなにしてるんだよ、クツパ」

「ぬお?!ワガハイの声が入ってしまうではないか?!」

第324話

洗濯物も干し終わったマリオは時間を確認する。

家の掃除や洗濯物、布団を干したりすることによってそこそこに時間が経っていたのか、時間はもうすぐ11時になりそうなどころだ。

「あ、それ続けるんだ……」

「クツパはなにをやっているの？」

マリオとナハトはどうやらこれから昼食の準備をするようだ。

ところでナハトは城に戻らなくても良いのだろうか。

マリオの家に来てから掃除の手伝いをしていたのでけっこう長くマリオの家にいるはずだ。

「無視された。それと、お城は大丈夫。ちゃんと許可はもらってある」

「まあ、なにかやりたいことがあるみたいだし。お昼は……材料的にカレーかな」

冷蔵庫の中身を確認してマリオは昼食を決める。

マリオの言葉にナハトは頷き、お米の炊飯準備をしていく。

カレーと言えばご飯。

これは奇跡的な合致と言えるほどのもので間違いないはずだ。

そして昼食作りに必要な材料、ニンジン、玉ねぎ、ジャガイモ、肉、カレールーを取り出した。

カレーとは、単純でいて複雑。

だれでも余程のことがない限りは簡単に作れるが、料理のうまい人が作れば至高とも言えるほどに美味しい逸品ができあがる。

そして、まったく同じ材料を使っているはずなのに作る人が違うだけで違う味になるのだ。

これほどまでに不思議な料理もないだろう。

「そこまでカレーを掘り下げるのか……」

そんなこんなでマリオはカレーを完成させる。

それと同時に最初にナハトが準備していたお米が炊けた。

マリオの作ったカレーはとても美味しかったのだ。

昼食を食べ終え、マリオはどこかに出掛ける準備を始める。

準備している荷物はジャージ、タオル、ドリンクの3つ。

いつたどこに行く準備だろうか。

「これから出掛けるけど2人は．．．．．」

「行く」

「もちろん一緒に行くのだ」

家の鍵を閉め、マリオは歩き始める。

その近くをナハトは当然といった様子で歩いていた。

ぐぬぬぬ、こんなことをしていなければ．．．．．

会話を楽しみながらマリオとナハトは歩いていく。

しばらく歩くと、マリオの目的の場所があるキノコタウンに到着した。

いい加減にマリオがどこに向かっていているのか分かってても良い頃合いではないだろうか。

そして、マリオは1つの建物の中へと入っていった。

建物の中に入ると、なにかを叩いているかのような音や、機械の動いている音が聞こえてくる。

ナハトがその事に少しだけ驚いているあいだにマリオは近くの部屋に入ってしまった。

慌ててナハトもついていこうとしたが、その部屋が男性更衣室だということに気づき、部屋の前で止まる。

「なんの施設？」

「まあ、教えても良いが。見ていれば分かるのだ」

不思議そうにしているナハトに内緒にしている理由もないので、教えても良いのだが。

それよりはマリオが施設を利用してどういった施設なのかを見せた方が早いだろう。

マリオの入っていった男性更衣室の前で待っていると、ジャージに着替えたマリオが

出てきた。

マリオは手に持ったタオルとドリンクを近くにある台に置くと準備運動を始めた。なにをするにしても体を温めるのは大切なことだ。

しばらく準備運動をしていたマリオは、グルリと施設の中を見渡す。

「つと、空いているのはあれか。退屈になっちゃうかもしれないからキノコタウンを自由に見てきたら？」

「ううん、ここで見てる。……トレーニングジム？」

「うむ」

ナハトの問いを肯定する。

ここはキノコタウンに存在するトレーニングジム“キノマツスル”
体を鍛えたいと思っている人間が集まってくる施設だ。

第325話

ハツハツハツ、と一定の呼吸をしながらマリオは機械の上を走る。

マリオが今走っている機械は一般的なルームランナーで、マリオからすれば体を温める程度の意味合いしかない。

そんなマリオの姿をナハトは楽しそうに見ていた。

どうやらマリオが運動をしている様子を見ているだけで楽しめているようだ。

そんなナハトの視線を感じながらマリオはルームランナーを走る。

マリオはナハトの視線はしっかりと感じているが、それによつて運動に支障を起こすようなことはない。

まあ、普通の人ならばナハトのような美人に見られては良いところを見せようとしたり、緊張してなにかしらの失敗をするのではないだろうか。

体を温めるためにマリオはルームランナーで20分ほど走っているが、そのような様子は見られない。

「汗をかきながら走ってるマリオ……カッコいい」
「うむ、それは分かるのだ」

汗をかいて運動しているマリオには普段の姿とは違った魅力があるように思える。
これはどんな人にも言えることかもしれないが。

運動ができる人間というものは総じて普通になっている人よりも魅力的に見えることがあるのではないだろうか

まあ、運動ができてても人間性で嫌われてしまう人もいるだろうが。

と、ここでマリオは体が温まったのか、ルームランナーを走るのをやめた。

走り終えたマリオは近くに置いたドリンクを一口飲むとグローブの準備を始める。

どうやら次はサンドバッグ打ちを始めるようだ。

「……シッ!!」

短く息を吐いて拳をサンドバッグに叩き込む。

ズドムツ、と鈍くも重い音が響き渡った。

その音からも分かるようにマリオの腕の力は凄まじいものがある。

まあ、それに関しては普段のハンマーを振り回している姿からも容易に想像がつくと
思うが。

念のために言っておくと、マリオの普段使っているハンマーはかなりの重さであり、
木製のものでおおよそ50キロほど。

鉄製ののであれば80キロを余裕で超えるほどになる。

ま、別に？

負け惜しみではないが。

負け惜しみではないが、もともとの姿であればワガハイも問題なく振り回せるのだ。
別に、負け惜しみでは、ないのだが。

「やっぱり、マリオさんはすごいよな」

「ああ、あれを見たら憧れるしかないよな」

「あの脚力にあの腕力、男なら誰もが憧れちまうぜ」

どうやらマリオのすごさに他の人たちも感心しているらしい。

自分のことではないのだが、それでもマリオが褒められているのは嬉しいものを感じる。

それはナハトも同じようで、ニヤニヤとちよつとだけ危うい表情になっていた。

そんな視線や言葉など聞こえていないかのようにマリオはサンドバッグを叩いていく。

右、左、右、左、右、右、左のスマツシュ。

吊るしている鎖が軋む音をならしながらサンドバッグは大きく揺れる。

徐々に、徐々にマリオのラツシュの速度は上がる。

右、左、右、左・・・

けっして途切れることはない連打。

マリオの体はリズムを刻みながら揺れていく。

いつの間にか、サンドバッグは左右からの連打によって、ちようど中間で停止していた。

サンドバッグが揺れずにちようど中間で止まっているということ。

それは簡単に言ってしまうえば左右からの拳の威力が同等だということ。

付け加えるならかなりの速度で左右から殴っているということもあるのだろうが、それよりも同等の威力だということの方がはるかにスゴい。

普通、人間には利き手というものがあり、利き手の方を誰もがよく使うだろう。それによって利き手の方が必然的に筋力がわずかにでも大きくなるのだ。

しかし、マリオはほぼ同等の威力でサンドバッグを殴ることができている。

これは左右の腕の筋力がほとんど同じくらいに鍛えられていることの証明になるのだ。

マリオの動く速度はさらに上がっていく。

左右にリズムを取っていることによつて体の動きは最小限かつ最大限に動きを利用できる円状の動きに。

そして、いつしかその動きは“無限”を表す記号をなぞるかのようになっていた。

第326話

何度も響き渡るサンドバッグを殴打する音。

その音は途切れることがなく。

マリオの強さをハッキリと表していた。

左右に体を揺らしての連続の殴打。

揺れる体の動きは“無限”をなぞっており、それを体現するかのように連打は止まらない。

マリオの放っている“無限”の連打。

その名を……“デンプシー・ロール”と言った。

「シェアツ!!」

一際大きな音をたて、サンドバッグが水平になるほどにまで打ち上げれる。

確かにサンドバッグは殴るためのトレーニンググッズであり、打ち上げられることもおかしくはないのかもしれない。

だが、それでもかなりの重量があつて普通の人であればそこまで打ち上げることなど不可能なはずなのだ。

一時期は衰えたかもしれないと嘆いていたのだが、それは嘘だったのではないかと思えるほどのパワフルさだ。

「……クツパ、あれつて打ち上がるものなの？」

「いや……ま、まあ？」

正直なところ、ワガハイでもサンドバッグを水平近くにまで打ち上げることはできなかった。

できたとしても70度くらいが限界だったような気がする。

しかしマリオは水平にまで打ち上げることができた。

それはつまるところ、今のマリオはもともとのワガハイの力を越えているということ。

いつのまにそれほどまでの力を得ていたのか。

サンドバッグを殴るのを止め、ドリンクを飲んでいるマリオにナハトと共に驚きの視線を向けてしまった。

視線に気づいたのか、マリオは軽く微笑みながらこちらに歩いてきた。

「やっぱり、体を動かすのは気持ちいいな」

「マリオ、かつこよかったよ」

「貴様、いつのまにあれほどの力を……」

ドリンクを飲み終え、タオルで汗を拭きながらマリオは楽しそうに言う。

そんなマリオに思わず尋ねてしまう。

もしかしたら今まではマリオは手加減をして自分と戦っていたのではないか。

もしもそうなら自分とはとんだ間抜けなのではないか。

そんな考えが頭の中に浮かんできてしまう。

「あー………なんだ………言わないとダメ、か？」

「ダメなのだ」

気まずそう、いや恥ずかしそうに頬を掻きながらマリオは言う。

なにか恥ずかしいことでもあるのだろうか。

まあ、それで言わなくて良いと言うわけにはいかぬのだが。

「えつとだな．．．．．、お前たちのことを守っていきたくって思って、な」

「そ、そうだったのか．．．．．」

マリオは顔を赤くしながら自身が強くなった理由を答えた。

聞いておいてなんだが、聞いているこっちも恥ずかしくなってしまった。

その証拠にナハトも顔を赤くしてしまっている。

ワガハイとナハトが顔を赤くしているあいだに、マリオは逃げるように次の運動器具

のところに行ってしまった。

第327話

マリオの言った言葉が頭から離れない。

“えつとだな……お前たちのことを守っていききたいって思って、な”

恥ずかしそうにしながらも言われたその言葉はワガハイたちの胸にしっかりと届き、どうしようにもないほどの熱を放っていた。

その証拠と一緒にマリオの言葉を聞いていたナハトは珍しく顔を真っ赤にして固まってしまう。

かくいうワガハイも恐らくは同じような表情を浮かべていることだろう。

「……………守っていききたいって言われた」

「であるな……………」

しみじみと、深く、絶対に忘れないよう噛み締めるようにナハトは呟く。

もしかしたらその眩きはワガハイに言ったものではなかったのかもしれないが、そんなことを気にする余裕もそこまでないので反射的に答えてしまった。

マリオはすでに次の運動器具のところでトレーニングをしている。

今いるこの場所からマリオの顔はちゃんと見えないが、それでもチラリと見える耳が赤いことからマリオも顔を赤くしているのだということがうかがえた。

しかし、1つだけマリオの言葉に気になることはある。

「………ナハト」

「なに？」

マリオの言葉に嬉しく感じつつも、1つだけ気になったことを考えながらナハトに声をかける。

どうやらナハトは気になるようなことはなかったらしく、不思議そうにこちらを見てきた。

「守っていききたいって言われたな」

「うん、そうだね」

「守っていききたい、か……」

「どうかしたの？」

繰り返して言ったが、ナハトにとくに気にした様子はない。

これはワガハイが気にしすぎなのだろうか。

だが、それでも気になってしまうものは気になってしまうのだ。

「ナハト、ワガハイはな……、マリオに守られるだけではなく、ワガハイもマリオのことを助けられるようになりたいのだ」

「あ……、なら、私もなりたい」

ワガハイの言葉にナハトもようやく気づいたのか、ハツとした表情になる。

マリオは純粋にワガハイたちのことを守れるようになりたいと思っているのである。うことはマリオの様子から分かっている。

しかし、ワガハイは自分が守られているだけなことが気になってしまうのだ。

マリオにそんな意図はないのだろうが、ワガハイたちのことを弱いと言っているよう

にも感じてしまったのだ。

だから、ワガハイはマリオに守られているだけの弱い存在ではなく、マリオのことを助けられるような存在になりたいのだ。

ワガハイの言葉にナハトも瞳に強い意思を込めて答えるのだった。

……今、ここにはピーチ姫はいないが、たぶん同じようなことを考えると思うので、あとで伝えれば問題はないだろう。

第328話

▼アナタは、マリオに守られているだけの存在ではなく、マリオのことを助けられるような存在になりたいと決意をした。

なにかデータがSAVEされたような気がするが気のせいだろう。

さて、助けられるような存在になると決めたのは良いが、どうすればそうなれるのだろうか。

単純に考えるのであれば体を鍛えるということになるが、今のワガハイの体では鍛えたくらいでシェイプアップされるだけなのがオチだろう。

いや、まあ、今の体だからこそマリオと結ばれることができているわけなのだが、ではどうすれば良いのだろうか。

「ナハト、どうすればマリオを助けることができるのだ……?」

「ん……、家事とか」

ワガハイの言葉にナハトは少しだけ考えると助ける方法を1つあげた。
ナハトの言葉になるほどと頷くが、1つ問題があることに気づく。
と言うか、その方法をワガハイができない理由が目の前にいた。

「なるほどな。だがな．．．．．キサマの方が家事に関しては得意であろうが」
「．．．．．確かに」

そう。

ナハトは家事に関して、ピーチ城で掃除や料理などの仕事をしていることよってメ
キメキとその実力を伸ばしているのだ。

すでにその実力はルイージやキノじいにも認められるほどになっており、ワガハイや
ピーチ姫では敵わないほどの高みにあるといっても過言ではない。

「他には．．．．．、知識面でのサポートは？」

「それに関しては自慢ではないがピーチ姫の方が教養があるな．．．．．」

次にあげられた方法は知識をもってしてマリオのことをサポートすること。

しかし、これもワガハイにはできないことなので、首を横に振る。

自慢ではないし、自業自得であることは理解しているのだが。

ワガハイはそこまで勉強が得意ではない。

クツパ城での仕事に関しては難しいことはカメックおばばに任せてしまっているの
で、それほど勉強もいらなかったことも理由の1つではあるが。

そのため、どうしても知識面に関してはきつちりと勉強をしていたピーチ姫に負けて
しまうのだ。

こればかりは勉強が嫌であり取り組んでいなかったことも原因なので文句の言
い様はない。

「……………ごめん、私は他に思いつかない」

「そうか……………」

申し訳なさそうにナハトは謝る。

ナハトもきちんと考えてくれていたのにその方法をできないのはワガハイの能力不
足ゆえ。

そのため、むしろあげてくれた方法を採用できなかつたワガハイの方が申し訳なく感じる。

「ワガハイにできることはなんなのだろうか……」

運動器具を使ってトレーニングをしているマリオのことを見ながら小さく呟くのだった。

第329話

マリオのことを助けるためになにができるのかを考えているうちに、いつの間にかマリオはトレーニンングを終えてしまっていた。

それほどまでに長い時間を考える時間にあてていたとは思っていなかったのも、少しだけ驚いてしまう。

マリオがシャワーを浴びている間に、このジムの受け付け近くに置いてあるシェイカーを借りてプロテインを作ってしまった。

プロテインやシェイカーなど、体を鍛えるために必要なものはだいたい揃っているのがこのジムの良いところである。

プロテインを作り終えてしばらくすると、シャワーを浴びていつもの服に着替えたマリオが戻ってきた。

戻ってきたマリオにプロテインを渡すと、マリオはそれを美味しそうに飲んでいく。トレーニンングによって壊れた肉体を強く修理するために高タンパクなプロテインは

効果が高いのだ。

なお、プロテインは大量に取ったからと言って筋肉になる量が増えるわけではなく、あくまで筋肉を修理するための材料なことを忘れてはいけない。

「ぶはッ、ふう、ありがとうクツパ」

「なに、待っている間は暇だったからな。それにキサマのプロテインの量はきちんと覚えていたのだ」

一気にプロテインを飲み干したマリオは口許をぬぐいながら言った。

マリオにも言っているように、マリオが待っている間は暇だった。

まあ、それ以外にも考えを一度リセットしたかったというのもある。

「さて、それじゃあ晩御飯を食材を見ながら決めようかな。2人はどうする?」

「残念だけど、晩御飯はお城で食べる」

「ワガハイもそうなのだ」

マリオの家の冷蔵庫の中身は今日の朝食と昼食によってほとんどなくなっている。

そのことを思い出しながらマリオは尋ねた。

マリオの言葉は嬉しく、反射的に食べると返事をしたかったのだが、なくなると断念をする。

これでもしもナハトが晩御飯を食べると言っていたなら即座にワガハイも食べると言っていただろう。

「なら俺は自分の晩御飯だけを考えれば良いか」

そう言ってマリオはキノコモールへと向かっていく。

最初に向かうのは肉屋だ。

「おう、いらっしやい！」

「ええと、今日は………しょうが焼きにするかな。薄目のバラ肉を貰えるかな」

「あいよ！はっはっは、両手に花じゃねえか！」

マリオは並んでいる肉を見て晩御飯を決めたらしい。

まあ、マリオはもともと肉、魚、野菜の中では肉が一番好きなので肉屋に最初に来て

しまうのは仕方がないことなのだろう。

念のために言っておくと、マリオは別に食に関して好き嫌いはない。一番好きな食材がなにかと聞かれたら肉を答えるというだけなのだ。

ちなみにワガハイも食に関して好き嫌いはそのままでなく。

一番好きな食材は肉になるのだ。

マリオと同じなのでちよつと嬉しい。

第330話

キノコモールで肉、魚、野菜、その他の食材を手に入れてマリオは家への道を歩く。行く先々で両手に花と言われたのは恥ずかしかったが、嬉しくもあった。

そう感じたのはナハトも同じだったようで、鼻唄を歌いながらマリオの隣を歩いている。

「しように焼きの材料以外にも食材を選んでいたが……、そんなにあつて大丈夫なのか？」

「んー……、まあ、ちよつと多いかもしれないけど、大丈夫だと思うよ」

ワガハイの問いにマリオは少しだけ考える仕草をみせ、へニヤリと笑いながら答えた。

そんな表情も可愛らしいと思つてしまうのは惚れた弱みというやつなのだろう。

夕日によってオレンジ色に染まる道は、昼間に通ったときとは違う表情を見せてくれている。

そんなオレンジ色の道を歩いていくマリオとナハトの姿も普段とは違うもののようにも感じられた。

「そういえば、結局クツパはなんのために朝からいたんだ？ ずっとカメラを回してるみたいだし」

「たしかに、私よりも先にマリオの家に行った。……もしかして泊まっていた？」
「いや、マリオの日常を撮ろうと思ってな。だから朝早くに『愛鍵』^{あいかぎ}を使って家に入らせてもらったのだ」

マリオはワガハイがずっと構えているカメラを指差して尋ねる。

まあ、たしかにずっとカメラを向けられていては気になるか。

ワガハイはカメラを軽く叩きながら朝から撮影をしていた理由を答える。

念のために言っておくが。

愛鍵のイントネーションを間違っていると思われるかもしれないが、これに関しては間違っていないと断言するので問題はないのだ。

「………起きたときにはすでにいたみたいだけど。いつからいたんだ？」
「む、朝起きてからすぐにだな」

呆れたような表情だが、おかしいことを言っただろうか。

まあ、気にしなくてもよいか。

そんな話をしながらマリオの家に到着した。

「そろそろ帰ろうかな。やることもできたかもしれないから」

「ふむ、時間も時間だしワガハイも帰るか」

「そっか………」

マリオの家に到着し、玄関でワガハイとナハトは言う。

楽しい時間はあっという間に過ぎるものとは言うように、名残惜しいが帰らなければ
ならない時間だ。

ワガハイとナハトの言葉にマリオは短く答える。

「それじゃ、またね」

「ではな」

「おう、またな」

手を軽くあげてワガハイとナハトはマリオの家を後にする。

別れは再会の約束。

別れるときは寂しいけれど、次に会ったときはその分嬉しくなる。
それが人と人との繋がりのだろう。

第331話

城に向かう途中まではナハトも同じ道なので、ナハトも一緒に歩いていった。

マリオの家から城に向かって歩きながらワガハイは考える。

マリオに守られているだけではなく、マリオのことを助けられるようになる。

そう考えることはできるのだが、明確に何をすれば良いのかが思い浮かばずにいた。

ナハトは家事。

ピーチ姫は知識。

2人のできることを考えるとワガハイ自身にできることはないのではないかと思ってしまうのだ。

「はあ………」

「どうしたの？」

どうすれば良いのか分からず、思わずため息を吐いてしまう。

ワガハイのため息が聞こえたのか、ナハトは不思議そうにしながら尋ねてきた。

ふと思えば、最初に会ったときはナハトもかなり変わった。

最初の頃は嬉しくて暴走したただの言っていたが、なによりもマリオを優先してすぐに抱きついたりしていた。

さらに言えばマリオ以外の他人にもそこまで興味はなく。

マリオが話しているから反応をしている程度だったのだ。

それが今ではどうだ。

掃除を、洗濯を、料理を……

家事のすべてを学び、ワガハイやピーチ姫よりもできるようになていった。

そして一番の変わった点として、他人に無関心でなくなったことがあげられる。

今のナハトはキノピオたちに家事を教わったり、キノピコと衣服について話したりをしている。

加えて言えば、ため息を吐いたワガハイに対して少しだけ心配そうな表情を浮かべているのだ。

「なに……、キサマはマリオの助けになれるのだろうか、ワガハイには助けにな

「れることがなさそうでな……」

言っても仕方がないことだろうし、自分が学んでこなかったことによる自業自得なのだとかつているが、それでも悔しいものがある。

ワガハイの言葉にナハトはキョトンとした表情を浮かべていた。
なにか気になることでも言ったのだろうか。

「……クツパもマリオの助けになっているよ？」

「……なに？」

ジツとこちらを見ながらナハトは言う。

一瞬、ナハトがバカにしているのかも思ったが、ナハトの様子からその様な意図は感じられない。

であるのなら、ナハトは本気でそう思っていると言うことなのだろうか。
ナハトの言葉にワガハイは足を止めてナハトを見返した。

「ワガハイが……、マリオの助けに……？」

「うん」

恐る恐るナハトに向かって確認の意味も込めて尋ねると、ナハトは変わらずにハツキリと頷いた。

「どうやらワガハイを元気づけたりするための言葉とは違うようだ。」

「まあ、ナハトが元気づけるための言葉を言うかは分からないのだが。」

第332話

ナハトの言う、ワガハイもマリオの助けになつていると言うのはどう言うことなのだろうか。

ワガハイはとくになにかをした覚えもないのだが、ナハトの言い方的には今日の時点ではなにか助けになることをしていたと言うことのように感じる。

「分からない……………?」

「まあ、な……………。本当にワガハイはマリオの助けになっていたのか?」

ワガハイの様子から不思議そうに首をかしげながらナハトは尋ねる。
ナハトは気づいているようだが、本当に思い当たることがないのだ。

「ほら、マリオがシャワーを浴びてるとき……………」

「あのとき…….?」

ナハトに言われ、マリオがシャワーを浴びていることを思い出す。

と言ってもマリオは更衣室の中にあるシャワーを使っていたのでどんな状況なのかは知らないのだが。

そのときにワガハイがやったことと言えば…….

「マリオの飲むプロテインを作ったこと、か?」

「うん、それ」

ワガハイの言葉にナハトは頷きながら答えた。

どうやらナハトはワガハイのやったことがマリオの助けになっていると思っただけだが、ワガハイにはとてもそうだとは思えなかった。

やったと言っても結局はプロテインを作った程度。

これくらいなら誰でもできることではないだろうか。

「いや、あれは誰でもできるだろう。それにワガハイは待っている間が暇だっただけ

で………」

「でも、誰でもできることをやれるのはスゴいことだつてキノじいは言つてた。それに、私はプロテインを作ることなんて思いつかなかつた」

ワガハイの言葉をナハトは首を横に振りながら否定する。

ナハトの言いたいことも分からなくはないのだが、それでも納得はできなかつた。

「だが、今度からはナハトもできるではないか」

「それはできなくはない。でも、必要なときと必要じゃないときもあるんじゃないの？」
「まあ、な」

ナハトの言うようにプロテインは必ず必要というわけではない。

場合によつては飲まない方がいいときもあつたりするのだ。

「そういった見極めができるのがクツパ」

「む、むう……、あまり助けになれているようには思えぬのだが………」

マリオの助けになれていることがあって嬉しくはあるのだが。
ナハトやピーチ姫のできることに比べると些細なことのように感じてしまい、どうにも素直に喜ぶことができない。

「それと、悔しいから言いたくないけど」

「む、まだなにかあるのか？」

「……マリオはクツパと話しているときが一番リラックスしてる。私たちの中で一番マリオが落ち着く相手はあなた」

「……へ？」

ナハトの言葉にワガハイはポカンとした表情になってしまった。

ワガハイと話しているとき、マリオが一番リラックスしている？

にわかには信じがたいが、ナハトの表情からは嘘を言っているような雰囲気は感じられない。

「それは、本当なのか……？」

「間違いない。クツパ、あなたは家事や知識でマリオを助けられないって言ってたけど、

私たちが助けにくいマリオの「心」をクツパは助けられるの」

確信を持った様子でナハトは言う。

そんなナハトをワガハイは信じられない気持ちで見返すのだった。

第333話

ワガハイがマリオの“心”を助けることができる。

ナハトの言葉をワガハイはじっくりと考える。

“心”を助けられるということは、ワガハイがマリオの“心”にもつとも近いということと間違いないだろう。

そのことを理解し、思わず顔が赤くなってしまふことを理解した。

「私の家事や、ピーチ姫の知識は、別に私たちじゃなくても助けることができる。でも、クッパが助けられる“心”だけは簡単に助けられるものじゃない」

「そう、なのか……」

少しだけ寂しそうな表情を浮かべながらナハトは言う。

家事や知識で助けることのできないことを悔しく思い、それでも“心”を助けること

のできるワガハイ。

「心」をうまく助けることはできないが、家事ができてその方面で助けることのできるナハト。

互いに相手のできることを羨ましく思っていたのだろう。

そのことを理解し、ワガハイは先ほどまでの自分の言葉が気づかないうちにナハトのことを傷つけていたのではないかということに気づく。

「ナハト・・・・・・・・ワガハイは・・・・・・・・」

「言わないで」

謝ろうかと声をかけると、それを察したのかナハトはワガハイの言葉を遮った。

ナハトに遮られ、ワガハイは思わず口をつぐんでしまう。

「謝らないで。今、あなたに謝られても惨めな気持ちになるだけだから・・・・・・・・」

「そう、か・・・・・・・・」

ワガハイから見えぬように体を逸らしながらナハトは言う。

今のナハトがどんな表情を浮かべているのかは全く見えず、声色はやや震えているようにも感じられた。

見ればナハトの手は強く握りしめられており、力が込められていることが見て分かった。

しばらくしてから、ナハトはゆっくりと握りしめられていた手を開き、こちらへ顔を向ける。

「今は……、今はまだクツパよりもマリオの『心』を助けられないけど……、必ず……、必ず私がマリオの『心』を一番助けられるようになるから……、！」

「ツ……!!」

まっすぐにこちらを見ながらナハトは言う。

その言葉はおそらく自身への発破の意味も含む宣戦布告の言葉。

ハッキリとしたナハトの強い意思を感じとり、思わずおされてしまう。

しかし、ここでおされてばかりでは魔王を名乗っていたワガハイの名折れ。

それにナハトがここまで言っているのだから、謝るのも野暮と言うものなのだろう。

ナハトの言葉にワガハイはニヤリと口もとをゆがめて口を開いた。

「ふふん。良いだろう、そこまで言われてはワガハイも黙ってはおられぬな。キサマの全霊をもって挑んでくるがいい！ワガハイも相応のおこないをもってこの地位を磐石のものとしようではないか！」

「負けない！」

「くくく、楽しみにしておるぞ？」

気合い十分にこちらを見てくるナハトの視線を背に受けながら、ワガハイは自分の城へと向かって歩くのだった。

城に帰ってから気がついたのだが。

ピーチ姫がいなかったのに、帰り道であのような雰囲気になってよかつたのだろうか。

いや、まあ、いなかつたものは仕方がないのかもしれないが、ピーチ姫一人だけ蚊帳の外感がすさまじくあるように感じてしまう。

もしかしたらナハトが言ってくれるかもと考えたが、あのナハトの雰囲気では伝える余裕すらなさそうにも思える。

まあ、今日あつたことは後々に話せばいいだろう。

そんなことを思いながら、ワガハイはカメラを置きに自室に向かうのだった。

第334話

ピーチ姫とクツパの仕事の休みの予定の擦り合わせも終わり、結婚式の日付も決まった頃。

マリオはサムイサムイ村を歩いていた。

マリオがサムイサムイ村に来ている理由はとても簡単なこと。

依頼していた指輪が完成したと連絡が来たからだ。

しかし、貴金属店「クリスタラー」へと向かいながらマリオは少しだけ難しい表情を浮かべていた。

「はあ………」

どうやらマリオはなにかに悩んでいるらしく。

物憂げにため息を吐いた。

そして、晴れぬ表情のまま「クリスタラー」の扉を開けた。

「いらつしやい、待つてたわあん……………」

「やあ……………」

扉を開けて入ってきたマリオに「クリスタラー」の店員は楽しそうに応じるが、マリオの様子がおかしいことに気づき、首をかしげる。

マリオは店員が自分のことを不思議そうに見ていることにも気づかないのか、ゆつくりとした動作で手をあげて答えた。

「元気がないわねえん。なにかあったのかしら？」

「まあ、ちよつとね……………」

店員の問いにマリオははつきりとは答えずに誤魔化そうとした。

しかし、マリオの様子からなにかを悩んでいるであろうことは分かりきっているの
で、店員はマリオのことをジツと見つめる。

「なにか悩みがあるのなら聞いわよお？」

「ん．．．．．いや、でもなあ．．．．．」

店員の言葉にマリオは口を軽く開いてなにかを言おうとするが、それでも躊躇して口を閉じてしまう。

そんなマリオの様子にも店員は苛立ったりすることもなく、マリオが自分から悩んでいることを答えるのを待っていた。

「．．．．．そうだな。自分だけで悩むよりも良いか．．．．．」

「ええ、一人で悩み続けるよりもいいはずよ」

しばらくして、マリオは悩み続けるよりも相談した方が建設的だと思い直したのか、口を開いた。

マリオの言葉に店員はお茶を用意しながら頷いた。

「実は、結婚式の日付が決まったんだ」

「あらま。それは良かったじゃない。いつやるのかしら？あと、私たちも参列はできる

のかしらあ？」

「えっと、結婚式は来週だよ。参列に関してもとくに制限とかはないから大丈夫」

マリオが最初に言ったのは結婚式の日付が決まったこと。

店員はマリオの言葉に嬉しそうに手を叩いて詳しい日付や、参列できるのかを尋ねる。

「あら？でも日付が決まったのなら嬉しいことじゃないのかしら？なにに悩んでいるの？」

「そのだな……」。日付が決まったときは嬉しかったんだけど、結婚式の日が近づくにつれて本当に自分に3人を幸せにできるか不安になってな……」

「なるほど。マリッジブルーってやつになっちゃったのね……」

マリオがなにに悩んでいるのか。

その答えを理解した店員は腕を組みながら頷くのだった。

第335話

「マリオがなにに悩んでいるのかを理解した『クリスタラー』の店員は、マリオの顔をジッと見る。」

マリオの表情は今までに見たことのある明るいものではなく、悩んでいるのだと言うことがハッキリと感じられた。

「マリオちゃんは自分がピーチ姫様たちのことを幸せにできるのかが不安になっちゃったのね……………」

「ああ……………」

店員の言葉にマリオはコクリと頷いた。

店員の言葉はマリオが先ほど言った言葉そのままではあるのだが、自分で言うのと他人から言われるのでは若干の違いがあるのだ。

「・・・・・・・・ふう、それなら一肌脱ぎましようかね」

「え・・・・・・・・？」

「マリオちゃん、ちよつとサムイサムイ雪原に先に行つていてちようだい。私も準備をしてから向かうわ」

「・・・・・・・・分かった」

店員は短く息を吐くと、用意していたお茶などを片付け始める。

店員の言葉にマリオは首をかしげていたが、とくに反対する理由もないので頷いた。

扉を開けてサムイサムイ雪原へと向かうマリオを見ながら店員は一着の服を取り出すのだった。

サムイサムイ雪原。

サムイサムイ村から東に行つたところにある雪原。

雪原の名の通り、雪が積もつた広い平坦な原っぱであり、ちらほらと雪の積もつた木が生えている。

“クリスタラー”の店員に言われた通りにマリオはここで店員を待つていた。

「待たせたわね」

「いや、そんなに待っていないけど……、その格好は……?」

待っていると背後から店員の声が聞こえてきたので、マリオは振り返りながら答える。

振り返った先にいた店員の姿にマリオは驚き尋ねた。

現れた店員の姿は店にいたときの制服からガラリと変わって道着になっており、その姿はまるでどこかの武術家のようにも見える。

あまりにも先ほどまでの姿と違うために、マリオはポカンとした表情になってしまっていた。

「ふふふ、古来より悩んだときは体を動かして頭を真っ白にすれば良いと言われているのよ。だから、着替えてきたの」

「えっと、つまりは……?」

「私と戦いましょう」

「……はい?!」

店員の言葉にマリオは驚きの声をあげる。

まあ、マリオからしたら当然の反応だろう。

貴金属店の店員がいきなり道着を着て戦おうなどと言ってくるのだ。誰でも困惑するに決まっている。

「いや、気持ちは嬉しいけど、危ないんじゃないや……」

手を前に出して待ったをかけながらマリオは言う。

確かに店員の体はかなり鍛えられているようにも見える。

しかし、それでも戦うとなれば危険なのではないか。

そんなことを考えながらマリオは戦いを回避しようと考えていた。

「あらあら、危ない、ねえ。……それは――」

「ツツ――?!?!」

瞬間。

言い様のない寒気がマリオを襲う。

その寒気がどこから来ているのか。

そんなことを考える暇などなく、マリオは反射的に腕を体の前で交差させた。

直後、マリオの交差させた腕に大きな衝撃が叩き込まれる。

その衝撃は凄まじいもので、不意打ちぎみに受けたとはいえマリオの体が数メートルは後方に吹き飛ばされていた。

「———どちらのことかしらね？」

何が起きたのか分からず、マリオは衝撃でやや痺れる腕をゆっくりと降ろしながら前を見る。

そこには拳を突き出した姿勢の店員がおり、笑みを浮かべながらマリオのことを見ていた。

第336話

拳を突き出した姿勢の店員の姿を見てマリオは息を飲む。

目の前にいるのは「クリスタラー」の店員ただ1人。

それはつまり、先ほどマリオが感じた寒気は店員が放ったものだという事。

そして、そのことからマリオが反射的に交差させた腕に大きな衝撃を打ち込んだのがこの店員だと言うことを如実に表していた。

「ふむふむ、分かつてはいたけど危機回避能力は高いみたいね」

「あんたは………いつたい………」

マリオが驚いているなか、店員はマリオの反応から能力を推測する。

どうやら店員からしてみるとマリオの危機回避能力は納得のいくものだったようで、嬉しそうに頷いていた。

そんな店員の姿にマリオは言葉を途切れさせながら尋ねる。

まあ、マリオの驚きも当然のものだろう。

鍛えられているであろうことは肉体を見た時点で分かっていたのだが、それでもここまでの強さだとは予想していなかったからだ。

「そうねえ……、キノコタウンにある道場は知っているかしら？」

「え、あ、ああ……シシヨーがいるところだったかな……」

店員の問いにマリオは頷きながら答える。

店員の言った道場とは、キノコタウンにある道場のことで、責任者のシシヨー、門下生のチエンとリーがそこで体を鍛えているのだ。

マリオもその道場に行つて体を鍛えたことがあるので、その道場のことはよく憶えていた。

「じゃあ、シシヨーの師匠がキノじいだってことは知っているかしら？」

「そうだったのか?！」

全く予想していなかった言葉にマリオはさらに驚いて声をあげる。

マリオの知っているキノじいは書類の整理をしていたり、忙しそうに走り回っている姿しか知らないからだ。

と、ここでマリオは疑問に思う。

どうしてこの店員はシシヨの師匠がキノじいだと言うことを知っているのか。

もしかしたら有名なことなのかと記憶を辿ってみるが、誰かがそんなことを言っていた記憶もないので、おそらくはあまり知られていないことなのだろうとは思う。ならばその情報をどこで知ったのか。

「・・・・・・・・・・なら、それを知っているあなたは・・・・・・・・・・」

「ふふふ・・・・・・・・・・。そういえばちゃんと名乗っていなかったわね？」

マリオの問いに店員は意味深に笑みを浮かべる。

店員の言葉にマリオは店員の名前すら聞いていなかったことに気がついた。

「あるときはサムイサムイ村の貴金属店 “クリスタラー” の店員。またあるときは強さを求めて肉体を鍛えた格闘家・・・・・・・・・・」

マリオのことを見つめながら店員は言う。

「しかしてその実態は！キノじいたちの師匠をしていたもの、ダイ・シショーよ！」
「なん．．．．．だと．．．．．?!」

一呼吸溜めを作り、店員、ダイ・シショーは大袈裟なまでの動作をしながら名前を名乗った。

まさかのキノじいやシショーの師匠と言う言葉にマリオは何度目か分からない驚きの声をあげるのだった。

第337話

店員の、ダイ・シシヨーのキノじいとシシヨーの師匠という発言にマリオは驚きのまま固まっていた。

が、それと同時にマリオは納得もしていた。

道場で戦ったシシヨーがかなり強かったことは今でもハッキリと憶えているのだが、そのシシヨーの師匠だというのだから先ほど感じた寒気や、腕に打ち込まれた拳の当然のものだと理解したからだ。

「さ、それじゃあ………。続きを や ろ う か」
「くッ?!」

余計な話は終わりだというように、ダイ・シシヨーから先ほども感じた寒気が発せられる。

寒気を感じ取ったマリオは先ほどと同じように反射的に腕を体の前で交差させた。しかし先ほどと違うのはマリオの腕に衝撃が来なかったことだろう。まあ、打撃が放たれていないというわけではないのだが。

「が………は………ッ?!」

マリオの腕をすり抜けるようにしてダイ・シシヨの拳がマリオの腹部に突き刺さる。

その一撃は重く。

気を抜けばその一撃だけで意識を持っていかれていた可能性さえありえただろう。

しかし、それよりも何よりも驚くべきことがマリオにはあった。

マリオが驚いたこと。

それは、ダイ・シシヨの動きが見えなかったことだ。

「脆い、な………。ちゃんと鍛えているのか?」

「ぐつ、ゲホツ………ゲホツ………」

マリオの腹部から拳を話ながらダイ・シシヨーは呟く。

その口調は先ほどまでのおねえ口調ではなく、威圧感すら感じられる口調になっていた。

そんなダイ・シシヨーの言葉にマリオは答えられず、腹部を押さええながら咳き込んでいる。

「いつまで咳き込んでいるんだ？」

「ツツ!!」

咳き込んでいたマリオに向かって容赦のない蹴りを放ちながらダイ・シシヨーは言う。

再び寒気を感じたマリオは咳き込み、痛む体に鞭を打ちながら横へと転がってダイ・シシヨーの蹴りを避ける。

その姿は今までのマリオを知っているものからすれば信じられないほどに無様なものに見えてしまうだろう。

しかし、マリオにそんなことを考えている余裕はない。

なぜなら、ちよつとでも動くことを躊躇してしまえば即座にダイ・シシヨーの一撃が

直撃してしまうからだ。

「どうした？避けるだけで良いのか？」

「ちい！てえあああああ!!!」

ダイ・シシヨーの言葉にマリオは小さく舌打ちをし、勢いをつけて殴りかかる。殴りかかってくるマリオの姿に、ダイ・シシヨーはニヤリと笑みを浮かべると、防御の姿勢もとらずに動きを止めた。

防御の姿勢をとらないと言うこと。

それはつまりマリオの攻撃が防御をするに値しないと言うことの証明。

そのことを理解したマリオは、怒りを抱きながらダイ・シシヨーへと拳を放った。

大きな打撃音が周囲に響き渡る。

この一撃は間違いなく今出せるマリオの全力のもの。

その一撃はトレーニングジムでのサンドバッグを水平にまで打ち上げたときのものとは比べ物にならないほどの威力を持っていたはずだ。

その一撃を受け、ダイ・シシヨーは……

「軽いな・・・」

「なツ・・・?!」

平然と、何事もなかったかのようにその肉体で受け止めるのだった。

第338話

マリオの現時点での最高の一撃をダイ・シシヨーは防御もせずを受け止める。

加えて言えばダメージを受けているようにも見えず、痩せ我慢などをしているようにも見えない。

自身の出せる最高の一撃を放ってダメージを与えられなかった衝撃が大きいのか、マリオはそのまま動きを止めた。

止めてしまった。

「戦いの最中に動きを止めているんじゃないか?!」

「な、ぐあつ?!」

自身の体を殴った状態で動きを止めているマリオの腕をダイ・シシヨーは掴むと、そのまま近くに生えている木へと向かってマリオを投げつけた。

攻撃が効かなかったことに驚き、固まっていたところに追い打ちをかけるように投げられ、マリオはまともに受け身をとることもできずに木にその体を叩きつけられた。

「つぐ……、つふ……はあ……はあ……はあ……はあ……」

「はあ……。ぜんぜんじゃねえか」

荒い息をしながら立ち上がろうとするマリオの近くに移動し、ダイ・シシヨーは話しかける。

その言葉には失望の色が含まれているように感じられる。

「なんだかなあ……。マリオ、おまえさん、戦いに完全に集中できてねえだろ？」
「げほっ……。それは……」

ダイ・シシヨーの言葉にマリオは咳き込みながら言葉に詰まる。

店にいるときも言っていたが、マリオは悩んでいた。

それによつて自分では気づかないレベルではあるが、戦いに集中できなかつたのだ。マリオの様子からそのことを確信したのか、ダイ・シシヨーは小さくため息をつく。

「はぁ……、そういや、店でも悩んでるって言ってたな」

ダイ・シシヨーの言葉を聞きながらマリオは体のダメージを少しでも癒そうとする。そんなマリオの様子に気づいてはいたが、ダイ・シシヨーはとくになにもしない。

「もう悩んでるならやめちまえれば良いんじゃないか」

「え……」

「悩んでるせいで拳にも悩みが乗って鈍ってやがる。それに自分でも3人を幸せにできるのか不安なんだろう？ だったらいつそのことやめちまえ。うじうじと悩んでいるお前にはそれがお似合いだ」

突き放すように言うダイ・シシヨーにマリオは言葉を失う。

今、ダイ・シシヨーはなんと言った？

やめてしまえ？

やめるとはなんのことを？

クツパたちとの結婚式を？

．．．．．ああ、そうか。

たしかにやめてしまえば悩むこともなくなる．．．．．

やめてしまえばいろいろと考える必要もなくなる．．．．．

マリオの瞳から光が徐々に消えていく。

ダイ・シシヨの攻撃と、言葉によってマリオの心は折れかけていた。

第339話

ダイ・シシヨーの言葉にマリオの瞳から光が消え、うつむいていく。

一撃一撃が重く、ダメージが蓄積されていたことも含めて、マリオの心はほとんど折れかけていた。

俺は……………

俺には……………

そんなマリオの姿をダイ・シシヨーはつまらなそうに、しかし、どこか期待を含んだ目で見ていた。

「悩みに対する明確な答えは他人にはない。その答えは悩みを抱いている本人の内にあるのだ……………」

やめてしまえば楽になれる．．．．．
そうだ。

もともと、俺には3人を幸せになんてできなかつたんだ．．．．．
ダイ・シシヨウの言うとおり、俺には．．．．．

『マリオ．．．．．』

不意に．．．．．、声が聞こえた気がした。

それと同時に1人の姿がマリオの脳裏をよぎる。

これは．．．．．クツパ．．．．．？

マリオの脳裏をよぎったのはクツパの姿だった。

それに続くようにピーチ姫、ナハトの姿も現れる。

3人は寂しそうな表情を浮かべながらこちらを見つめてきている。

ああ………

そうだ………

そうだった。

簡単なことだったんだ。

脳裏をよぎった3人の姿に、マリオは悩むあまりに忘れてしまっていた思いを思い出した。

そして、マリオはうつむいたままユラリと立ち上がる。

「忘れていたよ………。大事なことを………！」

「ふっ………。良い表情かおになったじゃないか」

うつむかせていた顔をあげ、マリオはまっすぐにダイ・シシヨーを見る。

その瞳には消えかけていた光がハッキリと戻ってきていた。

そんなマリオの表情を見てダイ・シシヨーは嬉しそうに呟く。

「悩みは晴れたみたいだな？」

「ああ、大事なことを思い出せたよ」

ダイ・シシヨーの問いにマリオは迷うことなく答える。

そのことからマリオが本当に悩みを晴らしたのだとダイ・シシヨーは理解した。

「俺は3人との結婚をやめたりなんてしない。俺は、俺の持てるもの全てを使って3人を幸せにするんだ！俺だけを信じるんじゃない。クツパが……ピーチ姫が……ナハトが……、3人が信じてくれた俺のことを信じるんだ！俺なら必ず3人を幸せにできると!!」

「くくく、言葉ならなんとでも言える。ならば示してみろ！その思いを！その未来への渴望を！」

力強くマリオは叫ぶ。

この思いはもう折れないと。

誰になにを言われたとしても悩むことはもうないと。

マリオの叫びにダイ・シシヨーは満足そうに頷きながら応えた。

言葉を言うだけならば誰にでも言える。

ゆえに、ダイ・シシヨーが望むのはその言葉を現実にするに足る力を示すこと。

悩みを晴らし、まっすぐにダイ・シシヨーを見るマリオ。

本当の戦いが始まる。

第340話

マリオとダイ・シシヨ。

2人はまっすぐににらみ合いながら雪原に立つ。

不意に、強い風が吹いて近くの木を揺らした。

ドサリ、と音をたてて枝に乗っていた雪が地に落ちる。

瞬間、2人はほぼ同時に動き出した。

「はあああああツツツ!!!」

「っせええええいッツツ!!」

ゴガンツ、と強い音が周囲に響きわたる。

それと同時に衝撃が2人の周囲の雪を吹き飛ばした。

拳をぶつけ合った態勢でマリオとダイ・シシヨーはニヤリと笑う。

マリオは悩みが晴れて十全の力が振るえることを。

ダイ・シシヨーは十全の状態のマリオと戦えることを。

「はははははっ！いい一撃だ！」

「ここからが俺の全力だ!!」

互いに拳を強く押し出して後方へと飛び退く。

飛び退いてからの着地はマリオが僅かに早い。

マリオは着地をすると同時にもう一度ダイ・シシヨーへと接近する。

それに応えるようにダイ・シシヨーも僅かに遅れながら迎撃の態勢をとった。

「そのまま来るのなら返り討ちだ！」

「そんなわけ……ないだろ!!」

「な……に……い……?!」

迎撃の態勢をとりながらダイ・シシヨーはマリオに向かって叫ぶ。

そのまままっすぐに向かってしまえば間違いなくマリオはダイ・シシヨーのカウンターを食らってしまおうだろう。

だが、それが分かかっていてそのまま正直にぶつかりに行くマリオではない。

マリオはダイ・シシヨーの拳が届く直前に地面を強く蹴ってダイ・シシヨーの頭上へと跳躍した。

先ほどマリオとダイ・シシヨーが拳をぶつけ合ったときに雪が吹き飛んだお陰で地面が現れ、強く踏みしめることができただめに可能になった動きだ。

マリオがまっすぐに走ってくると思っていたダイ・シシヨーは頭上に跳躍したマリオの姿に驚く。

「く………らええええツツツ!!」

「ツツちいいいい!」

ダイ・シシヨーの頭上にまで跳躍したマリオは、背中から魔力によって作られた炎を放出し、跳び蹴りの要領でダイ・シシヨーへと向かう。

先ほどのダイ・シシヨーへと向かって走ったときとは比べ物にならないほどの速度でマリオの蹴りがダイ・シシヨーへと迫る。

自身の頭上に跳ぶと思っていなかったダイ・シシヨーは啞然として、その対応が遅れてしまう。

回避をしようとすれば途中で間違はなくマリオの蹴りが突き刺さる。

それを直感的に理解したダイ・シシヨーは舌打ちをすると、すぐにマリオの足を受け止めようと腕を突き出した。

加速したマリオの蹴りとダイ・シシヨーの腕が衝突する。

「ツらああああああ!!!」

「ツであああああ!!!」

互いに引かぬ攻撃。

ぶつかり合う衝撃とマリオの炎によって周囲の雪がすさまじい勢いでなくなっていくのだった。

第341話

背中から放出される炎によってブースとのかかったマリオの蹴り。

そしてそれを真つ向から腕で受け止めるダイ・シシヨ。

互いに引くことはなく、周囲に積もっていた雪はほとんどなくなってしまっている。

「ツウアアアア……!!取、ったああああ!!」

受け止めた状態からダイ・シシヨは無理矢理に腕を動かしてマリオの足裏を掴む。

足を掴んだことによって受け止めやすくなったのか、ダイ・シシヨはマリオの体を少しづつ押し返していく。

マリオは炎によって体勢維持をしているとはいえ、それでも不安定な空中であることに変わりはなく。

徐々にその体もぶれ始めてきてしまう。

「くっ……、まだだ……、まだ……、こんなもんじゃ終われねええええええ!!!」

ダイ・シシヨーによって押し返されていくことにマリオは悔しそうに歯噛みするが、諦めることはなく、咆哮をあげる。

直後、マリオの足先に魔力が集中していき、火花が生じ始めた。

はじける火花によってダイ・シシヨーは手をはじかれそうになるが、意識を集中させることによってどうにかそれを堪える。

「まさか……、まさかまさか!この土壇場でその技術を憶えるとはな!!」

「ツラアアアア!!」

マリオの足を受け止めながらマリオに起きた変化にダイ・シシヨーは嬉しそうに言う。

ダイ・シシヨーの言っている技術と言うのは、マリオが足先に魔力を集中させたことを指している。

この技術は一見簡単そうに見えるが、その実かなり難しい技術で、魔力を集中させた場所とそれ以外の場所の魔力をキツチリと分割しなければならぬのだ。

当然のことだが、それ以外の場所に魔力が行ってしまえば、それだけ集まる魔力量が減って強化の割合も落ちるので、可能ならば魔力を集中させたい場所以外には魔力が行かないようにしたい。

なお、今のマリオは足と背中からの炎の放出の二点にのみ魔力が集中している。

二点集中は一点集中よりも強化の割合が落ちるのだが、そのかわりに応用がかなり利くのだ。

だが、魔力を集中する場所が二ヶ所になると言うことはそれだけ魔力を操る技術も必要になると言うこと。

このことから分かると思うが、魔力の二点集中は一点集中よりも難易度が高く。

それをマリオはこの土壇場で成功させていた。

声をあげつつマリオはダイ・シシヨをさらに押していく。

「あ………?」

ふと、ダイ・シシヨは視界がゆっくりになっていくような感覚に陥る。

体はうまく動かすことができず、自分の腕がマリオの蹴りによってはじかれていくのがゆっくりと視界に映っていた。

その光景にダイ・シシヨは自分が押し負けたのだと言うことを察する。負けたと言うのにその心に悔しさはなく。

マリオが悩みを振り払ったことに対する喜びがあった。

と、ここでダイ・シシヨはあることに気づいた。

蹴りを放つてこちらに向かってきているマリオ。

その背後。

視界がゆっくりになる前に見ていたときは普通に炎が放出されていたのだが、それは違う光景があった。

蹴りを放つた体勢のマリオのことを背後から押すようにしている3人の女性の姿。

ダイ・シシヨにも見覚えのあった3人の女性の姿に、ダイ・シシヨはニヤリと笑みを浮かべるのだった。

第342話

拮抗していたマリオの蹴りとダイ・シシヨーの腕。

その結末は呆気ないもので、魔力を背中から放出している炎と、足先の二点に集中させたマリオがダイ・シシヨーの腕をはじくことよって幕引きとなった。

マリオの蹴りはダイ・シシヨーの腕をはじいても止まらず、そのまま勢いを殺すことなくダイ・シシヨーへと叩き込まれた。

「はあああああ!!.....っせい!!」

「ぐうううおおおお!!」

ダイ・シシヨーにマリオの蹴りが直撃し、そのままダイ・シシヨーの体を後方へと吹き飛ばしていく。

数メートルほどダイ・シシヨーを吹き飛ばすと、マリオは足に力を込めて後方へと跳

び退いた。

その際にマリオの足先に集中していた魔力が砲撃のように放たれ、ダイ・シシヨの体をさらに吹き飛ばして木に叩きつけた。

「はあ．．．．．はあ．．．．．やった．．．．．か．．．．．?」

着地と同時に膝をつき、マリオは吹き飛んでいったダイ・シシヨの方向を見る。

ダイ・シシヨの吹き飛んでいった方向は足先から放たれた砲撃と、ダイ・シシヨが吹き飛んでいったことによる衝撃で土煙や細かい雪が舞い、まったくと言って良いほどなにも見えない。

無我夢中で魔力を集中させたが．．．．．

2度目は無理．．．．．だな。

マリオの体力、魔力ともに限界が近く。

いま膝をついている状態も辛く感じていた。

不意に風が吹いた。

「これで晴れ．．．．．いや、この風は．．．．．!!」

風が吹いたことよって見えなくなっていたダイ・シシヨの姿が見えると考えたマリオだったが、その風が普通の風ではないことに気がつき、表情を強張らせる。

そして、ダイ・シシヨの吹き飛んでいった先に起こっていた土煙や細かい雪が巻き起こった風圧によって一瞬にして晴れた。

凄まじい風圧はマリオのところにも届いており、マリオは咄嗟に顔を守る。

「おい……マジか……」

風が止み、顔の前から手をどけてマリオは目の前の光景に啞然とする。

目の前に広がっていたのは放たれた魔力砲撃と衝撃によって雪が吹き飛び露になった地面と、ほとんど傷のついていないダイ・シシヨの姿だった。

ダイ・シシヨはマリオの方を見るとニツ、と笑みを浮かべる。

そんなダイ・シシヨの様子にマリオはほぼ限界の体に鞭を打って立ち上がった。

「ふいふい……」

聞こえてきたダイ・シシヨの笑い声にマリオは体を固くする。

そして、ダイ・シシヨはマリオのもとへと近づいてきた。

「いやー、負けちゃったわあ！でも、マリオちゃんの悩みも晴れて本当によかったわあ
ん」

「はえ………?!」

戦いが続行されると思っていたマリオはダイ・シシヨの言葉にポカンとした表情になるのだった。

第343話

にこやかに笑うダイ・シシヨーにマリオは困惑した表情を浮かべる。

戦いが続くと思っていたところに突然の敗北宣言を受けたのだからそれも仕方がないのかもしれないが。

「えっと……、負けたって……?」

「あらん?信じられない?」

困惑しながらマリオは確認のためにダイ・シシヨーに話しかける。

マリオの言葉にダイ・シシヨーは自身の頬に指をあてながら聞き返す。

いや、だって明らかにあなたは無傷じゃないか……

正直、まだ戦うと思っていた……

ダイ・シシヨーのことを見ながらマリオは言いかけた言葉を飲み込む。

「ここでそれを言ってしまうえば本当になってしまいそうな気がしたからだ。

「そうねえん。私が負けたと思った理由はマリオちゃんの傷を治してからにしようか。『ヒールオーラ』」

「……は？」

そう言っただい・シシヨーはマリオに向かつて手をかざし、魔法を発動させた。

青い色の魔力がマリオの体を包み込むように広がり、マリオの体へと染み込んでいった。

そして、マリオの体から痛みが引いていく。

まさかだい・シシヨーが回復魔法を使えるとは思っていなかったマリオは突然のことに固まって大人しく治療されていた。

といっても回復魔法で治すことができるのは肉体のダメージのみで、消費して減った魔力に関しては自然回復を待つしかない。

「回復魔法を使えたのか……」

「そうよお。と言っっても、私は回復魔法しか使えないんだけどねえん」

マリオの言葉にダイ・シシヨーはニコニコと笑みを浮かべながら答えた。
そして、マリオの治療が終わる。

「さ、こんなものかしらね。それじゃあ、私が負けを認めた理由を教えましょうか」
「あ、ああ……」

マリオはダイ・シシヨーの言った回復魔法しか使えないという言葉に驚きつつ、頷く。
なお、ダイ・シシヨーは「魔法」に関しては回復魔法しか使えないが、「魔力」を使って戦うことはできるので、マリオを圧倒する強さを持っていたのも当然のことだったのだが、それをマリオが知ることはない。

「私が負けだと思った理由はね。最後の攻撃のときにマリオちゃんを助ける彼女たちの姿が見えた気がしたからよ。あなたたちは近くにいないくても心で繋がっている。それはとても素晴らしいことで、大切なこと。私は弟子をとってはいたけれど、自分の体を鍛えることにしか興味がなかったの。だから、その繋がりを感じられたから負けだと思ったのよ。それと、その繋がりがあんならどんな障害も乗り越えていけるはずよ。」

だから、結婚も安心しなさい」

少しだけ寂しそうにダイ・シシヨーは負けたと思つた理由を話す。

自分は弟子のことをちゃんと見てあげられなかつた。

だからこそ自分にはないものを持つているマリオに負けを認めたのだ。

ここで1つ、マリオが言わないでいることを教えよう。

ダイ・シシヨーがマリオの後ろに3人の見覚えのある女性の姿を見たのと同じように。

マリオもまた、ダイ・シシヨーの後ろに見覚えのある男性の姿を見ていたのだ。

それが誰なのか。

そして、それがどう言つた意味を持つのか。

それがわかるのはマリオたちの結婚式の日である。

第344話

少しだけ寂しそうに負けたと思った理由を話していたダイ・シシヨーだったが、思い出したように手を叩くと、マリオに向かって口を開いた。

「そうだわあ。ちゃんと完成した指輪を渡さないといけないわね。お店に戻りましょうか」

「……そうだな」

ダイ・シシヨーの言葉にマリオは自分の見たものを言うべきか悩む。

が、これに関しては部外者が口を出すものではないし、ダイ・シシヨーは結婚式に参加すると言っていたのだからそこで会えるだろうと考えて言うのをやめた。

そして、ダイ・シシヨーの言葉に頷いてマリオとダイ・シシヨーは貴金属店「クリスタラー」へと戻るのだった。

マリオ、ダイ・シシヨー、移動中………
Now Loading………

マリオとダイ・シシヨーの2人は「クリスタラー」に到着し、マリオはダイ・シシヨーの用意したお茶を飲み、ダイ・シシヨーは着替えに店の奥へと消えていった。

「……………ふう」

お茶を一口飲み、マリオはホッと息を吐く。

肉体のダメージや疲労は回復していたが、まだ先ほど消費した魔力分の精神的な疲れは残っていた。

ちなみに魔力の回復には精神的な疲労回復が有効で、お茶などの嗜好品や甘いものなどを食べたり飲んだりしても多少は回復する。

「けっこう良いお茶なのかな?」

予想よりも多く回復した魔力にマリオは飲んでいたお茶をまじまじと見る。

マリオがそんなことをしていると、店員としての格好に着替えたダイ・シシヨーが戻ってきた。

「待たせちゃったわねえ。はい、こちらが依頼されていた指輪よ。ちゃんとケースは渡す人に合わせた色にしたつもりだから確認してちょうだい？」

「そんなに待っていないよ」

ダイ・シシヨーの言葉にマリオは軽く手を振りながら答える。

そしてダイ・シシヨーはピンク、緑、黒色の3つの箱を差し出してきた。

どうやらそれぞれに指輪が入っているらしい。

ダイ・シシヨーから3つの箱を受け取ったマリオは1つずつ箱を開けて中の指輪を確認する。

「……………うん。文句のつけようもないよ。ありがとう」

「それならよかったわあ！私も全身全霊全力で取り組んだ甲斐があるつてもものよおん！」

3つの箱の中身を確認したマリオは満足そうに頷いた。

マリオの言葉にダイ・シシヨは嬉しそうに体をくねくねと動かす。

ダイ・シシヨの奇怪な行動もマリオはもう馴れたもので、目の前でダイ・シシヨがくねくねと体を動かしていても動じなかった。

そして、指輪を受け取ったマリオは“クリスタラー”を後にするのだった。

第345話

マリオが「クリスタラー」にて指輪を受け取ってから一週間後。
つまりは結婚式当日。

マリオはガチガチに緊張した表情でピーチ城にいた。

「ふふふ、マリオったら固くなっちゃって」

「今までもパレードとかの経験はあっただろうに……」

「マリオの……ガチガチ……」

そんなマリオの様子にクツパ、ピーチ姫、ナハトの3人は面白いものを見たというように笑みを浮かべる。

ナハトの言葉が違う意味に聞こえたキノピオがいたらしいが気のせいだろう。

「いや、だって自分の結婚式だぞ？むしろなんで緊張してないんだ……」

3人の言葉にマリオは固い表情のまま聞き返した

マリオ自身はピーチ姫を救出した際に表彰や褒賞をもらうことはあっても基本的にメインになることはなかった。

それゆえに自身がメインの1人になる結婚式に緊張しているのだ。

「私は人前に出ることには馴れているから」

「ワガハイも配下に命令を出すことで馴れておるしな」

「人前に出ても特にはなにもおもわないから」

「なるほど……」

3人が緊張していない理由を聞き、マリオは納得する。

ピーチ姫とクツパはもともと人前に出ることの多さから、ナハトは人前に出ることに対してなんとも思っていないことから緊張をしていないようだ。

「さ、時間も迫っているから着替えましょ？」

「うむ」

「向こうに行ってるね」

「ああ」

ピーチ姫の言葉に頷き、3人は部屋を後にした。

まあ、さすがに結婚する男女とはいえ同じ部屋で着替えるわけにもいかないので当たり前だが。

そして、マリオは衣装に着替える。

マリオが着替えているとキノじいさんが部屋に入ってきた。

「マリオ殿、なにやら私を呼んでいたようですが……」

「ああ、確かに呼んだよ。キノじいにはある人が来るはずなことを教えておこうと思つてね」

「ある人ですか？」

「うん。キノじいがお世話になった人が、ね」

「私がお世話にですか？」

マリオの言葉にキノじいは不思議そうに首をかしげる。

キノじい自身も誰のことなのかを考えてみるが、年齢が年齢だけにお世話になった人間は多くいる。

そのため、マリオが言っているのが誰のことなのかハッキリとは思いつかばなかった。

まあ、マリオが正確に誰が来るのかを言っていないせいもあるが。

キノじいのそんな様子を見ながらマリオは着替えを終わらせるのだった。

「着替えも終わりましたな。では移動しましょうか」

「そうだな」

マリオが着替え終わったことを確認するとキノじいは移動を促す。

キノじいの言葉にマリオは3つの箱を手を持って領いた。

いよいよ、マリオ、クツパ、ピーチ姫、ナハトの結婚式が始まる。

第346話

花や宝石、様々な装飾品によって飾られたピーチ城のホール。

そのホールの中心にマリオたちはいた。

すでにキノコタウンの住人たちもホールにおり、マリオたちのことを嬉しそうに見ていた。

「姫様たちキレー」

「あんなドレスを着てみたいなあ」

「私たちの結婚式を思い出すねえ」

「3人の美女と結婚できるマリオは幸せ者だな」

「リア充爆発しろー」

「はっはっは、見ろ。マリオは緊張しているみたいだぞ？」

「まあ、自信満々なよりは親しみやすくして良いじゃねえか」

マリオたちの様子にキノコタウンの住人たちは思い思いのことを言う。

美しいドレス姿のクツパ、ピーチ姫、ナハトを。

タキシードを着つつ緊張でいまだに表情の固いマリオを。

キノコタウンの住人たちはマリオたちのことを見ながら、結婚式の始まるのをいまかいまかと待っていた。

「だ、大丈夫か？おかしかったりしないか？」

「もう。大丈夫だから落ち着きなさいよ」

「参加者を見てさらに緊張してしまったのだな？」

「大丈夫。マリオはカッコいいよ」

キノコタウンの住人たちの姿を見てマリオはさらに緊張してしまったのか、自分の格好におかしいところはないか3人に向かって尋ねる。

そんなマリオのことを落ち着かせようと3人は優しく答えた。

念のために言っておくと、マリオの格好におかしいところはまったくないので、要らぬ心配なのだが。

「さて、準備も整いましたので、結婚式を始めたいと思います」

それからしばらくして、ホールに並べられたテーブルに料理が置かれ、キノじいがマイク越しに結婚式の開始を宣言した。

それと同時にホールの上の方に設置されているスポットライトがマリオたちの方に集中する。

スポットライトが集中したことによってマリオが少しだけビクツとしていたが、進行に問題はないので誰も触れることはなかった。

「では、まずは新郎の親族による新郎の紹介を。ルイージ殿、お願いします」

「は、はいー！」

キノじいの言葉に、マリオと同じくらいに緊張した様子のルイージが返事をしながら現れた。

ルイージもかなりの緊張をしているようで、出てくる際には手と足が同時に出てしまっていた。

「そ、それではっ?!に、兄さんの紹介をさせていただきます!」

マイクの前に立ち、ルイージは紙を広げて読み始める。

が、極度の緊張のせいか、ルイージは声が裏返ってしまっていた。

そんなルイージの様子にホールにいた全員が苦笑いを浮かべる。

しかし、そのお陰なのかマリオの緊張もほぐれ、自然な笑みを浮かべられるようになっていた。

「えっと……、兄さんは、強くて、優しくて、ときどきすつごく臆病で……」

「確かにそうね」

「ヘタレ、とも言えるがな」

「ぐふう……」

ルイージの紹介にピーチ姫とクッパは同意するように頷く。

クッパの言葉にマリオはキレイにボディブローを決められたかのような声をこぼした。

「と言つてもキノコタウンのみんなは兄さんのことをよく知ってるかな？だから、ぐすつ、みんなもそうだと思うけど、僕も兄さんのことが大好きなんだ。ひつく、な、なので、ピーチ姫、クツパ、ナハトさん、兄さんのことをよろしく願います」

「もちろんよ」

「当然だな」

「任せて」

「それならよかった。短いですが、これで兄さんの紹介を終わります。兄さん、結婚おめでとー！」

マリオの紹介をしている途中で感極まってしまったのか、ルイージは涙を流しながらマリオの紹介を進めていく。

ルイージの言葉に3人は力強く応える。

そんな3人の姿にルイージは嬉しくなったのか、大量の涙を流しながらマリオの紹介を終わらせるのだった。

第347話

ルイーダによるマリオの紹介が終わり、ルイーダはマイクの前から移動する。

用意していた紙はすでに涙や鼻水などによつてぐちゃぐちゃになっているので、そのまま捨てに向かうのだろう。

そしてルイーダと入れ替わりにキノじいが再びマイクの前に立つ。

「では、そうですね。新婦の紹介で、姫様のことを私から話させていただきましたきましょう」

そう言つてキノじいはポケットに入れていた紙を取り出した。

ポケットに入れていた紙がやしわくちやになつているのは気のせいではないだろう。

「こほん、では僭越ながら姫様の紹介を。姫様はとてもお優しく、以前まではよく拐われ

ることもありました」

「今となつては懐かしいものよね」

「でも、ピーチ姫がアクティブに出歩いてきたことも原因の1つだった気はする」
「絶好のタイミングばかりだったしな」

キノじいの言葉にピーチ姫は懐かしそうに思い返す。

今までに自分は何度クツパに拐われたのだろうか。

今までに自分は何度マリオに救われたのだろうか。

なお、拐われる原因の1つにピーチ姫自身が不用心に出歩くことも含まれているのだが、ピーチ姫は聞かないことにしていた。

「そして、マリオ殿に救われてはご褒美として頬にキスをしたりし、マリオ殿が帰つてから口にすればよかつたなどと頭を抱えて布団に潜り込——」

「じいやああああ?!?!」

「うわあ、身内から暴露されるのだな……」

突然のキノじいの暴露にピーチ姫は叫びながら両手をバタバタと動かす。

キノじいの言葉を止めようとするが、ドレス姿で暴露させるわけにもいかないのでクツパによって止められる。

そんなピーチ姫のことを気にした様子もなくキノじいは紹介を進めていく。

「最後になりますが、マリオ殿。必ずや、姫様を幸せにしてください。これで姫様の紹介を終わります」

そう言ってキノじいは頭を下げた。

キノじいの言葉にマリオはしっかりと頷いて応える。

そして、キノじいと入れ替わるようにカメックおばばがマイクの前に現れた。

「では次は私の番ですな。クツパしゃまの紹介をさせていただきますでしょう」

「お、おばば・・・・・・・・・・、キノじいのような暴露はやめてほしいのだ・・・・・・・・」

カメックおばばが現れたことにクツパは先ほどのキノじいの暴露が自分にも降りかかるのではと思わず言う。

そんなクツパの言葉にカメックおばばは意味深に笑みを浮かべる。

「そうですね。クツパしやまは配下のものたちにも慕われるほどのカリスマを持ち、素晴らしい手腕で我々配下のものに仕事を割り振ることができますのじゃ」

「そう誉められると照れるのだ」

「………暴露はまだー？」

カメツクおばの言葉にクツパは恥ずかしそうに顔を染める。

恥ずかしそうにしているクツパのことを見ながらナハトは暴露はまだかと待っているのだった。

第348話

カメツクおばばによるクツパの紹介にキノコタウンの住人たちは驚きを隠せず
いた。

マリオがよく一緒にいる女性の名前がクツパだと言うことは知っていたのだが、本
当にクツパ本人だとは思っていなかったからだ。

それでも幸せそうにしているマリオたちの姿にざわめきは次第に小さくなり、やがて
祝福の言葉だけが聞こえるようになった。

「そうですね。期待もされているようなので1つ。クツパしやまはマリオに会えない日
は自作のマリオの人形を抱いて眠ることが——」

「おばばあああああ?!?!お主もかあああああ!!!」

「暴露いえーい」

キノコタウンの住人たちの期待を感じたのか、カメツクおばばはクツパの暴露話を始める。

それに合わせてマリオの人形を取り出した。

これはクツパの手製のもので、マリオによく似て作られている。

ちなみに、カメツクおばばが取り出した人形はクツパの作った人形のなかで2番目に良くできたものとなっている。

さすがに1番のできものを持つてくることはできなかったようだ。

カメツクおばばの暴露にクツパは先ほどのピーチ姫と同じように叫ぶ。

そして、先ほど止めていたお返しとでも言うかのようにピーチ姫に動きを止められていた。

クツパの暴露話が聞けたためにナハトは少しだけテンションが上がっている。

「ふえっふえっふえ、まあ、あまり話しすぎて怒られてしまいますからな。最後にマリオに一言、けっして……けっしてクツパしやまを悲しませるでないぞ?」

笑いながらカメツクおばばはクツパの紹介を締めた。

カメツクおばばの言葉にマリオはキノじいのとときと同様に頷いて応えるのだった。

「さて、最後はナハト殿ですな。では、ナハト殿の紹介を……」
「とおおおうぜん!!私ができるわあああああつ!!」

次のナハトの紹介をする人をキノじいが呼ぼうとすると、大きな声とともにスーパークラウンが飛び込んできた。

突然の声と飛び込んできたスーパークラウンに誰もが驚いている。

また、久しぶりのスーパークラウンに登場にマリオたちも驚きの表情を浮かべていた。

「す、スーパークラウン?!」

「どこに行ったか分からなかったから探してなかったけど……」

「どこで結婚式の話聞いたのだ……?」

スーパークラウンは世界を見るためにいろいろなところを飛び回っていたので、行方が知れていなかった。

そのため、マリオたちも呼ぶ方法がないと諦めていたのだ。

マリオたちの言葉にスーパークラウンはクルクルとその体、というかクラウンを回転させる。

「ふふん。言っていないなかったけど、私はナハトの感情を観測しているのよ。それで、ここ最近はとくに喜びの感情が多かったから何かあるなって思ったわけ」

「それで飛んでくるのか……」

「良いじゃない。さ、ナハトの紹介だったわね？」

「と言うか、キサマは最近のナハトを知らないと思うのだが……」
「ちゃんと紹介をできるのかしら？」

知らなかったスーパーパーク라운の機能にマリオは思わず言葉を失う。

ナハトの感情が喜びに満ちていたから飛んでくるとは思っていないかったのだ。

そもそもとしてスーパーパーク라운は飛び回っていたはずなのにナハトのことを紹介できるのだろうか。

そんなマリオたちの思いをよそにスーパーパーク라운は自信満々にふよふよと浮かんでいた。

第349話

ふよふよと浮かんでいたスーパークラウンは、ナハトの方へと飛んでくると頭の上に乗る。

スーパークラウンの行動の意味が分からず、全員がスーパークラウンのことをじっと見ていた。

「す、スーパークラウン………?」

「ナハトの紹介をするんじゃないのかなかったのかしら?」

「何をしているのだ?」

スーパークラウンがなにも言わないので、マリオたちはスーパークラウンに向かって尋ねる。

ナハト自身はとくに気にしていないらしく、スーパークラウンの好きにさせていた。

「つよし、ちよつとナハトの記憶を読ませてもらったわね」

「ん。別に良いよ」

「いや、事後確認はやめてやれよ……」

「どうかそんなこともできたのだな……」

「スーパークラウンって、けっこうなんでもありなんじゃないかしら……」

そう言うってスーパークラウンはナハトの頭の上から飛び上がり、マイクの前へと移動する。

許可を取らずに記憶を読んだスーパークラウンにマリオは呆れ、クツパとピーチ姫はスーパークラウンが記憶を読めたことに驚いていた。

「大丈夫よ。さすがに全部じゃなくて一部だけにしてあるから」

「そういう問題じゃないだろ。というかやろうと思えば全部読めるってことだし……」

「あーあー、聞こえないわー。それじゃあ、ナハトの紹介にいくわねー！」

さすがに常識的な考えがあつたのか、記憶を全部読むようなことはしていなかったらしい。

だが、スーパークラウンも言い方では読もうと思えば記憶を全部読めると言うことになる。

その事に気づいたマリオは思わず指摘をした。

そんなマリオの言葉にスーパークラウンはなにも聞こえないと言わんばかりに左右に揺れながら答える。

そして、そのままマリオの言ったことをなかつたことにしてナハトの紹介を始めた。

「そうね。ナハトはとても頑張り屋でマリオのためにいろいろなことができるのよ。掃除、洗濯、料理、どれもかなりの腕になっているわ。恐らく、一番家事ができるんじゃないかしら?」

「あー……、確かにナハトはお城の手伝いで上達しているものね」

「確かにそれは納得だな」

「まあ、欠点をあげるなら基本的にはマリオのためにしかやらないってことかしら? あ、でも最近是他の人のためにも行動していたわね。確か……キノピコちゃんの誕生日がこの間あつたみたいで、そのときにケーキを作つたらしいのよ」

「スーパークラウン、それは秘密」

スーパークラウンのナハトの紹介に、ピーチ姫とクツパは頷く。

女子会として集まる際にはナハトにお茶を淹れてもらっているのだ、ナハトの家事能力はよく知っているのだ。

続くスーパークラウンの暴露にナハトは少しだけ不機嫌そうに言った。

その一方で会場にいたキノピコは誕生日のときに受け取ったケーキのことを思い出す。

「キノピコがケーキを受け取った際に、ナハトはケーキのことを『美味しそうなのを買ってきた』と言って手渡してきたのだ。」

ケーキを受け取ったその時は市販のものとはいえ贈り物をもらえたことを嬉しく思っていたのだが、そのケーキがまさかのナハトの手作り。

その事実にはキノピコはナハトとの友情を確かに感じていた。

「ま、記憶を読んだだけだからそこまで深くは話せないわね。でも、最後に一つ。マリオ、あなたも人間なんだから優劣を気づかない内につけてしまうかもしれない。でも、そんなことを感じさせないほどに全員のことを愛しなさいよ？」

「ああ、もちろんだ」

スーパークラウンの言葉にマリオはしっかりと頷いて答える。

スーパークラウンだけでなく、キノじい、カメックおばば、全員の言葉を忘れてしまわぬようにしっかりと胸に刻みながら。

マリオの答えにスーパークラウンは頷くように揺れると、カメックおばばたちのいるところへと飛んでいった。

第350話

スーパークラウンによるナハトの紹介も終わり、これで新郎新婦の紹介が終わった。そして紹介の終わったキノじいたちが変わって、キノコタウンの占い師、デアールがマイクの前に出てきた。

デアールには結婚式での神父を頼んでいたもので、それでマイクの前に出てきたのだ。なお、紹介をし終えたルイージ、キノじい、カメックおばば、スーパークラウンの4名………と言うか、3人と1つはのんびりと会話をしている。

「さて、新郎新婦の紹介も終わったのでケーキ入刀なのである」

デアールがそういうと同時にコックたちが人が1人余裕で入れそうなほどに大きなケーキ、つまりはウエディングケーキを運んできた。

そのケーキの出来は誰が見ても素晴らしいと分かるものであり、コックたちもどこと

なく達成感のようなものを発していた。

それもそのはず、このウエディングケーキはマリオたちの結婚式の話聞いたピーチ城の料理長が、最高のものを作り上げるために話を聞いたその日から寝る間も惜しんで研究に研究を重ね、そしてついに完成した最高傑作なのだ。

なので料理長を含め、コックたちは結婚式の感動に加えて、最高のウエディングケーキを作れたことによる感動も感じていた。

「4人でのケーキ入刀な訳なので、少しばかり特殊なケーキカッターにしてあるのである」

「うわ、本当だ」

「持つところが異常に長いのだ」

「まるで薙刀みたいじゃないかしら?」

「刃の部分とほとんど同じ長さ」

デアールの言葉にマリオたちはウエディングケーキの近くに置いてあるケーキカッターを見てそれが普通のケーキカッターと違うことに気づく。

そのケーキカッターは持ち手の部分がとても長く、これならば4人でも持つことがで

きるだろう。

驚きつつも、マリオたちは並んでケーキカッターの持ち手を掴んでいく。

4人で持つてまだ持ち手の部分が余るほどの長さなのだから、この部分の長さがどれだけ長いかわかるだろう。

「では、ケーキ入刀なのであゝる！」

「タイミングが合わないとうまく切れないからな。気をつけてやろう」

「せっかく頑張つて作つてくれたケーキだしね」

「これで失敗してはかわいそうなのだ」

「私たちなら大丈夫」

デアールの言葉にマリオたちはウエディングケーキにケーキカッターを差し込もうとする。

ウエディングケーキの出来が素晴らしいだけに、下手に差し込んでぐちゃつとなつてしまわないように気をつけながら。

そして、気をつけてケーキ入刀をした結果、思いの外うまくケーキにケーキカッターを差し込むことができた。

それに合わせてカメラのフラッシュが光る。

参加していたキノピオたちや、ルイージ、キノじい、カメックおばば、スーパークラウンたちが持ち込んでいたカメラで撮影を始めたのだ。

ちなみに、スーパークラウンはスーパークラウン自身にカメラ機能が内蔵されているので、カメラを持ってないじゃないかと言う疑問は解消されだろう。

「さて、ウエディングケーキを参加者に配る間に新郎新婦はお色直しなのであゝる」

「あ、ねえ、ケーキって私たちは……」

「諦めるのだ。結婚式の間はまともに食事はできぬのだから……」

「そんなあゝ……」

ピーチ姫はデアールに尋ねるが、ピーチ姫の言葉をクツパは遮ってしまふ。

そして、クツパはそのままピーチ姫を引きずっていく。

引きずられながらピーチ姫はウエディングケーキに向かって手を伸ばしていた。

そんな2人のあとをナハトは静かについていく。

3人の姿にマリオは苦笑しながらお色直しのためにホールを移動するのだった。

ちなみに、ピーチ姫には内緒だが、ウエディングケーキはキッチンとマリオたち4人の

分も確保してあるので、結婚式の後にでも出されることだろう。

お色直しのために移動していったマリオたちのことを待ちながら、キノじいはホールの中を歩く。

マリオの言っていたお世話になった人というのが気になり、それが誰なのかを探しているのだ。

「いったい、マリオ殿は誰のことを……ッ！」

ホールの中を見渡し、キノじいは1人の後ろ姿に気づく。

その人物は確かにキノじいがお世話になった人物。

今でもキノじいはその人物に会えたことに感謝をしている。

では、その人物とは誰なのか。

その人物に近づき、キノじいは名前を呼んだ。

「ダイ・シシヨー様……」

名前を呼ばれ、*“*クリスタラー*”*の店員、ダイ・シシヨーは驚きの表情を浮かべながら振り向くのであった。

第351話

キノじいに名前を呼ばれたダイ・シシヨーは驚きながら固まる。

確かにピーチ城で結婚式をやるのだし、先ほどマイクの前に立っているのも見ていた。

それでも自分の所に来るとは思っていなかった。

「ひさし……ぶりだな……」

「ええ、お久しぶりです……」

気まずく思いながらもダイ・シシヨーはどうにか言葉を絞り出す。

ダイ・シシヨーの言葉にキノじいも頭を下げながら答える。

今よりも昔、キノじいが若かった頃。

キノじいはダイ・シシヨーのもとに弟子入りをした。

当時、ダイ・シシヨは勝てるものはいないと言われるほどの強さで、その話を聞いた当時のキノじいは城勤めが決まった時期で、戦い方を学ぼうとダイ・シシヨのもとに向かったのだ。

しかし、当時のダイ・シシヨは強さにたいして貪欲で、自身の体を鍛えることを第一としていた。

それゆえにかなり無理なトレーニングをおこなっていた。

そしてそのトレーニングを耐えられたからこそ、その強さを持っているのだろう。

だが、ここで一つ問題があった。

ダイ・シシヨは自分のトレーニングをそのままキノじいにもおこなわせてしまったのだ。

それでも最初の頃はキノじいもなんとかトレーニングについていくことはできていた。

しかし、それもしばらくの間だけ。

度重なる過酷なトレーニングにキノじいは体を壊してしまったのだ。

そのせいでトレーニングによって鍛えられていたキノじいの体は日に日に衰えていき、そのことに責任を感じたダイ・シシヨはキノじいに頭を下げて行方をくらませたのだ。

「何年ぶりだったか……」

「確か……、私が戦えなくなつてからですので、20年ほどですね……」

昔と変わったキノじいの姿にダイ・シシヨーは思わず眩く。

キノじいが弟子入りをした年月から逆算してダイ・シシヨーの外見年齢が若すぎると思われるかもしれないが、これはダイ・シシヨーが唯一使える魔法「回復魔法」によるアンチエイジング効果のお陰である。

ダイ・シシヨーが「回復魔法」を完全に習得したのは今からおよそ10年前。

覚えた当時はキノじいの治療ができると思つていたのだが、「回復魔法」で治すことができるのは怪我をしてからそれほど時間の経つていない傷などのみ。

そのことを知つたダイ・シシヨーはキノじいにあわせる顔がないと考えて今までピーチ城に来ることはほとんどなかったのだ。

「……すまなかつた。何度謝つても済むものではないのだろう……」
「ダイ・シシヨー様……」

ダイ・シシヨールの謝罪にキノじいは少しだけ寂しそうにその名を呼ぶ。謝ってほしいわけではなかった。

自分が体を壊してしまったのは自分の体のことをキチンと把握できていなかったため。

むしろ鍛える機会をくれたダイ・シシヨールには感謝をしていた。

頭を下げるダイ・シシヨールの肩にそつと手を置き、キノじいはダイ・シシヨールの顔を見る。

「私は、恨んでなどいません。ダイ・シシヨール様のもとで体を鍛えたからこそ今の私があるのです。だから、自分を責めないでくださいませ」

「キノード……」

聞きなれぬ名前に周囲のキノピオたちがちらりとダイ・シシヨールとキノじいを見る。

キノードとは、キノじいの本名で、その名前を知っているものはそんなに多くはなかった。

キノじいの言葉にダイ・シシヨールはキノじいの顔を見返す。

今すぐに自分のことを許すことができるかと言えば、そう簡単にはできないだろう。

それでも、キノじいの言葉によって、確かにダイ・シシヨーの心は軽くなったのだつた。

そして、お色直しの終わったマリオたちが戻ってきた。

「それでは新郎新婦はこちらに来るのであゝる」

お色直しの終わったマリオたちをデアールは呼ぶ。

装いの変わったマリオたちの姿にホールにいる全員は再び見惚れている。

デアールに呼ばれたマリオたちは互いの装いを褒め合いながらデアールの前へと移動した。

「では、これより誓いの義を始めるのであゝる」

そう言つてデアールは聖書を片手にマリオたちのことを見るのだつた。

ちなみに、デアールは格好つけのためだけに聖書を持っているので、内容に関してはまったく分かつていなかつたりするのだが、これは秘密のことである。

第352話

お色直しの終わったマリオたちはデアールの前に並ぶ。

立ち位置的には、デアールを正面として、右側にマリオ、左側にクツパ、ピーチ姫、ナハトが立っている。

4人が並んでいる光景にホールにいる全員が息を飲んでデアールの言葉を待つ。

「それでは暫いの言葉を言うのであゝる。まずはマリオからなのであゝる」
「はい」

デアールの言葉にマリオは少しだけ緊張を含んだ言葉で答える。

そして、一歩前に出て小さく息を吸い込んだ。

「んん．．．．．、本日、私たち4人は皆様の前で結婚式を挙げられることを感謝し、

ここに夫婦の誓いをします。私、マリオは病めるときも健やかなときもクツパ、ピーチ姫、ナハトのことを思い、大切にし、悲しませないように努力し、幸せにすることを誓います！」

小さく咳払いをし、マリオは誓いの言葉を言う。

そして、マリオの誓いの言葉が終わると同時にホール内にいる全員から拍手が送られた。

「うむ、その誓いを忘れずにいるのであゝる。では次はクツパの番なのであゝる」
「分かったのだ」

マリオの誓いの言葉にデアールは頷き、次にクツパに誓いの言葉を言うように促す。
デアールの言葉にクツパは頷き、一歩だけ前に出た。

「ワガハイ、クツパは病めるときも健やかなときもマリオのことを支え、ピーチ姫、ナハトとも仲良く、マリオとともに幸せになることを誓います！」

力強くクツパは誓いの言葉を言う。

クツパが誓いの言葉を言い終わると、マリオと同じように拍手が送られた。

誓いを言うクツパの姿を見ているカメックおぼの目には嬉しさの涙が溜まっている。

「うむ、では次はピーチ姫なのであゝる」

「はい」

クツパの誓いの言葉を聞いてデアールは頷き、ピーチ姫に誓いの言葉を言うように促した。

そして、ピーチ姫もクツパに並ぶように一歩だけ前が出る。

「私、ピーチは病めるときも健やかなときもマリオのことを思い、クツパ、ナハトとともに力を合わせてマリオのことを助けていくと誓います」

続くピーチ姫の誓いに、先の2人と同じように拍手が送られる。

ピーチ姫の誓いにキノじいは嬉しそうに何度も頷いていた。

「マリオは勝手に無茶をすることもあるであゝるから、しっかりと助けるのであゝる。最後にナハト、誓いの言葉を言うのであゝる」

「分かった」

デアールの言葉に頷き、ナハトが一步だけ前に出て全員と並んだ。

ナハトには事前になるべく敬語でと伝えてはあつたのだが、それでも普通に言つてしまふ辺りにマリオたちは苦笑してしまふ。

「私、ナハトは病めるときも健やかなときもマリオを愛し、思い、助け、見守り、片時も離れず必ずそばに居続けることを誓います。……クツパとピーチ姫と一緒に」

やや光のない瞳で告げられた誓いの言葉にホールにいた全員がやや引きつつ拍手をナハトに送る。

ナハトの言葉にデアールもやや固い表情を浮かべているが、マリオたちは最後にソツと付けられたクツパとピーチ姫の名前にほほえましさを感じていた。

「う、うむ。お主の誓い、しっかりと聞き届けたのであゝる．．．．．ではマリオ、指輪を渡すのであゝる」

「分かったよ」

デアールの言葉にマリオは3人に渡す指輪の入っている箱を取り出した。

マリオの取り出した箱に3人は驚きの表情を浮かべる。

3人も指輪のことは考えていたのだが、マリオが個人で用意しているとは思っていなかったのだ。

その証拠に、マリオに言っていないが指輪の用意もしてあったりする。

「クツパ、ピーチ姫、ナハト、3人とも、受け取ってくれるかい？」

「もちろんなのだ！」

「ええ！」

「もうー！」

マリオの言葉に3人は目に涙を溜めながら頷くのだった。

第353話

クツパ、ピーチ姫、ナハト。

3人の手を順に取り、マリオは指輪をはめていく。

マリオが指輪を用意してくれしたこと。

そして、マリオの手によって自分たちの指に指輪がはめられたことに、3人は嬉しさのあまり涙をこぼした。

「ぐすっ……」

「ははは、泣いておるのか……ヒック」

「クツパも泣いてる……ック」

ピーチ姫が泣いていることをクツパが笑い、そのクツパに対してナハトが泣いていることを指摘する。

仲の良い3人のやり取りに、マリオは指輪を渡すことが上手くいったと内心で緊張していた心をホッと落ち着かせた。

「さて、指輪も渡し終えたであるから。最後に誓いのキスであくる」

マリオが指輪を渡し終えたことを確認したデアールは、声高々に言う。

ここでマリオが指輪を交換していないことに疑問があるかもしれないが、キノコ王国では男性から女性に送るのみが一般的なのでおかしいことはない。

別に、「クリスタラー」でマリオの分の指輪を頼み忘れたとかそういうわけではないので。

そう言うわけではないので！

デアールの言葉にマリオはクツパ、ピーチ姫、ナハトの3人と向き合う。

先ほど指輪を渡した時点で向き合っているように思うかもしれないが、渡したあとにクツパたちが軽く笑ったりしてちゃんと向き合った状態ではなくなっていたのだ。

「一応、聞くのであるが。誰から誓いのキスをするとかは決まっているのであるか？」

「えっと、じゃんけんで決めてるのは見たけど」

「ワガハイからなのだ」

「そのつぎは私よ」

「最後……」

コソツと、声を小さくしてデアールは尋ねる。

なにせ新婦が3人もいる結婚式など初めてのことなのだ。

普通なら一回のキスで済むはずのところが複雑になってしまっている。

デアールの問いにマリオは同じく声を小さくして答えた。

マリオ自身はとくに口出しをしていない。

と云うかなにを言ってもやぶ蛇になりそうな予感がしたのでなにも口を挟まなかったのだ。

そしてデアールとマリオの言葉を聞いていたクツパは自慢げに言う。

マリオの言っているようにキスの順番はじゃんけんで決めたので、基本的には運だけなのだが。

それでも1番だと言うことが嬉しかったのだ。

「決まっているのであるなら問題はないのであゝる。では、誓いのキスをするのである」

「ん・・・・・・・・」

「ちゅ・・・・・・・・」

「デアールの言葉にマリオとクツパは数秒見つめ合い、ゆつくりと2人の距離は近づいていき・・・・・・・・そしてゼロになる。」

「じゃんけんで文句は言わないと決めてはいるのだが、それでもキスをしている光景にはモヤモヤとするのか、ピーチ姫とナハトは少しだけ眉が動いている。」

「しばらくしてからマリオとクツパの距離が開き、マリオの体がクツパから離れる。」

「マリオの体が離れてもクツパは身動きをせず、誓いのキスの余韻に浸っているようだった。」

「そんなクツパのことを横にずらし、ピーチ姫がマリオの対面に移動する。」

「さ、次は私よ・・・・・・・・ん」

「あ、ああ・・・・・・・・ん」

「クツパとのキスの余韻でマリオの顔も赤くなっていたが、ピーチ姫に促されてぎこちない動きをしながら2人はキスをする。」

いまだに頬以外の場所にキスをすることに慣れていないのか、ピーチ姫の顔は赤く。その表情にマリオは少しだけドキリとしていた。

そして、クツパのときと同様に2人の体の距離が開く。

ピーチ姫もクツパと同じようにキスの余韻に浸っていた。

そんなピーチ姫のことを横に押し退けてナハトがマリオの対面に移動してきた。

「私の番。んー!」

「ちよ、ま、いきなっ………。んん?!」

マリオの対面に移動してきたナハトは間髪いれずにマリオにキスをする。

不意を突かれたマリオは反応する間もなくナハトのキスを受ける。

直後、不意打ちに驚いて固まっているマリオの口内にニユリとしたものが入り込んでくる。

いきなりの感覚に驚き、マリオは顔をナハトから離そうとする。

しかし、いつの間にかナハトがマリオの首に腕を回してしまっているために離れることができない。

「ん?! んん?!?!」

「ちゅ、りゅる……れる……」

もはやホールにいる全員に見られていると言うことも忘れてマリオはナハトから離れようとする。

しかし、そんなマリオのことを決して離すまいとナハトは腕に力を入れ、さらについてと言わんばかりにマリオの口内をむさぼる。

そんな2人の様子によくやく正気に戻ったクツパとピーチ姫は慌ててナハトをマリオから引き剥がすのだった。

第354話

マリオがナハトに通常のキスではなく、ディープなキスをされ、ナハトはクツパとピーチ姫に引き剥がされる。

ナハトは引き剥がされたことに不満そうだったがとくに文句は言わなかった。

「なにを考えているのだ?!」

「あれは誓いのキスってレベルじゃないじゃない?!」

「やりたくてやった。反省も後悔もない」

「あ、あはははは……」

クツパとピーチ姫はナハトの肩に手を置いてがくがくと揺らす。

肩を思いきり揺らされていたが、ナハトはキリッとした表情で言う。

そんなナハトの姿にマリオは力なく笑うことしかできなかった。

「と、とにかく、これでマリオたちは夫婦になったのであゝる」

ナハトの行動に驚いていたデアールは気を取り直して4人が夫婦になったことを宣言する。

ホールにいた全員も驚きで固まっていたが、デアールの言葉にゆつくりと拍手をしていく。

「ほら、落ち着いてくれ」

「・・・・・・・・分かったわよ」

「ぬう・・・・・・・・。あとで話をさせてもらうからな」

拍手を送られ、マリオはナハトの肩を揺らしているクツパとピーチ姫を落ち着かせる。

マリオの言葉に2人はナハトの肩から手を離し、拍手をしてくれている人たちに向かって手を振った。

手を振る前にクツパはナハトに言うが、ナハトはその言葉に反応はとくにしない。

このまま有耶無耶にする気満々である。

「さて、それでは外に出て記念撮影であゝる」

拍手を受けてからデアールは外に向かつて記念撮影をすることを伝える。

参加していた人たちは食事をしていたが、お色直しや誓いの言葉などをしていたマリオたちは食事をする暇などなく、やや空腹ぎみなお腹を我慢しながら外に向かうのだった。

「記念撮影は……」

「隣で写る」

「私もよ」

「まあ、キスは最初だったからここは譲ってマリオの後ろに立つのだ」

ピーチ城の前まで出てきて参加していた人たちは並んでいく。

どの立ち位置で写るのか。

そう聞こうとしていたマリオの言葉に食いぎみにナハトとピーチ姫が答える。

誓いのキスでの順番のこともあってかクツパは大人しくナハトとピーチ姫にマリオの隣を譲った。

まあ、その代わりとでも言うかのようにマリオの背後から抱きついていいるのだが。マリオの身長が低いこともあって、クツパの顔も問題なく見えている。

後頭部に感じる柔らかさと、クツパの体が隠れることのなかった現実に、マリオは嬉しいやら悲しいやら複雑な気持ちになっていた。

「む……、なら私も」

「負けない」

クツパの行動にピーチ姫とナハトも負けじとマリオの腕に抱きつく。

柔らかな感触が増えたことによってマリオはにやけそうになるのをなんとか堪えていた。

そんなマリオの様子を見てからクツパ、ピーチ姫、ナハトの3人はちらりと目を合わせる。

「ふむ……」

「ええ……………」

「うん……………」

アイコンタクトでなにかを理解したのか、3人はほぼ同時に頷く。

「マリオ、ワガハイたちはお前のことが大好きなのだ」

「みんなで、あなたのためにたくさん頑張るわ」

「エッチなこと……大丈夫」

「だから、ちゃんと幸せにしてね？」

その言葉が言い終わると同時にマリオの体を感じられていた柔らかな感触が強くなる。

そして、マリオは3人の言葉の嬉しさからにやけ顔が抑えられなくなってしまう。パシヤリツ、とちようどそのタイミングでカメラのフラッシュが光る。

マリオは一瞬だけ呆けたものの、すぐさま慌てて写真の取り直しを要求するのだった。

そんなマリオの姿に誰ともなく笑い声が聞こえてくる。

ピーチ姫が拐われて騒ぎになることはもうほとんどないだろう。

クッパが暴れて、それを収めるためにマリオが走り回ることももうないだろう。

夫婦になると言うことはこれまでの苦難とはまた違った苦労があることは間違いない。

それでも、それでもマリオたちならば必ず乗り越え、笑顔の絶えることのない幸せな暮らしができるはずだ。